

ソウル・オブ・メモリーズ～幕間の章～(凍結中)

アユ夢

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ソウル・オブ・メモリーズの始まりの章の主人公が、始まりの章の一章と二章の間に見た夢の話。

そこで知った己の真実。

その事に苦悩しながらも、出会った神と仲間やいろんな人達との出会いにより、その真実を受け入れ、己の中に隠されていた力と夢を思い出す。

令和三年三月二十四日タイトル名変更いたしました。

いろいろと模索した結果、一度、書き直すことにしました。

現在、改訂版を作成中、近々公開いたします。 m () m

目次

入団編

プロローグ・神の居る世界	1
第1話・新しい生活	12
第2話・背中に刻まれる証	21
第3話・初めての病院	33
第4話・冒険者登録	41
第5話・歓迎・宣言・長い一日の終わり	53
第6話・僕の魔法	62
第7話・獣化魔法とお勉強の始り	71
第8話・知識は丸暗記	84
第9話・初ダンジョン	91
第10話・天敵	101
第11話・朝の攻防戦	109
第12話・更新と反省会とお金の扱い	119
第13話・読み聞かせと約束	126
第14話・夜中のダンジョンとおつかい	136
第15話・鍛冶師の神様とロキ様のお気に入り	154
第16話・バベルの上と新しい武器	163
第17話・武器の手入れの仕方	174
第18話・そして、バレる	181
第19話・罰と賭け	190
第20話・斜め上の約束の果たし方	199
遠征編	
第21話・初、深層へ	207

第22話・深層での一幕	215
第23話・芋虫モンスターの襲撃	222
第24話・合流と撤退	232
第25話・ミノタウロスの集団逃走	240
第26話・白兔と帰還	247

怪物祭編

第27話・戻る日常	255
第28話・造られし者	263
第29話・遠征の後お説教タイム	270
第30話・直接契約	277
第31話・豊穰の女主人での出来事	285
第32話・初接触	296
第33話・落ち込むアイズさん	305
第34話・悩めるアイズさんと一つのお願ひ	314
第35話・申込の保留	323
第36話・怪物祭前夜	330
第37話・秘密の会合	340
第38話・怪物祭裏の脱走事件	350
第39話・食人花のモンスターの初出現	359
第40話・反撃と声	367

襲来編

第41話・動き出す三人の神と満たされる心	377
第42話・追加注文と黒兎刀	386
第43話・巨黒魚の丸焼き	396
第44話・豪華なパーティでダンジョンへ	405

第45話・迷宮の楽園（アンダーリゾート） | 416

第46話・事件の始り | 425

第47話・第二級冒険者の死 | 433

第48話・推理と調査の開始 | 442

第49話・ルルネ・ルーイ | 451

第50話・宝玉の胎児 | 462

第51話・殺人犯の出現 | 469

第52話・食人花モンスターの変貌 | 479

第53話・変貌モンスターとの終結 | 491

第54話・探索の再開 | 502

第55話・悔しさの残る帰還 | 510

第56話・人魚の絶世の歌声 | 522

第57話・膝枕と | 534

第58話・おかえりなさい | 547

第59話・ロキ・ファミリア地下の秘密 | 556

第60話・二人のお悩み | 567

闇の影編

第61話・神のお酒で神を釣る | 577

第62話・美味しいお酒も・・・ | 588

第63話・再びの夢と兄の夢、そして、現実 | 601

第64話・首脳達の苦悩 | 611

第65話・黒衣からの依頼 | 623

第66話・追跡者 | 638

第67話・冒険者依頼の協力者 | 646

第68話・アイズさんの誤差調整の仕方 | 655

第69話・四つの動き	664
第70話・情報収集と死妖精	675
第71話・食料庫の緑壁	687
第72話・分断	700
第73話・再戦といつか追いつくために、そして……	712
第74話・食料庫の死兵と混戦	725
第75話・来る援軍	736
第76話・【白髪鬼(ヴェンデッタ)】オリヴァス・アクト	748
第77話・前者後者の選択	759
第78話・起死回生	769
第79話・食人花の怪物の宴(モンスター・パーティー)	781
第80話・悪夢と悪夢	791
第81話・緑壁迷宮からの脱出	800
遠征準備編	
第82話・精霊アリア	812
第83話・通る道	821
第84話・白兔と仔犬と剣の姫	832
第85話・旅人の宿	846
第86話・兔と妖精の鬼ごっこ	857
第87話・森の妖精の下剋上と犬の遊び	868
第88話・特訓ブーム	879
第89話・着々と進む遠征準備	888
第90話・お昼寝と特訓の条件	898

入団編

プロローグ・神の居る世界

「・・・ん」

気が付いた時、僕は、何故か石畳の地面に伏していた。

「・・・りゅ」

七十五層の転移門広場じゃない。

何処かの層の街なんだろうけど、可笑しい、リユーがいない、彼の名前を呼んで僕は、自分の体に起きている異変に驚いた。

「・・・あ・・・れ・・・?」

喉が異様なほど枯れていて、口が上手く回らない、唇もカサカサだ。おまけに、体に思うように力が入らなかった。

「・・・何・・・コレ」

そして、喉を押さえようとした、僕の手がほど、骨と皮だけだった。ほんの少し前まで、こんなんじゃないなかったのに。

ゾワッ

「!？」

そんな時だった。

何処からかは解らないけど、誰かに、ただ見られているって感覚じゃない、僕の身体の奥底から、僕の全てを見られているような気持ち悪い、嫌な感觸の視線を感じた。

「……は、早く……ここから……逃げ……ないと」

一刻でも早く、この気持ち悪い感覚から逃げたくて仕方がなかった。

僕の体には立ち上がる力もなくて、僕は、這うように手足を動かした。

「はあ。ちいくと、飲み過ぎたわ」

「……はあ……くっ」

「ん？……自分、そんなところで何しとるん？」

「……」

そこに、お酒の臭いを纏わせた人が現れて、僕に声をかけた。どうにかその人を見ようと視線を上げた。

「うわあ！自分！めっちゃ綺麗な目しとるやん！もうちよつと、見せてな？」

「……」

伸びきった長い髪の間隙から、赤い髪の女の人が目に入った。

……なんだろ、不思議な感覚がする。

その女の人は、髪の間隙から見えた僕の紅い目を見て凄く嬉しそうにいうと、僕の目元にかかる髪を払い除けた。

「ほんま、綺麗やわ、自分の目。しっかし、なんや？自分、何かの病気か？手も足も細いし、病人みたいな格好をしとるし」

「……病気？……病人？」

「ん？」

僕の目をまじまじと本当に嬉しそうに見ていたその人は、僕の身体

と格好をまじまじと見て、不思議そうに言った。

それには、僕も疑問符で返した。

そんなの解らない。

僕の間接じゃ、そんなはず無いんだから。

「・・・なんか、訳アリみたいやな、自分」

「・・・」

「事情を聞こうにも、ここやと不味いな」

「・・・」

「よっしゃ、うちの家に行こか？」

「・・・お・・・お姉さんの家に・・・行くの？」

「ん？・・・お姉さんって、うちの事か？」

「・・・えっ??」

「プハハ!!自分、おもしろいなあ。うちの事、”お姉さん”やて!うちをそんな風に呼んだん、自分が始めてやで!」

僕自身が、自分のこの状態に不思議がつていることを察してくれたのか、その人は、僕に話を聞くため、お家に招いてくれると言った。だから、そう聞き返したのに、その人はそれに、お腹を抱えて爆笑をされた。

「!？」

「ほな、行こか？」

と思つたら、その人は優しく僕の身体を抱き上げてくれた。

「えっと、自分は名前、何て言うんや？」

「・・・名前・・・？」

「せや。うちは、ロキや。自分は？」

「・・・僕・・・は・・・カ・・・ヴァス・・・」

「僕？自分、男か？」

その人、ロキさんに名を聞かけたから、名乗ると、ロキさんは疑問符を浮かべて僕に男かどうかを確認するように聞いた。

「・・・やっぱり、変？女の子が・・・僕・・・じゃ・・・」

「ううん、変やないよ。そうか、自分、僕っこなんやね？」

「・・・」

「しっかし、女の子なんやったら、もつと可愛い名前、付けたら良かったと思うわ。『カヴァス』なんて全然、可愛いない！」

とりあえず、僕が僕って言うのは、良いみたいだけど、名前には不満みたい。

「・・・僕が・・・付けたんだ・・・」

「えっ？」

「カヴァスは・・・僕が、自分で付けた、名前・・・」

「・・・そうか、わかったわ。ほな、行こか？カヴァスたん」

僕は、できるだけ笑みを作って、ロキさんに言った。

すると、ロキさんは何故か悲しい顔をして、ゆっくりと歩き出した。



「ここが、うちの家や」

「・・・ここが・・・」

「せやで！ビックリしたか？」

「・・・」

そして、ロキさんに連れてこられたロキさんのお家は、お城だった。

ロキさんは、ビックリしたか？って聞いてきたけど、正直、血盟騎士団の拠点とか見るとそこまでビックリはしなかった。

と言うか、そんな余裕がなかった。

「あれ？そんなビックリしてないん？」

「……う、うん」

「……そうかあ、ソレはなんか残念やなあ」

ロキさんはこのお城を見ても驚かなかった僕に、本当に残念そうだった。

「お帰りなさいませ、ロキ様」

「おお、見張りご苦労さん！」

「リヴェリア様がお探しましたよ？」

「ゲツ……ま、ママが？マ、マジで？」

そして、その城の敷地内に入った時、門番の人達がロキさんに挨拶をした。

「様」付きで。

そこには、純粹に驚いた。

人に「様」を付けて呼ぶ時は、その人物が、ソレだけの敬意をはられるに値する人物だと言う事。

つまり、このロキさんは、そう呼ばれる位、偉い人だと言う事だ。僕もそう呼ぶべきなのかな？

「……まあ、これから行くし、ええわ」

「……ところで、ロキ様、その子供は？」

「ああ、この子か？そのうちわかるから、ちよつと、待っててや。ほなな？」

ロキさん、いや、ロキ様は門番の人達と短い挨拶をすると僕を連れて、建物内へ入っていった。

「ロキ」

「おっ！今、帰ったで！ママあゝ」

で、そこでは、緑色の長い髪のエルフ耳の女の人が腕組みをして待ち構えていた。

「誰が、ママだ。・・・ロキ、朝帰りをしたあげく、とうとう、誘拐までしてきたか」

「・・・えっ？ゆ、誘拐？」

その人は、ロキ様の「ママ」呼びを否定して、片目を瞑って僕を見ると盛大にため息を付いた。

それも、頭を抱えながら

「ちやう、ちやう！誘拐やない！道端に転がったから、事情を聞こう思つて連れて来たんや！」

「・・・」

「信じてへんな！その目は！」

それに慌てて、弁解するロキ様。

が、女の人は、眉間のシワを更に濃くした。

それを見て、ロキ様は指を指して、まるで駄々っ子のように足をバタつかせながら、叫ぶ。

「ほら！見てみい！！」

「!？」

「この手足首の細さ。自力で立つことすらでけへんねんで！だから、こうやって連れて来るしかなかったんや!!」

必死に、僕の手足を見せて、ロキ様は、女の人に言う。

「・・・ずいぶんと痩せ細っているな・・・頬も痩けているし・・・」
「・・・」

その僕の手足を見て、女の方は別の意味で眉間にシワを寄せた。

「おまけに、その服装。何処かの病院から抜け出して来たみたいな格好ではないか」

「・・・」

その人に言われて、自分の服を見てみたら、確かに病院から抜け出して来たと言った感じの服装だった。

僕の装備じゃない。

本当にわけが解らない。

「・・・ロキ」

「ああ。」

そんな僕の様子を見てか、ロキ様も女の方も短い会話だけで済ませて、お城の奥へと進んでいく。



「フィン、入るぞ」

「どうぞ」

そして、たどり着いた部屋の前で立ち止まり、女の方がノックすると中から返事が返ってきて、僕等はその部屋の中へと入った。

「おや？ロキも一緒かい？」

「ああ」

その部屋中にいたのは、僕とそう年頃の変わらなさそうな金髪の男の子だった。

「ん？ロキ、その子は？」

「ちよつとな」

「まさかとは、思うけど、誘拐じゃないだろうね？」

「ちやう、ちやう！誘拐やあらへん！誘拐やのおて、道端に転がったから、事情を聞こう思つて連れて来たんや！つうか、なんで、团长と副团长揃つて同じ勘違いすんねん！」

「日頃の行いだ／だろうね」

その男の子はロキ様の腕の中にいる僕を見て、苦笑いを浮かべながら、女の人と同じくロキ様の誘拐を疑った。

それに、同じように否定するロキ様。

それに声を揃えて言う二人。

いったい、ロキ様はどんな日常を送っているのかと思う。

て、言うか

「・・・」

「??」

今まで、僕並みに小さいプレイヤーなんて見たことがない。

ロキ様も女の人も男の子も、マークも無いし、NPCなんだろう。

この状況は何かのクエストなのかも知れないと思つた。

「??どうかしたかい？」

「えっ？」

「僕をずうーつと、睨んでるみたいだったから、どうしたのかな？つて」

そんな事を考えていたら、男の子がニツコリと笑顔を僕に向けなが

ら聞いて来た。

けど、その目は、笑っちゃいなかった。
完全に僕を怪しんでいる感じだった。

「……に、睨んでなんか……ない……考え事してただけ……」

「考え事？ソレは何かな？」

「……ここは何処かなって……」

なら、更に怪しまれようと同じだと思って、僕の一番知りたいいことを聞くことにした。

「可笑しな事を聞くね？君。ここは、迷宮都市オラリオだよ？」

「……め、めいきゆうとし……お……らりお」

そして、その口から出てきた街の名前に、僕は、絶句した。

これでも、攻略組の端くれだ。

このインクラッドの一层から七十四層までの街や村は、だいたい把握しているつもりだった。

けど、男の子の口から出てきた街の名前を僕は、知らなかった。

「……あ……れ？」

「ん？」

「あす……なあ……きいり……とお」

「ど、どないしたん？カヴァスたん」

そこでようやく気が付いた。

無くなっていた。

僕を含めたアスナさんとキリトさんのHPバーが。

それが何を意味するかなんて、解らない僕じゃない。

メニューウインドウを開こうと思っても開かないし、開けなければ、フレンドメッセージも送れない、追跡も出来ないし、残る手段

は・・・

「・・・ロ、ロキ様・・・お願い・・・僕を黒鉄宮に連れてって・・・」
「こ、こくつつきゆう?」

二人の名前に線が引かれてないかを確認に行くしかないと思った。

「なんや?それ?」

「・・・えつ?」

思つて、黒鉄宮に連れていって欲しいとお願いしたら、まさかの答えが返つて来た。

「・・・な、何言つてるの?黒鉄宮だよ?第一層の・・・」

「自分こそ何を言つとるんや?」

「・・・」

そこから、ロキ様の目が怪しいものを変なものを見るような目線に変わる。

それはそうだろう。

「・・・下ろしてください・・・」

「えつ?」

「・・・下ろしてください・・・」

自分でも、こんな態度は失礼だつてわかつてる。

わかつてるけど、あの二人の安否を確める事の方が重要だった。黒鉄宮に連れていって貰えないなら、自分で行かなきゃ、そう思つて、力の入らない手で、ロキ様の胸を押す。

「何があるんか、何処行きたい言つてるんかわからんけど、ちよつ

と、落ち着きー！」

「落ち着いてなんかいられない!!あの二人がいなくなったら!!僕に生きている意味なんて無いんだ!!お願いだから下ろして!!」

「あかん。自分、今、全然、力入ってへんのわかるやろ?そんなんでどうやって行く気なんや!!」

「行かせてよおお!」

そんなことロキ様に言われなくても解ってる。
けど、もうそれしか僕の頭には無かったんだ。

「・・・失礼」

「!？」

そうやって泣き叫んでいると、あの女の人が入り込んで、僕の顔を手で覆った。

途端、何かが流れ込んでくる感覚がした後、僕は、意識を手放した。

「・・・スウ・・・スウ・・・」

「ありがとさん、リヴェリア」

「ああ」

ロキ様の腕の中で小さな寝息を立て始めた僕を見て、ホツと胸を撫で下ろすロキ様。

「ロキ、嘘を付いている感じはあったかい？」

「いや、無い。とりあえず、今は、ゆっくり、休ませたろう?」

「うん、そうだね」

これが、僕とこれから深く深く関わっていくことになる『神ロキ』様と彼女が率いる『ロキ・ファミリア』との最初の出会いで、僕の新たな日々の始まりだった。

第1話・新しい生活

「……ん……」

「気が付いたか？」

「……」

そして、気が付くと今度はベットに寝かされ、その傍には、あの緑の髪の女の人がいた。

失礼だけど、すごく残念な気持ちになった。

「……あの」

「ん？」

「ここは、アインクラッドじゃないんですか？」

「……ああ、違う。ここは迷宮都市オラリオだ」

「……そう……ですか」

だから、僕が望んでいる答えじゃないと解つていても、改めて、ここが何処なのかを聞いた。

「……アスナあ……キリトお……リユウ……」

「……」

解つてる答えを聞いて、僕は、その人がいるのに泣いた。

だって、誰も知らない人達の中に放り込まれたんだから、大事な三人の安否も解らないんだから、泣くことを我慢なんて出来なかった。

「!？」

「胸を貸してやる、思う存分、泣くといい」

「……ぼ、僕……一人ぼっちになっちゃった……アスナあ、キリトお、リユウああああああ!!」

女の人はそつと僕を抱き寄せるとそう言ってくれた。
それを皮切りに僕は、本格的に、声がかかるまで泣き続けた。



「……」

「もう、良いのか？」

「……うん、ごめんなさい。それと、ありがとう」

「構わないさ。少し、話を聞かせてもらいたい、話せるか？」

「……うん」

「そうか。少し、待っててくれ？ロキ達を呼んでくる」

僕が泣き止んで、落ちついた頃合いを見計らって、女の人はロキ様達を呼びに行くため、部屋を出て行った。

「よう！カヴァスたん！」

「……ロキ様。えっと、さっきはいろいろと、すみませんでした」

けど、すぐにロキ様とさっきの男の子とさっきは居なかった難いの良い髭のおじさんを連れて戻ってきて、まず、僕は、ロキ様に頭を下げた。

本当にいろいろな意味をこめて。

「……ええよ。カヴァスたんにとっては、その、きりととか、あすなちゅうこの子等の事、すんごい大事なんやろ？」

「……うん……僕の……初めての友達で僕の相棒だから……」

「そうか、そら、心配になるわな？……けどな？カヴァス、その子等は、自分が心配せなあかんほど、弱い子等なんか？」

「!?そんなことないよーアスナもキリトもリユーム、僕なんかよりも、ずっと、ずっと強いんだ！」

「なら、信じたり？その子等は、大丈夫やてな？ちゃんと生きとるっ

てな」

すると、ロキ様は僕を諭すように言った。

“三人を信じろ”って。

“そうだ”って思った。

僕が一番良く知ってるんだ。

あの三人の強さを僕は、二年もの間、見続けていたんだから。

「……うん。信じるよ、僕」

「……」

「!？」

「カヴァアスたんは、素直でええ子やなあ〜」

小さく頷いて、二人を信じると言うと、ロキ様は僕の頭に手を置いて、優しく撫でながら、しみじみ言う。

「ほな、話、聞かせてもろてええか？」

「うん。話せること少ないかもだけど」

「かまへんよ」

そして、ロキ様達は、何処からか椅子を出して来て、ベットの右側と左側に別れて座った。

ちなみに、ベットの右側がロキ様と男の子で、左側が女の人とおじさんだ。

「まず、自己紹介な？うちは、ここ、ロキファミリアの主神のロキや。で、こっちが」

「フィン・ディムナだ。このファミリアの団長さ。で、そっちの女性が」

「リヴェリア・リヨス・アールヴだ」

「僕は、ガレス・ダンドロックじゃ」

「・・・僕は、カヴァアスです」

そこで改めて、自己紹介した。

「じゃあ、最初の質問な？リヴェリアから、聞いたけど、アインクラッドちゆうところから、カヴァアスたんは、来たんか？」

「・・・たぶん」

「たぶん？はつきりせんなあ」

「僕もそう思う」

で、最初の質問がアインクラッドの事だった。

たぶん、あそこから何らかの形でここに来たんだろうけど、さっぱりわからない。

僕のアインクラッドでの最後の記憶は、ヒースクリフに呼び出されて七十五層に転移門で向かったままでだ。

「・・・本当に、何でこんな・・・」

「・・・」

ここがアインクラッドじゃないってことがわかってても、何で僕一人がここに居るのかわからない。

「カヴァアスたん」

「何？」

「もし、もしかやで？今すぐに、そのアインクラッドに帰れるとしたら、帰りたいか？」

「・・・帰りたいって言うより・・・」

ロキ様に帰りたいかと聞かれて、やっぱり思うのは、三人の事。

その強さを知ってても、信じてても、心配なのはかわらなかつた。

「この質問は、野暮やったな」
「・・・」

その気持ちを察してくれたのか、ロキ様は僕の頭をクシヤクシヤと撫でる。

「なあ、カヴァースたん」

「・・・何？」

「その帰る方法が見つかるまで、ここで暮らさへんか？」
「??」

「と言うか、暮らし？自分、この世界に頼れるもんおらんやろ？」

そして、ロキ様から出された提案。

正直なところ、それは嬉しかった。

確かに、頼れる人がいるわけじゃない。

けど、頼って、これ以上、迷惑になることだけはやっぱり嫌だった。

「嬉しいけど、ここの迷惑にならない？」

「ガハハハ!!」

「!？」

「お主、その様な事を気にしとるのか？」

だから、そう言ったのに、ガレスさんが豪快に笑って、大きな手で僕の頭を乱暴に掻き回した。

「お主のような子供は、遠慮などせず、儂ら大人に甘えておけ。のお？」

「ガレスの言う通りだよ？カヴァース？・・・それでも君が、気にすると言うのなら、働いて返してくれれば良いさ」

「・・・働いて返す」

それにプラスでフィンさんに言われた。
迷惑になることを気にするなら、働いて返す。
実に、シンプルな事だけど、そうした方が僕の気持ち的にも楽な気がした。

「どんな働き方があるの?」

「ん?働き方かい?そうだね?ファミリアの雑用とかもあるし、手っ取り早いのは、冒険者になることかな?それか、サポーター」

「雑用は何となく解るけど、冒険者とか、サポーターって?」

「冒険者はこのオラリオにあるダンジョンに潜って、モンスターと戦う。サポーターは、文字通り、冒険者のサポートだよ?」

「冒険者はインクラッドでやってた事と変わらない」

そして、聞いたここでの働き方。

その一つ、冒険者は、インクラッドでやっていた事と本当に変わらないと思った。

「そうなのかい?」

「うん。ここのダンジョンのモンスターがどういうモノかわからないけど、インクラッドでもモンスターと戦ってたんだ」

それなら、僕にも出来るとも

「何にせよ、今のお前の仕事は、自身の体力を回復させることだ」

「そこは、神の恩恵を与えりや、すぐにとはいかんやろうけど、回復は早いと思うで?」

「それだけではない。ここで暮らすと言うのなら、ここでの常識を、冒険者になるのなら、ダンジョンの知識を学ばねばならん」

そう考えてると、リヴェリアさんは腕組みをしながら、真剣な顔で言い、ロキ様はそれに対して結構、軽い感じで答えた。

神の恩恵というのは、何なのかはわからないから、何故、ロキ様はそんな軽く考えてるのかわからない。

いや、それなら、僕もか。

冒険者になるにしろ、ならないにしろ、リヴェリアさんの言う通り、学ばなきゃならないことが、多いはず。

「そこんこの教育は、リヴェリアさんに任せるわ!」

「私が?」

「任せたで? ママ」

「誰がママだ」

それを教えてくれると言うのなら、ロキ様はそれを彼女に押し付ける気みただけだ

「あの、リヴェリアさん」

「ん?」

「僕に、この世界の事、教えてください。お願いします」
「!」

それは、本来、僕の方からお願いしないといけないことだから、僕は、頭を下げた。

「・・・厳しくいくぞ」

「はい!!」

「言い返事だね? カヴァス」

「まあ、それを頼んだ事を後悔せんようにな」

「??」

「じゃあ、僕は、そろそろ、戻るよ」

「僕も行くでしょう」

そんな僕に、フィンさんとガレスさんは、苦笑いを浮かべながら、意

味深な言葉を残して、部屋を出て行った。

「私も戻るとしよう」

「おう！」

そして、リヴェリアさんも部屋を出て行った。
部屋に残ったのは、僕とロキ様だけとなった。

「ほな、早速、神の恩恵を与えようか？」

「!?」

リヴェリアさんが部屋を出て行くのを見届けてから、ロキ様は一本の針を取り出した。

「か、神の恩恵って・・・その針で、チクチク、何処か刺してくの？」

「えっ？」

それを見た瞬間に、僕の血の気は引いた。

「ハハハ!!カヴァアスたん、おもしろいなあ。そんな事せえへんよ? 刺すんは、うちの指やし」

「えっ?・・・ソレ、痛いよね?そうしないと、いけないの?」

「ハハハ!!大丈夫やて、ちいーとチクツとするだけや。カヴァアスたんは、優しい子なんやね」

けど、それを指すのは、ロキ様の指だと言う。

それは、それで大丈夫なのかと思うけど、大丈夫だと笑い飛ばされたら、それ以上は何も言えなくなった。

「必要な事やからな?・・・そんじや、服脱いで、ベットの上でうつ伏せになってくれるか?」

「う、うん」

そして、ロキ様が言った通りに、僕は、着ていた服を脱いで、ベツトの上でうつ伏せになった。

ギシッ

「……ホンマに、ガリガリやな自分」

「……」

「ほな、始めるで？」

その上にロキ様が跨ぐと、僕の背中にロキ様の指が這わされ、その瞬間は、ゾワゾワと全身に鳥肌がたった。

第2話・背中に刻まれる証

「ん？カヴァアスたん。『衛宮四葉』ちゃー、名前に心当たりあるか？」

「えっ？」

そして、ロキ様にそう聞かれた。

「・・・忘れてた。僕の名前。この二年間、僕が名乗ることも、呼ばれることも無かったから」

「そうか。自分には、聞かなあかんことが、まだ、あるみたいやな？・・・ん?！」

「?!」

それは、この二年間、アルゴさんはそれをもじったあだ名で僕を呼んでたけど、その他は、呼ばれることの無かった名前だ。

名字なんてなおさらだ。

自分でも名乗ったことは、ほとんど無い。

その事も含めて新に話さなきゃならないなって思っていると、ロキ様は何故か石のように固まった。

「・・・ロキ様、大丈夫?！」

「!？」

そんな石になったロキ様に声をかけると、ビツクリした表情をして、僕を見ると、泣きそうな顔をされた。

「ロキ様、何で、そんな泣きそうな顔をするの?！」

「・・・何でもあらへんよ?！」

何でもないと言いつつ、あきらかに、何かを隠しているとわ

かった。

「・・・僕、そう言うの、わかるよ？言つてよ、ちゃんと。僕に関わることなんですよ？」

「・・・わかった。ちゃんと言うわ
パスッ

ロキ様は、何か覚悟を決めた風に真剣な顔をした。
そして、一枚の紙を出して、僕の背中に当てると

「・・・四葉たん、心して見いや？。これが、四葉たんのステイタスな？」

「・・・うん」

その紙を僕に渡してくれた。

「これで終わり？」

「せやで。もう、服着てええからな？」

「うん」

それを渡して、僕の上からロキ様が退いたので聞いた。
服を着なおして、渡された紙を見た。

「!？」

「・・・そりや、ビックリするわな。うちもビックリしたわ。自分は知つとつたんか？」

そして、ビックリした。

「・・・ロキ様」

「ん？」

「読めません」

「はああ?」

僕が受け取った紙を見て驚いたのは、この字が数字以外、まったくもって読めなかった事だった。

「何て書いてあるの?」

「ま、マジで言ってるんか?」

「大真面目に言ってる!」

ロキ様は信じられないモノを見る目で、僕を見て言った。
こんなことふざけて言えるわけないのに!

「・・・うちの口から言うんは、ちいーとばかりきついことなんや」
「えっ?」

そして、ロキ様はまた、泣きそうな顔をして言った。

「・・・悪いんやけど、詳しいのは、自分で読めるようになって、自分で呼んでくれへんか?」
「??」

「そんなかわり、大まかなのは、読んだるからな?」

「・・・うん」

「ほな、うちの膝に座り?」

「うん」

言われるがまま、僕は、ロキ様の膝に座った。

「ほな、読むで?」

「うん」

「力、耐久は0な?ここからは、すごいで?」

「すごい?」

「せや。器用と敏捷が百や!」

「そんなにすごいのか?」

「めっちゃ、すごいことや!」

「そ、そうなんだ」

「後は、魔力な?」

「魔力?」

「せや。魔力はなんと、五百や!」

「僕、魔力が有るのか?」

「せや。魔法もちゃんと発現しとるで!おまけに、短文詠唱やで!」

そして、ロキ様に僕のステイタスの事を読んで教えて貰った。

「僕、魔法が使えるんだ。どんな魔法?」

「『獣化魔術』ちゅうもんや」

「じゅうかまじゅつ?」

「なんでも、これ使うと、力と敏捷、嗅覚と聴覚が強化されるんやて、すごいなく。それに、スキルに『王の真似』ちゅうので、魔力放ちゅうので、戦闘時、瞬間的にブーストがかけられる。自分にかけたら、力と敏捷が上がる。武器にかけたら、斬撃の威力が上がるらしいわ」

「・・・」

その中で、魔法を使えると言われたけど、実感が沸かなかつた。それはそうだ。

今まで、魔法なんなどは縁もゆかりもないんだから。

それに、王の真似って、僕は、誰かを真似てるつもりもないし、そもそも、王って誰を指すのか意味不明だった。

「四葉たん、誰かに仕えとったんか?」

「ううん。心当たりが無さすぎて、ビツクリしてる」

「そうか・・・んじゃ、最後のスキルな?」

「うん」

「最後は、【魔術師のギフト】ちゅうので、治癒能力やて」

「・・・魔術師のギフト・・・治癒能力？」

「せや！・・・その様子やと、この魔術師ちゅうのにも、心当り無いんやね？」

「う、うん」

最後のスキルの説明も、とことんまでに不思議なモノだった。

「・・・なあ、四葉たん。何で、自分は本名やのうて、自分で付けた名前を名乗ったん？」

「・・・」

「うちは神やから、子供らの嘘はすぐに見抜けるんや。けど、自分のは違った。なんでや？自分の名前、呼ばれんかっても知ったたら、忘れるんは、無いやろ？」

そして、ロキ様は、話を変えて、僕の名前の事を聞いて来た。

当然だけど、かなり怪しんでるのは、背中越しだけど、ひしひしと感じた。

「そうしないと、戦えないと思ったから」

「ん？」

「僕は、〃衛宮四葉〃 って言う名の子供じゃなくて、〃カヴァス〃 って名前のアインクラッドで生まれた、短剣使いだって思い込まなきや、戦えなくなる気がしたから」

「そうか。なら、もう一つ聞くで？アインクラッドってのはどんな場所やねん」

そこで僕は、今度こそ、アインクラッドの全てを話した。

アインクラッドは、ネットの世界のゲームであること、初日から今日、この日、ここで目覚めるまで、その世界でデスゲームをしていた

ことを、僕自身が、今、どういう状況下にあるかわかっていない事も全部。

「なるほどな。正直、半信半疑なところがある。なら、自分はここでどう呼ばれたい？カヴァスか、四葉か、それとも、また、新しい名前を自分で付けるか」

「・・・新しい名前？」

「せや。今、そのデスゲームの世界に行ったと似たような状態なわけやろ？」

確かに、ロキ様の言う通りではある。

あるけど

「新しい名前は考えない。だって、両方の名前で会った人達も全部、忘れちゃいそうだから」

「・・・なんや、うちが問わんでも、ちゃんとわかっとするやん」

「違う」

「何が違うん？」

「こう言う答えが出せたのは、ロキ様のお陰。口に出して、言葉にしてたら、そう思えた。ありがとう、ロキ様」

ロキ様が僕に聞いてこなければ、そうは、本気で思わなかったと思う。

「だからって訳じゃないけど、ロキ様、一つわがまま言って良い？」

「なんや？」

「僕をどう呼ぶかは、ロキ様が決めてほしい。丸投げしちやってるみたいで、あれだけど、ロキ様が決めてほしい」

「・・・そうか。どっちでもええんやな？」

「うん！」

「なら、四葉たんって呼ぶわ。やっぱ、カヴァスたんは、全然可愛い

くないしな」

「そんなに、可愛くない？」

「全然や。何でそんなん思い付いたんか思うわ。何で、それにしようと思うたん？」

「誰かにそう呼ばれてた気がするの。その誰かをハッキリとは思いつけないけど、すごく大事な人だったと思う」

「・・・そうか、まあ、そうやろうな」

だから、呼び方は、ロキ様に決めて欲しかった。

そうしたら、ここでも頑張れると思ったから。

一応、僕が「カヴァス」と付けた理由を話すとロキ様は納得したようにうんうんと頷いた。

「はい」

「私だ。入るぞ」

「リヴェリアか。どうぞ」

その時、部屋の扉がノックされ、リヴェリアさんが戻ってきた。

「どないしたんや？」

「着替えだ。必要だろ？それに、伸びた髪もどうにかした方が良かったら」

服と靴、そして、散髪用のハサミとクシを手にして

「流石！ママやな！」

「誰がママだ、誰が」

「よし！綺麗にしてもらい？四葉たん」

「ん？四葉??」

「せや。これからは、カヴァスたんを四葉たんって呼ぶことにしたんや」

「・・・ロキ、貴様。それは、カヴァアスの親に対しての」

それらを持って来たことにロキ様は、流石、ママだとういと、リヴェリアさんは何やら恥ずかしそうに怒る。

そして、ロキ様の僕の呼び方が変わってることに對しても

「僕が頼んだの」

「ん？」

「僕には、二つ名前があつて、そのどっちを呼ぶかをロキ様に選んで貰ったの。だから」

「・・・どういう意味か、私にも理解できるように説明してくれるか？」

「うん、えっと」

なので、もう一度、リヴェリアさんにも同じ説明をした。

その後、当然、フィンさんやガレスさんにも説明することにはなつた。

三回も同じ説明をしなきゃいけなかったのは、大変だったし、三人とも、半信半疑な感じだった。

そして、ロキ様の一存で、ここでの僕の呼び方は“四葉”に決定。さらには、僕の事情については、他には黙っているようにと。

これに関しては、フィンさん達も思うところが有るようで、三人からも喋らないようにと、きつく言われた。

なんでも、それを知ると、僕をおもちやにしたがる人（神）がいるからだそうで、僕だって、おもちやにされるのはごめんなので、何度も何度も、頷いて、了承した。

「!？」

「「「・・・」」」

とりあえず、一通りの事が終わった瞬間、きゆるるゝつと言う音が

鳴った。

その音のせいで、一瞬にして僕を含めた全員が止まった。もちろん、僕は、他の人たちとは別の意味でだ。

「ぶっ」

「ぶっはははは!!可愛らしい音鳴ったで〜」

「ダハハハ!!お主の腹もずいぶんと素直じゃのお〜」

「ははは!!そろそろ、良い時間だし、お昼にしようか?」

音の正体は、僕のお腹が空腹を知らせるもので、リヴェリアさんが吹き出したのを皮切りに、ロキ様、ガレスさんには爆笑され、フィンさんには、苦笑いされた。

・・・もう、穴があつたら入りたい。

「せやな、食堂に行こうか?」

「・・・うん」

物凄く恥ずかしかった。

けど、鳴るお腹をどうにかすることも出来ず、四人にクスクス笑われながら、食堂に向かうことになったんだけど

「待て」

「ん?どないしたん?リヴェリア」

「食事の前に、着替えと髪を整えよう」

「あっ、せやな」

「それじゃ、僕の方から一人分追加を伝えてくるよ」

「おう!任せたで」

その前に、リヴェリアさんが止めて、彼女が持って来てくれていた服に着替えることになった。

「・・・大きかったか」

「四葉たん、ちつこいもんな・・・しゃあない、ご飯食べたら、色々買いにいかなとな」

「・・・僕、お金無いよ?」

「安心し、うちが出したる。」

しかし、その服は大きくて、下はともかく、上の袖の部分が、ノースリーブな事もあって、僕のお胸が・・・。

それがダメなのは流石にわかる。

「とりあえず、元のを着ておいてくれ」

「うん」

きつと、アスナさんが見たら、慌てふためくか絶叫するだろう。

いや、両方か。

とにかく、アスナさんが大慌てになる光景が脳裏に浮かん。

結局、元の服に着替えなおした。

「あつ！リヴェリア、そのピョンってしてるんは、切ったらあかんぞ?」

「ん?何故だ?」

「それ、かわええやん!」

で、次は、髪。

前髪は、鼻か口の近くまで伸びてるし、後ろも肩甲骨の下、辺りまで伸びてるし、そして、僕の頭のでっぺんに生えてるアホ毛も、若干、伸びてるように思った。

「はあく、わかった。四葉、お前はどうしたい?」

「・・・僕は、その、伸ばしたい」

「わかった。整えるだけにするぞ?」

そして、その髪は、前髪は眉毛の少し下辺りに揃えられ、後ろも少しだけ切って、肩甲骨の辺りに毛先を揃えて貰った。

「うん！めっちゃええわ！四葉たん！」

「ありがとう。リヴェリアさん」

「構わんさ」

「ほな、行こうか」

「!？」

それで、全部の準備が整って、僕はロキ様に抱っこされた。なんだか、抱っこされる度に驚いている気がする。仕方がない、今はまだ、歩けないから。そして、そのまま、僕は、食堂へと運ばれた。



「やあ、待っていたよ？」

「今は、ほとんど出掛けておるからの、儂等だけじゃ」

食堂につくとフィンさん達が待っていて、共に食事を取ること。メニューは、スープとパンと言う馴染みの感じだった。

「ほな、いただきますしよか？」

「はい」

「」「」「いただきます」「」

手を合わせて、パンを手にとってみる。

「……」

「……四葉たん」

引きちぎろうとしても千切れなかった。

「スープだけでも食べておけ」

「はい」

スープの具も噛んで飲もうとしたら、飲めずにむせてしまって、仕方がないからスープだけを口にすることにした。

「これは、一度診てもらった方が良さそうだね」

「せやな。後でアミツドちゃんに診て貰ってくるわ」

そんな僕の様子から、その予定が立てられた。

第3話・始めての病院

「いらっしやいませ、ロキ様、リヴェリア様。本日のご用件は？」
「おお、ちょうど、良かったわ〜」

で、僕は食事後に、ロキ様の抱っこでリヴェリアさんも一緒に巨大な建物にやって来た。

「悪いんやけど、アミッド、この子、診たってくれへんか？」
「・・・わかりました。どうぞこちらに」

僕等が建物内に入るなり、白銀の色の長い髪をした女の人が出迎えてくれた。

どうやら、ロキ様達が言っていたアミッドさんと言うのが、この人らしい。

そして、彼女は僕等を診察室みたいな部屋に案内して早速、僕の診察を開始してくれた。

「ずいぶんと痩せ細っていますね」
「せやろ？さつき、スープだけしか食べられへんかってん」
「・・・そうですか」

まずは、僕を椅子に座らせて、右腕を取って、いろんな角度から見
て、ロキ様はお昼の時の事を話した。

「年齢を伺っても？」
「そういや、四葉たん、年齢はいくつなんや？」
「えっ？・・・えっと、確か、七歳？」
「「えっ？」」

そして、聞かれた僕の年齢。

一応、頭の中で計算して、今の年齢を言った。
そしたら、ロキ様もリヴェリアさんも固まった。

「・・・七歳ですか」

「うん」

「まず、心音を聴かせてください」

「は、はい」

「後、他にも検査しますので」

「は、はい」

で、聞いたアミッドさんは少し何かを考えて、まずは聴診器で心音と肺の音を聴いた。

「支えますので、ここに立って貰えますか？」

「はい」

次に身長とか体重計とかの検査と、血液検査をした。

身長を計る時も体重を計る時も、上手く立ってず、フラフラして大変だった。

そして、血液検査のあのチクリとした痛みはもう二度と味わいたくないと思った。



「筋肉量が極端に少ないですね。まるで、長い間、寝たきりだったみたいな感じですね。その為に、食べ物を飲み込む力が衰えてしまったのでしょうか。まずは、固形物ではなく、流動食などから始めてください」

「ああ」

「急に走らせてはダメです。少しずつ、ゆっくり歩く練習から始めてください」

「わかった」

その検査結果は、すぐに出た。
やっぱりと言うか、何て言うかって感じだった。

「それよりも、気になるのは、年齢のわりに遅れてる成長です。成長に個人差はあるものですが、コレは、遅すぎます。体重は仕方がないにしても、身長の方は、三歳児並みしかありません」

「アミッド、それは四葉たんが病気ちゆうことか？」

「いろいろと検査をしてみました、異常は見られませんでした。遺伝か体質かもしれませんが」

「そうか」

正直、アミッドさんのその検査結果の説明を聞いていても僕にはよく解らなかつた。

確かに、第六層の宿屋では、リユーに協力して貰ってもドアを解除できなくて、結果、宿屋のレストランで大人の飲み物、コーヒーを堪能して一夜を明かしたりとか、僕的に本当に好みの武器が扱えなかつたりと、この身長で不便はあるけど、指摘されるほど問題だとは思わなかつた。

「四葉さん」

「・・・はい」

「大丈夫ですよ？これから、ちゃんと三食きっちり食べて、ちゃんと睡眠と太陽の光を沢山浴びる、どちらの治療にも良いことです。ただし、無理は禁物ですよ？」

「はい、わかりました」

そして、アミッドさんは僕の両手を取って優しく包むと、僕の視線に合わせて、これまた優しい目で優しい声で「大丈夫」だと言ってくれた。

それに僕は、自然と頷いて答えた。

「また、何か有りましたら、すぐに来てくださいいね？」

「はい」

「アミッドちゃん、ありがとうな。報酬は、これでええか？」

「はい。またのお越しをお待ちしております」

それで診察が終わり、ロキ様はアミッドさんにお金を手渡した。

「次は、ギルドやな」

「ああ」

「四葉たん、アミッドちゃんにバイバイしとき」

「う、うん。またね？アミッドさん」

「はい」

そして、次の場所に行くために、僕はまたロキ様に抱っこされて、アミッドさんに手を振ってそこを後にした。



「・・・」

「ん？四葉たん、どないしたん？」

アミッドさんの所を後にして、僕は上を見上げた。

「空が青い」

「ん？」

そこに有るのは、アイクラッドでは外周部に行かないと見ることはない何処までも青い空だった。

「やっぱり、違うんだね」

「・・・そうか」

それだけで、ここはイクラッドじゃないんだって、再認識出来た。

「ロキ様」

「ん?」

「あの塔は何?」

そして、僕は、アミッドさんの所に行くまでも気になっていたアイクラッドの迷宮区タワーみたいな塔の事を聞いてみた。

「ああ、アレは、バベルや」

「ばべる?」

「せやで?あそこにダンジョンの入り口が有るんやけど、その辺はリヴェリア達に教えてもらい?四葉たんはまず、自力で動けるようにならんとあかんからな」

「うん、頑張る」

塔は「バベル」と言うらしい。

ロキ様の言葉に僕は、フンツと鼻で息をして答えた。

「頑張るのは良いが、無理はするなよ?アミッドも言っていただろう?」

「はい」

そして、リヴェリアさんには大きく首を縦に振って答える。

「さて、いろいろ見ながら行くこうか?」

「ロキ、寄り道などせず、さっさとギルド本部に行くことが先決だろう」

「リヴェリアこそ何言うどんねん！子供の好奇心は大いに刺激したらなあかん！つうか、四葉さんに街に何があるか覚えてもらう、チャンスやる！これは、一石二鳥なことなんや！それにや、四葉さんところやって歩けるんは、今しかないんやで!!」

「最後のが、一番の目的だろう」

「当たり前やろ！見てみい！四葉たん、こんなにちっこくて、守りたくなる感じの可愛い子ちゃんやねんで！皆に紹介したら、引っ張りだこになるに決まっとるやろ！」

すると、寄り道をしながら行こうと言うロキ様とせずに行こうと言うリヴェリアさんの間で、ちよつとわけの解らない、プチ口論が始まる。

「だいたいな、四葉たんが身体を思うように動かせるようになったら、四葉たんダンジョン行って、うちの事、構ってくれんようになるやろ！だから、今、この時しか無いんや！」

「……」

僕を抱っこしながら力説するロキ様。

「はい！僕も知りたい」

「おっ！」

「……四葉……」

僕とリヴェリアさんはそんなロキ様に一瞬、無言になった。

けど、僕はすぐに手を上げて言った。

それにリヴェリアさんは呆れたと言わんばかりの目で僕を見て、ため息を吐きながら、僕の名前を呟いた。

「……リヴェリアさん、ギルド本部ってどんな建物？特徴を教えてください、後、方向も」

「・・・」

「了解」

そんなリヴェエリアさんに小声で僕は聞いた。

もちろん、そんな小声で言ったって、僕を抱っこしているロキ様に聞こえないなんて事は無いだろうけど。

リヴェエリアさんは一応、耳打ちでギルド本部のある方向とギルド本部の特徴を僕に教えてくれた。

「ロキ様」

「ん？」

「あのお店はなあに？」

「ん？ああ、あの店か」

「うん！お店の名前と何屋さんか教えて？」

「もちろん、教えたるで!!」

「・・・はあ」

それを元に、僕は、通りにある一軒のお店を指さして、ロキ様にそのお店の名前と何屋さんかを教えてほしいとお願いして教えてもらう。

それをまた一軒、また一軒と繰り返し、リヴェエリアさんから聞いたギルド本部の特徴を持つ建物を目指して歩いてもらう。

そんなことを始めた僕とロキ様にリヴェエリアさんが大きな溜め息をついたのは言うまでもないだろう。



「ロキ様、次、アレ」

「おお、もう着いてもうたなく、アレがギルド本部や。いや、うちの遊びに付き合ってくれてありがどうな？四葉たん。あつという間に、着いてもうたわ」

「うん！ロキ様のお陰で、ここまでのお店は全部覚えたよ？」

「ホンマか？」

「うん！だから、ありがとう」

そして、ギルド本部の特徴の建物を指さすと、それは終わった。

ロキ様の言う通り、これは完全なる遊びだ。

けど、本当にそのお陰で、アミツドさんの所からギルド本部までの道のりにあるお店をだいたい把握できたから、万々歳だ。

僕とロキ様の後ろに着いて歩いていたらリヴェリアさんには悪いけどね。

「ローズたん、居るかな？」

「さあ、解らんが、居なければ他の者に頼めば良い。さあ、行くぞ」

そこからは、リヴェリアさん先頭でギルド本部だと言う建物の中へと入っていった。

第4話・冒険者登録

「えつと〜」

「・・・ローズたん、見当たらんなあ〜」

「おい、アレ、ロキ・ファミリアだ」

「主神のロキ様とリヴェリア様だ」

「ま、まじか」

そして、中に入ると周囲の人達がざわついた。

というか、ここまで来る道中もかなりざわつかれたけどね。

「リ、リヴェリア様!?!」

「!」

「おお、エイナか!」

そんな、ざわつきの中で、カウンター席の向こうに座っていた眼鏡をかけたセミロングの綺麗なお姉さんが、リヴェリアさんを見るなりカウンターに身を乗り出すように立ち上がった。

リヴェリアさんもその人を見てとても嬉しそうな反応をした。

そして、僕も

「・・・あのお姉さん、アスナの声に似てる・・・」

「・・・リヴェリア、あの子と知り合いか?」

「まあな」

僕がそう呟くと、ロキ様はちらつと僕を見た後、リヴェリアさんにその事を確認した。

リヴェリアさんは、一つ頷いて、その人の元へ歩いて行って、僕とロキ様もそれに着いていった。

「久しいな。エイナ」

「は、はい。お久しぶりです。リヴェリア様」

「悪いが、エイナ。ローズはいるか？」

「えっと」

どうやら、リヴェリアさんの知り合いのようで、その人は、リヴェリアさんと挨拶をして、リヴェリアさんの口から出た名前の人物をキョロキョロと周囲を見渡して探した。

「……すみません、今、出払ってる見たいで」

「……そうか」

どうやら、居ないらしい。

「なら、その子に頼もうか？」

「そうだな。エイナ、この子の冒険者登録をお願いしたい」

「えっ？」

ならばと、ロキ様とリヴェリアさんとその人に僕の冒険者登録の手続きとやらをお願いすることにしたらしい。

「……えっと、その子ですか？」

「そうだ」

その人は、信じられないものを見るように、ズレかけた眼鏡をかけ直してロキ様に抱っこされた僕を、マジマジと見た。

「……貴女、歳はいくつかな？」

「七歳」

「七歳!?嘘、もっと下かと……あ、いや、そうじゃなくて!貴女、本当に、冒険者になるつもりなの?」

で、アミッドさんと同じように年齢を聞かれて、素直に答えると、かなりビックリしていた。

そして、僕が冒険者になることを反対だと言うように、その人は言った。

「……う、うん……」

「……お姉さんとしては、冒険者になりたいなら、もう少し、大きくなってからで良いんじゃないかな？ って思うよ？ ダンジョンは貴女が思ってる以上に危険な場所なんだから……」

ただ、悲しそうな声だった。

きつと、この人は、「冒険者になる」ってことがどういう事なのか、その未来、選択次第でどうなってしまうかを痛いほど知っているんだって思った。

「リヴェリア様……本当に、この子の冒険者登録をするんですか？」

「……ああ。エイナ、心配はいらん。我々がいるんだ」

「……そうですか。わかりました」

そして、少し泣きそうな、不安げな顔で、今度は、リヴェリアさんに確認して、かなり渋々な感じで、用紙を出してくれた。

「……ここに、必要事項を書いてくれる？ 字は書けるかな？」

「……えっと」

字は書ける。

けど、ここの文字じゃない、だから、困ってロキ様とリヴェリアさんを見た。

「エイナ、紙をもう一枚貰えるか？」

「え？ あ、はい」

すると、リヴェリアさんがもう一枚同じ紙を貰って、そこに何かの文字を書き込んでいく。

「四葉、ここには、コレを書け」

「はい」

「四葉たん、カウンターに乗っけるけどええか？」

「は、はい」

本来なら、そんなことをしちやダメだけど、僕はカウンターに乗せて貰って、リヴェリアさんから貰った紙に書かれたモノと似たものを写し絵のようにもう一つの紙に書いていく。

手に力が入らないから、なかなか大変で、少しガタガタになってしまった。

「・・・」

「フッフ、ちゃんと読めるから、大丈夫だよ？」

「・・・うん。はい」

「ありがとう」

その出来上がった冒険者登録の用紙に少し落ち込んでいると、その人は笑って、そう言った。

それは助かる。

もし書き直してって言われても、同じものかもっと酷いものが出来てしまうかのどっちかだ。

とりあえず用紙を渡した。

と同時に僕はロキ様の腕の中に戻される。

「アドバイザーは、どうされますか？」

「教育は我々がする。この通り、読み書きもままならんからな」「わかりました。・・・では、手続きは以上で終了となります」

「ああ。手間をとらせたな」

「いいえ」

「ほな、次、行くで」

これで、ギルド本部での用事は終わりだ。



「ぐへへ、これは、いい感じやなく、こつちもええなく」

「・・・」

そして、そのまま、僕の日用品とかを買いにお店に行った。

日用品は、すぐに揃った。

が、問題は服だ。

ロキ様は少し気持ち悪い笑みを浮かべながら、俗に言うゴスロリ服とかロリ服とか、僕のあまり好まないフリフリの服を取っ替え引っ替えさせてくる。

「・・・」

「・・・」

時々耐えられなくて、リヴェリアさんに助けを求める視線を送るけど、ことごとく避けられる。

「あれ？リヴェリアとロキじゃん」

「・・・何してるの？」

「おお、テイオナにアイズたんやん！ちようどええわ、こつちも来てみ？」

そこに二人の知り合いが来て、その二人をロキ様は手招きして呼び寄せる。

「うわあ、可愛い！お人形さんじゃん！」

「・・・うん、可愛い」

「せやろ、せやろ？うちの力作や！」

一人は露出度の高い服を着た褐色の女の人でもう一人も露出度の高い服を着た金髪の女の人だった。

どっちもすごい美人さんだった。

ちなみに、今は黒と白のゴスロリ服を着せられ、フリルの付いた靴下に服に合うデザインの黒いローファを履かされている。

「あつ！もしかして、この子が今朝、言つてた子？」

「せや。四葉たん言うんや。四葉たん、ティオナにアイズたんや。

今日から、四葉たんの仲間で、お姉ちゃん等やで？」

「・・・お姉ちゃん」

「へへへ、お姉ちゃんか」

そして、ロキ様が二人に僕を紹介して、僕にも二人を紹介してくれた。

その時に、ロキ様が「二人が今日から僕のお姉ちゃんだよ？」って言うのと、二人は照れた。

「えつと、私は、ティオナ・ヒリュテだよ？よろしくね？四葉」

「アイズ・ヴァレンシユタインだよ？」

「よ、四葉です。よろしくお願いします」

「うん」

「ねえ？ロキ、私も四葉の服、選んでもいい？」

「ああ、ええで？」

「本当！やったー！」

「アイズたんも選んだってくれるか？」

「・・・う、うん。いいよ」

「・・・」

改めて、個々に自己紹介をしてくれて僕も二人に自己紹介をして頭を下げた。

けど、ティオナさんが太陽みたいな笑顔を浮かべてロキ様に僕の服選びに参加したいと申し出て、ロキ様がその許可と、アイズさんにも参加するように言ったことから、少しだけ絶望感に襲われた。

だって、何時終わるんだ？って思うじゃん。



「・・・スウ・・・スウ・・・」

「・・・寝ちやったね」

「うん」

「連れ回されて疲れたんだろう」

あの後、結局、着させられたゴスロリ服一式は購入され、他にもセーラー服ポイワンピースを数着と寝巻き変わりが角の生えた白ウサギと犬と猫の着ぐるみ服も購入して、帰路に着いた。

ティオナさんとアイズさんが何を選んできたかは、秘密だ。

そして、お店を出る時、僕はロキ様じゃなく、ティオナさんに抱っこされて出た。

途中で、アイズさんの抱っこに変わって少しして、僕は寝た。

「ぐへへ、ええなく、アイズさんと四葉たん、そうしてると絵になるわ。ほんまの『姉妹』って感じるで〜」

「・・・」

「おっ？なんや？その嬉しそうな顔は、アイズたん、四葉たんみたいな可愛い妹出来て嬉しいんか？ウリウリ」

ロキ様は、アイズさんが眠る僕を抱っこする姿と、他の人には解り

辛い嬉しそうな顔を見て、アイズさんの脇腹を突っついてからかう。

「わちい!?!痛い、何すんねん、リヴェリア」

「アイズ、夕食時までには時間がある、それまで、部屋で休ませようと思う。ホームに帰ったら、その子の部屋に運んでやってくれ」

「・・・わかった。この子の部屋って何処なの?」

「帰ったら、案内するさ」

その手をリヴェリアさんは思い切り叩き落として、抗議するロキ様を無視して、僕を運ぶようにアイズさんに頼んだ。



「えっ?あ、アイズさん!その子!」

「あつ、レフィーヤ、シー」

「レフィーヤ、大きい声出しちゃうと四葉、起きちゃうからシーね?」

「!?!」

そして、アイズさん達がホームのエントランスに入るとそこには、一人の女の人が居た。

その人はアイズさんとアイズさんに抱っこされて寝る僕を見て大きな声を出そうとした。

そこをすかさず、アイズさんとテイオナさんが止める。

「レフィーヤ、この子が朝言ってた子だよ?四葉って言うんだって」

「・・・四葉ちゃん、ですか」

「せや、夕食んにちゃんを紹介するから、待っててや?」

「それじゃ、また、後でね?レフィーヤ」

「私も、着いていきます」

「ほうか?」

結局、その人も加えて六人で僕の部屋へと向かうこととなった。



「へえ、ここが四葉の部屋か。一人部屋なんだね」

「今、相部屋は全部埋まっとるしな」

ロキ様やリヴェリアさんが言うのと僕の部屋と言うのは、僕が二度目に目を覚まして、大泣きしたあの部屋だ。

「・・・スウ・・・スウ・・・」

「ほんま、可愛えなあゝ四葉たんは」

「よく寝てるね？四葉」

「うん」

「・・・」

そして、ベットの上に寝かされた僕は、寝顔をアイズさん達に覗き込まれる事となった。

ただ一人、エントランスの所で会った女の人だけは、何処か不服そうな顔で僕の顔を見ていた。

「さあ、お前達、ロキも。何時までもそうしてないで、行くぞ」

「せやな」

「うん！」

「・・・うん」

「・・・はい」

リヴェリアさんは購入して来たものをすべて片付けると、アイズさん達を連れてその部屋後にした。



「四葉、起きろ。四葉」

「……ん……」

それから、どのくらい経過しただろうか。

僕は、リヴェリアさんに起こされた。

「起きたか」

「……」

「少し、髪をいじるぞ」

そして、リヴェリアさんはあつという間に僕の髪を整えて、まとめ
ていった。

「これで、良いだろ」

「首の後ろがスースーする」

「そのうち、慣れるさ」

シニヨン十三つ編みというなれない髪型に僕は正直戸惑った。

「リヴェリア」

「フィンか。良いぞ」

「ああ」

その時、部屋の扉がノックされて外からフィンさんの声が出た。

リヴェリアさんは部屋の外のフィンさん入室の許可を出して、
フィンさんは部屋の中へ入ってきた。

「うん、良いじゃないか。可愛いよ？・四葉」

「う……!?!」

そして、フィンさんが僕を見て僕を褒めるような事を言った瞬間、物凄い重圧感が僕の身体を襲った。

「痛っ!?!」

「お、おい、四葉」

「だ、大丈夫かい」

「・・・」

「お、おい、本当にどうした!四葉」

慌てて、ベットから出た僕は足に力が入らなくて、そのまま床に落ちる形で身体を叩きつけた。

痛かったけど、そんなことよりも、今はリヴェリアさんの背後に隠れる事の方が重要で、僕は這うようにして、そこに逃げ込んだ。

「よ、よく解らないけど、こ、怖い。さ、殺気みたいな」

「殺気?」

「ド、ドアの」

「ここかあ!!私の団長に『可愛い』なんて言葉をかけられたヤツの部屋はああああ!!」

「!?!」

そして、そう言った瞬間、部屋の扉が木端微塵になる勢いで吹っ飛んで、吹き飛ばした人が怒鳴り込んで来たのは。

「何処だ何処に隠れていやがる!!団長の寵愛を受けていいのは私だけなんだよおお!!」

「テイ、テイオネ、お、落ち着くんだ」

キョロキョロと部屋の中を見渡して、たぶん、僕を探すその人。その人を落ち着かせようとフィンさんはその人に近付いていく。

こんなこと言っちゃダメかもしれないけど、アスナさんがブチキレた時かなり怖かったけど、この人からは、それとは次元の違う恐怖を感じた。

「そこかああああ!!」

「ひいっ!!」

「止すんだ!! ティオネ!!」

「クッ!？」

リヴェリアさんの背後でカタカタ震えてると等々、見つかって、フィンさんの静止の声もその人には届かず、その人は僕に飛びかかって来た。

あつ、これはもうダメだ、これは死ぬ、って僕はそう思った。

だから、僕は強く目をつむって、来るであろう痛みに耐える準備をした。

第5話・歓迎・宣言・長い一日の終わり

「ヒクツ・・・ヒクツ・・・怖かった」

「・・・そうだろうな」

「ごめんね？四葉。ティオネ」

「・・・はい。すみません」

その後、結局、フィンさんが全力で止めてくれた。

今、僕はリヴェリアさんに抱えられて、食堂に移動中なんだけど、泣きべそをかいていた。

僕を襲ってきた人、ティオネさんはさっきまでとところっとな変わって、シユンとなつて、申し訳なさそうについてくる。

「えっと、あんた、四葉って言ったわよね？」

「は、はい」

「・・・ごめん。私、団長の事になるとどうも・・・」

「お姉さんは、フィンさんが大好きなんだね？」

「・・・うん」

「なら、良いよ」

「ありがとう。私はティオネ。ティオネ・ヒリユテよ？よろしくね？四葉」

「うん」

そして、ティオネさんは僕へ謝罪モードに入った。

若干、ティオネさんにまだ怖さを感じるけど、それはフィンさんが大好きだからって気持ちゆえって事もわかるから、その謝罪を受け入れ、改めて、自己紹介をした。

「ティオネ、罰だ。ここからは、お前が運べ」

「わかったわ」

そこからは、僕はリヴェエリアさんからティオネさんに移されて食堂へ連れて行って貰った。



「おっ！やつとき・・・おおおおお!!」
「!？」

そして、食堂に到着するとそこには沢山の人が揃っていて、ロキ様は僕を見るなり、大声を上げて瞬間移動かと思うくらい素早い動きで、ティオネさんに抱っこされる僕に接近した。

「四葉たん！めっちゃ可愛いなってる。誰や？誰の仕業や？」

「ちよっ」

「へえ、あの子が」

「ちっこー」

「団長より、ちっちゃいんじゃない？」

ロキ様はかなり興奮した様子で、腰までフリフリしている。

「はっ！そうか！リヴェエリアやな！リヴェエリアの仕業やな！でかしたでー！リヴェエリアたん!!」

「・・・」

「ぶへえっ」

そして、リヴェエリアさんに飛びかかっていった。がリヴェエリアさんはすかさず、ロキ様を避けた。ロキ様はそのまま壁に激突していった。

「えっ？ティオネさん、放っておいて良いの？」

「良いのよ。あんなのは何時もの事だから」

「い、何時も?」

「そうよ」

それなのに、テイオネさんもフィンさんもリヴェリアさんも壁に激突していったロキ様を無視して、食堂の席に向かって歩いていく。

「団長、こちらでよろしいでしょうか?」

「ああ、ありがとう、テイオネ。四葉をここに座らせてくれ」

そして、食堂内の一段高くなっている席の真ん中の椅子に座らされた。

僕を座らせるとテイオネさんは沢山の人達の中からアイズさん達を見つけて、そっちに向かっていった。

「皆!今朝、いっとった新人や!バツチリ、獲得したで!」

「!?」

その時には、完全復活していたロキ様が何時の間にか僕の隣の席について、叫んだ。

「今朝も話した通り、今日、僕等に新しい仲間が増えることとなった」

「四葉たん。皆に挨拶や」

「は、はい。よ、四葉です!今日から、よ、よろしくお願いします」

「よし!ええ子や!ちゃんと挨拶出来たな?」

「見ての通り、彼女はまだ幼い。一応、神の恩恵も与え、冒険者登録もすでに済ませてはあるが、初ダンジョンは、学ぶべき事を学んでから、と言うこととなった。どうか、仲良くしてやって欲しい」

それに続いてフィンさんが大きな声で言って、僕はロキ様にさとされて、僕は挨拶をした。

「おーい、フィン、ロキ!!」

「ん?」

「ここは何時から、託児所になったんだ?」

すると、一番後の方から、不機嫌そうなそんな声が響いた。

その場が一気に静まり返る。

「ここは、オラリオ最強のロキ・ファミリアだろうが!!なんだ!そのガキは!!そんな雑魚中の雑魚を入れて、弱体化させてえのか!てめえらは!!ああ?」

「・・・ベート・・・」

「俺は、雑魚には興味はねえ!!特にてめえみてえな、自分の足で歩けねえようなガキはな!雑魚中の雑魚が俺達と同じ土俵に上がってこようとすんじゃねえ!!目障りだ!!消えろ!!」

ただ、その声だけが異様に響いた。

「ちよつと!ベート!そんな言い方しなくてもいいじゃん!!」

「ベート、ちよーつとくらい、新入りの子迎え入れようって気にならんのか?」

「ならねえよ!そんなガキなら、なおさらな!!」

その言葉に、ティオナさんやロキ様が言った人にその人に注意してくれたけど、僕は「その通りだな」って思った。

けど、言われっぱなしで我慢できるほど、僕は大人じゃない。

「確かに!君の言う通りだ!」

「!」

「今の僕は、誰かの手を借りなきゃ一人で歩けない。けど、そんなの僕だって性分じゃない!一日でも早く、こんな状態から脱却して、僕

を雑魚呼ばわりしたことを後悔させてやるよ！」

だから、僕はそう吠え返した。

「!?」

「がははっ!!よー言うた!!偉いぞ!四葉!!」

すると、いつの間にか傍に来ていたガレスさんが僕の頭を鷲掴みにして、ガシガシと頭を乱暴にかき回した。

「アハハハッ!ええ、ホンマ、挨拶やったで?四葉たん」

「無茶はするなよ?」

「うん。四葉」

そして、ロキ様にはお腹を抱えて笑われ、リヴェリアさんには、そう言われた。

フィンさんは、スツと僕の方に手を差し出して来た。

「改めて、よろしく頼むよ。四葉」

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

その手が何を意味するかは、わからないけど、僕は、差し出されたその手を握り返した。

「ほな!四葉たんの挨拶もすんだところで!皆!今日も一日お疲れさん!かんぱーい!!」

「かんぱーい!!」

そして、ロキ様の合図とともに始まった、夕食の時間。

他の人は、アンクラッドの時みたいなお食事内容だけど、僕はアミツドさんの助言通り、消化に良いものばかりだった。

「四葉、確か、七歳だったよね？」

「うん」

「そっか」

スープを飲んでいると、フィンさんが僕の年齢を聞いてしみじみ言う。

「どうしたの?」

「いや、君くらいの年齢の子供が居ても可笑しくないんだなあ〜って思ってたね?」

「えっ?」

どういう意味なんだろう?

「失礼な事、聞いて良い?」

「ん?なんだい?」

「フィンさんって歳いくつなの?」

それで、僕は、フィンさんの年齢を聞いてみた。

「四十二だよ?」

「!?!」

そして、返ってきたその答えに僕は、雷に打たれた感覚になった。

「ほ、本当に、四十二歳なの?」

「うん、そうだよ?」

「そんなに、フィンさんの年齢聞いて、ビックリしたんか?」

「だ、だって、僕のお父さんよりも年上だよ!!」

「君のお父さんは、いくつなんだい?」

「確か、今年で三十六だったと思う」

「じゃあ、僕とは、六つ違いか」

「む、六」

本人が、そうだって言っているし、ロキ様達の反応からも、四十二歳は正しいんだろうけど、僕は半信半疑だった。

身長とか見た目とか、六歳下だと言う僕のお父さん、切嗣は彼より老けているように思う。

「四葉、手が止まっているぞ」

「!？」

あまりにビックリしすぎて、食事の手が止まっていた僕は、リヴェリアさんに言われて、手を動かし、スープを飲み進めていく。



「ほい、ここが四葉さんの新しい部屋な？」

「・・・お隣さんだね？四葉」

「うん」

そして、夕食の時間が終わった後、僕は、ティオネさんが僕の部屋の扉を破壊してしまったせいで、新しい部屋に移ることになった。

その部屋のお隣さんはアイズさんだった。

「これで荷物は全部ね？」

「うん。ありがとう、ティオネさん」

「・・・」

「もお、レフィーヤ、何むくれてるの？」

「・・・だって、アイズさんの隣のお部屋だなんて、ヌググ・・・羨ましく思います」

旧部屋からの荷物の運び出しは、テイオネさん達が手伝ってくれた。

ただ、レフィーヤさんって言う人は、ハンカチを噛んで僕のお隣さんがアイズさんであることを悔しがった。

「じゃあないやろ？諦め、レフィーヤ」

「ヌググ」

「ほな、四葉たん。今日はゆつくり休むんやで？」

「は、はい」

「それじゃ、おやすみ？四葉」

「おやすみ、四葉。ほら、行くわよ？レフィーヤ」

「あつ！そ、そんなに引つ張らないでください！テイオネさん!!」

「・・・おやすみ、四葉・・・」

「おやすみなさい。それと、今日は、いろいろとありがとうございました」

「おう！おやすみ」

皆が部屋を立ち去る際、僕は、ベットの上からだったけど、皆に頭を下げた。

「・・・ふう」

部屋の扉がパタリと閉まった瞬間、僕は、ベットに横になって、息を吐いた。

そこから、僕は、思考を始める。

頭の中の整理を兼ねて、今日一日の事を振り返った。
長い一日だった。

まるで、二日分を味わっているような感じだ。

本来なら、僕は、ここじゃなくて、アンクラッドの七十五層のボス戦攻略にアスナさんとキリトさんとリユールと挑んで、二十二層の家に

帰って、リユースを丸洗いしながら、じやれつき合っている頃合いだ。それなのに、僕は、ここにいる。

何故か、それまで、と言うか、数分か数秒前には普通に歩いたり走ったりしていたのに、いきなり歩けなくなるほど筋力が落ちた。

おまけに食べ物もろくに喉を通らなかつた。

「・・・なんとかして、戻らなきゃ」

いろんな意味でそう思った。

アインクラッドに、現実の世界に、そして、動ける自分に。

まず、第一目標は、ちゃんと自分の足で歩けるようになって、僕を「雑魚」だとか言つたあの獣耳の奴、確か、ベートさんとかいったあいつに一泡噴かせてやるところからだ。

それと、僕に優しくしてくれた人達にちゃんと何かの形で返したい。

いや、返さないとダメだ。

その為にも、早く動けるようにならないと。

「・・・それと、あの視線は要注意・・・」

あの視線だけは、ここで一番、気を付けなきゃならないと思った。

何処から見ているのかは、大体わかっている、「バベル」のかなり上の方からだ。

方向がわかっても、あの視線の主の姿も声も解らない今の状況だと、街中を歩いていてすれ違つても解らないと言うことだ。

それは、とても危険すぎる。

だから、この中以外で警戒を解くのは止めようと僕は、そう心に誓いを立てた。

そうやって、考えているうちに、僕のとてつもなく長く思えた一日が終わりを告げた。

第6話・僕の魔法

「……」

「……」

翌朝、否、夜も明けていない時間帯に、僕は、隣のお部屋からの物音で目を覚ました。

「……うわっ!?!」

「!?!」

寝ぼけていて、僕自身が寝ていたのがベットの端っこだと気付かず、手をついて起き上がろうとした瞬間、そこには何もなくて、僕は、ベットから転げ落ちた。

「四葉、入るよ?」

「……」

その音に気が付いてくれたらしい、アイズさんが数回ノックした後、僕の返事を待たずに入ってきてくれた。

「!?!四葉!」

「ア、アイズさん、助けて」

「う、うん。お姉ちゃんが起こしてあげるからね?」

一瞬、エビ反り状態でベットから落ちてる僕を見て驚くアイズさんだったけど、どうにか助け起こしてくれた。

「大丈夫?」

「大丈夫、ありがとう、アイズさん」

「ううん。でも、何であんな、格好を?」

「ベットから落ちた」

「四葉、もしかして寝相悪いの？」

「・・・解らない。僕、あまりにベットで寝ないから」

「ベットで寝ない？・・・床で寝るの？」

「床・・・じゃないけど床かな？」

昨日までは、リユーのお腹が僕の枕代わりだったからな、って思う。ベットで寝てたのは、アスナさんやキリトさんと行動を共にしていた時、スイートを借りた時とか、黒エルフのお城に泊まった時とか、アスナさんと相部屋借りた時とか位だった。

「アイズさんは、こんな朝早くから、何するの？」

「鍛錬だよ？」

「鍛錬・・・あの、邪魔しないから、見ても良い？」

「・・・良いよ？」

「本当!？」

「うん、じゃあ、お着替えしていこう？」

話題を変えて、気になっていたことを聞いた僕は、アイズさんの鍛錬とやらを見てみたいと思った。

だから、お願いした。

それを快く受け入れてくれて、僕は、アイズさんの手を借りて着替えを済ませると部屋を後にした。



「・・・」

「・・・」

それから、庭に出て木刀で素振りを始めたアイズさんを僕は、犬の着ぐるみ姿で、近場の椅子に座ってみている。

この犬の着ぐるみはアイズさんが選んで僕に着せた。
いろいろと言いたいことはあるけど、いいよ、全身を覆ってるから、
顔以外は暖かいし。

「……」

「……」

ブンブンブんと風を切る音を鳴らしながら、アイズさんは木刀を振
るう。

「ここに居たのか」

「あつ、おはよう。リヴェリアさん」

「!……おはよう、リヴェリア」

「ああ、おはよう、アイズ。何時も早いな」

そこに、リヴェリアさんがやって来た。

僕とアイズさんがここに下りてきたときはまだまだ暗かったのに、
いつの間にか、朝日が昇り始めている所だった

「ところで、何故、お前はそんな格好をしている?」

「アイズさんが選んだ」

「!……か、可愛いかなって思ってた」

僕の格好を見て怪訝そうな顔で言うリヴェリアさんに僕は、アイズ
さんを指さした。

指されたアイズさんはもじもじとして、少し、頬を赤くして言った。

「はあく、着せ替え人形にされている本人が良いなら、構わんが、ほ
どほどにしてやれ、アイズ」

「う、うん。四葉、嫌、だった?」

「ううん、慣れてるから、平気」

「そうなの?」

「うん」

そして、リヴェリアさんに溜め息をつかれ、よけいに申し訳なさそうに言うアイズさんに僕は、グツと親指を立てて言う。

アイズさんのはまだ可愛い方だと思う。

僕は、僕を本当にへとへとになるまで着せ替え人形する人を、人達を知っているからね。

「ねえ、リヴェリアさん、一つ聞いて良い?」

「なんだ?」

「リヴェリアさん、魔法とか詳しい?」

「??」

「それはまあな?」

「じゃあ、どうやったら魔法が使えるの?」

「ん?何故、それを聞きたがる?」

そこで、リヴェリアさんがここに居ることにこれ幸いと思って、その事を聞いた。

リヴェリアさんは片目をつむり、僕を伺うように聞いた。

「昨日、ロキ様が僕に使える魔法が有るって教えてくれたんだけど、その魔法、力と俊敏を上げる効果があるみたいなんだ。だから、それを使って、立って歩く力を補えないかなって思ってた」

「・・・なるほどな」

スキルの方もって思ってたけど、こっちの方は、本当に戦闘時じゃないと発動しない気がして、常時発動出来るなら、魔法の方が良いと思っただ。

「だが、止めておけ」

「えっ?」

「魔法を使うには、詠唱が必要になる。後、精神力が必要になる、それに、常時発動するなど、無理な話だ。出来たとしても、それは、ある意味で爆弾を抱えているのと同じだ。モンスターとの戦闘中、精神疲労（マインドダウン）や精神枯渇（マインドゼロ）等を起こしでもしたら、命取りだ」

「・・・」

そして、リヴェリアさんから帰ってきた否定の言葉に、僕は、シユンとなる。

そう言えば、詠唱の事、ロキ様にちゃんと聞いてなかったなっと思っただ。

「!？」

「そんな付け焼き刃なことはず、地道にやっていけ」

「・・・うん」

ポンツと犬の着ぐるみの帽子越しに乗せられたリヴェリアさんの手。

「さて、始めるぞ」

「えっ?何を?」

「何を?ではない。歩くための訓練だ。アイズ、こちらは気にせず、お前はお前の鍛錬を続けろ」

「う、うん」

そこからは、同じ庭の近場にいるけど、僕とアイズさんはそれぞれの鍛錬を開始した。

内容は、アイズさんは木刀での素振り、僕は、リヴェリアさんの手を借りて、手足の筋力トレーニングだ。



「ああ、あかん、うち、キョン死するわ〜」

「……」

「……」

あの後、たつぷり汗を掻いた僕は、アイズさんにシャワーを浴びさせて貰い、今度は猫の着ぐるみに着替えさせて貰って、食堂に向かうとロキ様に会い、朝の挨拶をする前に、ロキ様はフラフラと床に倒れ込んでしまった。

意味がわからなくて、アイズさんを見上げると、アイズさんも似たような顔をしていた。

「四葉たん、おはよう。アイズたん、おはよう」

「おはよう、ロキ様」

「おはよう、ロキ」

「二人ともよー、寝れたか？」

「うん」

「はい」

「それなら、良かったわ」

そして、復活して、何事も無かったかのように起き上がって、普通に挨拶をするロキ様に僕も平静を装って挨拶をした。

内心、ビクビクだった。

「すぐ、慣れるよ」

「ほっ」

その内心の部分は、アイズさんにはバツチリ、バレていた。

「あつ！おはよー！アイズ！」

「おはよう、テイオナ、テイオネ」

「うわっ、四葉。どうしたのよ？その格好」

「可愛い、それ、買った奴だよね？」

「うん」

「アイズ、私にも抱っこさせて？」

「うん、良いよ」

「ありがとう！」

そして、そこにテイオネさんとテイオナさんが来て、僕は、アイズさんからテイオナさんに受け渡された。

「あっ！シャンプの匂いがする、ふわふわ」

「・・・」

テイオナさんは僕を受け取った直後にギョツとまるでぬいぐるみにするみたいに、抱き締めた。



「いやあ、絶賛、アイドル中やな四葉たん」

「おもちゃにされているの間違いではないか？」

「まあ、四葉本人が嫌がってないなら、良いんじゃないかな？」

その様子を離れたところから見ていたロキ様とフィンさん達。

「それで、どうだい？四葉の様子は」

「ただの普通の幼子だ。ただ、ベートに言い返した通り、負けん気は強いみたいだ。初日とはいえ、筋力トレーニングにも熱心に取り組んでいた」

「四葉たん、頑張り屋さんや」

「それと、発現した魔法で補おうとまで考えていたようだ。まあ、当

然、突っぱねたがな」

「なるほどね」

何故、僕等を否、僕の様子を見ながら、ロキ様達がそんな会話をするの、何故、リヴェリアさんが僕の事を

“普通の” って付けて言うのかも全然解らない。

「・・・魔法か・・・まあ、しやあないか」

「ロキ？」

リヴェリアさんからその話を聞いて、ロキ様は何を思ったのか、一度離れた僕等の方へと歩み寄ってきた。

「四葉たん」

「??何?ロキ様」

「ロキ？」

「??」

「四葉たんは、そんなに早よう歩けるようになってなりたいんか？」

「それは、なれるなら、なりたいよ?」

そして、それを僕に聞いて来た。

当然だ。

リヴェリアさんは地道につて言っていたけど、早く歩けるようになるなら、なりたいたいと思うのが当たり前だと思う。

「なら、一つ約束な?すぐに動けるようになっても、無理や無茶はせんでな?」

「はい!」

「良い返事や!なら、指を二本、右手の人差し指と中指を立てて、こう言い? “第一段階、限定解除” ってな?」

「はい!!」

僕のその答えを聞いて、ロキ様は、自身の口の前で右手の人差し指と中指を立てて、まるで忍者か陰陽師みたいな手の形をして見せてくれて、その言葉を僕に教えてくれた。

「・・・第一・・・段階・・・限定解除・・・」

「は、花びら?」

テイオナさんに床に下ろしてもらうと、それに習って、恐る恐る、ロキ様に教えて貰ったばかりの言葉を口にした。

直後、僕の周りから白い煙と花びらが現れて、円を描くように、僕の体を蛇のように上がって行って、たちまち僕は、その煙と花びらに包み込まれていく。

第7話・獣化魔法とお勉強の始り

「……」

「……」

その煙が晴て、花びらも消えた後、食堂内はシーンと静まり帰った。

「変わってなくない？」

「……」

そして、誰かが言った。

確かにあまり変わってないように思う。

ただ、異様にお尻の辺りがモコモコする気がする。

「よし！四葉たん、立ってみ」

「う、うん」

両手を床に着けて、そこに力を入れて腰を持ち上げていく。

「にゅっ、にゅにゅにゅにゅう〜!!」

「が、頑張れ、四葉」

「頑張るんや！四葉たん！」

「が、頑張れ」

「頑張れ」

かなり、自分の体が重く感じる。

変な奇声を発しながら、立ち上がろうとする僕を、ロキ様やテイオナさんを始め、「頑張れ」と言ってくれる。

そこからは、「頑張れ」と声に出して応援してくれる人達と声には出さず、握り拳を作って、心の中で「頑張れ」と言っただけで応援してくれる人達の二局に別れて応援してくれた。

「にゅにゅにゅっ」

「「頑張れ、頑張れ、頑張れ」」

「「「」」」

それはまるで、赤ちゃんが始めて立ち上がろうとする時、お父さんやお母さんがその様子を見守るような感じだった。

まあ、大差ないけど。

「・・・」

「おっ！」

「よっし！」

「おおお!!立った!立ったよ!四葉が立った!」

そして、いざ立ち上がれば、そこら中から歓声が上がった。

「よし、四葉たん、こっちに歩いてみい?」

「う、うん」

「あんよは上手!手の鳴る方へや!」

そこから、僕は、ロキ様の方へ、一步、二歩と足を動かしていく。

「わっ!」

「あっ!危ない!」

三歩目を踏み出した時、僕の体は、後ろに傾いた。

「!?!」

「レフイーヤ!ナイスキャッチ!」

そんな僕を後ろからレフイーヤさんが受け止めてくれた。

「ありがとう、レフィーヤさん」

「いいえ。・・・あつ、耳」

「耳？」

レフィーヤさんが呟いたその言葉に僕は、自分の耳に触れてみた

「!?無い!?!」

「フフフ、いいえ、こつちです」

「!?!」

次の瞬間、何時の場所にも耳は無いのに、耳をふにふにされているのが僕が僕の全身を駆け巡って、鳥肌を立てさせた。

「フフフ。気持ちいいですね」

「レフィーヤさん、それ止めて、ゾワゾワする」

レフィーヤさんは僕のもう片方の耳も触る。

そのゾワゾワする感覚が二倍になった。

「ぐはあー!」

「!?!」

そんな風になっているとロキ様が今度は鼻血を吹き出して倒れ込んだ。

「もしかして、四葉のお尻辺りがモコモコしてるの尻尾？」

「尻尾？」

その姿に驚いていると、レフィーヤさんの後ろからテイオナさんが僕を覗き込みながら言った。

「・・・」

「えっ? ちょっ!」

それを確かめようと思って、今度はかなりスムーズに立ち上がって着ている服を脱ごうと思った。

「コラ!」

「!?」

「何を考えているんですか! 女の子が人前で服を脱ごうとするなんて!」

「だって」

「だって、じゃありません!」

それをレフイーヤさんに止められた。

「いいですか? 女の子が人前で、ましてやこんな大勢の前で脱ごうなんて、絶対にやってはダメな事です! 尻尾を確認するなら自分の部屋でやってください!」

「・・・!」

そして、僕は、叱られた。

シユンとなっていると、僕の目にある人物が目に入った。

「おい! その! 獣耳!!」

「ああ??」

「どうだ!! 僕、自分の足で歩いたぞ!!」

それは、もちろん、ベートさんで、僕は、彼を指さして声を張り上げて、ベートさんがこっちを向くといっへんと両手を腰に当てて胸を張った。

「けっ! だった二歩だろうが!」

「二歩でも歩いたことには、変わりないよ!」

「歩いたうちに入らねえーよ!」

「・・・揚げ足取りじじい」

「ああ? 今、何だった?」

「揚げ足取りじじい! 屁理屈じじい! 意地悪じじい! へそ曲がりじじい!」

「色々増えてるじゃねえか!!」

ベートさんはそんな僕を鼻で笑い、まだ、歩けていないと言った。それに僕は、不満で、ベートさんを少し睨んで言った。

それを聞き取ったベートさんに今度は大きな声で、二、三個増やして言った。

「はいはい、その辺にしとこうか? 二人共」

「・・・」

「ベート、少し位、褒めたって良いんとちゃうか?」

「けっ! 誰が褒めるか!」

「四葉たんもベートで遊ぶん、もうやめとこか?」

「はい!」

不毛な言い合いをロキ様が止めた。

「ほな、四葉たんは今日、一日、そのまま過ごしてみよか」

「なっ!?! ロキ! 貴様、何を馬鹿なことを言っている! 四葉に精神疲

弊 (マインドダウン) を起こさせるつもりか!」

「せや」

「!?!」

「ええやん、ホーム内なんやし、リヴェリアも側におるやろ? 四葉たんの限界を知るチャンスやろう?」

「……」

「そう言うわけで、四葉たん、頑張ってみよか？」

「……うん……」

そして、ロキ様はリヴェリアさんの抗議の声を聞きつつ、この魔法の一日使用を僕に命じた。

「さあ、皆。ご飯にしようか？」

「……」

それが終わると周囲の人達に呼び掛けて、皆、それぞれ、席に座りなおしていく。

「まったく、ロキも無茶させるわね」

「本当だよね」

「……うん……」

「四葉ちゃん、辛くなったら、すぐに言ってくださいね？」

「うん」

それからすぐに、朝食の時間が始まった。

今日は、昨日座った席じゃなく、アイズさん達の側で食事を取ることになった。

「四葉、昨日も思ったけど、それで足りるの？」

「うん」

「ええ、私だったら絶対にお昼まで持たないよ」

その時、僕のメニューを見て、テイオナさんはうげえって顔をしたら。

本当は僕だってパンとか食べたいけど、まだ、食べれる気がしなかった。

だから、もう少し、このまままだ。



「ほお〜」

「ハハハ！なんや、その反応！」

そして、朝食の時間が終わって、僕は、リヴェリアさんにリヴェリアさんの部屋に連れてきて貰った。

リヴェリアさんの部屋は、木造の品が多かった。

天井は異なるものの、ベットの側や書類と思わしき羊皮紙の束が置かれた机には花々や木の実を象ったライトがあった。

白銀の長杖が立てかけられた棚の隣には、清楚な花をさした花瓶に、大きめの透明瓶の中で育てられている若葉と樹木。

他の棚にも沢山の試験管みたいなモノと、綺麗な宝石が整然と並べられていた。

書物や本棚も多い。

「あまり人の部屋をジロジロ見るものじゃない」

「！」

「ほら、ここに立って確認してみろ。今、自分がどんな姿かを」

「うん」

ついついリヴェリアさんの部屋を見渡していると、リヴェリアさんから注意を受けた僕は、リヴェリアさんの部屋の中にある鏡の前で服を脱いで下着姿になった。

「本当に耳と尻尾が生えてる」

「それが四葉さんの『獣化魔法』の効果の一つやな。ほんま、可愛えわ〜！何やったら毎日その姿になって貰おうかな〜」

「ふざけるな！一日中の使用などと言う無茶をさせているのだぞ！

それを毎日だと！」

白い耳にふわふわの尻尾をくっ付けた僕の姿にロキ様はニコニコ笑いながら言った。

それに、リヴェリアさんは怒った。

「そんな、怒らんでもええやん？ママあゝ」

「誰がママだ！もう良い！お前は出ていけ！」

「ええゝ」

「さつきと出ろ！摘まみ出されたいか！」

「ああゝもう、わかったって。ほなな、四葉たん」

そして、リヴェリアさんはロキ様を部屋から追い出した。

「お前も服を着ろ」

「うん」

「そこに座れ」

「うん」

僕は、言われた通り服を着なおして、リヴェリアさんに言われた通り、椅子に座った。

「!?」

「今日からお前の基礎知識を養う」

途端、目の前の机に、どんっつ！と何冊もの分厚い本が音を立てて置かれた。

「早い話、勉強だ」

「勉強、強？」

「ああ。迷宮の知識は勿論、〃スキル〃や〃魔法〃、冒険者としての

心構えを説いていく」

「はい！」

その本達をどう使うかを説明するリヴェリアさんに僕は、挙手する。

「・・・なんだ」

「出来たら、物の計算の仕方も教えて欲しいです」
「!？」

一瞬、怪訝そうな顔をしたリヴェリアさんだったが、そうお願いすると、別の意味で驚いていた。

「わかった。教えてやろう」

「本当！」

「ああ。ただし、お前が頼んだんだ。途中で投げ出したりするなよ」
「はい！」

こうして、今日のこの時間から、この世界の冒険者としての心構えを教わる傍ら、この世界の字を始めとした普通の勉強もリヴェリアさんから教わることになった。



「グへへへ」

「・・・」

そして、お昼後、僕は、部屋で普通の服に着替えてから、リヴェリアさんの部屋で勉強の続きをしているんだけど、その後ろでは、ロキ様が僕の尻尾で遊んでいる。

「……大木の心……大木の心……」
「……」

僕は、リヴェリアさんに教わったばかりのその言葉を唱えながら、
どうにか平静を保とうとした。

「ふんっ!!」

「いぎやあーっ!」

するとリヴェリアさんの拳骨がロキ様の脳天に炸裂した。

「邪魔をするなど言っただろ!」

「せやかて、四葉たん以外の獣人の子等、うちにモフモフさせてくれ
へんやんか!」

「当たり前だ!馬鹿者!」

確かに当たり前だと思う。

何て言うか、尻尾とか触られるの今まで感じたことの無い変な感覚
がするんだ。

おまけにロキ様の触り方が更にその感覚を倍増させて来るから、余
計に嫌なんだと思う。

「ところで、なんで、読み聞かせしてるん?」

「この子は、字が読めんのだろ?」

で、僕の勉強方法は、本をリヴェリアさんが読んで、それを僕は、そ
れを頭に叩き込んで行くって感じの方法だった。

最初は、簡単な、絵が沢山描かれた、子供向けのこのオラリオの歴
史に纏わる、絵本からだった。

内容はこんな感じ。

遙か昔、この世界には沢山のモンスターを産む“穴”があった。

そこから、出て来たモンスター達のせいで、沢山の人が酷い目にあつて来た。

その中で、同胞のモンスターに復讐しようと立ち上がった人達がい

た。

その人達は、種族の垣根を越えて協力し合い、反撃に出た。

後に、“英雄”と呼ばれる人達。

その人達は、モンスター達と一進一退の攻防を繰り返しながら、やがて、モンスターが産み出る“穴”のもとへ到達した。

その“穴”の奥には、地上とは違う数多くの階層に分かれる“地下迷宮”が広がっていた。

日の光がなくても光に満たされていて、見たこともない草花も、鉱物も、沢山の貴重な資源がそこに存在した。

そして、人々は、その“穴”の上に“蓋”という名目で塔と要塞を築きながら、地上に進出しようとするモンスターを防ごうと有志を募る一方で、“穴”の向こう側の未開の地を切り開かんとする者達も現れ、自然と街が出来ていったと言う話。

それが、この迷宮都市オラリオの始まりらしい。

「・・・ねえ、リヴェリアさん」

「ん？どうした？」

「神様って本当にいるの？」

「えっ？」

その話を思い返す中、僕の中で一つの疑問が生まれた。

それは、“神々の降臨”の話。

僕は、その事についてここで始めてリヴェリアさんに聞いた。

「何、言うてんの？四葉たん」

「えっ？」

「目の前におるやん！」

けど、その疑問に答えてくれたのは、リヴェリアさんじゃなくて、ロキ様で、ロキ様は自分自身を指さして言った。

「本当に?？」

「一応、本当の事だ。四葉」

「!？」

その意味がわからなくて、小首を傾げるけど、リヴェリアさんまでもが、ロキ様がその「神々」の一人だと言う。

「ロ、ロキ様が、神様? 本当に?」

「ホンマや。て言うか、なんやねん、その反応と一応って」

本当にビツクリした。

正直、半信半疑だ。

今まで、僕は、神様なんていないと思っていたから、それがいきなり、目の前にいるって言われたら、ビツクリしても、半信半疑になっても仕方がないと思う。

「ん? 四葉たん、何、しとるん?」

「・・・」

僕は、ロキ様の手の指をギュツと握った。

その存在を確かめる為に、二、三回、その指を握っては離し、握っては離しを繰り返した。

「・・・めっちゃ、真剣な顔、しとるけど・・・なにがしたいん?」

「・・・」

そんなことをいきなりされたロキ様は、当然、僕のその行動に、不思議そうな顔をしていたけど、している僕自身も、不思議な気持ちに

なっていた。

だって、指から伝わって来る体温とかが、あまりにも人間と変わら
ないから、余計に、わからなくなった。

この人が、本当に神様なのかって

「!？」

「その気持ちはわからんではないがな。始めるぞ？」

「う、うん」

「なんやねんな」

「もう少し、神らしくしろって事だ。ロキ」

「ええ??」

そんな僕の頭に手を置いたリヴェリアさん。

そこで、ロキ様の指から手を離して、まだ、混乱は覚めないままだ
けど、気持ちを切り替えて、始まったリヴェリアさんの読み聞かせに
意識を集中させた。

第8話・知識は丸暗記

「!」

「誰だ?」

「僕だよ? リヴェリア」

それから二日。

僕の今日は朝からアイズさんの鍛錬を見て、数回だけ木刀を振つてもみた。

木刀は少し重くて、僕にはまだ数回だけしか触れなかった。

食べるご飯も少しだけ、固形が混じるようになっていた。

そんな日のお昼前、リヴェリアさんに勉強を見てもらっているとりヴェリアさんの部屋の扉をフィンさんがノックした。

「なんだ?」

「どんな感じかなと見に来たんだ。それに、そろそろお昼だしね?」

「もう、そんな時間か」

どうやらフィンさんはお昼を知らせに来たのと、僕の様子を見に来たらしい。

「フィンさん、見て」

「ん?」

だから、僕は、今やっていたモノをフィンさんに見せに行った。ちなみに、算数です。

「楽しそうだね? 四葉」

「うん! 楽しい!」

「そうか。良かったじゃないか、リヴェリア」

「・・・何がだ」

そんな僕の楽しそうな様子から、フィンさんは少し悪戯な笑みを浮かべてリヴェリアさんに言う。

「四葉。一時、中断だ。昼食を取りに行くぞ」

「はい」

リヴェリアさんは、ただ一言だけフィンさんに言うと、僕に視線を移して、勉強の中断を告げた。

「あれ？僕を置いて行くきかい？リヴェリア」

「うるさい」

結構な小走りで食堂へと向かうリヴェリアさん。

それに必死についていく僕と余裕についていくフィンさん。まったくもって意味がわからない。



「ぜえ、ぜえ、ぜえ」

「大丈夫か？四葉たん」

そんなことをして食堂に着いた頃には息も絶え絶えだった。

「まあ、じゃあないわな。レベル六の二人の足に着いてきたんやもんな」

「すまない、四葉」

「ごめんね？四葉」

その姿にロキ様は僕の背を撫でてくれて、リヴェリアさんとフィンさんは申し訳なさそうに僕に謝ってくれた。

「で、四葉たん、どうや？リヴェリアとの勉強は」

「すごく、楽しかったよ？」

そこでも、リヴェリアさんとの勉強の感想をロキ様に聞かれた。

「それは、ホンマか？」

「うん」

「良かったなく、リヴェリア。アイズたん時みたいに逃げられそうに無いみたいで」

「??アイズさん??」

「せやで？アイズたんも四葉たんと同じ年の時に、リヴェリアたんがアイズたん勉強を教えとったんや。けどな？アイズたんは二日目逃げよったんや」

その話の流れで、昔のアイズさんとリヴェリアさんの話になった。

「アイズさん、逃げちゃったの？あんなに楽しいのに？」

「四葉たんは楽しかったかも知れんけど、アイズたんは違ったんや、元々、勉強嫌いやったみたいやしな？リヴェリアは生真面目やし、結構なスパルタやったからなく」

「そうなんだ。もしかして、フィンさんが良かったねって言った理由だって事もわかった」

「うん、そうだよ？」

それがフィンさんがリヴェリアさんに「良かったね」って言った理由だって事もわかった。

「それで、何処まで覚えてんだい？」

「オラリオの歴史とダンジョンの基礎知識、ダンジョンの十二階層までなら、特徴と出現するモンスターの特徴は全部、覚えてたよ？」

「本当かい？」

「うん！その証拠として、まずダンジョンから：：地上から一層までが、始まりの道。一層から十二層までを上層。十三層から二十四層を、中層。二十五層から、下層。五十一層からを深層と呼ぶ。出現するモンスターは、一層から五層までが、ゴブリン、コボルト、ダンジョン・リザード、フロッグ・シューター。六層から、ウォーシャドウ。七層から、キラアアント、ニードルラビット、パープル・モス、たまに、ブルー・パピリオ。十層から、オーク、インプ、バッドバット。十一層から、ハードアマード、シルバーバック、インファントドラゴン」

「次は、モンスターの特徴だ」

「はい！ゴブリンは、緑色の小太りの体のモンスター、たまに、ゴブリンの牙をドロップする。コボルトは、鋭い牙と爪を持った犬頭のモンスター。たまに、コボルトの爪がドロップする。ダンジョン・リザードは、大きいヤモリ。フロッグ・シューターは、大きい蛙。ウォーシャドウは、新米殺しと呼ばれて、背丈が一六〇センチの影みたいな奴。たまに、ウォーシャドウの指刃をドロップする。キラアアントは、硬い甲殻に覆われた昆虫型のモンスター。ピンチになると仲間を呼ぶ。ニードルラビットは、角の生えたうさぎ。パープル・モスは毒の鱗粉をまき散らす。たまに、パープル・モスの翅をドロップする。ブルー・パピリオは、希少種で、ブルー・パピリオの翅をドロップする事がある。オークは、二足歩行の豚。インプは、集団で行動して、知恵があるから、小賢しい。バッドバットは、コウモリみたいなモンスター。ハードアマードはアルマジロみたいなモンスター。シルバーバックは白い大猿。インファントドラゴンは、希少種で、上層のボス。後、十層から、霧が発生するため、方向感覚や敵の察知が遅れてしまうので、要注意」

「・・・」

そして、僕は、リヴェリアさんが教えてくれた、と言うか丸暗記した事をフィンさん達に口に出して教えた。

それにビツクリした顔をするフィンさん。

「教えてもらって思うんだけど、あつちとこつちのモンスターに名前と特徴的には変わりないんだね？」

「そうなのかい？」

「うん！」

「うーん」

僕は、そんなフィンさんにリヴェリアさんに教えて貰った事の感想を言った。

すると、フィンさんは考え事をし始めた。

「四葉、ダンジョンに行ってみるか？」

「良いの！」

「なっ!?フィン!？」

そして、フィンさんが言った。

僕は、飛び上がりたいくらい嬉しかったけど、リヴェリアさんは反対なようで、フィンさんの名前を怒りを込めて呼んだ。

「フィン！貴様、何を馬鹿なことを言っている！四葉はまだ！」

「大丈夫さ。四葉は僕等に着いて来れるだけの体力はある。それに寝ている時はずもかく、この二日間、魔法を継続しても精神疲弊（マインドダウン）を起こしていない。それだけ出来れば、十分だと思うよ？僕は」

「……」

「そこまで深くは潜らないし、僕も行く。それでも不安なら、君も来ると良い」

「……わかった」

フィンさんは色々理由をつけて、リヴェリアさんから僕のダン

ジョンに行く許可を取ってくれた。

「だが、武器や防具はどうする?」

「武器は倉庫にある使わなくなったヤツ持ってたらええんとちやうか? 一つくらい四葉さんに合うヤツあるやろ」

「そうだね。防具は、昔、アイズが使ってたヤツがあっただろう? 多少大きいだろうけど」

そして、ロキ様も僕がダンジョンに行くのはOKみたいで昼食後の予定が僕の初ダンジョンと決まった。



「これと投げナイフ持っていていい?」

「うん、良いよ?」

食後、僕は、まず武器を選びに行った。

倉庫には思いの外、沢山の武器が置いてあった。

その中の武器を色々と触ってみた結果、僕は、馴染んだ短剣と投げナイフを選んだ。

「なるほど、それが君のスタイルなんだね?」

「と言うか、僕に扱える短剣しか無かっただけ。向こうには僕みたいな小さい体の人はいなかったから、そういう人達専用の武器なんて無かったから」

「なら、ここで色んな武器を試してみたら良いんじゃないかな?」

「そういうのは、今度にする」

「そうなのかい?」

「うん! 今回は僕も、ここでどれだけ戦えるか知っておきたいんだ。だから、慣れた戦闘スタイルで行く」

「わかったよ」

選んだ理由は、今回はここでの初戦だ。

おまけに、魔法を使つてなんとかなつていても、不自由さを感じる体だ、なら、慣れないモノより慣れたモノの方が良いと思った。

色んな武器を試すのは、次の楽しみとして取っておこうと思う。



「・・・」

「やはり、大きいな」

武器を選んだ後は、昔のアイズさんが使っていたと言う防具に着替えた。

「少し触るぞ」

「うん」

やっぱり、大きくて、リヴェリアさんは防具の色んな箇所を触って、出来るだけ僕の体に合わせていってくれた。

第9話・初ダンジョン

「おい、あれ、【勇者（ブレイバー）】だ」

「それに、【九魔姫（ナイン・ヘル）】も一緒だぞ」

「じゃあ、あの二人と一緒にいる小さい犬人はロキファミリアの新しいか？」

そして、準備が整い、リヴェリアさん達とダンジョンに行くとき昨日とかもそうだったけど、街中でもダンジョン入り口付近でも色んな人にヒソヒソ話をされた。

「勇者（ブレイバー）とか、九魔姫（ナイン・ヘル）とかって、フィクションさんやリヴェリアさんの二つ名？」

「うん、まあね？」

「なんかちよつと羨ましいかも」

「羨ましい？何故だ？」

「二人とも、格好いい感じの二つ名なんかもん」

その中で、何度も何度も、二人は名前ではなく、別の名で呼ばれていた。

若干、羨ましさを感じた。

「・・・格好いいか？」

「少なくとも、僕の二つ名より良いと思うよ？」

「どんな二つ名なんだい？」

「仔犬って書いて、パピーって読む。今の僕の姿を向こうの人達が見たら、絶対に爆笑されるよ」

「・・・ぷっ」

で、僕のインククラウドでの二つ名を二人に言ったら、思い切り吹き出された。

「ハハハ!!それは、確かに洒落になつてないね!」

「なんなら、ロキに言つて、こちらでもその二つ名を付けてもらうか?」

そして、クスクスと笑いながら、冗談じゃないことを言い出す二人。

「そんなの、冗談じゃないよ!と言うか、なんでロキ様が出てくるの?」

「冒険者の二つ名は、最初のランクアップ後、三ヶ月に一度開かれる、神会でロキ達が決めるんだよ」

「・・・」

おまけに、その二つ名を付けるのは、ロキ様達、神様で、これは、余計に言われたらまずいと思つた。

「ロキ様には言わないで。本気で付けられそうな気がするから!」

「グウウ・・・」

「お出ましのようだよ?」

「・・・あれが、このゴブリン」

そんな話をしながらダンジョン内を歩いていると、短い手足に小太りした緑色の体。

つまり、ゴブリンに出くわした。

「うん。おしゃべりは、ここままでだね?とりあえず、僕等は、手を出さない。君のやり方でやってみるといい」

「わかった」

「グウウ・・・」

歯を剥き出しにして、こちらを威嚇するゴブリンの姿を見つつ、短

剣を抜いて、一歩、また、一歩とゴブリンの方に近づく。

「グルルアア!!」

「・・・」

すると、そのゴブリンは僕に向かって一直線に突進してきた。

「・・・」

「ゴブリヤアッ!」

爪と牙で僕に攻撃を仕掛けてくるゴブリンを、僕は、避けて、そのまま、ゴブリンの背中を切った。

「・・・」

「グウウ・・・」

その初撃は思いの外、浅く入ってしまったらしく、ゴブリンはギリギリという音を立ててこちらを振り向く。

「ゴブリヤアッ!?!」

「・・・」

ドスッ

「!?!」

そして、もう一度飛び掛かって来た瞬間、その口の中目掛けて投げナイフを投げた。

そのナイフが音を立てて突き刺さると、次の瞬間にはゴブリンは灰へと変わった。

「初戦、おめでとう」

「・・・」

それが終わるとフィンさんが拍手をして、僕に近寄ってくる。それも少し残念そうな感じで。

「すごいよ、四葉。良い戦いぶりだったよ」

「言っておくけど、こんなただの調整だよ」

「えっ?」

「ここでの体の動かし方は、今ので大体わかった。次に行こう」

「・・・うん、わかった。次に行こう」

「うん」

こんな調整のための勝利で、僕の何かを計られちゃ困る。ここからが、僕の本当の初戦の始まりなんだから。



「」「グルルツ」「」

「・・・今度は、五体の群れか。どうする?手伝うかい?」

「良い。一瞬で終わる」

次に出くわした五体のゴブリンの群れ。

僕は、足に力を込めると一気に距離を積めて、五体のゴブリンをあっという間に切り払った。

コロソツ

「・・・コレが、このドロップ品」

残るのは、モンスターの灰とドロップ品と思われる牙と宝石みたいなモノが五個づつ。

「・・・なるほど、確かに、あれで判断しちゃダメだったね」

「・・・ああ」

「ねえ？もっと進んで良い？」

「ん？ああ、良いよ？」

それ等を拾い、僕は、啞然としているフィンさん達を振り返って言った。

向こうより、多少、こっちのゴブリンの方が強くて生々しいって思ったけど、これなら、まだまだ行けると思った。

◆◆◆◆◆

「ギイイイイ」

ブオンツ

「・・・」

その後、僕は、ゴブリンやコボルト等を中心に戦いながら、〃七回〃階段を下りた。

階段を発見できたのは、誰かの階段を上下に歩く音がハッキリ聞き分けることができたから。上に、僕等が来た方向じゃないかで、難はなかった。

きつとコレも継続中の魔法のお陰だ。

「・・・まさか、一気に七階層まで来るとはな」

「・・・おまけに、〃新米殺し〃のウォーシャドウとキラアートをここまであつさり倒しちゃったね・・・」

「そりゃ、僕は、向こうで経験済みだもん。だから、見れば何処が弱点かすぐにわかる」

「・・・一度、君が戦ったことのあるモンスターの事は聞かないかね・・・」

「良いよ？何時でも話すよ」

そう言いながら、僕は、倒したばかりのキラーアントから魔石を取る。

こういった作業は実に面倒くさい。

向こうでは、勝手にストレージに入ってくれるし。

そして、モンスターの感想は、やっぱり、こっちの方が強いって事くらいだ。

“新米殺し”と呼ばれるウォーシャドウは確かにあの鋭利な爪で殺られたらひとたまりもないだろうとは思ってたけど、僕にはそこまですぐ“早い”と思える早さじゃなかった。

キラーアントも、確かに甲殻は硬いけど、アインクラッド第四層のフィールドボスの巨大亀や巨大ガニよりは、全然硬くない硬さだったし、その経験から、何処を狙えば良いか、すぐに判別出来た。

チャキツ

「・・・」

ただど一つだけ、絶対に慣れないなって慣れたくないなって思うものがあつた。

「どうかしたかい？ 四葉」

「・・・ううん、何でもないよ」

それは、生々しさだ。

モンスターを倒すにしろ、魔石を取るにしろ、剣から伝わって来る生きているものを斬る感触が気持ち悪くて仕方がなかった。

使った短剣から着いたモンスターの血を払い落とし、僕は、それを鞘に納めた。

「結構、貯まったね。魔石もドロップアイテムも」

「そうだな」

フィンさんは僕に声をかけた後、手に持っているパンパンになった袋を揺らしてジャラジャラと鳴らす。

その中身は僕が倒したモンスター達のモノだ。

「やっぱり、欲しい」

「ん？何が欲しいんだい？」

「メニューウインドウ。それがあると、荷物はその中に入れられるから、手荷物は武器と腰のポーチ位で済むんだ」

それを見て、なお、欲しいと思った。

今は、フィンさんが持つていてくれているけど、今後は、僕が持たなきゃならないモノだろう。

そう考えると、動きがかなり制限されるだろうし、と言うか、まともにも動くことも出来なさそうだなと思った。

「そんな便利なモノを使っていたのか」

「うん」

「まあ、無いものねだりをしてもし方がないさ。さあ、今日はこの辺りで帰ろうか？」

「とりあえず、今日はこの辺で帰ろうか？」

「はい」

本当に、フィンさんのいう通り、無いものねだりだ。

そして、僕等はここでダンジョン探索を終わらせて、ホームに帰ることになった。

ちなみにだけど、さりげなく僕は、モンスターとの戦闘中、ソードスキルも何度か試してみた。

けど、使えなかった。

それは仕方がないと思う。

ここは、アインクラッドじゃないし。

ただ、スキルの効果なのか、剣を振る時、モンスターに接近する時、

妙に手足に力が入るといふか、神経に電流が走って
なんか必要以上に体力を使った気がする。



ザワザワ

「【勇者（ブレイバー）】と【九魔姫（ナイン・ヘル）】だ」

「さあ、四葉」

「はい。換金、お願いします」

ダンジョンを出て、換金のために昨日も来たギルドにやって来た。

「あの、リヴェリア様？」

「ん？どうした？エイナ」

「その、その子は、四葉ちゃん以外の新人の子ですか？」

そこに、エイナさんが僕等の方に来て、言いくそうにリヴェリア
さんに聞いた。

そう言えばと思う。

「僕が、四葉だよ？エイナさん」

「えっ？よ、四葉ちゃん？なの？」

「うん」

「ああ。四葉だ」

「……ええええええええええええええええ!!!」

ビクッ

「!？」

そう言えばと思って、僕は、エイナさんに名乗った。

すると、数秒間が空いた後、エイナさんの叫び声がギルドいっぱい
に響いた。

いきなり、叫ばれて僕は、慌てて耳を押さえた。
なんせ、普段と違って、倍以上の音量でその叫び声が、聞こえたからだ。

「うるさいぞ！ チュール！」

「!? す、すみません！」

その叫び声を聞いて、窓口奥から、太つちよのエルフ耳の人の注意がエイナさんに飛んで、エイナさんはその人に向かって、慌てて、頭を下げた。

「……でも、四葉ちゃん、ヒューマンじゃなかったんですか？」

「いや、ヒューマンだ。これは、この子の魔法だ」

「えっ？ そうなんですか？ ……ですが、あの、大丈夫なんですか？
いろいろと」

そして、エイナさんはその注意した人を気にしつつ、リヴェリアさんに聞いた。

エイナさんが言ういろいろと言うのが、精神疲弊の事と、本来なら、スキルや魔法は秘匿が常識だからだろう。

「ああ。大丈夫だ。そのために我々がいる」

「……そうですか。それで、何階層まで行っただの？」

「七階層まで行ってきたよ？」

「……」

リヴェリアさんは不安げなエイナさんに言う。

そのリヴェリアさんの言葉に気持ちを切り替えたらしいエイナさんは、僕に行った階層を聞いた。

だから、僕は、答えたんだ。

なのに、エイナさんは固まった。

「はあくあつ!？」

「!？」

「ななあかあいそあくあつ!？」

「・・・」

その数秒後、エイナさんは、さっきの叫び声とは違う意味で叫んだ。まずいと思つて、僕は、その場から逃げ出そうとした。

「コラー！待ちなさい！」

ガシッ

「!？」

が、エイナさんは僕をすんなりと捕獲。

第10話・天敵

「逃げようたって、そうはいかないわよ！四葉ちゃん！」
「ひいつ!?!」

「良い!!いくら、お二人が一緒だからって、冒険者になりたての貴女が!!いきなり、下りて良い、階層じゃないの!!」

「・・・っ」

「四葉ちゃん。ダンジョンは何が起こるかわからないの。ソロでダンジョンに潜るのも、不用意に下層に行くのもダメ！冒険者は冒険しちやいけないのよ！わかった」

「・・・っっ」

ガツシリと捕まれた両腕。

僕の目線に合わせてしゃがんだエイナさんは、僕の目を見て、言い聞かせるように怒った。

エイナさんの声がアスナと似ているおかげで、なんだか、アスナに叱られてる錯覚が起きた。

「・・・ごっつ、ごめっ・・・ごめん・・・なさっ・・・あああああ
!!ああああ!!」

「えっ?・・・なっ!?!」

無茶をして、僕とキリトさんを叱りつける時みたいなそんな感覚。
何だか自分でもよくわからないけど、僕は、大きな声を上げて泣いた。

「何だ?何だ?」

「ああああ!!」

「ありやりや、泣いちゃったよあの子」

「エイナちゃん、怒ると怖えもんな」

当然、僕は、注目を浴びた。

「ちよっ！よ、四葉ちゃん、な、泣かないでよぉ」

「・・・エイナ」

「わああ!?!ご、ごめんなさい!?!四葉ちゃん、ごめん、私、強く言いすぎちゃったね? ああ、どうしよう。ごめん、四葉ちゃん、泣かないで」

そして、突然、僕が泣き出すものだから、目の前のエイナさんは、僕を泣かしてしまう形になってしまったことで咎めるように名を呼ぶリヴェリアさんと僕の間でオロオロと焦り出した。

「四葉、ほら、泣き止め。エイナはお前を心配して、叱ってくれただけだ。だから、泣くことは無いんだ」

「・・・」

「そうだよ? 四葉。四葉もちゃんと、わかってるよね?」

「うんっ」

そんなエイナさんの代わりにリヴェリアさんとフィンさんが僕に泣き止むように説得にかかる。

僕だって、わかってる。

わかっているけど、涙が止まってくれなかった。

「・・・ダメか」

「すまないな。エイナ」

「い、いいえ、そんな、私が、強く言い過ぎたのがいけないんですから」

「いや、君は何も悪くないさ。それは、僕等もこの子も十分わかっているから、気にやまないでくれ?」

「は、は」

「ほら、行くぞ? 四葉、ここで泣いては迷惑だ」

「は、いつ」

僕が泣いている間にも換金は終わり、そのお金が入った袋をリヴェリアさんが受けとると、フィンさんと一緒にエイナさんに謝って、僕の手を引いてギルドを後にした。



「・・・ごめんなさい」

「謝る相手は、我々ではないだろ？ 四葉」

「・・・うん。今度、エイナさんにもちやんと謝る」

「ああ、そうしろ」

ギルドを出て少し歩いているとあれだけ止めようとしても止められなかった涙が止まってくれた。

「それにしても、何で急に、あんなに泣いちゃったんだい？」

「・・・エイナさんに怒られたら、アスナに怒られた気分になっちゃった。アスナとエイナさん、声一緒だから。」

「前も言っていたな。そんなに似ているのか？」

「うん、一緒」

「そうかい。まあ、四葉の事情もわかったけど、あまり、泣いちゃうと彼女が可哀想だからね？」

「うん、わかった」

そこで、僕が泣いてしまった理由を話すとリヴェリアさん達は納得はしてくれた。

してくれた上でフィンさんは僕にそう注意をした。

確かに、それはそうだって思う。

「リヴェリアさん、エイナさんの好きなものってわかる？」

「ん？エイナの好きなものか？」

「うん。エイナさんの好きなものプレゼントして謝る」

「わかった。後で教えてやる」

「うん!!」

だから、ただ謝るだけじゃなく、何かエイナさんにプレゼントをして謝ろうと思った。



コンコン

「ロキ、今、帰ったよ」

「おお〜！帰ったか」

その後、ホームに帰りつくとその足でロキ様の部屋の前までやって来た。

ロキ様の部屋は、なんと、このお城を構成する塔の一番真ん中の塔の最上階にあった。

おまけに部屋の扉まで螺旋階段が備え付けられていた。

ガチャ

「!？」

「おかえり！四葉た・・・えっ？」

フィンさんが僕等を代表して帰って来た事を扉をノックして伝えるとき、中にいたロキ様が扉を開けてくれた。

のは、良かったんだけど・・・

ゴロゴロゴロツ

ドオオン!!

フツ

「・・・」

「四葉たん！」

「四葉!!」

僕は、その螺旋階段から転げ落ちた、そのまま僕は意識を失い、その結果、今まで使っていた魔法が自然解けた。

慌てて螺旋階段を駆け下りるロキ様達。

「だ、大丈夫か!? 四葉たん!!」

「ロキ、動かすな！」

リヴェリアさんは、僕の体を揺するロキ様を止めて、ロキ様とフィンさんが見守る中、僕を診た。

「・・・どうだい? リヴェリア」

「精神疲弊（マインドダウン）だろう。落ちたせいで、擦り傷はあるみたいだが、他は大丈夫だ」

「・・・そうか。なんか、急に来たね? 精神疲弊（マインドダウン）」

そのタイミングと擦り傷以外の外傷の無い僕を見て、リヴェリアさん達は、魔法の使いすぎが原因で精神疲弊（マインドダウン）を起こして、気絶したんだと判断した。

「リヴェリア、後は頼めるかい？」

「ああ」

「流石、ママやな」

「誰がママだ」

なので、ロキ様とフィンさんはリヴェリアさんに僕を任せることにした。

そして、例の如くロキ様の ママ呼ばわりに、反論の言葉を言いつ

つ、リヴェリアさんは僕を抱えて、その場を後にした。

けど、もし、ここで僕が意識を飛ばすこのなく、ただ、転げ落ちただけなら、言えたと思う。

「精神疲弊（マインドダウン）じゃない」ってハッキリと。

何故なら、原因は、「お酒の匂い」だったから。

ロキ様が扉を開けた瞬間、お酒の匂いがダイレクトに、そして、数十倍に倍増されて僕の鼻を通過した。

そしたら、僕の脳、思考は、いきなり、シャットダウンしたのだ。

そりや、昨日とかの歓迎会とか、ロキ様から匂って来るお酒の匂いとかで普段からもそれなりの量を飲む人なんだろうなくとは思ってはいた。

それがまさか、だ。

誰も、もちろん、僕自身もこんなことになるなんて、予想だにできなかった。

お酒の匂い一つでこんなことになるとは……。

そりや、飲んだって酔わないと言われたアインクラッドのお酒でも酔ってしまう僕だ。

恐るべし、「酒」。

まさか、ダンジョンにはなく、こんなところに強敵が、天敵が潜んでるなんて思いもしなかったよ。



「……んっ」

「気が付いたか？ 四葉」

「……リヴェリア……さん？……ここ、僕の部屋？」

その後、僕は、どのくらい時間が経っていたかはわからないけど、ふと意識を取り戻した。

「ああ。まったく、精神疲弊（マインドダウン）を起こす前に、辛く

なつたら言えと言つておいただろ？何故、言わなかつた？」

「・・・それは、違う」

「違う？」

「・・・僕、とことんまでに、お酒に弱いみたい」

「はあ??」

「獣化魔法のせいもあると思うんだけど、ロキ様の部屋の強烈なお酒の臭いが鼻から脳天に来たのにビックリして、意識を吹っ飛ばしちゃった」

その傍には、リヴェリアさんがいて、その事を、僕がこうなつてる理由を話した。

「・・・そうか、わかつた。四葉」

「ん?」

「夕食の時間はとうに過ぎてているが、何か、食べるか?」

「ううん、良い。このまま、寝る。食べる気しないし」

「そうか・・・では、一つ、助言だ」

「・・・何?」

「今後、酒の纏わる場所、ロキの部屋も含めて、獣化魔法は使うな」

「・・・うん。わかつた」

「良い子だ。それじゃ、私も失礼するぞ」

「うん。ありがとう、リヴェリアさん」

「構わんさ」

そして、それを聞いたリヴェリアさんは僕に、助言を一つ残して、この部屋を出て行った。

もちろん、そのつもりだった。

もう二度とあんな強烈な匂いなんて嗅ぎたくないし、ただでさえ、迷惑をかけてるのに、これ以上は、迷惑をかけたくなかつたからね。

僕は、リヴェリアさんが部屋を出て行って扉が完全に閉まるのを見届けてから、再び、ベットに潜り込んで、目を瞑った。

こうして、僕のその世界での初陣、初ダンジョン探索は幕を閉じた。

第11話・朝の攻防戦

「・・・」

翌朝、昨夜、タツプリと寝たこともあつて、夜明け前に僕は、目を覚ました。

「よし」

体を起こして、目に入った短剣を見て、着替えを済ませ、髪も整えると短剣を手に部屋を出た。
もちろん、魔法を使つて

◆◆◆

ヒュンツ

ヒュンツ

ヒュンツ

「・・・」

そして、庭に出るとアイズさんがすでに鍛錬を始めていた。

ヒュンツ

ヒュンツ

ヒュンツ

「・・・」

何時ものように、日は昇つてなくて、暗いけど、彼女、アイズさんの金の髪は栄えた。

彼女は、剣を縦、横、斜めと振つて、風を切る音を響かせていた。それは、まるで、剣が指揮棒でアイズさんが指揮者みたいな感じで、

すごく綺麗な剣さばきだと思った。

ピタッ

「・・・」

「??」

しばらく、アイズさんのそれを見ていたら、唐突に、ピタリと止まった。

「・・・?」

「・・・」

そして、アイズさんは、僕の方を振り向くと、ばっちり、僕と視線を合わせた。

「お、おはよう、アイズさん」

「おはよう。今日も、朝、早いね? 四葉」

「アイズさんこそ」

とりあえず、挨拶をした。

「四葉も鍛錬?」

「えっ?・・・う、うん」

そして、アイズさんは、僕の手元、短剣を見て言った。

一瞬、何を言っているのか理解できなかった僕は、慌てて頷く。

だって、一瞬だけ忘れていたんだ、僕が短剣を手にして庭に出てきた理由を

「僕も使って良い?」

「うん。良いよ? 一緒やろ?」

「うん！」

とりあえず、気を取り直して、アイズさんから許可を貰った事だし、まずは準備運動をして短剣を鞘からぬいた。

「すうく・・・」

ヒュンツ

ヒュンツ

ヒュンツ

そして、深呼吸をして、さつき、アイズさんがやってたみたいに、縦、横、斜めと剣を振った。

まるで、剣の重さと扱い方を体に馴染ませるように。

「よし」

一つ、気合いを入れ、剣を構えて、ソードスキルが出来なくとも、体に染み込んでいて、今の僕でも再現出来そうなモノを試してみることにした。

まずは、「ラピッド・バイト」から。

これは、姿勢を低くして、低空から敵に一瞬で近づき、突く技だ。

コレは、比較的、簡単に再現は出来ると考えて、やってみる。

その同じ理由で「クロス・エッジ」、「トライ・ピアース」、「ラピット・エッジ」とかの動きを真似て動いてみた。

「ふうく・・・？」

「・・・」

そして、それらを試し終えて、息を整えているとこちらを見ている視線を感じた。

見てみると、アイズさんが僕を少し驚いた顔で見ている。

「・・・四葉、その剣技は、何処で？誰に教わったの？」

「えっ？・・・えっと、世界？」

「えっ？世界??」

キョトンとするアイズさん。

それは、そうだろう。

けど、嘘じゃない。

僕のコレは、アインクラッド製なんだから。

「四葉、一つ、お願いがあるの」

「??僕にお願い？何？」

「これから、私と手合わせして？」

「・・・わかった。しよう」

「ありがとう。ちよつと、待ってて」

そして、アイズさんは、僕と手合わせをしようと持ちかけてくれ、僕は、すこし考えて、それを受託。

アイズさんは、僕が受諾したのを見て、何処かに走って行き、それを見送ると僕は、短剣を鞘に収め、アイズさんが帰ってくるのを待った。

「お待ちせ」

「うん」

戻って来たアイズさんの手の中には、模擬戦用なのか金属製だけど刃の潰れた二振りの剣。

一つは、片手剣で、もう一つが、短剣だった。

「はい」

「ありがとう。あの」

「ん？」

「もしかしたら、お腹とか殴っちゃうかもしれないけど、良い？」

「うん、良いよ？」

「わかった」

短剣の方を受取り、真剣の方の短剣を邪魔にならないような所に、アイズさんの剣と並べて置いて、僕等は一定の距離を取って、構えをとった。

「・・・いくよ」

「うん！」

そして、その合図を期に、僕等の攻防が始まった。

ビュン

「!？」

「!？」（交わされた！）」

最初の初撃は、なんとかギリギリで交わすことが出来た。

タンタン

「・・・」

タン

「!？」

カァン!!

「!？」

ダッ

「!？」

カンカン

一旦、交わした勢いのまま、バク転して距離を取り、駆けて、アイズさんの側面から斬りかかった。

それは、弾かれるけど、体勢を整えて、次の手に移った。

それが交わされ、真上に体ごと跳ね上げさせられると、落下の速度に乗って、体を地面に向かって回転させながら、アイズさんに斬りかかったりもした。



ドッ

「!？」

「あっ」

ドカッ

「!？」

ドサッ

そして、そのある意味鍛錬を通り越して、本気の攻防を繰り広げていた、僕とアイズさんは、アイズさんが僕を蹴り飛ばされて、塔の壁に背中をぶち当てた所で終わった。

「ゲホッ・・・ゲホッ!!ゲホゲホッ!!」

「ご、ごめんなさい、四葉」

壁に打ち付けた背中も、蹴られたお腹も、あまりにも痛くて、立ち上がりたいのに立ち上がれず、慌てて駆け寄って来てくれたアイズさんにも返事をする事が出来なかった。

「・・・四葉、平気？」

コクッ

「・・・」

だから、声ではなく、首を縦に振って、大丈夫だって事を示した。

フツ

「・・・ハア・・・ハア・・・」

「!？」

ふわっ

「!？」

「しっかり、掴まってて」

「う、うん」

そこで何を思ったのか、アイズさんは僕と模擬戦用の剣類と僕とアイズさんの剣をいつぺんに抱えて、何処かに向かって走り出した。

◆◆◆◆◆

「この、大馬鹿者共オオ!!」

ゴゴオン!!

「!？」

で、アイズさんが僕を抱えて、駆け込んだのは、リヴェリアさんの部屋だった。

そこで、僕とアイズさんの頭に拳骨が落とされた。

「朝っぱらから、精神力を使い果たしただとおお!!」

「ひっ!？」

理由は、アイズさんとの手合わせで、僕が魔力を使いきってしまった、今が、精神疲弊状態にあるって事

「おまけに何だ！この腹と背は！」

「ははは」

「笑い事ではないは!!」

ゴオオン!!

「!？」

おまけに、僕のお腹と背中が、お腹は、蹴られた足の形で、背中は全体的に、赤黒く変色してしまっていた。

それらの経緯をリヴェリアさんに説明したら、僕等の頭に拳骨が落とされたと言う感じだ。

そして、再度、お腹と背中の中を指摘されて、笑って誤魔化したら、二発目が僕の頭に落とされた。

「アイズもアイズだ！お前はレベル五で、この子はレベル一だ。鍛練で、手合わせをするなどは、言わん。けど、手加減くらいしてやれ！たまたま、四葉が丈夫に出来ていたお陰で、コレだけで済んでいるが、下手をすれば、取り返しのつかないことになっていたんだぞ！」

「ご、ごめんなさい。つい」

「ついで済むか！」

ゴオオン

「!？」

そこから暫くの間、僕等は、リヴェリアさんからの説教を小一時間ほど、受け続けることになった。



「ぷっ」

「はははは!!」

その後、リヴェリアさんから解放され、タンコブを仲良く二つずつ作った僕とアイズさん。

朝食前に、シャワーを浴びに行つて、食堂に行くと、大いに笑われ

た。

主に、テイオナさんとテイオネさんに。

シャワーを浴びても引つ込まなかったお揃いのタンコブを見て…

「ど、どうされたんですか?」

「リヴェリアに、ね?」

「うん。リヴェリアさん、あんな細い腕なのに、信じられない、力強
さ」

「リヴェリア様が、そこまで怒ることをしたんですね」

レフィーヤさんは、一応、心配してくれていたけど、最終的に苦笑
いされ

「で、何をやらかしたのよ」

「アイズさんと魔力がつかえるまで、手合わせをしただけ」

「…はあ?」

そして、一応、手短にこうなった原因を話すと、一瞬、止まって、信
じられないモノを見る目でテイオナさん達に見られた。

「…それで、私が、四葉を蹴り飛ばしちゃって、お腹と背中を…」

「…ハハハ」

「それは、あんた達が悪いわ」

アイズさんも付け加えると、大いに呆れられた。

「アイズさん」

「ん?」

「楽しかったから、また、手合わせして欲しい」

「うん。良いよ?また、やろうね?」

「まあ、やるにしても程々にしなさいよ?また、リヴェリアからの拳

骨が来るわよ？」

「こ、来ないようにする」

けど、僕的には、モンスターと戦うよりもアイズさんと手を合わせる方が楽しかった。

だから、またの手合わせをお願いした。

もちろん、今度は、リヴェリアさんの拳骨が来ないように心掛けて、だ。

第12話・更新と反省会とお金の扱い

「ほんじゃ、ちゃちゃと更新してしまおうか？ 四葉たん」

「はい、よろしくお願いします」

朝食を終えて、僕は、ロキ様に連れられて、空き部屋に入った。

その部屋は、物置みたいな感じで、使われていない椅子やらテーブルやらが、いくつか置いてあった。

その中から二脚の椅子を取り出して、僕は、上半身裸になってロキ様に背を向けて座った。

この部屋に入った理由は、ただ一つ。

昨日、やる筈だった更新をここで行うためだ。

「昨日は七階層まで行ったんやろ？ 今朝はアイズたんとお手合わせ」

「うん」

「感想は？」

「アイズさんとお手合わせの方が楽しかった」

「そうなんか？」

「うん！」

「ダンジョンの感想は？」

「無い」

「・・・そ、そうなんか？」

そして、微かに血の臭いがして、僕の背中にその臭いがロキ様の指と共に這う。

そんな時、ロキ様は昨日のダンジョンでの事と今朝のアイズさんとお手合わせのことを聞いてきて、僕は、思ったままを答えた。

「アインクラッドのモンスターと同じモンスターも居たけど、少し強かったけど、それ以外はあまり変わらなかった」

「そうなんか？」

「うん。だから、特に感想はないよ」

「・・・そうか。・・・おお!?!」

「??ロキ様、どうかしたの?」

「どうもこうも、無いって!めっちゃ、凄いことになってんで!ステイタスのトータルがどれくらいことになってんで!!待ってて、今、写すわ」

「・・・う、うん。」

「ほい」

「ありがとう」

そうしてらうちに、更新も終わり、ロキ様が共通語に略して、紙を手渡してくれた。

一応、昨日のリヴェリアさんの座学で、共通語を学んだし、少しなら、読めるかもと期待を込めて、書かれた文字を見た。

四葉;レベル1

【ステイタス】

力; E489

耐久; E400

器用; D597

敏捷; E434

魔力; C615

【魔法】

【スキル】

「うーん、ステイタスの文字は読めても、肝心の魔法とスキル欄が難しく読めない」

「そら、仕方がないって四葉たん。昨日の今日で読めるもんとちやうって。知らん字ちゆうもんは。気長にいこうや、な？」

「・・・うん」

読めたのは、ステイタスの部分だけだった。

それには、ちよつとだけ落ち込んだ僕だったけど、ロキ様が頭を撫でてくれたから良いや。

「ほな、フィンとこ行こか？これから、反省会やもんな？」

「はい」

そして、僕等は、昨日のダンジョンでの反省会とお金の分配をするためにフィンさんのいる執務室に向かう。



「フィン、入るで〜」

ロキ様はノックはするけど、返事を待たずに、執務室に入室

「おっ、来よったか」

「・・・」

「ん？なんや？アイズたんもおったんか？」

「うん、フィンが私に、聞きたいことがあるって」

そこには、フィンさん、ガレスさんだけでなく、アイズさんもいた。

「フィンがアイズさんに聞きたいこと？」

「朝、アイズと四葉、手合わせをしたらしいじゃないか。だから、その感想を聞きたくてね？」

フィンさんは何か書き物をしている様子だったけど、その手を止めて、たたずまいを直した。

「そういや、リヴェリアはどないしたんや？おらんけど」

「ああ、リヴェリアはちよつと野暮用だよ？」

確かにと思う。

ロキ様の言うようにグルリと部屋を見渡しても、リヴェリアさんの姿は、無かった。

「リヴェリアさん、何処か行ってるの？」

「うん。・・・リヴェリアがいないと、不安かい？」

「そ、そういう訳じゃ、無いけど・・・」

主に、リヴェリアさんと一緒に居るもんだから、居ないと知ると、少しだけ寂しく感じた。

「!？」

「・・・大丈夫、リヴェリアはすぐに帰って来るよ？」

「うん」

そんな感情を表しているのか、僕の耳と尻尾が垂れて、傍に居るアイズさんが垂れた僕の耳を撫でた。

そんな彼女に、僕は、小さく頷く。

「とりあえず、話を進めよう。アイズ、今日、四葉と戦ってみてどう

感じた？」

「・・・うん。すごく、ビックリした、よ？・・・駆け出しじゃないみたい・・・後、すごく速かった」

「フィン、昨日のを見て、どう思ったんや？」

「うん。そうだな。地の利の使い方と直感力は、すごいと思ったよ。ダンジョンの壁を使って走って、モンスターを頭上から攻撃したり、飛んでるモンスターに切りかかるんじゃないかと、投げナイフを投擲して倒したり、ね？・・・後、僕も、アイズと同じで、脚が早い思ったよ。そのうち、脚の早さで、ベートに並ぶんじゃないかな？」

「ほおおく」

そして、始まった、僕の昨日の初ダンジョンと今朝のアイズさんとの手合わせについての反省会が開始した。

評価された僕の戦い方。

「新人殺しのウォーシャドウとキラアアントも難なく倒せてたし、一人で行って帰ってこれる層なら、行かせても構わないとは、思うんだけどね」

「それは、昨日の層までなら、一人で行っても良いってこと？」

フィンさんは、昨日の僕の戦い方を思い出しながら、腕を組んで、うーんっと、言って考え出した。

一人で良いなら、僕的にもそれはそれで、良いと思った。

なんせ、パーティープレイなんて、キリトさんやアスナさん以外とは、あまりしたことないし

「子供の君を、一人でダンジョンに行かせでもしたら、ギルドの彼女とリヴェリアに僕が怒られちゃうよ」

「・・・そう」

が、それは、フィンさんに苦笑いされて、却下された。

「ダンジョンのことは、もう少し考えるところとして、まずは、装備の事だね。ちゃんと体にあつたモノを揃えないとだね。」

「そこは、うちに任せときー！」

ダンジョンの事は、一先ず、おいておくらしい。

ということは、二度目のダンジョンは、まだまだ、先みたいだ。

そして、話は、ダンジョンの事から僕の装備の話に変わる。

その話になると、ロキ様はものすごく自信満々に自分の胸を「ドンツ」と叩いた

「考えてあるもんが、有るねん！四葉さんに、よう似合う、めっちゃ可愛い装備がな！」

「・・・なんか、すごく嫌な予感がするけど・・・」

それには、僕を除く、フィンさん、ガレスさん、アイズさんは、フィンさんの意見に同意して、うんうんと頷く。

「・・・ロキ、四葉に変なの着せちゃ・・・ダメだよ？」

「変なんちやう！めっちゃ、可愛いんや！絶対に、アイズたんかて気に入るで？」

「私が？」

「せや！まだ、秘密やけどな？楽しみにしとき」

「うーん、アイズが気に入るかはともかく・・・四葉、ロキに任せちゃって良いかい？」

「うん。良い。僕、そう言うの良くわからないし、出来るなら、任せたい」

そこ三人の同意の理由もアイズさんがロキ様に、僕に変なモノを着せるなど注意する理由も、良くわかってない僕は、装備の事は、良くわからないから、任せろと言うロキ様に抵抗は無かった。

むしろ、お願いしたいところだった。

「本人かええって言ってるんやし、ええやろ？」

「まあ、四葉が良いならね？」

「後で後悔せんようにな？ 四葉」

「本気で変なのが来たら、私に言っつて？ ロキを叱ってあげるから」

僕がロキ様に任せて良いと言うと、ロキ様は目をキラキラさせて、フィンさんにもう一度、許可をとる。

それには、フィンさん、苦笑いで答え、ガレスさんは、呆れた風な口調で、僕に言い、アイズさんは、グツと胸の所で、拳を握り締めて、僕に言った。

「これで、後は、昨日のお金の分配だけど」

「僕の取り分は、エイナさんのプレゼント代があれば、他はいらない。このファミリアに入れて？」

「ん？ いらんってなんでや？」

「事前に色々と買ってもらったりしてるし、きつと、装備とかでも使わせちゃうから、少しだけでもって」

そして、最後は、昨日のお金の分配の事。

コレの事は、僕は、最初っから決めていた。

「四葉がそれで良いなら、良いけど、本当に良いのかい？」

「うん。二言はないよ」

また、苦笑いを浮かべたフィンさんに、僕は、ハッキリとそう言った。

そして、二度目以降のダンジョンで稼いだ分も、三分の二はこっちに入れようと、僕は、そう決めていた。

第13話・読み聞かせと約束

コンコン

「私だ。入るぞ」

ピクッ

「!?」

そう決めたタイミングで、扉がノックされて、扉の向こうから、リヴェリアさんの声がして、その扉が開けられる瞬間

ふわっ

「!?」

「あっ」

ガシッ

「!!!?」

尻尾が思いつきり揺れそうになって、それを止めるべく、瞬時に、力ませに尻尾を掴んでしまった僕の全身に強烈な電流が走った。

「痛い」なんてもんじゃない。

今朝のアイズさんとの手合わせで腹と背中に負った痛みが可愛く思えるほどの

プルプル

「くくく」

「・・・んと」

「・・・事故だね」

「事故じゃの」

確かに、事故だ。

事故なんだけど、まさか、尻尾ってこんなに痛みを感じるモノだったなんて・・・

「はあく」

「・・・」

あまりの痛さに、涙目になる僕にリヴェリアさんはため息を一つ

「何をやってるんだ？四葉」

「ハハハ!!四葉たん、ママがおらんで、寂しかったんやんなあく」

ポンポン

「・・・」

「誰がママだ」

そして、僕の目線に合わせて腰を落として言ったりヴェリアさんとロキ様。

ロキ様にいたっては、僕の頭も撫でるをプラスして。

カアア

「~~~~」

とたんに、痛みよりも、恥ずかしさの方が込み上げて来て、一気に顔に熱が集まるのを感じた。

「・・・四葉、どうしたの？顔真っ赤だよ？熱？」

ピタッ

「!？」

おまけに、アイズさんに恥ずかしさで赤面した顔を指摘され、僕のお凸にアイズさんの手が

「熱は・・・ない？」

カアア

「~~~~」

更に集まる熱

ダッ

「!？」

「四葉たん、何処行くねん!!」
バタアン

あまりの恥ずかしさに、僕は、目の前のリヴェリアさんと左右にいるアイズさんとロキ様を交わして、ロキ様が止めるのも聞かずに、部屋を飛び出した。

「……」

「……逃げちゃった」

「あつははは！恥ずかしゆうなって逃げ出すやなんて、ほんま、四葉たん、可愛えなあ〜」

「はあく。たく、探す手間が出来てしまったではないか」

その様子に、フィンさんとガレスさんは、呆れながら、アイズさんは呆然として、ロキ様は大笑いして僕が出て行った扉を見ていた。そして、リヴェリアさんは、また、一つため息をつくと手に持っていた紙袋をチラリと見た。

「ソレ、四葉たんにか？」

「まあな。何時までも、ヒューマンの服というわけにもいくまい」

「獣人用の服かく、そうか、ソレ買いにいつとったんやなあ！やっぱ、流石やなあ〜、うちのママは」

「だから、誰がママだ」

その中身は、僕の為の新たな服だった。

「・・・リヴェリア、四葉、探すの手伝おうか？」

「頼めるか？アイズ」

「うん」

そして、逃げ出した僕を探すためにアイズさんとリヴェリアさんもフィンさんの執務室を後にした。



「・・・」

で、逃げ出した僕は、と言うと

コツコツ

「・・・迷った・・・ここ、何処？」

勢いで飛び出してしまったこともあって、僕は、自分がどの辺りにいるのかよくわからなくなっていた。

スンスン

「・・・」

何処か近場に誰かいないかを匂いを嗅いで確かめてみた。

「あっ」

タツ

そして、二つの匂いを発見して、僕は、その匂いのする方に向かった。



スンスン

「この部屋だ」

コンコン

それでたどり着いた一つの扉。

どうやら、その二つの匂いは一緒にいるみたいで、耳を済ませてみても、中からは声は聞こえてこなくて、一応、ノックを試してみた。

それでも、声が聞こえてくることはなくて

ガチャ

「・・・」

僕は、恐る恐るその扉を開けて中を見ると、途端に木の匂いが漂ってきて

コツコツ

「・・・ここ、書庫？」

ドキドキしながら、僕は、その部屋に足を踏み入れた。

どうやら、この部屋は、書庫のようで、壁一面と中央にいくつも本棚が並んでいて、当然ながら、本棚には沢山の本が並べられていた。

僕は、その本棚に並ぶ本を見渡しながら、中を進んだ。

ペラッ

「・・・」

ペラッ

「・・・」

進んでると、僕は、僕が感じ取った匂いの持ち主である二人、テイ

オナさんとレフィーヤさんを発見した。

二人とも凄い集中力で、レフィーヤさんは机に着いて、テイオナさんは床に座つてのそれぞれの体勢だったけど、本を読んでいた。どうやら、それで、ノック音とか聞こえなかったみたい。

ペラッ

「・・・」

ペラッ

「・・・」

どうしよう・・・

このまま、回れ右をするか・・・

なんか、邪魔をしちやいけない気がする。

「ん？・・・あつ、四葉じゃん」

「えっ？・・・あつ」

二人のその様子に、僕は、来た道に戻って、書庫を出ようと思つていたら、先にテイオナさんの方が、僕に気付いて、レフィーヤさんも、テイオナさんの声を聞いて、僕の方に顔を向けた。

「ご、ごめんなさい。邪魔をするつもりじゃなかった、の」

「ううん。良いよ！ねえ？レフィーヤ」

「はい」

「それで、どうしたの？四葉も本を読みに来たの？」

ブンブン

「・・・迷っちゃって、二人の匂いが一番近かったから来たの」

その集中を、読書の邪魔をしたことを謝って、ここに来た理由を二人に話した。

「あの、二人の邪魔、しないから、ここにいても良い?」
「……」

そのお願いに、一瞬、キョトンとした二人。

「良いよ!／＼良いですよ?」

「ありがとう」

二人はすぐに、笑顔になって、僕のお願いを聞いてくれた。

「黄昏の館は、入り組んでますからね。入団したてだと迷っちゃうのは、仕方がないですよ?」

「そうだよ? 四葉、まだ、ここに来て三日目なんだから、気にしなくていいからね?」

「うん」

そして、ホローもしてくれた。

「四葉も何か読む?」

「読んで良いの?」

「良いよ? こののは、団員なら好きに読んで良いんだよ?」

「そうなんだ」

また、新たな発見だ。

「お姉ちゃん達は何を読んでいるの?」

「……」

こんなに沢山の本を自由に読んで良いなんて。

グルリと周囲の見回して、二人の手元にある分厚い本に目が止まって、聞いたら、二人は何故か止まった。

「??」

「・・・ハハハ!!四葉がいきなり、お姉ちゃんなんて言うもんだから、ビツクリしちゃったよ」

「はい。えっと、私は、リヴェリア様の言い付けで、魔導書を」

「私は、英雄譚だよ!」

それで、困った風な顔をして、二人は手にして本の表紙を僕に見せつつ、答えてくれた。

「レフィーヤさんののは難しそう」

「それは、魔導書ですから」

レフィーヤさんの方は、魔導書っただけで、読める気がしなかった。読める気がしないのは、テイオナさんの方の英雄譚もだけど。

「そうだ!四葉。この本、読んであげようか?」

「!?本当に?本当に読んでくれるの?」

「うん!」

そう思っていると、テイオナさんが素敵な提案をしてくれた。

「じゃあ」

「??」

パンパン

「ここ、おいで?」

「うん!」

そして、テイオナさんは、パンパンと自分の膝を叩いて言ってくれて、僕は、彼女のその膝に座らせて貰った。

「私、昔から、こういう、昔話とかお伽噺とかが大好きだったんだ。だから、四葉も好きになつてくれると、私、嬉しいな。・・・それじゃ、始めるよ?」

「うん!」

「フフフ」

そこから始まったティオナさんの読み聞かせ。

タイトルは、『迷宮神聖譚（ダンジョン・オラトリア）』

その内容は、一人の英雄が精霊と、ハイエルフやドワーフ、獣人、小人族、アマゾネスとか沢山の仲間とともに立ちあがるモンスターと戦つて行く話。

その読み聞かせは、リヴェリアさんが僕を探して、ここを訪れるまで続いた。

その間、今読んでもらっているモノのほかに、別の英雄譚も読んでくれた。

その一冊に僕は、心を惹かれた。

「ねえ? ティオナさん、こういう本って普通に街に売ってる?」

「ん?? 四葉、欲しいの?」

「うん! 僕、これ、好き。だから、個人的に欲しい」

「そつかく、それは嬉しいな。じゃあ、今度、一緒に買いに行つてみようか?」

「うん! あ、でも、今度、ダンジョンに行くまで待つて? 僕、お金持つてないから」

「なんで? 昨日、ダンジョンに言ったんでしょ?」

「うん。でも、お金は、ファミリアに入れたから無いの」

「・・・四葉、そんなことしたんだ。でも、わかった。四葉にお金出来たら行く?」

「うん! その時は、レフィーヤさんも一緒に行こうね?」

「私ですか?」

「うん!」

「じゃあ、アイズやテイオネも誘おう？皆で行った方が楽しいよ？」

「はい！」

「うん！」

そして、僕とテイオナさん、レフィーヤさんの三人の間で一つの約束事が生まれた。

第14話・夜中のダンジョンとおつかい

「おお、その服、ええやん！めっちゃ、可愛い！何処ぞの皇子様って感じじゃ！」

「……」

リヴェリアさんに発見された僕は、彼女が買ってきてくれた獣人用の服に着替えた。

ロキ様が言うように、白い長袖ブラウスに黒いリボンネクタイ、サスペンダー付き、半ズボンと、なんだか皇子様風で、シャツと半ズボンには尻尾を通すための穴が空いていて、めくれるうんゆんを気にしなくて良いから、実に楽だった。

「ありがとう、リヴェリアさん」

「構わんさ。さあ、始めるぞ」

「はい」

そして、始まった、今日の勉強会。

内容は、残りの階層の事と、字を書く練習だ。



「……今日は、ここまでにしよう」

「はい。ありがとうございました」

その勉強会は、夜まで続いた。

最初こそは、ロキ様も一緒にいたけど、何時の間にか、ロキ様の姿はなく、リヴェリアさんと二人つきりになっていた。

「部屋に戻ったら、ちゃんと復習はしておけ」

「はい。おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

そして、僕は、リヴェリアさんにおやすみの挨拶をして、彼女の部屋を後にした。



「・・・」

リヴェリアさんの部屋から自分の部屋に向かう最中、僕は、ふと、見た窓の外。

そこに見えるのは、どの建物よりも高い塔「バベル」

「うーん」

それを見ながら、僕は、腕組みをした。

リヴェリアさんから教えて貰ったダンジョンの出現モンスターについてを思い返した。

ゴブリンとかコボルトもそうだけど、あつちとこつち、似たモンスターが多い、ゴブリンやコボルトは見た感じもまんまだつたし、他の、ミノタウロスとかもあつちと変わらないんじゃないかと思った。

倒した時の感覚だけは、違うだろうけど

「・・・オークなら」

一度、確かめてみたいという気になった。

でも、ミノタウロスはダメだ。

ミノタウロスを確かめようと思ったら、その層に行くために「サラマンダーウール」というものが必要らしいし。

僕が現状で行けるのは、十二階層まで

「……いや、怒られるか」

がそれも、あつちとは違って、今の僕は、勝手気ままな事は出来ない。

なんたつて、ギルド、こつちじや、ファミリアつて言うけど、そういうのに所属しているんだから、このファミリアの団長、フィンさんの許可なしに行けるわけもない。

僕は、そう思つて、トボトボ、部屋の方に歩き出した。



「……」

部屋に入つて、寝巻きに着替えた僕は、ベットに寝つ転がりながら、机の上の短剣を見た。

と言うか、数分間、短剣を見つめながら、僕は、自分の中で葛藤していた。

「行く」、行かない」で。

ムクッ

ギシッ

「……このままじや、寝れないし」

そのおかげで、目が冴えてしまつて、いつこうに寝れる気配がなかった。

これじや、仕方がない。

と自分に言い訳をして、ベットから下りると、寝間着からリヴェリアさんから貰つた服に着替え直して、それに剣帯と短剣を装備。

本当なら、昨日の装備の方が良いんだろうけど、ちよつと僕的に大きい上に、金属部分が音を出しそうだったし、その音を聞いて、寝静まっていた人達が起きたら、大変だから、今の軽装で行くことにした。

キイイ

「……よし」

準備を整えた僕は、部屋から、ホームから脱け出して、ダンジョンの入り口へと向かった。



「……ふう〜」

そして、なんとか、バベルに到着した僕は、ひと息付いて、上を見上げた。

「……なんとか、なったな。」

ハラハラ、ドキドキだった。

誰かと出会うことは、無かったけど、角ごとに警戒し、門のところには確実に二人、人がいるから、門じゃない所から出なきやだったしで、大変だった。

「……よし」

少しだけ、気合いを入れ直して、僕は、ダンジョンへと足を踏み入れ、一気に十階層を目指して走った。



「……本当に霧だ」

そして、途中、ゴブリンやコボルト、キラーアントとかと戦いなが

ら、僕は、十階層へとたどり着いた。

リヴェリアさんの説明通り、濃くはないけど、視界を妨げるには十分な白い霧が立ち込める所だった。

「・・・これが、武器になるのか」

その中を進んでると、葉も枝もない枯木が現れて、その木に触れてみた。

案外しつかりしているようで、下から上に行くにつれて、極端に細くなっている枯木は、確かに引っこ抜いて振り上げれば、棍棒として使えるだろうと思った。

「・・・まずは」

ここでのセオリーとして、この枯木を破壊しておかなきゃならぬい。

ズンツ

「！」

が、それも、その余裕があればの話だ。

ズンツ

ズンツ

ズンツ

「ブグツウウウ」

「・・・」

聞こえてきた重々しい足音を鳴らして現れた茶色い肌に豚頭のずんぐりとした体型のでかいモンスター。

これが、“オーク”なのだろう。

なんと言おうか、こちらの方が、オークぽいと思った。
アインクラッドのオークは、もう少し、スラツとしてたような気がするし。

「ブフウ、フーツ、ブルファ」
ガシツ

そのオークは近場にあつた枯木を手に取り

ビキキツ

ベコツ

メキツ

「ブゴオオオオ」

ゴオツ

ボツ

ドオツ!!

ギヤンツ

ドツ

それを引っこ抜くと、僕めがけて、それを振り下ろす。
なんとか、それを交わすと

ドスンツ!!

「ブフウ!?!」

短剣に魔力を帯びさせて、魔石を砕くつもりで、オークの胸の真ん中に投擲した。

ドサツ

シュウウウ・・・

「・・・目的は、達成だな」

それが狙い通り、オークの魔石を砕いたんだろう、オークは地面にひっくり返ると、灰になって消えた。

そこで、僕がここに来た目的も達成出来た事になるので、僕は投げた短剣を回収して、来た道を引き返した。



「・・・本気で欲しい・・・メニューウインド」

そして、地上に出た時、魔石とドロップアイテムでパンパンになったポケットを見て思った。

僕的には、捨ててきても良かったんだけど、リヴェリアさんの教えによれば、魔石やドロップアイテムを無闇に道端に放置するのは、褒められた行為ではなく、他の冒険者に甘い蜜をすすられてしまったり、逆に余計な警戒をさせてしまうとの事で、僕は極力、魔石を狙う戦法でモンスターを倒していたんだけど、ドロップアイテムだけは灰にはならないから、貯まる貯まる。

「・・・帰ろう」

換金をとも思ったけど、それは、自ら出頭しに行くようなもの。

ちゃんと、ダンジョンに行ける許可が出たらこっそり交ぜようと心に決めて、少しずつ太陽が登り始めてる朝焼けの空を見ながら、ホームへの道を急いだ。

ゾワツ

「！」

そんな僕の背中に、ここに来た日に最初に感じたあの感覚が突き刺さる。

バツ

「・・・」

あの時とは違い、僕は、ちゃんと動ける。

だから、その正体を知るために、感じた方向に目を向けた。

けど、そこに有るのは、「バベルの塔」だけ

ダツ

「・・・」

なんか、これ以上、見てもいけない気がして、僕は結局、逃げるようにその場を後にした。



「よっ」

そして、ホームには、聴覚、嗅覚を利用して人気の無い場所から浸入、基、帰宅した。

ヒュンツ

ヒュンツ

ヒュンツ

「・・・」

廊下を何食わぬ顔で歩いていると中庭で昨日と同じ様に剣の素振りをするアイズさんを発見した。

挨拶はすべきだろうけど、今は、ポケットの魔石類をどうにかしな
きやだから、この場を離れて、自分の部屋にいくと机の引き出しの中
に魔石類を隠して、中庭へと引き返した。

カサッ

「ん?・・・四葉?」

「おはようございます。アイズさん」

「うん、おはよう。今日も、早いね?・・・隅っこ、使う?」

「うん。使わせてもらいます」

「うん」

その時は、ちゃんと挨拶をして、僕は、昨日と同じ様に中庭の隅っこを借りて、素振りを始めた。



「ん?・・・うおっ!アイズさん、四葉ちゃん!」

「なっ!?!何時の間に!?!」

鍛練を終えて、シャワーを浴びた僕とアイズさんは、食堂にやって来た。

食堂にはすでに、数人の人がいて、厨房と食卓の方でと別れて作業していた。

そんな彼等を見て、僕とアイズさんは自然な流れで、食卓側の人達の手伝いを、テーブルを拭いたり、お皿を並べたりした。

すると、一人が気付いてビックリするとそれが伝染してゆき、今、食堂にいる全員の手が一瞬、止まった。

「ありがとうございます。でも、大丈夫ですから!」

「四葉ちゃんもありがとう。けど、ここからは、俺達でするから」

「あっ」

そして、感謝の言葉を貰ったけど、持っていた食器類を奪い取られてしまい、アイズさんと共に食堂から追い出されてしまった。

「んと」

「・・・追い出されちゃった」

そうなってしまうっては、朝食の時間の合図があるまで、再度、食堂に入るのは難しく

「・・・ちよつとだけ、お散歩する？」

「うん」

仕方がないので、僕とアイズさんは、散歩で時間を潰すことにした。



「おっはよーアイズ！四葉！」

「・・・おはよう、ティオナ」

「おはよう、ティオナさん」

暫くして、朝食の時間を知らせる鐘が建物全体に響き渡って、僕とアイズさんは食堂へと引き返し、そこでティオナさんと挨拶を交わした。

「おはようございます、アイズさん、四葉ちゃん。お二人、ご一緒だったんですね」

「うん。おはよう、レフィーヤ」

「おはよう、レフィーヤさん」

そして、ティオナさんと一緒にいたレフィーヤさんとも挨拶をした。

「おはよう」

「あつ！フィン、おっはよー！」

そこにフィンさんもやって来て

「四葉、ちよつと良いかい？」

「??何？」

「うん。朝食の後、ちよつと、おつかいに行つてきてくれないかい？」

「おつかい？」

「うん。リヴェリアには僕の方で話しておくからさ」

「わかった」

「それじゃ、コレを」

ジャラツ

「・・・」

僕は、フィンさんにおつかいを頼まれ、お金の入った袋を受け取つた。

「買って来てほしい物は、その中にメモが入ってるから」

「わかった」

「それじゃ、よろしくね？」

そう言つて、フィンさんは僕等に手を振つて、食堂の中へと入つて行つた。

カサツ

「・・・」

それを見て、僕は、フィンさんが言っていたメモを取り出してみた。そして、メモには、長めの見覚えのある文字と短めの文字が複数と数字も複数

「・・・アミッドさんの所に行くんですね」
「!?!」

「なるほど、回復薬（ポーション）と精神力回復薬（マジック・ポーション）の買い出しか」

その文字達の答えは、レフイーヤさん達によって、出された。

「何て書いてあるの?」

「ディアンケヒト・ファミリアと回復薬（ポーション）と精神力回復薬（マジック・ポーション）ですよ」

「なるほど」

そして、レフイーヤさんに書かれた文字が何なのかを教えて貰った。

「良かったら、お手伝いしようか?」

「えっ?」

同じようにメモを覗き込んでいたアイズさんが、そう申し出てくれた。

「良いね!それ、私も、一緒に行こうか?」

「じゃ、じゃあ、私も」

そして、テイオナさんとレフイーヤさんも

「何をやっている、お前達」

「!?!」

そんなやり取りをしていると、僕等の後ろからリヴェリアさんの声が

して、僕等は、いっせいに声のした方を向いた。

「おはようございます。リヴェリア様」

「おっはよー！リヴェリア」

「おはよう、リヴェリア」

「おはよう、リヴェリアさん」

そこには、やっぱり、片眼をつむったリヴェリアさんがいて、僕達は、彼女に朝の挨拶をした。

「リヴェリアさん」

「ん？」

そんな彼女に僕は、テコテコ歩いて近付いた。

ジャラッ

「さつき、フィンさんにおつかい、頼まれた」

「・・・」

「朝ごはん食べたら、行ってくる」

そして、手に持ったままのお金の入った袋とメモを見せて言った。

「・・・そうか」

ポンッ

「!？」

「気を付けて行ってこい」

「うん！」

すると、リヴェリアさんは軟らかい笑みを浮かべると、その手を僕の頭の上に乗せた。

「ほら、お前達がここに居ては、何時までたっても朝食が始められん
だろ」

「そうだね！私、お腹空いちやっただ！」

「・・・うん」

「ですわね？」

そして、彼女に諭される形で僕等はようやく、食堂に入った。

ちなみに、今日の朝ごはんのメニューは、スープとオムレツ、サラ
ダとふかふかのパンだ。

「・・・そうだ」

「ん？」

「アイズさん、テイオナさん、レフイーヤさん、僕、一人で行って
みる。アミッドさんの所なら行ったことあるから」

「・・・そっか」

「うん、わかった」

「では、気を付けて行って来てくださいね？」

「うん！」

ふと、あることを思い付いて、アイズさん達の心遣いを悪いとは思
ったけど、お断りすることにした。



「あっ！来たっすね？」

「・・・」

朝食を終えて、一度、部屋に戻ってからエントランスに出てくると
そこには、待ち人がいた。

「待ってたっすよ？四葉ちゃん」

「!?そ、それは、ごめんなさい・・・えっと」

「あっ!そう言えば、まだ、名乗ってなかったっすね?俺は、ラウル・ノールドす。よろしくっす、四葉ちゃん」

「よ、よろしくお願いします」

その人は、ラウルと言うらしい。

「俺も団長に頼まれ事があるんす。一緒に行くっすよ」

「は、はい」

ニツコリと笑って言うラウルさんに断ることは、もちろん出来ず、僕は、ラウルさんと一緒にファミリアを後にして、アミッドさんの元へと向かった。



「こんにちはっす」

「いらっしやいませ、ラウルさん」

ディアンケヒト・ファミリアへとやって来ると、薬の販売場のカウンターにはアミッドさんがいて、さっそく、ラウルさんは彼女に声をかけていた。

「アミッドさん、こんにちは」

「・・・えっと、はじめましてですよね?」

なので、僕もそれに習って、アミッドさんに挨拶したら、訝しげな顔をされた。

そう言えばと思う。

彼女は、この状態で会うのははじめてだったなど

「僕、四葉です。アミッドさん」

「えっ？」

「本当ですよ？ロキの言い付

けで、こうなってるんすよ」

「うん。これ、僕の魔法なんだけど、ロキ様が寝る時以外は、コレでいなさいって」

「はあく、何て無茶を」

なので、僕は、名乗り直して、ラウルさんもそれに付け足してくれて、アミッドさんは、頭を抱えてため息をついた。

「ですが、元気そうでしたです」

「うん！」

「それで、お二方のご用件は」

「俺は、コレを用意して欲しいんす」

「高等回復薬（ハイ・ポーシヨン）と精神力回復薬（マジック・ポーシヨン）を二十四本ずつですね。四葉さんは？」

「僕は、回復薬（ポーシヨン）と精神力回復薬（マジック・ポーシヨン）を十本ずつください」

「かしこまりました」

そして、アミッドさんは僕等に用件を聞いて、それぞれ注文をした品を揃えて出してくれた。

「確かにちようどつす」

「僕の方もちようどです。コレ、代金です」

その代わりに、お金の入った袋をアミッドさんに手渡した。

「・・・はい、確かに。遠征の準備ですか？」

「そうです。日程は、まだなんすけど、そろそろ、準備を始めようかつ

て」

「そうなんですか。目的はやはり」

「未到達階層への進出っす」

そして、世間話的にそんな話をしていた時だった。

「ほお、未到達階層。五十一階層にも立ち寄ると言うことだな」

「!?!」

何処からともなく、そのお爺さんが僕達の前に現れた。

「カドモスの泉で泉水を取ってきてくれ」

「えええ!?!あ、あれをつすか!?!」

「デイ、ディアンケヒト様!?!」

「なあに、ロキ・ファミリアなら問題なからうて」

そのまま、お爺さんはこちらにお願いをして来た。

内容に関してはいまいちよくわからないところだけど、ラウルさんやアミッドさんの反応からとんでもない事をお願いされたんだって事は、良くわかった。

「ま、まだ、何時、遠征かわかんないっすよ!?!」

「まあ、よろしく頼む」

そう言っつて、そのお爺さんは何処かに去っていった。

「・・・申し訳ありません、うちの主神が。依頼の方は、遠征の日程が決まり次第、お知らせください。改めて、報酬を含めて書類におまとめしますので」

「・・・団長には、伝えておくっす」

そのお爺さんを見送ってガクツと肩を落として話す二人。

「それじゃ、また、来るっす。行くっすよ？四葉ちゃん」

「はい。じゃあね、アミッドさん」

「はい。またのお越しをお待ちしております。」

そして、僕とラウルさんはアミッドさんに別れを告げて、そこを後にした。

「後、二、三ヶ所、回らないと行けないんすけど、一緒に行くっすか？」

「うん！」

「わかったっす」

その後、ラウルさんの言葉通り、数ヶ所回り、僕等は帰路に着き、その足でフィンさんの部屋へと向かった。

第15話・鍛冶師の神様とロキ様のお気に入り

「なるほど、ディアンケヒト・ファミリアからの冒険者依頼の打診か」

「はい」

「また、厄介な依頼を出してくるのぉ」

「まあ、受けるかどうかは、報酬次第だけどね」

フィンさんのもつに向かった僕とラウルさんは、アミッドさんの所であのお爺さんに言われたことを話した。

「とりあえず、わかったよ。ありがとう二人とも。四葉、買って来てくれたものは、ラウルと一緒に運んでおいてくれ」

「はい」

「それでは、失礼するっす」

話終わると、僕とラウルさんは再び荷物を手に、ラウルさんの案内のもと、館内を移動した。



「よつと。四葉ちゃん、買って来たものは、そこにおいておいて欲しいっす」

「はい」

着いた部屋は、沢山の木の箱や筒状に丸められた紙が複数に、本とかも沢山ある部屋だった。

僕は、買って来たポーションとかをラウルさんの指示通りに、近場にあつた机の上に置いた。

「ご苦労様」

「アキ」

すると、その部屋で作業をしていた人達の中で、綺麗な黒髪を肩まで伸ばしたお姉さんが、作業の手を止めて、僕等の方にやって来てくれた。

ふよっ

「！」

その彼女の腰には、髪の色と同じ色の僕の尻尾とは違う細長い尻尾が生えていた。

その細長い尻尾が目の前で揺れるものだからつい

キュッ

「ふにゃああ!?!」

「あ、アキ!?!」

掴んでしまった。

彼女の尻尾を。

不思議な感触だ。

僕の尻尾とは全然違う。

僕の尻尾がモフモフなら、彼女の尻尾はふわふわした感じ。

「四葉ちゃん、アキさん、困ってるよ?」

「！」

自分の尻尾と彼女の尻尾を片手づつで触っていると横から困り顔の眼鏡の女の人が、僕の目線に合わせて腰を落として僕に声をかけた。

「コラッ」

パチイン

「!？」

そして、尻尾の持ち主である、アキさん？から僕はデコピンを頂戴し、掴んでいた尻尾から手を離した。

「大丈夫ですか？アキ」

「大丈夫よ。そこまで強く握られたわけじゃないし。ビックリしたけど・・・」

すると、ラウルさんは心配そうに彼女に声をかけ、それに彼女は、苦笑いを浮かべて答えると、キツと眉を吊り上げて、僕を一睨みした。

タツ

「!？」

「ご、ごめんなさい」

それを見て、僕は、側にいた眼鏡の女の人の背に隠れつつ謝った。

「ベートに言い返した子とは、思えないわね」

「??」

「罰よ。ここのを向こうに運んでちょうだい」

「は、はい」

それを見て一瞬、呆れた顔になったアキさんは、僕にその指示を出した。

「・・・さあ、こつちだよ？四葉ちゃん」

「はい」

そして、近場に有ったポーションの入った箱を抱えて、眼鏡の女の人と一緒に部屋の奥へと引っ込んだ。

「ご苦労さん、受け取るぜ」

「はい」

「もう一つを持って来てくれる？」

「はい」

そこには、変わった耳の形をした男の人がいて、その人に荷物を渡し、ラウルさん達の方に引き替えし、残りを運んだ。

「四葉たんおる？」

「ロキ」

「いるわよ。四葉！」

「はい」

そうしてると、ロキ様がやって来て、僕は、ロキ様のもとに駆け寄った。

「どうかしたの？ロキ様」

「ちよーつと、着いて来てほしいとこあんねん、ええか？」

「僕は」

「ラウル達も四葉たん、連れてって構わんか？」

「大丈夫っす」

「ええ、構わないわよ」

「わかった。ほな、行こう？四葉たん」

「はい」

そして、僕は、ロキ様と共に部屋を出て、また、外へと出ていった。

「ロキ様、何処に行くの？」

「ん？ああ、着いて来たらわかる」

ロキ様は行く場所を僕に話すことなく、メインストリートを進んで行く



「着いたで」

「・・・ロキ様、何て書いてあるの?」

「ヘファイストスって書いてあるんや。ほな、行くで」

そして、たどり着いたのは炎を思わせる真っ赤な塗装の一際人目を引きそうな大きな武具屋さん。

その建物の上には“Hφαλστος”の文字が書かれた看板が掲げられていた。

「いらっしやいませ、神ロキ」

「ヘファイストス、おる?」

「はい。執務室におられます」

「わかった。ありがとうございます」

そのお店の扉を開けて中に入ると、ロキ様は店員さんに声をかけると、勝手知ったるが如く、お店の奥へ奥へと進んで行く。

コンコン

「ファイたん来たで」

そのまま、階段を三階まで上がるとロキ様は一つの扉の前に立ち止まり、ノックをした。

「どうぞ」

「邪魔するで」

その扉の向こうの部屋から声が返って来て、ロキ様と共にその部屋に入った。

「連れて来たで？ファイたん」

「いらっしやい。・・・へえ、その子がロキの新しい子？」

その部屋には紅い眼と紅い髪の右眼を眼帯で隠した女の人がいて

「せや！紹介しとくわ。新しく入った超有望株のスーパールーキーの四葉たんや。四葉たん、ファイたんや！」

「よ、四葉です。よろしくお願いします」

「もう、ちゃんと私の名前を伝えなさいよ。私はヘファイストスよ、よろしくね？四葉」

ロキ様の紹介を受けて、僕も自分から自己紹介をした。

「それじゃ、早速、始めましょうか」

「・・・何をするの？」

「四葉さんの戦闘服用の採寸や！」

「誰か！採寸して欲しい子がいるんだけど！来てちょうだい！」

「ファイたん、デザインはこれで頼むわ」

「了解」

そして、ヘファイストス様は声を張り上げて人を呼び、その横で事前に用意していたらしい紙をロキ様は、直接手渡した。

「どういうデザイン？」

「ムフフ、それは、出来てからのお楽しみや！めっちゃ可愛いのにしたから、楽しみにしときょう！」

「・・・う、うん」

なんか、とてつもなく不安を感じる笑みを浮かべたロキ様。その笑みを見た瞬間、脳裏にSAOのカリスマお針子と名高いアシュレイさんの顔が浮かび、何となく、遊ばれる予感がした。



「四葉たん、今日は、ここでお昼にしようか？」

「・・・ホームに帰らないの？」

「たまには、ええやろ？それに、四葉たんには、うちのお気に入りのお店、知ってて欲しいんや！さあ、行こう」

採寸を終えて、僕は、ロキ様のお気に入りだというお店に連れて来て貰った。

そのお店は、二階建ての建物で、飲食店らしいく、ホームの食堂の食事時並みに良い匂いが漂って来た。

「ミア母ちゃーん、来たでー！」

「あんたかい。見慣れない顔を連れてるね」

「ああ、うちの新しい子や」

「ほお〜」

店内に入ると、カウンターの中にいる大柄の女の人が目に入ってきた。

その次に、猫耳の人、エルフ耳の人、普通の耳の人のウェイトレスさん達。

「全然、冒険者らしくないねえー。シル、案内してやんな」

「はい！ロキ様、こちらへ」

「ありがとさん」

カウンターの中の方は、ウェイトレスさんの一人を呼び、僕達を案

内させた。

「こちらが、メニューです」

「おお！」

「どうぞ？」

「あ、ありがとうございます」

そして、メニューを受け取って、メニューを見た。
一応。

「・・・」

「クフフ・・・シルちゃん、このパスタセット二つとグラスワイン一つ、果実水一つ、頼むわ」

「はい。お預かりしますね？」

一応なのは、僕はまだ、ここの字が読めないからで、ソレをわかっているロキ様は、クフフと笑って、手早くこの席に案内してくれたウエイトレスさんに僕の分も含めて注文してくれた。

それで、メニューを返して、厨房の方へ入っていくのを見送った。

「綺麗なお姉さん、多いんだね」

「クフフ、せやろ？ここは、それだけやのーで、料理も酒も美味しいやで？」

「そうなんだ・・・ロキ様は、綺麗なお姉さん、好き？」

「おう！」

見送って、他のウエイトレスさん達も美人なお姉さんばかりで、ふと、ロキ・ファミアもアイズさんやリヴェリアさんをはじめとしたお姉さん達は、皆、美人だなと思って、ロキ様に聞いたら、すごい、良い笑顔で答えてくれた。

「お待ちせしました」
「!？」

そして、運ばれて来たミートボール入り大盛りのトマトソースの Pasta と普通盛りの同じ Pasta とそれぞれのサラダとスープ。
そこうちの大盛りの Pasta のセットが僕の前に置かれて、とてつもなくビックリした。

「ただでさえチビなんだ。じゃんじゃん食べて、じゃんじゃん力付けて、じゃんじゃんここで金、落としていきな！」

「あ、ありがとうございます」

「しつかり、食べるんやで？ 四葉たん」

「は、はい」

すると、カウンターの所から、有り難いような有り難くないようなお言葉をいただき、その好意を無下にすることなんてできるはずがなく、僕は、ここ一番の頑張りを見せ、なんとか一人で食べきった。
すごく美味しかったけど・・・

第16話・バベルの上と新しい武器

「今日は、儂とダンジョンに行くぞ」

「えっ？」

そして、その日の朝食後、唐突にガレスさんが僕に言った。

「本当に？本当にダンジョンに行つて良いの？」

「なんじゃ、その反応は」

「だって、ダンジョンに行くのは、もっと後だって思つてたから」

正直、本気でビックリした。

フィンさんとの話で、もう少し後になると思つていた。

「何処まで行くの？」

「何処まで行きたいんじゃない？逆に」

「十三……」

ゴオン！

ちよつと、興奮気味に何処まで行くのか聞いた僕は、逆に聞かれて、十三階層について答えようとした。

すると、僕がそう言いきる前に頭に衝撃が走った。

「馬鹿か！貴様は！私の座学の何を聞いていた！」

「……リ、リヴェリアさん……」

衝撃の正体は、いつの間にか僕の後ろに立っていたリヴェリアさんが僕の頭に鉄拳を落としたからだだった。

無茶苦茶、怒っていた。

「四葉」

「流星に、それはダメだよ」

「そうですよ？四葉ちゃんは、まだ、レベル一、駆け出しなんですから、中層はまだまだ早いです」

「・・・メツ、だよ？四葉」

おまけに、共にいた、アイズさんやティオネさん達にも怒られた。当然だけど・・・

「じゃ、じゃあ、その手前の十二階層！」

「ああ??」

「ヒッ!？」

なら、その手前の十二階層と思って言ったら、リヴェリアさんに睨まれた。

「・・・じゃ、じゃあ、この間の七階層は?」

「七階層か」

なので、ちよつと、怯えながら、僕は、七階層でどうだ?と今日、一緒に行くガレスさんじゃなくてリヴェリアさんに聞いた。

「そこまでなら、許可しよう」

「ホッ」

なんとか、七階層までならOKを貰って、僕は、ホッとひと息。

「ただし！一歩でも下の層に行こうとしてみる、拳骨では済まさんからな！」

「は、はい！」

「ガレス、貴様もしっかり、見張ってる」

「わかっておる」

そんな僕にリヴェリアさんは釘を刺して、ガレスさんにも僕を見張るように命じて、去っていった。

「儂等も行くぞ」

「う、うん」

「まあ、あまり無茶しないようにね?」

「楽しんでおいで?」

「ガレスさんもいますが、気を付けて行ってきてくださいね?」

「いってらっしゃい、四葉」

「うん、いってきます」

ソレを見送り、アイズさん達にいつてきますの挨拶をして、僕とガレスさんは一度それぞれ自室に戻って準備をして、エントランスに集合し、ホームを後にした。



「ダンジョンの前に、まずは、あの上に行くぞ?」

「・・・あの、この上って何があるの?」

街中をダンジョンの入口であるバベルに向けて歩いてるとガレスさんがその上の方を指して言った。

それは、僕が昨日の明朝に抱いた疑問の答えが聞けると言うことで、僕は、当然、その質問をした。

「ん??お主、知らんのか?」

「う、うん」

「彼奴が、ギルドの持ち物であるのは知っていよ?」

「うん」

「それゆえに、儂等、冒険者の為の公共施設があるんじや。冒険者用

のシャワールームとか、簡易食堂とか医療施設とかの？」

「うん」

「後は換金所もな」

「あ、彼処に換金所まであるの!？」

「そうじゃ。後は、着いてから教えてやろう」

「うん！」

まさか、まさかだ。

彼処に換金所まであるなんて、もし、また、こつそりダンジョンに行くことがあったら、そこで換金すれば、わざわざ、エイナさんがいるギルドに出頭しに行くようなマネをしなくてすむということだ。

心の底で、しつかり、換金所の場所を覚えておこうと誓い、僕は、先を行くガレスさんの後を必死に追い掛けて着いていった。



「こつちじや、四葉」

「うん！」

バベルに着くと一気に三階まで階段を使つて上った。

ガレスさんの言っていた換金所は三階の壁際の一角にあるのを目の端で発見して覚え、ガレスさんがそのフロアの中心に、いくつもあ
る円形の台座に向かって歩くのを追い掛けた。

「コレに乗れ」

「う、うん」

その円形の台座の一つに恐る恐る乗った。

ギユッ

「ん?？」

「・・・」

「ガハハハ!!」

ビクッ

「!？」

乗ったは良いけど、どうなるのかわからなくて、僕は、思わずガレスさんにしがみついていた。

すると、ガレスさんは、そんな僕を見てか豪快に笑った。

「お主、実は、相当な怖がりか？」

「・・・」

「なあに、別に攻めてるわけではない、むしろ、そういう気持ちは大事にするの良い」

「・・・」

「何かを怖がることは、ダンジョンでパーティーを助ける事もあるからの？」

そう言っつて、もう一度、豪快に笑ったガレスさんは、僕の頭をぐしやぐしやと少し乱暴にかき回した。

そして、ガレスさんが備え付けの装置を操作したと思えば、台座は地面から離れて、そのまま上へ上へと昇り始めた。

ビクッ

「!？」

「ガハハハ!!大丈夫じゃ、大丈夫。儂等も最初はお主と同じじゃったよ」

「えっ?」

「儂等も最初、コレに乗った時は驚いたもんじゃ。だから、大丈夫じゃ」

ポンポン

「!？」

それにもやつぱりビックリした僕の頭を今度は優しく、ポンポンとガレスさんは叩いた。



「到着じゃ」

「・・・(ハハ)はっ？」

そして、到着したのは八階。

「ここは、お主が昨日、ロキと行ってきたヘファイストス・ファミリアのテナントのフロアじゃ」

「!？」

その階には、そこかしこに様々な武器のお店や防具のお店があって、買い物客もそれなりに沢山いた。

ガレスさんはこれ等全てのお店がヘファイストス・ファミリアの店と言う。

「ギルドは、四階から八階までをヘファイストス・ファミリアに貸し出しておるんじゃ」

「・・・」

「ガハハハ!!ビックリしたか？」

「・・・じゃ、八階から上は？」

おまけに、四階から八階までがそうだと。

頭の中で、この八階を基準に四階までのお店の数を大体で計算して、出た結果にビックリし過ぎて僕は、言葉を失った。

なんとか、ガレスさんの笑いで気を取り直して、八階から上の事を聞いてみた。

「ギルドがテナントとしてかしだしておるのは、二十階までじゃ。二十階から上は神が住んでおる」

「何で、ホームに住んでないの？このオラリオにいる神様は皆、ファミリアが有るんでしょ？」

「人によりけり、ならぬ、神によりけりじゃ。ロキのように儂等と暮らしたがる神もおれば、別で住みたがる神もおるといふことじゃ」

「・・・なるほど」

その質問にちゃんと答えてくれるガレスさん。

僕は、ガレスさんの言葉に八階の天井を見た。

見て思った。

これ以上、あの視線のことは探らないでおこうと

「あつ」

「ん?!?どうした?」

そして、天井を見るのを止めて、改めて周囲を見回してみても、あるお店に目が止まった。

「ここって、刀もあるんだね」

「刀?・・・ああ、極東の武器か」

「きよ、きよくどう?」

それは、日本人なら誰しもが知っている刀の専門店。

そのお店を見るなり、ガレスさんは、聞き慣れない単語を口にした。

「どれ、覗いてみるか」

「えっ?」

「行くぞ」

「う、うん」

そして、ガレスさんはそのお店に足を向けて、僕もその後を追った。

「いらっしやいませ」

「少し、見せて貰うぞ」

「はい、どうぞ」

「・・・」

店内に足を踏み入れてみて、また、僕は、ビツクリしていた。

だって、刀だけじゃなくて、クナイとか手裏剣なんかも置いてあったから

「お主は、こういう極東の武器とかの方が好きなのか？」

「・・・う、うん」

その店内の様子にビツクリしていると、ガレスさんが聞いた「こういう武器が好きなのか」と。

そりゃ、好きさ。

コレでも僕は、日本人だもん。

「もう少し、見ても良い？」

「ああ、構わん」

「ありがとう」

見た感じ、刀は僕の背丈よりも長いモノばかりだし、買う訳じゃないけど、もう少しだけ見ておきたくて、ガレスさんをお願いした。

こころよくOKを出してくれたガレスさんにお礼を言っつて、刀をもっと近くで見て見ることにした。

「・・・やっぱり、大きいのばかり・・・ん??」

「・・・」

やっぱりというかなんというか、僕よりも大きいのばかりで、ちよつとだけ、がっかりしていると、一振りの刀に目が止まった。

「まるでお主のような剣じやの」

「・・・うん」

その刀は、どの刀よりも小さく、鞘と鐔が白くて柄自体は赤っぽい色だけど巻かれてる皮が白で、おまけに鐔がなんとなく、僕の名前の由来である四葉の葉の形をしている気がした。

「名前は、アレじやの」

「なんて書いてあるの？」

「兎の刀と書いて、ウサタじや」

「・・・」

うん、名前は聞かなかったことにしよう。

「あ、あの、コレ、抜いてみても良いですか？」

「えっ？あ、はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

とりあえず、店員さんに許可を取って、僕は、その刀を手にしてみた。

キーン

「・・・」

「ほお」

重さは、今、背にしている短剣よりも若干、軽め。鞘から抜いて、刃と波紋を見る。

ガレスさんも僕の側で同じ様に刃と波紋を見て歓声を上げた。
ソレだけ、とても綺麗な刀だと言うこと、正直、欲しいと思った。
けど

キイン

「……」

「四葉」

「ん??」

「ソレを貸してくれるか?」

「うん」

けど、買うわけにはいかないと思って、鞘に戻して名残惜しかったけど、もと有った場所に置こうとしたら、ガレスさんに貸してくれと頼まれたのでそのまま彼に手渡した。

「すまんが、コレをくれ」

「えっ?」

「後、コレとコレも、包装はいらん、すぐに使うからの」

「は、はい。合計で三〇〇〇〇ヴァリスになります」

刀を僕から受け取ったガレスさんはそのままカウンターへ行くと、クナイを五本とガレスさんが着けるには短すぎる剣帯を刀と共に置いて、会計を済ませてしまった。

ズイツ

「……」

「ほれ、受け取らんか」

ブンブン

「ガ、ガレスさん」

そのまま、刀を含めたソレ等をズイツと僕に差し出したガレスさん

に僕は、全力で首を横に振って受け取りを拒否した。

「お主は、変なところで気を使いよるの。こんな、お主にピッタリな武器は他には無いじやろ。逃す手はなかる？名前はアレじやが」

「・・・」

「前にも言ったじやろ？遠慮をするなど。お主が受け取らねば、これ等は無駄になってしまっぞ？」

「・・・わかった。僕、今日、頑張つて稼ぐ」

するとガレスさんは困った顔をして顎を撫でて、僕に言った。

僕が受け取らなきや、無駄になるって。

そこまで言われたら、受け取るしかなくて、ただ受け取るのも嫌だから、僕は、そう意気込んで、この後、行ったダンジョンで本気で頑張った。

ついでに、ガレスさんにばれないようにこっそり、この間、夜にダンジョンに潜った時に取った魔石類を今日の成果に交ぜておいた。

第17話・武器の手入れの仕方

「帰った」

「おかえり」

ダンジョンでのモンスターとの戦闘を終えてホームへ帰り着いた時、空はすでに茜色に染まっていた。

「どうだった？」

「これが今日のせいじゃ」

帰ったその足でフィンさんの執務室にやって来た僕とガレスさん。ガレスさんは、ドンツとフィンさんの机の上に「今日の」、稼いだお金の入った袋を置いた。

「しめて、四〇〇〇〇ヴァリスじゃ」

「へえ、すごいじゃないか、四葉」

「う、うん」

「その剣、ガレスに買って貰ったのかい？」

「うん。後、この剣帯とクナイも」

「そうかい。良かったね」

そのお金の入った袋と僕の新しい武器である刀を見て、ニツコリと笑うフィンさんに正直、生きた心地がしなかった。

だって、袋に入った半分は、夜の時の分で、なんかフィンさんの笑ってる顔を見ると、ポロツと墓穴を掘りそうでヒヤヒヤで、即、この場から逃げ出したい衝動にからけるけど、ソレを結構したらしたので、バレル。

少なくとも、感づかれるだろう

「ガレスの感想的にはどうだい？」

「ああ。お主等と抱いた印象と同じじゃ。しかし、一つ聞きたいことがある」

「聞きたいこと?」

「ああ。四葉、お主、今日の探索前に十三階層に行きたいと言っておったじやろう?」

「えっ? あ、うん」

「儂としては、お主が、ただ興味本意で行きたいと言っているとは思えん。お主は、儂等の注意もちゃんと聞くじやろ?」

いや、ソレは違う。

「ただの興味本意だよ。十三階層、と言うより、僕は、このミノタウロスを見てみたいだけ」

「ミノタウロスをかい?」

「うん。僕の中では、ミノタウロスはそこまで強いモンスターじゃないんだよ。そりゃ、警戒はしないといけないけど、十階層のオークとかよりも弱いモンスターだった。だから、どれだけ違うのか知りたかっただけ」

僕は、ガレスさんから来た何で僕が最初に十三階層に行きたいと言ったかの質問の答を言った。

「二匹で良いから見たかっただけ。そうすれば、どういう違いがあるのかわかるし」

「・・・なるほどね。そう言えば、君は、このモンスターと似たモンスター達と戦ってたんだよね?他にどんなモンスターと戦ってたんだい?」

「えっと」

そして、フィンさんから来た質問にインクラッドのモンスター達の事を思い返しながら、ソレ等の名前をつらつらと並べていった。

そう言えば、こうやってちゃんと向こうのモンスターの話をしたのは初めてだなんて思いつつ、今、僕の頭の中に浮かんでいるモンスター達の映像をそっくりそのままフィンさん達に見せることが出来れば、向こうとこっちでのモンスターの違いを聞けるのに、まことに残念だ。

そうすれば、ミノタウロスを見たいとかそんなことを思う必要もないのに……



「……そうか、わかったよ、ありがとう、話してくれて」
「うん」

アインクラッドのモンスターの名前を上げていっていると、徐々にフィンさん達は顔色を悪くしていった。

「……ちよつと、考えてみるよ」

「?!」

そして、フィンさんは何かを考え始めてしまった。

ポンッ

「!？」

「行くぞ？ 四葉」

「う、うん」

その姿を見てると、ガレスさんが僕の頭に手を置いて、フィンさんの執務室からの退室を促して、共にその部屋を出た。

「僕、何か悪いことした？」

「いや、お主は気にせんで良い。ほれ、武器の手入れの仕方を教える

約束じゃったろ？」

「・・・うん」

「始める前に、とりあえず、浴場で汗を洗い流してこい。その後、儂の部屋に来ると良い」

「・・・来いと言われても、僕、ガレスさんの部屋、知らないよ？」

「ああ、そうじゃったか。儂の部屋はこの部屋の下じゃ。わからなかったら、誰かに聞け」

「う、うん。わかった」

フィンさんの部屋から出たところで僕とガレスさんも一旦、別れて、僕は自室と、お風呂に向かって、その後にもう一度部屋に戻って、刀を手にガレスさんの元に向かった。



「おう、来たか」

「うん」

ガレスさんの部屋は、ガレスさんの言った通り、フィンさんの執務室の真下にあった。

リヴェリアさんとフィンさんの部屋とも印象の違う部屋。

飾られた斧や大剣や盾、家具類なんかも二人の部屋の家具と違って脚の短い物が多い気がする。

「ほれ、こつちへ来い」

「うん」

ガレスさんに手招きされてベットに腰を掛けてる彼の横に僕も座った。

「ほれ」

「ありがとう」

「言われた通りにやってみろ。まずは剣の腹に沿って・・・」
「えっと、こ、ことう？」

座るとぐいっと手拭いを渡され、ガレスさんは僕が今まで使っていた短剣で僕に手本を見せながら、武器の手入れの仕方を教えてくれて、僕も、刀を鞘から抜き、渡された手拭いで拭いていく。

「お主とこうしていると、幼い頃のアイズを思い出すの」

「アイズさんを？」

「そういや、お主の年は、あの子がここに入団した時と同じじゃったか」

そうしていると、ガレスさんは昔を懐かしむようにそう言った。

「あの頃のあやつは、ただがむしやらに強さを求めておった。まあ、今もそこは変わらないが」

「・・・」

「良いか？四葉。武器はな、こうして入念に手入れをしてやらなくてはならん。モンスターの返り血を浴びて放っておけば錆びてしまいうし、塵一つでも付いておれば切れ味も鈍る。得物というものは頑丈そうで、その実繊細な代物じゃ。『武器は使い手の半身』。こんな言葉もある。儂等の手で半身を労わってやらなくてはな」

「うん」

そして、ガレスさんの言った『武器は使い手の半身』と言う言葉。

その意味は、僕だつてよく理解してるつもりだ。

アイコンクラッドにも『剣がプレイヤーを象徴する世界』って言葉がある。

僕の剣を含めた装備とリユ어의装備品をメンテしてくれてるリズベットさんだつて、僕に何度も言っていた。

“武器を大事にしなさい” って “毎日攻略が終わったら、店に来てちゃんとメンテしなさい” って、だから、僕は、彼女のお店を利用するようになってからは、ずっと、その日の攻略が終わる度に彼女のお店に足を運んだ。

「ねえ？そっちも残りは僕がやつても良い？」

「ん？こっちをか？」

「うん！今まで助けてくれたお礼がしたいから」

その彼女の顔を頭の中で思い描きながら、僕はガレスさんが拭いている剣を指さして言った。

「そうか。わかった。残りはお主がやれ」

「うん！」

まずは、今、手にしている刀からだけど、丁寧に丁寧に拭いていると、新品だったけど今日の探索で霞んでいた刃が徐々にその輝きが元に戻って来るのが目に見えてわかって、僕も嬉しくなった。

「そっちは、その位で良いじゃろう」

「うん！」

「ほれ、次じゃ」

「うん！」

刀の方を終えて、次。

短剣をガレスさんから受け取り、刀の時のように、いや、それ以上に丁寧に拭いた。

これまで、時には空中にいるモンスターに向かって投げたりもしたわけだし……

心の中で、その事も含めて、“ごめんね”と“ありがとう”の気持ちを込めて、拭いた。

ポンッ

「!？」

ぐしやぐしや

短剣をぐしぐしと拭いていると、本日、何度目か、ガレスさんの手が僕の頭に乗って、少し乱暴にかき回された。

なんだろう、今日、何度もガレスさんに頭を撫でてもらったけど、今のこの瞬間のモノは、少しだけこそばゆい感じがした。

「よっ」

「・・・」

そして、ガレスさんは僕の頭から手を離すと、自分の武器を手にとって、磨き始め、それを横目で見つつ、僕も手もとにある短剣を拭くことに集中した。

そうしているうちに、短剣もガレスさんの武器もその輝きを取り戻していった。

第18話・そして、バレる

「今日の探索はどうだったの？四葉」

「うん。キラアアントとかウォーシヤドウとか、いっぱい戦って、四〇〇〇ヴァリス、稼いできたよ？」

「へえ、凄いじゃないですか、四葉ちゃん」

「頑張ったね？四葉」

「うん」

ガレスさんに武器の手入れの仕方を教えて貰った後、夕食の時間になって、そこでティオネさんから、今日の探索の事を聞かれ、僕は、そう答え、レフイーヤさんとティオナさんに褒められて、誇らしいような、申し訳ないような複雑な気持ちになった。

「後、武器の手入れの仕方を教えて貰ったよ？」

「そう」

「私も、武器の手入れの仕方、ガレスに教えて貰ったよ？同じだね？」

「うん！」

気を取り直して、ガレスさんに武器の手入れの仕方を教えて貰った事も話すと、アイズさんはそう言って微笑んでくれた。

「四葉たぁーん」

「??」

「このあと、ステイタス更新しに、四葉さんの部屋に行くから、待っててやー！」

「ロキ、行儀が悪い」

ゴオン

「アウチイ!？」

「なにやってんだか」

「ホントだね」

そんな話をしているとフィンさんやガレスさんと晩酌をしてるロキ様が立ち上がったって、僕の方に手を降りながら、このあとの予定を大声で知らせてくれた。

その後、リヴェリアさんがロキ様の頭に鉄拳を落として、強制的に席に座らされる姿に、この食堂にいる人達は、呆れたり、苦笑いを浮かべたりと様々な反応で、僕もその中に交じって、苦笑いを浮かべて見た。



「ほお、コレが、ガレスに買ってもらった刀か」

「うん！」

「ほんま、四葉たんみたいな刀やな」

「ガレスさんもそう言った。それに、手にも馴染んだし、切れ味も良かったんだ」

「そうかく、まさに、運命の巡り合わせやなあ。大事にしいや？四葉たん」

ポンッ

「うん！」

夕食後、約束通り、僕の部屋にやって来たロキ様は机の上にクナイと剣帯と共に置かれた僕の新しい刀を見て、そう言って微笑むと僕の頭にその手を置いた。

「ほな、始めようか？上、脱いで、背を上にしてベットに寝転がってや」

「はいー」

そして、僕は、服を脱いでベットの上でうつ伏せになった。

ギシッ

「よつと」

その上にロキ様が僕の体を跨ぐようにして乗る。

ブスッ

「・・・」

ツウー

そして、直後に少しだけ血の臭いがすると、その臭いが僕の背に這わされる。

「♪～♪～」

「・・・」

ロキ様は実に楽しそうに鼻歌まで歌っていて、僕は、それを聞きながら、終わるのを待った。

「・・・なあ、四葉たん」

「??何?ロキ様」

が、その鼻歌は唐突に終わりを告げた。

「自分、七階層までしか行ったことなかったよな?」

「うん」

そして、ロキ様にされた質問。

「なら、何で、〃オーク〃と戦った経験が刻まれとるん?」
「!?!」

その次に来た質問に、僕の全身の血がサーッと引いて行くのがわかった。

「なあ、何で？」

「・・・な、何ででしょう？む、向こうでの経験？」

「んなわけないやろ!!コレは、新しいヤツや!何したか、正直に言うてみい!」

「・・・」

「四葉たん?言つとくけど、うちは神や、嘘付いたってすぐわかるで?」

そして、もう、ダメだっと思った。

「・・・反省会、した日の夜、こっそり抜け出して・・・十階層まで行って・・・オーク、一体と・・・戦って、朝方、こっそり、帰った・・・」
「なっ!?!」

だから、僕は、素直に白状した。

バチイン

「イダアイ!?!」

次の瞬間、僕のお尻に衝撃が走った。

「なんちゅー無茶を!」

バチイン

「イダアイ!?!」

「するんや!」

バチイン

「イダアイ!?!」

「この子は!!」

バチイン

「痛い!」

そこから、何度も、何度も、何度も、ロキ様は僕のお尻を叩かれた。

バチイン!

「痛い!?ふえ・・・ロキ様、やめてえ〜」

「やめるか!コレは、神からの、おいたをした四葉たんへの罰や!!」

バチイイン!!

「イダア!!?ごめんなさいするから、やめてよおお!!ふええええ!!」

確かに、僕自身が悪いとは思いう、思うけど、こんな風に誰かに叩かれた経験の無い僕は、足なんかをバタ付かせてこの状態から逃れようとしたけど、腰辺りをがっしり拘束されて逃げ出すことは出来ず、大声を上げて泣いた。

当然、大声を上げて泣けば、その声は、ホーム中に響き渡る訳で

ドタドタドタ

バアアン!!

「うるせーぞ!!なんの騒ぎだ!・・・って」

「ちよつとー!ロキ、何やってんの!」

すると、遠くの方から、複数の足音がこちらに向かって走って来て、最初に、あの獣耳の男の人が部屋の扉を蹴破る勢いで扉を開けると、飛び込んで来て、続いてテイオナさんが

バチイン

「ブヘツ!」

ヒョイツ

「!」

「大丈夫？四葉？」

そして、二人の間をすり抜け、アイズさんが傍までやって来たと思えば、ロキ様の頬をひっ叩いて、僕の拘束を解くとそのまま、僕を抱き上げた。

「痛く、痛いやん！何すんねん！アイズたん！」

「ロキ、四葉、泣かしちやダメ」

「うちは、悪ない！悪いんは、四葉たんの方や!!四葉たん、夜中にこっそりホーム脱け出して、十階層で行ったんやぞ!!」

「「・・・えっ」」

ロキ様は叩かれた頬を擦りながら、叩いたアイズさんとテイオナさんや獣耳の人と一緒に駆け付けた部屋の外にいる人達に解らせるように、僕を指さしながら、僕か泣いてて、ロキ様が僕のお尻を叩いていた理由を叫んだ。

「うちは、ただ、神として親として、四葉たんを叱っただけや！」

「ほお〜」

「「「!?!」」」」

すると、部屋の外の方から、とんでもなく怒りに満ちた声が響いて、僕の泣き声を聞いて集まって来ていた人達も含めてこの場にいる全員が恐怖で顔を強ばらせた。

「それは、本当か？四葉」

「ヒイツ!?!」

その声の主はもちろん、リヴェリアさんで、肩を怒らせ、その背中に般若か、修羅を背負ってこちらに一直線に向かって来る。

「どうなんだ？ハッキリ、答えてみる？ロキの言うように、本当に、夜中に、こっそり、一人で、十階層に行ったのか？」

「……」

その姿に、僕は、答えると言われても、恐怖のあまり、ただ、震えるばかりで声が出せなかった。

「そうか、声が出せぬか。ならば、首を降って答える。行ったのか？」

「……」

コクツ

代わりに、恐る恐る首を縦に振った。

「……そうか。アイズ、その大馬鹿者を置いて下がれ」
「う、うん」

そして、床に下ろされた僕

ドゴツツ!!

「!？」

ドサツ!!

そんな僕の頭にリヴェリアさんの強烈な拳骨が落とされ、そのままの勢いで僕は、床に倒れ込んだ。

その拳骨の痛さは、ロキ様のお仕置きの痛さが何倍も、何十倍も、可愛く思えるほどの痛さだった。

まるで、雷を落とされた見たいに思えるほどの強烈な痛みに僕は、さつきとは別の意味で声が出せなかった。

「アホらし」

「あつ、ベート」

そして、そんな一連の流れを見ていた人達は、また一人、また一人とこの場を去って行った。



「貴様は、私の教えの何を聞いていた！」

「・・・」

「ダンジョンでは、一つの油断が命取りになるのだぞ！わかつているのか！四葉！」

「・・・はい」

その後、服を着直させて貰った僕は、床に正座をさせられて小一時間ほど、リヴェリアさんから説教を受けていた。

ちなみに、一応、ステイタスの更新は、すでに済まされている。今回ののは、こんな感じた。

四葉；レベル1

【ステイタス】

力；	E 4 8 9 ↓ D 5 6 9	敏捷；	E 4 3 4 ↓ D 5 2 4
耐久；	E 4 0 0 ↓ D 5 1 0	魔力；	C 6 1 5 ↓ B 7 0 5
器用；	D 5 9 7 ↓ C 6 3 0		

【魔法】

・

【スキル】

・

相変わらず、ステイタスの部分だけしかわからないけど、ロキ様の話によると、リヴェリアさんからの拳骨一つで耐久が+50されてたんだとか・・・

僕が全面的に悪いけど、恐るべしである。

第19話・罰と賭け

ドンツツ!

「!？」

翌日、朝食後、僕の目の前に何冊もの分厚い本と同じ数のノートが音を立てて積み上げた。

「良いか。私が戻るまでに全部を終わらせておけ」

「!？こ、これ、全部!？」

積み上げたのは、もちろん、リヴェリアさんで、これは僕への罰。

「何か、文句でもあるのか？」

ブンブン

「あ、ありません!!」

「フィン、見張りを頼んだぞ」

「う、うん」

パタアン

同じ部屋には、フィンさんがいる

というか、ここ、フィンさんの執務室なんだけどね？

リヴェリアさんはフィンさんに僕を見張るように言うと、そのまま部屋を出て行った。

なんでもこれから、ダンジョンでレフイーヤさんを含めたエルフの人達と何かの特訓をするらしい。

「す、すごい量だね」

「・・・うん」

リヴェリアさんが部屋を出て行って、フィンさんが改めて僕の目の

前に積まれた本達を見て苦笑いを浮かべて言った。

「そういえば、字は、読めるようになったのかい？」
ブンブン

「・・・まだ、全然読めない」

「そ、それで、この量かい？」

正直、リヴェリアさんが帰ってくるまでに終わらせるなんて出来るはずが無いと思った。

一応、一番上のモノを手にとってみる。

「・・・これ、前にやった事ある奴だ」

「なるほど、リヴェリアは君にもう一度、学び直して欲しいって事だね？」

「・・・うん」

その中身を見て、フィンさんも僕も、リヴェリアさんの意図を感じる事が出来て、ノートの方を手を取った。

「わからないことがあったら、聞いてくれて良いからね？」

「うん。ありがとう」

そして、僕は、フィンさんが見守る中、本を開いてノートに書き写し、その下に自分でわかるように、向こうの字で同じ事を書いて行く。前は、これをリヴェリアさんが文字を指で追って、読み聞かせてくれていたのを、ノートに自分の字で書き写していた。



「四葉、少し、休憩しないかい？」

「ううん」

それから暫くして、僕は、フィンさんに声をかけられた。

「でも、そろそろ、お昼だよ?」

「これ、終わらせちゃいたいの。後、少しだから」

「・・・」

それは、お昼のお誘いだった。

けど、二冊目がもう少しで終わりそうだったのもあって、僕は、そのお誘いをお断りした。

パサッ

「あっ!」

「休憩は、必要だよ? 四葉。さあ、行こう」

「・・・はい」

なのに、フィンさんは、今やっていた本を僕から取り上げて、強制的に僕を休憩に入らせた。



「四葉、少し、僕に付き合ってくれるかい?」

「??」

昼食、終了後、フィンさんはそう言って、模擬戦用の短剣と長槍を取りに行ってから僕を中庭へと連れ出した。

「あの、鍛練をするの?」

「うーん。鍛練って言うより、ちよつとした腹ごなしの運動かな?」

「・・・腹ごなし」

そこで模擬戦用の短剣を渡された僕は、アイズさんと毎朝、鍛練をする時に使うモノだったから、フィンさんともなのかと思つて聞いた。

「でも、勉強」

「すぐに終わらせるからさ。ね？」

「・・・わかった」

けど、鍛練じゃなく、腹ごなしの為の運動したいとの事。

まだ、フィンさんの執務室に残つてる本はまだまだ有るし、僕としては、すぐにでもそれに取り掛かりたかったけど、フィンさんに、念を押される形でお願ひされたら、断るわけにもいかず、模擬戦用の短剣を手に距離を取ろうと僕は、歩き出した。

「そっだ、四葉」

「何？」

「ちよつとだけ、賭けをしようか？」

「賭け？」

「うん。僕に、一発でも入れる事が出来たら、君の望みを叶えてあげるよ」

「・・・僕の望み？」

「うん。ミノタウロスを見せてあげる」

そこで、フィンさんは、僕にそう言う賭けを持ち出した。

「・・・ロキ様やリヴェリアさんに、怒られない？」

「うん、怒られたりしないよ？僕の決定だからね？」

「わかった。僕も、見たいから、やる」

「うん」

魅力的な話だけど、僕としては、昨日の事もあつて、怒られないこ

とがもつとも重要だった。

それも、なんとかかなると言うのなら、断る理由はなかった。



「四葉から、良いよ?」

「・・・うん」

そして、それぞれ、剣を手に距離を取った僕等。

ニコツと笑って、僕から攻めて良いって言ったフィンさんには、どう見ても隙はなくて

「・・・ふうく・・・」

ダッ

仕方がなく、一度、深く呼吸をして、僕は、まずは正面から斬りかかろうと駆け出した。

「正面からか。わかりやすいね」

「・・・」

ブン

「おっと」

そして、フィンさんに飛びかかって、それを避けられると声のした方に体術スキル【水月】を模した蹴りを

ザン

「・・・」

ブン

それを避けられれば、再び、斬りかかり、避けられれば拳を交えた。

「ふう〜」

ダツ

それで再び距離が開くと、剣を構え直して、再び距離をつめた。そこから、上段下段、左右、突き、体術を混ぜ合わせてフィンさんに攻めいった。

「良いね。四葉。良いよ」

「何が？」

「君の戦い方さ。ダンジョンでも思ったけど、流石だよ。剣の鋭さも、何より、言葉を交わす余裕もある。それじゃ、今度は、僕から行くよ」

「!？」

また、距離を取ると、フィンさんはそう言うや否や、槍で攻めて来た。

左右の突き攻撃や足元を水平に薙ぎ払って来たりともものすごい早くて鋭い攻撃が繰り返されて来る。

それらをなんとか、躲けていく。

「これを躲せるのかい？」

「フィンさんなみに早い人、僕は、何人も知ってる。その人達とも手合わせしたことある」

「そうかい」

躲しつつ、どう攻めるかを考える。

どうやれば、フィンさんに一発、入れられるかを。

正直、僕と身長差が変わらない相手と戦った事なんて、モンスター以外では、あり得なかったし、攻め方がわからなかった。

ブン

「・・・」

「ん？」

仕方がなく、次に来た攻撃を大きく距離を取るようにはぐす。
そして

スツ

「・・・」

僕のもう一つの手に出た。

ブン!!

「!？」

それは、短剣を上段に構えて、渾身の力を込めて、フィンさんの肩間に目掛けて、投擲スキルの「シングルシュート」の要領で短剣を投げた。

サツ

「・・・」

それは、投げた短剣はフィンさんによって、躲された。

トンツ

「!？・・・なるほど、投げた短剣は囷だった訳か」

「うん」

その躲した隙に、瞬時に距離を積めて、フィンさんのお腹に軽く拳を当てた。

ポンッ

「!?」

「約束だ。今度、ミノタウロスを見せに連れてってあげるよ?」

「!?ほ、本当!?!」

「うーん、そんなに嬉しそうにされちゃうと、なんだけど、約束だからね? さあ、部屋に戻ろうか?」

「うん!」

そこで、フィンさんの運動?は終了した。



「帰ったぞ」

「おかえり、リヴェリア」

「おかえりなさい、リヴェリアさん」

その後は、使った模擬戦用の短剣と長槍をなおして、フィンさんは書類を僕は、リヴェリアさんからの課題をなんとかこなした。

「ちゃんとやったか?」

「うん。コレ」

とは言え、終わったのは本当にリヴェリアさんが帰って来るギリギリだったけど。

僕は、帰って来て、フィンさんの執務室にやって来たリヴェリアさんに出来たばかりのノートを差し出した。

「ふむ」

「・・・」

「他も見ろぞ」

「う、うん」

それを取ってパラパラと捲るリヴェリアさんを僕は、ドキドキしながら見守った。

ポンッ

「!？」

「良く、頑張ったな？」

「・・・勝手な事をしてごめんなさい。フィンさんも」

そして、最後の一冊を見終えたリヴェリアさんが僕の頭に手を置いた時、僕の口からは自然と謝罪の言葉が出た。

「ああ、良いさ。今後は同じ事の無いようにな？」

「僕もリヴェリアと同じさ。あまり、無茶はしないでくれ？」

「はい！」

そして、リヴェリアさんとフィンさんからは、そんな言葉が返って来て、僕は、大きく頷いて答えた。

第20話・斜め上の約束の果たし方

パコオン

「!？」

ドゴオツ

「!？」

ゴオン！

翌朝、つまり、ここに来て一週間目。

僕は、この日、初めてアイズさんに一発返すことが出来た。

が、即、お腹にアイズさんの蹴りが入って吹き飛ばされ、最初の日と同じ様に背中を思いつきり、壁に打ち付けた。

「ケホッ」

「ご、ごめん、四葉、大丈夫？」

「う、うん、大丈夫。僕も、ごめんなさい、頬っぺ」

「ううん、良いよ？」

そして、咳き込む僕の傍に駆け寄って来てくれて、申し訳なさそうにアイズさんは僕に謝った。

だから、僕も、頬を殴ったことを謝った。

「・・・」

「??四葉、どうかした？」

そこで、ふと、思った事があった。

「うん、ちょっと・・・」

「??」

そして、一度、僕は、魔法を解いてみることにした。

解き方は、精神疲弊を起こす以外に、もう一つ、目を閉じて、解きたいと思うだけ”。

そうすると、僕の中の奥底で、何か鍵とか扉が閉まるような感覚がして、耳も尻尾も、嗅覚とかも元に戻る。

「・・・四葉、なんで魔法を？」

「どんな感じなのかなって思って、この状態で戦ったら」

「・・・相手する？」

「お願いします！」

「うん、じゃあ、構えて」

「はいー！」

その後は、その魔法を解いた状態で、朝食の時間を知らせる鐘が鳴るまで、アイズさんに相手になってもらって戦えるかを貯めさせて貰った。

で、試した感想はというと、力の入り加減も、足の速さも全然違った。

魔法有りの時が100%なら、無しは、50%って感じだった。



「おはよー！アイズ、四葉」

「おはよう、ティオナ」

「おはよう、ティオナさん、ティオネさん、レフイーヤさん」

「おはようございます。四葉ちゃん」

「おはよう」

食堂では、すでにティオナさんたちが揃っていて、僕は、何時もの四人に朝の挨拶をした。

「あんた達、また二人で朝から鍛練？」

「うん、今日は、頬を殴られたよ？」
「!?」

そして、ティオネさんに聞かれて、アイズさんが答えるとレフィーヤさんが物凄い形相になった。

「四葉ちゃん!!アイズさんの頬を殴ったんですか!」

「う、うん」

「な、何てことを!!」

「お、落ち着いて、レフィーヤ。私も四葉のお腹、蹴っちゃったから、おあいこなの」

僕の名前を叫ぶレフィーヤさんは無茶苦茶怒ってて、そんなレフィーヤさんをアイズさんが必死になだめようとしてくれた。

「へえ、アイズに反撃、出来たんだ?すごいじゃない」

「す、すぐに蹴られちゃったけど」

「それでも凄いよ!四葉はレベル一でアイズはレベル五なんだから!四葉、頑張ってるんだね?偉いよ」

それとは、うってかわって、ティオネさんやティオナさんには凄く褒められた。

ぎわぎわ

「えっ?今の話、マジか?」

ぎわぎわ

「四葉ちゃんがアイズさんの頬を殴った?」

ぎわぎわ

「四葉ちゃんってレベル一よね?」

「すげー」

そして、それ等を聞いていた食堂にいた人達をざわつかせてしまった。

「おや、何の騒ぎだい？」

「団長！」

「あつ、おはよう！フィン、リヴェリア、ガレス」

「ああ」

「ああ、おはよう。それで、これは何の騒ぎだ？」

「それがね？四葉がアイズの頬を殴ったの！」

「「はあ？」」

そこにやって来たフィンさん、リヴェリアさん、ガレスさんにテイオナさんが手短過ぎる説明をした。

「あんたね、それじゃ、誤解を招くでしょ。団長、アイズと四葉は、毎朝、一緒に鍛練をしているのをご存じですよ？」

「うん、もちろん、知ってるよ？」

「それで、今日、鍛練の過程でアイズの頬に四葉が一撃を返したようでした」

「ああ、なるほどね」

そのテイオナさんの説明にテイオネさんが丁寧に付け加えてフィンさん達に説明してくれた。

「けっ！ただの紛れだろ！そんなの」

「ベート」

そこに水を指すようにその声が食堂の奥から響いた。

「いや、紛れじゃないと思うよ？僕は」

「はあ？」

「僕も昨日、四葉にお腹に一撃を喰らったからね?」

「「「「・・・はあ!」」」」

ザワザワ

「マ、マジか?」

ザワザワ

「団長にも?」

それを否定したフィンさんのその証言に、今度は食堂内がどよめいた。

「ねえ、四葉、それ本当?」

「い、一応。けど、本当に紛れだよ?」

そして、テイオナさんに聞かれて僕は、一応、当たりはしたけど、あんなのは、きつと、フィンさんが本気じゃなかったから、出来たことだって思っで、「紛れ」だと答えた。

「そんな、謙遜しなくて良いよ? 四葉?」

「謙遜じゃなくて、本当に」

「けど、君の実力は、確かだと、僕は、アレで確信して言えるよ? 君の実力は、レベル一の領域を遥かに越えてる。多分、レベル三相当じゃないかな?」

それは、フィンさんによって否定された。

そして、そんな評価もしてくれた。

正直に嬉しいとは思った。

「それでだ、四葉」

「な、何?」

「今度、遠征があるのんだ」

「うん」

「それに君も参加して欲しい」
「えっ」

が、フィンさんがそう言った瞬間、僕を含めて、言い出したフィンさんとリヴェリアさん、ガレスさんの三人以外の全員が、一瞬にして凍り付いた。

「「「ええええええええええ!!!」」」

「ちよ、フィン、本気?」

「そ、そうですよ、団長。いくらなんでも、四葉はまだレベル一ですよ?」

「そこは問題ないさ。さつきも言った通り、四葉なら深層のモンスターにも遅れはとらないさ」

再びのどよめきの中、テイオナさんとテイオネさんが抗議すると、何処か自信ありげな様子で、フィンさんは、僕が行っても問題ないと言った。

「それに、僕は、四葉と約束しちゃったからね?」

「何を?」

「僕に一撃でも与えられたら、ミノタウロスを見せてあげるって」

「・・・あんた、そんな約束したの?」

「・・・した」

そして、昨日、フィンさんと交わした約束の事を持ち出され、僕は、約束はしたことを頷いて答えた。

そしたら、食堂内に沈黙が流れた。

「けど、僕は、遠征に参加したいとは言ってない。ただ、本当に一匹だけで良いから、ミノタウロスを見てみたかっただけ」

「それなら、一石二鳥どころか、三鳥、四鳥位じゃないか?ミノタウ

ロスどころか、他のモンスターも見れるんだから」

「……」

「言っておくけど、君には拒否権はないよ？ 団長命令だからね？」

「……」

それでも、僕は、遠征に行きたいわけじゃないと言った。

確かに、魅力的な話ではあるけど、それで良いのかって思う。

が、フィンさんにニッコリととても良い笑顔で、有無を言わさない感じに言われてしまえば、どうしようもなくて

「……」

「私は、ちゃんと反対はしたぞ？ だが、団長命令だ。仕方があるまい」

なので、この中で一番、止めてくれそうなリヴェリアさんとガレスさんを見たら、リヴェリアさんからは、そんな言葉が返ってきて

「まあ、なんとかなるじやろうて」

「……」

ガレスさんからも、そう返ってきた。

「おっ？ 皆で何しとるん？」

「……ロキ様」

「ん？ どないしたん？ めっちゃ、不安そうやん？ 四葉たん」

そこにロキ様もやって来て

「遠征の事を話したんだよ」

「ああ、そう言うことか」

ポンッ

「!？」

フィンさんにその事を聞くと、ロキ様は僕の頭にその手を置いた。

「大丈夫や、四葉たん。四葉たんには、アイズやテイオネ達だけやない、こんなに沢山、兄ちゃんや姉ちゃん達がおるんやで？不安に思うことなんて、全然ないやろ？」

「・・・うん」

そして、ロキ様は僕に言い聞かせるようにそう言って、僕はチラリとアイズさんや周囲にいるアキさんやラウルさん達の顔を見て頷いた。

「そんじゃ、話は終わったな？」

ポンッ

「!？」

「さあ、はよ、ご飯にしよう？冷めてまうで？」

「そうだね？さあ、皆、朝食の時間だ。暖かいうちにいただくほうがいいか？」

それを見て、ロキ様は、僕の肩を叩いて、僕にも皆にもそう言って、話を終わらせた。

その時のロキ様もフィンさんもニコニコしてたけど、僕は、やっぱり、不安で仕方がなかった。

遠征編

第21話・初、深層へ

「オオオオオオオオオオオ!!」

「盾エ、構ええっー!!」

ドオオオン!!

ドオオオン!!

ドオオオン!!

そして、数日後、僕は、皆と一緒に四十九階層にいた。フィンさんの号令とともに打ち上がる、沢山の衝突音。

それは、山羊のようなねじれ曲がった二本の大きな角を持った馬面のモンスター、《フォモール》の群れが何十枚もの大きな盾に突撃して来た音だ。

「前衛、密集陣形を崩すな!後衛組は攻撃を続行!ティオナ、ティオネ!左翼支援急げ!」

「あーんっ、もう体がいくつあっても足りなーい!」

「ごちやごちや言っていないで働きなさい!」

更に、フィンさんの指示が飛び、ティオナさんとティオネさんが指示にしたがって、三体のモンスターを一瞬で斬り伏せた。

「リヴェリアーッ、まだあー!?!」

「――間もなく、焰は放たれる。忍び寄る戦火、免れえぬ破滅。開幕の角笛は高らかに鳴り響き、暴虐なる争乱が全てを包み込む!」

その戦闘中、ティオナさんがリヴェリアアさんの名を呼ぶ。

そのリヴェリアアさんは、魔法や矢を連発する人達の真ん中でその呪文を唱えていた。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオ!?」
「!?」

そんな時、一匹のフォモールが吠えて、仲間を蹴散らしながら、驀進して、盾を構えていた一部の前線の人達を手に行っている鈍器で吹き飛ばした。

「ベート、穴を埋めろ!」
「ちっ!何やってやがる!?!」

そのこじ開けられた穴を埋めるべく、フィンさんの指示でベートさんが動くも、数匹がレフィーヤさん達のもとに。

その頃には、僕も動いていた。

ザッ!!
「!?」
「絶空!!」

数匹のフォモールの接近に青ざめたレフィーヤさん達の前に躍り出ると、僕は、刀スキルである【絶空】を模した、単発技をフォモール達に向かって放った。

本来的、このスキルは、刀を瞬時に振り抜き攻撃する、つまり、居合いの技で、その、振り抜いた時の残撃の風が敵を切り裂く技だ。僕は、その残撃の風に魔力を乗せて、魔力の刃に変えた。

案外、この技は、ここの、向こうとは、同じなのに、ちよつと強いモンスター達にも通じた。

「先、越されちゃったね?」
「えっ?」
「アイズさん?」

ビュッ

「ちよ、アイズ、待って?!」

絶空でフォモール達を灰に変えた時、近場でアイズさんの声がしたと思つたら、風が横を通り抜け、まだまだいる盾の向こうのフォモールの群れのもとへ

「・・・おう」

「・・・すげえ」

そこからは、本当に凄かった。

斬撃に次ぐ斬撃で、近づくフォモール達を全部、倒して行って、その数を減らしていった。

その凄まじい剣劇をこの遠征で何度も見たけど、僕は、アイズさんが戦うその姿に、思わず、声を出していた。

「【汝は業火の化身なり、ことごとくを一掃し、大いなる戦乱に幕引きを】」

「アイズ、戻りなさい!!」

「【焼きつくせ、スルトの剣！我が名はアールヴ】！【レア・ラーヴァテイン】!!」

そして、その瞬間、リヴェリアさんの魔法が発動して、僕等やフォモール達の足下まで拡大していたリヴェリアさんの魔法円から、無数の炎柱が突き出して、轟音とともに僕やアイズさん達を避けて、フォモール達を丸呑みにしていった。

まさに、瞬殺。

五十を超えていただろうフォモール達を一掃した。

ブン

チイン

「・・・」

それを見て、刀を一振りして鞘に納めた僕。

「四葉ちゃん、ありがとう」

「・・・」

「でも、良いんですか？アレ」

そんな僕に、声をかけて来てくれたレフイーヤさんは、ある方向を指さして言った

「四葉ちゃん？」

ビクッ

「ヒッ！」

ガバッ

「きやつ!?!ちよ、四葉ちゃん!?!」

そこには、ニツコリと怖い笑みを浮かべるフィンさんがいて、僕は、思わずレフイーヤさんに抱き付いて、彼女を盾にした。



「・・・」

「・・・」

で、僕は、アイズさんと共に正座させられた。

場所は、四十九階層を抜け、五十階層で造った野営地に建てた本営のテントの中。

団長のフィンさん、副団長のリヴェリアさんと、ガレスさんの三人の前で

「どうして呼び出されたかわかるかい？二人とも」

「……うん／＼……はい」

「なら話は、早い」

理由はもちろん、アイズさんはフォモールの群れに突っ込んで行ったこと、僕は、持ち場を離れたことだ。

実は、僕にも一つの役割を与えられていた。

それは

「どうして、前線維持と荷物の守護の命令に背いたんだい？」

「……」

返す言葉は無い。

僕の役割は、皆の戦闘中の荷物の守護だった。

フィンさんの後で

「まず、アイズ。君は強い。だからこそ、組織の幹部でもある。内容の是非を問わず君の行動は、下の者に影響するんだ。わかるだろう？」

「……」

「窮屈かい？今の立場は」

「……ううん、ごめんなさい」

「まあ、そう言ってやるな、フィン。アイズも前衛の儂等の負担を軽くしようと、あえてフォモールの群れに突っ込んだのだろう。危うく崩れかけたからのう」

「それを言うなら、詠唱に手間取った私の落ち度もあるしな」

「アイズ、ここはダンジョンだ。何が起きるかわからない。そして、レフイーヤ達全員が君のように動けないし、戦えない。それだけは心に留めておいて欲しい」

「……わかり、ました……」

「うん、なら以上だ。キャンプの準備に戻ってくれ」

そして、先にフィンさんに叱られ終えたアイズさんがテントから出て行くのをこっさりついて行くこうと思った僕は

ヒョイツ

「!？」

「はい、四葉？君はまだ終わってないよ？」

「……」

そんなに身長差も変わらないのに、フィンさんに両脇を抱え込まれ、足が少しだけ地面から浮いた、宙ぶらりん状態で捕獲された。

「……先、行ってるね？頑張って？四葉」

「……」

そんな僕をチラリと見たアイズさんは、そのまま、テントを出て行った。

「……心配だな」

「そうだね：強くなるのは、良いことだよ。アイズにとってもファミリアにとっても」

「だがあの子は、ひた向き過ぎる。強さを求めるあまり、誰にもついて行けない場所に独りで行ってしまいかねん……」

「ハア……どうしたものかなあ……」

「フウ……困ったものだ……」

「お主等、ふけとるのー。見た目、若いのに」

「……」

そんなアイズさんを見ながら、フィンさんもリヴェリアさんも大きなため息をついて言った。

そんな二人に呆れながら言ったガレスさん。

そう言えば、フィンさんは知ってるからあれだけど、ガレスさんやリヴェリアさんは何歳なんだろうか？

ガレスさんは答えてくれそうだけど、リヴェリアさんは女の人だし、聞くのはマナー違反だし、答えてくれなさそうだ。

「ん？何だ？四葉、人の顔をジロジロと見て」

「えっ？・・・いや、何でも・・・あの、僕へのお説教は？後、下ろして？」

そんなことを思っただけでリヴェリアさんを見ていたせいもあって、リヴェリアさんは片目をつむって、僕を探るように見た。

それを誤魔化すために、僕は、さつきからずーっと僕を抱えたままのフィンさんを見た。

「ん？うーん」

「??」

けど、フィンさんは僕を下ろそうとする気配も見せず、僕を抱えたまま、僕とアイズさんを正座させていた時に座っていた椅子へと戻った。

「よっくらしょ」

「・・・」

そのまま、フィンさんは、その口から聞きたくなかった言葉を発しながら、僕をその膝の上に乗せて椅子に座った。

「・・・あの」

「ん？どうした？フィン」

「いや、四葉をこうやって抱いてると、良いなーって思えてね？」

そんなフィンさんに、僕もリヴェリアさん達もかなり戸惑った。

「良くわかんないけど、早く、下ろして?こんなところテイオネさんが見たら、僕、殺される」

「・・・だろうな」

「仕方がないか」

何はともあれ、ようやく、下ろして貰った僕は、そのままフィンさんの方を振り返った。

ポンツ

「!?」

「持ち場を離れたことは、ただけないけど、君が行動を起こしてくれたおかげで、レフィーヤ達は無事にすんだ。そこには、凄く、感謝してるよ?けど、あまり、無茶はしないでくれ?」

「・・・うん。ごめんなさい」

「うん。それで?ここまでの道中で見たモンスター達に対しての感想は?」

「・・・えっと、姿はそんなに向こうと変わらないのが多かった。けど、やっぱりこつちの方が、少し強い。そんな感じ」

すると、今度はフィンさんの手が頭に乗って、注意と、ここまで来る間に会ったモンスター達の感想を聞かれて、僕は、それに答えていった。

第22話・深層での一幕

「大荒野の戦いではご苦労だった。みんなの尽力があつて今回も無事に五十階層まで辿り付けた。この場を借りて感謝したい、ありがとう」

「いつつも四十九階層越えるの一苦労だよ。今日は出てくるフォモールの数も多かったし」

「階層主がいなかっただけマシでしょ」

「ははっ。とにもかくにも、乾杯しよう。お酒はないけどね。それじゃあ」

「「乾杯！」」

その後、解放された僕は、皆に混じってテントの組み立てなどをした。

そして、今は、フィンさんの音頭で乾杯した後、皆と一緒にここに来るまでに採ったハーブや木の実、肉果実と呼ばれる本当に肉の味にする果物を大鍋でじっくりと煮込んだスープを食べた。

「あの、アイズさん、本当に食べなくて良かったんですか？」

「うん、大丈夫」

「なーんて強がって、実はぐうぐうお腹鳴らしてるんじゃない？ほらほらー？」

「・・・」

そんな中でただ一人、アイズさんだけはブロック状の携行食を食べている。

僕もこの遠征で何度か食べたけど、アレは、あまり美味しくはなかった。

「四葉、残さずちゃんと食べるのよ？」

「うん」

ここはダンジョン内だから、警戒は怠っちゃいけないけど、この遠征が始まって、野営をする度に僕の心には、妙な懐かしさを感じていた。

アインクラッドでも、キリトさんやアスナさんと野営をしたことはあったけど、こんな感覚になったことはなかった。

本当に不思議だ。



「四葉」

「??リヴェエリアさん??」

その食事の時間が終わって、大鍋やら食器やらをアキさん達と一緒に片付けてるとリヴェエリアさんが僕の名前を呼んだ。

「片付けはその辺りにして、お前は、そろそろ休め」

「えええ」

「えええじゃない。馬鹿者」

ゴンツ

「痛い!？」

それは、僕に休めと言いに来てくれたからで、ちよつと不満を漏らしたら、頭を小突かれた。

「お前の魔力が底無しなのは、この遠征で重々、わかつてはいる。いるが、それは、何時、精神疲弊を起こすかわからんということだ。ダンジョンでは何が起きるかわからんだ。休める時に、ソレを解いて、きちんと休んでおけ」

「・・・」

そして、そう説得され、僕は、側にいるアキさんやリーネさんを見た。

「四葉、ここは良いから、休んできなさい?」

「そうですよ?休んで来てください?四葉ちゃん」

「・・・わかった」

二人にもそう言われたら、断る事も出来なくて、僕は、一足先に休ませて貰うことにした。



「それじゃあ、今後の事を確認しよう。遠征の目的は未到達階層の開拓、これは変わらない。けど今回は、五十九階層を目指す前に、冒険者依頼をこなしておく」

「冒険者依頼・・・確か、ディアンケヒト・ファミリアからのものですか?」

「ああ。内容は五十一階層、カドモスの泉から要求量の泉水を採取すること」

そして、テントに入った僕の後ろでは、ディアンケヒト・ファミリアから出された依頼についての話をフィンさんは切り出した。

「カドモスの泉・・・うえー、面倒くさー。何で引き受けちゃったの?」

「報酬は見会うものだったからな。それに派閥の付き合いもある、無下にはできない」

「つたく、あいつ等面倒な依頼よこしやがって・・・」

それを聞いてティオナさんのげんやりとした声が聞こえて来て、ベートさんも悪態をついてる様子だった。

「五十一階層には少数精鋭のパーティーを二組、送り込む。無駄な武器・道具の消費は避け、速やかに泉水を確保後、この拠点に帰還。質問は？」

「はいはい！何でパーティーを二つに分けるの？」

「注文されている泉水の量がまた厄介だね。カドモスの泉はただでさえ回収できる水が限られてる、要求量を満たすためには二箇所の泉を回らなきゃいけない」

「食糧も含めた物資に限りがあるからこう。冒険者依頼の後、五十九階層へ行くためにもあまり時間はかけられん。二手に分かれて、効率化というやつだ」

「それに、カドモスの泉は大人数で移動できないところにあるからね。戦力の分散は痛いけど、小回りは利いた方がいい。．．．他に質問は？ないなら、パーティー・メンバーを選択する」

「はい！あたしやる！アイズも一緒に行くこう！」

「うん」

「そもそも、第一級冒険者に行かせないで誰に行かれるのよ．．．少数精鋭よ、わかってる？」

「じゃ、テイオネもこっちに決まりね！」

「ちよ、まつ、私は団長と」

けど、フィンさんがパーティー・メンバーを選択する時は、テイオナさんの声が真っ先に上がった。

「リヴェリアはキャンプに残ってくれ。冒険者依頼の後のためにも、消費した精神力を休んで回復させてほしい。拠点の防衛も兼ねてね」

「．．．止むをえないか。レファイヤ。アイズ達のパーティーに入れ。私の代わりだ」

「は、はいっ．．．って、えっ!？」

「問題ないな、フィン」

「シー、そうだね。いずれリヴェリアの後釜になってもらうんだ、いいだろう」

「だ、団長っ、リヴェリア様!?わ、私はまだっー!?」

「はいっレフィーヤもこっちー!」

「これじゃと、もう片方は残った第一級で編成だのう。フィン、ベート、農・・・後は」

「おい、ラウル。お前、サポーターでこっちに入れ」

「じ、自分っすか!?!」

「他に誰がいんだよ」

そして、話の流れで、アイズさん、ティオナさん、ティオネさん、レフィーヤさんで一班、フィンさん、ガレスさん、ベートさん、ラウルさんで一班で決まったらしい。

「・・・なあ、こいつら、大丈夫か?」

「シー」

けど、ベートさんの声は、無茶苦茶不安そうで、それにフィンさんは

「ティオネ、君だけが頼りだ。僕の信頼を裏切らないでくれ」

「お任せくださいっ!!」

「ちよろー」

しばしの沈黙の後、ティオネさんにそう頼んでいた。

頼まれたティオネさんは、すごく嬉しそうで、ティオナさんは、そんなティオネさんに呆れてる様子だった。

その話を、寝る前に今日使った刀を布で拭きながら、聞き耳を立て、ちよっただけ苦笑いを浮かべながら聞いた。

「四葉ー!!」

バサッ

ビクッ

「!？」

直後、僕のいるテントに飛び込んで来たティオナさんに僕は本気でビククリした。

「あれ？寝てないじゃん？」

「武器の手入れ、してたの？」

「う、うん」

「ダメじゃない、リヴェリアに言われたでしょ？休めって」

「や、休む前に、やっておこつて思つて」

「・・・」

そんなティオナさんの後ろには、アイズさんやティオネさん、無茶苦茶不安そうな顔のレフイーヤさんが

「今日はね？皆でここで休むんだ」

「えっ？・・・あつ」

「はい、コレは直してつと」

そして、ティオナさんはニコニコしながら、僕から刀と布を奪うと刀を鞘に戻して、そのまま隅に置いた。

ヒョイッ

「!？」

「はい、レフイーヤ」

「えっ？」

「四葉をギューってしてると、すごく、安心できるから、貸してあげる」

そのまま、僕を抱き上げたテイオナさんは、そう言って、レフイヤーさんに押し付けた。

「・・・では」

ギョツ

「・・・」

「ああ、良いですね、コレ」

僕を押し付けられたレフイヤーさんは、一瞬、僕を受け取ることを躊躇したけど、それでも受け取ると、まるでぬいぐるみを抱き締めるがごとく、僕を言われた通りに抱き締めたレフイヤーさん

「でしょ？さあ、寝よ！」

「レフイヤー、私も半分、四葉、抱っこして寝て良い？」

「は、はい」

「ありがとう」

「テイオナ、あんたは一番端にいきなさい。あんた、寝相が凄いんだから」

「ええ、・・・はい、わかった」

そのまま、あれよあれよと言う間に、アイズさん達は寝る体制に入り、僕は、僕で、レフイヤーさんとアイズさんに挟まれた状態で、混乱したまま休む事になった。

第23話・芋虫モンスターの襲撃

「……」

「……」

そして、僕は、今、崖の縁に座っている。

なんで、崖かと言うと、皆で作った野営地が一枚岩の天辺にあるから。

この一枚岩の下には灰色に染まった木々で出来た樹林が階層の終わりに至るまで埋め尽くしていて、僕が見ている方角は、五十一階層へと続いている。

ヒョイツ

「!？」

「四葉、貴女、ずーっと、そうやってるつもりなの？アイズ達が帰るまで」

そうやって、座りながら眺めると、突然、僕は、アキさんに抱えあげられた。

「……ずーっとじゃ」

「ずーっと、でしょ？アイズさん達が出掛けてから」

「……」

「アイズさん達は、まだまだ帰ってこれないと思うよ？四葉ちゃん」

苦笑いを浮かべて言うアキさんとリーネさん。

ぶっちゃけ、凶星。

アイズさん達の仮眠時間が終わり、冒険者依頼のため、五十一階層に出掛けていってから、ずーっと、座って待っている、その帰りを。

「四葉ちゃん、アイズさん達と一緒にいること多いし、ちよつと不安

になつちやつたのかな？」

クシヤクシヤ

「……」

そして、アキさんに抱えられてると、レフィーヤさんとホームで同室だというエルフィさんが僕の頭を撫でに来て、言った。

「……何をやっているんだ？お前達」

「「！リヴェリアさん」」

そこにちよつと呆れ顔なりヴェリアさんが僕等のもとへやって来た。

「四葉が、ずーっとここで、座ってたもので」

「アイズさん達がいなくて、不安なのかなあゝって」

「ああ、なるほど。それで、構いに来たのか？お前達は……で、どうなんだ？四葉」

「……別に、不安、とかじゃないよ？リヴェリアさんとか、アキさん達もいるし」

で、そう聞かれて、僕は、素直にそう答えた。

「私達、そんなに四葉ちゃんに信頼されてたんですね」

「そう、素直に言われると、ちよつと、照れちゃうね」

「じゃ、ただ、帰ってくるのを待ってるだけなの？」

「……だけって言うか……ちよつと、気になるって言うか」

「……まさかとは、思うが、モンスターが見たかったとか」

「ち、違うよ！」

その答えには、リーネさんやエルフィさんがちよつとだけ、照れたように頬を赤くして、アキさんは、「帰りを待ってるだけか？」と聞

いてきて、確かに、それもあつたけど、半分は、ただ、なんとなく気になったからで、そう言うと、リヴェリアさんがジト目になって、聞いた。

「本当か？」

「ほ、本当だよ!!ちよつと、胸がモヤモヤするから、見てただけ！」

もちろん、そこは、全否定して、言った。

「・・・モヤモヤ？」

「どんな感じにだ？」

「・・・えつと」

すると、今度は、すごい真剣な顔になってリヴェリアさんが聞いているので、どう説明すべきか、僕は、考え始めた。

そんな時だった。

ドドドドドドドドドドツ!!!!

ガサガサガサガサガサツ!!

「「ん?」「」」

僕等の耳に、否、この野営地にいる全員の耳に、五十一階層の方向から木々が揺れて、こちらに向かって何か迫って来る音が届いた。

ドツ!

「!?!」

「なっ!?!」

そして、すぐに、その音の正体が姿を表した。

それは、全身が黄緑色でとどこころに、毒々しい濃密な極彩色の模様があつて、ぶくぶくと膨れ上がった柔らかそうな表皮に無数の短い

多脚からなる下半身と長い下半身に小山のように盛り上がっている上半身、体の左右には、厚みのない扁平状の器官みたいな脚、まるで芋虫みたいなモンスター。

それが、一匹、二匹どころの話じゃなく、数えきれないほどの大量に、この崖を登ろうとしていた。

「気持ち悪ー！」

「気持ちちは、わかるわ。何あれ」

「見たことがない」

「リヴェリアさんが見たことがないってことは、新種？」

「だろうな」

正直、その芋虫モンスターの全体的な感じが、無茶苦茶、気持ち悪かった。

「リヴェリアさん、僕も、アレと戦っていい？」

「はあく、お前も大概だな。構わん、今は、一つでも戦力が必要だ。ただし、無茶はするな」

とりあえず、モンスターを指さして、僕も戦って良いかの許可をリヴェリアさんから貰う。

リヴェリアさんは、その許可を出しながら、ため息を吐いて頭を抱えたが、次の瞬間には、キリツとした真剣な顔になった。

「全員戦闘準備!! 魔導師部隊、弓部隊は後方支援を！他の者は、奴等の足止めだ！」

「行くわよー！」

「うん」

そして、リヴェリアさんの指示が全体に飛び、僕は、アキさんに下ろして貰うと、武器を取りに走った。



「行くぞ!!」

「「おおおー!!」」

「まずは、一撃!!絶空!!」

ブウン!!

ザアアン!!

準備が整うと、僕を含めた前衛がそれぞれの武器を手に登って来る。モンスター達に向かって飛び掛かり、僕は、まず、挨拶代りの絶空で大きな列をなしている、最初の一目目に横殴りの魔力の残撃を飛ばし、灰へと変えた。

「「はああ!!」」

ブツスウ!!

そして、刀をモンスターへと突き刺した。

ドプツ

「えっ?」

ブシユ

「うおわっ!?!」

ドロツ

「とっ、溶けた!?!」

すると、僕の刀も、他の人達の武器もモンスターの体に刺さりはしたものの、溶け、瞬時にそれぞれ、武器から手を放した。

ブクブクツ

ボツ!!

それなりの脚力で、スピードを出せた。



「リーネさん、この人もお願い」

「はいー!」

そのまま、野営地内のリーネさんの所に抱えてる人を連れていった。

「・・・どうすんだ、あんなの・・・」

「攻撃しても、倒してもダメって」

「しかも、あの溶解液」

そこには、もう、すでに、絶望感が広がってしまっていた。

それは、そうだけど

「大丈夫だ、皆」

「「!?!」」

「絶望するには、まだ早いよ?皆?」

だからこそ、僕は、あえて、とびっきりの笑顔を皆に向けた。

「・・・何か、策があるのか?」

「ある!だから、まだまだ、絶望する時じゃない!」

「・・・わかった。お前に任せる」

「うん!!」

そして、一度、僕は、予備の刀と持てるだけのクナイを取りに走った。

「今のうちに、体制を立て直す！密集陣形を作れ！負傷した者は、後方で治療を受けろ！動ける者は、鍋でもまな板でも構わん、盾になりそうな物を持って来い！！急げ！」

「はいー！」

その間に、リヴェリアさんの指示が再び飛ぶ。



「お兄さん！！肩を借りる」

「！！おう！行け！四葉！！」

「・・・」

ダッ

ダアアアン！！

そして、僕は、助走をつけて、盾を構えてる人の肩を借り、崖下ではなく、ちよつとだけ高く、宙へ跳んだ。

「トリプルシュート！！」

ブブンツ！！

空中で狙いやすいように体勢を変え、力と魔力を腕の筋肉とクナイに込めて、列をなしてるモンスター足の関節めがけて投げた。

三列分。

ズブウン！！

グラッ

ゴロゴロゴロゴロッ

それは、目論み通り、列をなすモンスター達数匹分の片側の足を切

り落とした。

それも、三列分。

で、片側の足を切り落とされたモンスター達はバランスを崩して、仲間モンスターを巻き込んで、崖下へと転げ落ちていく。

それで、自然と崖下に積み上がっていく、モンスター達。

スタンツ

「・・・」

その積み上がったモンスター達の天辺に着地した僕は、まだまだいるモンスター達を見据えて

「絶望するのは！僕達じゃない！貴様等だ！ここを襲撃したことを後悔しろ！」

ダツ！

そう言って、吠えと、僕は、モンスター達の群れへと猛スピードで突っ込んで、次々とモンスター達の片側の足達を切り落としていった。

「おおう」

「・・・なるほど、攻撃しても、倒してもダメなら、止めてしまえと言うわけか。考えたものだな。」

それを崖の上から見ていたリヴェリアさん達からは、感心したような声が漏れる。

「よし！魔導師部隊！詠唱に入れ！弓部隊は引き続き後方支援を！！他の者は、四葉の扱えそうな武器をかき集めて来い！モンスターはまだまだ、いるー！」

「はー！」

「もうすぐ、フィンやアイズ達が冒険者依頼から戻ってくる！それまでは、何としても持ちこたえるぞ!!」

「「おおおー!!」」

そして、次々と行動不能になっていくモンスター達に王手をかけるため、リヴェリアさん達魔導師部隊の詠唱が開始された。

第24話・合流と撤退

ベシヤ

グシヤ

「シングルシュート!!」

ブウン!!

ズボボツ

「【終末の前触れよ、白き雪よ。黄昏を前に渦を卷け】」

「四葉!!」

パシツ

「!?ありがとう!!」

この遠征で何度も聞いたリヴェリアさんの詠唱の声と魔導士さん達の詠唱の声を聞きながら、僕は、ひたすら、モンスター達の動きを高速で止めていく

「【閉ざされる光、凍てつく大地。吹雪け、三度の厳冬―我が名はアールヴ】！」

「!?」

「【ウイン・フィンブルヴェトル】!!」

ドドドドドドドドドドドドツ!!

オオオオオオオオオオオオオツ!!

ボボボボボボボボボボボツ!!

そして、リヴェリアさんの詠唱が終ると、それを皮切りに他の魔導士さん達の詠唱が終わり、複数の魔法円が展開され、僕は、一目散に離脱した。

すると、そこから魔法による一斉砲撃が開始された。

氷、炎、雷といった多種の攻撃魔法が雨のごとくモンスター達へと降り注ぐ。

とたんに、体液を撒き散らしながらモンスター達は粉々に砕け散

り、あるいは燃えて感電していった。

無数の爆発音が連鎖して、魔法の残滓が周囲に舞った。

「どうだ!」

「みたか!」

「・・・すごいな、魔法って・・・よし!もうひとふんばり!」

その一斉砲撃によってモンスターの大量は、あっという間に、半壊滅していつて、野営地の方から嬉しそうな声と僕の口からもそういった声が自然と出た。

その光景に感化された僕は、投げ渡された新しい槍を構えて、残るモンスター達のもとに駆けようと思った。

ブウン!!

「!?!」

そこで、モンスター達の群れの一番後ろ、つまり、五十一階層に近いくところから、一本の竜巻と複数のモンスター達が舞い上がった。

「・・・あれは」

「アイズ!?!」

ソレを見た途端に、野営地の方からリヴェリアさんの叫びと他の人達の嬉しそうな声が再び響いた。

それもそのはず、あの竜巻は、アイズさんの魔法。

つまり、冒険者依頼を終えてアイズさん達が帰って来たと言う証拠だった。

「あれ?四葉!」

「!?!テイオナさん」

「良かった!無事だったんだね!ねえ、その槍、私に貸して?」

「えっ?う、うん」

「ありがとう!!」

そして、偶然にも、僕のところに合流したテイオナさんは、僕から槍を受け取ると

「やーいつ、こつちだー!」

「えっ?・・・わっ!」

「よつと」

バチャ

「!」

ベチャ

ビチャツ

「ほいつ」

ブチャツ

「!」

「ハハハ(笑) 四葉も上手いじゃん!それじゃ・・・いつけえー!!」

ドボツ!!

あろうことか、モンスター達を挑発して、モンスターにその溶解液を吐かせて、ソレを交わして、他のモンスターに浴びせて倒し、同士打ちさせ、残ったモンスター達に槍で渾身の一突きを浴びせた。

「次いー!」

「・・・よし!やーいつ、こつちだー!こつちにもいるぞー!」

そして、テイオナさんは別の標的に向かってゆき、ある意味、半分以上で数を減らしたのなら、テイオナさんの手法もアリだと思つて、僕も、モンスター達の同士打ちを狙うため、声を張り上げて、駆けた。



「はああ〜」

「終わったー!」

その後は、本当にあつという間に終わり、最後の芋虫モンスターはアイズさんが切り伏せた。

それを見届けて、僕は、ようやく、全身の力を抜いた。

「おい、チビ」

「ん?」

「キャンプに残ってたあいつ等は、無事なのか?」

「あれ、ベート、リヴェリア達を心配してるの?めつずらしー」

「うるせえっ、あいつ等が荷物を守ってねえと深層から帰れねえだろうが!勘違いしてんじゃねえ!」

「…皆、無事だよ?初見の時、何人かあの溶解液にやられたけど、今は、回復薬とかで回復済み。ただ、武器の方が」

そんな僕に野営地の様子を聞いて来たベートをからかうテイオナさん

その二人と、フィンさん達に一応、その報告をした。

そんな時だった

ゾクッ

「!?!」

「四葉?!」

背筋が凍り付くようなそんな悪寒が走った。

そして

ベキッ!!!

ベキツベキツベキツベキツ!!

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

その音が僕等の耳に届いた。

木をいつぺんにへし折り、遠方から響いてきた破碎音が。

当然、僕等は、その方角を振り向いた。

装備出来る武器を持つてはいないけど、それぞれの武器を再装備しなおしたフィンさん達と一緒に、僕も臨戦態勢をとり直して、その音の正体が姿を現すのを息を飲んで待った。

大した時間はかからなかった、と思う。

「・・・あれも下の階層から来たっていうの?」

「迷路を壊しながら進めば・・・なんとか?」

「馬鹿言わないでよ・・・」

多分、六Mくらい?

先程まで戦っていたモンスターの大型の奴よりも一回りは大きい。

芋虫モンスターと同じく黄緑の体と似た腕。

けど、芋虫モンスターと違うところが一つ。

「人型・・・?」

「・・・あのモンスターも倒したら破裂して、溶解液をぶち撒くんつすよね・・・?あの大きさで、そんな事になったら・・・」

下半身部分は変わらない。

ただ小山のように盛り上がっていた上半身は人の形を、女の人みたいな形をしていた。

もし、こいつを倒して、と、ラウルさんの言ったことを想像したら、最悪な光景しか思い浮かばず、再度、背筋が凍り付くようなそんな悪寒が走った。

「あの巨体じゃと、魔石だけを綺麗に狙うのも難しそうだな」
「そもそもどこに埋まってるんだよ・・・」
「待て、動くぞ!!」

そして、おもむろに、そのモンスターが動いた。

その四枚の腕を、ふわっと広げ、七色の粒子を撒き散らせた。

鱗粉、あるいは花粉か、極彩色の微細な粒が僕等のもとにも漂って来て、瞬間、すぐにその場から退避した。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドツ!!

「きゃあああああああああああ!?!」

「ぐっ!」

その直後、無数の爆発が連続して起きた。

それも、残っていた溶解液ごと、地面を爆砕された。

レフィーヤさんの甲高い悲鳴が響き渡り、凄まじい熱気が僕の頬を叩く。

鱗粉とか、花粉とかそんな生易しいものじゃなかった。
ばらまかれた粒子の一粒一粒が、凶悪な爆弾だった。

「大丈夫? 四葉」

「うん、平気」

「総員、撤退だ」

盛大な砂煙が舞う中で、フィンさんが静かにそう告げた。

「速やかにキャンプを破棄、最小限の物資を持ってこの場から離脱する。リヴェリア達にも伝えろ」

「おい、フィン!? 逃げんのかよ!」

「あのモンスターを放つとくのか!?!」

「僕も大いに不本意だ。でも、あのモンスターを始末して、かつ被害

を最小限に抑えるにはこれしかない。月並みの言葉で悪いけどね」

そして、フィンさんは、アイズさんの方を向き直った。

「アイズ、あのモンスターを討て一人でだ」

「!？」

「待つてください、団長!？」

ボツ!!!

「「「「「「!？」「「「「「」」」」」」」」」

そうアイズさんに言ったフィンさんに、僕だけじゃなく、レフィーヤさんもテイオナさん達も、彼に詰め寄ろうとした。けど、それを爆撃が、僕等の動きを止めた。

「・・・動いてる」

「時間がない。ラウル、リヴェリア達に撤退の合図を出せ!」

「ねえ、ちよつと、フィン!?!何でアイズ一人だけなの!?!あたしもいくよ!」

「女に尻を守られるなんて、尚更冗談じゃねえぞ!?!」

「団長、私からもお願いします。ご再考を」

「二度も言わせるな。急げ」

「・・・せ、せめてっ、せめて援護だけでも!?!」

腕を広げて、蠢くように多脚を動かして進行を開始したモンスターとフィンさんの指示を聞いていて、さつき、フィンさんに抗議しようとした気持ちだが、切り替わった。

アレは

「・・・アイズさん」

「・・・何?・・・!?!」

僕は、アイズさんののもとに歩み寄って、僕の目線に屈んでくれたアイズさんの顔を両手で包んだ。

「……が、頑張って……アイズさん……」

「……うん、頑張る。レフィーヤも……大丈夫だから」

すごく、ものすごく、その言葉を言うのは嫌だった。

「……先に行つて待ってます……行きましょう、四葉ちゃん」

「……うん」

けど、あのモンスターには、ここにいる誰よりもアイズさんが適任だった。

きつと、それはこの場にいる誰もがわかっていた。

僕は、後ろ髪を引かれる思いをしながら、レフィーヤさんと共にテイオナさん達の後を追った。

第25話・ミノタウロスの集団逃走

「まだまだ行けたのに。暴れ足りないよ」

「しつこいわよ、あんた。いい加減にきなさい」

「だって、五十階層で引き返しちゃうなんてさあ」

あの五十階層での戦闘後、僕等は、六日をかけて十七階層まで戻って来た。

現在は、十八階層でリヴェリアさん率いる前行部隊とフィンさん、ガレスさん率いる後続部隊に別れて移動中。

理由としては、深層よりも上層は道幅が狭くて、集団の規模があまりにも大きいと、身動きが取りづらくて、モンスターの襲撃にも対応できないからだ、前にリヴェリアさんに教えてもらった。

ちなみに、僕は、サポーターとしてこっちに組み込まれていて、僕の背には、僕の背丈の二、三倍の荷物が積み上がっている。

ぶつちやけ、何とか遅れずについて行けるとはいえ、滅茶苦茶、重くて、肩の辺りが食い込んで滅茶苦茶、痛かった。

「団長がもう何度も説明したでしょ？あのモンスターにやられて、物資が心もとないって」

「食べ物や迷宮で調達すれば何とかもったじゃん・・・」

「武器や道具はどうにもならないでしょう。特に得物の方が。手もとには行きの道で使い潰した摩耗品しか残ってないわ。あんたの分の予備なんてゼロじゃない」

そして、何日目だろうか。

口を尖らせて言うティオナさんに、それをたしなめるティオネさんの会話。

「うっつ、悔しい。せつかく苦勞して五十階層まで行つたのにい・・・あのモンスターのせいで・・・結局何だったの、あれ？」

「わからないわよ。未確認のモンスター、としか言えないでしょう。．．．確かにおかしな点はあったけどね」

そう言っつて、おもむろにテイオネさんは自分の胸元に指を突っ込むとそこからモンスターの「魔石」を取り出した。

「っつて、それ、もしかしてあのモンスターの魔石？テイオネ、どうやって見つけたの？」

「手を突っ込んで直接引きずり出してやったわ」
「!？」

そして、その魔石を取り出し方法を聞いて僕は、驚愕した。
．．．マジか。

そう言えば、テイオネさんの服装が変わっていることに今更ながら、気が付いた。

「うわっ、何それ。変な色」

「ええ．．．普通の魔石とは、少し違うわね」

ちらりとその魔石を見た。

サイズは、小石くらい、確かに、変な色だった。

普段、僕等が見る魔石は紫紺色で、テイオネさんの持つてるあの芋虫モンスターの魔石の色は、中心が極彩色、残る部分は紫紺色と見たことのない輝きをしていた。

「．．．四葉、大丈夫？」

「えっ？」

「手伝おうか？」

「あ、だ、大丈夫。僕、こう見えて、力持ちだし！」

そこで、アイズさんが僕を気づかって、そう、声をかけて来てくれ

たけど、僕は、そう言っつて、力こぶを作っつて見せた。

「止めろっつての、アイズ。雑魚に構うな」
ゲシッ

「わっ!!」

「!?ベートさん」

「それだけ強えのに、まだわかつてねえのか、お前は。弱え奴等に関わるだけ時間の無駄だ、間違っつても手なんて貸すんじゃねー。精々見下してろ。強いお前は、お前のままで良いんだよ」

そして、アイズさんと僕とのやり取りを一連の流れを見ていたベートさんが声を挟み、僕を少し蹴り飛ばした。

一応、手加減はしてくれてるみたいだけど、痛いものは痛い、と言うか、いきなりすぎて、僕は、ビツクリした。

「ちよつと!ベート!!四葉に何してくれてんの!!て言うか、アイズを困らせるな!!馬鹿狼!!」

「うるせー!!糞女。てめえこそあいつ等の雑用を引き受けてろっつての。装備皆無だろ、間抜け!」

「うるさーいっ!?!」

すると、ベートさんに蹴られてる僕を見ていたティオナさんがベートさんに食っつて掛かっつて行き、これまで何度も見ていた口喧嘩を開始。

「ヴウオオ」

「あっ」

「ヴウオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!」

「進行方向!ミノタウロス・・・大群です!!」

「ほら、ベートがうるさいから“ミノタウロス”が来ちやつたじやん!」

「関係ねえだろつ。ちっ、馬鹿みたいに群れやがって」

と思ったら、その二人の声に誘われて来たのかはわからないけど、大量の筋肉質な巨大な赤銅色の体に牛頭の人っぽいモンスター、ミノタウロスが通路の向こうから押し寄せて来た。

「へえ、このミノタウロスってパンツ、履いてないんだね」

「えっ?・・・パンツ??」

「うん。あ、でも、見ようによっちゃ、履いてるのかな?毛むくじやらのパンツ」

「・・・どっち?」

「どっちだって良いです!!て言うか、緊張感なくなるので、その会話やめてください!!それと!!アイズさんに何て事を口走らせるんですか!!四葉ちゃん!!」

そして、あつという間に取り囲まれた僕等。

僕は、取り囲んでるミノタウロス達を見て、この場の空気を全然読まない発言をした。

ソレを傍で聞いていたアイズさんが、キョトンとして呟くと、その呟くを聞いたレフィーヤさんが元凶である僕を怒った。

ついでに、リヴェリアさんをはじめとした、他の人達は、無茶苦茶、げんなりした顔をして、僕を見ていて、中には、レフィーヤさんの言葉にうんうんと頷いている人達もいた。

だって、仕方がない、僕は、これがここでの初見。

あつちのミノタウロスはレスラーの人が履いてそうなパンツ一枚に革帯を各所に巻いただけの格好だった、こっちは、毛が腰辺りから、膝までみっちり、あるだけの感じだった

おまけに、ハンマー系武器を持ってないし

「とりあえず、リヴェリア。これだけいるし、私達もやっちゃって良い?」

「はあく、ああ、構わん。ラウル、フィンの言い付けだ。後学のためにお前が指揮を取れ。後、四葉、お前も戦闘に加われ、お前なら体術でなんとかなるだろ。お前の経験値にしてしまえ」

「は、はいー!」

「わかった。荷物は?」

「そこに置いて行け」

「了解」

とりあえず、ここで、ちよつとふざけた話は、おしまい。

リヴェリアさんの指示で、僕もこのミノタウロスとの戦闘に加わることになって、気持ちを切り替えて、背負っていた荷物をその場に置いて、少しだけ、準備体操をした。

「サポーターは下がって!密集隊形で装備の負担を最小限に!後、テイオネさん!テイオナさん!!ベートさん!!!中層では、下の団員に経験を積ませるのが規則です!空気読んで下さいね」

「フッフ、大丈夫、大丈夫♪」

「わかってるわよ。ヒヒヒッ」

「得物無しだ。ハンデくらいやらねーとな。ククク・・・」

そんな僕のすぐ近くでは、ラウルさんの指示が飛び、更に、指の関節をゴキボキと鳴らしたり、ワキワキさせたり、腕をグルグル回したりしているテイオナさん達にも注意が飛ぶ。

そして、そのすぐ後に、アイズさん達も加わってのミノタウロス戦が始まった。



「はああ!!」

ドオッ

「ブモッ!?!」

パァン!!

そして、あつという間に半数のミノタウロスを返り討ちにした時だった。

「ヴオツツ!?!」

ドツ

「ええっ!?!」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドツ!!

「嘘逃げたあ!!」

「お、おい!?!てめえ等、モンスターだろうが!?!」

「・・・ま、まずい!」

ダツ

「えっ!?!四葉!?!」

このあまりの戦力差に怯えたのか、一匹のミノタウロスがこちらに背を向けて逃げ始めると、そこからまるでそのミノタウロスの恐怖心が伝染したかのように、残っていたミノタウロス全てが足並みを揃えて、一気に、まさかの集団逃走を開始。

その光景にテイオナさんとベートさんは驚愕して、我先にと、もの凄い勢いでミノタウロス達が飛び出し通路の奥に消えていくのを動きを止めてソレを見ていて、僕は、ソレを慌てて追いかけた。

「何をしている!お前達も追え!!パニック状態のモンスターが何を
するかわからんぞ!!」

「!?!」

その後ろから、動揺を抑え込んだリヴェリアさんの号令が飛び、動きを止めていたアイズさん達も、弾かれるように僕の後を、ミノタウロスの群れの後を追い出した。

「遠征の帰りだって言うのに！」

「あの、私、白兵戦苦手で!？」

「力業で殴り殺せんだろ！少しは、あの餓鬼を見習って殺れっ！」

「は、はい!!」

すぐに、僕の横を走り出したテイオネさんは、苦虫を噛み潰した感じの顔をしていて、ベートさんはレフイーヤさんを叱咤。

その時、ミノタウロス達を追いかける僕等には、余裕なんて無かった。

だって、このダンジョンには当然だけど、僕等以外の人達も沢山いる、それぞれに見合った能力で迷宮探索をする中で、暴走したミノタウロスの大群なんて、彼等からしてみれば、悪夢でしかない。

もし、その人達が、最悪、殺されでもしたら、目も当てられないことになる。

だからこそ、僕等は、死にもの狂いでミノタウロスを追いかけた。

第26話・白兔と帰還

「ちよつと、あれ・・・」

「上層への階段!？」

「嘘だろ!?!上には低レベルの冒険者だらけだぞ!!」

「十七階層は任せて!!上を追って!!」

そして、とうとう、ミノタウロス達は十六階層へ続く階段を発見して上がりはじめてしまい

「ミノタウロス、止まりません!!さらに上層に多数!!」

「各層に一人残れ!一匹たりと取り逃がすな!!殺し尽くせ!!」

その後も、一階層、更に、一階層、もう一階層とミノタウロスの暴走は続き、各階層を出鱈目に走つてると思ったら、集団から離れたミノタウロスが散り散りになってこちらを攪乱し、次々と上層部に繋がる階段を発見して上へ上へと進出していった。



「やああ!!」

ボツ!

「どけえ!!」

ボツ!

「ひいっ」

そして、とうとう、六階層まで上ってきてしまい、その頃には、ミノタウロスを追うのが、僕とアイズさんとベートさんしか残っていなかった。

「最後の一匹は・・・!?!」

「向こうから、臭いがする！」
「来い、アイズ!!」

最後の一匹を僕とベートさんの鼻を頼りに、いくつもある道を迷うことなく選択して、その後を追い掛ける。

やがて、見えてきたミノタウロスの背中。

速度を上げるも、五階層への逃走を許してしまった僕等。

「ヴヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

「ほああああああああああああああつ!?!」

そして、聞こえたミノタウロスの咆哮と人の叫び声にそれまで以上に速度を上げて駆け出し、やがて、僕等の視界に、僕と似た白髪の深紅の目の男の人がミノタウロスから必死に逃げてる姿が飛び込んで来た。

「ヤベエ、新米かよ!?!」

「!?!」

ボツ!

ダツ!

それを見て、足に力と魔力を込めて、一気に駆けた。

「ヴウムウンツ!!」

「でえっ!?!」

「!?!」

その間にも、ミノタウロスの蹄が背後から彼に襲いきり、ソレが彼の体を捉えることはなかったけど、土の地面を砕き、ちようど彼の足場も巻き込んで、足をとられてゴロゴロとダンジョンの床を転がって、とうとう、隅に追い込まれたその人は、迫るミノタウロスの巨体

を見上げ、笑みと呼ぶにはあまりにも引きつった口の歪みを浮かべ、その赤い目に涙を溢れさせていて、横を走っていたアイズさんの姿が霞んで、その瞬間に、僕の足は急速に止まった。

「お、おい」

「えっ?」

「ヴォ?」

すると、僕が止まったことに驚いたベートさんの声と、男の人とミノタウロスの間で抜けた声が聞こえた。

シユビバババババババッ!!

「グブウ!? ヴウ、ヴウモオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!」

直後、ミノタウロスの背後からアイズさんの音速の斬撃がその胴体に見舞われる。

それでも、アイズさんの手は止まらず無数の線がミノタウロスの全身に刻み込まれていく。

最後の剣閃から、銀色の光が瞬き、それまで原型をとどめていた巨体が、思い出したかのように、斬撃で受けた線に沿ってずり落ちる。

断末魔とともに血飛沫を上げながら、ミノタウロスはいくつもの肉の欠片となって崩れ落ちた。

「・・・大丈夫ですか?」

「・・・」

そして、アイズさんは崩れ落ちたミノタウロスは奥にいたミノタウロスの血を全身に浴びて血まみれになった男の人に声をかけた。

「あの・・・大丈夫、ですか?」

「・・・」

だけど、返事どころか、身じろぎ一つしなくて、ただ、アイズさんを静かに見ているだけだった。

それに少し戸惑った様子のアイズさん。

もう一度、声をかけるけど、やっぱり、反応は返ってこなかった。

「立てますか?」

「だっ」

「だ?」

そして、アイズさんが剣を鞘に収め、男の人に手を差し伸べた時だった。

ちやうど何かを言いかけた男の人は

「だあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああ!」

「・・・」

「・・・」

ガバツと跳ね起きると全速力で逃げ出した。

アイズさんから。

男の人が逃げ去った通路の奥から聞こえて来る奇声を聞きながら、僕は、その場で固まってしまっていた。

と言うか、ぽかんと、目を見開いて立ちつくすアイズさんになって声をかけていいのか、解らなかった。

「・・・っ、・・・っ、・・・くくっ!」

「!」

すると、僕の側で、お腹を抱えながらベートさんが、必死に笑いを堪える姿があった。

いや、全然、堪えきれてないけど・・・

「劍姫の二つ名は伊達じゃねえな・・・助けた相手が泣いて逃げ出さ
やがった！流石、アイズだぜ！」

「・・・」

そのベートさんの反応に頬を赤らめて、頬を膨らませながら、アイ
ズさんは、キツとベートさんを睨んだ。

「・・・四葉」

「な、何？」

「・・・私、そんなに怖い？」
ブンブン!!

「全然、怖くないよ」

「本当に？」

「うん、さっきの人も、気が動転してたんだよ」

そして、アイズさんは僕に目を移し、まるで捨てられた仔犬のごと
く、今にも泣きそうな顔で言うので、僕は、必死に両腕をパタパタ羽
みたいに動かしながら、僕は、アイズさんを怖がったりしていいこと
と、本当のところはわからないけど、彼もそうじゃないと思うことを
訴えた。



「ん〜!!二週間ぶりの外の空気!!」

「被害者が出なくて本当に良かったっス・・・」

その後、リヴェリアさん達と後続のフィンさんやガレスさん達と合
流した僕等。

それから地上に出た時には、もう、夕焼け空で、目に入った酒場で

は、僕等と同じくダンジョンから帰ってきた冒険者達で賑わっていた。

多くの人達が肩を並べてお酒をあおったり、悪乗りしたのか、一部の人ジョッキを片手に乱入し、笑いあう。

その姿は、アインクラッドでも良く見る光景だった。

命がけの攻略後、仲間達とお酒を飲んだりして、その日、生き残った事を喜び、成果を喜んだ。

この光景を見ると、何処も変わらないんだなと思う。

「見えてきた」

「うん！ やつと帰ってきたねえ！」

そんなことを思いつつ、街中を北に向かって歩いてると、周囲よりも高い長大な館が見えてきた。

高層の塔がいくつもの重なって出来ている邸宅、僕等の本拠、黄昏の館だ。

その証拠に、中央の塔には、僕等のシンボル、道化師の旗が立ち上がっていて、ソレを見ると、どこか、僕等を出迎えてくれるように思う。

「あー、疲れたー、お肉たくさん頬張りたーい」

「私は早くシャワーを浴びたいわね」

「あはは・・・」

ティオナさんやティオネさんの言葉やレフィーヤさんの苦笑いする声を聞きつつ、正門に到着した。

「今、帰った。門を開けてくれ」

「・・・」

フィンさんの言葉で開門された門をフィンさんを先頭に僕等は、敷

地内へと入った。

「おつかえりいいいいいいいいいいいっ！」
「!？」

すると、いきなり館の方から走り寄ってくる影があつた。

「みんな無事やったかーっ!? うおーっ、寂しかったー！」
「!？」
「えっ? ちよ、きやあー!」

その影と言うのが、言わずと知れたロキ様なんだけど、ロキ様は、フィンさん達、男性陣には目もくれず、僕等の方に突き進んで来て、両手を突き出して飛び付いて来ようとするのを、ひよい、ひよい、ひよい、とアイズさん、ティオナさん、ティオネさんがすんなり回避して、僕もなんか、条件反射的に反応して回避したら、レフィーヤさんにそのまま向かって行き、悲鳴を上げる彼女に抱き着き、押し倒した。

「ロキ、今回の遠征での犠牲者は無しだ。到達階層も増やせなかつたけどね。詳細は追って報告させてもらうよ」

「んんうー・・・了解や。おかえりい、フィン」

「ああ。ただいま、ロキ」

そんなロキ様に声をかけたフィンさん。

そのフィンさんに向けるロキ様の眼差しは、本当に優しいモノだった。

ただ、その手が触ってるのが、レフィーヤさんの胸なので、なんだか凄く残念な感じだ。

「ロキー、レフィーヤが困ってるから離れてくんなーい? 結構疲れてるしさあー」

「おおっと、すまん、レフィーヤ」

「い、いえ・・・」

「愛しい眷族が息災やったんで感極まつてついなあ・・・ところで・・・
グフフ、ちよっとおっぱい大きゆうなった？」

「な、なつてませんっ!?!」

ゲスな笑みを浮かべて言うロキ様にレフィーヤさんは顔を真っ赤
になつて叫ぶ。

「ちゆうかな、ティオネ、その胸に巻いてるの・・・フィンの腰巻き
やろ!?まさか、まさか自分ダンジョンでポロリしちゃったんか!
なあ、どうなん!?!」

「うるさいわねー。暑苦しいから寄つてこないでよ」

と、今度はティオネさんの方に詰め寄るロキ様。

騒がしい感じだけど、何故か、心が凄く落ち着いた。

そして思う。

「ああ、帰つてきたんだなあ」って

こうして、新種の芋虫モンスターが出たり、ミノタウロス達の逃走
劇があつたりと色々、紆余曲折あつたけど、これでようやく、ここで
の初めての遠征は幕を閉じた。

怪物祭編

第27話・戻る日常

「・・・」

ガタッ

「うわああっ!!四葉ちゃん!!」

バツ

「!？」

「片付けなら俺達がやるから!」

「えっ?」

僕は、持ち帰った荷物を運搬する人達に紛れて、一緒に荷物を運ぼうとした。

が、早々に見つかってしまい、手にしようとした荷物をヒョイツと奪い取られてしまった。

「ほら、先にシャワーでも行っておいで?」

「でも」

「良いから、良いから、順番だから」

「・・・」

「四葉あゝ」

「!？」

「ほら、シャワー行くわよ!さっさと来なさい」

「ほら、ティオネさんが呼んでるぞ?行った、行った」

「う、うん」

おまけに、ティオネさんが僕を呼んだこともあって、僕は、渋々、ティオネさんの方に向かった。



「・・・アイズの服も四葉の服も結構大胆だよね」

「着ないと舌噛み千切る、ってロキが言うから・・・」

「僕も、同じこと言われた」

そして、一度、自室に戻って剣帯とかを置いて、着替えを手に、テイオナさん、テイオネさん、アイズさんとレフィーヤさんと一緒にお風呂場へ向かった僕は、そこでテイオナさんに今着ている服について指摘された。

大きく背中が開かれている薄手の服は、鎧や着るタイプの長手甲が無ければ、胸に伸びる脇の線までをかけて肌が丸見えだった。

僕のは、セーラー服ポイ感じだけど、基本は、アイズさんとお揃いな感じでアイズさんの青い部分と襟に巻くスカーフが赤。

ちなみに、何で完全なお揃いじゃないかと言うと、ロキ様曰く「四葉たんゆーたら、セーラー服と白と赤やろ！」だそうだ。

「ああ、そういうことねー」

「うん」

が、やつぱり、僕もアイズさんも、ここまで露出の多い服を好んでる訳じゃない、ロキ様に「着ないと舌を噛み千切る」って脅されなきゃ、僕の場合、フィンさん達がサラマンダー・ウールで急遽作ってくれたフード付き羽織りが無きや着なかつたと思う。

で、前者の「着ないと舌を噛み千切る」と言われた部分の説明だけで、テイオナさんは納得してくれた。

というか、「主神が面倒なごだわりを持っていると苦勞する」って言うのが、ここでの常識だ。

「レフィーヤ、とっと脱ぎなさい。後がつかえるわよ」

「あ、はい」

とりあえず、結っていた髪を解いて、服を脱いで裸になった僕は、浴室に向かった。

浴室と言っても十人も入れれば、一杯になっちゃう室内はほぼシャワー室で、一応、奥に石造りの湯船はあるけど、それも少人数用だ。

「アイズさあ、何か落ち込んでる？」

「・・・？」

「なーんか、ミノタウロスの群れを追いかけにいった後から、暗いよ
うな気がしたからさー」

そのテイオナさんの指摘を聞いて、僕も、指摘されたアイズさんも驚いた。

・・・鋭い。

確かに、あれからずっとアイズさんは落ち込んでる。

それはそうだろう、ベートさんには終始笑われ、助けた相手に悲鳴を上げながら全力で逃げられたんだから、そんな経験なんて、そうそう、無い事だと思うし。



「・・・むむむっ」

「なに唸ってるのよ」

それから、シャワーヘッドの前に立ち、勢い良く熱湯を頭から浴びてると、何故かテイオナさんが唸った。

「レフィーヤの裏切り者お・・・」

「ええっ!？」

「無視しなさい、レフィーヤ」

「四葉!!」

ガシッ

「!?な、なに」

「これからも、仲良くしようね!」

「??う、うん」

そして、ティオナさんは、右から順に、ティオネさん、アイズさん、自分と、レフィーヤさん、僕と見て、レフィーヤさんに恨めしそうに言うのと、僕の両手をいきなり両手で掴んで、嬉しそうに言った。

「・・・あんたね、四葉はまだ、七歳よ?十年もすれば」

「ううー、四葉も裏切るの?」

「え、えっ?な、なんの話を」

ガラツツ!!

「うおーっ!!?安心せえティオナー!うちが揉んで大きくしたるーツツ!!」

「!?」

ティオネさんに指摘された、恨めしそうな声が変わったところで、突如、お風呂場の扉が開いて、獣のような影が飛び出した。

「今日の晩ご飯はなにかなー」

ズパアンツ!!

ゴツツ!!

「ごふうっ」

「よっつと」

「!?」

その後ろからの奇襲にティオナさんはあっさりと言なし、足払いをかけ、目にも止まらぬ速さで、足を刈られた襲撃者、基、ロキ様は、頭からタイルの床に落ち、流れるように僕を抱え上げた。

「う、腕を上げおったな、ティオナ」

「ロキ、邪魔ー」

「くうううつ、なんやこの仕打ちツレフイーヤア慰めてくれえええええええええ!!」

「え、ちよ、きやあああああああ!?!」

「!?!」

「四葉、受け取るわよ」

「うん」

そのまま、浴室から出かけた時、レフイーヤさんに飛びかかつて行ったロキ様。

「助けなきや」と思ったのもつかの間、テイオナさんからテイオネさんに受け渡され

ワシワシ

「僕、自分で」

「良いから、良いから、されてなさい」

全身をタオルで拭かれ、着替えまでして貰ったあげく、髪までも整えて貰った。

もちろん、戦闘衣の方じゃなく着替えで持ってきた前にリヴェリアさんが買ってきてくれた、皇子様風の白い長袖ブラウスに黒いリボンネクタイ、サスペンダー付き、半ズボンに。

その間も、レフイーヤさんの助けを求める悲鳴とロキ様の悩ましい声が響いてくるけど、アイズさん達は、完全に無視で、自分の着替えを優先させていた。



「酷いですよお・・・」

「ごめんごめん、あたし達もロキの相手するの面倒臭くてさ」

その後、一度自分達の部屋に戻った僕等は、食堂へと移動して、長方形の長い食卓について食事を取っていた。

遠征帰還直後と言うこともあって、普段よりもやや元気が無いようにも思うけど、それでも、お酒を楽しんだり、食事を楽しんだり、今回の遠征の話で盛り上がりたりとどの卓も会話が弾んでいるようだった。

「テイオネ。この後って、これからの打ち合わせとかあるの?」

「団長が今日はゆっくり休め、って。また明日からよ」

「さっすがフィン!」

「忘れとった」

そして、食べ終わり、食器を片付け始める人達がポツポツと現れ、食堂を出ていく中、晩酌を楽しんでいたロキ様が、何か思い出したように立ち上がった。

「今日中に【ステイタス】更新したい子おったら、うちの部屋まで来てな。明日とかまとめていっぺんにやるのも疲れるし。そうやな、今晚は先着十人で!」

「・・・みなさんは、今日はどうしますか?」

その急なロキ様のお知らせに、ロキ様の方を振り返っていたレフィーヤさんは、僕等の顔を見て、聞いた。

「私は止めとくわ。ゆっくりと寝させてもらう」

「私はどうしよっかな。やることもないけど、【ステイタス】がグリーンと伸びるほど【経験値】稼いだ手応えもないし・・・気が向いたら行ってみよっかな。レフィーヤは?」

「私も今日は・・・」

とりあえず、テイオナさんも、テイオネさんも、レフィーヤさんも、

今日は更新をしに行かないらしい。

「アイズは・・・聞くまでもないわね」
「うん」

で、アイズさんは行く。
さて、僕は、どうするか・・・

「四葉、あんたは受けておきなさい？」
「えっ？」

「凄いことになってるわよ？きつと」
「凄いこと？」

「間違いなく、ランクアップしてるわよ？レベル一で深層に行つて、帰ってきたんだもん。おまけに、ちやつかり、戦闘もしてね？」

「だね？そうなると、四葉、世界最速（レコードホルダー）じゃん！」
そう考えると、テイオネさんにニヤニヤした笑みを浮かべられながら、更新に行くことを進められた。

「・・・一緒に、行く？」
「・・・うん」

という訳じゃないけど、僕は、アイズさんと一緒に、いつの間にか食堂から消えたロキ様の部屋に向かうべく、テイオナさん達に断つて、食器類を片付けて、食堂を後にした。



「うわあ〜」

「??四葉」

「星が凄く綺麗だよ！アイズさん」

「うん、月もあるよ?」

アイズさんと共に中庭を見下ろす事のできる無骨な空中回廊に足を踏み入れた時、とうに夕焼けが消えた蒼い夜空には満天の星と金色に輝く月が浮かんでいた。

それは、凄く綺麗で、街の方角を見ると、眩しい光が建物と建物の間から溢れ、同時に楽しげな喧騒が弦楽器の音色に乗ってささやかに届いてくる。

「行こうか? 四葉」

「うん!」

アイズさんの呼び掛けで、僕は、止めていた足を再び動かして、ロキ様の部屋のある中央塔の最上階を目指した。

第28話・造られし者

「私、先で良い？」

「うん！」

そして、備え付けの螺旋階段の下に来た時、アイズさんの申し出で先を譲った。

ここまでは一緒に来たけど、ステイタスの更新を一緒にして貰うわけにはいかないからね。

それに、僕は、このままじゃ、ロキ様の部屋には入れないから、アイズさんが階段を上り始めたのを見て、僕は、魔法を解いた。

じゃないと、前みたいにな、ロキ様の部屋の臭いでぶっ倒れかねないし。

コンコン

「入ってええよー」

解いて、少しして階段の上の方から、木の扉をノックする音とロキ様の声が聞こえた。

「やっぱり、アイズが一番乗りやなー」

「・・・四葉が、階段の下で待ってます」

「ほんまか？・・・四葉たあーん、もう少し、まっとなあー」

「はーい」

そして、聞こえて来たその声に、僕は、声を張り上げて答え、パタンと閉まった扉の音を聞いて、終わるまで階段に座って待つことにした。



「四葉たん、アイズたん、終わったから、来てえーよ」
「!?はーい」

それから暫くして、その螺旋階段の上からロキ様が呼ぶ声がして、僕は、その階段を上った。

「・・・耳と尻尾がない」

「うん」

「おっ！ホンマや！四葉たんのその姿、なんや、久々やなあ〜」

上がった所では、アイズさんが扉を開けて待っていてくれて、僕を見るなり、目を丸くした。

ついでに、ロキ様も一瞬、ビックリした顔をしていたけど、すぐにニコニコ顔に変わった。

「・・・前に、来た時の教訓とリヴェリアさんからの教え」

「リヴェリアから？」

「ハハハ(笑)せやったな！四葉たん、前にここ来た時、臭いでひっくり返って階段から落ちたんやもんな〜」

「えっ」

「うん。今は、そうでもないんだけど、獣化してるとお酒の臭いが強烈に来ちゃって、だから、リヴェリアさんに言われたの、お酒に纏わる所では、獣化魔法を使うなって」

「・・・なるほど」

そして、僕が魔法を解いてる理由を話すと、アイズさんは、この部屋中にあるお酒のボトルを見回して、納得したように頷いた。

「・・・ロキ、四葉に変なことしないでね？」

「な、何もせえへんって、ステイタスの更新するだけやん」

「・・・四葉、私、階段の下にいるから、ロキに何かされたら大きな

声で呼んで？すぐに助けてあげるから」

「う、うん」

そこで、アイズさんはロキ様に視線を向けて、何か釘を刺して、僕に言うのと僕と入れ替わるように階段の下に下りていった。

「と、とりあえず、始めようか？四葉たん」

「う、うん」

「ほな、服脱いで、そこ座って」

「はい」

そして、僕は、アイズさんを見送って、扉を閉めるとロキ様の座っているベットの側にある丸椅子に座った。

「おっ！・・・やっぱ、そうなるか、まあ、覚悟はしとったけどな
く・・・おお！！なんやこの魔法！むっちゃ便利そうやん！」

「・・・ロキ様？」

「おっ！すまん、つい、興奮してしもたわ」

僕が椅子に座るとすぐに、ロキ様の指が僕の背中の首の根もと辺りに触れ、次には、まるでサインを描くかのように指が僕の背中を走る。浮き出たソレをロキ様は、一瞬、驚いた後、ある意味納得した様子で呟き、最後は、少し興奮したかのような声を上げた。

「四葉たん、良い知らせが二つや！」

「良い知らせ？」

「二つは、当然ちや当然なんやけど、ランクアップしたで？」

「うん」

「二つ目は、新しい魔法や！これ、めっちゃ便利えし、むっちゃレアやでー！」

「どういう魔法なの？」

「【幻書の術】ちゅー、いわば、収納魔法や！」

「!?ほ、本当に!?!」

「ああ、しかも、短文詠唱や！収納の時は【保管（ストレージ）】取り出す時は【取り出す（テイクアウト）】な？」

そして、その興奮した理由を知って、僕もちよつとだけ興奮した。もちろん、ランクアップの方じゃなくて、新しい魔法の方。なので、思わず、ガッツポーズをした。

「四葉たん、めっちゃ、この魔法、欲しかったんやね？」

「うん！二年間、使い続けてたヤツだから」

「マジか！こんな便利な魔法、使つとつたんか!!そら、欲しいなるわな！」

おまけに、黒エルフの人達が、僕等のアイテムストレージの事を「幻書の術」と呼んでいた。

ソレが、僕の魔法としての名前になっていることが、凄く嬉しかった。

「ちよつと、待ってな？」

「はい」

そして、ロキ様は羽根ペンで羊皮紙で背中のソレを書き写している。

「一応な」

「はい」

ソレを受け取り、僕は、一応、それに目を走らせた。

「せや、四葉たん、発掘アビリティは何にする？「狩人」と・・・？」

四葉たん？」

「……ロキ……様……」

「……読めてもうたんか？」

「……うん」

読めてしまった。

読めてしまったんだ。

そこに、書かれてるモノを

四葉；レベル1

【ステイタス】

力； A 8 2 1

敏捷；S 9 1 5

耐久；B 7 3 5

魔力；S 9 5 0

器用；S 9 0 0

【魔法】

【擬人化解除】……かつての姿、かつての獣の力を取り戻す魔法。
任意で擬人化できる。

三段階解除式。

・一段階目……嗅覚、聴覚、敏捷力の向上。

三角の犬耳、尻尾が生える。

・解除式【第一段階限定解除】

・二段階目……嗅覚、聴覚、敏捷力が一段階目よりも

約二倍向上。

仔犬になる。

・解除式【第二段階限定解除】

・三段階目……嗅覚、聴覚、視覚、敏捷力、力が向上。

敏捷力は馬並み、本気を出せば音速も越える。

狩猟本能が蘇る。

大型犬になる。

・解除式「これは、かつての力、姿を取り戻す魔法。我、彼の王に
仕えし者。今は、彼の者に造られし我が身。我が望みはただ一つ。今

一度、あなたに呼んで欲しい。我が名は、王の狩猟犬《カヴァス》

【幻書の術】・・・収納魔法。

生物以外の認識下の物を1000個まで、収納可能。

取り出し時は、個々取り出し、全取り出し可能。

・収納詠唱式【ストレージ】

・取り出し詠唱式【テイクアウト】

【スキル】

・【王の真似】・・・魔力放出。

戦闘時、瞬間的な魔力ブースト。

自身、武器に加えることで、力、敏捷、斬撃の威力が倍増する。

・【魔術師のギフト】・・・治癒能力。

怪我、状態異常の自動回復。

と、そう、書かれていた。

スキルの事は、別に良い。

問題は、魔法の方、特に一つ目。

「ロキ様、僕の魔法は『獣化魔法』じゃなかったの?」

「・・・」

「擬人化解除って事は、僕は、人間じゃないの?最後の解除式に『造られし』って、僕は」

だからって、ロキ様に聞くのは、違うとは思う。

けど、今は、この神しくないない。

「・・・四葉たん、良いか?」

「な、に?」

「確かに自分は、ただの人間やない、誰かに造られた存在や。誰が何の目的で造ったかは知らん、造ったんが誰かもうちにもわからん。けどな?これだけは、忘れたらあかん、誰かに造られとったとしても、四葉たんは人間やし、うちの大事な大事な子や。それだけは、絶対に忘

れたらあかん、わかったな？」

「・・・う、うん」

そして、ロキ様は僕を強制的に自分の方に振り向かせると、何時に
なく真剣な顔で、僕にそう言う。

そんなロキ様の顔を一瞬は見たけど、僕は、すぐに、視線だけを反
らして、小さく頷いた。

というか、それしか出来なかった。

第29話・遠征の後お説教タイム

コンコン

「!」

「四葉、起きてる?」

その後、アイズさんと合流した僕は、就寝のため、そのまま、別れて自室へと戻った。

疲れていた事もあって、一瞬だけ寝たけど、すぐに起きてしまい、それからは、モヤモヤして、怖くて、一睡も出来ず、いつも起きてる時間帯になったけど、鍛練をしに行く気にもなれず、部屋の扉がノックされるまで、ボーツとしていた。

ガチャ

「おはよう、ティオネさん」

「おはよう、もう、朝食の時間よ?」

「うん」

部屋の扉を開けて廊下に出るとそこにはティオネさんが待っていた。

朝の挨拶をしてきた、僕は、ティオネさんと一緒に食堂へと向かった。

「魔法、使わないの?」

「今日は、これで過ごそうかなって」

「そう? まあ、今日一日は、遠征の後処理に追われるでしょうから、いいんじゃない?」

「うん」

その時の僕は、昨日の夜、ロキ様の元に行った時のまま、耳と尻尾の無い状態だ。

それを見て、不思議そうにテイオネさんが聞いて、僕は、そう答え、納得してくれた。



「夜は打ち上げやるからなー！遅れんようにー！」

「……」

その後、朝食を終えて、僕等はテイオネさんが言つてた通り、遠征の後処理を済ませるために、フィンさんに寄つて役割を振られ、ロキ様に見送られながら、僕等はホームを出て、北西のメインストリート、通称、『冒険者通り』に出た。

「見ろ……ロキ・ファミリアだけ。遠征から帰つて来たんだ……」

「あれが【勇者（ブレイバー）】……フィン・デイルナ……！」

「剣姫……ヒュルテ姉妹……スゲエな、第一級冒険者が何人もいやがる……！」

「バカツ目をつけられたらファミリアごと潰されるぞー！」

出るとすぐに注目的になった。

今からダンジョンに向かうための前準備に、バタバタと忙しそうにしていた人達も、視線を向け、自然と道が開けられた。

「なんかやだなー、こういうの。ベートは喜びそうだけど」

「ベートもそこまで下品ではないぞテイオナ。あやつはあやつなりに、第一級の誇りと自覚がある」

「えー、ガレス、何でベートの肩なんか持つの？絶対嘘だー」

「蔑むのと増長するのは、あやつの中では同じものではないらしい」
「意味わかんないよー」

そんな周囲の反応にテイオナさんがすごく嫌そうな顔をして言う

と、ガレスさんがそれに対して返していた。
ちなみに、話題に挙がったベートさんは、ホームにて他の雑用を押し付けられて、待機中だ。



「僕とリヴェリア、ガレスは『魔石』の換金に行く。みんなは予定通り、ここから各々の目的地に向かってくれ。換金したお金はどうかよろまかせないでおくれよ？ねえ、ラウル？」

「あ、あれは魔が差しただけっす!?! 本当にあれつきりです、団長っ!?!」

「ははっ。じゃあ、一旦解散だ」

そして、ギルド本部前にやって来た時、僕等は、その前で一度、立ち止まり、フィンさんの言葉を待ってて、僕等はそれぞれの場所へと向かった。



「おはようございます。エイナさん」

「おはよう〜四葉ちゃん。今日は、そっちなんだね？おはよう」

「うん」

「久しぶりだね？それで、どうしたの？」

「えっと」

で、僕が来たのは、ここ。

フィンさんやリヴェリアさん、ガレスさんと同じくギルド内だけで、僕は、エイナさんを求めてやって来た。

カウンターで仕事をしているエイナさんに挨拶をすると、ニッコリと優しい笑みを浮かべて挨拶を返してくれた。

「レベル二になったから、その報告」

「・・・えっ?」

そして、ここにエイナさんの元にやって来た理由は、ランクアップした事の報告だ。

僕がそう告げると目を丸くして固まるエイナさん。

「・・・えっと、お姉さん、ちよつと聞き逃しちやったり、もう一回、言ってくれる? 四葉ちゃんは何しに来たの?」

「レベル二になったからその報告に来た」

一度、眼鏡を外して、眼鏡のレンズを拭いてかけ直す、エイナさん。再び同じことを聞かれたので、僕も再び答えた。

「・・・本当に?」

「うん」

「・・・嘘じゃないのよね?」

「もちろん」

「・・・四葉ちゃん、冒険者になったの何時だっけ?」

「・・・三週間前?」

「さ、三週間で、レベル二~~~~~~~~つ!!」

続けて、聞かれたことを答えたら、エイナさんは爆発した。

きつと同じギルド内にいるフィンさんたちにも届いたんじゃないかと思うくらいの大音量のエイナさんの叫び声が雷鳴のごとく響き渡った。

バアアン!?

「!?!」

「何やらかしたの!!」

「な、何って」

「もくお！」

「・・・やばっ」

そして、思いっきりカウンターを叩いたエイナさんは、ものすごい早さで、カウンターの向こうの席からこちら側へと走って来た。

それは、本気でヤバイと思って、僕は、その場から逃げようとした。

ダッ

ガシッ

「!？」

「逃がすわけ無いでしょ？四葉ちゃん」

ビクッ

「ひいっ!？」

が、僕は、すぐに捕まった。

「やあくだあく！離してえく！」

「大人しく来なさい！」

「ヤダ、ヤダア！離して！離してったらあ！」

そして、そのまま、小脇に抱えられた僕は、エイナさんの手により、ギルド本部ロビーにある一室、面談用のボックスに放り込まれた。

一応、手足をバタ付かせてとか色々と手段を尽くしたけど、無駄だった。

「・・・何やらかしたんだ？あの小さい白いヒューマン。エイナちゃん、えっらいご立腹だったぞ」

「なんか、たった三週間でレベル一からレベル二にランクアップしたらしいぞ」

「ええっ!?!嘘だろ!?!そんなん」

「それは、わかんねえけど・・・なんか・・・」

そんな騒ぎを朝っぱらから、こんな大勢の人が集まる場所で起こしてしまった僕の話は、一気に、浮上した……らしい。

「良い!!」

「ああ、悪戯した幼い妹を叱る、しつかり者の姉って感じのエイナちゃんも最っ高だあ〜」

エイナちゃんとセットで

「……良いのか?・フィン」

「ハハハ、大丈夫さ。実は、四葉もあややって、彼女に甘えているのさ。害はない。それより、これから、四葉も大変になるんじゃないかな?色々な意味で」

さらに、それ等を全部見て聞いていたフィンさん達は、ただただ、苦笑いを浮かべるだけだった。



「さあ!話してもらいましょうか!何をしでかしたのかを全部!」

「ひいっ!」

で、問題はこつち。

備え付けられた二脚の向かい合わせに置かれたソファに下ろされた僕は、向かいのソファに座るエイナさんから少しでも距離を取ろうとソファのエイナさんから一番遠い(気がする)肘掛けに体を小さく縮こまらせて寄り添った。

「……な、何もしでかしてないよ、僕は、ただ、サポーターとして遠征に参加しただけ……」

「なっ!?遠征に参加したですってえええ!!」

「!?」

「ロキ・ファミアの今回の遠征の目的は、未到達階層の開拓だったわよね?」

「う、うん」

「それに参加した、と?」

「う、うん。サポーターとして」

「はああ〜〜〜」

そして、僕は、ロキ様達にあらかじめ、そう言えと言われたことを言った。

“サポーターとして遠征に参加した”ということ。

すると、エイナさんは、長い溜め息をついて、両手で頭を抱えた。

「四葉ちゃん。全っ然、私が言ったこと、わかってないじゃない!前に言ったでしょ!冒険者は冒険しちやいけないって!何で、深層への遠征について行っちゃうのよ!」

「フィンさんが行って良いつて言ったから」

「いくら、ファミアの団長が許可したからって!断りなさい!断るべきでしょ!そこは!」

そこから始まったエイナさんから僕へのお説教タイム。

その、お説教タイムから、僕が、解放されたのは、小一時間ほどたったからだった。

第30話・直接契約

「待ったぞ」

「ガレスさん」

エイナさんから解放されて、ギルドを出ようとした時、ガレスさんが僕を待っていてくれた。

「ずいぶんと絞られたようじゃの」

「・・・怒ったリヴェリアさん並に怖かった・・・」

「ガハハハ!!そうか、そうか!」

ガシガシ

「・・・」

そのガレスさんに、エイナさんがどれだけ怖かったのかを手短に教えると、ガレスさんは、豪快に笑いながら、僕の頭を乱暴に撫でる。

「では、行くとするかの?」

「う、うん。あ、あの、ごめんなさい。せつかく、買ってくれたヤツなのに」

「ガハハハ!!気にするでない!それで、皆を守ってくれたんじやろ?おまけに、あの深層までもった獲物じゃ。上々吉じやて・・・また、同じ物があれば良いの」

「うん!」

そして、僕等は、ある場所へと向かう。



「椿」

「ん?・・・おおう、ガレス!遠征から帰ってきたのか」

で、僕とガレスさんが向かった場所と言うのが、ガレスさんが「直接契約」を結んでいると言う「椿」と言う鍛冶師さんの工房。

「ん？誰だ？この小さいめんこい女子は」

「最近、ファミリアに入団した四葉だ」

「ほお、この小娘がか！お主の事は主神様からも聞いておるぞ？」

その人は、褐色の肌の長い黒髪の背の高い左目に眼帯を付けた女人だった。

「なんだ？ガレス、新入りを手前に紹介するために来たのか？」

「んなわけなからう。お主に用があるのは、儂だ」

「ん？」

「また、新しいのを作ってくれ」

「なっ!?また、壊したのか!!」

「おう」

この人を訪ねたのは、ガレスさんの用事。

「『おう』ではないわ・・・はあく、三日は、かかるぞ？」

「ああ・・・それとも一つ、兎刀と言う刀を造った鍛冶師を知っておるか？」

「ん？兎刀？」

「・・・うん、バベルの八階で買ったんだけど、造った人の名前、見ずに買っちゃって」

そして、こっちが、僕がここに来た理由だった。

この人は、ヘファイストス・ファミリアの団長さんらしいし、もしかしたら、作った人の事を知ってるんじゃないかって。

「ん、そのネーミングだと、ヴェル吉かの」

「ヴェル吉？」

「おお！名を、ヴェルフ・クロッツ」

「クロッツ？」

その名を椿さんが言うと、ガレスさんが反応した。

「クロッツとは、あのクロッツか！」

「おう！彼の鍛冶貴族のな！」

そのガレスさんの反応にすごく自慢げに椿さんは言った。



カアンカアンツ

カアンカアンツ

「この工房だ」

「・・・」

そして、僕等は、椿さんに、*「ヴェルフ・クロッツ」* っていう人の工房に案内して貰った。

その人の工房は細い路地を何度も何度も曲がったところにあった、小じんまりとした、平屋造りの建物でところどころ黒ずんでる建物だった。

中から聞こえる金属の打撃音。

リズベツトさんの工房で何度も聞いた音だ。

「入るぞー！ヴェル吉！」

ガラツ

「ん？・・・椿か。なんか用か」

その工房の扉を開け、中に入っていく椿さんに続いて僕とガレスも中へと入った。

強い鉄の匂いと熱さがそこには充満していた。

「なっ!?! 【重傑（エルガルム）】!?!」

「……」

すると、中にいた赤い短髪に手拭いを巻いた男の人がいて、ガレスさんを見てすごく驚いていた。

「ほお、この小僧がそうか」

「おう！」

「な、ど、どう言うことだ？何で」

「お主、兎刀と言う名の刀を知っておるか？」

「!?!」

そして、その刀の名前をガレスさんが言うと、更にビックリしていた。

「お兄さんが、あの刀を作ったの？」

「ん？……おお、そうだ」

そこで僕が声を出すとその人は、僕の方へと視線を移す。

「そうか……今日、ここを訪ねて来たのは、こやつと直接契約を貰うためなんじゃ」

「直接契約つすか？この子と？」

「ああ、こやつがお主の刀をえらく気に入ってしもうての？新たに似た刀を欲しがって、売場に行っても良かったんじゃが、こちらに来る用があったの？直接、来てみたのだ」

「……」

まずは、刀の方を作っちゃおうか?」

「うん!それでお願ひします!」

「了解だ!なら、明後日にでも取りに来てくれ」

「解った」

そして、その約束をして僕等はヴェルフさんの工房を出た。

「椿さん」

「ん?」

「ここまで案内してくれてありがとうございました!」

「おう!」

「手間を取らせてすまんかったの」

「構わんさ。じゃあ、手前は戻る」

出た所で、椿さんとも別れた僕等

「僕等も行くとするか」

「うん」

それを見送ると僕等も歩き出した。

「そうだ、四葉」

「??何?ガレスさん」

「あの小僧の名、特に家名の方は、エルフ達の前では出すなよ?」

「??何で」

「・・・ああ」

そして、そこで、*グロツゾ*の一族と一部のエルフの間にあるモノの事を聞いた。

このオラリオの近隣にある国、*ラキア*。

本来なら、*グロツゾ*はその国に仕えていたらしい。

そこで、じゃあ、何故、あのヴェルフさんは？と思ったけど、そこを詮索するのは違う気がして、その疑問を即座に自分の中から消した。

で、そのラキアと言う国は、好戦的な国で、何度もこのオラリオに攻めてきたり、他の国や都市に戦争を仕掛けていつていつたりするらしい、現在進行形で。

その国が、ある日、とあるエルフの人達の住んでる森を、里を焼き払った。

その原因を作ったのが、ヴェルフさんの「クロツゾ」一族が作った「魔剣」。

だから、「クロツゾ」の一族を恨んでいるんだと。

正直、エルフの人達が恨んだ気持ちは、僕にも良くわかった。

だって、被害を悪戯に広めた、直接その魔剣を振るった兵士達を憎たらしいと思うと同時に、そもそも、作らなきゃ良かったって話だし。

「わかった、言わない」

「そうしてくれ」

とりあえず、僕は、直接契約を結んだヴェルフさんの事を彼には悪いかもだけど、波風立てたくないこともあって、名は伏せることにした。

特に、エルフの人達の前では

「直接契約を結んだ後で聞いて後悔したか？結んだこと」

「後悔はしないよ？僕は、そもそも、「クロツゾの魔剣」が欲しいんじゃない、「ヴェルフさんの作るモノ」が欲しいんだもん」

「そうか・・・じゃあ、そろそろ、打ち上げ会場に向かうとするかの」「場所って何処なの？」

「お主も知っておると思うぞ？」

「??」

「ほれ、行くぞ？」

「う、うん」

そして、そこで話を切り替えて、僕等は、少しでも足早に、打ち上げ会場となる場所へと向かった。

第31話・豊穰の女主人での出来事

「ミア母ちゃーん、来たでー!」

「お待ちしておりました。ロキ・ファミリアの皆様。お席は店内と、こちらのテラスの方になります。ご了承ください」

「ああ、わかった。ありがとう」

「四葉さんは、うちの隣な?半分メインやから」

「わかってるよ」

その後、アイズさん達とも合流して、僕は、皆と一緒に会場である“豊穰の女主人”にやって来た。

前、お昼時に来た事があるお店だ。

きつと、席を店内とテラスに分けるのは僕達全員が店内に入りきれないための処置なんだろう、丁寧に教えてくれたエルフの店員さんにフィンさんは了承して、お店に入る前に手早く、半数の人達をテラスの席に座らせた。

「いらつやいませー!」

「・・・おい」

「おお、えれえ上玉ツ」

「馬鹿、ちげえよ。エンブレムを見ろ」

「・・・げっ」

「あれが」

「・・・巨人殺しのファミリア」

「第一級冒険者のオールスターじゃねえか」

「どれが噂の劍姫だ?」

「あの、ちっこい白いヒューマン、あの子もロキ・ファミリアなのか?」

「新入りかな?」

そして、店内に入ると、例のごとく他のお客さん達が顔色を変え、声

をひそめだす。

おまけに、今回は、一緒にいる僕の方にも視線が集まってくるのを感じた。

こういう目には、向こうでも散々味わってるモノなので、もう慣れっこだから、ここは何もせず堂々と案内してくれている店員さんに着いて行く。



「よっしやあ、ダンジョン遠征みんなごろうさん！それと、四葉たん！ランクアップおめでとうさん！今日は宴や！飲めえ!!」

「「乾っ杯ー!!」」

で、僕等が案内されたのは、店内の隅、そのすぐ横の窓を挟んでテラスがあつて、扉を通じて自由に出入りできる席だった。

「やっぱり、ランクアップしてたわね？」

「まあ、あまりに当然すぎで、ビックリしないよね、けどおめでとう？四葉」

「うん、ありがとう」

そして、ロキ様の音頭で二種類の意味で乾杯をした僕等。

「団長、つぎます。どうぞ」

「ああ、ありがとう、ティオネ。だけどさつきから、僕は、尋常じゃないペースでお酒を飲まされてるんだけどね。酔い潰した後、僕をどうするつもりだい？」

「ふふ、他意なんてありません。さっ、もう一杯」

「本当にぶれねえなこの女・・・」

「「この料理美味しいんだよね。つい食べ過ぎちゃってさ」
「てめえはいつも食べまくってるじゃねえか・・・」

次々に運ばれて来る料理はどれもすごく美味しくて、特に、鶏の香草焼きは絶品だった。

「うおーっ、ガレスー!?!うちと飲み比べで勝負やー!」

「ふんっ、いいじやろう、返り討ちにしてやるわい」

「ちなみに買った方はリヴェリアのおっぱいを自由にできる権利付きやアッ!!」

「じっ、自分もやるっす!?!」

「俺もおおおー」

「俺もだ!!」

「私もっ!」

「ヒック。あ、じゃあ、僕も」

「団長ーっ!?!」

「リ、リヴェリア様……」

「言わせておけ……」

お酒が入り騒ぎはじめるロキ様達。

「あ……あのアイズさん」

「四葉ちゃん!」

「オ……僕達と一献!していただけませんか!?!」

「俺達とも一緒に飲もうぜ!?!」

その中には、僕やアイズさんにお酒をすすめて来る人達もいて、それは、ちよつと困った。

「止めろ、お前達。アイズに酒を飲ませるな。それと、子供に何を飲ませる気だ」

「……四葉ちゃんはともかく、アイズさん、お酒は飲めないんですたっけ?」

それは、僕とアイズさんが断る前にリヴェリアさんが止めてくれ、レフィーヤさんはアイズさんもお酒が飲めないことにたいして、不思議そうな様子で、その事についてアイズさんに聞いた。

「んぐっ…ぷはっ。アイズにお酒を飲ませると面倒なんだよ、ねー？」

「…」

「えっ、どういうことですか？」

「下戸っていうか、悪酔いなんて目じゃないっていうか…ロキが殺されかけたっていうかあ」

「テイオナ、お願い…止めて」

「あははっ！アイズ、顔赤くいい！」

「テイオナさん!!」

その答は、聞かれたアイズさんではなく、アイズさんの右隣に座るテイオナさんが答えた。

すると、アスナさんは頬を赤くして俯いて、テイオナさんはアイズさんに寄りかかり、慌てふためくレフィーヤさんとけらけら笑うテイオナさんに釣られて、アイズさんは赤らんだ顔を上げ、ほのかに微笑んだ。

それらを見て、テラス側の席も見た。

皆、すごく楽しそうで、運ばれて来てもあっという間に消えていくお酒と料理、ウエイトレスの人達の動きもさらに磨きがかかって行く。

周囲のお客さん達からも笑いが絶えない。

そんなこの空間がとても良いと思った。



「そうだ、アイズ！お前のあの話を聞かせてやれよ！」

「??」

それから、少しあって、ロキ様を中心に遠征の話題で盛り上がった時だった。

ちやうど、僕の隣に座っていたベートさんが何かの話をアイズさんに催促した。

それに小首を傾げる僕とアイズさん。

何を話せと言うのか？

もう、ほとんど、他の人達が話してるのに……。

「あれだつて帰る途中で何匹か逃がしたミノタウロス！最後の一匹、お前が五階層で始末しただろ!?そんで、ほれ、あん時のトマト野郎の！」

「!?!」

そして、ベートさんの口にしたその言葉で、彼が何を話せと言ったのかわかった。

「ミノタウロスつて、十七階層で襲いかかってきて振り返りにしたら、すぐ集団で逃げ出していった？」

「それぞれ！奇跡みてえにどんだん上層に上っていきやがってよつ、俺達が泡食つて追いかけれいったやつ！こっちは帰りの途中で疲れていたつてのによ〜」

テイオネさんがそう確認して、ベートさんはジョツキをテーブルに叩きつけながら頷いた。

「それでよ、いたんだよ、いかにも駆け出っつていうようなひよろくせえガキが！」

「……」

「抱腹もんだつたぜ、兎みたいに壁際へ追い込まれちまつてよお！」

可哀相なくらい震え上がっちゃって、顔を引きつらせてやんの！」

「ふむう？それで、その冒険者どうしたん？助かったん？」

「アイズが間一髪ってところでミノを細切れにしてやったんだよ、なっ？」

なんだろ、そんな彼の言葉を聞いてると、心の奥底がザワザワした。

「それでそいつ、あのくっせー牛の血を全身に浴びて・・・真っ赤なトマトになっちゃったんだよーくくくっ、ひーっ、腹痛ええ・・・！」

「うわぁ・・・」

「アイズ、あれ狙ったんだよな？そうだよな？頼むからそう言ってくれ・・・！」

「・・・そんなこと、ないです」

テイオナさんはベートさんのその話に顔をしかめ、呻いた。

それだけで、その隣に座るアイズさんが悲しんでるように思えた。笑いすぎて目に涙を溜めたベートさんに、アイズさんそれだけを喉から絞り出すように言った。

「それにだぜ？そのトマト野郎、叫びながらどっか行っちゃまって・・・ぶくくくっ！うちのお姫様、助けた相手に逃げられてやんのおっ！」

「・・・くっ」

「アハハハハッ！そりや傑作やあー！冒険者怖がらせてまうアイズたんマジ萌えー!!」

「ふ、ふふっ・・・ご、ごめんなさい、アイズっ、流石に我慢できない・・・！」

そのベートさんの話に聞き耳を立てていた他のお客さん達も、レフィーヤさんや、ロキ様、テイオナさんが、誰も堪えきれずに笑い声を上げた。

「あああん、ほら、そんな怖い目しないの！可愛い顔が台無しだぞー？」

「……」

「しかしまあ、久々にあんな情けねえヤツを目にしちまって、胸糞悪くなったな。野郎のくせに、泣くわ泣くわ」

「……あらあゝ」

「ほんとざまあねえよな。たく、泣き喚くくらいだったら最初から冒険者になんかなるんじゃないやねえっての。ドン引きだぜ、なあ、アイズ？」

俯いたアイズさんにその顔を覗き込むティオナさんと、なおも話を続けるベートさん。

「ああいうヤツがいるから俺達の品位が下がるっていうかよ、勘弁して欲しいぜ」

「いい加減そのうるさい口を閉じろ、ベート。ミノタウロスを逃がしたのは、我々の不手際だ」

「……そうだよ。何で、自分達の不手際を自分達で笑って、巻き込んだ人に謝りもしないで笑い者にしてるの？」

「四葉の言う通りだ。巻き込んだその少年に謝罪することはあれ、酒の肴にする権利などない。恥を知れ」

なんか、嫌なのはあった。

けど、何より、少しだけ悲しくなった。

リヴェリアさんと共にそう言っていると、ティオナさん達は気まずそうに視線を逸らした。

が

ガッ

ダアアアン

「!？」

「ちよ、ベート!？」

この人だけは、止まらなかった。

いきなり、ロキ様の隣、つまり、彼とロキ様の間に座る僕の胸倉を掴んだベートさんはそのまま、床に叩き付けるように落とした。

ドン

「!？」

「おーおー、生意気言っつてんじやねえぞおお?糞餓鬼いゝ」

そして、僕の体にベートさんの大きな足が乗った。

「何をしている、ベート!早く、その足を退けろ!」

「ああ??糞生意気にも幹部にたてついた餓鬼を躡てんだろが。だいたい、あんな救えねえヤツを擁護して何になるってんだ?それはてめへの失敗をてめえで誤魔化すための、ただの自己満足だろ?ゴミをゴミと言っつて何が悪い」

「これ、やめえ。ベートもリヴェリアも。酒が不味くなるわ。ベート、はよう、その足退けたり、せやないと」

ロキ様が見兼ねて仲裁に入ってくれたけど、彼の足が退くことも、その言葉も止まることはなく、逆に完全に火がついているのか、ベートさんはなおも続けた。

「アイズはどう思うよ?自分の目の前で震え上がるだけの情けねえ野郎を。あれが俺達と同じ冒険者を名乗ってるんだぜ?」

「・・・あの状況じゃあ、しょうがなかったと思います」

「何だよ、いい子ちゃんぶっちゃまって・・・じゃあ、質問を変えるぜ?あのガキと俺、ツガイにするならどっちがいい?」

「・・・ベート、君、酔ってるの?」

「うるせえ。ほら、アイズ、選べよ、雌のお前はどっちの雄に尻尾を

振って、どっちの雄に滅茶苦茶にされてえんだ？」

そんな彼の様子に、フィンさんは軽く驚いた様子だった。

「…私は、そんなことを言うベートさんとだけは、ごめんです。…
そんなことより、四葉から早く、足を退けてください。」

「無様だな」

「黙れババアツ」

アイズさんが、その問いに、そう答える。

なんと言うか、無様だ。

僕と同じくそう感じたらしく、リヴェリアさんはベートさんに言う。
う。

よほど、アイズさんに拒否されたのが悔しかったのか、僕の体に乗るベートさんの足が、更に力が入り、僕の体の中の何かが軋んだ。

「じゃあ何か、お前はあのガキに好きだの愛してるだの目の前で抜かされたら受け入れるってのか？」

「…っ」

「はっ、そんな筈ねえやなあ。自分より弱くて、軟弱で、救えない、気持ちだけが空回りしてる雑魚野郎に、お前の隣にたつ資格なんてありはしねえ。他ならないお前がそれを認めねえ！雑魚じゃあ、アイズ・ヴァレンシユタインには釣り合わねえ」

そして、ベートさんがそう言った瞬間だった。

ガタツ

ダツ

「ベルさん!？」

お店の中のお客さんの誰かが、大きな物音を立てた。

そして、誰かの駆け出す足音と、その誰かを呼ぶ声が聞こえた。

「あぁん? 食い逃げか?」

「うっわ、ミア母ちゃんのところまでやらかすなんて・・・怖いもん知らずやなあ」

その一瞬の出来事に、この場にいた大半の人達が何が起きたのか把握できず、困惑したざわめきがあちらこちらから出始める。

それは、ベートさん達も同じで、おかげでベートさんの気が反れたのか、僕の体に乗るベートさんの足から力が抜けた気がした。

ガシッ

「ん??・・・うおおっ!」

ドタアアン

その足を掴んで立ち上がりながら、持ち上げて、彼を座つてた椅子から落とした。

「・・・」

「【テイクアウト】」

ドサッ

「・・・」

何が起きたか解らない様子の彼を見下ろしながら、僕は、【幻書の術】に試しとして、なんとなく放り込んでいたロープを取り出して、彼の両足をグルグル巻きにして縛った。

「なっ!?! 何してんだてめえ!」

「うわぁく面白い。四葉、まだ、ロープある?」

「ある。【テイクアウト】」

ドサドサッ

そんな僕の行動に驚くベートさんと逆に楽しそうに駆け寄って来たテイオナさん。

僕は、テイオナさんに言われて、残る五本のロープを取り出した。

「……四葉、何で、そんなにロープを入れてたんだい？」

「……なんとなく」

「うおおおー!!何すんだ!やめろー!!」

出て来たその数に、フィンさんが苦笑いを浮かべると、それ等のロープを手にベートさんを楽しそうにグルグル巻きにしていくテイオナさんを見ながら

「あの人は強くなるよ。」

「ああ??」

「あの人はここにいて誰も驚く位、強くなる。あまり、見下してばっかりいると後悔するよ」

ベートさんを見下ろしながら言うと、僕は、一度、お店の外に向かった

第32話・初接触

「アイズさん、さっきの人って」

「・・・うん、あのミノタウロスの時の、また、傷つけちゃった」

「・・・そっか。何処に行つたの？」

「・・・たぶん、ダンジョン」

僕が外に出て来た時、そこにはすでにアイズさんがいて、僕も彼女と同じように、ダンジョンの入り口、バベルの方角を見た。

「ほいほい、アイズう、四葉たん。何やってるんー？」

「・・・」

そこにロキ様がやって来て、ロキ様は、凄く密着した感じでアイズさんの背後から抱き付いた。

ドフツ

「グフツ!？」

「!？」

パァン

「はわああっ!？」

するとアイズさんは、困った顔をしながら、抱きついて来たロキ様のアイズさんのお腹に回されていた手を取って捻り、鳩尾辺りに肘鉄を喰らわせ、最後に頬に思いつきりビンタを喰らわせていた。

「四葉のいる前で変なことしないでください」

「いたっいったあ!？表情と行動が全く噛み合っていないよアイズたん・・・つうか、四葉たん、おらんかったら、やってええんか？」

「ダメです」

「クツグーデレなアイズたん萌えーツ!!!」

「……」

頬にモミジの出来たロキ様は、涙目でプルプル震えていたかと思うと、すぐに復活して、何かわけの解らないことを叫び出して、僕は、なんとも言いがたい気持ちになった。

「まあまあ、そんな顔せんぞ？二人共。ベートと酒飲みたくなくなつたんなら、ミア母ちゃんに頼んで店の外に吊るしてもらおうから」

「……」

「ぐおおおおお!!」

ロキ様がそう言うので、お店の中を見るとベートさんは、僕の出したロープで肩から下をグルグル巻きにされ、リヴェリアさんに頭を踏みつけられていた。

「ほな、行こう。アイズたん、四葉たん、うちに酌してえ」

「……」

肩を抱かれやんわりとお店の中に連れて行こうとするロキ様。

正直、今は、戻りたくなかった。

だから

「……ロキ様」

「ん？どないしたん？四葉たん？」

「ふああく……僕、眠くなっちゃったあく……先に帰っちゃダメ？」

最終手段に出た。

甘えた声で、欠伸と涙目と上目遣いと欠伸で出た涙を指で拭うオープン付きで、そうお願いしてみた。

眠いの半分、帰りたいの半分なので、嘘だとは思うまい。

「ぐはああ!？」

「!？」

そんな風に思ってたなら、ロキ様が思いっきり鼻血を吹き出した。それには、流石にビックリした。

「な、なんや! その可愛いおねだりのしかたはー! 何処でそんな覚えたんやあー! きゅん死するかと思うたわ!」

「・・・」

「せやな? もうええ、時間やしフィン等にはうちから言っとくわ」

「・・・うん」

「二人で帰れるか?」

「・・・うん」

まあ、とりあえず、帰って良い許可は出たから、一応、OKとしておこう。

「・・・ロキ、私、四葉、送って良い? やっぱり、一人じゃ危ないと思うから」

「おっ? そうか? 確かに、一人で帰すんは危ないしな? お願い出来るか? アイズたん」

「はい・・・それじゃ、行く? 四葉」

「うん」

そして、結局、アイズさんも一緒に帰ることになった



「それじゃ、おやすみ? 四葉」

「おやすみなさい、アイズさん」

その後、本気で、アイズさんは僕をホームへ、いや、僕の部屋まで送り届けてくれた。

それからしばらくは、アイズさんの足音が遠ざかるのを待ちながら、僕は、戦闘衣に着替えた。

もちろん、羽織り付きで。

キイイ

「・・・よし」

そして、フードを被り、かつて使った動線で僕は、再び外へ、ダンジョンへと向かった。

◆◆◆

「イイアツ!？」

「はああ!!」

ドスツ

サアア

向かって来る「フロググ・シユーター」と言う名の巨大な単眼の蛙のモンスターを僕は、体術スキル【弦月】を模した蹴りで魔石ごと蹴り抜いて、灰へと変えた。

一応、ドロップアイテムだけは回収して、【幻書の術】の中にソレを入れた。

タツ

「・・・何処だろ」

入れると耳をすませて、ダンジョン内をひた走る。

ただ、普通の人間としての聴覚だけど、必死に、戦闘音を探した。

戦闘音を探すのは、時間带的に、大体の人がホームに帰るか、何処かのご飯屋さんでご飯を食べてるかのどっちかだろうと思って、ダンジョンのそれも二階層から十二階層の間を、特に五階層から十階層の間を探すことにした。

別に、止めに来たわけじゃない、正直なところ、何で、追いかけて来てるのか、自分でも説明がつかなかった。



「あつ」

タツ

そして、ようやく六階層の部屋状の広い空間に辿り着いた。

その中央でその人は所々、血を流したボロボロの状態で地面に倒れていた。

正直、少し焦った。

「息はある・・・良かった」

キユポツ

そんな彼を見て、僕は、駆け寄ると、口元に手を当てて呼吸をするかを確かめて、腰のポーチの中にある回復薬の栓を歯で抜き、飲み口を彼の口に押し当て、その中身を口の中へ流し込んだ。

「・・・ゴクゴクツ・・・ゴフツ!・・・ゲホゲホツ」

「・・・大丈夫、ですか?」

「・・・えっ?・・・子供?」

「!?!」

それで、二口は飲んだけど、三口目は気管に入ったのか、咳き込んでしまったけど、彼はそこでようやく目を覚ました。

そして、その発せられた声に僕は、ビツクリした。だって、あまりにも似てたから

「はっ!? き、君、さつき、ロキ・ファミリアといた!」

「・・・良く、覚えてるね? あんなに沢山いたのに」

「そ、それは、君も目立ってたし」

その人は、最初こそ、虚ろだったけど、徐々に正気に戻ってきて、逆に僕を見て驚いていた。

「・・・ごめんなさい」

「えっ?」

「・・・僕等は、その、貴方を沢山傷つけてしまったから。ミノタウロスの時も、豊穰の女主人の所でも」

そんな彼に、僕は、頭を下げた。

ファミリアを代表してとか、そんな風に思いはしないけど、ただ、個人的に謝らねばと思った。

「えっ? いや、君が謝ることじゃないよ!・・・その通りだっと思うし、だから、頭を上げて?」

「・・・」

慌てふためく彼。

ビキリ

「!?!」

ビキリ

ビキリ

そうしてると、ダンジョンの壁に亀裂が入る音がした。

いや、正しくは、モンスターが生まれる音が……。
その音が聞こえた瞬間、僕等とはつきに、背中合せに立った。

「君、そう言えば、武器は？」

「今、作成中」

「はああ??じゃあ、どうやって」

「武器なら、ここにある」

「えっ？」

そこで僕が武器を無装備なのに気付いた彼に僕は、自分の胸に手を当てて答えた。

ビキリ

ビキリ

ビキリ

「ま、また、こんなに」

「計六匹か……やれる？」

「もちろん！やってやる！」

「じゃあ、貴方の正面の三匹を、お願い。僕は、こっちの三匹をやる。
行くよ」

そして、そうしてる間に、六匹ものウオーシャドウが僕等を取り囲むようになり生まれ出て来て、僕は、そう言うと、まずは、手始めに正面にいるウオーシャドウに飛び掛かった。



「いいで良いの？」

「……うん、ごめん、支えてもらっちゃって」

「……あんまり、支えられてるようには思えないけどね」

それからしばらくして地上へと出た僕等。

僕は、へろへろのボロボロ状態の彼を放つてはおけず、彼のホームに送ることにした。

んだけど、彼のホームはなんと、人気のない路地深くに建てられた、何時崩れてもおおかしくない感じの教会だった。

ギイツ

バアンツ

「ふぎゅっー！」

「!？」

そして、その教会の隠し部屋らしき部屋の扉を開けた時、扉の向こう側で扉と何かとぶつかった感覚がした。

おまけに誰かの悲鳴も聞こえた。

「~~~~~」

「あつ、ご、ごめんなさい」

「か、神様……ご、ごめんなさい……」

「ベル君!?!?!?!」

その後、僕は、扉の向こう側で顔面を押さえながらうずくまって呻き声をあげるツインテールの女の子を見た。

そんな彼女に彼が声をかけると、神様だと言う女の子は、すごく嬉しそうに彼の名を呼んで勢いよく立ち上がると、安堵からか、涙ぐみ、その姿を見て言葉を失っていた。

「!?!ど、どうしたんだい、その怪我は!?!まさか誰かに襲われたんじゃない?？」

「いえ、そういうことは、なかったです……」

「じゃあ、一体どうして!?!」

「……ダンジョンに、潜ってました」

彼の上半身、下半身と視線を走らせた彼女は血相を変えて、彼に迫り寄った。

「ば、馬鹿っ！何を考えてるんだよ!?そんな格好のまままでダンジョンに行くなんてっ……しかも、一晩中!?!」

「……すみません」

「……どうしてそんな無茶をしたんだい?そんな自暴自棄のような真似、君らしくないじゃないか?」

「……」

それには、押し黙って、再び暗い雰囲気になった彼を見て

「あの」

「わっ!?!ビックリした」

彼を叱っていた女の子の方に声をかけた。

すると、彼のあまりの姿に僕が見えていなかったようで、女の子は凄いビックリした様子だった。

「き、君は?」

「僕は、四葉って言います。あの、彼の事、お願いできますか?」

「あ、ううん、もちろんだよ。そうか、君がベル君をここまで連れて帰って来てくれたんだね?ありがとう」

「……いいえ。では、失礼します」

そんな彼女に彼の事をお願いして、彼を受け渡すと、僕は、ひとまず、ここを後にした。

第33話・落ち込むアイズさん

コンコン

「はあ〜い」

そして、もう一度、彼のホームにやって来た僕は、さつきとは違って、ちゃんとノックをした。

キイイ

「おっ！君は」

「あの、コレ」

「ん？」

そんな僕を出迎えてくれたのは、さつきのツインテールの女の子だった。

その子に、僕は、バベルの換金所で換金して来たお金の入った少し大きい袋を手渡した。

「それじゃ、ちゃんと渡しましたから」

「えっ!?!ちよつ、君」

と言うか、半分押し付ける感じに手渡して僕は、全力で走ってここを後に、自分のホームに向かう。

ちゃんと偽装工作もした。

換金する前に、シャワー室で汗とかいろいろ流し、「幻書の術」に入れておいた、ここに来た時、最初にロキ様を買ってくれたワンピースタイプのセーラー服に着替え、着ていた戦闘衣は、ワンピースの代わりに【幻書の術】に放り込んでおいた。

靴だって、戦闘用のブーツからニーソックスとローファアに変えた。

これで、こつそりホームに帰って、何食わぬ顔で、朝食の準備をしてる人達に紛れれば、何とかなるだろうと、僕は、考えた。



「よっ」

スタアン

そして、前回と同じように、ホームから脱け出した窓から、館に入った。

「よし」

タツ

今回も、ここにはあまりの人はいなくて、だから、ちよつと油断していた。

「何が『よし』だ、馬鹿者」

ビクッ

「!？」

その声が聞こえた瞬間、僕の肩は跳ね上がった。

「なっ!?!リヴェリアさん!？」

「……」

ゆっくりと声のした方を、後ろを振り返ると、そこにいなかったはずのリヴェリアさんがそこにいた。

まるで、僕を待ち構えていたかのように……

「え、えっと……お、おはよう?リヴェリアさん?」

「ああ、おはよう。……で?」

「……で?とほ?」

「何故、お前は、この窓からホームに侵入するかなのような真似をして入って来た？」

とりあえず、朝の挨拶をして、誤魔化してみる。

「え、えつと・・・ご、ごっこ遊び？ス、スパイごっこ的な？」

「こんな朝っぱらからか？元気な事だな？四葉」

「ぼ、僕は、一応、七歳の子供だよ？スパイごっこかしたくなかったりしても、可笑しくは無いでしょ？」

無茶苦茶、意味の解らない、誤魔化し方だし、正直、こんなスパイごっこみたいな遊びを、したいなんて、思ったことなんか生まれてこの方一度も無いけど。

「それじゃ、僕は、一度、部屋に」

「・・・」

なんか、このまま、会話を続けてたら、墓穴を掘りそうで、僕は、そう言ってリヴェリアさんから逃走を凶ろうとした。

ガシッ

「!？」

「そんな言い訳で誤魔化せるとでも思っているのか？四葉」

「ヒイツ!？」

その前に、頭を鷲掴みにされて、逃走を断念せざるを終わらなかった。

「何処へ行って、何をしていた？」

「・・・」

そして、再度、その質問をされ、どう答えるべきか考えた。

「どうした、四葉。答えられないのか？」

「・・・」

答えられない。

答えたら、拳骨が飛んでくる未来しか見えないし、それがすごく怖かった。

「答えてみる？怒らないから」

「・・・ほ、本当に？」

「ああ、怒らないさ？さあ、素直に言え？」

が、「怒らない」と言う言葉を聞いて、それが嘘だとわかってても、淡い期待を込めて

「・・・ダンジョンに行ってた」

「・・・そうか」

素直に、ダンジョンに行ってた事を答えた。

「この大馬鹿者がああ!!!」

ゴゴオオオン

「!!!」

そしたら、やっぱり、飛んできたリヴェリアさんの強烈な拳骨が。

「痛うつ・・・怒らないって言ったのにく嘘付き」

「うるさい!!怒らんとは言ったが、拳骨をあたえんとは、言っておらん!!まさかとは、思うが、そんな服装でダンジョンに行ったのか？」

「ちゃんと戦闘衣を着て行ったよ。今は、【幻書の術】の中だけ」

脳天からお尻にかけて走る痛みを味わいながら、僕は、一応、装備をしていった事は話した。

完全装備ってわけじゃなかったけど・・・

「はあく・・・全く、厄介な魔法が発現したものだな」

「・・・」

「と言うか、そこまですると言うことは、貴様、一時間や、そこらで帰ってくるつもりも無かったと言うことだろ？」

一つ溜め息を吐くとリヴェリアさんは、頭を抱えて言った。

「何故、そんなことをした？」

「・・・帰って来て、いざ、寝ようとしたら、なんだか、ムシヤクシヤして寝れなかった。だから、少し、体を動かせば、寝れるかな？って思って、ダンジョンに行った」

「・・・そうか」

そして、そんなリヴェリアさんに僕は、最もらしい、理由を話した。

コツン

「!？」

「だが、どんな理由があるにせよ、コレで二度目だ。しっかりと、反省しろ」

「・・・うん、ごめんなさい」

すると、今度は軽く頭を小突かれ、反省するように言われた僕は、素直に頷いた。

「そろそろ、朝食の時間だ。行くぞ」

「うん」

そして、食堂に向かって歩き出すリヴェリアさんの後を僕は、着いて歩いた。

◆◆◆◆◆

「……あつ」

「どうした？」

そうして歩いていると、ちょうど、中庭が見えるあたりに差し掛かった時、その中庭にいる人物に目が止まった。

「……アイズさんだ」

「……アイズ？」

その人物というのが、アイズさんで、別に、彼女が早朝から中庭にいることは、何ら不思議じゃない。

なんたつて、彼女は、ここで鍛練をするわけだし。

ただ、今日は、それが違った。

今日の彼女は、剣の素振りはず、中庭に設置されている長椅子に一人座って、ボーツとしていた。

「……僕、行ってくる」

「……ああ」

あまり見たことの無い彼女の雰囲気、僕は、リヴェリアさんから離れて、アイズさんのものに向かった。

◆◆◆◆◆

「アイズさん」

「・・・四葉」

そして、アイズさんの傍で名前を呼ぶとアイズさんがちよつと不満そうに僕の名前を呼んだ。

「・・・四葉、鍛練は？」

「えっ？」

「・・・お姉ちゃん、ちよつと待ってた・・・」

「あつ」

ちよつとだけ、捨てられた仔犬のような目で上目遣いをして、僕を見ると、両頬をぷくぷくと膨らませて、アイズさんは、言った。

そういえば、と思う。

僕は、遠征前は彼女と一緒に鍛練をしていたし、帰って来てからまだ二日目だけど、すっかり、鍛練の事を忘れてしまっていた事を思い出した。

「四葉の部屋にお迎えにも、行ったんだよ？」

「うっ、それは・・・ご、ごめんなさい・・・」

「・・・うん、許してあげる」

おまけに、僕の部屋にまで迎えに来てくれたことを知って、僕は、アイズさんに謝った。

それをすんなり受け取ってくれたアイズさん。

「・・・」

「・・・」

が、すぐに、アイズさんの表情は、僕が声をかける前の暗い顔に変わった。

「……」
「……」

どうしよう……

なんて、声をかけるべきなんだろう……

「あっ」

「??」

「その剣、見たことないよ?どうしたの?」

と、思っていると、ふと、アイズさんの横に見慣れない剣が有ることに気が付いて、なんとなく、その剣について聞いてみることにした。

「これ?」

「うん」

「これは、代剣。私の剣、今整備中だから」

代剣だと言う、その剣は、全体的に装飾は抑えてる感じで、鏢の部分がナツクルガードになっていて、アスナさんが使っていた細剣みたいで、若干だけ剣身が長いように思えた。

「見てもいい?」

「うん、良いよ?はい」

「ありがとう」

アイズさんの許可を貰って、剣を受け取ると、少し離れて剣を鞘から抜いた。

磨き上げられた刃は、うっすら輝いていて、かなりの業物だと思う。思うけど、やっぱり、こういう剣は僕には扱えないなど、思った。長いし、何より、少し重いと感じたから。

「ありがとう、アイズさん」

「うん」

剣を鞘に戻して、アイズさんに返した。

カランカラン

「!？」

「・・・朝食だね？行こうか？」

「うん」

そのタイミングで、館全体に伝わる鐘の音が僕等の耳に届いた。

それは、朝食を知らせる合図で、二人揃って音が鳴る塔の方を見て、そちらへ行くことにした。

第34話・悩めるアイズさんと一つのお願

「……」

そして、翌朝、まだ、日の出でない時間帯だけど、僕は、ぼーっとする頭でベットから起き上がって、身仕度を整えると部屋を出て、一度、模擬戦用の短剣を取りに行つて、中庭に出た。

「……おはよう、四葉」

「おはよう、アイズさん」

それと同じくして、アイズさんも中庭へと出て来た。

「……四葉、今日も、魔法使つてないの?」

「う、うん」

そして、アイズさんは僕の頭の前から足の先まで視線を走らせると言った。

「……」

ひょいっ

「!?……アイズさん?」

それに簡単に答えてると、アイズさんはトコトコ、小走りで僕の背後に回ったと思ったら、そのまま、僕を抱え上げた。

「……こつちでもいい」

「……は、はい?」

何が、こつちでもいいのかわからないけど、アイズさんは僕を抱えたまま、昨日、アイズさんが一人で座っていた長椅子に座り、僕をそ

の膝に座った。

「・・・」

ギユウッ

「・・・」

ギユウッと、まるでぬいぐるみのごとく、僕を抱き締めるアイズさん。

いつたい、どういう状況なんだろうか？これは・・・



「・・・」

「・・・」

そして、その状況、状態は、東の空から朝日が上がって、広大な街並みを照らし出す頃まで続いた。

「今日も元気ないなあ、アイズたん・・・四葉たん、めっちゃ、戸惑ってんで」

「・・・」

そんな僕等の様子を中庭を見張らせる塔と塔を繋ぐ石造りの渡り廊下から、ロキ様とリヴェリアさんが見ていた。

「アイズたん、昨日一日もずーっとあんな感じやったし・・・」

「珍しいを通り越して不可思議だな、アイズが時間を無為に過ごすのは」

「そうやなあ・・・何時もなら、遠征の後だろうがダンジョン突っ込むし、止めても聞かんし・・・まあ、目の届くところにいてくれる分、こっちは安心できるんやけど」

「そこは同感するが、さて、ああも塞ぎ込んでいる原因は、やはり酒場の一件だろう」

「そんなにベートにセクハラされたの嫌やったんかなあ。あ、ちなみにベートはすごい勢いでへこんでるで」

「知らん。自業自得だ」

もちろん、それは、昨日、というか遠征の打ち上げ後から暗く落ち込んでるアイズさんについて

「でも、あんなやり取りで落ち込むほど、アイズたん繊細やないし……」

「他に原因があったということか」

「多分な。それこそアイズたんしかわからんくらいの」

「どうするんだ。放っておくのか」

「どうなんやろうなあ。確かに元気取り戻して、おりゃー、つてまたダンジョンにこもられても困るんやけど」

んー、と間延びした声を漏らしたロキ様は

「頼んだ」

「……なに？」

「リヴェエリアに任せた。うちがあれこれするより、そっちの方がええやろ。それにな、放っておくつもりもないのに、放っておくのかあー、とか澄まし顔したらあかん。何かあったんか聞きたいんやろう？」

「……」

「じゃ、後はお願いな、ママ」

「……誰がママだ」

リヴェエリアさんに丸投げした。



「アイズ、四葉」

「リヴェリア・・・」

「リヴェリアさん」

そして、中庭に下りてきたリヴェリアさんに声をかけられた僕等。

「相変わらず早いな。剣は振っていないようだが・・・お前は、今日は大人しくしていたようだな？」

「・・・」

「・・・」

呼ばれた事で、リヴェリアさんに視線を合わせていたけど、僕とアイズさんは別々の意味で彼女から視線をそらした。

「何があった」

「・・・」

リヴェリアさんに問いかけられたアイズさんは、再び、顔を上げ、少しでも視線をさまよわせた。

ギユウ

「!？」

「酒場であった、ミノタウロスの話・・・」

「ああ」

「私は、男の子・・・冒険者を助けたんだけど・・・」

そして、ぽつぽつと話し出したアイズさん。

その内容を聞いて、納得したのと同時に、昨日、彼と会って言葉を交わして、一緒にモンスターと戦った事で、自分の中では解決した気

でいた事に気付かされた。

そんなこと、全然ないというのに

「お前は、どうしたい？」

「・・・わからない、けど、謝りたい、んだと思う・・・」

「そうか・・・」

やがて、小さな声で、そう答えたアイズさん。

「あの人も、アイズさんも冒険者だから、これから沢山、機会は巡ってくると思う。だから、その時に、アイズさんが思うこと伝えたら良いと思う。」

「そうだな。自信がないのなら、まだ悩め。言ってくれば、相談にも乗ってやる」

「僕も相談に乗るよ？僕の意見で良かったらだけど？」

「うん・・・」

カランカラン

そして、そう言ったタイミングで、朝食の時間を知らせる鐘の音が館全体に鳴り響いた。

「朝食の時間だ。行こう」

「僕、模擬戦用の短剣、直してから行く」

「ああ」

その音が聞こえて三人揃って鐘の音がする塔の方を見た後、リヴェリアさんに、短剣を直してくることを伝えた。

「リヴェリア・・・四葉・・・」

「？」

「・・・ありがとう」

「ああ」

「うん！」

そして、アイズさんからのその言葉を受けて、僕はアイズさんの膝から降りると、模擬戦用の短剣を手に塔内へと走った。



「ヴェルフ、来たよ？」

「邪魔するぞ」

「おお、来たか」

いつもの五人で朝食を取った後、僕は、ガレスさんと一緒にヴェルフさんの元に向かった。

「注文の品、出来てるぜ？」

「！」

「ほおう、クナイも出来ておるではないか」

理由は約束通り、僕の新しい刀を受け取りに行くためで、いざ来て、ヴェルフさんの指し示したテーブルには、兎刀二号と兎刀と似た配色のクナイが五本、おかれていた。

「いやあく、興が乗ってしまつて、五本だけです」

「見てもよいか？」

「はい！」

一応、手に取ってみる。

「・・・良い刀・・・」

「本当か！」

「うん！」

見た目は、ほぼ同じだけど、少しだけ、前のより重い気もしたけど、嫌じゃない重さだった。

「こっちのクナイもなかなかのもんじゃ・・・お主、相当、頑張ってくれたようじゃの」

「お、俺の初めての顧客なもんで・・・それで、どうだ？満足いったか？」

「うん！満足以上だよ！ありがとう、ヴェルフ」

「おう！」

本当に頑張ってくれたんだって思う。

刀だけじゃなく、クナイまで作ってくれてるんだもん。

しかも、僕にとって、最高の出来で。

「ヴェルフ、料金は？」

「あゝ」

そして、お代の話になると、ヴェルフさんは何やら言い辛そうに頭をかいた。

「今回の、お代は良い」

「ん？」

「一つ、頼みがあつて」

「頼み？」

「ああ。」

一瞬、ものすごく真剣な顔になったヴェルフさん。

パン！

「頼む！俺をダンジョンに連れてってくれ！」

「……」

両手を撃ち鳴らして、お願いして来たヴェルフさん。

それはつまり、僕とパーティーを組みたいということだった。

「……ガレスさん」

「うーん」

アインクラッドでも、キリトさんやアスナさんが絡まなきゃパーティーはほぼほぼ組まなかった僕だけど、ソロだったし、それなりに、向こうじゃ、自由はきいた。

けど、ここでは、正式にロキ・ファミリアという派閥に所属してることもあって、僕の一存じゃ決められない事だった。

例えば、僕が今、誰ともパーティーを組める人がらないとしても……。

だから、僕は、傍にいるガレスさんを見上げた。

「返事は、少々、待つては貰えるか？へファイストス・ファミリアとは言え、他派閥とパーティーを組むには、団長であるフィンに聞いてみんことにはの？」

「はい、返事は、急ぎませんので」

「まあ、そこまで、遅くはならんとは思うがの？なんせ、四葉もパーティーを組める奴がおらんからの？」

「そ、そうなんですか？」

「そうじゃ。儂からも口添えはしてやるからの？期待して待つておれ？」

「はい！……とりあえず、これはお前に渡しておく、期待してるぜ？」

「う、うん」

やはり、当たり前前だけど、フィンさんの許可が必要なようで、一応、武器類を受け取り、その許可を貰うために僕は、ガレスさんと共にホームへと帰った。

第35話・申込の保留

「……うーん」

「……」

そして、ヴェルフさんの工房から出て、ホームに帰ると早速、フィンさんの執務室に行って、ヴェルフさんにお問い合わせされた件について話した。

「四葉、お前が契約した鍛冶師とは、何て名前なんだ？」

「ヴェルフだよ？」

「ヴェルフ、ちゅーんか、その小僧は」

その話は、当然ながらフィンさんの執務室にいた、ロキ様やリヴェリアさんにも聞かれ、リヴェリアさんにヴェルフさんの名を聞かれ、僕は、普通にそう答えた。

「僕は、組ませてやっても良いと思うがの？良い小僧じゃと思うし、何より、ファミリア内で四葉と組むもんがおらんじやろう」

「それは、そうなんだけどね」

「……どないする？ファイたん所の子やけど」

「うーん、そうだね。ガレスの言い分は正しいけど、いくら、ヘファイストス・ファミリアの団員とはいえ、やっぱり、他派閥とパーティーを組むのはね……僕としては、基本通り、ファミリア内の誰かと組んで欲しいんだよ」

それに加えて、ガレスさんが組ませても良いんじゃないかと、口添えはしてくれた。

けど、やっぱりというか、フィンさんは他派閥であるヴェルフさんと僕がパーティーを組むことに難色を示した。

「四葉はどうしたい？そのヴェルフという子と組たいかい？」

「・・・組みたいと思うけど、これは、僕とヴェルフだけの決めていいことじゃないと思うから」

「・・・そうかい」

だから、どうしたいか聞かれ時、僕も、そう答えた。

「ファイたんどこ、行ってみよか」

「そうだね。リヴェリア、後は頼んでいいかい？」

「ああ」

「それじゃ、行こうか？四葉たん」

「はい」

結局、結論がすぐに出るはずもなく、僕とロキ様、そして、フィンさんは一度、彼の主神であるヘファイストス様に話を聞いてみることにした。



「ファイたん、来たで〜」

「いらっしやい、ロキ。今日は【勇者（ブレイバー）】と・・・四葉よね？」

ホームを出て、ヘファイストス様のいるお店の執務室に行くと、ヘファイストス様は、僕を見て不思議そうな顔をした。

「ファイたん、あれな？四葉たんの魔法なんやで？」

「魔法？」

「せや、可愛かったやろ？今は、魔法の休養期間なんや」

「・・・」

そんなヘファイストス様にロキ様は軽くそう説明した。
何て言うか、その説明を聞いて、色々、申し訳ない気持ちになる。

「・・・なるほどね・・・それで、今日は何の用で？」

「ああ。ファイたんところに、ヴェルフちゅー子、おるやろ？」

その気持ちを察してくれたのか、ヘファイストス様はそれ以上は、僕の魔法のことは聞かず、話を訪ねて来た理由の方に切り替えてくれた。

「ええ。あの子がどうかしたの？」

「四葉たん、その子と直接契約を結んだんやけど」

「ええ、知ってるわ。椿や本人から聞いているもの。あの子と契約してくれてありがとうね？四葉」

「いいえ、僕の方こそ、刀を作ってくれた事、感謝してるし」

「そう」

「んで、今日、作り直してもらった刀を受け取りに行ったら、ダンジョンに連れて行って欲しいって頼んできたらしいんやけど、ええんか？」

「えっ？」

そして、ヴェルフさんの話を持ち出すと本当に嬉しそうで、ただ、今日の今日なので、そのお願いについては、初耳だったようで、ビックリしていた。

「それは、本当？」

「はい。まだ、返事は出来てません・・・僕じゃ返事できないから」

「そう・・・そうよね」

少しだけ、沈黙が流れた。

「ねえ？【勇者（ブレイバー）】四葉と組ませてもらえないかしら？」
「神へファイストス、何故、他の団員と組ませないんだい？」

そして、へファイストス様は僕じゃなく、僕の団長であるフィンさんにヴェルフさんと僕がパーティーを組むことをお願いした。

「子供達の恥を晒すみたいでなんだけど、その、あの子、他の子供から、仲間外れにされててね」

「仲間外れ・・・それは、何故と聞いても？」

「・・・あの子の才能に嫉妬してつてところかしら？それで、あの子と他の子供達は、パーティーを組みたがらないのよ」

その願いに当然の質問をしたフィンさん。

そんなフィンさんの質問にへファイストス様は、苦笑いを浮かべてはいたけど、そう答えてくれた。

「・・・事情は、わかったよ。けど、少し考えさせて貰えるかい？神へファイストスも四葉も」

「・・・ええ」

「・・・わかった」

そして、話を聞き終えて、フィンさんは、返事を保留にした。

何だか、解ってはいったけど、僕の事で彼に重荷を背負わせているよに思う。



「・・・」

「・・・四葉？」

へファイストス様との話を終えて、僕等はホームに向かって歩いて

いた。

ほぼ、無言で。

そしたら、フィンさんが僕の名前を呼んで、それで僕はフィンさんの方を見るために顔を向けた。

「どうかしたのかい?」

「四葉たん、めっちゃ暗い顔してるで?」

そこで見たフィンさんとロキ様の表情は、同じで、困った感じだった。

「……四葉?話してごらん?」

「……」

「四葉?何か言いたいことがあるんだろ?」

フィンさんはその表情を崩して、優しくニコツと僕に笑って見せた。

「……別に、無いよ?言いたいことなんて」

「四葉たん?嘘はあかんで?」

「!?!」

言いたいことが、有るか、無いかと聞かれたら、有るけど、どう言えば良いかわからなくて、言いたいことは、無いと言ったら、今度は、ロキ様にそれを嘘だと言いつてられた。

「四葉?良いから、言つてごらん?」

「……僕から持つてきてなんだけど……困らせてる?」

「困る?僕がかい?」

「……だって、フィンさんはファミリアの団長だし、僕のパーティーの事なんかより、他に考えたりとか、やらなきゃいけない事とか、沢

山、有るんじゃないかって思うし・・・今日も、何かの書類を書いてたのを手を止めさせてまで、ヘファイストス様の所に着いて来てくれたし・・・ロキ様も」

そして、フィンさんに再度聞かれて、僕は、まだ、どう言つて良いのか解らなかつたけど、なんとか、言葉にして言つた。

「ロキに関しては、ただ、お酒飲んでるだけだけどね?」

「フィン、なんや?その言い方、うち、めっちゃ傷付くんやけど」

「そうかい?・・・まあ、ロキは置いとくとして・・・」

ポンツ

「!?」

「四葉?君は、そんなこと気にしなくて良いんだ。君のパーティーを考えるのも僕の仕事なんだから。まあ、結局、後回し、後回しになつちやつて、待たせちやつてるから、逆に申し訳ないよ」

それを聞いて、僕の頭に手を乗せたフィンさんは、本当に申し訳なさそうに笑みを浮かべて言つた。

「その申し訳ないついでに、あの書類達を片付けてからでも良いかい?君のパーティー構成を考えるのは」

「うん、わかつた。待つ」

続けて、更に申し訳なさそうに、僕のパーティーの事が後回しになつてしまうことを言うフィンさんに、僕は、フィンさんが書類を片付け終わるのを待つと答えた。

「・・・僕にも、お手伝い出来ることある?」

「お手伝いかい?・・・うん、そうだな。四葉も読み書き出来るようになったわけだし、お願いしようかな?」

「うん!」

そして、その片付けが一刻でも早く終わるようにと思って、僕は、フィンさんにお手伝いを申し出て、了承して貰った。

「じゃ、早く帰ろうか？」

「うん！」

カシッ

「ん？」

「走って帰る！」

「えええっ!? 走らんでも、ええやん! ちよつ、四葉たん、四葉たん」

なので、僕は、二人の手を取り、本当に二人を引き連れて走って帰った。

ロキ様は、終始、走らなくて良いって言っていたが、無視した。

そして、ホームに帰りついた時、フィンさんには、*「たまには、こう言うのも良いね？」*と笑顔で言われた。

第36話・怪物祭前夜

「……これは……」

暗い場所にいた。

何もかもが無く、僕だけがいると解る黒い空間。

『……』

「！」

『グルル〜』

「……や、だ」

そこに突然、何かの気配がして、キョロキョロと周囲を見渡して気配の正体を探ったけど、何も無く、次の瞬間に、何処からともなく、獣の唸り声上がる。

とても、嫌な声。

『グアアア!!』

「?!い、痛い!やめて!」

そして、獰猛な獣が飛び掛かって来るような鳴き声が響くと、僕の足から順番に痛みが走っていく。

「やめてえ!やめてよお!痛い、痛いよ!」

『坊アアブツ』

「!!!」

「!!!!」

どんなに「やめて」と叫んでも、やめてはくれず、とうとう、心臓を食われ、頭も噛み砕かれる感覚がしたところで全部が終わった。



ガバツ

「!?」

ガバツと勢いよくベットのうえで、飛び起きた僕は、汗を拭った。

ギユツ

「・・・また、見ちゃった・・・せつかく、頑張つて寝ようと思ったのに・・・」

そして、僕は自分の膝を抱えた。

さつきまで見ていたのは、当然、夢なんだけど、あの夢は、あの日、ロキ様に更新して貰つて、僕自身の事が解つてから見るようになってしまった夢だった。

だから、寝るのも怖いし、あの魔法を使うのも怖くなった。

あのまま、使い続けていたら、何時か、夢のように食われて、僕が僕じゃ無くなるんじゃないかと思つてしまった。

そう思つてしまつたら、怖くて、散々、世話になつた魔法だけど、使うのが怖くなった。



「・・・四葉?」

「・・・アイズさん」

その後、再び寝直すなんて出来る筈もなく、仕方がなく僕は中庭に出で、まだまだ、夜と言つて良い時間帯だったけど、気分転換に刀の素振りをしていた。

そこにやって来たアイズさん。

「おはよう」

「……おはよう、アイズさん。……何処かに行くの？」

「……ダンジョンに行こうかなって」

「……」

よく見れば、アイズさんはフル装備で背中には筒型のバックパックまで持っていた。

「……僕も、一緒に行つて良い？」

「……じゃあ、サポーター、やってくれる？」

「うん。【テイクアウト】」

だからという訳じゃないけど、僕は、彼女に着いていくことをお願いしてみた。

条件はあったけど、OKをくれ、僕は、早速、【幻書の術】に放り込んでいた羽織と剣帯を取り出して、剣帯を腰に巻いて、刀を鞘ごとそこに差すと羽織を羽織った。

「……アイズさんのバックパック、預かる」

「うん……本当に四葉のその魔法、凄く便利だね」

「うん」

そして、アイズさんからアイズさんのバックパックを預かって、それを【幻書の術】に放り込むと僕等は、門番の人達に挨拶して、そのままダンジョンへと向かった。



「やああ!!」

ザアン

「ガッツ!?!」

「……」

「うん・・・まだ馴染まないし、力を入れると壊れそうで」

「・・・それは、辛いね」

「・・・うん」

どうやら、思った以上に代剣が使い辛いらしい。

「剣、返ってくるの明日か明後日くらい?」

「・・・うん、明日には返ってくるよ」

「そっか、それは、待ち遠しいね?早く、迎えに行かなきゃね?」

「・・・うん」

だから、そういう時、普段使ってる手に馴染んだ武器にたいして、有り難さとか、恋しさとか、色々思うんだと思う。

僕だってそうだし。

「・・・どのくらい、魔石とか貯まった?」

「えっと」

そして、アイズさんに聞かれ、僕は一度、目を瞑って、意識を集中させる。

「袋、二つともパンパンだよ?袋に入らなかったドロップアイテムもそれなりに有るけど、まだ、入れるには余裕はあるよ?」

「・・・そう」

そうやって集中する事で、脳内で【幻書の術】の中身が解る。

それで、袋に入ってる魔石とドロップアイテムと袋に入らなかったドロップアイテムをぎっと見て、その報告とまだ余裕があることを、アイズさんに僕は言った。

すると、それを聞いて、アイズさんは、少し、考えるそぶりをした。

「・・・そろそろ、帰ろうか？」

「うん、わかった」

そして、アイズさんは、帰ることを決断。

もちろん、僕に異論は無いから、頷いて答え、アイズさんと共に上層に向けて足を進めた。



「あつ」

「・・・」

それから、二十階層をぬけて、ちょうど中層の入口とも言っても過言じゃない十三階層を、更に上層に向かって歩いてると不思議な一団が目に入った。

「・・・あれ、何してるの？」

「・・・怪物祭の準備だと思う」

その一団と言うのが、巨大なカーゴを引きずっている人達の事で

「もんすたあ、ふいりあ？って何？」

「四葉、知らない？」

「うん」

「そっか・・・んと、怪物祭は年に一度開かれる、お祭りで、闘技場でダンジョンから連れてきたモンスターをガネーシャ・ファミリアの調教師がタイムするイベントがあるの」

「・・・じゃあ、あの人達、そのイベントで使うモンスターを捕獲しに来たってこと？」

「・・・うん、そうだと思う」

「・・・それって、大丈夫なの？」

「・・・うん。別のルート行く？」
「う、うん」

その彼等の目的は、お祭りで使うモンスターを捕獲する為で、僕は、ちよつとだけ、不安に思った。

本当に大丈夫なんだろうか？って

その不安が取り除かれることなく、僕は、アイズさんの案内で、とりあえず、別のルートで上層に地上に向かうことにした。



「・・・」
「・・・」

そして、僕等が地上に戻った時、すっかり、夜になってしまっていた。

僕等は、バベルの換金所で換金をして、シャワーと夕食を済ませ、ホームに帰ると、朝と同じように門番の人達に挨拶して館内に入った。

入った後は、夜中にこっそり脱け出す時、並に息を殺し、気配を殺しながら、神経を研ぎ澄ませて、こそこそと人目を避けながら廊下を進んだ。

もちろん、物音も一切、鳴らさずに。

「アイズ、四葉」

ビクッ

「!?!」

が、人の気配を感じたら、迂回したりしながら、確実に自分達の部屋までの道のりを進んでいた僕等の背に声がかけられた。

その瞬間、僕とアイズさんの肩は同時に震え上がった。

「何処へ行っていた・・・と聞くまでもないな」

「・・・」

「二人で行っていたのか？」

恐る恐る、後ろを振り返ると、そこには目を若干細めたリヴェリアさんが立っていた。

リヴェリアさんは完全武装な僕等を頭为天辺から足のつま先まで、その視線を走らせた。

ギユツ

「!?よ、四葉」

「・・・」

思わず、僕は、アイズさんの足に抱きつくようにして、その陰に隠れた。

そんな僕にアイズさんは、狼狽えたような声を出した。

「はあく、一応、パーティーを組んで行ったことは、褒めるべきなのか：：二人共、ダンジョンに潜るなどは言わん。だが、遠征が終わった後だ、体は十分に休めろ」

「・・・うん」

「・・・はい」

「全く、調子を取り戻したかと思えばすぐそれか。四葉、お前も、黙ってダンジョンに行く癖をなんとかしろ」

「・・・ごめんなさい」

リヴェリアさんは、それと色んなモノを引ってくるめた大きく溜め息を一つついて、言った。

最後の言葉には、ものすつごく呆れた感じが混じっていて、僕等は自然と謝罪の言葉を口にした。

「ううつぶ…あれえ、アイズさんに四葉さんとリヴェリア、何しとるん…おえつぶっ」

「!？」

そこに通りかかったロキ様。

その足もとは、かなり覚束ない様子で、顔色も果てしなく悪いし、何よりあの魔法を使わなくても解るくらいの強烈な酒臭さを漂わせていた。

思わず、本当に失礼な行為だと思うけど、慌てて鼻と口を両手で塞いだ。

「それはこちらの台詞だ…いや待て、近寄るな、来るんじゃないっ」

「うちは水飲みに來ただけやあー…うつぶ。あー、頭いたい…声あんま出さんというてー」

ロキ様が何でこんな状態なのかと言うと、ヘファイストス様の所にヴェルフの事を聞きに行った日の夜、ロキ様は「神の宴」とやらに出かけて行った。

その宴から、帰ってきてからずっと、フィンさん達が止めるのも聞かず、自棄酒をして、宿酔。

二日酔いならぬ、三日酔いになるまで飲み続けたロキ様。

その原因は、何でも宴の席には、ある女神が参加しており、その女神を馬鹿にしようとして、逆にやり込められたらしく、それが悔しくてたまらなくて、お酒を飲まずにはいられなかったとのことだ。

…なんと言うかだ。

「で、何やっとするん?」

「…アイズと四葉がまた黙ってダンジョンに潜っていた。この時間までな」

「あー、そういうことなあ…」

そんなロキ様はリヴェリアさんから、話を聞き、ちらりと横目でアイズさんと僕を見た。

「よおし、お転婆アイズさんと四葉たん。うちらに心配をかける罰や、明日は付き合ってもらおうで？」

「・・・？」

「フィリア祭や。うちとデートしよ？拒否権は無しやからなー」

ロキ様は、酒気を漂わせながら、にへらつと頬を緩めて、笑い、僕等が何かを言うより先に、「拒否権は無し」と言った。

「息抜きにはちようどええやろ。うちも行く予定やったし。リヴェリアもどう？」

「・・・私は遠慮させてもらおう。あのような祭りの空気には、どうも馴染めん」

「残念無念やなー・・・あたたっ・・・じゃあ、アイズたん、四葉たん、明日は朝集合なー。一人でどっか行ったらあかんでー」

「わかりました」

「わかった」

「私も行くが・・・アイズ、四葉、先程と同じことを繰り返すが、ほどほどにしろ」

「うん・・・」

「ごめんなさい・・・それと、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ。アイズ、四葉」

そう先取りして言われてしまえば、断るなんて出来る筈もなく、僕等は、ロキ様とリヴェリアさんにそれぞれ別れを告げて、その日は解散となった。

第37話・秘密の会合

「えーっ、アイズと四葉、ロキとフィリア祭行くの〜!」

「ごめん、ティオナ・・・」

「ごめんなさい、ティオナさん」

「うーん、でもしょうがないか。さっさと二人に声をかけておかなかった、私のせいだし。あーあ、ロキに先、越されちゃったなー」

翌朝、食堂に出向くと、僕とアイズさんは同時にティオナさんに怪物祭へのお誘いを受け、昨晚の件もあつて断ると、ティオナさんは、ものすごく悔しそうに言った。

「私はティオネ達とすぐに東のメインストリートへ行くけどさ、あつちで合流できたら、一緒に祭り見ようね!」

「うん」

それはすぐに一転され、ティオナさんは笑顔で僕等にそう言ってくれた。

「二度、私も部屋に戻るね?」

「うん」

それから、朝食を取り終わると、一旦、僕等はそこで解散して、ティオナさん達は一足先にホームを出て行き、アイズさんは一旦、自室へ戻って行った。



「お待ちせ、四葉」

「・・・」

そして、エントランスホールで待っていると、アイズさんが何時もの服装じゃなく、白い生地にさり気ない花を象った刺繍のある丈の短い上衣にミニスカートとブーツ姿でやって来た。

「変、かな？」

「ううん、変じゃない。凄く似合ってる！」

ほんの少し、頬を赤くしたアイズさんに聞かれて、僕は、素直に答えた。

それだけ、彼女の綺麗な金の長い髪も相まって、凄く、似合っていた。

ただ、残念なのは、服の上から巻かれた剣帯とそれに差してあるレイピアがあることくらい。

そこは、僕も言えないけど。

ちらりと、腰の剣帯と刀を見る。

「おはようー、アイズ、四葉たん。ごめんなー、遅くなって」

「大丈夫です」

「そこまで待ってないよ？」

そんな会話をしていると、ロキ様がふらふらと現れた。

朝食の時間にはいなかったし、どこか気だるそうだけど、昨日の夜よりは顔色が良いように思う。

「ん？おお、その服・・・イイな!?めっちゃ可愛い!まさかアイズたんのこんな格好を拝めるとは!」

「・・・ありがとうございます」

「まさかうちのためにオメカシしてくれたん!?うっひよー、萌え萌えやー!似合ってるでー!!抱き着きー!」

そして、アイズさんの格好を見てロキ様は、アイズさんに飛び付こ

うとした。

べちっ!!

「べっふっ!!」

ゴッ!!

ドサッ

「!？」

ゴロゴロゴロゴロ

「うおおおおお!!」

ピタッ

スクッ

が、それは、アイズさんが条件反射により、ロキ様は、頬に高速の張り手をお見舞いされ、横手の壁に叩きつけられた。

顔面が壁面にめり込み、すぐに落下すると、顔を両手で覆ってゴロゴロとのたうち回ったロキ様。

そして、ピタリと止まると、何事もなかったように立ち上がった。

「うん、アイズさんのスカートの中身確認できたし、よしとしよう」
「!？」

そのロキ様の言葉に慌ててスカートを押さえたアイズさん。

「・・・ロキ様、アイズさんのスカートの中、見たの？」

「・・・見たんですか？」

「えっ、あ、見てへん、見てへん。転がったついでに新品のスパッツなんて、これっぽっちも確認してへんっ!!」

「・・・バッチリ見てるじゃん、それ」

当然だけど、この後、アイズさんの手により、ロキ様は、ボコボコにされた。

僕は、それをただ、黙って見てた。
だって、ね？



「アイズ、四葉たん、すまん。ちよつと行くところあるんやけど、寄つてもええ？」

「はい、朝ごはん、ですか？」

「ん、それもあるんやけどな」

そして、ボロボロのロキ様を引き連れてメインストリートを歩くと、ロキ様は、僕等に言った。

「いこや、いこ」

「・・・」

カランカラン

「いらっしやいませ」

それから、ロキ様の案内で人の群れを縫って歩き、大通り沿いに建つ喫茶店の前に出た。

そのドアをくぐり鐘の音を鳴らすと、すぐに店員さんが出てきてくれて、ロキ様に一言二言交わすと二階に通された。

「・・・」

「・・・」

その二階は妙な空間だった。

時間が止まったかのような静けさがそこには、あった。

そこにいたお客さんの誰もが心を何処かに置き忘れたかのような、口を半開きにして、全ての視線を一箇所に集めていた。

「よおー、待たせたか?」

「いえ、少し前に来たばかりよ・・・あら、そちらは・・・」

「そーいや、初対面やったな。うちのアイズと四葉や。これで十分やろ?アイズ、四葉、こんな奴でも神やから、挨拶だけはしときや」

「・・・は、はい。初めまして」

「・・・初めまして」

その彼等の視線が集まっている箇所と言うのが、二階の窓辺の席。その席には、紺色のローブを纏った人がいた。

どうやら、皆、この人を見ているようで、ロキ様は、迷うことなくその人のもとへ真っ直ぐ足を運んで、僕とアイズさんは、ロキ様に言われてその人に頭を下げて一応、挨拶をした。

「・・・」

「!?!」

すると、その人は深く被ったローブのフードの下で微笑んで僕等を見た。

そのフードの奥から覗く銀の髪と同じ色の瞳を見て、僕は、驚いた。

ギユツ

「!?!」

「あらあら、剣姫と仲が良いのね?」

そして、僕は、無意識のうちにアイズさんの手を握っていた。それを見て、ますますの微笑みを濃くするその人。

「可愛い子達ね。それに・・・」

「・・・」

「ええ、ロキがこの子達に惚れ込む理由、よくわかった」

一瞬、ロキ様に会う前に感じたモノと、初めて夜にダンジョンに行った帰りに感じたモノと同じモノを向けられて、確信した。

あの二つの視線の主は、この人”だって

「どうして、劍姫とその子を連れて来たか聞いても？」

「そらお前、せっかくのフィリア祭や。この後、しつかりきつちり二人とラブラブデートを堪能するんじゃないか！」

そして、ロキ様は、僕等連れて来た理由をその人にそう話した。

「・・・ま、それに、放っておくと、まーたすぐにダンジョンに潜ろうとするし、夜中に、こっそりホール抜け出して、ダンジョンに行ったりしよるからなあ・・・このお姫様方は」

「・・・」
「誰かが見張ったり、気を抜いてやらんと、一生休みもせんし、危なっかしいやろ？」

それに付け加えられたロキ様の言葉に僕とアイズさんは、何も言い返すことも出来ず、少しだけ、気恥ずかしかった。

「ちゅーわけで、時間がもったいないからな。率直、聞くで。最近自分、妙に動き回るとるようやけどな」

「・・・」
「・・・」

そして、ロキ様がそう話を切り出した瞬間に今までの雰囲気豹変した。

「男か」

「・・・」

その空気を呼んだのかは、さだかじゃないけど、気が付けは、僕等の周囲にいたお客さん達の姿がいつの間にか消えていた。

「はあ・・・アホくさ。つまりどこぞの【ファミリア】の子供を気に入ったちゆう、そういうわけか。ったく、この色ボケ女神が。年がら年中盛りおって、誰だろうがお構いなしか」

「あら、心外ね。分別くらいあるわ」

「抜かせ、男神どももたぶらかしとるくせに」

「彼等と繋がっておけば色々便利なもの。何かと融通が利くわ」

そんな空間の中で二人の会話を黙って聞いてると、二人の会話が一旦、そこで止まって、しばらくの間、沈黙が流れた。

「どっ？」

「・・・？」

その沈黙をロキ様が笑みを作って、破った。

「どんなヤツや、今度自分の目にとまった子供ってのは？いつ見つけた？」

「・・・」

「そっちのせいでうちは余計な気を使わされたんや、聞く権利くらいあるやろ」

そんなロキ様のある意味、強引な言い分に、その人は窓に顔を向けた。

「・・・強くは、ないわ。貴方や私の【ファミリア】の子と比べても、今はまだとても頼りない。少しのことで傷付いてしまい、簡単に泣いてしまう・・・そんな子。でも、綺麗だった。透き通っていた。あの子は私が今まで見たことのない色をしていたわ。だから目を奪われ

たの。見惚れてしまった・・・見つけたのは本当に偶然。たまたま視界に入っただけ。あの時も、こんな風に・・・！」

そして、頬を赤くしながら熱を孕んだ声色で話すその人は、窓の外
の光景を見下ろした瞬間、驚いたようにある一点でまるで縫い付けら
れたかのように、その目が止まった。

「??・・・!!」
「??」

それを見て、アイズさんは反射的にその人の視線の先を追って、窓
の外へと視線を走らせ、彼女もまた、窓の外に釘付けとなった。
残念ながら、僕の位置からじゃ、二人が何を見ているのかは、わか
らなかった。

ガタツ

「!？」

「ごめんなさい、急用ができたわ」

「はあっ!？」

「また今度会いましょう」

そして、その人はいきなり立ち上がると、ロキ様に断ると、そそく
さとお店を出ていった。

「何や、あいつ急に・・・ん？アイズ、どうした？何かあったん？」
「・・・いえ」

そんな相手の様子に首を傾げたロキ様は、そこでアイズさんの様子
に気付いて聞くと、アイズさんは、一応、返事はするけど、目を窓の
外に向けたままだった。

「なあアイズたん、誰かいたん？めっちゃ気になるんやけど」
「……ごめんなさい。何でもないです」

そこでようやく窓の外から視線を外したアイズさん。
そんなアイズさんをしつこくまとわりつくロキ様。

「ロキ様」

「ん？どうした？四葉たん」

「さっきの人、名前、何て言うの？」

「ん？」

「えっ？」

そんな二人のやり取りを見ていて、僕は、自分の中の事を解決しようとしてロキ様に向かって口を開いた。

「ああ、さっきのは、フレイヤちゅ、うちの昔馴染の女神や」

「……フレイヤ様。フレイヤ様って、バベルの上とかに住んでたりするの？」

「住んどるけど、何で、そんなこと聞くねん」

「……前にあの人に見られた事があったから」

「!？」

そして、そう言うと、ロキ様とアイズさんは目を見開いて驚いた顔をした。

「何時や？ソレ」

「ロキ様に初めて会った日の会う前と最初に夜中にダンジョンに行って帰ってた時に」

「……マジか……はあゝ」

更に、聞かれたこともあつて、何時の話かしたら、ロキ様は、
そう言つて頭を抱えてしまった。

第38話・怪物祭裏の脱走事件

「アイズたん、四葉たん、まずはジャガ丸くん食べよ！」
「!!」

お店を後にした僕等は、人の波に乗って、混雑する東のメインストリートを進んだ。

道の脇や中央に並ぶ屋台からは、良い匂いが漂ってきて、ロキ様がその名を出した瞬間、アイズさんの目の色が若干変わった気がした。

「アイズさん」

「ん？」

「じやがまるくんって何？」

「えっ?・・・四葉、ジャガ丸くん知らないの？」

「う、うん。どんなの？」

「食べたら、わかる。凄く、美味しいよ？」

残念ながら、僕は、そのジャガ丸くんを知らないのでアイズさんに聞いたら、少しだけ驚いた顔をした。

「百聞は一見にしかずやで? 四葉たん」

「う、うん」

そして、ロキ様には、ニツと笑みを向けられ、そのまま、ジャガ丸くんなるもののお店へ。



「おっちゃん、普通のジャガ丸くんと」

「小豆クリーム味、一つ」

「あいよ!・・・嬢ちゃんは？」

「・・・うんと」

で、そのお店につくと、〃ジャガ丸くん〃というものの何となくの正体が解った。

言うなれば、現実世界の〃コロツケ〃みたいなものなんじゃないかって。

ただ、現実世界の〃コロツケ〃とは違って、想像できない味の種類が結構多かった。

「・・・どれが、おすすめですか？」

「おすすめかい？・・・そうだね・・・」

なので、店員さんのおすすめを聞いて決めようと思った。

「じゃあ、この子のも小豆クリーム味で」

「ん？」

「えっ？」

「・・・それ、アイズたんのおすすめやろ・・・」

すると、アイズさんが店員さんに、アイズさんと同じ味のジャガ丸くんを注文した。

一瞬、店員さんも僕も、小首をかしげ、ロキ様は若干、呆れ顔でアイズさんに言った。

「おすすめ、だよ？」

「・・・じゃあ、小豆クリーム味で」

「あいよ」

そして、僕の目を見てハッキリと言うアイズさん。

その目は、物凄く真剣なもので、アイズさんがそこまで言うなら、相当、美味しいんだろうと思って、僕もアイズさんと同じものを注文し

た。

「お待ち。小豆クリーム味二つとプレーン一つね」

「！」

「おっ！サンキューな」

「ありがとうございます」

注文してすぐに手渡されたジャガ丸くんはやっぱり、コロツケみた
いで

「美味しいのか？」

「・・・」

アイズさんは、ジャガ丸くんを受け取るなりパクパクと本当に美味
しそうに食べ始め、美味しいのかというロキ様の視線を無視して、一
心不乱に食べ進めていた。

「アイズたん、アイズたん」

「？」

「はい、あーん」

そんなアイズさんに声をかけて、振り向かせたロキ様は、自分の
ジャガ丸くんにかぶり付くと、更にペロペロと何度も舌で舐め回し
て、笑みを浮かべアイズさんの目の前にそのジャガ丸くんを突き出し
た。

「嫌です」

「!？」

が、アイズさんは即答でそう答えた。

「なんでや!?!うちが満足するまで付き合ってもらっていったやんかー!」

「嫌です」

「アイズたんにあーんするのうちの夢やったんやー!?!頼むーッ!」
「嫌です」

何度も断られるのにそれでも食い下がるロキ様は、泣き落としまで使ってアイズたんにあーんをしようとする。

「じゃあアイズさんがうちにあーんしてっ、あーんっ!それだったらええやろ!?!」

「・・・」

「二口、一口でええから!」

アイズさんは手もとにあるジャガ丸くんに一度視線を落とした後、次に必死な形相のロキ様を見た。

「後生やから!うち、そっちの味も食べたいんや!」

「・・・なら、僕の食べる?まだ、食べてないし」

「いやや!うちはアイズたんのがええんや!なあ?アイズたん、やましい気持ちなんてなーんもあらへんっ、だから、なっ!なっ!」
「・・・」

周囲の目もはばからず、アイズさんに哀願するロキ様に、僕は、同じ味の僕のをロキ様に上げようと思っただけど、拒否され、アイズさんはおずおずと、食べかけのジャガ丸くンを差し出した。

すぐに、バクツとアイズさんの両手を包みながら勢いよく噛み付くロキ様。

リスみたいに頬張り、よく味わってからごくりと呑み込んだ。

「ふへっ、ふへへえ・・・アイズたんと間接キスやあ」

「……」

その時のアイズさんは凄く悔しそうだった。

「神様、神様あつ!?お願いしますから勘弁してください!」

「おいおい、遠慮するなよ!今度はボクがお返しする番だろう!?ほら、あーんー!」

そこにどこからともなく聞こえてきた会話に、目の前でおきた似たような事が他でもあるんだなと思った。

「アイズさん」

「ん?」

「僕のと交換する?」

「……」

とりあえず、アイズさんに僕のと交換しないかと聞いてみた。

一瞬、キョトンとしたアイズさん。

「良いの?」

「うん」

「……やっぱり、いい。気を使わせちゃったね?ありがとう、四葉くしやつ」

「……」

そして、僕のを受け取ろうとしたアイズさんは、寸前のところで手を引つ込めて、そのまま僕の頭を撫でた。

「さあ、アイズたん、四葉たん!まだまだ行くで!」

「!」

それから、僕等は、ロキ様に手を引つ張られながら、通りの出店を見て回った。

食べ物その他にも絞り立てのジュースや小物などが売ってる屋台と
かも見た。

時々、意地悪く笑うロキ様が冷やかしたり、その冷やかしに必死にやり取りするお店の人がどこか滑稽で、何度かアイズさんと笑ったりした。

ちなみに、僕のジャガ丸くんは、ちゃんと美味しくいただいた。
食感的には、やっぱり、コロッケぽかった。



「・・・」

「??アイズさん?」

「どうした、アイズ?」

そうやって出店を見て回りながら歩いてると、アイズさんが一つの出店の前で足を止めた。

「綺麗な剣だね」

「うん」

そのお店は、武器を売ってるお店で、主に刀剣類を中心に数多くの武器が並べられていて、宝石や水晶を散りばめた鑑賞用の剣とかもあつた。

熱心に剣を見るアイズさんの横で僕も並べられた剣達を見た。

「アイズたんにはもうちよい女の子してほしいなあー、うち。ていうか、四葉たんもこういうの好きなん?・・・ほれ、いい加減、行こう、アイズたん、四葉たん」

「・・・はい」

「・・・わかった」

「そんなあからさまに名残惜しそうな顔すんなっちゃうに。似たような店は今日一日、どこにでも出とる、ここだけやない」

そう説得される形でそのお店から離れた僕とアイズさん。その後も、ロキ様に連れられ、賑かな通りを歩き回った。

「わーっ!!」

「あー、いかん、もう始まつとる！アイズ、四葉たん、近道や！」

「はい」

「うん」

そして、闘技場の方から聞こえて来た歓声にロキ様が慌てたように叫んで、ロキ様先導で人気のない路地裏を走った。

「この道で、大丈夫なんですか？」

「おう、ばっちりしゃ！大通り経由するより断然近道やで！」

とのことだった。



ガヤガヤ

「・・・」

「あかん、走り疲れた・・・ううん？なんや、この空気」

細い道を通り抜け、闘技場がそびえ立つ広場に辿り着いた時、その雰囲気は何故か張り詰めていた。

何ていうか、今も歓声が聞こえてくる闘技場とは真逆の動揺とか混乱とかそういういった感じの。

おまけに、武器を持って広場から散っていく人達もいて、何か異変が起きたと判断するには十分だった。

「……」

「ええよ」

アイズさんとロキ様を見ると頷き返してくれて、僕等は闘技場の南側、正門付近に足を運んだ。



「あつ」

「四葉たん？」

「エイナさん、発見」

「エイナ？」

「知り合いのギルドの人。リヴェリアさんの知り合いでもあるよ？」

「リヴェリアの」

「あの人、話聞こう？」

「うん」

そこには、輪になっている数人のギルドの人達がいて、その中にエイナさんがいた。

だから、彼女に情報を聞こうと思って僕は、アイズさん達を引き連れて、エイナさんに近付いた。

クイツ

「!？」

「エイナさん」

「よ、四葉ちゃん!？」

そして、エイナさんの服の裾を引っ張ってその名を呼ぶと驚いた顔で僕を見た。

「・・・あの、何かあったんですか？」

「つ!?アイズ・ヴァレインシユタイン!!」

「ロキたんもおるでー」

「何か困ってるなら、力になるよ?エイナさん」

更にアイズさんが声をかけるとエイナさんは、驚いて目を見開き、僕は、そんなエイナさんに笑みを向けた。

「・・・実は、祭りのために捕獲されていたモンスターの一部が檻からだつそうして、東部周域へ散らばったらしいのです!!ガネーシャ・ファミリアの団員と連携して市民の避難にあたってますが、とても我々だけでは手が足りない状況で、どうか力を貸していただけられないでしょうか!」

「ロキ」

「ロキ様」

「うん、ええよ、この際ガネーシャに貸し作っところか!」

そして、エイナさんのその説明とお願いを聞いて断る理由もないと思つて、僕とアイズさんはロキ様を見て、許しを貰うと、僕は、刀の柄を掴み、アイズさんもレイピアの柄を掴んだ。

何故、モンスターの脱走を許したのかとか考えるのは後回しにして。

第39話・食人花のモンスターの初出現

「ほんじゃ、アイズは高所から敵の位置を掌握してから、早急に狙い撃て。四葉は、耳と鼻、使つて、モンスターの泣き声と臭いで位置を掌握して、狙い撃つて感じで行こうか？」

「解りました」

「・・・」

そして、ロキ様は僕等に耳打ちしてその策を出す。

僕に言った「耳と鼻使つて」の所では、両手を頭の上に持つていたり、自分の鼻を触つたりといったジェスチャーを交えて。

それはつまり、僕に魔法を使えと言っているんだ。

けど、やっぱり

ポンッ

「!？」

「大丈夫や。壊れたりせんから。うちを信じ？」

「・・・わかった」

そんな僕の心を読んだのか、ロキ様は僕の頭を撫でて言った。

だから、ここは、信じてみようと思った。

本当は、使いたくは無いけど、「僕が壊れない」とロキ様が言うなら、信じようって。

それに、こう言っちゃなんだけど、やっぱり、こう言う緊急事態の時は、使った方が、効率が良いのは確かだった。

やっぱり、獣の聴覚と嗅覚、そして、走るスピードと体の軽さは、全然違うから。

「・・・【第一階段限定解除】」

「【目覚めよ（テンペスト）】」

まだ、反面怖かったけど、魔法を使った。

「ゴオオツ」

「いたっ」

「先に行つて」

「うん」

すると、僕の耳は、すぐに聞き慣れたモンスターの声を捕らえて、魔法を使つて闘技場の外周部の一番高い場所に登つていくアイズさんと別れて、聞こえた方へ僕は、走つた。

そして、走りながら思う。

ロキ様の言う通り、使つた所で僕は、僕のまだまだ。

おまけに、なんか足が前より少し速くなつた気がした。



ドオウン!?

「!？」

「な、なんだ!？」

それから、まず、近場の街路の中心を歩いていたトロールを背後から短剣スキル「ラビット・バイト」の要領で貫き、粉碎した。

当然、トロールを相手取ろうとしていた人達は驚愕していた。

ドフウウ!!

「!？」

その先で、もう一匹、モンスターが粉碎されるのを見て、僕は、また、聴覚と嗅覚を頼りに街中を疾走した。

その後は、ある意味、アイズさんとの競争みたいになって、三匹目、四匹目と次々とモンスターを倒していった。



グラツ

「ん？」

それからしばらくして、何故か地面が揺れてるような気がした。

「地震？」

ペタツ

だから、何となく揺れる足元の地面に手で触れた。
そんな時だった。

ドオオオン!!

「!？」

何処からか何かが爆発したような音が僕の耳に届いた。

「・・・ここじゃ、わからない・・・」

ダアン!!

今いる路地からじゃ、何が起きたか把握するのは、無理で、僕は、近場の民家の屋根に飛び乗って、何が起きたか確認しようと思った。

「き・・・きやあああああああああああつ!？」

「!？」

それと同時に、女の人の悲鳴が聞こえて、そのまま、屋根伝いに悲鳴が聞こえた方へと走った。

その時、通りの一角で土煙が立ち上り、その煙の奥に巨大な蛇みた

いなモンスターの姿を僕は、確認した。



ドケツ

ガツ

「【解き放つ一条の光、聖木の弓幹。汝、弓の名手なり】」

そして、屋根伝いに近づくとそこではすでに、テイオナさん達が戦闘を始めていた。

本来なら、僕より強いテイオナさん達が戦ってるなら、『大丈夫だ』って安心感が出てくる所のはずなのに、何故か不安でたまらなくて、逆にその気持ちが増すばかりだった。

ダアン!!

「・・・」

「【狙撃せよ、妖精の射手。穿て、必中の矢】！」

だから、自然と足に込める魔力の量が増して、走るスピードが一気に上げた。

それは、まるで消えるかのごとく。

ドオン!?

「きゃっ!?!」

そのままの勢いで、魔法を使おうとしていたレファイヤさんのお腹を思いっきり、刀の持っていない右手で突いた。

ピキッ

ドオツ

「!?!」

それとほぼ同時にレフィーヤさんが立っていた、すぐ側の地面から黄緑色の触手みたいなのが伸びてきて、僕のお腹を貫いた。

ブウン

ドカツ

ドシヤ

「カハッ!?!」

その反動で宙に浮いた僕の体は背中から地面に叩きつけられた、同時に込み上げて来た鉄の味を吐き出した。

「・・・嘘・・・四葉ちゃん?・・・四葉ちゃん!?!」

「四葉!?!」

その受けたダメージがすごくて、僕は、立ち上がることも、僕の名前を叫ぶ三人に答えることも出来なかった。

「四葉ちゃん!しつかり!四葉ちゃん!」

「・・・」

その間に、テイオナさんやテイオネさんよりも近場にいたレフィーヤさんが僕の側に駆け寄って来てくれて、抱き起こしてもくれた。

ちらりと、レフィーヤさんを見た。

不安そうで、今にも泣き出しそうな顔をしていた。

「・・・」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

「!?!?!?!」

そんな顔をしてほしくなくて、なんとか声を振り絞ろうとした時

だった、そんな思いとかかつき消すかのように、突然、蛇モンスターが咆哮を上げた。

自然と僕等の視線は自然とモンスターの方に向いた。

「……えっ……」

「咲い……た!？」

「蛇じゃなくて……花!？」

モンスターの明らかな変化。

僕等が蛇の頭だと思っていた所が先端部分から、ピツ、ピツ、と幾筋も線を走らせて、咲いていた。

開かれた何枚も花弁。

毒々しい色をしてるから、花と言うには、綺麗さの欠片もないけど、花のモンスターに変化していた。

中央には牙の並んだ巨大な口が存在していて、粘液を滴らせている。

生々しい口の奥に、薄紅色の体内で輝くのは、陽の光に反射した魔石。

ズルウ……

「!」

「レフイーヤー・四葉!!」

正体を現したモンスターは、僕とレフイーヤさんの方へとまるで蛇のような動きで這い寄ってきた。

「あーもうっ、鬱陶しい!!」

「あーもうっ、邪魔あつ!!」

僕等に駆け寄ろうとしたティオナさんとティオネさん達は、モンスターの周囲の地面からどんっどんっどと突き出される触手によって、行

く手を阻まれていた。

何度も、何度も、拳で襲いかかってくる触手を打ち払う二人だけど、触手にはその度に起き上がって、二人を襲った。

「・・・レファイ」

ギョッ

「・・・」

目の前にまで迫って来ていたモンスターを見ながら、僕の体を支えたままのレファイやさんに離れてくれるように言おうとしたら、逆に、抱き締められた。

「・・・レファイ・・・ヤさん・・・」

「・・・」

このままじゃダメだ。

僕等の上から黒い影が射す。

粘液がボタボタと僕等の横に垂らされて行く。

このまま、ここにいたら、僕もレファイやさんも二人まとめて食われてしまう。

周囲にいる逃げ遅れたであろう人達の悲鳴を聞きながら、どうするべきか考えていた時だった。

キュイイン

「!？」

ブシヤアアアア

グシヤッ

その瞬間、金と銀の光が走り抜けて、僕を食おうとしていたモンスターの首が切り飛ばされ、頭を失ったモンスターは体を勢いよく仰け反らせて、ぐにやりと折れ曲がりながらその場に崩れ落ちた。

「アイズ！」

「・・・アイズさん？」

どうやら、アイズさんが駆け付けて来てくれたみたい。

勢いよく地面に着地したアイズさんが僕とレフィーヤさんの方を振り返って見ていた。

そして、こっちに向かって歩いて来ようとしたアイズさん。

グラッ

「・・・！」

その地面の揺れを感じて、その足を止めたアイズさん。

ドオオオオオオン

「ちよ、ちよつとつ」

「まだ来るの!?!」

そんなアイズさんを取り囲むように、三匹の花のモンスターが閉じていた蕾を一気に開花させて、見下ろす格好でその巨大な口をアイズさんに向けた。

ピキッ

「！」

「なっ!?!」

「ちよつ!?!」

そんなモンスター達をいざアイズさんが斬ろうとした時、なんの前触れもなく、アイズさんの使っていた剣に亀裂が入り、破碎した。

その光景に僕等は言葉を失った。

第40話・反撃と声

「ブシャアアアア!!」
「!？」

三匹いっぺんにアイズさんに襲いかかる花のモンスター達。
アイズさんは、魔法で跳んで、ソレを回避して、右手に持った刃を失った剣の柄をモンスターの体に振り下ろした。

アイズさんの風が付与されてるのに、その攻撃は、ただ、わずかに凹ます程度のダメージしかモンスターに与えなかった。

ギユン
ギユン
ギユン
「っ！」

それで、それ以上の攻撃を諦めたアイズさん。

「ちよつと、こつち見向きもしないんだけど！今度はアイズ!？」
「魔法に反応してる・・・!？」

テイオナさんとテイオネさんも参戦するけど、いくら攻撃を加えてもモンスター達は矛先をアイズさんに向けたまま。

「————」
「!？」

そんな時、かすかにだけど、誰かの怯える声が聞こえた気がした。

「————」
「・・・どうにか・・・しなきゃ・・・」

「えっ?」

だから、一度耳を澄ませてみた。

それは、気のせいじゃなかった。

周囲の逃げ遅れた人達ではなく、並んでいる屋台の辺り、結構、マズイ所にいるような気がして

「これは、かつての力、姿を取り戻す魔法」

「四葉ちゃん?」

それ以上考えるより先に、僕は、詠唱を始めていた。

せつかく、僕等をモンスター達から遠ざけようとしてくれたアイズさんには、悪いけど

ググッ

「我、彼の王に仕えし者」

「!」

ズキッ

「!?…：今は、彼の者に造られし我が身。我が望みはただ一つ。今一度、あなたに呼んで欲しい」

ダッ

詠唱をしながら、体を起こした僕は、全身を駆け巡る激痛を耐えながら走った。

「我が名は、王の狩猟犬《カヴァス》!!」

ボオン!!

ドオオン!!

いつの間にかアイズさんを襲ってた一匹が、僕の方に突っ込んで来て、その頃には、詠唱を終えてた僕は、ソレを瞬時に避けて、一気に

加速した。

「えっ？何？モンスター？」

「・・・違う、あの子、四葉」

「はああ!?!」

その時には、僕の姿は人じゃなくなっていた。

アインクラッドで何時も一緒にいてくれたリユ一並みにデカイ白い犬に姿を変えた僕を見て、アイズさんに向かって伸びていく夥しい触手を相手取ってるテイオナさん達が、ビツクリして声を上げた。

「馬鹿！何やってんの!!こいつは魔法に反応してるのよ！早く魔法を解きなさい！アイズも！追いかけて回されるわよ！」

「でも・・・」

「二人一匹くらい何とかするって！だから、四葉も！」

そして、テイオナさん達から呼び掛けられるけど、今は、あえて無視して、声の聞こえた方に全力で走る。

「カヴァアス、あの影です」

「!」

その時、誰かの声がした。

「!」

「ひっ!?!」

その直後、屋台の影で隠れるようにしている獣人の女の子が座り込んでるのが目に入った。

その子は僕を見た途端、恐怖の色を濃くした。

グイッ

「!？」

ボスッ

ダッ

それは、申し訳ないとは思うし、恐怖している子にかなり、乱暴だと思っただけ、その子の服を少し啜えさせて貰って、一気に僕の背中目掛けて放り投げて背中に乗せると一気に駆け抜けた。

心の中で、「血で汚れるかも、ごめん」と謝りながら

ドカアアアアン!

「!？」

駆けて、屋台の影から抜け出した直後、その屋台がモンスターの体によって吹き飛ばすのを見た。



「ロキ様!」

「うおっ!?!なんや!?!」

そのまま、匂いを頼りに、ロキ様のもとに走った僕は、ビックリしているロキ様に背を向けた。

「この子、取って?」

「えっ?あ、うん」

僕の背中にしがみついたままの獣人の子をロキ様が、引き剥がしてくれるのを待った。

「これでええんか？」

「ありがとうございます、行ってきます」
ダアン

「・・・なるほど、あれが四葉たんの本来の姿、ちゆうことか・・・
めっちゃ、綺麗なワンコやん」

そして、再び、アイズさん達の方へと引き返した。

その時、ロキ様がボソツと言ったその言葉とニヤリと笑ったのを僕は、引き返すことに必死で気付かなかった。



【「エルフ・リング」

「レフィーヤ!」

そのまま、アイズさん達の所に戻るとレフィーヤさんが一つの魔法の詠唱を終えていた。

【「―終末の前触れよ、白き雪よ。黄昏を前に風を卷け」
「!」

その足下に浮かぶ山吹色の魔法円が、翡翠色に変化して、それに伴ってアイズさんに牙を突き立てていたモンスター達が、再び、レフィーヤさんへ矛先を変え始める。

【「閉ざされる光、凍てつく大地」

「oooooooooooooo!!」

「はいはいっと!」

「大人しくしてろツ!!」

「ツツ!!」

「させない!!」

アイズさんの時と同じように三匹同時にレフイーヤさんに迫るのを一瞬で追いついたティオナさん、ティオネさん、アイズさん、僕とでモンスター達の前に立ちふさがると、殴ったり、蹴ったり、噛みついたりしながら、その突撃を阻んだ。

そうしながら、僕は、思った。

レフイーヤさんを突き飛ばすんじゃないやなくて、最初っから、こうすれば良かったんだって。

「【吹雪け、三度の厳冬―我が名はアールヴ―！】」

「！」

「【ウイン・フィンブルヴェトル】！！」

時に、地面から槍のごとくモンスターの突き出す中、詠唱を終えたレフイーヤさん。

ちようど、射線上にいた僕等は、瞬時にそこから離脱する。

すると、魔法が直撃したモンスター達は、体も、花卉も、絶叫すらも凍らされ、霜と氷に覆われたモンスター達は完全にその動きを止めた。

「ナイス、レフイーヤー！」

「散々手を焼かせてくれたわね、この糞花っ」

氷の像と化した三匹のモンスター。

そのうち、二匹の懐に入ったティオナさんとティオネさんは同じ動きをなぞって

「ツツ！！」

「いっつくよおおおー！ー！ー！ツツ！」

渾身の回し蹴りをモンスター達の体の中央に叩きつけて、同時に、夥しい亀裂がモンスター達に刻まれていって、粉碎された。

「あいふはん」

「？」

「ふはっへ」

ソレを見て、あるモノを啜えてアイズさんの元に行つた僕。

「良いの？これ、四葉の」

「ん」

あるモノとは、獣人の子を助けに行くときに置いて来た僕の刀で、僕は、コクツと頷いてアイズさんに刀を受け取ってもらう。

ポンツ

「！」

「ありがとう、四葉」

そして、アイズは僕の頭を一撫ですると、ゆっくりと残つたモンスタ―の所へ歩み寄つて行つた。

ヒュンツ

ガシヤアアアン

「・・・」

凍り付いて物言わぬモンスターを僕の刀でアイズさんは刻み付けてゆき、最後の一闪をお見舞いすると同時に刀を振り鳴らす。

ソレを合図にずれ落ちていくモンスターだった氷の塊は碎け散つていった。



「レフィーヤ、ありがとう！ほんと助かったー！」
「テイ、テイオナさん!?!」

ようやく、花モンスターとの戦闘が終わって、テイオナさんがレフィーヤさんに抱き付きに行くのを見ながら、僕は、魔法を解除した。

「ありがとう、レフィーヤ」

「アイズさん」

「リヴェリア、みたいだったよ・・・すごかった」
「!」

テイオナさんに抱き付かれて顔を真っ赤にするレフィーヤさんにアイズさんも言葉を送って、送られたレフィーヤさんは、少し目を見開いて、すぐに感極まったような照れたような複雑そうな顔でうつむいてしまった。

僕は、そんなレフィーヤさんの様子を微笑ましく見ていた。

「四葉ちゃん!!」

「!?!」

そんな僕の名前を怒鳴り付けるように、ここにはいないアスナさんが呼んだ気がして、勢いよくそっちに振り向いた。

フラッ

「あっ」

「四葉ちゃん!?!」

けど、それが良くなかった。

僕は、そのまま、後ろへひっくり返りそうになった。

トサッ

「……と、大丈夫？ 四葉」

「……テイオネさん……」

瞬時に反応してくれたテイオネさんが抱き止めてくれたから、何とか後頭部を地面に打ち付けることはなかった。

「て言うか、何であんた、裸？」

「……魔法、使ったら、弾け飛んじやった……」

「じゃあ、魔法の中に着替えはないの？」

「……持って来て、無い」

「なら、私のを着て？」

そのまま、僕は、その理由と、《幻書の術》の中に着替えなんて無いことを言った、

すると、駆け付けてきていたエイナさんが上に着ていたチョツキ？を僕に着せようとした。

「……血……付く」

「そんなこと、気にしなくていいの！ 洗って返してくれば、それで良いんだから！」

「四葉、ありがたく、使わせて貰いなさい？」

「……うん……ありがとう、エイナさん……」

なんか、一気に気が抜けたのか、テイオネさんにもたれながら、エイナさんにお礼を言った。

「ほいほい、皆、まだ仕事が残つとるでー」

「……」

そこにさっすきの獣人の子を連れてロキ様がやって来た。

「四葉たんはまず、治療やな」

「・・・うん」

「ティオネ、ティオナ達はちよつと地下の方、行ってもらってええ？
まだ何かいそうな気がするわ」

「はいはい、任されたわ」

「レフィーヤは、治療受ける四葉たんにつき添ったって？」

「あ、はい。わかりました。」

「アイズは残ってるモンスター、片付けてや」

「わかりました。四葉、もう少し、剣、借りるね？」

「・・・うん」

「うちは、この子の親、探しに行くわ」

そして、それぞれに指示を出して、ロキ様も獣人の子を連れて去っていった。

「・・・レフィーヤさん・・・」

「はい」

「・・・お腹、殴って・・・ごめん・・・」

「良いんです。そんなの。ありがとうございます。四葉ちゃん。少し、寝てて良いですよ？私が運びますから」

「・・・うん」

ソレを見送って、それぞれ、動き出した僕等。

僕は、レフィーヤさんに抱えられ、レフィーヤさんのその言葉に甘えて、そこで意識を手放した。

襲来編

第41話・動き出す三人の神と満たされる心

「もう、こんな時間に呼び出して。今度はなんの用？」

「薄々感付いとるくせによく言うわ」

そして、怪物祭の騒動があった日の夜。

ロキ様は、フレイヤ様を都市の南にある繁華街の一角に建つ、高級酒場に呼び出した。

「今日のフィリア祭の騒ぎ、起こしたのは自分やな」

「あら、証拠でもあるのかしら？」

「そんな馬鹿の一つ覚えみたいない言い回しすんな。状況が状況や、自分しか出来る者はおらん」

貴族の一室を思わせる広い個室で杯を酌み交わす二人は、どちらも笑みを浮かべていた。

フレイヤ様は余裕たっぷりな微笑みを、ロキ様はにやついたいやらしい笑みを。

「魅了、魅了、魅了、全部魅了や。ガネーシヤのこの子もギルドの連中も腑抜けにして、見張りはあっさり往なしたんやろ？」

「・・・」

「外に出たモンスターは誰も傷付けんかった。ちゆうより、何かを探し出そうと躍起になっておった。大方、骨の髄まで“魅了”されて、どっかの色ボケ女神以外のものが目に入らんかったんやろうな」

話す内容は、怪物祭での事。

「あんな大事起こしといて死人なしなんて芸当、自分以外に誰もで

きへん。まあ何がやりたかったのかはよくわからんが・・・事件の犯人はお前やー、つてな。決まりや」

「・・・ふふつ、そうね、概ね貴方の言う通りよ」

「ほほう、殊勝な態度やな」

そして、あっさりと自分が犯人だと認めるフレイヤ様にロキ様はニヤニヤと笑みを浮かべる。

「ギルドにちくつたらかなあ〜？罰則は相当かさむこと間違いなしやろうなあ〜？」

「鷹の羽衣」

「はっ？」

「貴方に貸したあの羽衣、まだ戻ってきていないわ。私をギルドに売るんだったら、その前に返してくれない？」

「なっ!？」

ロキ様はそのまま、フレイヤ様を脅すけど、フレイヤ様はその微笑みを崩すことなく言った。

ソレを聞いてロキ様は顔を驚きの色に染めた。

「あれは天界にいた時にいただいたゲフンゲフンツ、か、借りたやつやぞ!?!今更もう時効やろ!?!というか、今ここで持ち出すかフツー!?!」

「私の知ったことではないわ。ああ、勿論、女神とあろう者が約束を反故にするとは言わないわよね？」

「いや、でも、あれ・・・うちのオキニやし、今更返せって言われても・・・」

そんなロキ様をフレイヤ様も眼差しだけを鋭くして、見た。

ロキ様はたじろいで声を詰まらせた。

「もし今日の事を黙ってくれるのなら、いえ今後の私の行動に目を

瞑ってくれるなら・・・あの羽衣も貴方に差し上げるけど、どうかしら？」

「……………」

そして、それを言われてロキ様は動きも止めた。

ガシガシ

「ええいくそ！この性悪女っ、今になって昔の事を引きずり出しおつてっ」

「ゆすろうとする貴方も大概よ」

フレイヤ様が言わんとしてる事がわかったロキ様は、頬をひくつかせ、片手で頭をかきむしりながら悪態をついた。
それにフレイヤ様はくすくすと面白そうに笑う。

「つたく、ホンマ、腹たつなー。うちの可愛い子達はけつたいなモンスターの手相手させられて、四葉たんなんか、怪我まで負わされたんやぞ！」

「あの子が怪我を？」

「せや。一応、ギルドに治してもらたけど、まだ、目を覚ましてへん！」

そして、僕の容態を聞いてフレイヤ様は反応を示したらしい。

僕を心底、心配してるようなそんな顔だったらしく、ロキ様は眉をひそめた。

「なんや、その顔。自分が放った、十匹目の蛇みたいな花みたいな、気色悪いモンスターが四葉たんを傷つけたんやぞ」

「……私が放った中にそんなモンスターはいなかったわ」

「……嘘こけ」

「本当よ。早く事態を收拾させないために、貴方とガネーシャの子

を足止めするだけで良かったんですもの。いたずらに被害を広めるつもりはなかった、ましてや、あの子を傷つけるつもりなんて」

そこで、ロキ様もフレイヤ様も、怪訝そうな顔を浮かべる。

あの花のモンスターの事について、服のボタンをかけ間違えているような、話の内容に食い違いがあることに気付いた二人。

「・・・じゃあ、あのモンスターはなんやったんや」

「さあ？ 私には、貴方の言うそれが何であるかもわからないし」

言葉が途絶えて、二人の間に奇妙な沈黙が流れた。



「・・・」

「ディオニユソス様」

同じ頃、オラリオの奥深い路地裏の一角にある屋根が崩れ落ちた古い廃墟の中に雲のかかった月を見上げる影が一つ。

不意に、その影に向かって声が響く。

「ギルドより先に、回収することはできたか？」

「はい、こちらになります」

その声の主は、物音一つ立てず、どこからともなく姿を表して、廃墟にいた影の人物、基、神物に歩み寄ると、掌の上に置いた。

掌の上で数回転がすと、ソレを掴み上げて夜空に掲げた。

「面倒なことになってきたな・・・」

「・・・」

ソレは、魔石。

その中心は極彩色に染まっっていて、月の光に反射して毒々しく輝いていた。



「カヴァス」

「！」

三人の神がそれぞれ動いている頃、僕は、夢を見ていた。とても、懐かしい夢。

僕が「カヴァス」の名前を使おうと思った切っ掛けの夢をだ。

「カヴァス、こっちですよ。カヴァス」

「・・・」

ただ、前とは少し違っていた。

何て言うか、鮮明だった。

「カヴァス」

ポンッ

「！」

呼ばれて、自然と動く僕の体の感覚も、声の主である人物が僕の頭に手を乗せた時の手の優しさと暖かさも全部、鮮明だった。

「いいですか？カヴァス、良く見るんですよ」

「・・・」

そのお陰で、前は、わからなかったその人の顔がハッキリと見えた。

「カヴァス、あの影です」

「(この人、こういう顔をしてるんだ)」

金色の髪に碧色の目のすぐく真面目そうな顔の綺麗な女の人だった。

ピコッ

「あの木の影です」

「(あつ、一緒)」

そして、僕との意外な共通点もあった。

女の人の頭の天辺にも僕と同じアホ毛が立っていたんだ。

「わかりますか？カヴァス」

「・・・」

それらを見て、なんとなく、目の前の女の人指さす方向に向き、さらに全神経を集中させる。

「(・・・あつ・・・)」

「わかりましたね？」

すると、確かに獣の気配と臭い、そして、チラリと何かが見えた気がした。

「アレをこちらに追い込むのですよ？出来ますね？」

「(うん、やってみる)」

ソレを確認して、女の人からの指示を受ける。

何故かわからないけど、この人の言葉や声を全力で聞いて、応えたいと思っている僕がいる。

「へエー、へエー」

「……」

そして、そんな僕等の周りには、何頭かの犬が伏せていて、同じ方向を見ている。

「……行きなさい」

「！」

少しの間、ものすごい緊張感が走ったけど、女の人は何頭かいる犬達に次々と合図を出して、犬達もその合図に応えるようにターゲットに向かって走っていく。

「あなたが最後です。行きなさい、カヴァース！」

「(うん!!)」

そして、最後に女の方は僕に合図を出す。

僕は、その合図を受けて森の中をターゲット目掛けて回り込むように、他の犬達の後を追うように走った。

ガサガサガサ

「！」

「(あっ！逃がさないよ)」

僕等が近づく音と気配に気付いたターゲット。

当然、僕等から逃げようとすけど、僕等もわざとターゲットがある人がいる方向へ逃げるように追いかける。

ザアアン

「!!?」

その後は、あの人が僕等の追いかけたターゲットを仕留めて終わる。

ポンポン

「!？」

「良く頑張りましたね？偉いですよ？カヴァス」

終ると女の人は、僕の頭の上に手を乗せて、笑いかけながら優しく撫でてくれて、心の中が満たされていく感覚がした。

「さあ、帰りますよ。カヴァス」

「(うん!!)」

そして、女の人に着いて歩きながら、僕は、この人とずっと一緒に居たいって思った。



パチッ

「・・・!？」

そう思った次の瞬間、僕の目の前の風景が変わってしまった。

目の前にあるのは、あの人の姿じゃなくて、もう、見慣れてしまった夜の暗さに染まった僕の部屋の天井だった。

キシッ

「・・・」

僕は、体を起こすと、部屋の中を見渡して、あの人の姿を探した。当然だけど、あの人の姿は無かった。

スツ

「・・・うん、しつかり覚えてる。もう、忘れないようにしよう・・・」

無かったけど、目を瞑るだけで、あの人の姿が僕の脳裏に浮かんで、
すごく幸せな気持ちになった。

トサツ

「・・・アスナ、こんな気持ちだったのかな・・・」

そのまま、再びベットに寝転がって、前にアスナさんがキリトさん
を思い出しながらベットに入ったら、嫌な夢を見なくなっただって言っ
ていたことを僕は、思い出していた。

恋とかよく解らないし、アスナさんが感じた気持ちとは全然違うだ
ろうけど、夢の中のあの人の事を思うと、心が満たされるような、救
われたような気がした。

第42話・追加注文と黒兎刀

「う、うーん」

グイーツ

あの後、再び眠った僕は、いつもの起床時間よりかなり遅めに目を覚まして、ベッドの上で伸びをした。

コンコン

「四葉、起きてる?」

「うん、起きてる」

「じゃあ、入るね?」

「どうぞ」

ガチャ

そのタイミングで僕の部屋の扉がノックされ、アイズさんが僕の部屋に入って来た。

「・・・今、起きたの?」

「う、うん」

「そっか・・・体は、もう平気?」

「うん」

「それは、良かった。あの、四葉、コレ」

そして、ベッドの所にいる僕の所に来てアイズさんは僕に、僕の刀を手渡した。

「それと、ごめん。四葉の剣、壊しちゃった」

「えっ?」

チイン

その時のアイズさんは本気で申し訳なそうにしてて、僕は、それを見ながら、一応、念のため、刀を鞘から抜いてみた。

ボロ

「・・・うわあ」

「・・・ご、ごめん」

抜いてみて、アイズさんが本気で申し訳なそうになってる理由がわかった。

なんと、僕の刀は、柄だけを残して刃が折れて無くなっていた。

「ご、ごめんね？本当に、ちゃんと、弁償するから」

「・・・弁償？」

「う、うん」

正直、ショックはでかいけど、折れてしまったものは仕方がないと思う。

「・・・弁償はいい」

「えっ？で、でも」

「この刀が少しでもアイズさんの役にたてたなら、良かった。アイズさんや他の人に怪我はなかった？」

「う、うん。無かったよ？」

「そっか、良かった」

そう思って、アイズさんに言っていた時だった。

カランカラン

「あっ」

朝食の時間を知らせる鐘の音が鳴り響いた。

「朝食の時間だね？待ってるから、一緒に行こう？」
「うん！」

その音を聞いて、僕等は、その話をやめた。

一緒に、朝食を取りに行くために少し待ってもらって、僕は、寝間着から私服へ急いで着替えて、刀は、「幻書の術」の中に入れておいた。



「あつ！四葉！」

「あんた、もう平気なの？」

「昨日の話は聞いたぞ？大丈夫だったのか？」

「・・・うん」

「昨夜は飯食わずに寝てたし、腹、空いただろう？今朝は、腹一杯食えよ？」

「・・・お、おう」

で、食堂に行くとティオナさん、ティオネさんを始めとした団員の人達に僕は、取り囲まれた。

ギョッ

「!？」

正直、心配してくれてたのはわかるし、嬉しかったけど、この状況は、戸惑った。

なので、傍にあつたアイズさんの足に僕は、抱き付いた。

「・・・何をやっているんだ？お前達」

「リヴェリア」

そこに、ものすごい、怪訝そうな顔でやって来たリヴェリアさん。

「やあ、四葉、おはよう。昨日は大変だったね??体の方は大丈夫かい?」

「うん。大丈夫。おはよう、フィンさん、リヴェリアさん。僕は、もう、大丈夫だよ?心配してくれてありがとう!」

その傍には、フィンさんがいて、ニツコリと笑いかけながら僕の体を気づかってくれて、僕は、二人にも、皆にも、いろんな意味で“大丈夫だ”という気持ちを込めて、満面の笑みを浮かべて、そう言った。

ポンッ

「!」

「当然の事だよ?四葉?僕等は、家族なんだから」

「うん!」

すると、フィンさんの手が僕の頭の上に乗つけられた。

「ああー!ちよっ、狡いわよ!四葉!!そこは、私の!!」

「!?どうぞ!」

サッ

「えっ!?四葉!」

「団長お〜」

ザザザッ

それに即座に反応したテイオネさんに、僕も、即座に引いて、場所を譲った。

その僕の行動に驚くフィンさんと、そこにジャンピング土下座ならぬ、ジャンピング正座的な格好になって滑り込んで来るテイオネさん。

「・・・何か、四葉のテイオネの扱いが・・・」
「・・・」

それらを見ていたテイオナさん達は、なんだか、微妙な顔をしていました。

「皆で朝から、何しとるん?」

「ロキ様!」

「おっ! 四葉たんか! 良かった、あれからずっと寝とったから、心配しとってんで?」

「それは、ごめんなさい」

「ええよ? 後、うちの四葉たんに手出したら、許さへんでー!」
「っ
て、あの色ボケ女神に、ちゃんと釘射しといたからな?」
「?」

「さあ、皆、はよー、朝ごはん食べよ? 冷めてまうで?」

そこにロキ様も合流して、そこで皆もようやく、朝食を取るため、食堂内を動き始めた。

「そうだ、四葉、今日、君の直接契約した鍛冶師君の所に行きたいんだ、後で案内してくれるかい?」

「う、うん。わかった」

そこで、若干、目の笑ってないフィンさんと一緒にヴェルフさんの所に行く約束をした。



コンコン

「ヴェルフ、いる??」

「四葉か? いるぞ、今、開ける」

そして、朝食後、僕は、約束通り、フィンさんと一緒にヴェルフさんの工房へとやって来た。

ガラッ

「よう！よつ・・・」

「ヴェルフ??」

「って【勇者（ブレイバー）】!？」

扉をノックすると、ヴェルフさんが中から開けてくれて、最初は良い笑顔だったのに、僕の横に立ってるフィンさんを見るなり、目が飛び出すんじゃないかと思うくらい、目を見開いてヴェルフさんはビツクリしていた。

「やあ、こんにちわ。君が四葉と直接契約したヴェルフ君だね？うちの団員がお世話になってるね？」

「い、いいえ、こちらこそ・・・四葉、ちよつと、こつち来い」

「なに??」

ヴェルフさんに微笑みながら挨拶をするフィンさんにヴェルフさんは、頬をひきつらせながら、笑みを浮かべて挨拶を返して、僕を手招きして、自分の傍に呼び寄せた。

ガバッ

「!？」

「お前、何で【勇者（ブレイバー）】連れて来てんだよ」

「フィンさんが、行ってくつて言うから。ヴェルフに武器、作って欲しいんじゃないの？」

「んなわけ。ねえーだろ」

そして、傍によると僕の視線に屈んだヴェルフさんにフォールドさ

れて、耳元で、フィンさんに聞こえないように小声で、来た理由を聞かれ、僕もそれに習って答えると、ものすごく呆れた顔をされた。

「うん、僕は、武器を作って貰いに来た訳じゃないよ?」
「!」

まあ、バツチリ聞かれてたけど

「じゃあ、何で、ヴェルフの所に?」

「うん、パーティーの申込みについてのことでね?」

「!」

「ちよつと、中で話させて貰って良いかい?」

「は、はい、どうぞ、汚いところですが」

とりあえず、話をするため、ヴェルフさんの工房内に入ることに
なつた僕等。

「単刀直入に言う。申し訳ないが、この子とパーティーを組む件、断
らさせて欲しい」

「えっ?」

そして、入って、扉を閉めるとフィンさんはヴェルフさんに向かっ
てそう言った。

「理由を聞かせて貰っても?」

「神フレイヤが、この子を狙ってる可能性があるんだ」

その理由として、フィンさんはフレイヤ様の名前を出した

「神フレイヤがですか?」

「うん」

「四葉、お前、とんでもない神に目を、付けられてんだな」

途端、ヴェルフさんは僕に同情的な目を向けた。

「そう言うわけで、当面の間は、僕等、幹部の目の届く所にいて貰おうと思ってるね？君には期待させてしまって申し訳ないけど」

「・・・本当に残念ですけど、そう言う事情なら仕方がないっすね。フレイヤ・ファミアアが出てきたら、俺じゃ、何も出来ませんし・・・わかりました」

ともかく、ヴェルフさんがパーティーを断ることを了承した事で、パーティーを組もうって話は無しになってしまった。

「・・・ヴェルフ」

「ん？」

「【テイクアウト】」

ドサドサドサドサドサツ

「なっ!？」

正直、僕としても断ることを了承されたら、どんどん、ダンジョンに行ける機会が減るので、ちよっと、嫌だったけど、パーティーの件は、僕の刀とかの代金に関わることだから、とりあえず、僕は、【幻書の術】の中に入れておいた、アイズさんとダンジョンに行った時に入れたて分配したドロップアイテムの数々を、全部、出した。

「コレで、代金は足りる？」

「た、足りるってもんじゃない、多すぎる」

「じゃあ、追加注文、させて？」

「追加注文？」

「ヴェルフは、刀とか剣とか以外に、槍とか弓とか、盾とか作れる？」

「つ、作れなくはないが、何でだ？」

「僕の魔法の中に入れておいたら、いぎって言う時、役に立つと思うから」

コレは、怪物祭での教訓だった。

あの時、貸せる武器が刀しか無かった。

あの時、他にも貸せる武器があったら、テイオナさんやテイオネさん達にも貸せて、もっと早く、あの事態を解決できたかも知れないと思っただから。

「・・・ちよつと、面白いこと、思い付いた」

「面白いこと?」

「ああ、だから、その注文は承った。まあ、出来てからのお楽しみつてヤツだ」

ヴェルフさんは、僕の言葉を聞いて、少し考え込むと、悪戯な笑みを浮かべて言うと、僕の無茶な注文を受けてくれた。

「後、もうひとつ」

「ん?」

「【テイクアウト】」

カチャッ

そして、次に、刀を取り出した。

「コレ、治る?」

「見るぞ?」

「うん」

チイン

「・・・うわあ」

その刀を鞘から抜くとヴェルフさんは、小一時間ほど前の僕と同じ

反応をした。

「こりゃ、無理だ」

「だよね」

「アイズが使うと、どうしてもね」

「【剣姫】に貸したのか？」

「うん。昨日の怪物祭のあれで」

「・・・なるほどな。まあ、ちよつと待ってる？」

そして、ヴェルフさんは奥の方に行つて、なにやらガサゴソしはじめて

「ほら」

ブン

カシッ

「！」

一振りの僕の刀の、柄とか鞘とかの白い部分が全部黒い刀をヴェルフさんは投げて寄越された。

「名付けて、黒兎刀（クロタ）だ」

「く、くろた」

「良かったら、使つてやってくれ。注文のヤツは、だいたい二週間はかかる、その辺りに取りに来てくれ」

「わかった。ありがとう、ヴェルフ」

相変わらずのネーミングはともかく、ニイツ歯を見せて笑うヴェルフさんを見て、僕は、この刀も使わせて貰うことにした。

第43話・巨黒魚の丸焼き

「おはよう、四葉」

「おはよう、アイズさん」

翌朝、まだ日の出ない早い時間帯に中庭に出てきた僕は、同じく中庭に出てきたアイズさんと挨拶を交わして、離れた位置でそれぞれ、剣と刀を鞘から抜いた。

ヒュ

キキュ

パパパ

ビュツ

そこから、縦、横、斜めと無尽に振るって、僕は、刀を鞘に収めた。

ビビビビツ

「・・・」

ピツ

ザラア

チイン

「おお〜」

パチパチ

「・・・」

そして、アイズさんは最後に木から落ちて来た一枚の葉を一瞬で細切れにして、剣を鞘に収めた。

その一連の流れが、あまりにも見事で、僕は、アイズさんに拍手を送った。

「・・・?」

「……」

そこで、誰かに見られてる気がして、振り向くと庭と繋がる塔の出入り口付近で、レフイーヤさんが目を見開いてたたずんでいて、その手には分厚い本を抱えていた。

「はっ！すっすごかったです、アイズさん！私つい見とれちゃつてっ、声をかけるのも忘れちゃいました！」

「えっと……ありがとうございますっ！」

どうやら、レフイーヤさんもアイズさんの剣技に見とれて、固まっていたらしく、目を向けられると、思い出したように、笑顔で僕と同じように拍手をした。

「本当にこんな朝早くから剣を振られてるですね……だからアイズさんはあんな強くて……まさか、四葉ちゃんも……私も見習わなきゃっ」

「……」

レフイーヤさんは興奮しているのか、頬を赤くして近づいてくる。その瞳はキラキラと輝いていて、アイズさんに尊敬の眼差しを向けて、僕の方も見ると、レフイーヤさんは語尾に力を込めて、意気込んだ。

「アイズさんと四葉ちゃんは、剣術を誰かに教わったりしたんですか？魔導士の私から見ても、すごい切れがあるなってわかるんですけど……」

「……お父さん、かな」

そして、アイズさんはレフイーヤさんに質問された事に、少し考えた素振りを見せた後、ポツリと答えた。

「お父様が・・・そういえば、アイズさんのご両親は今は何を・・・？」

「あつ、レフイーヤさん、後ろ」

「へっ？」

その答えを聞いたレフイーヤさんが、そこまで言葉を続けたところで、その後ろに近付いてくる人を見て、僕は、そっちを指さして、レフイーヤさんに教えた。

「レフイーヤ。書庫に行つて本を取ってくるのに、どれだけ時間がかかっているんだ」

「リ、リヴェリア様・・・」

レフイーヤさんが、その人、基、リヴェリアさんの方を振り返ると同時にリヴェリアさんは声を発した。

「はあく、アイズや四葉の鍛練に現を抜かしている暇はないぞ、お前も修業中の身だ。朝食の時間まで続けるぞ。アイズ、四葉、また後でな」

「ア、アイズさあくんっ、四葉ちやあくんっ・・・」

僕とアイズさんを見たリヴェリアさんは、ため息を一つ吐いて、レフイーヤさんをずるずると引きずって、中庭から去っていった。

その時、ちらりとアイズさんを見たら、軽く手を振っていて、僕も、それに習って手を振った。

「私達も、中、入ろうか？」

「うん！」

そして、僕等も中庭から塔の中へ戻った。



カチャカチャ

「……」

その後、シャワーを浴びに行つて、食堂に行つた僕とアイズさんは前みたいに朝食の料理や皿を配膳する人達に紛れて、その配膳を手伝った。

今日のメニューは野菜たっぷりのスープとサラダ、野菜と塩漬け肉のサンドイッチ、そして、野菜入りのオムレツみたい。

「うおっ、アイズさん、四葉ちゃん、いつの間にな！」

「ありがとうございます、でも大丈夫ですから！」

で、配膳を手伝つてると、前回と同じように見つかつて、丁重に手伝いを断られた。

「テイ、テイオネさん、朝食は俺達が……」

「団長の朝ご飯は、わ・た・し・が作るのよ！手出し無用よ、引つ込んでなさい！」

その事に僕とアイズさんはしよんぼりしていると、厨房の方から、楽しそうなテイオネさんと団員さんとのやり取りが聞こえてきた。

どうやら、テイオネさんはフィンさん用の朝食を作ってるらしい。

そのやり取りを見ていて、良いなって思いつつ、僕とアイズさんは優しく食堂から追い出された。

「……どうしよつか」

「散歩」

「うん、じゃあ、それで」

仕方がないので、前回と同じように散歩することにした。



「あっ」

「うっ……」

「？」

アイズさんと当てもなく廊下を歩いてると、曲がり角でベートさんとぼったりと出くわした。

出会い頭にぎよつとしたベートさんは、口の端を軽く痙攣させながら、笑みを浮かべた。

「……よ、よお」

「……」

無茶苦茶ぎこちなく挨拶をするベートさんに挨拶を返そうとした時だった。

「おっはよーアイズ！」

ドンッ

「ぐおっ!?!」

その時、ティオナさんがベートさんを押しつけて、正面からアイズさんに抱き着いてきた。

「四葉もおっはよー!」

「おはようございます、ティオナさん」

「ズーッ」

「ぐわわわわわ」

そして、アイズさんに笑顔で抱き付きながら、僕にも笑顔で挨拶をしてくれたティオナさんは、背後のベートさんを振り返り、舌を出した。

それに歯を食い縛るベートさんを他所に、ティオナさんはアイズさんの手を引っ張ってこの場を離れ出した。

「アイズー、あの狼男と話してもいいことないから、あっち行こう？
四葉もおいで？」

「おい、こらっ、聞こえてんぞド貧相女!」

「ド貧相とか言うなあああああああ!!」

「え、えっ・・・」

「あ、あの・・・」

すると、いきなり、口論し始めるベートさんとティオナさん。

「朝っぱらからうるさいぞ!!廊下で騒ぐでない、お主等!」

「ガレスさん」

「四人とも、そこに正座じゃ!特にその三人!上級冒険者としての立ち振舞いを今一度ただしてやるわい!!」

「なっ!」

「え、私も・・・!」

そこにガレスさんが登場して、二人を止めしてくれるかと思ったら、二人とアイズさんと共に僕も、朝食の時間までガレスさんに一頻り注意された。



「・・・足、痛い」

「私も」

「私も」

「大丈夫ですか？お三人の分の朝食は私が取っておきましたから」

「ありがとう、レフイーヤ」

「ありがとう、レフイーヤさん」

そして、朝食の時間になって、食堂に移動した僕等。

もう、足が痺れすぎて、ここまで移動してくるのが大変だった。

だから、レフイーヤさんが僕等の朝食を確保してくれて本気の本気で助かった。

「♪♪♪」

「!?!」

その時、テイオネさんの上機嫌な鼻歌が聞こえてきて、そのテイオネさんの方に自然と僕の視線が動いて、それを見た瞬間、目を見開いた。

「ア、アイズさん」

キユツ

「??どうかしたの?」

「あ、あれ」

「さあ、団長。私の愛の料理です。たーんと食べてください」

「あつ」

そして、ヤバイと思ってアイズさんの腕を掴んだ僕は、テイオネさんを指さした。

そうしている間にテイオネさんはソレをフィンさん前に置いた。

「ねえ?何で、テイオネさん、フィンさんにモンスター食べさせようとしてるの?」

「「「えっ」」」

ソレを見て、あえて小声で僕は、聞いた。
すると、アイズさんだけじゃなく、ティオナさんとレフイーヤさん
も固まった。

「ぷっ」

「！」

「ハハハッ!!」

「フフフ、違いますよ？ 四葉ちゃん、あれはモンスターじゃなくて魚
です」

「さ、魚!?!ふ、普通の!?!モンスターじゃなくて!?!」

次の瞬間、アイズさんが吹き出したのを皮切りに、ティオナさんが
お腹を抱えて笑い出し、レフイーヤさんも笑いながら、ティオナさん
のアレの正体を教えてくれた。

「ゴオらあああ!! 四葉あああ!!」

「は、はい!?!」

「私が団長にモンスター食わせるわけねえーだろ!! 普通の魚だバ
カア!! 変なこと抜かしてると、その脳天、カチ割るぞお！」

バツ

「ヒッ!?!」

そして、バツチリソレを聞いていたティオネさんにもものすごく怒ら
れて、僕は、思わず、両腕で頭を庇った。

だって、一Mは超えていそうな大きな体でいびつで強固そうな鱗を
した奴を誰が普通の魚だと思うよ。

僕は、一瞬、足はないけど、二十二層の湖にいたヌシに近い何かだ
と思っただし。

「まあ、まあ、ティオネ。 四葉は巨黒魚を見るのが初めてなんだよ。

勘違いしても仕方がないさ」

「団長」

「四葉、もう一つ、ビックリすることを教えてあげるよ？これでも、子供なんだよ？」

「こ、子供!?!そ、それで!?!」

「うん！」

「!!?!」

それに更にも上乗せされて、フィンさんが目の前の丸焼きにされたモンスター、基、魚を指さして、その事を教えてくれた。

じゃあ、一Mを超える子供の親の魚って、いったい……。

第44話・豪華なパーティでダンジョンへ

「アイズ、今日は何かする予定あるの？」

「ん、と……」

それから、気を取り直して、食事を始めた僕等。

五十人以上が一斉に食事を取ってることもあって、話し声は絶えず、そんなざわめきに囲まれながら、アイズさんから貰ったサンドイッチを食べながら、ティオナさんはアイズさんに聞いた。

「二昨日、剣を壊しちゃったから、弁償しないといけなくて……」

「それって、フィリア祭で使っていたレイピアのことですか？」

「うん……それだけじゃなくて、四葉の剣も」

「えっ？四葉ちゃんの剣をですか？」

「うん」

それにそう答えたアイズさんは、レフィーヤさんの質問にこくりと頷いて、僕の刀の事も話した。

「僕のは、もう新しいの有るから、良いよ？」

「……それでも、弁償はさせて？そのためにも、一週間はダンジョンにこもって、お金を稼がなきゃいけないけど」

「じゃあ、僕も、連れてって」

「じゃあ、私も」

「でも、ティオナ、四葉」

「大丈夫、大丈夫！私だって作り直して貰ったウルガのお金、用意しないといけないし」

「僕も、ファミリアにいったばい、借金あるの。返していかないといけないし、弁償の代わりに！」

「わ、私もお邪魔でなければ、お手伝いさせていただきますい！」

それで一週間もダンジョンにこもって資金稼ぎをしようアイズさんに、拳手して連れて行って欲しいとお願いすると、ティオナさんとレフイーヤさんも、一緒に行きたいとアイズさんをお願いした。

「・・・うん、じゃあ、お願いするね」

「うん！」

そんな僕等のお願いに、アスナさんは眉を下げて微笑んで一緒に行くことを許してくれて、僕等もその微笑みに笑い返した。

「ホームを結構空けそうだし、フィン達に言っておかないと駄目かな？」

「あつ」

「そうですね。次回の遠征はまだ先ですけど、しばらくダンジョンに滞在するなら、ロキか団長に申請しておいた方が無断で行ったら余計な心配かけちゃいますし」

そして、レフイーヤさんはティオナさんにそう答える。

それを聞いて、あることを思い出した。

「僕、フィンさんの答え次第じゃ行けないかも」

「えっ?」

「どういう事?」

「昨日、言われたんだ、当面の間は、フィンさん達、幹部の目の届く所において貰うって」

「えっ、そんなこと言ってたの? うーん、じゃあ、四葉はフィンの返事次第ってことで。まあ、なんとかなると思うから、とりあえず、フィンの所に行く前に、期間とか日程とか決めておこう?」

それはヴェルフの所に行った所で言われた事。

その事を話、僕の参加は一旦保留で、一応の大まかな滞在期間、探

索日程の話し合いを進めた。

そうしている内に、周囲の席から次々と食事を済ませた人達が立ち上り、食堂を出ていく。

ふと、僕はこの時になって初めて、ロキ様がいらないことに気付いた。いつたい、どうしたんだらうとそう思ってた。

「あんた達、さっきから何話してるのよ?」

「えっ?」

「あ、ティオネさん」

「四人で一週間くらい、ダンジョンにお小遣い稼ぎ行こうかなーって。ティオネも行く?」

そこに、フィンさんとの食事を終わらせたティオネさんが僕等のもとにやって来た。

ちなみに、あの巨黒魚の丸焼きは、全部食べきれないと言ったフィンさんの代わりにティオネさんが完食した。

ほぼ、丸々残ってた魚を食べきったティオネさんはかなり満足そうだった。

「それで、ティオネ・・・」

「二週間でしょ? いやよ、そんなに団長のお近くにいられないなんて」

「どうせだから、フィンも誘ってみよっかなーって思ってるんだけど」

「!?!」

「しようがないわねー、私も付いて行ってあげるわ。感謝しなさいよね」

そして、ティオネさんは最初、ティオナさんのお誘いにあからさまに顔をしかめたけど、次にティオナさんがボソリとその考えを口にした途端、乗り気になったティオネさん。

僕も、その手が有ったかとティオナさんの提案に感心していた。



コンコン

「フィンー、入るよー?」

その後、僕等は食事を終えて、食器類を片付けると早速、フィンさんの部屋に向かった。

「何だ、お前達。ぞろぞろとやって来て」

「あ、リヴェリア様・・・いらっしやっただんですか?」

一応、二回ほどノックしてティオナさんを先頭にフィンさんの部屋に入ると、そこにはリヴェリアさんも一緒にいた。

どうやら二人は朝食を終えた後、この部屋にこもってお仕事をしていたらしく、その手には書類の束が

「相談っていうか、ちよつとフィンと話したいことがあるんだけど」
「ンー、少し待ってもらっていいかな。そろそろ一区切りがつくから」

ティオナさんの申し出にフィンさんは書類から顔を上げずに答え、羽根ペンの動きも止めず、淀みなくサインらしき文字を書き付け、真隣に立つリヴェリアさんから新しい羊皮紙を受け取っていく。



「よし、待たせたね。それでなんだい、話したいことって?」

「実はですね、ティオナ達がしばらく探索に出掛けたいそうなんですけど、もし団長も良かったらと・・・」

それから、しばらく待って仕事を一区切りさせたフィンさんに、テイオネさんがずっと前に出て説明する。

「ああ、いいよ。僕もそろそろダンジョンに潜ろうと思っていたからね。たまには気ままに、じっくりと探索をしておきたいし。せっかくだし、リヴェリアもどうだい？最近はず務に追われていただろう？」

「・・・そうだな、私も行かせてもらおう。私達の留守の間は、悪いがガレスに任せるか」

「僕も、行つていい？」

「うん、もちろんだよ？・四葉」

「やったー!!」

すると、フィンさんはあっさりと了承して、自動的にテイオネさんも行くことが決定。

更に、フィンさんの誘いでリヴェリアさんも、そして、フィンさんの正式な許可が出たことで僕も参加する事が決定した。

思わず、両手を振り上げて、万歳までした僕。

「良かったですね？・四葉ちゃん」

「うん!!」

そんな僕にニツコリと笑いかけてくれるレフィーヤさん。

これで、総勢七人、それも僕やレフィーヤさんを除いて五人も第一級冒険者と、ものすごく豪華なパーティーが出来上がった。

「あ、このことバートには内緒ね！聞いたら絶対付いてくるし、聞いたら絶対付いて来るし！うるさいし!!」

「うん・・・まあ、主力が総出つても考えものだしね。それじゃ

あ、各自準備を行つて、正午にバベルに集合と行こうか」

「「「おー!!」」」」

それぞれ、行く前の準備のために動き出す前にテイオナさんが意地の悪い笑みで釘を刺した。

きつと、朝の事を根に持っているんだろうなと思う。

それにはフィンさん達は苦笑いを浮かべてたけど、異論はなかったみたい。

そして、フィンさんが出した提案に僕はテイオナとテイオネさんと共に片腕を突き上げ、アイズさんとレフィーヤさんは恥ずかしそうに控えめに右手を伸ばしていた。

「四葉、行く前にエイナに服は返しておけ」

「うん!!」

そこで、リヴエリアさんにエイナさんの服の事を言われ、大きく頷くと準備とエイナさんの服を取りに行こうとテイオナさん達と共にフィンさんの部屋を出ようとした。

「ちよつと待ってくれるかい? 四葉」

「ん?」

その前に、フィンさんに止められた僕。

「僕に、少しついて来てくれるかい?」

「・・・」

カシッ

「えっ?」

「テイオネさんも一緒に行く。いい?」

「・・・うん、良いよ? じゃあ、テイオネも一緒においで?」

「は、はい!!」

そして、僕に、付いて来てって言うフィンさんに少し考えてテイオネさんの手を掴んで答えると、フィンさんは苦笑いを浮かべて、テイオネさんも一緒に行くことを許可してくれて、僕はフィンさん、テイオネさんと一緒にフィンさんの部屋を出た。



「はい」

「・・・」

「後、これと、これと、これね」

で、行ったのは、ホーム内の武器庫で、フィンさんはその中から、小人族用の武器を沢山、渡された。

「あ、あの、団長？」

「ん？なんだい？」

「こんなに、どうするんです？」

「ん？四葉が使うんだよ？」

「えっ？」

正直、そのフィンさんの行動に戸惑った。

それはテイオネさんも同じだったみたいで、僕の代わりにフィンさんに聞いてくれた。

で、返ってきた答えに更に、僕は戸惑った。

「だって、注文していただろう？」

「あんた、そんなに注文したの？」

「う、うん」

「なら、使いこなせた方がいいだろう？」

「うん！じゃあ【ストレージ】」

そして、そのフィンさんの答えを聞いて、納得。確かに、ただ、ストックしておくよりもある程度使えた方が良いに決まってる。

という事で、僕はフィンさんが出して来たそれ等を【幻書の術】の中へ入れた。

「じゃあ、準備が出来たら、エントランスホールにおいで？一緒にギルドに行こう？」

「うん！ティオネさんも一緒ね？」

「ええ、わかったわ」

そこで、一時、二人と別れて、僕は自室に戻り、私服から戦闘衣に着替えて、再び、二人と合流した。



「僕達はここで掲示板を見てるから、行っておいで？」

「うん!!」

合流すると、ギルドに行った僕等はフィンさんとティオネさんは冒険者依頼が貼り出されてる巨大掲示板のもとへ、僕は目的のエイナさんの元へ向かった。

「おはよう、エイナさん！」

「よ、四葉ちゃん!!」

向かって、エイナさんに声をかけるとエイナさんはすごく驚いた顔をした。

「もう、大丈夫なの？」

「うん！」

「・・・良かった」

けど、その顔は、すぐにホツとしたような優しい顔になった。

「その格好って事は、これからダンジョン?」

「うん!」

「まさかとは思うけど、一人でじゃないよね?」

「うん、アイズさんとレフィーヤさんとテイオナさんとテイオネさん、後、フィンさんとリヴェリアさんも一緒」

「な、なっ、何て豪華なメンバーで」

そして、僕の戦闘衣姿にちよつと怒ったような目付きで声で聞かれただけど、僕が、今日、一緒に行くメンバーを教えたら、今度は、驚いた顔をした。

なんか、エイナさんってコロコロと表情が変わる人だなんて思う。

「だから、コレ、返しに来たの」

「えっ?」

そんなエイナさんに、ここに来た目的であるエイナさんの服を僕は差し出した。

「私の服。そっか、わざわざ返しに来てくれたんだね?」

「うん! エイナさん、貸してくれてありがとう」

「ううん。どういたしまして」

「それじゃ、僕、行くね?」

「うん。リヴェリア様達がいるとはいえ、あまり、無茶はしないようにね?」

「うん! それじゃ、いってきます!」

「いってらっしゃい、四葉ちゃん」

そして、エイナさんにお礼を言って、冒険者依頼を選んでるフィンさん達の所に戻った。



「ちゃんとお礼は言えたみたいね？」

「うん！」

「これは、面白そうだ」

戻ったところで、フィンさんは何か良い冒険者依頼を見つけたらしい。

「どれですか？」

「迷宮に響く歌・・・下層で聞こえて来た歌の正体を突き止めてほしい・・・へえ、モンスターの鳴き声とは違って、聞き惚れてしまうほど美しい歌声か。歌の主は人なのかモンスターなのか、それともダンジョンそのものか・・・依頼人は気になって夜も眠れないらしい」

「いけません、団長。あからさまに面倒な依頼じゃないですか。報酬もしよぼいですし、そんなことやってる暇はないですよ」

「うーん、四葉はどう思う？」

「僕も、それはやめておいた方が良さそう。空耳かもしれないし、歌の主が本当にいたとしても、一週間そこらで見つかるとは思えないよ？」

「はあく、二人とも浪漫がないなあ。胸を疼かせる探求心こそが冒険者の醍醐味じゃないか」

けど、フィンさんが読み上げた依頼内容を聞いて、テイオネさんと同じく、僕も面倒な依頼だと思った。

だから、そう言うフィンさんは肩をすくめると、やれやれと言った感じで笑った。

そこから、数枚の依頼書を掲示板から剥がして、ギルドの窓口こそ

れ等を提出して、手続きをしてもらい、手続きをしてくれた受付の人にお礼を言つて、僕等は、アイズさん達との待ち合わせ場所であるバベルへと向かった。

第45・迷宮の楽園（アンダーリゾート）

「あつ！フィンとティオネと四葉が来た」

「僕達が最後だったか。待たせてすまない」

そして、僕とティオネさん、フィンさんがバベルから数十M離れた中央広場の広葉樹の一角についた時、そこにはすでに、アイズさん達が待っていた。

「四葉、これ、お願いできる？」

「うん！」

「あ、四葉、魔法の中に入れるのはダンジョンの中でね？」

「うん、わかった」

そこで、アイズさんとティオナさんが買ってきてくれていた直ぐに使わない分の回復薬類を預かった。

もちろん、この場で直ぐには「幻書の術」の中には入れない。

「準備は万端のようだね。じゃあ、そろそろ行こうか」

「ああ。この顔ぶれでダンジョンに潜るのも、久々だな」

「えへへ、私行く前からワクワクしてるもんね」

「ちよつとは自重しなさいよあんた？」

そして、フィンさんがぐるりと僕等を見て言うのと次にリヴェリアさんが、それに続いてティオナさんが言うのと呆れた顔のティオネさんがティオナさんに注意をした。

「アイズさん……私……その……今回もアイズさんと一緒に冒険ができて、う……嬉しいです！」

「！……私は……剣を壊したのは私の不注意……だから、ダンジョンに皆を付き合わせていいのかな……って、断るべきかなって、

ちよつと思つた。でも私は今、皆とここにいる・・・きつと私も、皆と行けて嬉しいんだと思う。」

「お役に立てるよう、精一杯頑張りますね!!」

「うん、ありがとう、レフィーヤ。頑張ろうね」

そんなテイオナさん達を見ていたレフィーヤさんは、くすりと笑つて、アイズさんに言うと、アイズさんも笑い返していたりと、皆、それなりにワクワクしているみたいだった。

それは、もちろん、僕も例外じゃない。

皆で行くと決まってから、すごく、ワクワクしていた。



「あー、やっぱり大双刃があると落ち着く」

「テイオナさん、作り直してもらっていた武器、完成したんですか？」

「うん！ウルガ二代目！できたてほやほやだよー！」

そして、ダンジョンに入ると早速とばかりにゴブリンやコボルトが現れて、すぐに追い払われた。

理由は簡単、前衛に配置されたテイオナさんとアイズさんがバツタバツタとモンスターを倒していったから。

そのあまりの瞬殺振りに敵わないと悟つてか、途中から僕等の前に出てくるモンスターが減った。

おまけに、他の冒険者達までその姿を消した。

そのお陰もあって、あつという間に上層を越えて、中階層の十七階層の半ばまで来れたし、僕の魔法も二つとも使い放題だった。

「ゴブニュ・ファミアリアの苦勞が目に見えかぶわね・・・はい、四葉」
「ん」

ちなみに、今は、アイズさんとテイオナさんが屠った、タイガーファンング」という虎のモンスターから、魔石とドロップアイテムをレフィーヤさんやテイオネさんと共に採取している最中。

「四葉、次は、弓で試してみようか？これも魔法有りと無しでね？」

「わかった。【テイクアウト】【ストレージ】

フツ

と、フィンさんの指示で、【幻書の術】の中から、弓を取り出して、それまで使ってた槍を【幻書の術】の中に直すと同時に魔法を解いた。

「四葉ちゃんも四葉ちゃんで、器用ですよね」

「??」

「本当に。団長の指示とはいえ、コロコロと武器を変えられて、魔法を解いたり使ったり」

その様子を見ていたレフィーヤさんが苦笑いを浮かべながら、僕に言う、テイオネさんもやれやれと言った感じで言う。

ぶつちやけ、テイオネさんの言う通り、僕は、フィンさんの指示で、モンスターと何戦かした後にコロコロと武器を変えて魔法を解いたり使ったりしていた。

そのお陰で、魔法有りと無しでどれだけ差があるのかを身をもって知ったし、僕の中での武器の好みも出来て来た。

一番はやっぱり、刀だけど、直剣や細剣もそれなりに使えた。

なんだか、アスナさんやキリトさんを真似てる感覚だった。

で、苦手なのが、大剣や斧。

なんだか、武器を使うと言うより、体の方が武器に振られる感じ。槍も大剣や斧と似た感じだけど、投げる分には、良いって感じだった。

「にしても、もう十七階層か。流石に早いね」

「目標額からすると、上層中層で入手できる魔石では話になりませんから」

「よしっ、襲って来るモンスター以外は、放っておいていい！どんどん先に進むぞー！」

「「おおー！！」」

前に深層で芋虫モンスター相手にいろいろな武器は使ったけど、使い辛さとかそう言ったものを思う余裕なんてなかった。

だから、フィンさんの指示は、すごく大変だけど、新しい発見が出るから楽しかった。



「おりやりやりりやー！！」

ドドドドドオオオン！！

「・・・」

ダアン

「ブモオウ!?」

ギイツ

「・・・」

ズパアン

ドスツ

「!?」

【第一段階限定解除】

フツ

ドスウンツ

「!?」

それから、十七階層の最奥にある大広間に到着した僕等。

そこで、ミノタウロスを始めとしたモンスター達で溢れてて襲いかかってくるミノタウロス達をテイオナさんは武器を振り回して、僕は

僕で、一体のミノタウロスの顔を踏み台に高く跳び上がるとそこから踏み台にしたミノタウロスを魔法無しで、別のミノタウロスを魔法有りで弓矢の餌食にした。

パシッ

「うしっ!!二代目大双刃絶好調!!」

「危ないわね、当たったら痛いじゃないの」

「痛いで済むんですか?」

「!?レフィーヤさん!前!」

「へっ?」

「よそ見をするなレフィーヤ!!来てるぞ!!」

「はっ・・・きゃあ!」

「ブモオオオオオ!」

「ひうっ!!」

ガッ

「!?」

「喉を突け!!」

「はいっ!!」

そうしてると、レフィーヤさんに向かってミノタウロスが迫って来るのが見えて叫ぶと、リヴェリアさんの指示でレフィーヤさんが自ら杖でそのミノタウロスの喉を突いてミノタウロスを倒した。

「レフィーヤ、お前は、遠距離からの魔法に慣れ過ぎたせいかな、敵に近づかせると慌てるクセがある。まずは心構えからだ。魔導士といえど近接戦は不可避と肝に銘じておけ」

「は、はいっ!!」

「そういうえば、ゴライアスいないけど、誰か倒しちゃったの?」

「ノー街の冒険者が総出で片付けたみたいだよ。交通が滞るからって」

その後、リヴェリアさんによるレフィーヤさんへの指導とフィンさんとテイオナさんの会話を聞きつつ、倒したミノタウロスから魔石を採取していく。

ちなみにだけど、本来、ここにはテイオナさんが言った通り、『ゴライアス』という『迷宮の孤王』階層主がいる。

アインクラッドでいう、フロアボスみたいな奴。

倒し方も似たようなもの上級冒険者で大規模なパーティーを組んで挑む感じとか特に。

けど、フロアボスとは決定的に違う事が一つ、フロアボスは一度倒すと現れないけど、ここの階層主は、一度倒しても二週間で復活する。一度倒すだけでも大変なのに、復活する度に倒してるなんて本当にすごいと思う。

「結構、いっぱいになったね」

「まだ、袋はあるよ?」

そう思いつつ、ミノタウロスから採取した魔石とかドロップアイテムとかを袋に摘めてるとフィンさんが僕の手元の袋を見て言った。

確かに、袋はいっぱいになった。

なったけど、それは一袋目がいっぱいになっただけで、【幻書の術】の中に予備の袋がまだあった。

「うーん、一度、換金していいこうか?」

「!?街行くの?」

「うん」

「やったー!!」

そして、そのフィンさんの判断を聞いて、僕はその場で飛び上がって喜んだ。

「フフフ、そういえば、四葉ちゃん、リヴェイラに行ったこと無かった

ですね?」

「うん、アキさん達に教えてもらったから有るのは知ってるよ!」

「何だ、アイズと来た時に行かなかったのか?」

「う、うん」

「じゃあ、なおさら行かないとね?」

「うん!!」

すると、レフイーヤさんには笑われ、リヴェリアさんには不思議そうにされた。

前の遠征の時にアキさん達から話は聞いたけど、行きはしなかったし、アイズさんと一緒に来た時も行かなかった。

だから、今回、始めて行くと知って僕はすごく嬉しかったんだ。

「よし!四葉、行くよ!」

「おぉー!!」

というわけで、僕は、片腕を突き上げて言うティオナさんの真似をしながら声を出すとティオナさんと一緒に先陣切って、大広間の奥の壁に空いた洞窟へと進んだ。

「なんなの、あのノリ」

「まあ、良いじゃないですか?楽し気で」

「うん、すごく楽しそう」

「まあ、四葉はわかるわよ?あの子、まだまだ子供だし、問題は、うちの実妹の方よ。何やってんだか、はあく」

たがら、ティオネさんが大きなため息を吐いたのも僕はもちろん知らなかった。



「ま、眩しい」

「ん〜、ようやく休憩〜」

そして、斜面になっっている洞窟を抜けたところで、頭上からそぞぐ太陽みたいな暖かい光に僕は手で傘を作って上を見上げた。

その僕の横でティオナさんが一段落ついたとばかりに伸びをした。

「いつ来ても綺麗ですね、この層は」

「うん、そうだね・・・」

この十八階層は、別名『迷宮の楽園（アンダーリゾート）』と呼ばれる場所で、前に遠征で利用した五十階層と同じくモンスターを産まない階層でダンジョンの中で冒険者達が初めて訪れる安全階層のため、冒険者達の間でそう呼ばれている。

「今はどうやら、昼のようだな。四葉、何故こうなるか、答えてみる」
「はい！・・・この階層の天井に無数の水晶が隙間なくびっしりと生え渡っていて、中心に太陽みたいに輝くいくつもの白水晶の塊とその周囲に優しく発光する青水晶の群れがあつて、それぞれが光を放つことで、『空』を作り出していて、この空の光は、時間の経過で水晶の光の量が落ちていき、『朝』、『昼』、『夜』の時間帯を作り出しています。また、その時間帯の変化は一定じゃなくて、地上とは少しずつつずれがあつて、その時差は大きくなったり小さくなったりと変動している」

と、洞窟から出て、僕と同じ様に手で傘を作つて、頭上を見上げていたりヴェリアさんから、突然、問題が飛んで来て、なんとなくノリで敬礼すると僕は前に教わつたことを口にした。

「よし、上出来だ」

「さあ、行こうか」

「うん！」

そして、リヴェリアさんから満足気な笑みと、フィンさんからのなか微笑ましいようなモノを見る目を頂戴し、僕は、皆と一緒に現在地である南の森の入り口から階層の西側にあるダンジョン内に存在する「街」へと足を進めた。

第46話・事件の始り

「四葉！あれが、リヴィラだよ」

「おお〜」

「あー、この街に来るのも久々のような気がするなー」

そして、十八階層の西にある紺碧色の湖畔にかけ渡された大木の橋を進み、その先にある島に入った僕等。

高所からこの階層の景観を眺めながら、僕はティオナさんが指し示した方を見た。

そこには、大陸の片隅を切り取ったかのような高く巨大な島があって、その頂上付近に、確かに「街」があった。



「……」

「あの、前々から気になっていたんですけど……門に書かれている三百三十四っていう数字って、もしかして……」

で、いぎ、木の柱と旗で作られた「リヴィラの街」のアーチ門の前に来た時、それまで、この街見たさにワクワクしてたけど、見た瞬間、ワクワクした気持ちが消え去ってしまった。

なんか、すごく気持ち悪く感じる。

「ああ、リヴィラの街が再築されてきた数だ。今は三百三十四の代……つまり過去に三百三十三回壊滅してきたことになる」

「さ、三百三十三回……」

「……」

そう感じているとその横で、リヴェリアさんがレフィーヤさんの質問に答えてるのを聞いた。

それは、そうか。

モンスターを産まない安全階層とはいえ、ここはダンジョン、突発的な異常事態がいつ何時起こるかわからないんだ、あの五十階層の時みたいに。

なんか、そう思うと、気を引き閉めなきゃって思う。

「突っ立ってないで、早く入りましょう?」

「・・・」

そして、テイオネさんの呼びかけで、僕は、アイズさん達と一緒に街へ足を踏み入れた。



「買い取り所で魔石やドロップアイテムを引き取ってもらって、それから・・・」

「宿はどうするの?またいつもみたいに、森の方へキャンプ?」

「ンー、今回くらいは街の宿を使おうか。野営の装備も持ってきてないしね」

「でも、団長・・・一週間も寝泊まりすれば結構な金額になると思いますがよ?ここはリヴィラなんですから・・・」

天幕や木の小屋、あるいは出店風の多くの商店が並ぶ通りを通り、天然の洞窟を活用した酒場の前を通り過ぎた所で、レフィーヤさんが今後の予定を確認するように口を開いた。

「テイオネ、ケチ臭ーい。いーじゃん、たまにはさー」

「ケチ臭い言うな!!あんたはずばら過ぎんのよ!」

「良いよ、宿代は僕が全部出そう。アイズ達はお金を貯めなきゃいけないみたいだしね」

「・・・ごめん、フィン」

「こんな時くらいしかお金を使う機会がないから、大丈夫だよ」

そこからのティオナさんとティオネさんのやり取りとか、それに笑みを漏らしながらフィンさんがそう提案するのも、アイズさんがそれに謝るのも、間近で見ているはずなのに、なんだかテレビの向こう側をてるような変な感覚になった。

と言うか、そのやり取りを気にしている余裕が今の僕には何故か無かった。

「……四葉？」

「……」

ふと、名前を呼ばれて、そちらを見た。

「どうした？」

「……ううん」

そこには、リヴェリアさんがいて、僕は、ただ、首を左右に振るだけで答えた。

「……リヴェリアさん」

「ん？」

「手、貸して？」

「……ほら」

「あ、ありがとう」

そして、本当は、こんなことお願いしちゃいけないだろうけど、誰かに手を掴んでいて欲しかった。

一瞬、考えた素振りを見せたリヴェリアさんは、僕が望んだ通り、手を貸してくれた。

「リヴェリア・・・？四葉、どうかしたの？」

「わからん。もしかしたら、街の雰囲気当てられたのかも知れん」
「街の？・・・そういえば、いつもより人が少ないような・・・」

その僕等の様子に気付いたアイズさんがリヴェリアさんに声をかけると、リヴェリアさんは僕の手を握ったまま周囲を見回して言った。

その言葉にレフィーヤさんも周囲を見て、言った。

僕には、この平均的な人数はわからないから、多いとか少ないとかよくわからないけど、何度も来たことがありそうなレフィーヤさんが言うんだから、そうなんだろう。

「えーと・・・どうする？」

「ひとまず、どこかのお店に入ろうか。情報収集も兼ねて、街の住人と接触してみよう」

そして、テイオナさんの言葉にフィンさんが答えて、僕等はその場から移動した。



「四葉、魔石とドロップアイテムを出してくれるかい？」

「う、うん。【テイクアウト】」

ドロップ

ドロップ

「ありがとう」

それから、天幕で出来たお店の少し手前で僕は、フィンさんに言われた通り、【幻書の術】の中からここまで来た時に手に入れた魔石とドロップアイテムの入った二つの袋を取り出した。

うし、行ってみればすぐにわかるんじゃないかい？」

そして、そのリヴェリアさんへの返答を最後に、店主の人は黙々と魔石とドロップアイテムの鑑定を進め、買値を提示した。

僕が見ても無茶苦茶、破格の安値だった。

多分、話してくれた情報の対価も含まれているんだろ。

「うん、それで頼む」

「まいど」

その証拠に、なんの文句も言わずに、フィンさんはそれ等を売り払ったし。

その買い取りが終ると、僕等は天幕を出た。

「……どうしますか、团长？」

「街で宿を取る以上、無関心でも無関係でもいられないだろう。行ってみよう」

そこでテイオネさんがフィンさんに尋ね、フィンさんはテイオネさんにそう返すと、歩き始め、僕等もそれに続いた。



「うわ、ちよつとこれ、進めなさそう……」

「宿の中はっ、入れないんでしょうか？」

そして、店主さんから聞いた通り、街の上の方に向かうと、沢山の人達がたいして広くもない路地に密集して人集りを作っていて、その先に洞窟の入り口らしきモノが見えた。

今は傾いてしまっている壁には、看板がかけられていて、そこにこの世界の共通語で「ヴェリーの宿」と書かれていた。

きつと、この宿が、さつき話に出てきた宿屋なんだろう。
そこから中からざわめきが聞こえてくる中、ティオナさんとレフィー
ヤさんが首を伸ばしている中、ふと、人集りを作ってる人達の足下を
見た。

「僕、見てくる」

「えっ?」

僕の体格なら、通って中に行けると思った。

ポンッ

「!?」

「ううん、僕が見てくるよ。四葉はリヴェリア達とここにいてくれ
?」

クシヤクシヤ

「・・・う、うん。気を付けてね?」

「うん、じゃあ、行ってくるよ」

テテテ

「「おおく!!」」

「団長!?待って下さい!!ちよつと、あんた達道あけて・・・!!団長が
一人で危険地帯に・・・お願いだから聞こえてるでしょ・・・!団長
が・・・ねえ・・・!」

思っで行こうとしたけど、その前にフィンさんに頭を撫でられて、
止められ、そんな僕の変わりに、フィンさんが四つん這いになって、人
集りの足下を縫ってすると奥へ入っていく。

それをアイズさんやティオナさんが感心して見ると、ティオネさ
んだけは取り乱していた。

「道あけるって、言っただろ!?はっ倒すぞ!!」

ゴガアアン!!

「ひっ!？」

ガバッ

「!？」

ザッザッ

「ひっ、【ロキ・ファミリア】・・・!？」

そして、すごい形相と叫びと地面を砕かん勢いの地団駄に僕を含めたりヴェリアさん達を除く冒険者の人達が怯え、僕は、思わず、ヴェリアさんに抱き付き、他の冒険者の人達は一齐に左右に解れて道を開けた。

「・・・」

「団長く、私もお供しますく」

「ああ・・・ほどほどにしてくれよ・・・」

その中心にポツリと座るフィンさん。

そんなフィンさんに嬉しそうに近寄っていくティオネさん。

「・・・私達も、行くぞ」

「は、はい」

「う、うん」

「・・・ティオネ・・・」

そのなんともいえない気まずさに、ヴェリアさん達は僕を引き連れて、ティオネさんに続いて人込みを進んで洞窟の、否、宿の中へと進んだ。

第47話・第二級冒険者の死

「……」

「これ……」

「……ああ」

入り口をくぐって中を進んでいると、血の臭いに混じって、今まで感じたことのない臭いを感じた。

よく知らない臭いだけど、なんとなくこの臭いの正体をフィンさん達の反応から察することが出来た。

これは、きつと、人の、否、人だったモノの臭い。

「……っ!」

「見るな、四葉」

「見ないで、レフィーヤ」

そして、一番奥にある一つの部屋に入った瞬間、僕の視界からリヴェリアさんが、レフィーヤの視界からアイズさんがそれぞれ、そこにあつたモノを遮った。

けど、それはちよつと遅かった。

レフィーヤさんはわからないけど、僕は、バツチリ見てしまった。

真っ赤に染まったその部屋を。

そして、その床に横たわる頭部を失った下半身だけ衣服を纏った男の人の死体を。

「……」

「……四葉」

震えが止まらなかった。

無造作に投げ出された手足からも大量の血の海に浮かぶ薄紅色の肉片からも視線を外したいのに、こびりついて離せなかった。

ポフッ

「!？」

「・・・すまない」

フワッ

「!？」

すると、いきなり、僕の視界を緑色のモノが覆った。そして、すぐに僕の体が優しく宙に浮いた。

「レフィーヤ、四葉を連れて、宿の外で待っている」

「は、はい」

「!？」

カシッ

「!」

それが離れて行きかけた時、僕は、思わず、掴んだ。リヴェリアさんの服の袖を

ポンッ

「!？」

「外で待っている」

「うん、レフィーヤと一緒に外で待ってて？四葉」

「はい、私と外で待っていきましょう？四葉ちゃん」

すると、そのリヴェリアさんの手が僕の頭に乗ると、今まで見ていた中で一番優しい顔でリヴェリアさんは言った。
そして、アイズさんとレフィーヤさんも。

「うん。【ストレージ】」

「よし、良い子だ」

「では、行きましょ」

それで、リヴェリアさんの服の袖から手を離して、武器を【幻書の術】の中に武器を入れた僕は、レフィーヤさんの体に片耳を押し付けた。

トクントクン

「・・・レフィーヤさん、ごめんなさい。こうしてて良い？」

「仕方がないですね、特別ですよ？」

「うん、ありがとう」

そこから聞こえてくる生きている音。

それを聞いていると、すぐに落ち着けるような気がして、レフィーヤさんに聞いてみた。

少し、苦笑いを浮かべてはいたけど、レフィーヤさんは許してくれて、その事に感謝しつつ、僕は、もう少しだけ強めに耳を押し付けた。

「おいてめえ等、ここは立ち入り禁止だぞ!? 見張りの奴は何やってやがんだ！」

「!」

そこに入り口の方から、悪人っぽい顔の黒い眼帯をした上半身はノースリーブの戦闘衣を着た筋肉隆々の男の人が怒りながら、こつちに来た。

「やあ、ボールス。僕達もしばらく、街を利用するつもりでね。早期解決のため、協力させてもらいたいのだけど、どうだろう？」

「けっ、ものは言いようだな、フィン。てめえ等といい、フレイヤ・ファミリアといい、強え奴等はそれだけで、何でもできると威張り散らしやがる」

「アイツ、自分の事、柵に上げてない？」

「お、落ち着いてください」

ボールスと言う人は、どうやら、知り合いらしく、そして、僕等がと言うか、フィンさん達がいることが相当不満らしい。

不遜な口振でフィンさんに話しかけるボールスさんを睨み付けるテイオネさんを汗をかきながら必死に宥めるレフイーヤさん。

なんか、このボールスさんの登場で、ここから出ていく術を失った気がする。

「それで、どうなっているんだ？この冒険者の身許や、手にかけた相手について何かわかったことはあるのかい？」

「ああ・・・くたばった野郎は、ローブの女をここに連れ込んできたフルプレート冒険者だ。兜まで被っていたから顔はわからねえが、連れの女が消えているから、犯人はそいつで間違いないねえ・・・そうだな、ヴィリー？」

「ん、少なくとも俺はこの部屋にその男と女しか通していねえよ、ボールス。昨日の夜に、二人で来てよ。どっちも顔を隠して、宿を貸し切らせてくれて頼まれたんだ」

そうしながら、フィンさんとボールスさんと、それから、部屋の中から聞こえてきた声の主の会話を聞いた。

「たった二人なのに、客室を全て貸し切り・・・ああ、そういうことか」

ドクツ

ボンツ

「っ!!」

「??」

そしたら、急にレフイーヤさんの心臓の音が急に跳ね上がった。顔の方を見れば、顔は真っ赤だし。

「ああ、そういうことだ。うちの宿にはドアなんて気の利いたもんはないからよ、喚けば洞窟中にダダ漏れだ。やろうと思えば覗き放題だしな」

「レフイーヤさん、どういう意味??」

「へっ?」

「レフイーヤ、わかるの?」

「わわわわわわかりません!!」

多分、フィンさん達の会話を聞いてそうだったんだろうと思って、僕にはいまいちわからなかった事だから、レフイーヤさんに聞いてみた。

そして、アイズさんもレフイーヤさんに聞いたら、全力で首を左右に振って、レフイーヤさんは答えることを許否した。

「まあ、男の浮かれたような声に何しに来たのかわかっちゃまったかな、こっちは白けたが、もらうもんはもらっちゃったし・・・くたばっちゃまえなんて思いながら部屋を貸したら、このぎまだ。ぞっとしちまったよ」

「そのローブの女の顔は見てなかったのかい?」

「フードを目深に被ってたんだ、男と同じで、顔は全然わからなかった。・・・あー、でも、ローブの上からでもわかるくらい、めっちゃくちゃ良い体してたな。ああ、思わずむしゃぶりつきたくなるような女だったぜっ」

「ああ、実は俺様も街中でちらっと見かけたんだが・・・ありやあーいい女だ。顔は見えなかったが、間違いねえ」

その後の会話も意味わからなかったけど、ただ、とんでもなく下品な会話をしていると言うことだけは、テイオナさん達が送る無茶苦茶冷たい視線だけで理解した。

「・・・でもさあ、自分のお店なのに、部屋で何があつたのかわからなかつたの？あの入り口の前のカウンターにずっといたんでしょ？」
「勘弁してくれよ。あんないい女を連れ込んで部屋から声が聞こえてきたら、妬みやらなんやらでおかしくなっちまう。満室の札を店の前に置いて、俺はさっさと酒場に行っちまったよ」

そして、テイオナさんの疑問に、ヴィリーさんが答える。

「その様子だと、ローブの女の日撃者は誰もいないみたね？」

「おお、全くいねえ。子どもにも聞き込みをやらせてはいるが、今のところ何も手がかりはなしだ」

続いて、テイオナさんの問いにボールスさんが答え

「やつ・・・宿の支払いは、証文はどうですか？迷宮探索では、荷物になる金貨の代わりに証文で取り引きますよね。それを見れば、ファミリアのエンブレムも冒険者本人の名前も書かれているのでは？」

「あるなら話は早いんだけど・・・ね？」

「いや・・・その・・・悪い、破格の魔石をどんっと渡されちまって、それで、済ませちゃった」

「えー手詰まりってこと？」

そして、レフィーヤさんの問いにヴィリーさんが答える。

何度も言えない手詰まり感。

「まあ待て、今からこの野郎の体に直接聞くところだ。おい！開錠薬はまだか!？」

「ボールスさん、持って来ました!!」

そこで、ボールスさんは廊下の向こうに向かって声を張り上げた。

するとすぐに、一人の赤い液体の小瓶を持った人と獣人の男の人が駆け付けてきた。

「レフイーヤさん、開錠薬って、何？」

「えっと、確か・・・」

「眷族の恩恵を暴くための道具だ。正確な手段を踏まねば、それ単体だけでは神々の錠は解除できないがな」

「・・・」

聞き覚えの無い単語だったから、レフイーヤさんに聞いてみると、その隣まで来ていたリヴェリアさんがレフイーヤさんの代わりに答えてくれた。

きつと、こんなところに持ち出してくるくらいだから、解除が出来ないなんてことは無いんだろうと思う。

「あーいう技、どこで覚えて帰ってくるんだろうね・・・」

「冒険者が金にがめつくして何でもする物好きなのは、今に始まったことじゃないでしょ」

そして、呆れ顔のテイオナさんと半眼を作るテイオネさんの視線の先で、獣人の小男の人が、死体の背中に液体を垂らして、淀みなく指を走らせていくと、それが浮かび上がってきた。

「ボールス、できた」

「おう、でかした」

小男さんが退く中、ボールスさんがこじ開けられたステイタスを見ようと、死体の人の背中を見下ろす。

パシン

「いけねえ、ヒエログリフが読めねえ・・・おいお前等、外に出て、

もの知ってそうなエルフを一人二人連れてこい！」

「待て。ヒエログリフなら私が読める」

「私も」

すると、その背中に書かれている神様の文字が読めなかったボールスさんは自分の頭を叩くと声を張り上げる。

けど、誰かが走り出す前に、リヴェリアさんとアイズさんが口を開き、眼を丸くしたボールスさんは二人に道を開けて、二人も進み出て、リヴェリアさんが死体の側で片膝をついて、アイズさんは立ったままの姿勢でその背に刻まれたヒエログリフを解読し始める。

「名前はハシャーナ・ドルリア。所属は……」

「……ガネーシャ・ファミリア」

そして、二人がその名前と所属ファミリアを口にすると、一瞬、この場から音が消え去った。

「ガネーシャ・ファミリア!？」

「おいつ、間違いじゃないのかよ！」

その次には、騒然とした。

ボールスさんやヴィリーさんが悲鳴のような声を上げる。

アイズさんやリヴェリアさんもその背のステイタスから視線を縫い付けたみたいに動かないし、そんな二人の張り詰めた様子にフィンさんもテイオナさん達も目を見開いているし、僕だって、ガネーシャ・ファミリアくらいは知っている。

怪物祭を主催したファミリアだ。

「冗談じゃねえぞー!【剛拳闘士】つつつたら、レベル四じゃねえか!？」

「……」

けど、皆が驚いているのは、そのファミリア名じゃなく、本人の事。レベル四といえば、第二級冒険者でそれなりの強さがあるって事。それをローブの女は、殺した。

つまり、その女はハシャーナさんと同じレベルか、それ以上って事。アイズさん達の口からもたらされ、導き出されたその事実には、この場が一瞬にして凍りついた。

第48話・推理と調査の開始

「・・・ほ、本当に、この人は力づくで殺されてしまったんでしょうか？その、毒とか」

「身動きをとれなくなったところで、息の根を止められたってこと？」

「アビリティ欄には『耐異常』もあるから、多分、違う・・・」

「ハシャーナほどの実力者なら、劇毒を盛られてとしても、さほど効き目はないだろう」

その場にいる多くの人達を取り乱す中、アイズさん達はそれぞれの表情を浮かべ、ハシャーナさんを見下ろし、テイオネさんに尋ね返されたレフイーヤさんはぎこちなく頷く。

その答えとして、アイズさんとリヴェリアさんが答えた。

確かに発展アビリティに『耐異常』があつて、おまけにGの評価ならほとんどの異常効果を無効にするだろう。

「情事に乗じることで油断させていたとはいえ、第二級冒険者の寝首をかける女、か・・・」

「・・・イシユタル・ファミリアのところの戦闘娼婦？」

「んー、そうだったとしたらわかりやすくていいんだけどね、まあ、疑ってくれと言っているようなものかな」

「そうよ、あからさま過ぎるじゃない」

そして、フィンさんやテイオネさん、テイオネさんが、そんな話をしていた時だった。

「そ、それらしいこと言ってるけどっ!!今ちようど街にやって来た顔をして、本当はお前等の誰かがやったんじゃないか!？」

「なるほど・・・第二級冒険者を殺れる女なんてめつたにいいえ・・・だが泣く子も黙るロキ・ファミリアなら・・・」

「え〜？」

ボールスさんの取り巻きの一人が半狂乱で僕等に指を向けた。そうするとボールスさん達は一斉に振り向き、言った。テイオナさんと同じく、僕も、*「え〜」* と思って思った。心外すぎる。

「こいつらがやったとすると・・・」

「ああ、まずフィンはあり得ねえ・・・」

そして、ボールスさん達はまず最初に男の人であるフィンさんを容疑者から外し、僕を含めたアイズさん達の体を見た。

まず最初に、アイズさん、レフィーヤさん、レフィーヤさんに抱っこされてる僕へと視線が移り、リヴェリアさんとテイオナさんに彼等の目が止まる。

「こいつはないな」

「ああ、ないない、全っ然ない」

「うぎーっ何処見て言ってるだー！！！！」

特にテイオナさんの胸元辺りを凝視した彼等は、同時に頷いてそんなことを言い出し、それにブチキレたテイオナさん両手を振り上げて暴れようとして、それをアイズさんが羽交い締めにして止めていた。

「・・・その体を使えば、男なんていくらでもたらし込めるだろうなあ？」

「ああ？」

ダアン！！

「【テイクアウト】」

「!？」

そんな風にばたばたと部屋の一角が騒がしくなる中、ボールスさん達の目は、ティオネさんに向けられた。

その鼻の下はだらしなく伸びきっていた。

なんか、その姿とか一連の流れとか、なんか、凄くムカついた。

「私の操は団長のものだって言ってるんだろ!! てめーらなんて知るか!! ぶぎけたこと抜かしていると、その股ぐらにぶら下がってる汚えもんを引き千切るぞ!」

「「「ひいいいゝつ!!」」」

そんな彼等に対してティオネさんは目を開き、とてつもなく怖い顔で、憤怒の炎を爆発させ、凄まじい罵詈雑言の嵐が彼等に炸裂して、彼等は、盛大に顔を青ざめて内股になる。

そんなある意味情けない格好になってる彼等に向かって

ガシッ

「!」

「コラッ! 四葉ちゃん、これで何をしようとしてるんですか!」

投げようとしたら、その前にレフィーヤさんに止められた。

「だって、アイズさん達を変な目で見るから」

「気持ち嬉しいですけど、クナイ何て投げたら、第二の事件現場ですからね! やめましよう?」

「はーい。【ストレージ】」

仕方がないので、そのまま、出したばかりのクナイを【幻書の術】の中に戻した。

ポンポンッ

「!」

「へへへ、良い子、良い子」

「うん、四葉は、良い子」

その代わり、左右からテイオナさんとアイズさんに頭を撫でてもらった。

「・・・あー、ボールス。ご覧の通り、彼女達には異性を誘惑できる適性がない」

「お、おおう・・・疑って悪かった、す、すまん」

「二度この場を検証したい。ものに触れるけど、いいかな？」

「ああ、もう好きにしろ」

僕等がそんなことをしていると、フィンさんが疲れ切ったように伏し目になりつつ、情けない格好のままのボールスさんに言うと、気を取り直して、あらためて室内を見回した。

そこで、もう自分には手に負えないと思ったのかボールスさんはフィンさんにこの現場の権利を譲り、フィンさんはリヴェリアさんと一緒にハシャーナさんの周りを整理していく。

「死因は頭部の破壊・・・いや、どうやら最初に首の骨が折られているな」

「首を折って殺害した後、頭を潰したということか？」

「恐らくは」

その間、僕は、アイズさん達や他の人達と共に部屋の一角にまとめられ、フィンさんとリヴェリアさんの事を見守った。

「何か目的があったのか・・・それとも」

「ローブの女は、ハシャーナの特定の荷物を狙って近付いたのかもしれないね」

「おー、わかりやすくいいなあ。それでハシャーナの野郎はまん

まと色仕掛けに乗って、殺されちまったってわけだ」

「この荷物の状態を見るに・・・焦っていたというより、相当苛立っていたようだな」

フィンさん達は、部屋の隅にあるハシャーナさんのバックパックを見て、残った荷物を軽く確かめる。

物色された跡のあるバックパックは派手に荒らされていて、フィンさん、ボールスさん、リヴェリアさんの順で声が続き、アイズさんも荷物のもとまで歩み寄り、ソレを覗き込んだ。

「その特定の荷物が見つからず、瘡癩を起こして死体に当たった・・・筋は通りますね」

「なんかテイオネみたいだねー」

「私だってこんなことしないわよ!?!一緒にするな!」

強引に引き裂かれているようなバックパック。

そのバックパックの有り様を見て言うテイオネさんにテイオナさんが言う、テイオネさんがテイオナさんに向かって吠えた。

「ンー?」

「なにそれ?」

「冒険者依頼の・・・依頼書ですか?」

そんなテイオナさん達を放っておいて、フィンさんは何か手がかりはないかと荷物をあさり、その中から一枚の血塗れの羊皮紙を取り出した。

見守っていたアイズさんの横から、テイオナさんとレフィーヤさんが顔を出したので、僕もその羊皮紙を間近で見た。

「三十階層・・・単独で、採取・・・内密に・・・」

「・・・」

「ハシヤーナは依頼を受け、 “何か” を三十階層に取りに行つて来た……？」

その羊皮紙を開くと、大半の文字を飛び散った血に汚れていて、ちやんと読むことは出来なかつたけど、いくつかは読むことが出来た。

それ等をフィンさんが読み、やがて、僕等を代表して推理したソレを独り言のようにフィンさんは呟き、それを聞いて、僕は、ふと、思った。

「ねえ、ハシヤーナさんが、三十階層から取つて来た “何か” って何処にあるんだろう？」

「えっ？」

「そもそも、その女の人がハシヤーナさんを殺しに来たのって事は、“ハシヤーナさん” が、“何か” を取つて行った事を知つてたからでしょ？けど、無かつた。じゃあ、その “何か” は何処？」

それは、ハシヤーナさんが、三十階層から取つて来た “何か” の行方だ。

「もしかしたらただけど、その依頼書に関わつてる人。受け取り人役みたいな人がいるのかも」

「何処かに、預けてるってことは？」

「依頼人がそうしないと思う。だって、ハシヤーナさん個人に依頼を出して、ファミリアにも内緒で、単独で行くように依頼をしている程注意深いし、もしもの事を考えて、受け取る役を立てても可笑しくないと思う」

そんな僕の考えが正しいかどうかは解らないけど、僕は、皆の前でその考えを話した。

「四葉の考え方も一理あるか」

「レフィーヤさん、ごめんね?・・・【第二段階限定解除】」

「きゃっ!?!」

けど、その考えに至ると、本当に早く犯人を見付け出さなきゃって思った。

この場が怖いとかそんなことを言ってられないって思った。

そして、ここで初めて【擬人化解除魔法】の二段階目を使った。

一段階目と同じく白い煙と花びらに覆われていく僕の体。

モゾツ

スタン

ピトツ

スンスンツ

「・・・」

それが収まると、僕は、レフィーヤさんの腕の中から飛び降りるとハシヤーナさんのバックパックに鼻を押し当てた。

「か、可愛い」

「はい」

「ちっちゃい四葉が更にちっちゃくなくなったよ」

「ほお、これがもう一つの形態と言うわけか」

「な、なんなんだ?てめえんとこの餓鬼はよ」

「僕も、この子のこの姿を見るのは初めてさ」

そうしてると、アイズさん達がそれぞれの反応をする。

サワサワ

「・・・」

「それで、四葉?何をしてるんだい?」

スンスンツ

「ハシャーナさんの、臭い、嗅いでる。ハシャーナさんの臭い、覚えて、犯人と荷物、探す」

フィンさんも僕の頭を撫でながら聞くから、僕は、ハシャーナさんのバックパックに鼻を押し付けて、スンスンしながら答えた。

「なるほど、そういう手があるか。ボールス、一度街を封鎖してくれ。リヴィラに残っている冒険者を出さないでほしい」

「まだ犯人が何気ない顔で街を出歩いてるってのか？俺様だったら、とつくにトンズラこいてるがなあ」

「ハシャーナほどの人物が極秘に当たる依頼・・・犯人が探しているものは、よほどの代物だった筈だ。殺人まで犯してる。もしまだ確保できていないとしたら。手ぶらでは帰れないだろう。きつとまだいると思うよ・・・勘だけだね。なら、この子の方法も試してみたいじゃないか」

「わかった。てめーら、北門と南門を閉めろ！それから街の中の冒険者を一箇所に集めるんだ。従おうとしねえやつは、犯人だと決めつけて取り押さえちまってもいい。ヴィリー、新しく街に来た冒険者には事情を話して別のところにまとめとけ」

「わ、わかったっ」

そして、ボールスさんにその要請を出してフィンさんはペロリと右手の親指を舐めた。

その要請を聞いたボールスさんはヴィリーさん達に指示を出し、この場は一気に慌ただしくなった。

「なんだか、すごいことになってきたね」

「うん・・・」

「ここまで来たら、ハシャーナの弔い合戦ね。絶対に犯人を捕まえるわよ」

「は、はい」

アイズさん達も動き始め

「四葉、行くよ」

ヒョイツ

「!？」

「臭いを覚えるなら、一つあれば十分だろう」

そして、僕も。

フィンさんに抱えあげられる形で宿の外に出て、ボールスさん達が冒険者を一箇所に集めるのを待つ間、フィンさんとリヴェリアさんと街の中心の所で、申し訳ないけど、リヴェリアさんがハシヤーナさんのバックパックから拝借して来てくれた物に鼻を押し付けて、そこに残るハシヤーナさんの臭いを覚える作業を続けた。

第49話・ルルネ・ルーイ

ザワザワザワ

「すごい人」

「集まるのが早かったね」

ボールスさんによって封鎖命令が下されたリヴィラの街は、力自慢のドワーフの人達によってアーチ門前に鎮座していた大岩が押し出され、街の二つの出入り口が塞がれた。

そして、同じくボールスさんの要請で“水晶広場”と呼ばれる街の中心地に集められた五百人も人達は皆が皆、不安そうで恐怖を抱いている様子だった。

「呼びかけに応じねえ奴は、街の要注意人物一覧に載せるとも脅したからな。そうなりやどこの店でも即叩き出しだ。この要所を今後も利用してえ奴等は、嫌々でも従うつてもんよ」

「それに、一人でいるのは恐ろしい、か」

「ああ」

その人達を見ながら、フィンさんは眩き、フィンさんの眩きにボールスさんは頷く。

そんな二人と広場に集められた人達から、視線を外して、僕は、背後に双子のように寄り添って立つ大きな白水晶と青水晶の柱の側に運び込まれた、血塗れのフルプレートを始めとしたハシャーナさんの私物に視線を移し、手元のリヴェリアさんが持ち出してくれたハシャーナさんの私物に視線を移した。

「お前等以外の第一級冒険者が見つかりやあ、わかりやすかったんだがな・・・」

「最初から騒動を起こすつもりでいたんだろう。変装をしているか、あるいは公式のレベルを偽っているのか・・・安易に疑われない

対策の一つや二つは取っている筈だよ」

「相手も馬鹿じゃねえか」

「四葉」

「ん？」

そうしてるとテイオナさんが僕の名前を呼んで側でしやがみ込んだ。
だ。

さわっ

「！」

さわさわっ

「この人数を調べるの、大変そうだけど、大丈夫？」

そして、そのまま、僕の頭から背中にかけて、一撫ですると背中を重点的に擦りながら、テイオナさんは言った。

「うん、でも・・・」

さわっ

「！」

さわさわっ

「ここからもっと、数を絞れるから」

「はえ？」

すると、そこにアイズさんも加わって来た。

そのアイズさんの返答に目を丸くするテイオナさん。

「ハシャーナさんを襲った人は、女の人の筈だから・・・」

「あ、そっか！女の冒険者だけを調べればいいんだ！」

「それくらい気付きなさいよ、あんた・・・」

「付け加えるなら、男の欲情をそそるような体の持ち主、という点だな」

「それなら楽勝じゃん！良かったね？四葉」

そんな二人の会話にテイオネさんとリヴェリアさんが加わって、テイオナさんが嬉しそうに僕の背中を撫でる。

確かに、女の人は対象だし、ここに集まった全員を調べる訳じゃない、けど、僕は女の人だけを調べるつもりは無かった。

「いや、男の人も探すよ？」

「はあ？」

「えっ？」

「へっ？」

「もちろん、全員じゃないけど」

「ほお」

だから、僕は、そう言った。

すると、テイオナさんとテイオネさんは声を揃えて、アイズさんとレフィーヤさんも意味がわからないと言わんばかりに、小首を傾げ、リヴェリアさんが感心したかのような声を出した。

「なら、お前が調べるのは？」

「女の人達はもちろんだけど、ハシャーナさんと同じフルプレートの人とか、体型を隠せそうな格好をしている人達。僕の知り合いのお姉さんがね？そうだったの。リーテンさんっていうんだけど、その人、すごく可愛い感じの人なのに、初めて会った時は、リーテンさんが装備してるプレートアーマーのお陰で、声を聞いても男の人か女の人かわからなかった。だから、犯人が女の人だって言うなら、そういう格好をしている人を探すべきだって思ったの」

「なるほど、お前の経験則も伊達にできんな」

そして、僕は、聞かれたこともあって、僕の調査対象とその理由を話した。

「行けそうか？」

「うん、行ってくる」

「行つてらっしゃい、四葉」

その後は、僕は、早速、フィンさん達の手によって男女に分けられていく人達の中に紛れ込んだ。

スンスン

「・・・」

タツ

そして、一人一人の足元を嗅いでいく。

「・・・後は、あの餓鬼が嗅ぎ当ててるのを待つだけか？」

「うーん、【ステイタス】・・・レベルを確かめさせてもらうのが一番手っ取り早いけど、流石にそれは秘匿の規則に違反するし、我が物顔で調べれば、都市中の【ファミリア】から反感を買ってしまうからね、あの子を待つ他は・・・」

そうやって、集まった人達の足元でチョロチョロし始めた僕を見て、なんだか、つまらなさそうな声色で言うボールスさん。

「半分くらいの人数は、僕等が、無難に身体検査や荷物検査をするのとくらいかな？」

「うひひっ、そういうことなら・・・」

そんな僕の様子を見ながら、フィンさんはそうボールスさんに助言した。

その助言を聞いて嫌らしく笑ったボールスさんは

「ようし、女どもお!? 体の隅々まで調べてやるから服を脱げーッ!!」
「「「おとおおとおおとおおとおおとおお!!」」」

「はあ!?」

「ふぎけんなーっ!」

「死ねーっ!」

そう要請をした。

すると、ほぼ全ての男の冒険者達が熱烈な歓声を上げた。

そんな俄然やる気をみなぎらす男の人達に女の人達は口々にそんな言葉を浴びせる。

「馬鹿なことを言っているな。お前達、我々で検査をするぞ」

「はーい」

「うん」

「男共の団結力ってなんなの?」

「わ、わかりましたっ・・・それじゃ、こちらに並ん、で・・・」

それでも雄叫びを上げる男の人達を放っておいて、リヴェリアさん達が女の人達の検査を開始しようとした。

「フィン、早く調べて!」

「お願い!」

「体の隅々まで!!」

「・・・」

が、その前に、多くの女の人達がずらりとフィンさんの前に長蛇の列を作り、フィンさんに詰め寄っていた。

「あ・の・アバスレどもっ・・・!」

「ちよつとお、ティオネー!」

「離しなさいっ!?! 団長が変態共に狙われているのよ!?!」

「鏡見てから言いなよー!!」

そして、フィンさんに殺到する女の人達を見てブチ切れるティオネさん。

そんなティオネさんを必死に羽交い締めにするティオナさん。

「フィンが押し倒されたぞー!」

「いや、お持ち帰りされたー!!」

「うがああああああああああああああああああ!!」

その後の、男の人達の悲鳴とか、フィンさんが連れ去られていく姿とか、それに怒り狂ったティオネさんがティオナさんの拘束を振り解く光景とかを僕は、なんとか踏まれないように気を付けながら、呆れて見てた。

「うん、と・・・」

「ああ、もう何が何だか」

犯人探しはどうなったのかと、思ったけど、良いように考えようと思っただ。

ある意味じゃ、僕の中で調査対象が大幅に減ったから。

だって、人を殺した後で、フィンさんに群がる女の人達みたいな反応は、無いと思っただから。

そして、体型を隠せる格好をしていても、他の男の人達と一緒に雄叫びを上げた人達も全員、調査の対象外にした。

ジリッ

「・・・?」

そんな時、ふと、一人の人の足が動いた。
前にじゃなく、後退りするみたいに。

「・・・」
「・・・」

その足の持ち主は、小麦色の肌をした犬人の女の子で、その腕には中型のポーチを抱えて、その顔を青白くさせ、怯えたように震えていた。

他の人達とは、まったく、違った反応だった。

おまけに、この人から、ハシヤーナさんの臭いが他の人達より色濃く感じる。

バツ

「!?!」

ダアン!

そして、その人は後退りした後、この集団の混乱を利用するように、素早く広場から逃げ出しはじめ、僕は思わず、飛び付いていた。

「・・・四葉?」

「アイズさん?・・・あつ」

「行こう」

「は、はい!」

その事に遠目からでも気付いてくれたアイズさんとレフィーヤさんが後を追いかけてきてくれた。



「はっ、はっ・・・!?!」

「・・・」

「はっ、はっ」

そして、階層全体が暗くなり始めた頃、息を切らしながら背後を振り返る女の人。

だから、僕も自然と振り返るんだけど、その視線の先には、アイズさんとレフイーヤさんが追い掛けて来てるのを見た。

「はあ、はあ」

「はあ、はあ」

「!?あれ?一人足りない?」

けど、その次の瞬間、アイズさんがいなくなってレフイーヤさんだけになった。

スタツ

「・・・」

「えっ!!?」

と思ったら、アイズさんが前方に立ち塞がるように現れ、一本道なこともあって、レフイーヤさんとアイズさんではさみ撃ちにされている感じだった。

ヘナヘナヘナ

「・・・」

ペタン

そんな状況に女の方は腰を抜かしたのか、へなへたと座り込んでしまった。

「はあ、はあ・・・はさみ撃ち大成功ですね。流石は、アイズさん・・・！四葉ちゃんも」

「えっ?」

「ううん、レフィーヤが、頑張ってくれたおかげだよ」

そして、レフィーヤさんが息を切らしながら、アイズさんはゆつくりと歩きながら、女の人に近寄り

ヒョイツ

「!」

「四葉もご苦労様」

「ええっ!!何時の間に!」

女の人のふわふわな黒髪の頭から、アイズさんは僕を引き剥がした。

それを見てビックリする女の人。

薄々気付いてはいたけど、アイズさんとレフィーヤさんから逃げるのに必死で僕がくっついていのに気付かなかったみたい。

「事情聴取は・・・私達がするより団長達に任せの方がいいですね」

「うん、広場に戻ろう」

「やめてっ!?!」

そして、アイズさんとレフィーヤさんがフィンさん達の所に連れて行こうとすると、女の人は垂れた耳をピクリと動かして、涙ぐみ、顔を振り上げて激しく懇願した。

「お願いっ、止めて、あそこに連れていかないで!?!あそこに戻ったら、今度は私が、きつと私がつ・・・!」

「あ、あの・・・」

「ちよ、ちよっどつ、何してるんですか!?!」

「お願い、お願いっ・・・!」

僕を抱えてるアイズさんの体に縋り付くようにしがみついた女の人

に、流石のアイズさんもうろたえ、レフィーヤさんは慌てて女の人を引き離そうとするけど、女の方は首を振るばかりで、離そうとはしなかった。

「アイズさん、レフィーヤさん、場所、移せない？」

「えっ？」

「この人。僕、思わず飛び付いちゃったけど、犯人じゃない。けど、ハシャーナさんの臭いはするから、きつと、何かを知ってるとは思いますが、このままじゃ」

「うーん、どう、しましょうか？」

「四葉、本当にこの人はハシャーナさんを殺した人じゃないんだね？」

「うん。違う。ハシャーナさんの血の臭いはこの人からはしないし、この人の怯え方見たら、違うって思う。」

「そう。じゃあ、わかった。人のいない場所に行こう」

「いいんですか？」

「うん。そこで話を聞こう」

「わかりました」

なので、そう話、アイズさんとレフィーヤさんもわかってくれて、僕等はアイズさんの案内のもと、街の倉庫見たいな場所に移動することになった。



「お、お前、犬人だったのか？」

「ううん、僕はヒューマン。これは、僕の魔法」

そこは、周囲に物資運搬用のカーゴが放置されていたり、鶴嘴やシャベル。材木といった物が隅に置かれているような所で、僕等はその奥の空き地みたいな空間で、向かい合った。

その時には、ちゃんと僕も仔犬姿じゃなく、獣人姿でもちろん、服もちゃんと着て女の人と向かい合った。

「それじゃ、話を聞かせて？まず、貴女の名前」

「ルルネ・・・ルルネ・ルーイ」

そして、女の人、基、ルルネさんはアイズさんの間に一度、頷いてから、自分の名前を名乗った。

第50話・宝玉の胎児

「レベルと所属を教えてくださいませんか？」

「第三級、レベル二。所属は“ヘルメス・ファミリア”」

アイズさんとレフイーヤさんの質問にうつ向きがちにルルネさんは答える。

「どうして、広場から逃げ出したの？」

「・・・殺されと思ったから」

「何で、そう思ったんですか？」

その質問には、押し黙る。

「ルルネさんがハシャーナさんの荷物を持つてるから、だよな？」
「!？」

そのルルネさんに向かって言うと言いつつ目を見開く。

そして、今も肌身離さず持っているポーチを反射的に抱き締めて、少ししてぎこちなく頷いた。

「どうして貴方がハシャーナさんの荷物を・・・も、もしかして、盗んだんですか？」

「ち、違うっ。私は・・・依頼を、受けたんだ」

「!」

そのルルネさんの口から、“依頼”という言葉が出てくるとレフイーヤさんがハツとしたように、何故か僕を見た。

「その依頼の内容は？」

「この街で受け取った荷物を、地上に・・・依頼人に届けること」

「つまり、運び屋」

「ああ。指定された酒場で、荷物を持ってくる相手と落ち合う手筈だったんだ。相手の事は知らなかったけど、装備の特徴は事前に聞いていたから、フルプレートの冒険者がやって来た時はすぐにそいつだつてわかった。後は他人を装いさり気なく近付いて、合言葉を口にして、受け取れつて」

「役割分担させて、しかも別派閥の人を雇うなんて・・・というか、四葉ちゃんの推理通りじゃないですか」

そして、ルルネさんが受けた依頼内容を聞いて、ほぼほぼ、僕の考えた事が当たっていたことが証明される形になった。

「へえ、頭良いんだ、その子」

「うん、四葉はちっちゃくて可愛いけど、頭も良いの。私達の自慢の妹」

ポンポン

「・・・」

感心するようなルルネさんの声と、自慢気に僕の頭を撫でるアイズさんに僕はものすごく恥ずかしくなった。

「そ、それで、依頼人って誰？」

「わからない・・・ほ、本当だよつ。ちよつと前に、誰もいない夜道を歩いてたら、いきなり変な奴が現れて・・・真つ黒なローブを全身にカブツテテ、男か女かもよくわからなかった。最初に依頼を頼まれた時は怪しいって思ったんだけど・・・報酬がめっちゃ良かったから・・・その、前金もいい額だったし」

その恥ずかしさがあつて、話をそらしたくて、ルルネさんに依頼人の事を聞いて、首を手をやりながら、僕の代わりに恥ずかしそうに目を逸らしながら答えてくれるルルネさんを見て、何となく、その黒の

ローブの人が金貨を差し出す姿とそれに尻尾をブンブンと振るルルネさんの姿を僕は想像してしまった。

で、一つの疑問。

「ルルネさんって本当に僕と同じレベル二？」

「えっ？」

「十八階層を単独で往復するの危険すぎない？」

「そう言えば、そうですね。お話を聞く限りでは、お一人で依頼を受けたみたいですし」

前に、リヴェリアさんに教えて貰ったことがあった。

ここ、十八階層は中層中間区。

到達基準は、レベル二のアビリティがGからD。

レベル二の人がパーティも組まずに単独で往復するとなると、上位の実力がないとダメで、裏を返すとレベル二では安全性が保証されない。

そもそもの話、用意周到な依頼人がレベル二の冒険者に運び屋を任せるとは考えにくかった。

「そ、その・・・ヘルメス様に昇格したことを隠しとけって言われて・・・ご、ごめん、私、実は、レベル三」

「「・・・」」

そして、白状したルルネさん。

もう、僕も、アイズさんもレフイーヤさんも何とも言えない気持ちに、顔になった。

けど、これでわかったことがもう一つ。

その依頼人は、ルルネさんがレベル三だと知っていたか、見抜くほどの情報網を持っていたということ。

「・・・ぐずぐずしてないで、さっさと地上に帰っておけば良かった。

見覚えのある鎧が広場に出されて、荷物を渡しにきたやつが殺されたってわかって・・・犯人はこの荷物を狙っているんじゃないかって、私・・・」

「・・・」

声をか細くして再びうつむくルルネさんを前に、一応、話を聞き終えた僕等の間に少しだけ、沈黙が流れた。

「アイズさん、やっぱり、団長に知らせた方が・・・」

「!?駄目!」

そして、レフイーヤさんがフィンさんに知らせようと言った瞬間、ルルネさんは声を張り上げて遮った。

「人がいるところは怖いっ、きつとハシヤーナを殺った奴はまだあそこにいる!荷物を持つてるってバレちゃえば、今度は私が・・・!?」

「・・・」

ポーチを胸に強く抱き、ルルネさんはまくし立てるように言葉を続けた。

「じゃあ、私達にその荷物を渡して」

「っ!!」

頭を抱えてカタカタと震えるルルネさんにアイズさんはその要求をした。

「うん、僕等に渡して?命あつての物種だと思うよ?」

「!?・・・詮索はしないで、絶対に誰にも見せるなって言われてたんだけど・・・」

ルルネさんは、少し考えた後、頷いて、荷物の入ったポーチを地面に下ろすと蓋を開けて、二重底になっている仕切りを外して出てきたのは、口紐がきつく締められた袋。

「・・・！」

「な、何ですかっ、これっ・・・？」

「・・・」

その袋の中身をルルネさんは緊張した面持ちで取り出しアイズさんに手渡した。

アイズさんに手渡された、それは、アイズさんの両手に収まるほどの大きさの球体だった。

緑色の宝玉。

薄い透明の膜に包まれているのは液体と不気味な何かの赤ちゃんみたいだった。

スツ

「・・・」

「・・・！」

その何かの赤ちゃんは、丸まった小さな体に不釣り合いなほど大きな目を開けて、僕等を見上げてくる。

なんだか、わからないけど、鼓動が早くなっていく感覚がした。

フラッ

「・・・」

「！」

「アイズさん!？」

その次の瞬間、アイズさんが地面に膝をついた。同時にアイズさんの手の上から宝玉が転げ落ちる。

明らかに、アイズさんの異変は宝玉だつて思つて、アイズさんをレフィーヤさん達に任せ、その宝玉に飛び付くように拾い上げると、少しアイズさん達から距離を取つた。

「大丈夫ですか、アイズさん……」

「……うん、平気」

はあ、はあ、と胸を上下させていたアイズさんの徐々に静まつていつて、アイズさんは、弱々しい声を出しつつ、ゆっくりと起き上がった。

「だ、大丈夫なのかよ……や、やっぱりコレ、やばい代物だったのか?」

「コレは、僕が持つとく。フィンさんには僕が直接渡す」

ビクビクしながらルルネさんに尋ねられたけど、その答えを僕も、もちろん、アイズさんやレフィーヤさんも持ち合わせてはいない。

ただ、解るのは、アイズさんにコレを近付けちゃいけないってこと

「ごめん、四葉」

「ううん、謝らなくていいよ。レフィーヤさん、アイズさんをお願い。アイズさんは、僕に近付かないで。ルルネさん、僕にその袋とポーチ、ちょうだい」

「おお、わかつた。ほら、遠慮なく使え」
「うん」

正直、こんな得体の知れないものはとつとと、手放してしまいたかつた。

けど、そうすると何もわからないままだ。

僕は、ルルネさんから袋とポーチを受け取り、宝玉を袋の中にしまい、口紐をきつく縛ると、そのままポーチに入れて肩に担いだ。

本当なら、「幻書の術」の中に入れるべきなんだろうけど、生き物はいから入らなさそうだし、入れたいとも思わなかった。

「それじゃ、行きま・・・」

ドオオオオオオオオン!!

「きゃあああああ!!」

オオオオオオオオオオ!!

そして、いざ、フィンさん達の所に行くために動き出そうとした時だった。

遠くの方から何かが崩れる音と、悲鳴、それと何かの咆哮が僕等の耳に届いた。



「あれは・・・!?!」

「か、怪物祭の時の」

慌てて、倉庫を後にして、水晶と岩の隙間に出来た路地に出て、音に引き寄せられるように見晴らしのいい高台に出た。

そこで僕等の目に飛び込んできたのは、街の方々から上がる煙と、空高く首を伸ばす、無数の怪物祭の時に襲ってきた食人花のモンスターだった。

第51話・殺人犯の出現

「な、なんだよこれ、何がどうなって・・・!?」
「街が、モンスターに攻め込まれてる」

視線の先であの食人花のモンスターの群れが街の天幕や木の小屋なんかを吹き飛ばして破壊されていくさまを見て動揺するルルネさんの声やアイズさんの声を聞いた。

この高台からでもわかる巨大な翡翠色の魔法円が展開して、モンスター達がこぞってそっちに向かっていくのもそのモンスター達に何百人もの人達が小隊を作って、各個撃破していくのも見た。

「アイズさん」

「うん。広場に行つて、フィン達と合流しよう」

「うんうん」

「はい」

それ等を見てアイズさんを見ると、アイズさんはその判断を下した。

もちろん、それに異論は無い。

ルルネさんもコクコクと必死に頷き、レフィーヤさんもはいと返事をした。

ポーチを抱え直して、いざ、高台から出発しようとしたその時だった

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

「!?!」

ダアン

「絶空!」

ザアアン

ドオオオオン!!

僕等の目の前に一体の食人花のモンスターが叫び声を上げながら飛び出した。

まるで僕等の進路を遮るかのように、激しい勢いで岩の斜面を削りながら現れた。

一瞬、ビツクリして止まってしまったけど、すぐさまモンスターの向かって跳び上がり、抜刀して、魔力の残撃を飛ばした。

ダンッ

「……」

「四葉」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

「なっ!?! あっちからも……!?!」

「う、嘘だろ!?!」

なんとか、その一体は斬り倒せた、けど、それでは終わらなかった。僕等のいる高台は、街の片隅に位置することもあって、その近辺にぞびえる街壁から、食人花のモンスターの群れが現れた。完璧に捕捉されている感じだった。

「レフィーヤさん、やっぱり、コレ、お願い!」

「えっ? 四葉ちゃん?」

それを見て、持っていたポーチをレフィーヤさんをお願いすると、ポーチを地面に置いて、足に魔力を込めて一匹のモンスターに飛び付いた。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

「……」

こいつ等の特性を知っている。

魔力に反応するこいつ等が例え、こいつ等の力が僕より上回っていたとしても、こいつ等同士なら、話は違うと考えて、向かって来るモンスターの頭をギリギリでかわす。

「レフイーヤ、先に広場に行つて！」

「アイズさん!？」

そして、アイズさんも飛び出し、僕に攻め立てるモンスター達に突っ込み、斬撃の嵐を見舞つて複数のモンスターを解体していく。

「おいつ！剣姫行っちゃったぞ!?!あの子も！あの子、レベル二なんだろ!?!」

「ルルネさん!!」

「えっ！いいのかよ!?!」

それらを見てレフイーヤさんには躊躇の感情が生まれたようだけど、それを振り払つて、僕が置いたポーチを拾い上げると、ルルネさんの手を掴んでフィンさん達のもとに戻るため走り出した。



ゴオツ！

ゴオツ!!

ゴオツ!!!

「!?!」

それから、少しして凄まじい轟音と共に大炎の極柱が街の方から連続して昇る。

その大炎の極柱が誰の手によるものなのかは、わかってる。けど

「アイズさん!!マズイ、レフィーヤさん達の近くにハシヤーナさんを殺した奴がいる!!」

「!？」

問題は、その大炎の極柱が昇る時に起きた爆風で、その臭いが僕の鼻に運び込まれた。

僕はその臭いを嗅ぎ付けると同時に、モンスターと戦闘中のアイズさんに叫んだ。

「四葉」

「うん」

そして、次の行動に僕等は移った。



「オオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

ゴガアア!!

食人花のモンスターの特性を生かして、水晶の柱を破壊しつつだつたけど、ずたずたに斬り刻んだモンスターの体をそこに突っ込ませた。

ボツ

「・・・」

ドオン!!

「!？」

ガツ!!

それから、間髪入れず、アイズさんはレフィーヤさんの首を掴み上げてる犯人に斬りかかり、それを回避しようとレフィーヤさんを離し

た犯人。

その犯人の着ていた鎧にアイズさんの鋭い剣が跡を刻み付けた。

ドサツ

「!?」

「レフイーヤさん！」

そして、僕は、犯人に離され、地面に落ちたレフイーヤさんのもとへ

「げほっ、げほっ!」

「レフイーヤ、大丈夫？」

「は、はいっ・・・」

アイズさんに背に庇われつつ、僕は咳き込むレフイーヤさん背中を擦りながら、アイズさんが対峙している犯人を見た。

ここに割り込む前に、残りのモンスターを全力で殲滅はした、けど、なんだか踊らされたような感覚がした。

それが堪らなく、腹ただしかった。

それはもちろん、僕自身に対してだ。

「・・・貴方が、ハシヤーナさんを殺した人？」

「!!」

そして、アイズさんがそう犯人に問いかけると、レフイーヤさんは大きく目を見開いた。

「だったら、どうした？」

「女性の声!?ま、まさか、これも四葉ちゃんの予想通り!」

一見したら、黒い鎧の男の人だった。

けど、発せられた声は、まさに女の人のモノだった。その事と、僕の考えていた事が当たっていたことにレフイーヤさんは更に目を見開いていた。

「引き剥がしただけだ」

「えっ・・・？」

「死体から顔の皮を引き剥がして、被っているだけだ」

「!?!」

それでも犯人をまじまじと見てみると、犯人は包帯で半分しかわからないけど、その無表情な顔で淡々とその事を話し出した。

その内容に、絶句したのと同時に、ものすごい吐気がした。

「ポイズン・ウエルミスの体液に浸せば人の皮の腐敗は防げる・・・知らなかったか？」

「それじゃあ、その顔は、ハシャーナさんの・・・」

「うっ」

正直、そんなものは知りたくなかなかかった。

つまり、この人は、ハシャーナさんの首を折って殺した後に、顔の皮を剥ぎ取って、それを悟られないために、隠蔽の手段としてハシャーナさんの頭を・・・

そこまで、考えてしまつて、何か込み上げてきそうになつてとつさに口もとを押さえた。

「ああ、くそっ、きつくてかなわん」

ガシヤン

ガシヤ

カン

そして、犯人は苛立ったように身に付けている鎧を脱ぎ始め、胸の

プレートを掴んで砕き、取り外すとインナーに包まれた女の人特有のソレが姿を表し、他の鎧のパーツも強引に引き剥がしてゆき、やがて、首からは男の顔、下は女の人の体をした非常に違和感のある姿になり、腐敗防止の作用が切れたのか、顔の肉のマスクの一部が音を立てて溶け、左目周囲だけ犯人の元々の肌があらわになった。

「いい加減、宝玉を渡してもらおう」

ズルウ

フツ

ダツ

犯人は、そう告げると腰の長剣を抜き、次の瞬間には消えるように一気に飛び出し、アイズさんも飛び出して

ゴツ!!

「っ!!」

「ああ、やはり、強いな!」

犯人の長剣とアイズさんの剣が衝突して激しい火花を散らせた。

ギキ・・・

「・・・」

クン

ビツ

ボツ

ガガガガガガガッ

ギヤ

ブン

ゴツ

ドキュ

ザザザザザッ

そこから二人の激しい剣戟が巻き起こる。

振り下ろされた長剣と横に滑るアイズさんの剣。

まるで舞い狂うように剣と剣が打ち鳴らされ、縦横無尽に決して広くない道の中で何度も立ち位置を入れ替えた。

おまけに、犯人は剣術だけじゃなく、僕もやる戦法をとっていた。拳や蹴りを織り交ぜ、アイズさんを攻める。

「四葉ちゃん」

「わかった」

そこでいつの間にか杖を引き寄せていたレフイーヤさんに声をかけられ、その意味を瞬時に理解した僕は、レフイーヤさんの前に立ち、刀を構える。

「【解き放つ一条の光、聖木の弓幹。汝、弓の名手なり】」

「！」

バツ

「【狙撃せよ、妖精の射手。穿て、必中の矢】！【アルクス・レイ】!!」
ドオウツ!!

それに気付いたアイズさんは更に速度を上げて女の人を攻め、レフイーヤさん詠唱が終るとすぐにその射線からずれ、レフイーヤさんの光の矢が犯人に・・・

ドンツ

「なっ!?!」

「えっ!?!そんな受け止めるなんて!!!」

「っ!?!」

けど、それは犯人が片腕を突き出して受け止められてしまった。

ブブツ

「・・・」

ボキユ

ドオオオオオオン!!

「うわあああ!?!」

「きゃあああ!?!」

おまけに押し返し、力任せに腕を振り、軌道をずらし、斜め前の壁に叩き付け、それで水晶を爆砕すると共に衝撃波が起きて、気絶しているルルネさんと悲鳴を上げるレフイーヤさんと一緒に僕はもといた場所から吹き飛ばされた。

「四葉!!レフイー・・・!?!」

「・・・」

ブキツ

「!?!」

そんな僕等の名前を呼びかけたアイズさんのもとに犯人が更に攻めかかって、その長剣がアイズさんの体を掠める。

「【目覚めよ】!!」

「!?!」

ゴウツ!!

ガガガガガツ!!

そして、アイズさんはそれまでこの戦いで使っていなかった魔法を使い、その巻き起こった風によって犯人の兜は宙を舞い、顔の肉のマスクも裂け飛び、石畳を削りながら大きく後退をよぎなくされた犯人。

ガラッ

「ああ・・・捜し物が二つ同時に、見つかるとはな・・・」

「・・・」

「今の風・・・そうか、お前が『アリア』か」

「!？」

犯人はやつとのこととで停止すると、顔をゆっくりと上げて、アイズさんに向かってその単語を、名前を呟いた。

その名前が出た途端、アイズさんの体と剣がカタカタと震え出した。

第52話・食人花モンスターの変貌

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」
「!?!」

突如、いつの間にか地面に転がり出てた例の宝玉の中の赤ちゃんが甲高い叫び声を上げた。

「アアアアアアアアアアア!!」

ズビュツ

「!?!」

ビタツ

ズブ・・・

ビキ・・・

ビキキ・・・

ドクン

ドクン

ドクン

そして、アイズさんに飛び付こうとしたのか、宝玉の中から飛び出した赤ちゃんは、アイズさんに回避されてそのまま、水晶の壁に埋まった食人花のモンスターに接触、寄生した。

「なっ・・・!?!」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!?!」

すると、瀕死の状態だった食人花のモンスターが絶叫を上げる。それはきつと、たまらなく痛いんだろうと思う。

その証拠に、寄生された所から食人花のモンスターの体皮と同化しはじめて、更にそこを中心に血管が浮き出るかのように赤い脈状の線がその長い体を走り抜けていき、それを連動するようにモンスターの

叫びが高まっていくから。

ビクッ

「オオオオツツ!?!」

唾液にまみれた悲鳴を上げていたかと思うと、一度、大きく震え、食人花のモンスターの体全体が膨れ上がった。

悶え苦しみながら変化を続けるモンスターに、僕はちよつとだけ哀れに思った。

変化に次ぐ変化。

成長とか進化だったのかもしれないけど、こんな強制的に別の存在に変えられてしまうのは、いくらモンスターでも、違うだろうって思った。

そして、まるで蛹から羽化する超のように、人の体らしき輪郭が、メリメリと体皮の下から起き上がろうとしていた。

「オオオオツツ!?!」

「!?!」

のたうち回るモンスターは未だ変化の途中で何の前触れもなく、襲いかかってきて、とつさに僕は気絶したルルネさんをアイズさんはレフイーヤさんを抱え込むようにして、その場から脱出した。

「ちっ!?!ええい、全て台ないしだ・・・!」

ザッ

そして、犯人も盛大な舌打ちをして、その場から離脱していく。

ゴオツ

ズブズブ・・・

「!?!」

逃げながら、寄生された食人花のモンスターの方を見ると、進撃しながら、他の食人花のモンスターを容赦なく食らいついて、何体ものモンスターが折り重なって繋がっていくのを見た。

ついには、羽化を遂げた花のように、モンスターの体皮を破って五十層で見たモンスターに似たモンスターに変わった。

「キアアアアア!!」

ズズ・・・

ズズズ・・・

地形とか無視して水晶の柱を粉碎し、耳をつんざくような奇声を発しながら、僕等の方についてこようとすする元食人花のモンスター。アイズさんを狙っているのか、魔力に反応してるのかわからないけど、このままじゃ、戦闘も行えないと思った。

「四葉」

「!」

そう思っただけで逃げ回っているとアイズさんに呼ばれ、何となく、街の広場に向かおうとしてるのがわかった。

「ルルネさん、お願い」

「えっ?」

「囿、やる」

「!」

けど、それだと、あのモンスターが街までついてくるのは、目に見えた。

だから、出来るかわからないけど、囿役を買って出た。

「大丈夫だから」

「・・・うん、わかった」

「!?ア、アイズさん!」

「ルルネさん、お願い」

「うん」

ビックリする二人に笑顔で言い、一瞬、止まるとルルネさんをアイズさんに預け

ダッ

「・・・」

「まつ、待ってください!アイズさん!四葉ちゃんが!」

「・・・」

街の広場に向かうアイズさん達とは違う方向にアイズさんの使っている魔法の魔力よりも大量の魔力を使って駆け出した。

その時、レフィーヤさんの心配そうな不安そうな声が聞こえたけど、この時ばかりは、その声を僕とアイズさんは無視をした。

ドゴオッ

「!」

ドドドドドドドドド

そして、やっぱり、どんなに姿を変えようとも本質は変わらないらしく、僕の大量の魔力に反応してか、元食人花のモンスターは僕への集中攻撃が始まった。

ドドドドドドドドド

「さて、どうやって始末するか」

ドドドドドドドドド

それらをかわしながら、このモンスターへの攻め方を考えた。
きつと、あの女の人みたいな所を狙う方が良いんだろうけど、足に
されてる食人花のモンスターの馬鹿みたいに多いせいで、ここまです
遠い。

ドドドドドドドドド

「そうだー【テイクアウト】」

そして、ふと思いついた事があつて、僕は刀を鞘に収めて、【幻書の
術】から長めのロープを数本取り出して

ドドドドドドドドド

キュツッ

「よしー」

攻撃から逃げ回りながら、腰のポーチの中のクナイを数本取り出し
て、クナイの輪になっている部分にロープを一本づつ結び付けてい
く。

ダッ

「・・・」

ドドドドドドドドド

それから、モンスターからの攻撃を交わしつつ、水晶の柱を足場に
モンスターの周りを高速で移動しながら、モンスターの上半身が見え
る位置を取る。

ブンッ

「うりゃあああああああああああ!!」

ブンブンブンブンッ

ブンッ!!

そして、ロープ付きクナイを数本まとめて振り回し、モンスターの上半身、特に腕や背中目掛けて投げる。

一本で良いから、刺さってくれと願いながら

バシッ

ドスッ

ギンッ

ドスウンッ!!

「!」

何本かは上半身から伸びる腕から生えた触手や足にされている食人花のモンスター達が阻んだけど、運良く、一本だけモンスターの左腕の肩あたりに突き刺さった。

そのロープの端を握り締めて、ターザンのごとく跳ぶ。

ブンブンブンブン

ブチイイイイイイイイイイ

「オオオオオオオオオオオオオオ!」

もちろん、ただじゃない。

残ってるロープ付きクナイを数本まとめて振り回して大量の足を斬り落とす。

すると上半身の部分から絶叫が上がる。

「・・・」

「・・・」

その時、上半身の顔と目があった気がした。

ブウンッ!!

ガシッ

「絶空」

咄嗟に、振り回していたロープ付きクナイを魔力を帯びさせて、その顔目掛けて投擲、それに続くように魔力の残撃を飛ばす。

キンッ

ザアアン!!

「オオオオオオオオオオオオオオオオオ!?」

クナイ達は、モンスターの腕の触手達に阻まれたけど、残撃がそのうちの何本かを斬り落とす。

◆◆◆◆◆

「流石! 四葉!!」

「感心している場合じゃないでしょ!」

「もうここらへんでモンスターに狙われている人いないよねー!」

「助けた側から広場に追い返したでしょ! さっさと加勢に行くわよ!」

「うん!」

そんな戦い方を始めた頃、遠目から見ているらしいティオナさんとティオネさんが、こちらに向かって走り出してくれていた。

◆◆◆◆◆

「たく、何処に行ったかと思えば」

「うん、相変わらず、レベル以上の戦い方をする子だよ」

「あのモンスター、どこから現れた・・・と、聞いただいたところだが・・・始末する方が先決だな」

「ああ、そうだね」

「何でてめーらは、そんな冷静なんだ!?!ちったあ慌てろ!!戦ってんの、てめーらんとこの餓鬼なんだろう!!」

ボールスさんが悲鳴を上げる横で、リヴェリアさんとフィンさんもそれを見ていた。

バツ

ザザザツ

「リヴェリア!レフィーヤ達を!」

そこにレフィーヤさんとルルネさんを抱えたアイズさんが駆け込んできた。

「アイズ、手短で良い、状況は?」

「ルルネさんを追ったら、犯人が来て、食人花のモンスターがあのもンスターに、今、四葉が囿に、あのモンスターの足止めを」

「アイズさん!」

フィンさん達に口早にアイズさんは状況を話すと、下ろしたレフィーヤさんにルルネさんを預けると、引き返してくれた。



ブンツ

ドカアアア!!

「!?!」

そんな中、モンスターは鬱陶しいと言わんばかりに、クナイの刺さった腕を思い切り振り、僕を岩壁に叩き付けた。

「そりやあーーっ!!」

ダンッ

「!」

「四葉!!平気!!」

「う、うん。・・・ティオナさん!」

「!?!」

そこに、到着したらしいティオナさんが大双刃が食人花の頭を切断して、叩き付けられた僕に声をかけてくれた。

その時、頭を失ったはずの足がティオナさんに迫るのが見えた

ブンッ

ガッ

「!?!」

それをティオナさんは、大双刃を盾代りにして受け、地面を一度転がりすぐに立ち上がった。

「痛ったあー!?!力めちやくちや強くなってるんだけど!?!しかも首落としたのに動くの!?!」

「当たり前でしょ!ありやもう足の一本に過ぎないでしょうが、そりや動くわよ!四葉、まだやれるわね!」

「うん!・・・ティオネさん!」

「!?!くそッ!」

そして、ティオネさんもククリナイフでモンスターの足の一本をずたずたに切り裂き、攻撃を回避しつつ、僕に声をかけてくれる。

そこで、上半身が動いて、顔が僕の方じゃなく、ティオネさんの方を向いて、腕の触手を槍のごとく放たれる。

ティオネさんはその押し寄せる無数の触手を二刀のククリナイフで切り払う。

筒ごと、受け取り、素早く矢筒を腰に固定した。

「レフィーヤ、縄を結べ」

「はい！」

レフィーヤさんに矢にロープを結び付けるように命じ

チャ

ギイイ

「フィン！」

「ああ！」

キ・・・キキ・・・

キリ・・・

ドヒュ!!!

三本同時に矢を射った。

ドス

ギリ

ドツ

二本は、足の食人花のモンスターが阻み、一本がモンスターの右腕に突き刺さった。

ギユルツ

ギユララララララララララララ

「・・・」

「オオオオオオオオオオオオオオ!?」

ドオオオン!!

その一本に結び付けられたロープの端を掴んで、フィンさんが槍を

風車のごとく回転させながら、大量の足を斬り落としていく。

「……」

「あ、あいつら、やっぱり頭がどうかしてやがる……!?」

そんな激しい戦闘を広場から見ていたボールスさん達は、街に残る食人花のモンスター達と戦いながら、喉を鳴らしたり、及び腰になりながら呻き声を上げた。

第53話・変貌モンスターとの終結

「私も・・・！」

シユパツ

そして、アイズさんもその戦闘に加わろうとした。

ギイイ

「!？」

「お前は私だ」

そこに振り下ろされる攻撃をアイズさんは間一髪回避すると、体の向きを変えた。

「このまま、ただでは帰れん・・・付き合ってもらおうぞ」

「・・・！」

それは、何処かへ去っていったはずのハシャーナさんを殺した人だった。

その人は、アイズさんをこの場から追い出すように激しく攻め、アイズさんもそれに対抗するように、剣で応戦した。

ダツ

「・・・」

そして、二人して走り出し、ここから遠ざかって行く。

「アイズ!？」

ガア

「!?もう、邪魔あ!!」

ボツ

その背中にテイオナさんは声をかけるけど、アイズさんは止まらず、おまけに、足の食人花の頭が迫ってきて、テイオナさんは悪態をつきながら、目の前まで迫ってきた食人花のモンスターの頭を潰した。

「レフィーヤ、以前行った連携を覚えているな？あれをやるぞ。」

「わ、わかりました！」

「てめー等、俺達も行くぞ！遅れを取るな！」

「「おおおおおおお!!」」

そこにリヴェリアさんとレフィーヤさんが駆け付け、その後ろにボールスさん達までもやって来て、リヴェリアさんとレフィーヤさんは別々の方向へと走り出し、モンスターの前後に回った。

「グウウ・・・アアアアア!!」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドツ!!

「「うわあああ!!」」

「「はあああああ!!」」

ザンザンザンザンザンザンザンザンザンツ!!

そして、ボールスさん達も戦闘に加わると、モンスターは絶叫を上げて、まだまだある食人花の足を使って纏わりつく蟻を吹き飛ばすがごとく、全方位にいる僕等を薙ぎ払っていく。

なんとか、僕の前にいた人達は庇ってみるけど、全部は流石に無理だ。

「うおおおおおおお!!?や、やべえつ、死ぬうつ!!」

「ちよつと、周りの奴等避難させなさい！庇い切れないわよ!」

僕と同じ様な状況のテイオナさんは、頭を抱えて悲鳴を上げるボ-

ルスさんに叫ぶ。

「ちよくちよくぶった切ってるんだけど、ねっ!!」

「ゲエツツ!？」

ティオナさんは食人花の足を斬り飛ばし、奇声を上げる食人花の頭部分を切り落とす。

すかさず、反撃に出てくるモンスターに素早く身を翻す。

「恐らく魔石が埋まってるあの上半身を狙うしかなさそうだけど・・・」

ヒュツ

カアン

フィンさんは地面に転がっていた短槍を拾い上げ、モンスターの上半身に向かって勢いよく投げたけど、モンスターの両腕に生えた触手に阻まれた。

「やっぱり、リヴェリア達に任せるしかないか」

「【誇り高き戦士よ、森の射手隊よ。押し寄せる略奪者を前に弓を取れ、同胞の声に応え、弓を番えよ!】」

「!!」

フィンさんが見た方向では、リヴェリアさんが杖を水平に構えて、詠唱を始めていた。

広域展開される翡翠色の魔法円。

その莫大な魔力に反応してモンスターの上半身は反応して、リヴェリアさんの方に振り向いた。

そのまま、リヴェリアさんの方に進み始めると、周囲にいた人達が転がるように進路上から避難していく。

「……………アアアアツ!？」

モンスターを残して誰もいなくなったそこへレフイーヤさんは砲撃を開始。

火矢の雨がモンスターに十秒以上も降りそそぎ、モンスターの全身を削り取って弾け飛んでいく。

モンスターの上半身も焼け焦げ、つんざかんばかりの絶叫を上げた。

「止めだ!!」

「畳みかけさせてもらおうか」

「お供します、団長!」

「せえーのっ!!」

ザザザシュツ

「アアアアアアアアアアアアツ!？」

グラ・・・

ズズーン

レフイーヤさんの砲撃終了から、秒を待たず、長槍を持ったフィンさんが、二刀のククリナイフを撃ち鳴らすティオネさんが、右手に刀、左手に片手剣を持った僕が、そして、大双刃を振り上げたティオナさんがモンスターの体へ攻撃を加えた。

悲鳴とともに後ろに倒れていくモンスター。

ボツ

「・・・」

ザツ

「あっ!」

「逃げた!!」

「あの方向!あいつ湖に飛び込む気!？」

そして、次の瞬間、モンスターは上半身を下半身から切り離して、一目散に転がるようにして逃げていく。

それを見て、僕は自然と追いかけていた。

ザッ

「【終末の前触れよ、白き雪よ。黄昏を前に風を卷け】」

「ー」

そこに、詠唱の音が響いた。

モンスターが髪を振り乱しながら必死になって駆けていくのと同じように、翡翠色の長い髪をなびかせながらリヴェリアさんが駆けていた。

「【閉ざされる光、凍てつく大地。吹雪け、三度の嚴冬ー我が名はアールヴ】」

「・・・」

その足もとには、翡翠色の魔法円が。

今、リヴェリアさんがやっているのは、「並行詠唱」というもので、本来なら発動の失敗や魔力の暴走を防ぐために停止して行われる詠唱を高速移動しながら展開する離れ技らしい。

「【ウイン・フィンブルヴェトル】!!」

ゴオッ

「!?」

パキイイン

そして、モンスターが断崖の境界線を越える前に、リヴェリアさんの魔法の詠唱が終わり、三条の吹雪が発車され、扇状に広がる範囲砲撃は、その中心にいたモンスターを一瞬で白い霜と氷で呑み込んだ。

全身が凍結して悲鳴すら上げられなくなったモンスター。

バアアアン

ピシッ

ガツキイイイイン

「・・・」

モンスターは最後の力を振り絞って、腕を振り下ろした。

岩をも砕く衝撃の反動で空中を泳ぎ、凍てつきながらも断崖の境界線を越えていく。

それで安堵したかのように、崖を落下しながら、モンスターの唇が笑みの形に歪んだ。

バツ

「・・・」

バツ

「ティオナ、左から回り込みなさい！」

「わかった！」

「!？」

が。

僕とティオナさん、ティオネさんは一切の躊躇いもなく、モンスターを追って断崖から飛び降りた。

「ツツ!？」

バツ

「・・・」

ザンザンザンザンザンザンザンザンザンザンツ!!

頭部を下にして湖に落下するモンスターは、両腕の触手を繰り出して来た。

正面から来る触手を両手の剣で細切れにしていく

んは怒る。

そんなティオネさんにティオナさんは少し間拔けな顔で固まる。そして、僕は、二人の会話を聞きながら、崖の下の事を思い出した。

「ねえ？ティオナさん、ティオネさん」

「ん？何？四葉」

「この先って湖？」

「うん」

「ええ、そうよ？」

それで聞いて、返ってきた答えに僕は、一気に血の気が引いた。

「ど、どうしよう!?!ぼ、僕、泳げない!?!」

「はあ?!?!」

そう、僕は、泳げない。

「じゃあ、何で、飛び降りたの?」

「だ、だって、モンスターが飛び降りて逃げようとするから!?!ど、どうしよう、ティオナさん、ティオネさん」

「はあく、もう、とりあえず、落ち着きなさい。後、武器とか終いなさい。私達がなんとかしてあげるから」

「ほ、本当?」

「うん!」

「【ストレージ】」

半分、呆れられた顔をされたけど、なんとかかしてくれろと言ってくれたから、僕は、【幻書の術】の中に刀と剣を入れた。

「四葉、手」

グイッ

「・・・」

ボスッ

「しっかり、掴まってるんだよ？」

「う、うん」

そして、ティオナさんに手を伸ばすと大双刃を持っていない方の手で僕の手を取ると、僕を抱き寄せてくれ、僕は、言われた通り、しっかりティオナさんに抱き付いた。

「・・・アイズとレフイーヤ、大丈夫かなあ」

「・・・」

ティオナさんはふと上の方、崖の上の方を見て呟いた。

ティオナさんが心配するのも解る。

だって、あの犯人がいるんだ。

「リヴェリアと、何より団長がいるのよ？平気に決まっているわ」

「・・・そうだねっ」

「うん！」

その時、ティオネさんが明るい声で、自慢気にそう口にする。

その顔には、信頼の笑みが浮かんでいて、それを見た僕もティオナさんも、笑みを浮かべた。

三人揃って、遠ざかっていく崖の頂上をもう一度、見上げた。

「四葉、息止めて？」

「うん！」

ドボンッ!!!

そして、ティオナさんの合図でめい一杯、息を吸って息を止めた。その直後、僕は、二人と共に勢いよく湖に着水し、盛大な水飛沫を

上げた。

第54話・探索の再開

「・・・」

ギユツッ

「・・・」

僕は、今、アイズさんに後ろから抱き締められながら、揺れ動く魔石灯の光を見ていた。

あの「リヴィラの街」での事件後、僕等は負傷者の救護や地上撤収の護衛とか、事件の事をギルドやロキ様に報告を兼ねて一度、地上へと戻った。

ハシャーナさんを殺し、街を襲った犯人の情報を調教師であることも含めて回そうとしたけど、ロキ様に待ったをかけられ、犯人が調教師であることは一時保留となった。

けど、ガネーシャ・ファミリアの強い要望によって、殺人犯として指名手配、要注意人物一覧に記載されることとなった。

アイズさん達とルルネさん以外、件の犯人と遭遇した者がいないためか、モンスター奇襲の真相は、数あるダンジョン異常事態の一つとして認識されつつあるらしい。

一応、ボールスさんにはフィンさんの口から伝えられているけど、ハシャーナさん殺害とリヴィラの街が壊滅した話題は、今のところ上級冒険者達の間だけにとどまっている。

理由としては、中層に進出できない人達にまで知らせても余計な混乱を招くだけだという、ギルドの人達からの処置。

そして、ギルドの人達は、食人花のモンスターから摘出された大量の極彩色の魔石は有無を言わせず押収した。

ある意味、もみ消されるがごとく、事件のほとぼりは急速に冷めつつあった。

そういったやることを済ませた後、僕等はラクタさんという人を一人加えて、再びダンジョンに、十八階層に赴いた。

その時には、既にリヴィラの街は修繕されつつあった。

ボールス曰く「ダンジョンの重要な拠点」で「自分達が一肌脱いでやらないと、他の奴等の為にならないだろう」とのこと、一見、献身的な思いからって思うところだけど、僕にはハッキリと「金儲けです」って文字がその顔に書いてあるように見えた。

なんであれ、あの街のあの人達は、このオラリオで誰よりもたくましくて、そして、しぶとい人達なんだろうと思う。

その後、僕等は十八階層を後にして、ハシヤーナさん向かったとき、れる三十階層に足を運んで、ざっと調べてみたものの、得られるモノは普通のモンスターの魔石くらいだった。

「……」

「……」

そして、事件から既に六日が経とうとしている現在は、本来の目的である資金稼ぎのための探索中で、三十七階層の片隅にある「ルーム」で、長めの休息を取っている最中だ。

「……ん……」

「！」

「……」

ふと、フィンさんが目を覚まし僕と目が合うと苦笑いを浮かべた。

「大丈夫かい？ 四葉」

「うん、僕は、全然平気だよ？」

何が、大丈夫なのかと言うと、僕は、今、人の姿でも獣人の姿でもなく、魔法で仔犬の姿になっているからだ。

と言うのも、この六日、休息の度にアイズさんをお願いされるので、僕は、いちいち、魔法を解いたり使ったりするのも、服の事を気にするのにも面倒で、だから、休息時はこの姿で、モンスターと戦う時は、三

段階目の大型犬バージョンと使い分けているけど、今のところ、何の問題もなく過ごせている。

本当に僕の魔力が底なしなのか、この魔法に使う魔力自体が少ないのか、僕の本質が犬バージョンの方だからかは、わからないけど。

「僕より、アイズさんは大丈夫？こんなことで、アイズさんは大丈夫になる？」

「・・・」

それよりも、だ。

僕としては、この姿になって欲しいって頼んで来たアイズさんの事の方が心配だった。

六日前のあの日、僕とテイオナさん、テイオネさんがアイズさん達と合流した時からアイズさんの雰囲気は可笑しかった。

そんなこと、フィンさんに聞いたって答えが出る訳じゃないのに、僕は、そう聞いていた。

そして、帰ってきたのは、困ったような笑みだった。

「ん」

「！」

「うーん」

「良く寝たあ〜」

その時、また、一人、リヴェリアさんが目を覚まし、続けざまにテイオネさんとテイオナさんが目を覚ました。

「そろそろ、出発の準備をしようか」

「はい、団長」

「アイズさん」

ペチッ

そこで、僕とフィンさんの会話は終わり、僕は、アイズさんを起こすべく、アイズさんの腕の中からモゾモゾ動いて、アイズさんの顔の方を向くと、僕は、アイズさんの顔に片前足を置く。

ペチツペチツ

「アイズさん、起きて、アイズさん」

そして、数回アイズさんの頬を軽く叩いて起こしにかかる。

最初、アイズさんを起こす時に鼻先の舐めたりしてただけで、レイヤーヤさんに死ぬほど怒られたので、この方法に変えた。

グイッ

「・・・」

が、それでアイズさんが起きないときは、僕は、最終手段に出る。

もふっ

「・・・」

それは、今の仔犬の全身を使ってアイズさんの顔に口と鼻を同時に塞ぐように覆い被さる方法だ。

「アイズさん、早く起きて？アイズさ〜ん」

ペチツペチツ

「んっ」

自然と動く尻尾の先がアイズさんの頬を叩くのも合わせて、結構な高確率で、アイズさんは起きてくれる。

「んっ!？」

ガバッ

「!?」

「ぶはあく・・・はあ、はあ、はあ」

勢い良く飛び起きたアイズさん。

僕は、それで、飛び起きたアイズさんの膝の上に落ちた。

自然とアイズさんにお腹を向ける形で。

ふりふり

「おはよう、アイズさん」

「・・・」

ヒョイツ

「!?」

「四葉、こういう、起こし方、止めてって、お姉ちゃん、言ったよ？
めっ!」

その格好のまま、尻尾をふりふりしていると僕の体は、アイズさんに
持ち上げられて、叱られる。

ある意味、コレは一連の流れ見たいになっている。

「ハハハ！すごい起こし方するよね？四葉は。平気、アイズ？」

「うん」

「休息の時間、終わるらしいよ。そろそろ出発するって」

「ん・・・」

そこに、横からティオナさんが笑いながら、アイズさんの顔を覗き
込むようにして、アイズさんに声をかける。

まだ、少し眠そうなアイズさんだったけど、僕を地面に下ろして、軽
く頭を振って残っていた眠気を飛ばすと、フィンさん、リヴェリアさ
ん、ティオネさん達が武器や道具の確認をしているのと同じ様に武器等
の確認を始めた。

「リヴィラの街、もう直され始めてたね。ほんと早いな」

「あそこまで金根性が突き抜けていると、感心するわね・・・まあ、助かるって言えば助かるんだけど」

そして、皆が起きる前に僕も思ってたことを世間話として話すテイオナさんとティオネさんの話を聞き

「食人花のモンスター・・・あの調教師も目立った動きは見せていないな」

「んー、流石に動きが派手だったからね。主神が手綱を握っているなら、自重するように言い含められているだろう。それに、あれだけの数のモンスターを新しく調教することは短期間じゃ不可能に近い。今回みたいなのはまず起きないと思うよ。まだ調教済みのモンスターが残されているとは思いたくないけどね」

フィンさんとリヴェリアさんのそんな会話を聞きつつ、僕は、使い終わった寝袋なんかの野営道具をレフイーヤさんやラクタさんと一緒に片付け、食料以外をまとめていく。

「ストレージ」

「さて、そろそろ出発しようか。レフイーヤ、ラクタ、四葉、大丈夫かい？」

「あ、はい！行けますー！」

「これは、かつての力、姿を取り戻す魔法。我、彼の王に仕えし者。今は、彼の者に造られし我が身。我が望みはただ一つ。今一度、あなたに呼んで欲しい。我が名は、王の狩猟犬《カヴァース》」

そして、まとめた野営道具を僕の【幻書の術】の中にしまう。

それを待ってフィンさんに声をかけられ、レフイーヤさんは頷いて返し、ラクタさんはかなり緊張した顔で了承し、僕は、返事の代わりに大型犬へと姿を変える。

「よし、出発しよう」

「はい、団長」

それで全員の準備が整い、僕等は休息を行った。『ルーム』から出発した。

「でも超硬金属があこのルームから出てきた時は、ビックリしたなー。壁を壊したらポロって出てきて、すごい幸運だったよね！」

「あの超硬金属だけでも、結構なお金になりそうですよ」

「うん、ちよつと大双刃の代金の足しになるかも！」

そこで、テイオナさんが上機嫌にあこのルームで休息をとることを決めた時の事を思い出して、レフィーヤさんに言う。

何故、壁を壊す必要があるかと言うとだ、このダンジョンは壁を始めとした地形が破壊されると、その箇所の修復を優先して、モンスターを産まない、だから、十八階層みたいな安全階層で休む以外は、壁を壊して安全地帯を確保して休息を取るのが冒険者のセオリーみたいなもの。

そして、今回僕等が使用したルームでセオリー通り、壁を壊したら、テイオナさんの武器の素材にも使われている超硬金属が出てきたというわけだ。

「テイオナさんの超硬金属は僕が大事に預かってるよ」

「うん！よろしくね？四葉」

ちなみに、その超硬金属も僕の【幻書の術】の中に大事に大事にしまっている。

ギョツ

「・・・」

「……」

そうやって、レフィーヤさんとティオナさんと会話を楽しんでいると、隣を歩くアイズさんが強く握り拳を作るのが見えた。

「……あの、アイズさん？」

「……」

そんなアイズさんに、レフィーヤさんも恐る恐るといった感じで声をかける。

「グルルツッ」

「あっ」

「！」

ダッ

「アイズさん！」

けど、アイズさんから返答が返ってくる事はなく、僕等が向かう進行方向の広大な通路の奥、前方から大量のモンスターの出現して、アイズさんは抜剣すると、風を切るように一人でモンスターの群れに突っ込んでいった。

「グウララ!!」

「……アイズさん」

「……」

そんなアイズさんに凄まじい咆哮を上げるモンスター達。

僕は、アイズさんの背中を見ながら、少しだけ、寂しいような、悲しいような、そんな気持ちになった。

第55話・悔しさの残る帰還

オオオオオ・・・

ドツ

バシユ

ザンツ

「・・・」

モンスターの群に飛び込んだアイズさんは円を描くように足を捌き、旋風のごとく、四方のモンスターをまとめて横一線に斬り飛ばした。

ゴオオン

「ガアア!!!?」

ドサツ

ザアン

「!?!」

その戦いっぷりを見ながら僕は、「バーバリアン」というかモンスターが手にしている天然武器を振り上げた瞬間、魔力で筋力を強化した前足で天然武器に飛び乗り、その脳天に思い切り叩き落として、その一体を倒し、続けざまに【幻書の術】の中から出して口に啞えた刀でモンスターの喉元を斬って倒す。

「やっぱり街の事件からアイズ、ちょっと怖いわね。鬼気迫っているというか。そんなに調教師の女って強かったのかしら?」

「ん〜、わかんないけどっ」

そんな僕の横で同じく、バーバリアンをはじめとした二十以上のモンスターの群と戦うテイオネさんとテイオナさんは、アイズさんの戦いっぷりを見て、言う。

「私も前、行くね！」

「あ、こらっ、周りの奴ら倒して行きなさいよ!」

「四葉、よろしく!」

「!?!」

そして、ティオナさんは大双刃を振り回しながら強引に道を開け、アイズさんのいる前方へ駆け出して行ってしまった。

「あああ、もう!!四葉、半分お願い」

コクツ

「・・・」

その結果、ティオネさんとティオナさんの分のモンスターを半々で受け持つことになった。

受け持つ了承をするのに刀を咥えているせいで、声が出せなかったから、頷いて、答えた。



「流石に腰が引けるなあ・・・リヴェリア、何も話を聞いていないのかい?一度辛酸を舐めさせられたくらいで、ああにはならないだろう」

「駄目だ。『何でもない』の一点張りで何も話そうとしない」

「今、灸を据えても意味はなさそうだね・・・やれやれ」

そして、前方のモンスターを一手に引き受けてくれているアイズさんとアイズさんの元に行ってしまったティオナさんのお陰か、僕等の方は、徐々に手持ち無沙汰になっていって、フィンさんは困ったように残ったモンスターをティオナさんと一緒に時間をかけずに殲滅していつているアイズさんを見て言った。

同じく、アイズさんを見ていたリヴェリアさんはその心労を語るように盛大にため息をついた。

「あの、団長、リヴェリア様・・・アイズさん、大丈夫なんですか？」

「ああいった状態の時は、大抵空腹になれば治まるが・・・腹を空かせた素振りを見せたら、すかさず餌付けをしてみろ。落ち着くかもしれない」

「へっ!？」

そんなリヴェリアさんとフィンさんにアイズさんの様子に心配そうにしながらレフィーヤさんは聞いた。

けど、僕としても思いもよらない方向からの返答が返ってきた。

内心、『いやいや、流石にそれは』って思った。

アイズさんは、小さな子供でも、動物でもないんだからって

「えっ・・・餌付けだなんて・・・そんな」

「・・・」

「は・・・はいっ!!全力で、心の準備をしておきます!!」

「?・・・うむ」

けど、レフィーヤさんは頬を、いや、耳まで真っ赤にしてリヴェリアさん敬礼までして、返事を返した。

レフィーヤさんはアイズさんを餌付けする気満々みたいだ。

それに、リヴェリアさんの言葉の裏に『今はまだ放っておけ』という言葉が隠れているようにも思えた。

今は、その言葉を信じようと思った。



「もう相当モンスター達を倒してるし、結構お金も溜まったんじや

ない？ダンジョンに五日くらいもぐって探索してるしさあ」

「そう、かな・・・」

「地上で普通に換金すれば、三〇〇〇万くらいはいくんじやないの？レフィーヤ、今待ってる証文はどのくらいの金額？」

「待つてください、えーと・・・リヴィラの街で買い取ってもらったものだけど、一〇〇〇万ヴァリスには届かないくらいです」

その後、レフィーヤさんやラクタさんと一緒に倒したモンスターから魔石やドロップアイテム類の戦利品を回収して、その場を後に、僕等はこの階層のさらに奥へ進み、中心部で探索を続けた。

その何度目かのモンスターとの戦闘後、テイオナさんが明るくアイズさんに話しかける。

そして、テイオナさんがレフィーヤさんに確認を取る横でアイズさんは何かを振り払うように頭を振って、暗い顔になる。

スリスリッ

「！・・・四葉」

そんなアイズさんを見て、堪らなくなった僕は、アイズさんに頭をすり寄せた。



「あ、ルーム」

「結構、広い」

そのまま、アイズさんから付かず離れずの距離を保ちながら、出会うモンスター達を倒して進み、僕等はこれまでより大規模なルームに辿り着いた。

そのルーム内を見回していると、何となく床が気になった。

ビキリッ

「あれ、どこから?」

「下」

すると、そこに亀裂音がして僕等の足もとの地面からクモの巣のようにはび割れ、それがどんどん広がって行って、次には十以上もの「スパルトイ」という名の骸骨のモンスターが一斉に産まれ出た。

「フィン、私が行く」

「あ、アイス!」

「アイスさん!」

アイスさんは一応、フィンさんに断ると飛び出して行ってしまった。

「っ!」

「ガッツ!」

一匹は、押し出した盾ごとまとめて切断。

一匹は、攻撃をかわして横から、一匹は、すれ違いざまに強烈な一閃を胴体へお見舞いして倒した。

「オオ、オオオッ!」

「ーッツ!!」

「・・・っ!」

それでモンスター達はアイスさん一人に向き、骨を震わせて威嚇。まるで、モンスター達がアイスさん相手に団結しようと呼び掛けているようにも思えた。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!」

ヒュンツ

「・・・」

その後は、本当にあつという間にモンスター達を全滅させたアイズさんは剣を振り鳴らして、切っ先を地面に向けた。

そして、辺りには滑らかに切断された骨の一部が数え切れないほど散乱していて、未だに上半身についたままの魔石が輝きを散らしているのもあった。

「結局一人でやっちゃったし・・・」

「ちよつと苦戦でもしてくれろと、もっと可愛げも出てくるのにな・・・」

そんなモンスター達の亡骸の中心に無言でたたずむアイズさんにテイオナさんとテイオネさんはどこか非難しているみたいな言葉と、皮肉めいたため息をそれぞれの口からこぼす。

「・・・アイズさん、お疲れ様です」

「うん・・・後はお願い、レフィーヤ、四葉、ラクタ」

「うん」

「は、はい」

そして、アイズさんはこちらに戻ってきて、レフィーヤさんや僕、ラクタさんとすれ違う時にそうお願いされ、レフィーヤさん達とアイズさんが倒したスパルトイの戦利品や魔石の回収に向かった。

「はいはい、お疲れアイズく！回復薬いる？万能薬は？アイズの大好きな小豆クリーム味のジャガ丸くんはどう!？」

「そもそも、傷一つ付けられてないんだから、回復薬も何も必要ないわ」

「大丈夫、テイオナ。ありがとう。・・・最後のは欲しい」

そこにすかさず、気を取り直したティオナさんがアイズさんに声をかけるのと、ティオナさんに軽く突っ込むティオネさんの声を聞いた。

ある意味、絶妙なタイミングだったのか、ティオナさんはジャガ丸くんという名の餌付けを行って、アイズさんはきりつとした顔をしていたけど、ティオナさんからジャガ丸くんを受け取って食べていた。食べた瞬間、少し落胆した様子だったけど。

「くうく、ティオナさんが餌付けを〜」

「ハハハ、レフィーヤさん、行ってくる？ここ、僕とラクタさんで大丈夫そうだし、ね？ラクタさん」

「はい」

「うう、では、少しだけ。袋、置いておきます」

その様子を戦利品を集めながら見ていると、レフィーヤさんがものすごい悔しそうに言うものだから、僕とラクタさんはレフィーヤさんを送り出すことにした。

「何はともあれ、あらかたモンスターは片付けたな……。この後はどうする、フィン？」

「んー、そろそろ帰ろうか？今回はお遊びみたいなものだし、ここで長居して、帰り道でダラダラと手を煩うのも面倒だ。リヴェリア、君の意見は？」

「団長の指示なら従うさ。・・・お前達、撤収するぞー！」

「はーいー！」

「わかりましたー！」

「わかったー！」

レフィーヤさんを送り出し、ラクタさんとせつせとサポーター業に精を出していると、リヴェリアさんからそんな指示が飛んで僕等はそ

れぞれ返事をした。

「それにしてもさあ、もし今頃ベートと一緒に来てたら、絶対やかましいことになってたよね。あの狼男、アイズの前では途端にはり切っちゃうんだもん！」

「あの宴会の後、酔いが醒めた後にそれとなくアイズに拒絶されたことを伝えたら、凄い勢いでへこんでたわよ」

「うっわアー!? 超見たかったー! 何で教えてくれなかったのティオネ〜!」

そして、ティオナさんはそんな話題を持ち出した。

そう言えば、宴会の時にベートさんを足をロープでグルグル巻きにしたことを思い出して、彼の事を思い出していた。

「・・・フィン、リヴェリア。私だけまだ残らせて欲しい」

「「?」」

「・・・」

そこにアイズさんがそんな申し出を出し、僕等は驚いてアイズさんの方を見た。

見て、思った。

「ああ、これは止められない」って

「食糧も分けてくれなくていい。皆には迷惑をかけないから。お願い」

「ちよ、ちよっと〜! アイズ、そんなこと言う時点で私達に迷惑かけてる! こんなところにアイズを取り残していったら、私達ずっと心配してるようだよ!」

「私もティオナと同じ。いくらモンスターのレベルが低くても、深層に仲間一人を放り出す真似なんてできないわ。危険よ」

当然、アイズさんのその申し出にテイオナさんとテイオネさんは心配から抗議する。

「何でアイズはそんなに戦いたがるの？」

「・・・」

そして、テイオナさんは眉を下げてアイズさんに問う。

けど、アイズさんは押し黙ってうつむいてその問いに答えはしなかった。

「アイズはすつごく別嬪なのに、もったいないよ。もうちよつと女の子しようよ。アマゾネスの私の方がお洒落でどうするのよおー」

「私は・・・そういうのは、いいよ」

「なんでえ？強い雄・・・お気に入りの男とか見繕わないの？アイズその綺麗な顔は飾りなの？」

「あんた、自分でもしないことを押し付けるのは止めなさい」

それでテイオナさんは、ならばと、アイズさんを強引にでも引き止めようとするかのように、まくし立てるようにアイズさんに言った。それにテイオネさんは、やり過ぎだとばかりに呆れてテイオナさんに突っ込みを入れる。

「フィン、私からも頼もう。アイズの意味を尊重してやってくれ」

「リヴェリア!」

そんなテイオナさんとテイオネさんを一步離れて見守っていたリヴェリアさんがフィンさんに振り向いて言った。

「んー・・・？」

「この子が滅多に言わない我がままだ。聞き入れてやって欲しい」

「そんな、子を見守る親みたいな気持ちじゃあ動けないよ、リヴェリア。テイオナ達の言っていることの方がもつともだ。パーティーを預かっている身としては、許可できないな」

「甘やかしている自覚はあるが・・・さて」

そして、リヴェリアさんはアイズさんを見て

「私も残ろう」

「わかった、許可するよ」

「ええ、フィン。説得してよ」

フィンさんに視線を戻して、自分も残ることを告げた。

それに許可を出したフィンさんにテイオナさんは不服そうな顔で抗議の声を上げた。

「リヴェリアが残るなら万が一にも間違いは起こらないだろうしね。逆に僕達の方が帰り道で危険な目に遭うかもしれないけど」

「私は攻撃と回復を器用になんかこなせませんからね、団長」

それに苦笑して言うフィンさんに、その決定には逆らわないテイオネさんの声にも少し棘があるように思えた。

フィンさんは、それらを全て受け止めて、アイズさんとリヴェリアさんがこの階層にとどまることを正式に認めた。

「アイズさん、ここに残るんですか？」

「うん・・・我儘言っただ、ごめんね」

「あ、その、えつと・・・じゃ、じゃあつ、私も残ります！絶対に足手纏いにはならないのでつ、サポーターをやらせてください！」

「あ、それなら私も残るー！何だ、簡単じゃん！」

「物資が残ってないって言うてんでしょ。二人分ならまだしも、三人も四人も分け合う食料と水はアイズ達にも私達にも残ってないわ

よ」

「うう~~~~~~~~~~~~」

そして、テイオネさんの指摘にレフィーヤさんとテイオナさんが泣く泣く退く。

「で、さっきの提案の本意は何だい？まさか、言葉通りではないだろうか？」

「・・・今あの娘を止めたとしても、後回しになるだけだ。いずれどこかで、きつと何かをやらかす。目の届かないところで破裂されるくらいなら・・・目の前で大いに爆発させた方がいい」

「なるほどね。お見逸れするよ」

そんなテイオナさん達の様子を眺めていたリヴェリアさんがリヴェリアさんに近付いたフィンさんは小声で問うと返ってきたその答えに笑うと目を閉じた後、流し目を送る。

「例の調教師が現れることはないと思うけど、どうか気を付けてくれ。僕の手持ちの精神力回復薬は全て置いていく。アイズの独断を許したのは君だ、君が彼女の分まで責任を追わなくてはいけない」

「わかってている・・・そして、すまない、ありがとう」

そして、フィンさんのポーチからリヴェリアさんに精神力回復薬の入った試験管が受け渡されているところに僕は、近付いた。

「ん？」

「四葉、どうかしたかい？」

「・・・」

そんな僕に気付いたフィンさんとリヴェリアさんに僕は、どうしようかと考えた。

だって、フィンさんの精神力回復薬をリヴェリアさんに渡していたから、僕用の回復薬と精神力回復薬が入ったポーチを追加で渡したら、荷物になるんじゃないかって思った。

「四葉もリヴェリアにそれを渡そうと思ったのかい？」

「・・・」

フィンさんは、僕の啜えている僕のポーチを見て察してくれた。

「・・・荷物になる？」

「いや、お前の心遣いが嬉しい。有り難く受け取ろう」

「・・・うん」

そして、リヴェリアさんも受け取ってくれた。

そのポーチにフィンさんから受け取った精神力回復薬を入れて、リヴェリアさんはアイズさんのもとに歩み寄って行った。

「さあ、僕等は撤退の準備をしようか？」

「・・・うん」

その後は、フィンさん達と撤退の準備をして、このルームに存在するたった一つの出入り口の前で、アイズさんとリヴェリアさんと別れて、僕等は地上を目指して歩き始めた。

第56話・人魚の絶世の歌声

「うわあ、二十七階層だ！すっずしい〜」

「流石、水の迷都。水のお陰で、空気がひんやり」

「足元には気を付けなさいよね。滑りやすくなってるんだから。特に、四葉」

「う、うん」

そして、アイズさんとリヴェリアさんと別れた僕等は、
“水の迷都”
と呼ばれる二十七階層まで上がってきた。

「そうですね、滑って転んで川にでも落ちたら、大変ですものね」
「ええ、水妖精の護衣（ウンディーネ・クロス）が無い今、巨大魚（レイダーフィッシュ）や水晶巨亀（クリスタルタートル）にでもあったら厄介よ」

「流石に水の中じゃ体の自由が利かないからね。第一級冒険者でも、苦戦を強いられてしまう」

僕からすると、水妖精の護衣が有ろうが無かろうが、泳げないから、川に落ちでもしたら、大変な事になるのは目に見えていた。

「!？」

「・・・ん？」

「どうかしましたか？団長」

「しっ」

「ーラアーラアーラアア・・・」

「これは・・・歌声？すごい、綺麗・・・」

その時、何処からともなく歌の様なものが聞こえてきた。

「・・・そう言えば、ギルドで面白い冒険者依頼があったな。下層域

で聞こえてきた歌の正体を、突き止めて欲しいという内容で・・・それこそ、モンスターの鳴き声には到底思えない、絶世の歌声だったらしい。依頼人は気になって、夜も眠れない・・・という話だったかな？」

「絶世の歌声・・・さつき聞こえてきた歌のことですか？確かに、聞き惚れちゃいましたけど・・・」

「それはわからない。ただ、確かめてみるのも面白そうだと思うなにかい？」

「うん！すごく思う！」

「ははっ、四葉は、乗り気になったね？」

その歌声の正体を確かめてみないかと言ったフィンさんに僕は、今度は賛成した。

ギルドでは反対したけど、いざ聞いてみると気になって仕方なかった。

「コラ、四葉。それに、団長。その冒険者依頼を請け負っていないということは、報酬も手に入りません。寄り道するには、割に合わなくありませんか？」

「ははっ、テイオネは浪漫がないなあ。胸を疼かす探究心こそが冒険の醍醐味だろう？とは言え、君の言うことも一理ある。皆も疲れてることだろうし、ここは僕一人だけが残って・・・」

「それは狡い！僕も行く！」

「うん、じゃあ、二人で行こうか？四葉」

「うん！」

ニコツと笑って僕の同行を許してくれたフィンさん。

「団長と四葉を二人つきりになんてさせません！あんた達！行くわよ！」

「・・・」

すると、ティオネさんが反応して、ティオナさん達に呼びかけた。本当にこの人は、フィンさんの事になると決断が速いなんて思う。

「うん！わかった、なんだか楽しそうだし！」

「私もお供します」

「わ、私も」

「決まりだね。それじゃ、歌声の正体を調べるために、とりあえず」

巨蒼の滝（グレート・フォール）“へ向かおう”

「シヤアアアアアア!!」

「おっと、どうやら水の迷都は僕達を歓迎してくれているようだ。じゃあ、行こうか」

そして、出てきたモンスターを倒しつつ、僕等は全員で「巨蒼の滝（グレート・フォール）”へ向かうことになった。



「ふふふくん♪」

「さつきからのすごくご機嫌ですね！ティオネさん！」

「フィンと何時もより長くいられるから、嬉しいんじゃない？」

しばらく歩いているとティオネさんが鼻歌を歌い初めた。

「うっふ・・・わかる〜？」

「わかりますよ。なんだかうっとりしてますし、何時もより魅力が三割増しっていう感じで」

「そう！魅力!!」

「わっ！いきなりどうしたんですか！ティオネさん!」

そして、ティオネさんはレフィーヤさんの言葉に声を張り上げた。

「団長の魅力はね、紡ぎ出される美しい言葉よね。もちろん、とつっても強いところも魅力的だわ!そして何よりも、あの柔らかな物腰と人を射るような鋭い目つき!この二面性がまたいいのよねえ」

「はあく、始まつちやつたよ。ティオネの団長大好き語り」

「え、えくつと、す、好きな人がいるっていうのはいいことですよね!」

「レフィーヤ〜?無理しなくて良いからね」

「はっ!それにしても団長、絶世の歌声に興味を持つててことは、もしかして・・・団長は歌が好きってことなのかしら・・・?」

「えっ!?!」

ティオネさんはフィンさんの魅力?を嬉しそうに語って、フィンさんが、「絶世の歌声」に興味を示してる事について、そういった解釈をした。

「浪漫・・・とか言ってたくらいだし?くうう〜!団長を惑わすなんて・・・許せないわ・・・!!」

「ティオネさん!なんだな異様なオーラをまとっています!そして思考が完全に暴走している気がします!」

「レフィーヤ、放っておいて大丈夫だよ」

「絶世の歌声ですって・・・?どんな歌声か聞いてやろうじゃないの・・・」

「シヤアアアアア!!」

「あ、モンスターだ」

「かかってこいコラアアア!!」

「もしかしくなくても・・・八つ当たり?」

そして、ティオネさんは表れたモンスターに向かって飛びかかっていった。

・・・完全な八つ当たりのように思えた。

「あの！団長！」

「ん？なんだい？」

「その、『迷宮に響く歌声』の正体についてなんですけど・・・」
「この前の遠征で二十五階層を通った時に、確か歌を歌うモンス
ターがいたような・・・」

「ああ、歌声の正体は十中八九、人魚（マーメイド）だろうね」

「なーんだ。もうわかりきってるじゃん」

「ちよつと、ティオナ。団長はそんなの百も承知よ」

もちろん、僕も承知の上だ。

「他に何か特別な理由があるから、わざわざ出向こうっておっ
しやってるのよ！」

「特別な理由・・・ですか？」

「通常、人魚の歌が階層をまたいで聞こえてくる事はない。まして
や、絶世の歌声には聞こえないしね。ねえ？四葉」

「うん。人魚の歌は、僕等には不協和音に聞こえるはずなんだ。破
滅の歌って言われてるくらいだし」

「あ、そっか」

「つまり、冒険者依頼の依頼内容は通常の人魚ではなく、特別な人魚
の存在を示唆している。その特別な人魚を確認しに行くのが、今回の
目的ってわけさ」

「おー！なるほど！」

「少し考えれば分かることでしょ！バカティオナ！四葉だって、レ
フィーヤだって気付いてたわよ。ねえ、レフィーヤ？」

「え、ええつと！」

ティオネさんの言葉に、ちよつと、困った風に笑うレフィーヤさん、
ぶつちやけ、さつき聞いた歌声を聞くまで、僕的には興味はなかつ
た。

なかったけど、聞いた瞬間にどんな人魚なのか見てみたくなったんだ。



「皆、水流の幅が広がってきた。用心するように。誰かが水流に落ちれば、必ず助ける。けど、余計な手間は避けたい」

「は、はい」

「う、うん」

それから、暫く進み、フィンさんの注意が飛ぶ。

当然、気を引き閉める僕。

「団長ご安心を。団長の手を煩わせるようなことは、絶対にさせません。」

「ははは。心強いよ、テイオネ」

「団長くくくくくくくく」

「じゃあ、もう一つ、人魚の話題が出たついでに確認しておこう。人魚に遭遇した時、何に注意が必要だったかな？ 四葉」

「はい！ 歌声です。人魚の歌声による『魅了(チャーム)』は、数ある異常効果の中でも特別で、いわば、精神攻撃で、発掘アビリティで『耐異常』があっても防ぎきれません。」

そして、質問されたから、僕は、先生に答えるようにフィンさんに答えた。

「その通り、防ぐ手段は耳をふさぐか、歌声に屈しない精神力で対抗するしかない」

「ふふ。団長を惑わすような人魚がいようものなら・・・私がぶっ潰す!!」

「・・・」

それに満足そうに頷くフィンさん。

ティオネさんはすごく、燃えていた。

そんなティオネさんを見て、僕は、密かに失礼だけど、この中で一番、ティオネさんが危ないんじゃないかって思った。



「ねーねー、特別な人魚って本当にいるの？さっきからモンスターと戦ってるけど、そんなのいる気配なんてないよ？」

「とりあえず、巨蒼の滝（グレート・フォール）まで行ってみよう。それまでに見つからなかったら、残念だけど今回は諦めるとするさ。ねえ？四葉」

「うん」

「きやつー！」

バシヤアアン

また、しばらくモンスターと戦いながら進んでると、レフィーヤさんが足を滑らせてしまった。

「だ、大丈夫？レフィーヤさん」

「だ、大丈夫ですよ？四葉ちゃん。ちょっと、足を滑らせただけですから」

「川に落ちたら大変よ？気を付けてね？四葉もよ？」

「はい！」

「うん！」

そんなレフィーヤさんに声をかけると、ティオネさんも優しく声をかけてくれて、僕とレフィーヤさんは一緒に頷いた。



「フンフンフン♪」

「??」

またまたモンスターを倒しながら歩いているとティオネさんが歌を歌い初めた。

「ティオネさん、何を歌ってるんですか？」

「あら？即興の歌よ。団長は歌が好きらしいから、私も負けてられないわ」

「はあ・・・」

「そんな話した??」

「しっ！四葉ちゃん、しー」

「う、うん」

その理由は、フィンさんのため。

けど、フィンさんは、歌が好きだとは言っていないくて、不思議に思っ
て、ボソツと言うと隣を歩いていたラクタさんに、口元に人差し指を
立てて言われ、僕は、頷いてお口にチャックをした。

「はあく。あの団長の後ろ姿・・・なんて勇ましいのかしら。団長、
私、どこまでもついていきます・・・！」

「すごい・・・魅了（チャーム）」は人魚だけのものではないんで
すね！団長も「魅了（チャーム）」の使い手だったなんて・・・！」
「効果はティオネだけに限定されるけどね・・・」

そして、目の前の会話を僕は、黙って見ていた。



「もうすぐ巨蒼の滝（グレート・フォール）に着く頃だ」

何故か、ラクタさんからそんな指示をされ、僕は、水辺な事もあって、あまりきかない嗅覚と気配を頼りに、テイオナさん、レフィーヤさん達と共にモンスターに向かつていった。ちなみに、なんでラクタさんがそんな指示を出したかと言うと、今のテイオネさんは、僕が見ちゃいけないモノだからだそう。ちなみにのちなみに、僕の視界が真っ暗になったのはラクタさんが僕の両目を両手で塞いだからだった。



「ふう・・・モンスターを倒したはいいもの・・・」

「団長〜!」

「テイ、テイオネさん!」

「私、団長の頭からつま先まで、全てにメロメロなんです〜!!」

「う、嘘でしょ!?まさか、魅了(チャーム)のせいで精神錯乱!」

そして、どうにかこうにか、モンスターを倒すと僕の背中に乗ったラクタさんによって物理的に目と耳を塞がれた。

「あまり言いたくありませんが・・・人魚への嫉妬で心に隙が生まれ、そこを突かれてしまった!」

「間抜けすぎる・・・」

「というか、人魚に『魅了(チャーム)』されるんじやなくて、団長に矢印向きっぱなしなんですわ・・・」

「団長〜!」

「ああ!テイオネさんが暴走しました!」

「あつ、フィンも逃げた」

そのまま、僕は、合図があるまでその状態に耐えていた。

「シー、まいったな、これは」

「ああくん、団長く！まっつてく！」

「ありや、完全にやられてるわ・・・」

「特別な人魚どころではないですね。そして、ラクタさん、グツジョブです」

「うんうん。何が起きるかわからない・・・それが、ダンジョン！」

「ああく、団長く、まっつてく」

そのあと、頃合いを見て、ラクタさんじゃなく、テイオナさんとレイヤーさんから合図が来て、僕等は、離れていつてるフィンさんとテイオネさんを追いかける事になった。

第57話・膝枕と

「もうつつつつつしわけありませんでした!!!」

「ははは、まあなかなか楽しかったよ。・・・でも、次はどうか勘弁してくれ」

その数時間後、僕は、ティオネさんのものすごく綺麗な土下座を目撃した。

「本当に！申し訳！ありませんでした！団長をお守りするどころか、人魚の『魅了（チャーム）』にひっかかってご迷惑をかけてしまうなんて・・・」

「さつきから、ずーっと、あの調子だね。」

「はい・・・そろそろ立ち直って欲しいですけど・・・」

「・・・うん」

とうとうか、ティオナさんのいう通り、ティオネさんは人魚の魅了（チャーム）の効果が切れた頃からずーっとフィンさんに謝り倒している。

「もういいよ、ティオネ。顔を上げてくれ」

「団長・・・」

「もしまだ罪悪感があるというなら、今後の働きぶりで、埋め合わせをして欲しい」

「団長・・・！はい！喜んで！」

そして、フィンさんがティオネさんに向かってそう言うと、ティオネさんは何時ものティオネさんに戻ったようだった。

「さ、さすが団長です！」

「シャアアアアア」

「あつ、ブルークラブだ」

「おらおらー！かかってこいやああ!!」

「ははっ、頼もしいね」

「団長」

早速、出てきたモンスターにティオネさんは襲いかかっていった。

「ドタバタしてしまっただし、冒険者依頼はもう終わりにしよう。撤収だ」

「はいー!」

そして、僕等はそこから撤収して、上の層を目指し直す。



「もうすぐ、二十四階層の連絡路だね。あと一息!」

「あ、あの」

「ん?どした?」

「その…次にモンスターが来たら、私に倒させてくれませんか?」

地上を目指して歩いているとレフィーヤさんが唐突に言った。

「ん?どうしたの?レフィーヤ?」

「その…今ままであまり出る幕がなかったの…せめても、と思っ」

「えーっ、別にどんどん倒しちゃって良かったのに」

「馬鹿ティオナ。今までの敵、レフィーヤが詠唱する前に私達が倒しちゃってたでしょ」

「なるほど」

「詠唱速度もそうですけど、広範囲の殲滅魔法もちゃんと練習して起きたいなって」

「わかった。そういうことなら、やってみると良い」
「あ、ありがとうございます！精一杯、頑張ります！」

そういうわけで、ここからは、レフィーヤさんがメインで戦うことになって、僕等はそのサポートをすることになった。



「ようやく、水の迷都を抜けて中層に入ったと思ったけど・・・どうも、妙だな。」

「・・・うん」

「団長もそう思いますか？四葉、貴女も」

そして、僕等が二十四階層に入った時、僕はその違和感を感じた。その同じかはわからないけど、フィンさんもテイオネさんも何かを感じたらしい。

「えっ？何が、何が??」

「モンスターの数が、何時もと比べてやけに多いと思わない?」

「うーん・・・よくわかんない！」

「確かに、言われてみれば」

「シャアアアアア」

「わっ！また来ました！」

まさに、僕の感じた違和感はそれで、言ってる傍からモンスターが僕等に向かって来た。

「よおーし、来い来い！」

「なんだか、楽しそうですね」

とりあえず、その向かってくるモンスターを倒すために僕等は戦闘

を開始。



「ふう〜、流石に連戦は疲れたく〜！」

「やはり・・・このモンスターの異様な数。気のせいじゃないよう
だ・・・」

その後は、連戦に連戦で、テイオナさんじゃないけど、僕もかなりの
の疲れが出ていた。

「もしかして、十八階層の一件と何か関わりが？」

「今は判断材料が少なすぎる。それに早急に結論を出すこともない
だろう。とにかく、今は地上を目指そう」

「シャアアアアア」

「・・・噂をすれば、だね。行くぞー！」

「「「はい！」「」」」

それでも、襲ってくるモンスターがいらない、なんてこともなく、襲つ
てくるモンスターに向かって、僕も刀を咥え直すと皆と一緒にモン
スターへの攻撃を開始した。



「やっと、地上についた〜！」

「こっちは、夜か・・・あ〜、空気が美味しい〜。は〜、早くお風呂
入りたいわ〜」

そして、ようやく、地上に出た僕等。

途中の十八階層でフィンさんの指示で僕は、獣人姿まで魔法を解く
ことになった。

理由としては、変に他の神様達に目をつけられないようにするため、らしい。

「レフイーヤ、どうしたの？」

「レフイーヤさん??」

「アイズさんが帰って来るまで・・・ここで待っていいようかなって」
ホームに向けて、歩きだしかけた時、ふいにレフイーヤさんが立ち止まった。

「あははっ、大丈夫だって！心配しすぎだよ！」

「でも・・・」

「心配したって、アイズがすぐに帰って来るわけじゃないじゃん？
ホームで『お帰り〜』って迎えてあげよ？」

「そうだよ、レフイーヤさん！笑顔で迎えてあげよ？」

「・・・そうですね。私も、アイズを笑顔で迎えます！」

「んじゃあ行くよ〜！」

なんとか説得して、レフイーヤさんとテイオナさんと一緒に帰りかけた時だった。

「あはは、ははははー！」

「??」

「??」

何故か、嬉しそうに笑いながら、ダンジョンに向かって走っていくベルさんの姿を、僕は、見た。
なんで、こんな夜に?って思った。

「レフイーヤ〜、四葉〜、置いてくよ〜！」

「あ、はーい。四葉ちゃん、行きましょ?」

「ごめん！先に帰ってて！僕、バベルでおトイレ、借りてくる！」
「えっ!?四葉ちゃん!？」

妙にハイテンションな感じだったし、とてつもなく気になって、だから僕はレフィーヤさんに適当に嘘をついて、ダンジョンに引き返した。



ザアアン

「ギャアア!？」

「・・・いない」

バベルの一階からダンジョンへ繋がる大穴に取り付けられた螺旋階段をいちいち駆け下りるのもまどろっこしくて、大穴の中央に飛び込むようにして、ダンジョン一階層に下りた僕は、そのまま、モンスターと戦いつつ、ベルさんの姿を探した。

「「ファイアボルト」！」

「!？」

そして、遠くの方から、ベルさんの詠唱をする声が聞こえた。

「・・・そういう事か」

「ギィィ」

「・・・」

ダッ

ザアアン

「ギャアア!？」

それで何となく、ベルさんのテンションが高かった理由が解った気

がした。

「ファイアボルト!？」

「グアアアアアアアア!？」

「ファイアボルトオオツ!？」

「エブシツ!？」

「ファイアボルトオオオオオオオツ!!」

だからこそ、危ないんじゃないかとも思った。

その証拠に僕の耳に届いてくるベルさんの詠唱をする声は、かなり興奮している感じで、乱発している感じだったから。

僕は、出会すモンスターを倒しつつ、詠唱をするベルさんの声と匂いを頼りにベルさんを急いで追い掛けた。

◆◆◆

「ファイアボルト!」

ボウツ

「ギヤア!？」

「ファイアボルトオオツ!ファイアボルトオオオオオオオツ!!」
ボオツ

「ギヤア!？」

ボツ

「ギイイ」

そして、僕は五階層でベルさんを見つけた。

「あ、五階層まで来ちゃった……」

「ベルさん!」

「えっ?……あっ!……う、ん?」

どうやら彼は、魔法に夢中で気が付かないまま、ここまで下りて来ていたらしく、声をかけると、僕の方を嬉しそうにベルさんは振り返ろうとした。

ぐらあ

「え．．．？」

ドサツ

「ベルさん!？」

そして、その時、それは突然訪れた。

ベルさんは足がおぼつかず、そのまま、地面に倒れ、あっさり意識を手放してしまった。

「．．．やっぱり、精神疲弊だよね」

「．．．四葉？」

「!？」

僕はすぐにベルさんに駆け寄ると一応、息をしているかの確認をした。

そうしていると、上の階層からじやなく、下の階層の方から僕の名前を呼ぶ声が出て、僕はそちらを振り向いた。

「．．．アイズさん．．．リヴェリア」

ゴオオオン

ドサツ

「!？」

そして、すぐにアイズさんの姿が目に見え込んで来たと思ったなら、リヴェリアさんがズカズカともものすごい怒りの形相で僕に迫ってきて、強烈な拳骨を僕の頭に振り下ろした。

あまりの衝撃に僕はその場に倒れ込んだ。

その瞬間、アイズさんの息を呑む声がかすかに聞こえた気がした。

「こんな所で一人で何をしている！この馬鹿娘！フィン達はどうかした！」

「・・・フィンさん達は、先に・・・僕は、その人を」

「ん？」

「あつ」

僕を怒鳴り付けるリヴェリアさんに僕は、フィンさん達は先に帰っていることと、震える手で倒れているベルさんを指さして、ここにいる理由を伝えた。

「この子」

「ん？何だ、アイズ、知り合いか？」

「ううん、直接話した事はないけど・・・あの、前に話したミノタウロス・・・」

「・・・なるほど。あの馬鹿者がそしつた少年か。四葉、この少年、モンスターにやられたのか？」

「ううん。精神疲弊。僕も一度、地上に出ただけど、この人が、ベルさんが」

「!?四葉、この子の名前、知って」

そして、痛む頭を擦りながら、詳しく話そうとしたら、僕が彼の名前を知っていたことにアイズさんがビツクリしていた。

「アイズ」

「！」

「四葉、続けてくれ」

「うん。このベルさんが凄いハイテンションでダンジョンに向かうのを見て、〃夜なのにどうしたんだらう？〃って思ったんだ。それで、気になって追い掛けたんだけど、そしたら、魔法の詠唱をする声

が聞こえて、嬉しそうに乱発している感じだったから、やめさせようって思ってたけど、間に合わなかった」

「・・・そうか」

とりあえず、続けて説明して、最後に僕は、シユンと耳と尻尾を垂れさせる。

「たしかに、外傷は無いし、典型的な精神疲弊だな」

「リヴェリア。私、この子に償いをしたい」

そして、一応、リヴェリアさんはベルさんを診て、そう結論を出すと、アイズさんが言った。

「・・・言い様は他にあるだろう。まったく」

「?」

そのアイズさんの言葉にため息をつくりヴェリアさんに僕とアイズさんは、それぞれ、別の意味で頭に疑問符を浮かべた。

ちなみに、僕が疑問符を浮かべたのは、リヴェリアさんがため息をついた理由が解らなかつたからで、アイズさんは、以前にリヴェリアさんに尋ねられた答えを言つたつもりが、ため息をつかれ、
“ あれ？
” っと思つたらしい。

「まあ、この場を助けるのは当然の礼儀として・・・」

「うんうん」

「・・・アイズ、今から言うことをこの少年にしてやれ。償いなら、恐らくそれで十分だ」

「何?」

「起きるまで、膝を使って寝かせてやるんだ」

「・・・そんなことでもいいの?」

そして、リヴェリアさんが言ったアイズさんのベルさんへの償い方法に僕とアイズさんは瞬きをして、同時に同じ言葉を言った。

「確証はないがな。だが、この場を守ってやるんだ、これ以上つくす義理もないだろう。．．．それに、アイズ、お前のなら喜ばない男はいないさ」

「よく、わからないよ．．．」

「僕も．．．」

わけがわからない。

何で、アイズさんの膝で、なんだろうか？

再び、僕は疑問符を浮かべた。

「わからなくてもいいさ。四葉、私達は戻るぞ。残っていても邪魔になるだけだろう」

「う、うん」

けど、リヴェリアさんが言うんだから、間違いは無いんだろうと思う。

「はじめをつけたいのなら、二人きりで行え」

「うん。ありがとう、リヴェリア。また、後でね？四葉」

「ああ」

「うん。リヴェリアさん、荷物、僕が持つ」

「ああ、頼む」

「【ストレージ】」

そして、アイズさんはリヴェリアさんに礼を告げて、僕にそう言った。

それを聞いて、僕はリヴェリアさんと共にその場を後にしつつ、リヴェリアさんが持っている杖以外の荷物を受け取り、【幻書の術】の中

へ入れた。



「さて、どう転ぶか……いい方向に転がってくれるなら喜ばしいが……それに……まあ、悪い方向には転ぶまい」

「……」

それからしばらく進んで、道に立ち塞がる蛙モンスターを倒したりしていると、リヴェリアさんがそう呟いた。

「……そういえば、お前もあの少年を気にしているようだが、そういう事か?」

「えっ? そういう事って?」

「……お前には、まだ、この手の話は早いか」

その背中を見ながら歩いていると、リヴェリアさんが僕に、僕にはわからない話題をふった。

リヴェリアさんの言っている意味はわからないけど、僕がベルさんを気にする理由が僕の中には、ハッキリと有った。

「声がね」

「声?」

「ベルさんの声が、キリトに似てるの」

「!?!」

「だから、どうしても気になって……キリトには、沢山、助けて貰ってたから、それを返してるつもりになってるんだと思う」

「……そうか」

だから、その事をリヴェリアさんに言うと、リヴェリアさんは、そう小さく呟く。

「やはり、帰りたいか？お前の世界に」

「・・・うん。アスナやキリトに会いたい気持ちもあるけど、お父さんやお兄ちゃん、お姉ちゃん達にいつぱい心配かけたこと謝らなきゃいけないから」

「・・・そうか」

そして、聞かれたことに答えると、その後は、地上にホームに帰りつくまで、僕とリヴェリアさんの間に会話はなく無言だった。

第58話・おかえりなさい

ワシヤワシヤ

「・・・」

ワシヤワシヤ

あの後、リヴェリアさんとホームに帰った僕は、今、お風呂場で丸洗いされている。

「ハハッ！楽しいい〜」

「じつとしてなさいよ」

誰につて、もちろん、ティオナさんとティオネさんにだ。

ちなみに、現在、僕は大型犬バージョンで、この前に、仔犬バージョンと獣人バージョンと洗われた。

なんというか、大型犬バージョンで洗われてると、アインクラッドで僕の相棒だったリユースの体験を追体験している感覚になる。

とは言え、僕自体はリユースほどお風呂があんまり好きじゃないから、若干、苦でしかないけど、ティオナさんとティオネさんが楽しそうなのでOKかなと思う。

「・・・」

「・・・」

けど、一応、助けを求めてチラリと同じお風呂場の湯船に浸かるレフイーヤさんを見たけど、僕とは目を合わせてくれず、僕は、密かに泣いた。

「流すわよ?」

「目、瞑ってね〜」

「うん」

バシヤアアア
バシヤアアア

そして、二人にお湯をかけられて、泡まみれだった僕の体から泡が流れていく。

「うん！綺麗になったね」

「まあ、三回も洗えばね？」

「・・・」

ブルブルブル

「わっ!?!／きやっ!?!」

全ての泡が流れていって、満足気なティオナさんとティオネさんに、そうするつもりはなかったけど、僕は、体をブルブルさせて体に着いた水を飛ばした。

「よお〜つう〜ばあ〜」

「!?!」

「やったわね！この」

「ひゃああっ!?!」

その結果、僕は更に二人に揉みくちやにされた。



「モフモフして気持ちい〜」

「こういう、抱き枕、欲しいわ〜」

「・・・」

それから、二人に僕は、脱衣所でブラッシングまでしてもらった。お陰で、毛並みはサラサラのモフモフになった。

左右からテイオナさんとテイオネさんに抱き付かれ、モフモフされている。

「よし、満足した！」

「もう、良いわよ？ 四葉」

「・・・うん」

そこで解放された僕は、魔法を解いて元のヒューマンの姿に戻ると予め脱衣所に用意していた私服に着替えた。

「さあ、エントランスでアイズ、待とう？」

「はい！」

そして、お風呂で綺麗さっぱりした僕等は、アイズさんを出迎えるためにエントランスに向かった。



「[[[[・・・]]]]」

「・・・」

で、ようやくダンジョンから帰って来たアイズさんを見て僕等は、どうしていいのかわからなかった。

帰って来たアイズさんは、深層で別れた時よりも落ち込んだ様子で帰って来たんだ。

「ぼ、ぼ、僕、リヴェリアさん、呼んでくる！」

「わ、私も行きます」

で、真っ先に思い付いたのが、困った時のなんとかじゃないけど、リヴェリアさんと呼んでくることだった。

そして、僕とレフイーヤさんは大慌てでリヴェリアさんのもとへ走った。



「リヴェリアさん！」

「ん？・・・どうした？そんなに慌てて」

「リ、リヴェリア様、ア、アイズさんが・・・!!」

「そうか、アイズが帰って来たのか・・・それで、どんな様子だ？」

で、リヴェリアさんは食堂にいたんだけど、大慌てでかけて来た僕を見て、眉を少しだけ動かして、僕の次に到着したレフイーヤさんの口からアイズさんの名前が出た事で、少しだけ、嬉しそうな声色でアイズさんの様子を聞いた。

「口で説明するより、見た方が早いよ！」

クイツ

「!？」

「リヴェリアさん！早く来て」

「あつ！四葉ちゃん！」

「レフイーヤ、よい」

「!？」

けど、今のアイズさんの様子を口で説明するには、僕には難しく、リヴェリアさんに直接、アイズさんの様子を見て貰おうと、僕はリヴェリアさんの何時も着ているマントみたいなモノを引っ張った。

それを見てレフイーヤさんは、僕を咎めようとした。

そんなレフイーヤさんをリヴェリアさんは止めて、座っていた椅子から立ち上がった。

「リヴェリアさん、早く早く」

「わかった、わかった。そう急かすな」
「・・・」

それを見て、リヴェリアさんを急かしてエントランスに向い、その後をレフイーヤさんは、なんだかハラハラしながら僕等の後について歩く。



「あれ」

「・・・」

で、いぎ、アイズさんを見てリヴェリアさんも一瞬、言葉を無くした様子だった。

「はあ〜」

カツカツカツ

そして、一つため息をつくど、リヴェリアさんはアイズさんのもとへと歩いていった。

「どうしたのだ？」

「・・・ちやつた」

「なに？」

で、リヴェリアさんに問いかけられたアイズさんはぽつりぽつりと訳を話し始めた。

「また、逃げられちゃつた・・・」

「!？」

「・・・」

そして、聞いたその言葉に、僕はある意味で衝撃を受けた。
もちろん、それはリヴェリアさんもで

「……ぷっ」

「「!?」」

「……!?!」

「リヴェリアが……」

「吹き出した……!?!」

一瞬、脳裏に兎がものすごい速さでアイズさんから逃げていく様子
とそれに固まるアイズさんの姿が浮かんで来てしまつて、思わず、僕
はリヴェリアさんと同時に吹いた。

レフィーヤさん達からするとリヴェリアさんが吹き出した事が驚
きだったらしく、そう呟いていた。

「くくく……っ」

「……」

「くっ……くくく……」

ぷうーっ

「……」

肩を揺らして、笑うリヴェリアさんに顔を真っ赤にして頬を膨らま
せたアイズさんは

ドンッ

「「!?」」

そんなリヴェリアさんを両手で突き飛ばした。

プルプルプルプル

「・・・」

「くくっ・・・いやスマン・・・だが・・・ふっ、ふはっふははははは」

けど、それで本格的に声を上げて笑い出してしまったリヴェリアさん。

「~~~~~」

ポカポカポカ

「ハハハハ」

そんなリヴェリアさんにアイズさんは更に顔を真っ赤にして、笑い続けるリヴェリアさんをポカポカ殴り始める。

「アイズが真っ赤になって怒ってる・・・！」

「リヴェリア様が声を上げて笑うのも、私、始めて見ます・・・」

「まるで姉妹・・・それとも、母娘・・・かしらね」

その二人の姿にキョトンとしながら呟く、レフィーヤさんやティオナさん達。

ティオネさんが言うように、アイズさんとリヴェリアさんを見るとまさに、そんな感じだった。

「私達にも見せてくれない顔かあ・・・」

「あら、妬いてんの？」

「うっさい」

ティオナさんは、普段、アイズさんが見せない顔を見て、不貞腐れた感じで呟いた。

それにティオネさんが少しだけからかうように言うとティオナさんはベーっ舌を出した。

「・・・なんか、良いな」

「そうですね」

僕もアイズさんとリヴェリアアさんを見ていて、すごく羨ましくて、少し、寂しく思えた。

だから、今日、見る夢が、あの人の夢だったら良いのについて思った。

「でも、良かった。アイズさん、もう大丈夫そうだよ」

「そうですね」

「うん・・・!」

そう思いながら、顔を真っ赤にしながら、笑うリヴェリアアさんからそっぽ向くアイズさんを見て、心の底から思った。

深層で別れた時よりも、五階層で別れた時よりも、今のアイズさんは“大丈夫だ”ってそう思えた。

きつと、逃げちやつたとはいえ、ベルさんのお陰なんじゃないかと思っただけがなかった。

「よし!アイズさんの所に行ってくる!」

「あつ!四葉、狡い!私も行く!」

「わ、私も行きます!」

とりあえず、ここで待っていた本来の目的を果たすために、僕は、先にアイズさんのもとへ走った。

それにテイオナさん、レフィーヤさん、テイオネさんと続き

ポフッ

「!」

「おかえりなさい!アイズさん!」

スリスリ

「・・・うん、ただいま。四葉」

そのまま、アイズさんに抱き付いた僕は、笑顔で、おかえりなさい
と言うと、顔をアイズさんのお腹に擦り付けた。

「アイズううくおかえりい〜!」

ガバツ

「!？」

「テイ、テイオナさん!四葉ちゃん!」

「まったく、何やってんのよ、テイオナも四葉も」

そんな僕を巻き込んでテイオナさんがアイズさんに飛び付き、レ
フィーヤさんのアイズさんに抱き付く僕とテイオナさんを咎めるよ
うな声を聞き、テイオネさんの呆れたような声を聞いて

「「「おかえりなさい、アイズ／さん!!」「」」

「うん、ただいま」

今度は、テイオナさん、テイオネさん、レフィーヤさんと僕の四人
で改めて、アイズさんに笑顔でおかえりなさいを言った。

第59話・ロキ・ファミリア地下の秘密

「(リヴェリア様に呼び出されるままにロキ・ファミリアのホームまで来てしまいました。が、いったい、何のご用なんでしょう。もしや、回復薬(ポーシヨン)や万能薬(エリクサー)を値切る商談でしょうか。それとも、また、ドロップアイテムを高値で売り込もうと・・・いいえ、リヴェリア様に限ってそんなことは、ありません。・・・無い、筈です。恐らく)」

その日、ファミリアに一人の訪問者がいた。

「あつ、アミッド?？」

「あつ、こんにちは、アイズさん」

「うちに、何か用?」

「はい。リヴェリア様から私に頼みたいことが有ると。アイズさんはお出掛けですか?」

「うん。ちよつと、散歩」

「そうですか。いつてらっしゃい」

訪問者、アミッドさんはアイズさんと会話したて、すれ違い、門を潜ろうとした。

「あつ、ねえ、アミッド」

「何ですか?」

そんなアミッドさんをアイズさんが呼び止めた。

「その、つまり」

「・・・」

「何でも、無い。それじゃ」

「あ、アイズさん!・・・あ、明らかに、何かありそうな感じで、立

ち去られましても・・・」

が、アイズさんは何も言わず走り去ってしまった。

アミッドさんはそんなアイズさんの背中を見ながらポツリと呟いて、何時までもそこに突っ立っている訳にもいかず、門番さんに声をかけてホーム内に入っていった



「あっ！アミッドさんだ！」

「あつ、四葉さん」

そして、ちょうど、エントランスに下りてきた僕と会った。

「こんにちは、アミッドさん。何か用事？」

「はい。リヴェリア様から私に頼みたいことが有ると。門番の方に地下に行くように言われたのですが」

「地下？」

「??四葉さん、地下があるの知らないのですか？」

「うん！だから、僕も行く！少し、待って？」

そこで、僕は、アミッドさんの口からこのホーム内に地下があることを知った。

僕は、鼻をヒクヒクさせてリヴェリアさんの匂いを探した。

「ごつちだよ！アミッドさん」

「はい」

そして、すぐにリヴェリアさんの匂いを嗅ぎとって、アミッドさんの手を取ると、その匂いを頼りに地下への階段を見つけて、その階段を下りていった。



「・・・懺悔室？」

「と書いてありますね・・・ここにリヴェリアさまが？」

「うん。開けるね？」

「はい」

その先で僕等は「懺悔室」なる一つの部屋にたどり着いた。

二、三回鼻をヒクヒクさせてリヴェリアさんの匂いがあることを確かめてから、僕は、その部屋の扉を開けてアミッドさんを連れて入った

「・・・暗い」

「・・・はい・・・リヴェリア様！アミッドです。お招きにより、参りました」

「ああ、良く来てくれたアミッド。ん？四葉、お前も一緒か」

「うん！リヴェリアさんの匂いを頼りに、ここまで、案内してきた！」

「そうか。それはご苦労だった。お前はここまでで良い、部屋にでも戻ってろ」

「ええ〜」

「ええ〜ではない、さっさと行け」

「うう〜」

「そんな目をしてダメだ。さっさと行け」

「・・・わかった」

「良いか、ちゃんと部屋まで戻るんだぞ」

「わかりました！」

その部屋の中は薄暗くて、アミッドさんは中に居るであろうリヴェリアさんの名前を呼んだ。

その声にリヴェリアさんは答えてくれて、僕等のもとへやって来て僕の存在に気付くと、半分強制的に部屋から追い出した。おまけに、僕が階段を上がっていくまで見送る始末だ。けど、そんなリヴェリアさんの行為は、ただ、僕の好奇心を刺激するだけだった。

「リヴェリア様」

「すまない」

「いえ、それより、この部屋はいつたい、何なのですか？ 懺悔室と書かれてありましたが」

「ああ、他人に言えぬ罪を告白し、悔いるのが本来の役割りだが、実質は、団員達の悩み相談の場だ。聞き手の顔が見えない分、話しやすいらしい」

「なるほど」

「元々は、ロキが遊び半分で用意したものだが、これが受けてしまったな。ファミリアが大所帯な分、普段口にできない悩みや鬱憤も皆にたまっているのだろう」

「そう言うことでしたか」

「今日来てもらったのも、実は、この部屋に関係していることだ。アミッド、お前に悩みの聞き役を頼みたい」

「私に、ですか？」

「ああ。様々な選択肢を考えたが、部外者とは言え、お前が一番信用できる。ディアンケヒト・ファミリアの【戦場の聖女（デア・セイント）】。ヒーラーとして誰にでも平等に接するお前は、二つ名の通り、聖女と言うに相応しい。団員の秘密が漏れる心配もない」

「・・・それは、当然のことですが・・・」

「頼む、アミッド。今日だけで良い。引き受けて欲しい」

「わかりました。私で良ければ、お受けします」

「ああ、助かる」

僕の足音が遠ざかって行くのを確認してから、アミッドさんになり

ヴエリアさんはこの部屋のことと呼び出した理由を話、アミッドさんはその頼みを聞き入れることにした。

「ですが、普段聞き役をされてらっしゃる方は、今日は来られないのですか？」

「ああ・・・実は、今日は外せない用が有るのだが、何時もは私が務めている」

「リヴェリア様が!？」

「最初はロキがやると言い張っていたのだが、任せれば、悪用されるのが目に見えているからな。仕方なしに、私が担当しているのだ。むしろ、団員達には身分を隠してな？」

「そうでしたか。いくら、顔が見えないとは言え、良くバレませんでしたね」

「ああ、絶対にわからないように、声色を使っているからな？やむ無くの措置だが」

そこで一度、言葉を切ったリヴェリアさん

「きやはあ！今日もバツチリ、皆の悩みを聞いちゃうぞお♪」

「!？」

「さあ、迷える子羊ちゃんっ！このプリティシスター、アールヴちゃんになあ〜んでも、話しちゃうんだ、ぞいっ！」

その次の瞬間、リヴェリアさんは声色を普段のリヴェリアさんからは絶対に想像できないキャピキャピな感じに変えた。

「・・・という具合だ。ん？ちよつと待って」

そして、すぐに声色を元に戻すと何かに気付いて、リヴェリアさんは部屋の扉を開けた。

「・・・四葉、貴様」

「ご、ごめ、ぼ、僕は、な、なにも」

その扉を開けた所には、魔法で仔犬姿になった僕が居て、リヴェリアさんは鬼の形相で一步、また一步と近づいて来て、僕は、それに合わせて一步、また一步と後ずさった。

「ごめんなさい!!」

「待て!!」

「にぎやっ!」

背を向けて逃げようとした瞬間、リヴェリアさんに尻尾を思い切り掴まれ、そのまま逆さ吊りで部屋の中へと引き入れられてしまった。

「リ、リヴェリア様」

「何も言うな、アミッド。組織が大きくなれば、それだけ人の闇も大きくならざるおえない」

色んな意味で戸惑うアミッドさんにリヴェリアさんは、疲れきった老人のような目で言う。

「まあ、お前なら、無理に声を変える必要もあるまい。そろそろ、一人目の相談者が来る頃だ。最初の内は、私も同席する。安心して欲しい」

「あ、はい。よ、よろしくお願いします」

その目を見てしまったら、何とも言えない心境になる。

「こんにちははく、テイオナとテイオネ、悩み相談に来ました!」

「早速、お出しました。さあ、アミッド、こっちに来て仕切りの裏に来てくれ」

「は、はい」

そうこうしているうちに、最初の相談者、テイオナさん達が部屋の扉を叩いて、僕の尻尾を掴んだままのリヴェリアさんとリヴェリアさんに逆さ吊りにされている僕、そして、アミッドさんは部屋に設置された仕切りの裏に引っ込んだ。

「ここに座れば良いですか？」

「ああ、先ずは、私が手本を見せよう。四葉、貴様はここで見たもの聞いたものは、他言無用だ、わかったな」

「・・・」

そこに置かれた椅子に座ったりリヴェリアさんとアミッドさんは、その言いつけにコクコクと頷いて、リヴェリアさんの膝の上に置かれた。

とは言え、声は出せない。

何故なら、リヴェリアさんの手でしつかりと塞がれているからだ。

「きゅっぴるくん、お待たせしちやっただぞお？最初の人、どおぞ、どおぞ！きやはあ！」

「(リヴェリア様、凄い。表情は一切変えていないのに、この爆上げハイテンション)」

「失礼しまゝす」

そして、例の声色で外のテイオナさん達に呼びかけると、二人は部屋の中へ入ってきた。

「へえく、ここが懺悔室か」

「なるほどく、中はこうなってるのね。相談相手は、仕切りの向こうに居て、お互いの姿は見えないと」

「そう言うこと！だから、遠慮なく、このプリティシスターアールヴ

ちゃんに何でも相談するんだぞっ！まず、最初のお悩みは、何かなあ〜？」

「うーん、悩みか〜。なんか、流行ってるから来てみただけで、そこまで考えて無かったんだけど」

「そうね、悩みなんて自分で解決するものだし」

「うん。わざわざ、人に相談するのね〜」

「だったら、すぐに帰れ」

「!？」

「お、落ち着いてください。リヴェリア様」

が、そのテイオナさん達がここに来た理由と相談することは無いと言わんばかりのソレに、僕の口を塞いでいる手に力を入れながらリヴェリアさんは小さく愚痴り、そんなリヴェリアさんにアミツドさんは同じく小さな声で落ち着くように言う。

「!」

「ハア・・・きゅっぴる〜ん、そんなこと言わずに何か相談してよ〜シスターアールヴちゃんに答えられないことなんて、無いんだぞ？」

「そう言われてもなあ〜。あっ！そうだあ〜！胸ってどうしたら大きくなるかな〜」

リヴェリアさんは本当に気持ちを落ち着かせようとするように、口を塞いでいる方の手の力を緩め、空いている方の手で僕の背中を撫で始めた。

「なるほど、なるほど〜。それは大変だね」

「(胸、つまり乳房のお悩みですか。即効性のある方法は無いですが、乳腺を成長させる為に食生活を改善したり、姿勢を良くして正しく運動をしたり、といった回答が考えられます。ですが、リヴェリア様ならもつと的確な答えをお持ちかも)」

「きゃはあー胸のことなら、良いお呪いがあるよ？」

「(えっ!?!お呪い!?)」

「一日三回!南の空に向かって牛乳を飲みながら、いたりな、いたりな、ぷっかしい!って唱えるの!たった、これだけで、すぐにポインポインのバインバインだよ」

「本当に、超簡単じゃん!」

「でしょ、でしょ?このプリティシスターアールヴちゃんにかかれば、どんな悩みもバツチリ解決!」

「だ、ダメですよ!そんな、迷信みたいな方法!!」

そして、ティオナさんがした相談の答えに呪いを教えたリヴェリアさんにアミッドさんは思わず大きめの声で口を挟んだ。

「あれ?今の声、誰?!」

「シスターって二人居るの!?!」

「今、声を出す奴があるか!アミッド」

「すみません、私、つい」

「相談者は必ずしも正しい答えを求めているわけではない。難しい知識を列べるより、気持ちを明るくされることの方が大切なのだ」

「確かに、そうですね」

当然、ティオナさん達はビックリして、リヴェリアさんは小声でアミッドさんを嗜めた。

「ねえ?もう一人のシスターも紹介してよ」

「折角、来てるんだもんね」

「OK!今日から皆のお悩みを聞きにやって来た、新入りシスターだよ?ほらほら、自己紹介!」

「はい、あの、新入りのセイントシスター、あ、アミーゴです」

「ふうくん、アミーゴね。何だか聞いたことのあるような声だけど」

「そ、そうですね?初対面ですよ」

「ねえ?さつき、お呪いは迷信とか言ってたよね?じゃあ、どうした

ら、胸が大きくなるか、アミーゴの意見も聞かせてよ」

「えっと、そ、そうですね。例えば、胸の体操なんか如何でしょうか？」

「胸の体操？」

「つまり、おっぱい体操！なにそれ！面白そう!!」

「乳房を持ち上げる運動をしたり、姿勢を正して、大胸筋を鍛えたりするんです。毎日継続することが大切ですよ」

「ふうくん、じゃあ、やってみようかな？変なお呪いより効き目ありそうだし」

「そうね？変なお呪いよりはね？」

そして、アミッドさんは自己紹介をさせられ、自分の意見を話した。すると、それはテイオナさん達からは好評だった。

「くうっ・・・さつきは、超簡単と喜んでいたくせに・・・」

「！」

「リヴェリア様、穏やかに穏やかに。そして、四葉さんの頭から手を離して上げてください。痛そうです」

「あっ、すまん」

「頭、握り潰されるかと思った」

「すまん」

だった、リヴェリアさんはその相談内容が出た瞬間から塞いでいた僕の耳を頭ごと驚掴みにして力を込めた。

「きやはあ！一つ、お悩みが解決した所で、もう一人の君の相談は何かなあ？このアールヴちゃんやんが、どんなことでも聞いちやうぞ？」

「私も特に無かったんだけど、そうね？もし、団長に贈り物をするしたら、どんなのが良いかしら？」

「きゆるくん、そんなの簡単〜！」

「ああ、貴女は少し黙ってて？新入りのシスターアミーゴの方に

聞きたいの。少しはちゃんとしてそうだから」

「くうっ・・・私だって、やりたくてこんなことをしているのではない」

「リヴェリア様、穏やかに」

次は、ティオネさんのとなった時、ティオネさんはリヴェリアさんの意見は許否した。

「そうですね、フィン様への贈り物でしたら、槍のお手入れ用品などは如何でしょう」

「槍の？」

「はい。【勇者（プレイバー）】フィン・ディムナといえば、オラリオきつての槍の名手。お手入れ用品を贈れば愛用の槍を手入れする度に、貴女のことを思い出してくれるかも知れません」

「あああ、団長が、私のことを？あああ、ソレなんか良いかも！早速、贈ろうかしら？」

「私も！おっぱい体操頑張るね！ロキにも教えてあげようかなあ、ありがとう！シスターアミーゴ！」

「お役に立てて光栄です」

「きやはあ！それじゃ、何かあったらまた来てね？どんな悩みも、プリティシスターアールヴちゃんに、お、ま、か、せ！だぞ？」

「はいはい、そっちのシスターもありがとう」

「それじゃ、またねー」

そして、アミッドさんの意見を聞き、それを参考にすると言ったティオネさん。

ティオネさんの悩みも解決されたことで、二人は懺悔室を出ていった。

第60話・二人のお悩み

「はあく・・・まあ、こんな具合だ」

「はい」

ティオナさん達が出て行って、リヴェリアさんは大きなため息を吐いた。

僕の口を塞いでいる手が離れ、その手が顎の下辺りを撫で始める。

「私が教えるまでも無かったようだ。アミッド、次からは、お前が一人でやってみてくれ。そろそろ、常連が来る頃だ」

「常連、ですか？」

そうこうしているうちに再び、部屋の扉がノックされる。

「今日も来ました！レファイヤです！」

「噂をすれば、だな」

「なるほど。どうぞ、お入りください」

その扉の向こうから、レファイヤさんの声がした。

「お邪魔します。ふう〜、なんかここに来ると、帰ってきた気分になりますね〜」

「(凄い、確かに常連の空気がします。色々とお悩みごととか抱えてそうですね)」

「実は、ティオネさん達から新しいシスターが来たと聞いて、駆けつけたんです。今、仕切りの向こうにいらっしやるのが、新人さんですか?」

「はい、はじめまして、セイントシスター、アミーゴです。何でもお気軽に相談してくださいね?」

レフィーヤさんが仕切りの向こうの椅子に座り、アミッドさんはシスターとしてレフィーヤさんに自己紹介をした。

「あつ、良かった。ごく普通の方なんですネ？えっと、文句が有るわけではないんですが、何時ものシスターは、きやはあ！とかきやぴるくん！とか言つてて、あ、そのおく、あれと言うか、ハハハ」

「・・・だから、私も好きであれをやっているわけではないと・・・」
「おお」

「リヴェリア様、堪えてください。そして、四葉さんの脇腹を掴むのは止めて上げてください」

「す、すまん」

レフィーヤさんのその意見を聞いて、僕の体を撫でてたリヴェリアさんの手に力が籠る。

レフィーヤさん、日頃のシスターの正体を知った日にや昇天してしまふんじゃないだろうか。

「えっと、それじゃ早速、相談しますね」

「はい、どうぞ」

「名探偵になるには、どうしたら良いですか？」

「は、はい？め、名探偵？」

「実は、最近、リヴェリアの街で殺人事件に巻き込まれちゃったんですよ。冒険者も良いですけど、そういうのをバシツと解決できる名探偵も良いかなって！そうすれば、こんな私でも、アイズさん達のお役にたてるかも知れないですし」

「・・・そういうことですか（そもそも、このオラリオで、探偵という職業が成立するのかどうかは、わかりませんが）」

そして、レフィーヤさんの相談と言うのが、名探偵のなり方だった。

「シスター！どうしたら、なれますかね？名探偵」

「そ、そうですね、なり方が決まっている仕事ではないので、一概には言えませんが、例えば、推理力を磨くとか、論理的な考え方を身に付けるとか、人間観察をして洞察力を養うとか」

「うんと、そういうのじゃなくて、名探偵になるためのお呪いとか、読んだ方が良い小説とか、教えてくれませんか?」

「お、お呪いと小説!」

「さっきも言ったろ? 相談者によっては、正しいことを言うばかりが正解とは限らないのだ」

「なるほど、こういうことですか」

僕もそれには深く納得した。

「しかし、お呪いなどと言われても」

「あっ! じゃあ、名探偵の訓練に付き合ってください!」

「訓練、とは?」

「私が名探偵役をやるので、アミーゴさんは犯人役で練習をさせて欲しいんです! 場所は、ラストシーンの断崖絶壁! よーい! スタート! . . . やはり、この事件の真犯人は貴女ですね? アミーゴさん」

「(えっ?! いきなり、始まって。台本も何も無いけど、ここは、合わせないと)」

と、唐突に始まった寸劇?

「流石は、名探偵レフィーヤ。見事な推理です」

「それほどでもありませんよ」

「さあ、事件の全てを貴女の口から語ってもらいましょうか?」

「(ええっ?! 設定丸投げの無茶ぶり!?)」

その丸投げされた設定と無茶ぶりに当然、アミッドさんは焦る。

「さあ、アミーゴさん。貴女ほどの犯人なら、往生際の悪いことはし

ないはずです。全部、話してください」

「なっ……えつと、まず、温泉旅館で起こった第一の殺人事件についてですが、あれは、私です。雪山の第二の殺人もあれも私です。寂れた洋館の密室で起こった第三の殺人も私です。合間に起こった三億ヴァリス強奪事件も私です。後、食い逃げと駐車違反と結婚詐欺とアパートでの第五の殺人と宝石強盗と万引きと、レフィーヤさんが取っておいたプリンを食べたのも、全て私です」

「いやあく、楽しかったです。アミーゴさんのおかげで、名探偵の気分を味わえました！」

「……それは、なによりです……」

何とか、盛り盛りに盛り込んで、くたくたになりながらレフィーヤさんを満足させることの出来たアミッドさん。

「次回も必ず来ますね！何時ものシスターにもよろしくお伝えくださいー！」

「はあくはあ」

レフィーヤさんが意気揚々と出ていくのとは裏腹に、アミッドさんは重々しいため息を吐いた。

「疲れました」

「すまないな。この役目の過酷さがわかったろ？」

「はい。リヴェリア様はこれをずっと？」

「まあ、そう言うことだ。その都度、状況は違えど似たようなことを、永遠と、な？」

何て言うか、リヴェリアさんの闇の深さをかいまみえたきがした。て言うか。

「ぶっ潰しちやえば良いのに、こんなところ」

「私もそうしたいのは山々だがな、必要としているものもいるんだ。
四葉」

「……」

本気で、僕は、そう思った。

「さて、私はもう行かねばならん。適当な頃合いで店じまいにして
くれても構わないからな？」

「はい。お引き受けしたからには、もうしばらく、頑張ってみますの
で」

「ああ、頼んだぞ。せめてもの、慰めにしかならんだろうが、四葉を
貸しといてやる」

「えっ?」

そう言っつて、リヴェリアさんは僕をずいっとアミッドさんに差し出
した。

「撫でていれば、少しは気が紛れるだろう。さあ」

「は、はい。ありがとうございます」

アミッドさんは戸惑いながら、リヴェリアさんから僕を受け取っ
た。

「うわあ、ふわふわ」

「……では、頼んだぞ」

「は、はい」

それを見て、リヴェリアさんは少し微笑むと、懺悔室を後にした。

「今さらですけど、四葉さんなんですよね?」

「そうだよ?これ、僕の魔法ね」

「そうですね」

「モフモフしたかったら、してくれて良いよ?」

「はい」

残った僕等は、そう話していた。

「シスター、アイズです。入って良いですか?」

「えっ? アイズさん?」

ずっと、そこでアイズさんが部屋の扉をノックした。

「そう言えば、ここに来た時、何か言いたそうだった。どんな相談でしよ」

「・・・」

もしかしたら、アイズさん、この間の落ち込んでいた何かを相談しに来たのかも、とそう思った。

「どうぞ! 開いています!」

「お邪魔、します」

「ようこそ、いらっしやいました。何でも話してください」

「はい」

何だかやつぱり、元気の無い様子だった。

それをアミッドさんも感じ取ったようで、僕を膝の上に置くと、アイズさんの話を真剣に聞く体制に入った。

「それで、どう言ったご相談なんです?」

「その、最近ロキに、ある知り合いと、キャラが被ってるって言われてて」

「お知り合い? どなたです?」

「デيانケヒト・ファミリアのアミッドっていう子で」
「!?」

まさかのまさか、そう言う相談だと思ってなかった僕も、まさか、自分の名前が出るとは思わなかったアミッドさんも心底、ビツクリしていた。

「どっちも口数が多くないし、お人形みたいだしって」

「(確かに、恐れ多いですが、そんな気も)」

「ロキは金と銀の髪で姉妹丼もええなとか、わけのわからないことを言っつて、あちこち触ろうとするし」

「ほ、本当ですか・・・アイズさん、大丈夫です。貴女とアミッドさんは別人です。被つてると言われる筋合いはありません」

「でも、ロキがどっちも根暗だつて」

「!?根暗じゃないです！アイズさんも私も普段は感情が表に出ないだけで！」

「私？」

「!? (いけない、つい)」

「もしかして、そこにいるのは、アミッド??何だか声も似ている」

「えっ? い、いや、あの・・・きや、きやびるくん」

「!?」

途中、アイズさんにバレそうになったアミッドさんが誤魔化すために取った手段は、リヴェリアさんのように声色を変えることだった。

「私は、セイントシスター、アミーゴマーク2!! 皆の悩みを解決しちゃう、嬉し恥ずかし可愛い天使! きやはあ!」

「良かったら、アミッドはこんな変なこと言わない。疑つてごめんなさい」

何とか、誤魔化すことに成功した様子だった。

「くっ・・・【剣姫】ちゃん！誰かとキャラが被っていても、まったく同じわけじゃないぞ？毎日元気でくきやびるんパワー、全快！で行けば、なーんにも気にならなくなっちやうんだからねえ？」

「きやびるんぱわー？それは、魔法の一種？」

「いや、あ、そういうわけじゃないんだぞおっ？つまり、その、アミーゴ的なミラクルパワーで」

「そうすれば、アミッドと似なくなるの？」

「いや、その、えーつと、その」

けど、何て言うか、どんどん土坪にはまっていく感じになるアミッドさん。

「アイズさん！ここでしたか、もう夕飯の時間ですよ？一緒に食堂に行きましよう？」

「レフィーヤ。うん、わかった」

そこにレフィーヤさんがやって来て、アミッドさんとアイズさんとのやり取りがそこで終わる。

「それじゃ、シスター。ありがとう」

「きやはあー！お安いご用だぞー！」

そして、アイズさんとレフィーヤさんは一緒に懺悔室を出ていった。

「新しいシスターも何時ものシスターみたいになっちゃったんですね。ここに来る、シスターって皆、ああなんでしょうか？」

「うん、本人が楽しそうなら、良いよね？」

「そうですね！本人の自由ですもんね！」

「はああく、私だって好きでやっているわけではないのに。もう、嫌

です。こんな依頼。二度とやりませんから！」

という扉の向こうから聞こえる二人の会話を聞いてアミッドさんは今日、一番のため息を吐いて愚痴った。

まるつきり、リヴェリアさんの言葉と同じだった。

「・・・アミッドさん」

「!？」

「今度、アミッドさんがダンジョンとかで素材集めするとき、僕を呼んで？サポーターする。僕、これでも沢山持てるから！その時、僕に依頼出して？無料で受けるよ！」

「四葉さん」

「ごめんなさい、僕、それくらいしかアミッドさんへのお礼の仕方を思い付かない」

その抱えてしまった心労とかへのお礼とお詫びとして、僕は、アミッドさんにサポーターをすることを提案した。

そりゃ、アミッドさんのところにだって沢山人が居るんだから、不要かもだけど

「!？」

「四葉さん、貴女は何て良い子！はい、その時はお願いします」

「うん！任せて」

そう言った僕をアミッドさんは抱きしめてくれた。

「もう、閉めても良いでしょうか?？」

「良いと思う。皆、これから、ご飯だから」

「そうでしたね。四葉さんもちゃんと食べないといけませんし」

「うん。あ、一つだけ聞いても良い?」

「はい、何でしょうか?」

「アイズさんが言ってた、しまいどんって何？」

「!?良いですか！その言葉は知らなくて良い言葉です！特に貴女は！決して、調べたりしないように！良いですね！」

「は、はい」

その事を聞いた瞬間、何故かとてつもなく怒られた。

そのあとは、魔法を解いてまっ裸になった僕は、そこでもアミツドさんに怒られたけど、【幻書の術】の中に服を着て、ここを閉める作業をしたあと、アミツドさんをエントランスまで見送った。

闇の影編

第61話・神のお酒で神を釣る

「ここだ」

「リーている?」

「そうだ。道具屋は全ての商業系のファミリアが製造した商品を基本的に取り扱っている。特にここは品揃えが良い、一通り揃えたいなら、ここを覚えておくと良い」

「うん」

翌日、僕はリヴェリアさんと一緒に北西メインストリートにある二階建ての「リーテイル」と言う道具屋さんにやって来た。

理由はもちろん、探索で使った道具が無くなった道具を補充するためだ。

「本当にいろいろ、置いてるんだね」

「ああ」

で、いざ、店内に入ってみると、お店の中央を陣取るように縦横に並んでいる陳列棚には、回復薬とか、解毒薬とか、万能薬なんかも置いてあって、他にもいろいろと見たことの無い物も沢山置いてあった。

ゴンツ

「えっ、ええ~~~~~~~~!!?」

「!?!」

ダッ

「お、おい、四葉!」

それらを見てみると、お店の隅の方から何かを打ちつける音と叫び

声が聞こえて来た。

聞いた途端、僕は、弾かれるように声のした方へと急いだ。だって、アスナさんに似た声だ。

そこに誰がいるのかなんて、獣人化してなくても分かった。



「神酒って六〇〇〇〇ヴァリスもするの!? た、ただのお酒なのに!?
ベル君の装備一式より高いよ!」

「エイナさん!」

ポフツ

「きゃっ!?!」

で、声のした方、食料雑貨と矢印で表示されたお店の隅、お酒のボトルが並ぶ棚の所に、予想通りの人がいて、僕はその名前を呼びつつ、抱きついた。

「えっ? よ、四葉ちゃん。貴女、何でここに? 一人なの?」

「コラ、四葉。勝手に一人で動き回るな!」

「!? リ、リヴェリア様!?!」

僕に抱きつかれたエイナさんは相当ビックリした様子で、僕を追いかけて来ていたリヴェリアさんに更にビックリした様子だった。

「・・・エイナか」

「うん!」

リヴェリアさんもエイナさんがいたことに少しビックリした様子で、僕は、今は無い尻尾を気持ち的に振りながら、満面の笑みで頷く。

「ははっ、四葉ちゃん、何だか本当に仔犬さんみたいだね?」

「まったく、それならそうと言え。いきなり、傍を離れるから、驚いたぞ」

コンツ

「!？」

それにエイナさんは笑い、リヴェリアさんは、仕方がないなって感じの困ったような笑みを浮かべ近づいて来ると、僕の頭に痛くはない優しい拳骨を振り下ろした。

「すまないな、エイナ」

「い、いいえ。お二人は、どうしてここに？」

「なに、先日の探索で道具を切らしてしまつてな。その補充だ」

「うん、回復薬とか色々、買いに来たの」

「そうなんだ。あ、でも、リヴェリア様は回復魔法が使えた筈・・・と聞くのは愚問ですね」

「ああ。魔法も万能ではないからな。道具で間に合うなら、それに越したことはない。エイナの方はどうした？」

「あつ・・・」

そして、リヴェリアさんに問われてエイナさんはちらりと後ろの棚に置かれた硝子瓶を見た。

「えつと・・・実は・・・友人にこのお酒を勧められまして、飲んでみようかと」

「ほう、神酒（ソーマ）か。私のファミリアの中でも愛好している者が多いな」

「え・・・あ、あの、リヴェリア様？このお酒を嗜んでいる方で、依存症とか、少し普通じゃない症状を引き起こしている方はいらっしやいますか？」

「僕的に、お酒を飲む人達って、皆普通じゃないように見えるけど」

エイナさんが何でそんなことを聞くのか分からないし、これは、僕の完全な偏見だけど、お酒を飲む人って、普通には思えなかった。特に、お酒を飲んで気が大きくなって、いけないことを言っちゃう人とか、暴れちゃう人とかは。

「私も同感だな。だが、その酒を飲んで常軌を逸した素振りを見せる者はいないな。何故そんなことを聞く?」

「ええつと・・・あのソーマ・ファミリアのお酒と聞いて、少し偏見が・・・」

「なるほど。確かに、あのファミリアの団員の言動は薄ら寒いものがあると思うな」

「リヴェリア様は、何かご存じではありませんか?」

そして、エイナさんがリヴェリアさんに質問した内容を聞いて、最初こそは、ソーマ・ファミリアのお酒の事を聞きたいのかな? って思ったけど、段々、エイナさんが聞きたいのは、〃ソーマ・ファミリアのお酒の事〃じゃなくて〃ソーマ・ファミリアの内部事情〃的なモノなんじゃないかと思った。

何だかりヴェリアさんに質問する声が、少し弾んだ気がしたし。

「・・・ふむ」

じっ

ギクツ

「!?」

で、エイナさんに質問されたリヴェリアさんは、片目を瞑ってじつとエイナさんを凝視して、エイナさんはそのリヴェリアさんの視線に体とかを強ばらせた。

「エイナさん、ソーマ・ファミリアの事、調べてるの?」

「はあっ!?!」

その様子を見て、聞いてみたら、抱きつく僕の顔をビツクリした様子で見た。

あまりにもわかりやすい反応だった。

「リヴェエリアさん、知ってる？」

「・・・いや、生憎だが、私があの方アミリアについて知っている事はあまりない。それこそエイナと同じか、それ以下だろうな」

「そ、そうですか」

「じゃあ、方アミリアの人の中にいない？」

「少なからず精通している人物なら心当たりがある」

「・・・えっ？」

「付いてくるか？ 私達の方アミリアのホームに」

「行こう？ エイナさん」

とりあえずそれ以上、問い詰めることはせず、僕の口からリヴェエリアさんに聞いてみた。

リヴェエリアさんもエイナさんを問い詰めることはせず、僕等の方アミリアのホームへエイナさんを誘った。



「お兄ちゃん、お姉ちゃん、ただいまー！」

「おっ！ おかえり！」

「おかえりなさい、四葉ちゃん」

そのあと、一通りの買い物を買わせてホームにエイナさんを伴って帰ると、門番をしてきている二人の団員のお兄さんとお姉さんに声をかけた。

「リヴェエリアさん、お帰りなさい」

「すみません、そちらの方は・・・ギルドの？」

「友人の娘なんだ。大目に見てやって欲しい」

そして、その二人は、リヴェリアさんに声をかけると僕と手を繋いでくれているエイナさんを見て、聞くと、リヴェリアさんはエイナさんの事を友達の娘さんだと説明して、話をつけて僕等と一緒に門を通してもらった。

「あの、今更なんですけど・・・本当に良かったんですか？」

「何がだ？」

「ギルドに所属している私をホームへ招いたりなんかして・・・ロキ・ファミリアの部外秘の情報が、私を通して流れでもしたら・・・」

「できもしないことを言うな、エイナ。お前が腹に一物ある者ならば最初から誘いなどはしない。それとも、お前はよっぽど私に侮辱されたいのか？」

「い、いえつ。そういうわけじゃあ・・・」

「そもそも、そういう事を考えてる人はそういう風に言わないと思う」

本当に今更なことを言うエイナさん。

そんなエイナさんに言いつつ、僕とリヴェリアさんは、彼女を応接間に通した。

「あつ」

タツ

「!？」

ロキ・ファミリアの応接間は橙黄色を基調とした落ち着いた感じの部屋で、通路にそのまま面していて、ソファークロスのかかった丸テーブルがいくつも配置されている。

普段は、団員達の憩いの場で食堂以外での団欒の場だ。

けど、今は、ここの使用者は一人だけだった。

こちらに背を向けた椅子の背もたれの上に見慣れた金色の頭が僕の目に入って、僕はその頭を見るなり、エイナさんから手を離して、その頭の持ち主の所に駆け寄った。

「アイズさん、ただいま！」

「うん、おかえり、四葉。おかえりなさい、リヴェリア」

「ああ、ただいま。アイズ」

そして、頭の持ち主であるアイズさんにただいまを言って、アイズさんはゆつくりとリヴェリアさん達の方を振り向いてリヴェリアさんに声をかけた。

「その人は・・・」

「前、怪物祭の時のギルド職員さんのエイナさんだよ？」

「あつ」

「その節は、ご尽力いただきまして、ありがとうございます」

アイズさんは、その時、エイナさんの存在に気付いて、不思議そうな顔をした。

だから、一応、前に怪物祭の時に会ったことを言った。

それでは分からないけど、アイズさんは思い出したような反応をしてくれて、エイナさんもアイズさんにお礼を言いながら、頭を下げた。

「なるほど、一応、面識は有るようだな。アイズ、この子は私の親戚のようなものだ。簡単に挨拶でもしておけ」

「あ、改めまして、わ、私、エイナ・チュールと申します」

「・・・アイズ・ヴァレンシユタインです・・・」

そして、リヴェリアさんに勧められてアイズさんとエイナさんはお

互いに自己紹介を交わす。

この時のアイズさんは普段の服装じゃなくて、白のワンピースで両膝を抱えて椅子に乗っていた。

明らかに、落ち込んでいる感じだった。

キシッ

「……」

グイッ

「えっ?よ、四葉??」

そんなアイズさんを見て、僕は、靴を脱ぐとアイズさんの座っている椅子に登って、アイズさんの膝を抱えている片方の腕を無理矢理持ち上げて、アイズさんの膝と上半身の間に入れる所を作るとそこに体を滑り込ませると、強引にその膝の上に座った。

何でも良い、アイズさんの両膝を抱えている状態を崩したかった。

「四葉??!一つ、空いてるよ?」

「やだ」

「!?!」

アイズさんは、当然ながら戸惑った様子でテーブルを囲むように置かれた四脚ある椅子の残る椅子を視線で指して、僕に聞いて、僕は、プイッと顔を背けて、それを拒否。

それに別の意味で衝撃を受けるアイズさん。

クイッ

「……」

そんなアイズさんを見無視して、アイズさんの両手を僕のお腹の上に持っていく。

「好きにさせてやれ、アイズ」
「う、うん」

向かいに座って苦笑いを浮かべるリヴェリアさんの言葉にアイズさんは、僕のお腹の上に置いた両手に力を加えて、僕をしつかり抱っこしてくれた。

「それで、アイズ、消費した道具は揃えたのか？十日後にはまた遠征だぞ」

「うん・・・明日、行くよ」

コンツ

「・・・」

ついでに僕の頭の上にアイズさんの顎が乗せられた。

「あの、リヴェリア様？」

「どうした？」

「何だかヴァレンシュタイン氏、落ち込んでません・・・？」

「なに、前から気になっていた男に、どうやら逃げられたらしくてな」

「あちゃー・・・」

「えっ？」

そんなアイズさんの姿にエイナさんはリヴェリアさんに質問して、リヴェリアさんは、くつくつ、と笑いながら、そう説明した。

それを聞いてエイナさんは片手で額を押さえた。

何でそんな反応をするのかは、僕にはよくわからなかった。

わからなかったけど、昨日、アミッドさんに相談すれば良かったんじゃないかと思った。

「・・・リヴェリア様。それで、先程の件についてなんですけど・・・」

「ああ、すまないな。ここに呼ぼう」

一頻り笑ったリヴェリアさんは、あえてバックで持ち帰ったお酒の入った瓶を取り出した。

「えーと、リヴェリア様？呼んでくださるんじやあ・・・？」

「ここを立って探し回っても手間だ。例え、四葉の鼻があったとしてもな？そもそも神出鬼没過ぎて見つかるかもわからん。来てもらう方が確実だ」

疑問符を浮かべるエイナさんにそう話ながら、リヴェリアさんはお酒の栓を抜いた。

トクトクトクツ

「！」

「うわあ・・・涼しい匂い」

「ふむ。嗅ぎ慣れているとはいえ、相変わらずだな」

すると、すぐに独特の甘い香りが漂って来て、それをリヴェリアさんがグラスに注ぐと、たちまち、その香りが応接間に満ちた。

何となく、このお酒の臭いを僕も嗅いだ覚えがあった。

「リヴェリアさん、もしかして、呼ぶのって」

「ああ。すぐに酒の匂いを嗅ぎつけて、やって来るだろう。それより、エイナ。一口飲んでみる」

「は、はい」

だから、その人物、基、神物を思い浮かべながら、リヴェリアさんに聞くと、大きく頷かれ、その答えが確定した。

とは言え、本気でこのお酒の匂い一つでロキ様がここに来るとは、思えなくて、僕は、リヴェリアさんがお酒を注いだグラスをエイナさ

んに差し出し、受け取ったエイナさんが恐る恐るグラスに口をつけるのを見守った。

「うっわ・・・！」

「・・・美味しいの？」

「うん、すごく美味しいよ？」

そして、グラスを傾け一口飲んだ瞬間、エイナさんは目を見開いた。

「この匂いはっ・・・！」

ダダダダッ

「！」

バツ

「神酒（ソーマ）やなっ!？」

次の瞬間、何処からともなくロキ様の声がして、本当にお酒の匂いに釣られるようにして、激しい足音が近付いてきて、朱色の髪をなびかせながら、僕等のいる応接間にロキ様が来た。

「来たな」

パチパチ

「おお、本当にロキ様、来た！」

「来てもらうって、そういうことですか・・・」

リヴェリアさんの目論見通り、見事に誘い出されたロキ様。

エイナさんは手元のグラスと見下ろした後、ロキ様に視線を移し、僕は、リヴェリアさんに拍手を贈った。

第62話・美味しいお酒も・・・

「あー！やっぱりやあ、やっぱりソーマやあ！なに、リヴェリアさんがうちのために買ってきてくれたん!?かーっ、この親孝行もんめ！」

「支払ったのは、私だが、購入しようとしていたのは私ではない」

「じゃあ、四葉たんか？」

「ううん、僕じゃない」

「じゃあアイズか！さてはダンジョンから帰ってきてきつと落ち込んだ風に見せとったのも、このドツキリをやらかす降りやったんやな!?くっつ、アイズたんマジ可愛ええ！」

「違います」

今にも興奮して飛びきつてきそうなロキ様を、アイズさんは僕を後ろから抱っこした状態のまま剣気を発散させて威嚇した。

「あ、あれえ？ア、アイズたん、ツンの部分が極端すぎるんやないかとうちは思うんやけど、どう思う？」

「同意を得たいなら私にもわかる言葉で話せ」

ロキ様はそんなアイズさんに汗を流しながら、じりじりと後退し出し、リヴェリアさんに同意を求めた。

「それより、土産を持ってきたのはこの子だ」

「んんう？」

けど、リヴェリアさんはそれには同意せず、ロキ様にお酒を持ってきたのは、エイナさんであることを教えた。

「なんや、エイナちゃんやない、どないしたん？」

「お久しぶりです、神ロキ。先日の怪物祭のおりは、大変お世話になりました。改めまして、私、エイナ・チュールと申します。この度は

突然の来訪を……」

「ああ、そういうのはええから。首の裏がかゆうなる。ぜひ止めて」

エイナさんはそこで改めて、ロキ様に自己紹介をすると、ロキ様は面倒臭そうに手を振る。

「で、ギルドのもんがうちの『ファミリア』に接触してくるなんて……ウラノスのジジイ、中立とかほざきおって懐刀を備えておこうつちゆう、そういう腹か？」

「い、いえっ!? 私はっ……!」

そして、ロキ様はエイナさんの制服姿を見て、右の目を開いて、ニヤニヤと笑みを作った。

「この子は私の客人だ。中傷など許さんぞ」

「そうだよ、ロキ様。エイナさんは、ギルド職員さんとしてじゃなくて、エイナさんとして、ロキ様に聞きたいことがあって、ここに来たの!」

「あつ、そう。リヴェリアの客つちゆんなら、間違いないんやろうなあ。四葉たん、そう怒らんといて? わかったからな?」

「う、うん」

「すまんなあ、エイナちゃん。どうか堪忍して?」

「だ、大丈夫です。お気になさらずに……」

それには、我慢ならなくて、少し声を張る僕と静かなリヴェリアさんの眼差しを受けて、ロキ様は拍子抜けしたように肩をすくめ、苦笑し、空いている椅子にどかっとならぶ腰を下ろした。

「ほな、建前はええ、サクサク行こうか。うちの好物持ってきてくれたし、四葉たんが聞きたいこと有る言うとするし、何や?」

「……では、お言葉に甘えさせて単刀直入に聞きます。『ゾーマ・

ファミリア」のことにについて、知っていることがあつたら教えて頂きたいのです」

「ソーマだけに、か？ははっ、なるほどなあ」

そして、ロキ様は、片手にお酒を持って、もう片手のグラスへ無作法に並々と注ぐ。

それをぐいっとあおつてからロキ様は、本当に美味しそうにぷはあと息を吐き出して、ほんのり赤く染まった顔をエイナさんに向ける。

「うちもソーマのアホとは仲いいわけでもない。エイナちゃんの期待に応えられるかわからんけど・・・ええよ、ちよちよつと口を滑らせたげる。なに聞きたい？」

「・・・ソーマ・ファミリアを取り巻くあの異常性の原因について、何かご存じですか？」

「んっ、いきなり核心来たなあ。・・・でも、どう説明したらええんやろ」

ロキ様はグラスを揺すりながら、その中で波を立てる酒を見つめる。

少しの間を置いて、ロキ様はクイツとグラスの中身を飲み干した。

「よしっ、うちとソーマのなれそめを語っちゃろう！あ、ソーマって酒の神酒のことな？間違つてもあのアホ神の事やないで？」

「は、はあ」

「では・・・うちなあ、酒が好きやねん。好きで好きで大好きで、一日に何件も店をはしごしまくって、色々な酒を飲み比べておつてな。酔っ払って吐いて酔い潰れてぶちまけて、そんな幸せな生活無限ループしとつたら、ある日なあ・・・とうとう巡り会ったんや、この酒に」

そして、どういいう話が始まるのかと思つたら、ロキ様と神酒に出会いからで、正直、エイナさんが知りたいと思つている事をロキ様は話

す気無いのかなって思った。

「運命の出会いっちゆうやつ？一口飲んだ瞬間に惚れ込んだわ！どっかのファミリアが作ってようが関係あらへん、もう追っかけのごとくオラリオ中の神酒をかき集めてかき集めて・・・で、そんなことしてる内に、面白いことを小耳に挟んでな？」

「面白いこと・・・？」

「信じられるか、エイナちゃん？この酒、失敗作なんやって」

「えっ・・・これが・・・？」

僕にはよく解らないけど、エイナさんは目の前の一口飲んだお酒を見て、その事実にはビツクリして目を丸くした。

そんなエイナさんの反応を見て、ロキ様は笑みを深める。

「気になるやん、こんな美味い失敗作を生み出す『完成品』ってやつ？そんでうち、ソーマんとこのファミリアに直接乗り込んだんよ」

「!？」

「・・・」

そして、ロキ様のソーマ・ファミリアに乗り込んだ事実を知ってエイナさんは愕然としてリヴェリアさんは呆れ返った様子で、ロキ様に冷たい視線を贈る。

確かに、気にはなるとは思う。

失敗作がかなり美味しかったら、その完成品は？ってけど、やっぱり、他のファミリアに乗り込むのは違うって僕も思う。

「ゾーマア！うちや、結婚してくれー！」って玄関の前で叫んだんやけど、なんか寂しいくらいに全力でシカトされてなあ・・・腹立ったから、断りもなしに本当に入ってしまったんや」

「・・・」

で、今度は、頭が痛くなった様子で、エイナさんは頭を押さえた。

「ガランとしててなあ。人っ子一人いないんや。ホームにやで？皆出払ってるってどういうこと？って、うちったらその時いよいよ薄気味悪く感じ始める…どころか、めっちゃウキウキし出してなあ。鼻息荒くしてそこらへんを物色しまくったんや」

「……」

「頼む、ロキ。それ以上身内の恥を晒さないでくれ。教育上も良くない。いいか、四葉、真似はするなよ？」

「う、うん」

「グフフ、リヴェリアのいけず」

そして、リヴェリアさんも頭を抱えた後、物凄い真剣な顔で僕に言った。

一応、頷くけど、残念ながらアイクラッドでNPCのお家の物をキリトさん達と物色しまくった経験もあるから、何とも言えなかった。

「まあええ、探してみても本物の酒どころか何も見つからなかったし。それでいい加減うちも飽きてきて帰ろうかなあ思ったら…いたんよ、あの神が」

「……」

ロキ様はその時の光景を思い出したのか、うつむいて笑みを噛み殺す。

「よお、つてうちが言ったら、あのアホ“いらつしやい”とか抜かしでな？言つとくけど初対面やで？うちに碌に目も向けないで、庭の方で一人鍬持って畑を耕しておったん。後で聞いたんやけど、何でも酒の原料が自家製の植物なんやって。あ、別にヤバイもんを肥料にしろとかはないで？そんで、このソーマっちゅう神が…もう腹立つ

やつでな」

「えっ？」

「どんな話題を振つても『ああ』とか『うん』とかそんな空返事ばっか。うちが気い利かせてるちゆうに畑耕してばっか。．．．うちは言外に糞の肥料撒き散らした畑以下やと言われた」

そうやって話す間もロキ様はグラスのお酒を口にして、頬を染めてほろ酔い加減になって、声の調子を上げた。

話しているうちに、当時の光景を思い出しているのか、目に見えてロキ様の怒気が強くなっていく。

「いかにも優柔不断そうでヘタレ臭が漂う男神のくせに、うちのことをアホ面した案山子のようにとことん放置しおって．．．あーくそっ、思い出しただけで虫唾が走ってきおったっ！」

「．．．」

「しかも、しかもやでっ、エイナたん！」

「エ、エイナたん？」

「その非礼無礼を見逃してっ、うちが本物の酒を恵んでくれってっ、誠心誠意をこめて腰を折ったんよ！このうちがやで!?!そしたらあのアホ、何て言ったと思う!?!『だが、断る』」

そして、その神様に言われた言葉を少し口調を変えて言うロキ様。

「ムツキヤアー！ああいう輩にあんな台詞を言われるのが一番腹立つわあッ！」

「ロキ、いい加減にしろ。話を脱線させていないで、早く本題に入れ」

「ふうー、ふうー」

それでその時の事を思い出してか、怒りを露にするロキ様。

そんなロキ様をリヴェリアさんが注意して、しばらく息を荒くさせ

たロキ様は、落ち着きを取り戻して椅子に座り直した。

「すまんすまん。そんで紆余曲折あったんやけど、あのアホからはファミリアのことについて聞き出せてな。聞いたら普通に吐くわ吐くわ、馬鹿やろ？あいつホンマ、ファミリア運営するセンスはないわ。というか、最初からやる気ないんやな、きつと」

「・・・」

そして、気を取り直して、ロキ様は話を続け、その話を聞いたエ INAさんは眉をぴくりと動かした。

「エ INAちゃん、あまり深く考えない方がええよ？つまりソーマっちゆう神は、自分の趣味のことしか頭にないんや。よくいるやろ？何かに没頭して他のことにはなんも見えておらんやつ。あれを究極完全体にしたのがあのアホや。野望とか腹黒い魂胆なんて含んでるわけでもない、純粹に趣味に生きる、純粹な趣味神やな。こう言うと、神の中でも悟りを開いた仙人みたいな奴やなあ」

「・・・」

そんなエ INAさんに、そう冗談交じりにロキ様は言う。

「で、ここで問題になってくるのが例の『酒(ソーマ)』や。アホ神は自分の趣味・・・酒の製造をするためにファミリアを作った。でもファミリアは中々稼ぎを上げてこない。金のかかる趣味や、このままじゃあ続けられへん。ない頭をひねったあいつは、賞品をもうけることにした。団員達がより頑張ってくれるような、起爆剤をな」

「まさか・・・」

「そ、神酒(ソーマ)」。や。完成品のな。この失敗作を飲んだエ INAちゃんにはわかると思うけど、完成品の出来はヤバくてな。飲めば酔う。べろんべろんに酔っ払うとかそういう意味ちやうで？心の底から、ただの酒に酔う。心酔や。人心ならぬ、心身掌握っちゆうやつ

かな？こう言えばわかりやすいかなあ？あそこの子達が崇めているのはソーマやない、〃神酒〃の方や」

ロキ様は唇に浮かぶ酒の滴をペロリと下を出して舐め取ると、顔色を変えたエイナさんを見ながら、そう断言した。

「あのアホ神は本物の変態や。神秘を持った団員に手伝わせるでもなく材料の開発と調合、そして製法のみで神酒を作り出しおった。趣味を極めた本物のアホが到達した、極致やな。神々の力なんて一切使っておらん。子供達と同じ、いやそれ以下の能力だけであそこまで漕ぎ着けた。信じられるか？言ってしまうえば人の手で神の酒を作り出しおったんや。天界でお前なにをやったちゆう話や」

「ふむ、おおよその全容は見えた。つまり、神であるソーマが神酒を団員達の餌にしたことで・・・」

「うん、あつてるよ。一度神酒の味を知ってしもた団員達は、何に代えても金をかき集めるようになった。賞品言うてファミリアの全員に配られるわけない。資金調達のノルマを決めた上で、成績の上位者に神酒を与えることにしたんや。ファミリア内競争やな。あ、ノルマをちゃんと越えれば、お猪口くらいの分はもらえるんやなかったかな？」

思い出せん、と唸るロキ様。

そんなロキ様を尻目に、エイナさんはようやく納得したような顔をする。

「しかし聞けば聞くほど劇薬の類だな。そんなものを放っておいていいのか？」

「うーん、言い方が悪かったかもしれないなあ。酔わせる言うてもな、ヤバイクスリをきめたみたいに、頭がパーになるとか錯乱するとかはないんや。ただ感動する。打ち震える。もう一口飲みたくなくなってしまふ。でも、酔いは必ず何処かで醒める。普通の酒と同じようにな」

「依存症状はあくまで短期的、ということですか？」

「せや。神酒を飲めなくなつて、正気に戻っている子達も大勢いるんやないかな？結論から言ってしまうと、趣味にしか興味のないアホ神のずさんなファミリアの管理、神酒の魔力、そして団員達の酒への飢え、これ全部がうまく組み合わさつて、今のイカれたファミリアが出来上がったちゆうわけやな。こんなところやな。で、エイナちゃん、まだ聞きたいことはあるか？」

「いえ、もう大丈夫です。本当にありがとうございました」

そこで、ロキ様のソーマ・ファミリアについての話は終わり、エイナさんは何処か安堵した様子でロキ様に礼を言った。

「エイナちゃん」

「はい？」

「目の前に人参を吊るされたロバ達がずっとその人参を食べないでいるとどうなるか、知つとるか？」

そんなエイナさんの名前をロキ様は呼び、突然、その質問をした。

「力のないロバはぶつ倒れて退場して、せこいロバは他のロバの人参を食らおうと、蹴っ飛ばしてまで横取りに走る」

「・・・」

両手の人差し指を、ピツ、ピツ、と一本ずつ上げて、エイナさんの返答を待たずロキ様は言葉を続けた。

最初は意味がわからなかった。

けど、すぐにロキ様が何を言いたいのか理解した。

「今のあそこのファミリアはまさにそういう感じや。あのアホが人参吊るしとるから、止める者もおらんしな。そんでな、中には仲間に蹴っ飛ばされてもめげないロバがおるかもしれん。一人ではなんに

もできない代わりに・・・同情なんかを買ったりして、うまーく他所の飼い主に取り入るような、ずる賢くて、したたかなロバが。気が付いたら身ぐるみをはがされていました、ってこともあるかもなあ」

「・・・」

それは、きつとエイナさんもで、エイナさんの顔はみるみるうちに強張っていった。

「もしな？あそこの連中とてるんどる友達がおつたら、それとなく声をかけておいた方がええかも、なんてな？大事にはならなくとも、痛い目には遭うかもしれん。ちよつと老婆心ちゅうか、余計なお世話かもしれんけど」

「・・・いえ。肝に銘じておきます」

ロキ様はそんなエイナさんの目を覗き込むようにしてしていた姿勢を直して、椅子に深く腰をかけると、半分も中身のないエイナさんのグラスにお酒をそそいで、そつと勧め、エイナさんはゆっくりと息をはいて、神妙な顔で頷いた。

「さて。酒もなくなつてしもたし、お開きにしようか」

「すまないな。最後まで付き合ってもらつて」

「ええよお。うちも美人で可愛いエイナちゃんと話せて良かったわ」

「あはは・・・」

ロキ様はにへらつと笑つて、んゝ、と立ち上がつて思い切り伸びをする、アイズさんに目を向けた。

「ほれ、アイズう。自分、何時まで落ち込んでんねん」

「・・・」

「そや、ステイタス更新しよ？帰つてきてからまだやつとらへんや

ろ?..な?」

「・・・わかりました。四葉、降りてもらっていい?」

「うん」

そして、ロキ様はアイズさんを誘い、僕はそこでアイズさんの膝から降りた。

「フヒヒ、久しぶりにアイズさんの柔肌蹂躪したるわ・・・!」

「変なことをしたら斬ります」

「【テイクアウト】アイズさん、僕のクナイ持ってく?」

「うん」

「えっ!?ちよ、四葉たん!そんなん出したらあかん!ないないしとき!い、行くで、アイズたん!」

降りてロキ様のその言葉と、アイズさんの「変なことをしたら、斬る」発言に本気で【幻書の術】の中からクナイを出してアイズさんに渡そうとした。

それをロキ様に全力で止められ、ロキ様は急いでアイズさんを通して応接間を後にする。

壁の向こうに消える直前に、ウインクして手を振っていた。

「・・・【ストレージ】」

「面白い、神ですね」

「面白いかは賛同しかねるが、あれで存外に切れる。我々からの信頼も厚い」

「リヴェリア様も、ですか?」

「ああ、私もだ」

それを見送ると、ある意味で手持ち無沙汰になった僕はクナイを【幻書の術】の中になおして、アイズさんの座ってた椅子に座り直した。

「【テイクアウト】・・・えっと、コレが」
「ん?」

そして、お酒と一緒に買った補充用の道具を【幻書の術】の中から取り出して、僕のとリヴェリアさんのとで分けていく。

「アイズたんレベル六キタアアアアアアアアアアアア!!」

「ぶつつ!!」

「!」

ロキ様の声がホーム内に響き渡った瞬間、いいタイミングでお酒を口に含んでたエイナさんは、ビックリして向かいに座る僕目掛けて吹き出した。

「・・・エイナ」

「わああああああああつ!!ご、ごめんなさああいつ!!四葉・・・四葉ちゃん!」

ふらっ

ガシヤアア

「・・・」

「四葉!」

その結果、自然な流れでお酒が口に入ってしまった僕は、そのまま意識を手放した。

そんな僕に慌てるエイナさんとリヴェリアさん。

ジュッ

「熱っ!」

「酷い熱だ。デイアンケヒト・ファミリアに運ぶ、エイナ、責任もつて手伝え」

「ほ、はい」

その後、ロキ・ファミアでは二重の意味で大騒ぎになったらしい。

第63話・再びの夢と兄の夢、そして、現実

ポンッ

「!」

「いいですか？カヴァス、良く見るんですよ」

夢を見た。

見たいと望んでた大好きなあの人の出てくる夢を。

「カヴァス、あの影です。あの木のかげですよ？」

「・・・」

すごく、嬉しくてたまらない。

「わかりますか？カヴァス」

コクッ

「・・・」

「わかりましたね？アレをこちらに追い込むのですよ？出来ますね？」

僕にとっては、すごく、すごく幸せな気持ちになれる大事な大事な夢だ。



ポンポン

「!」

「良く頑張りましたね？偉いですよ？カヴァス」

狩りが終わって、一番、僕の大好きな瞬間。

大好きなあの人が僕の頭を撫でて、狩りで頑張った事をねぎらって

くれる。

「さあ、帰りますよ。カヴァス」

「!？」

そして、これは、僕のアマリの好きじゃない瞬間

大好きなあの人の手が僕の頭から離れていく瞬間だ。

だって、もつとずっと撫でていて欲しいって思うのに叶わないし、この後は、目覚めて現実の世界だから。



ふっ

「……」

そこから一気に視界が変わった。

ほら、目覚めたって一瞬、思った。

さわあく

「あれ？」

けど、そこは、僕の部屋とかじゃなく、沢山のモノの焼けた臭いが染み付いたまるで戦場の後のような、大火事があったような場所だった。

ふわっ

「!？」

そこに、泣きたくなるくらい、すごく懐かしい匂いがハッキリと僕の鼻に届いた。

その瞬間、急がなきゃ、行かなきゃって、今を逃したらダメだって

思つて必死に体を動かして、手を伸ばした。

ガシッ

「!?」

そして、僕の手が掴んだのは、誰かの足だった。

「何だお前」

「!?」

すると、その足の持ち主は声を発した。

この二年間、聞きたくて、聞きたくてたまらなくて、同時に、聞けば心が折れてしまいそうになるから、聞きたくなかった懐かしい声だった。

「・・・お・・・兄ちゃん・・・お兄ちやあん!お兄ちやああん!!」

「ああ〜」

ヒョイツ

トントン

「!?」

「よしよし、もう大丈夫だぞ?よしよし、だから、もう泣くな、な?」

だから、僕は、足から手を離さず、泣きながら声の主を呼んだ。
すると、僕の体は抱き上げられた。

懐かしくて、暖かくて、すごく安心出来るお兄ちゃんの腕の中だ。

泣きじやくる僕の背中を優しくトントンと叩くお兄ちゃんに、僕は、やっとここに帰って来れたんだって思えた。



パチッ

「・・・」

そう思った瞬間、また、視界が変わった。

同時に、安心出来たお兄ちゃんの腕の中の温もりも何もかもが全部、無くなっていた。

ぶわっ

「・・・」

ツウッ

代わりに有ったのは、見覚えの無い部屋の天井だった。

ここが何処だとか思う前に、ぶわって、目の前の天井に水の膜が貼って、溢れた。

バサッ

「・・・ヒクッ・・・ヒクッ・・・うううッ」

その溢れだした涙は止まってはくれず、僕は、布団を頭まで被った。

ガチャ

「!?!」

カツカツ

そこに、誰かが部屋の扉を開けて入って来るの音がして、こっちに
来る足音も聞こえた。

正直、不味いと思った。

このまま近付いて来られて、被ってる布団を引き剥がされたら、僕の
情けない泣き顔をその誰かに見られてしまうって

グイグイ

「・・・」

パサッ

「！」

だから、慌てて服の袖で涙を拭き、僕は、布団を引き剥がされる前に自分から布団から顔を出した。

「おや、起きられていましたか？」

「・・・アミッドさん・・・」

「はい、おはようございます。失礼しますね？」
スッ

「！」

そこには、一瞬ビツクリした顔をしたアミッドさんがいて、優しく微笑みと布団から顔を出した僕の額に手を乗せた。

「熱は下がったようですね」

「熱？僕、熱出したの？」

「はい。昨夜、こちらに運び込まれた時、あまりの高熱だったので、私どもの治療院でそのままお預かりしたんですよ」

「・・・そうなんだ」

「事情は伺っております。それから察するに、貴女の体は、アルコール分に異様に拒否反応を示すようです。ですので、今後は、お酒には注意してください？」

「うん！」

そして、その注意を受けて、僕は、強く頷いた。

何せ、僕的に三度目のお酒的トラブルだ。

当然、同じ哲をこれ以上踏まないように僕自身も注意しなきゃならないと思うし。

「けど、不思議」

「不思議ですか？」

「うん。ご飯作る時にお酒を使う料理もあるでしょ？僕、そういうの食べてもこうならないんだ」

「うーん、それは、調理の際にアルコール分が熱で飛ぶからかも知れませんね。とりあえず、気を付けてください？」

「はい！」

「フフフツ」

アミッドさんに念を押され、僕は、ビシツと敬礼して答えた。それに少し笑われたけど、まあ、良い。

コンコン

「はい、どうぞ」

「失礼する」

「ちようど良く、お迎えが来たようですね？」

そんなやり取りをしていると、部屋の扉がノックされた、アミッドさんが扉の向こうの誰かに声をかけると、扉の向こうの人、基、リヴェリアさんが扉を開けて入って来た。

「どうだ？」

「はい、もう、熱は下がりましたし、大丈夫です」

「そうか。世話をかけたな」

「いいえ、これは私共の仕事ですから」

そのまま歩み寄ってきてくれたリヴェリアさんはアミッドさんと話した後、僕に目を向けた。

「気分はどうだ？」

「うん！もう、全然平気！」

「そうか。ほら、お前の着替えだ」

「ありがとう、リヴェリアさん」

「ああ」

「アミッドさんもありがとう」

「いいえ」

そして、リヴェリアさんが持って来てくれた服を受け取って、リヴェリアさんとアミッドさんに僕は、お礼を言った。



「・・・」

「・・・」

その後は、着替えを済ませてアミッドさんにお別れを言って、リヴェリアさんとロキ・ファミリアのホームに僕は、帰って来た。来たけど、何時もの様子とは違っていた。何て言うか、全体的に興奮している感じで。

「リヴェリアさん、何か変」

「まあ、仕方がない。アイズがレベル六になったからな。昨夜からこんな調子だ。さあ、食堂に行くぞ？昨夜から食べていないんだ、しっかり食べておけ？」

「う、うん」

そして、リヴェリアさんにその原因を聞いて納得しつつ、僕は、食堂の方に向かう。



「やっぱ、凄いつすね！アイズさんは」

「うっせー」

ゲシッ

「ガアッ!？」

その食堂では、興奮してベートさんに話しかけたラウルさんを、不機嫌そうにベートさんは蹴り飛ばした。

「先に行かれたー!!」

「やかましい」

「・・・」

ティオナさんは体全体で悔しがって、それにティオネさんがげんなりした様子で、そんな二人の側でレフイーヤさんが何か様々な思いを募らせているような顔をしていた。

「・・・」

「・・・」

ただ、当の本人であるアイズさんだけは、また、他とは違った。何て言うか、ドンヨリとした空気を背負ってる感じ。

「おっ！四葉たん、帰って来たんか!!」

「！た、ただいま、ロキ様、フィンさん、ガレスさん」

「おかえり、四葉」

「お主はとことんまでに酒に弱いんじやの〜」

そんな食堂の雰囲気を入り口付近で見渡していると、ロキ様がフィンさんとガレスさんと共にやって来た。

「ちようどええは、四葉たん、後ででええんやけど、四葉たんの戦闘衣一式、貸してくれへん？」

「う、うん、良いよ?けど、何で?」

「今のままやといろいろと大変やろ？」

そして、何故か僕の戦闘衣を貸してと言うロキ様に何故かと聞くと、そう返ってきた。

確かに、今のままの戦闘衣だと、大型犬バージョンと仔犬バージョンの時の戦闘衣の扱いに困りはしている。

特に、大型犬バージョン。

コレになると服が弾けちゃうし

「うん、わかった。【幻書の術】の中に有るけど」

「そうか、じゃあ、ご飯食べたら、受け取るわ」

「わかった」

なので、この朝食後、ロキ様に【幻書の術】の中の戦闘衣を渡すことを約束して、僕は、今日の分の朝食を受け取ると、レフィーヤさん達のところに足を向けた。

「あっ！四葉、おかえり!!」

「た、ただいま」

「もう、大丈夫なんですか？」

「うん、もう平気」

「けど、今回の事故みたいなものだけど、今回みたいな事にならないように気を付けなさいよ」

「うん、アミッドさんとも約束したから、気を付ける」

そこでも、テイオナさんやレフィーヤさん、テイオネさんが声をかけてくれて、僕は、笑顔でそれぞれに答えた。

「アイズさん、ただいま」

「・・・うん、おかえり・・・」

そして、アイズさんに声をかけてみると、一応、返事は返してくれるけど、やっぱり暗い感じで、僕としては少し心配になった。

第64話・首脳達の苦悩

「アイズもとうとうレベル六になりおったか」

「あの娘に触発され、テイオナ達もすぐに続くだろうな。・・・アイズのように無茶をやらかさなければいいが」

「はは、まあ周囲の士気が上がるのは良いことだよ」

「フィン達もうかうかしておれんとちやう？古参の面子を潰されんようになく」

朝食後、ガレスさん、リヴェリアさん、フィンさんとロキ様はフィンさんの部屋に集まって、順々に言葉を交わす。

「じゃ、そろそろ始めようか、極彩色の魔石にまつわる話。最近どたばたしとったし、詳しい情報を交換しとこ」

「極彩色の魔石：五十階層の新種と、ファイリア祭に出てきたと言った、食人花じゃな」

「この二種類のモンスターの関連は今置いておくとして・・・地下水路の方はどうだったんだい、ロキ？バートと一緒に向かったんだろ？」

そして、行儀悪く机の上に乗りながら、ロキ様は告げ、コレまでに有った一連の事件についての情報を共有するための話し合いが始まった。

「モンスターは出てきおったけど、碌な手がかりは見付けられなかったなあ。胡散臭い男神には面倒事を押し付けられるし・・・」

「ギルドは白と見ていいのか？」

「何かは隠してそうやけど、今回の騒動には直接関係してないような気はするなあ・・・勘やけど」

ガレスさん、フィンさんと続いた声と、フィンさんからの問いに答

えたロキ様は、リヴェリアさんからの問いにも根拠はないが、神の直感で告げる。

それには、フィンさんもリヴェリアさんもガレスさんも異論は無いようで、長年の付き合いからくる信頼を覗かせながら納得を示した。

「んじゃ、フィン達の方は？」

「十八階層・・・リヴィラの街での件だね・・・」

そして、次に、フィンさんとリヴェリアさん口からリヴィラで起きた殺人事件と、食人花の大群と、元凶である赤髪の調教師の女と、ハシャーナさんが殺される原因になった不気味な胎児の「宝玉」についての説明が行われた。

「モンスターを変異させる、とは・・・にわかには信じられんわ。あの五十階層の女体型も、その宝玉とやらで生まれ変わったということか？」

「恐らくはな。アイズとレフィーヤ、そして、四葉しか目撃した者はいないが・・・」

「うちはその調教師の女っちゅうやつの方が気になるなあ。フィンとリヴェリアの二人がかりでようやく辛勝って・・・フレイヤんこの【猛者(オツタル)】やないんやから。まともに戦っても勝てそうか、フィン？」

「負けるつもりはない・・・とは言いたいけど。真正面からやり合いたくない相手ではあることは、確かかな」

一連の説明を聞いて髭をさするガレスさんにリヴェリアさんが、机の上で胡座をかくロキ様にフィンさんがそれぞれ答える。

「フィンにそこまで言わせるつーことは、そいつもレベル六やろな・・・どこの派閥の者や、知らんで、そんな奴・・・」

「・・・これは、先日アイズに聞き出したばかりなのだが、調教師の

女は、あの娘の事を「アリア」と読んだそうだ」

フィンさんの敵への見解を聞いて口をへの字にしたロキ様は、その調教師の女がどの派閥の者か皆目見当もつかないことに声を漏らす。そこで、リヴェリアさんがおもむろに切り出した。

その発言に、フィンさんやガレスさんのみならずロキ様も目を見張る。

「間違いないのかい、リヴェリア？」

「ああ。アイズの魔法を見て、直後のことだそうだ。そこからは執拗にあの娘のことを襲い続けた。まるで探し物が見つかったかのように」

表情を真剣なものに変え、フィンさんがリヴェリアさんに問いただし、リヴェリアさんもそう答えた。

「・・・儂等以外に、アイズの身の上を知る者がおるとは考えられんぞ」

「しかし、それでは何故、アイズの母親の名を相手が知っている？」

その答えにフィンさん達は一様に口を噤んだ。

「敵の狙いにはアイズさんも含まれているのか？」って

そして、一つの疑念が生まれる。

この場にいる四人しかアイズさんの身の上を知り得ないからとガレスさんは眉をひそめる。

「ロキ、神々の中でアイズの事情を知る者は？」

「・・・それこそ気付いておるのは、ウラノスくらいやろうなあ」

「・・・」

リヴェリアさんとガレスさんのやり取りを横目にフィンさんは口

キ様を見て、その言葉を聞き、フィンさん達はロキ様に半眼を向けた。
「やはりギルドが一番怪しいのではないか」とその視線に乗せて訴える。

ブンブン

「待て待て、結論を急ぐなつちゆうに」

それにロキ様は汗を流し、両手を上げてフィンさん達の疑いを制する。

ひとまず、ギルドへの疑いは保留することになった。

「でも、アイズをアリアと呼んだ・・・母親と間違えたのは気になるな。アイズの実状を把握しているわけじゃないかもしれない」

「・・・仮に、敵がアイズの正体を知っていたとして、狙いはなんだろうか？」

そして、フィンさんの推測とリヴェリアさんの問いかけ、フィンさんの方の意見は視野に入れるとして、リヴェリアさんの問いに答えられる者はここにはいなかった。

「もう一つ、気にかかる事がある。調教師の女は、僕達のことを知らないようだった」

「どういうことじゃ？」

今入手できる情報だけでは断片的で、点と点を繋げることは出来なくて、更にはアイズさんの事情も関わっていることから、無闇な結論を急ぐことはできなかった。

その場に沈黙が落ちた後、不意にフィンさんが口を開いた。

「覚えているか、リヴェリア。交戦した後、調教師の女がこちらに向かって言った言葉を」

「・・・あれか」

フィンさんはガレスさんに問われ、視線をリヴェリアさんに移し、リヴェリアさんはフィンさんの言葉に、十日以上も前の戦闘の記憶を振り返った。

フィンさんとリヴェリアが連携して一撃を与えた後、調教師の女は、『第一級・・・レベル五、いや六か』と言った。

つまりは、フィンさんとリヴェリアさんとの戦闘を通してじゃないと、二人の実力が、情報が、調教師の女の知識には無かったということだ。

都市に名を轟かせている、二人の情報をだ。

「あー、そういうことか。うちのファミリアの名前は大勢に知られると、それこそ山と海も越えて、世界中のものにもな。フィン達だったらなおさらや」

「ああ。自慢じゃないけど、都市に身を置く者、そして都市外の者でさえも、僕達のことを知らないというのは考えにくい。大量のモンスターを手懐け、一般的な知識には疎い・・・まるで」

ロキ様の言葉にフィンさんは頷くと、そこまで言葉を続けて、口の動きを止めた。

「まるで、なんだ?」

「・・・いや、何でもない。忘れてくれ」

そんなフィンさんにリヴェリアさんは言葉の続きを促す。

それにフィンさんは首を横に振ると軽いため息をつきつつ、椅子に深く座り直した。

ギシッ

「・・・ロキの地下水路の件といい、敵の姿はおろか輪郭すらはつき

り見えてこんのう」

「そうだね」

座る椅子を鳴らすガレスさんに、フィンさんは認めるように頷いた。

「・・・アイズ本人からも、話を聞いておきたいな」

スツ

チリンツ

チリンチリンツ

一旦、部屋から会話が途切れて、しばらくして、フィンさんはそう呟くと執務机に備わった引き出しを開け、その中から派手なりボンが結ばれた、どぎつい赤に染まった把手のハンドベルを取り出した。フィンさんはそれを右手で持って軽く振ってその音を響かせた。

ドドドドドド・・・

バンツ!!

「お呼びですか、団長!?!」

「アイズを探してきてくれないか。レフィーヤ達の手や四葉の鼻を借りて、ここへ連れてきて欲しい」

「お任せ下さい!!」

ギューン!

すると、秒を待たず、駆け足の音がホームを震わせ、フィンさんの部屋に近付き、次には大きな音と共に扉を開け、現れたのは、顔を輝かせるテイオネさんだった。

そんなテイオネさんにフィンさんは淡々と用件を伝え、テイオネさんは嬉しそうな表情で快諾して、勢いよくその場から姿を消した。

「・・・」

パタンツ

「・・・彼女に押し付け・・・贈られたんだ」

「・・・便利・・・じゃの」

「まあね」

開けっ放して放置された扉を、リヴェリアさんは無言で閉め直し、フィンさんはベルのことを乾いた笑みを浮かべて説明して、鳴らせばどこからでもテイオネさんが駆け付けてくる呼び鈴にガレスさんはそう呟いた。

「んー、じゃあアイズが来るまで暇やし、今度の遠征についても話しとくか」

「神へファイストスとの話はいいたかいロキ？」

「おー、鍛冶師をつれていきたいっちゅう、あれな。ぼっちしや。深層の武器素材を回すっちゅう条件付きやけど、ファイたんは呑んでくれたで」

そこで、ロキ様の提案で、次回の遠征についての話をすることにして、フィンさんの問いに、ロキ様は問題ないと指で輪を作る。

これは、前回の遠征で芋虫型のモンスターの腐食液によって、装備品とその予備がごとごとく溶かされ、敵を退けた後には探索続行不可能なほどの武装不足に陥って、撤退を余儀なくされた経験を活かして、武器を修復できる鍛冶師の同行を求めたいフィンさんが、ロキ様を通してへファイストス・ファミリアに協力依頼を頼んでいたからだ。

何故、フィンさんがへファイストス・ファミリアに白羽の矢を立てたかというと、へファイストス・ファミリアの鍛冶の腕は勿論、並みの上級冒険者以上の戦闘能力を持つ上級鍛冶師がごまんと所属しているから、深層でのアクションにも対応出来ると判断したからだとか。

「鍛冶師が武器を整備すれば、同じ主武器で戦い続けることができる……予備の必要がなくなるな」

「ああ、浮く荷物の容量分は、全て魔剣にあてる。ガレス、手配の方は？」

「おう、済ませておいたぞ。都市中の武器屋に当たって、三十振りほど、全て上等もんじゃ。今日受け取ってくる」

そして、沢山の魔剣を用意するのも、芋虫型のモンスターへの直接攻撃を避けるための対策。

魔剣は魔法と同効果の砲撃が行える特殊武器なため、遠距離攻撃を仕掛けることが出来る。

また、あの芋虫型のモンスターの群れと遭遇するかはわからないけど、最悪を想定して準備だけは整えておく、ある意味じゃ、冒険者だけじゃなく、戦う者全てにおいての鉄則みたいなモノだ。

「後は……リヴェリアとアイズを除いた主戦力に、不壊属性の武器を用意する」

「魔剣と人数分の特殊武装……ははっ、わかつとったけど、こりや相当金が飛びな」

リヴェリアさんとアイズさんを除いた、フィンさん、ガレスさん、ベートさん、テイオナさん、テイオネさんの五人分の不壊属性の武器を用意するのも、その一貫だ。

その代償として、前回の遠征で稼いだ利益が消え去るのは勿論、貯めてきたファミリアの資産も際どいところまで切り崩すことになるだろう。

「すまない、ロキ」

「フィン達に全部任せとるのはこっちや、好きにしたらええ……それに、博打をするならトコトンつき込む方が、うちの好みや」

ロキ様はハイリスク・ハイリターンこそが探索系ファミリアの醍醐味で、同時に遠征の常則だと愉快に告げ、フィンさんに向けてけららと笑い返した。

「しかし・・・そうになると、調教師の女の動きは気になるな」

「シー・・・確かに今回の遠征を見送るのも、一つの選択肢かもしれないけど」

「今更中止、なんて言い出せば、ベートかテイオナ辺りがうるさそうじゃのう・・・」

その話し合いの中、ふとりヴェリアさんが言う。

「アイズさんに関心を示していることが事実だとしたら、何らかの反応を示す可能性がある、と。」

「だけど、そのアイズさんが昇格したばかりだから尚更、ベートさんやテイオナさんが黙っていないだろうと、フィンさんの言葉を引き継いでガレスさんが言う。」

「それに、極彩色の魔石について、遠征先で何か手がかりが掴めるかもしれない」

「ふむ・・・」

「ひとまず、準備だけはこれまで通り進めていく、ということでもいいんじゃないかな」

食人花の出現階層は未だに判然としていないが、芋虫のモンスターは五十階層近辺を根城にしているのは間違いない。

情報収集のためにも遠征を敢行する価値はあると説くフィンさんにリヴェリアは、わかったと頷いた。

コンコン

「団長、テイオネです。よろしいでしょうか？」

「おっと、来たようだね。入ってくれ」

そして、話が区切りを迎えた時に、ちょうど部屋の扉がノックされる。

ドア越しに響く声に、フィンさんは返す。

ガチャ

「「・・・」」

「あれ、アイズたんは？」

「えーつと・・・」

部屋の扉が開くと、そこにいたのはティオネさんとティオナさん、レフィーヤさんだけだった。

連れてくるように頼んだ肝心のアイズさんの姿はない。

ロキ様の質問に、ティオネさんは視線を逸らし、三人揃ってばつが悪そうな顔をしていた。

「ダンジョンに、行ってしまったようです・・・一人で」

「「「・・・はあ」」」

やがておずおずと、レフィーヤさんが代表して口を開く。

申し訳なさそうに告げられた言葉に、沈黙するフィンさん達は顔を見合わせ同時に溜め息をついた。

「ダンジョンから帰ってきたばかりだと言うのに・・・」

「随分と塞ぎ込んでおったようじゃが、気晴らしにでも行ったか？」

「参ったね」

憂えるリヴェリアさんとともにガレスさんも呆れた顔を浮かべ、フィンさんは苦笑した。

「・・・それと」

「ん？それと、なんや？」

「四葉ちゃんがアイズさんの後をつけて行ってるみたいでして」

「「「・・・はあ」」」

そんな三人に、レフィーヤさんは更に申し訳なさそうに追加情報を告げた。

その言葉にまたしても沈黙して溜め息を吐くフィンさん達。

「二応、病み上がりだぞ、あのじゃじゃ馬は・・・」

「アイズの事を気にしておったようじゃしの・・・」

「本当に参ったね。話し合ったばかりのせいもあるけど、少し心配だね。四葉なんて武器はあっても戦闘衣を着てないだろ、ロキに預けてるわけだし・・・」

「両方杞憂のような気もするがのう・・・レベル六にもなったんじゃし、あの子なら、武器さえあれば、なんとかなるじやろう」

「そもそも当てがなければ、追ったところで広大なダンジョンから見つけ出せる保証もない。アイズのことだ、単独で中層まで行くだろう。四葉もアイズについて行っているなら、必然的にな・・・全く」

「まあ、もし気になるんやったら、ベート辺りにそれとなく探さよう言つとけばええんとちゃう？ダンジョンに行こうとしたりとったで、あの負けず嫌いなも」

先程まで話題に挙がっていた、調教師の女がフィンさん達の頭に浮かぶ。

神経質になっていることを自覚しつつも、ほんの少々、アイズさんの事を案じ、度々、やらかす僕の事も案じてくれるフィンさん達。

そんなフィンさん達にロキ様が横から助言を寄せる。

「あとなあ、フィン。ギルドにはバレンのように、地下水路の方を調べてもらってもええか？」

「さっき言っていた、例の下水道かい？」

「そや、前に行った時は隅々まで調べられたわけやないし、遠征先に手がかり探しに行つといて、実は足もとに転がってましたー、つていうのも嫌やろ？うちがいると足引つ張るし、指揮、任せてええ？」

「シー、わかったよ。せっかくだし、今から行つてこよう」

付け加えてロキ様が言うフィンさんは、そう言つて椅子から下りた。

「すまん。広いから人数連れていつて構わん。ただ、魔法使いの子はあまり抱えん方がええかもしれん」

「ティオナ、ティオネ。今から都市の下水道を調査する、付き合つてもらおうよ」

「はい、お任せを！」

「何かよくわかんないけど、わかった！」

「魔導士を除き、手の空いている者を集めろ」

そして、部屋の前で置いてきぼりを食らっているティオナさん達に声をかけ、その指示を聞いたティオナさん達は駆け出して行つた。

「私達も遠征の準備に取りかかるか」

「うむ。儂は下つ端どもを連れて、発注した魔剣を受け取ってくる」

続いて、リヴエリアさんとガレスさんが部屋から出て行つて、気が付けば、部屋にはロキ様とレフィーヤさんしか残つていなかった。

「あ、あれ？えーと、私は・・・」

「んー、レフィーヤは、うちとお留守番でもしよか」

「あう〜」

にかつと笑うロキ様に、置いていかれてしまったレフィーヤさんは、首を前に折つた。

第65話・黒衣からの依頼

「・・・」

タッ

ロキ様達が僕やアイズさんの外出に気が付いた頃、僕は、そんなことをしても何も解決しないことをわかって、アイズさんの数メートル後ろをこそこそ、ついて歩いていった。

トボトボ

「・・・」

「・・・」

ドンヨリした雰囲気醸し出しながら中央広場に向かって肩を落として歩くアイズさん。

「あ」

「・・・？」

「!?」

ダッ

そんなアイズさんが中央広場に入ってしまったら歩いたところで、北西のメインストリートから合流するようにエイナさんがアイズさんに近付いて来た。

それを見て、僕は慌てて物陰に逃げ込んだ。

「・・・お、おはようございます、ヴァレンシユタイン氏。昨日はお邪魔しました」

「・・・おはようございます」

「ヴァレンシユタイン氏、今日はどうなさったんですか？」

「道具を、買いに行こうと思ってます」

「えっと、バベルに、ですか？」

そして、エイナさんとアイズさんは、そのまま挨拶を交わして、会話を始めた。

「ヴァレンシユタイン氏、先日はありがとうございました。私の担当冒険者を救って頂いて」

「？」

「覚えていらつしやらないでしょうか。先日、五階層で暴れていたミノタウロスを貴女が倒し、間一髪のところを助けられたそうなのですが」

「・・・ミノ、タウロス」

「はい、冒険者の名前はベル・クラネル。彼は非常に貴方へ感謝しております・・・！」

その流れでエイナさんは、ベルさんの話題を出して、アイズさんはその名前を聞いた瞬間、首を無残なまでにずうんと折った。

その様子にエイナさんはぎよつとした様子だった。

「・・・私、怖がられていないですか？」

「え、ええ・・・？」

それから、少しの間、無言の時間があつた後、アイズさんはおぼろげとその事をエイナさんに聞いた。

その聞かれたことに本気で戸惑った様子の子のエイナさんは、絞り出すような声を出した。

「――？？」

「??」

そこで何かを見始めたエイナさん。

その視線を辿ると一本の広葉樹の根元に身を寄せ合っている四人の冒険者の集団がいた。

その内の三人は防具に、三日月を背景に置いた杯のエンブレムが刻み付けられていた。

「……………」

「……【第一階限定解除】」

フツ

そして、何やら話している様子で、だけど、残念なことに僕のいる場所からじゃその話の内容は聞き取れなくて、魔法を使って人の耳より聴力のある犬耳を生やして、その人達の会話に意識を集中させた。

「となると、その白髪の餓鬼もそろそろ、アーデについてことですかい？」

「ああ、そうなりゃ後は読めてる。お前等、しくじるんじゃねーぞ」「わかってまさあ、旦那。へへへ」

それで、ハッキリと聞こえた四人の会話に僕は、驚きを隠せなかった。

「アーデ」という人の事は知らないけど、僕以外での白髪の餓鬼と言えば、ベルさんしか思い当たらない。

彼等の話の流れから、そのアーデという人が、ベルさんに何かしやうとしているということだろう。

「【テイクアウト】」

カチャツ

ダツ

「!？」

そう思うと、いてもたってもいられなくて、僕は、【幻書の術】の中

から刀と剣帯を取り出して、その場から飛び出すと一気にバベルの方へ走った。

その瞬間にアイズさんにバツチリ見られていたけど、その時の僕には、その事に気付く余裕なんて無かった。



ダゴツ!!

「・・・」

スンッ

スンッ

そして、バベルの地下一階。

ダンジョンに通じる大広間で、床の中央にあるダンジョンへの出入り口である大穴。

そこに設けられた螺旋階段を使うことがまどろっこしくて、僕は、その階段を使わずに大穴に飛び込んで一階層に着地。

その場で鼻を鳴らして、目的の匂いを探す。

スンッ

「あつた!」

「四葉!!」

「!?!」

目的の匂いを嗅ぎ当て、走り出そうとした僕は、上から聞こえた僕の名前を呼ぶ声にたたらを踏んで、思わず上を見上げた。

ダゴツ!!

「!?!」

すると、すぐに誰かが僕と同じように着地した。

咄嗟に飛んで来る割れた床の欠片から顔を守るように腕で顔を覆った。

「四葉、あの子の匂い、追える!？」

「!?こ、こつち!」

ダツ

そして、その飛び下りてきた人物、基、アイズさんにそう言われ、弾けるように駆け出した。



「グエエー!?!」

ザアン

そのまま、一気に十階層まで下りて来た僕等は、九階層から十階層に下りる階段を下りきった所で飛び掛かってきたインプを瞬殺。

僅かにも速度を緩めることなく、十階層の奥に進む。

「こんつのおおおつ!!」

ズバアツ

「ブフオオ!」

ズウウン

そうしてるとキリトさんと似たような人の咆哮と、激しい戦闘音、そして、モンスターの雄叫びが僕等の耳に届いた。

「急ごう」

「うん!」

そして、そのまま、長い通路を疾走して音の出どころである一つの

広間に突入した。

「グルアツ!!」

ブオツ

「くっ!」

バツ

ザザザツ

広々とした空間には枯木が疎らに立っていて、視線の先、広間の中
央付近では、霧の中で複数の巨大な影が暴れ回っている。

匂いからしても間違いなくオークだ。

モンスター達と交戦するのは、たった一つの人影。

「[ファイアボルト]!」

ドオオオオオオン

「!」

次の瞬間、砲声とともに繰り出された炎雷が霧の海を切り裂いた。
爆砕するオーク、そして、そのオークに向かって腕を突き出してい
るのは、ベルさんだった。

ブオツ

バツ

「!」

ズバアツ

ベルさんの魔法で薙ぎ払われた霧の切れ目から、振り回されるオー
ク達の四肢をかくぐり、短剣で果敢に反撃。

インプやオークからの包囲網に悪戦苦闘しながらも、持ち前の敏捷
さで数の多さにも屈する様子もない。

「！【ファイアボルト】！！」
ドオオオオオオンツ！！

それに加えての彼の魔法。

その戦いつぶりから見て、時間さえあればベルさんだけでこの場を切り抜けられそうだった。

ギイイン

ガガガガツ

「!?」

そう思っていると、不意にベルさんは回避行動を誤って遅らせてしまつて、オークの振るつた枯木の棍棒を左腕の盾で滑らせるように受け流した。

けど、凄まじい音を盾の表面から生じさせ、その衝撃に体をよろけさせてしまう。

ザザンツ

「グエエー！？」

ザンツ

「グエエー！？」

「え・・・誰?？」

そんな隙をモンスター達が見逃すはずがなく、無防備になつたベルさんの背中に、舌舐めずりをするインプ達が飛びかかろうとした。

けど、そんなことを僕とアイズさんが許すはずがなく、ベルさんに襲いかかったインプ達を高速の一閃でインプ達をまとめて両断した。

その時、ベルさんが驚く気配を感じたけど、今は、目の前のモンスター達を殲滅することを最優先にした。

「・・・」

ダッ
ザザンツ
ヒュパン！
ドゴツ
ザッ
パパパツ
ザザザンツ

僕とアイズさんは霧の中に紛れると走る速度を上げて次々とインプやオーク達を愛剣の餌食にした。

あつという間に、モンスターの数も激減させていく。

「すつ、すみませんっ!!急いでるんです!」

タツ

「えっ?」

「あ」

そして、崩れた包囲網を見て、ベルさんはその一角を強行突破して、僕等に焦っているような声だけを残して、脇目も振らず広間の出口へ行ってしまった。

僕もアイズさんも振り向いたけど、すでにベルさんの姿は霧の奥に消えてしまっていた。

「グルルツ・・・」

「グウ・・・」

「・・・」

ダッ

ザンツ

ザザンツ

ザザザンツ

一瞬、ポカンとした僕等だったけど、襲いかかってくるモンスター達を仕方がなく相手にすることにした。

ベルさんの後を追えないように、完璧に全滅させた。

チイン

「行っちゃった・・・」

「・・・」

それまでの戦闘が嘘だったかのように、静まり返った草原の中、アイズさんは剣を鞘に収めつつ、ぼつりと呟いて、僕は、そんなアイズさんを盗み見るように見た。

「・・・??どうしたの?」

「・・・怒ってる?」

「えっ?」

「・・・」

僕的に緊急事態だったけど、勝手な行動をしたわけだし、本気でアイズさんに怒られると思った。

ポンッ

「!?!」

クシヤクシヤ

で、返された返事は、言葉じゃなく、僕の頭を撫でる手だった。

「・・・これから、どうしようか?」

「・・・」応、匂いで追えるけど」

「うーん」

そして、アイズさんが呟いたそれに、今からでも追うことは可能だ

と伝えると、このまま、ベルさんを追うかどうかをアイズさんは悩みはじめた。

その理由は、わかる。

きつと、今のベルさんなら、並大抵の無法者が束になって来ても、なんとかしてしまえそうだったから。

チカツ

「ん？」

「??」

カサカサツ

アイズさんの判断を待つてると、ふと、何かを発見したらしく、それに向かって歩み寄って行くのを僕もその後続いた。

「・・・これ」

「??」

アイズさんはそのまま、草原に落ちていたエメラルド色の輝きを放つプロテクターを拾い上げた。

スンスンツ

「・・・これ、ベルさんのだ」

「やっぱり・・・」

一瞬、他の冒険者が残した遺失物かと思ったけど、それに残った匂いを嗅いで、持ち主がベルさんだってわかった。

フツ

「!？」

「四葉??」

そんな時だった。
美味しそうな匂いがした。

カサツ

バツ

「!？」

ビクツ

「!？」

ぴよんぴよん

そんな時、音がして僕とアイズさんは同時にそちらを振り返った。
僕等の背後の草原には、上層から迷い込んだのか、ニードル・ラビツトがいて、目が合うとニードル・ラビツトは驚いて、慌てて逃げ去っていった。

キイン

「・・・」

グツ

「・・・」

一瞬、気のせいだったのかと思ったけど、確かに感じた。
こちらを盗み見るような気配と美味しそうな匂いを立ち込める霧の奥に。

見えないけど、確かに誰かがそこにいるって匂いが教えてくれた。
だから、僕は、刀を構え直し、アイズさんはそちらを睨む眼差しを鋭くして、左手で鞘に収めた剣を再び抜剣した。

ズズ・・・

「・・・気付かれてしまうか。お見逸れする」

やがて、その霧が揺らめいて、白霧の奥から漆黒の影が浮かび上

がった。

黒ずくめのローブを全身に纏った、美味しそうな匂いのする謎の人物。

闇で塞がったフードの中身は何もミトオセズ、両手には複雑な紋様の手袋をはめている。

肌の露出が一切存在しない。

ジリッ

「・・・」

「私達に、何か用ですか？」

性別も何もわからない目の前の人物に、警戒を緩めれるはずもなく、刀の柄を握る手に更に力を加えた。

「ああ、その通りだ。だが言う前に、その剣を下ろして欲しい。私は君達に危害を加えるつもりはない」

「・・・」

すると、黒衣の不審者は歩み出て来て、こちらの間合いに入った時点で足を止めた。

確かに、敵意的なモノは感じられず、相手がこちらの間合いに入つて、自分の生死をこちらに委ねている様子だし、この距離なら僕もアイズさんも相手より速く動ける自信があったから、ひとまず剣と刀を下ろした。

「・・・貴方は、誰？」

「なに、しがない魔術師さ。・・・以前、ルルネ・ルーイに接触した人物、と言えはわかってもらえるだろうか」

「!?!」

そして、相手のその発言に僕等ははっとした。

「ルルネ・ルーイ」さんと言えば、リヴィラの街で起きたハシヤーナさん殺害事件で、ハシヤーナさんが殺される前にハシヤーナさんから宝玉を受け取っていた獣人のお姉さんだ。

ルルネさんは謎の依頼人に依頼され、運び屋の依頼を引き受けたと言っていた。

「真つ黒なローブ」、男か女かもよくわからない」とルルネさんが語った依頼人の特徴と目の前の人物の特徴とが合致する。

「アイズ・ヴァレンシユタイン・・・君に、いや、君達に冒険者依頼を託したい。二十四階層で怪物の大量発生という、イレギュラーが起こった。既に冒険者が多数犠牲になっている。これを調査、あるいは鎮圧して欲しい。報酬はもちろん用意しよう。この原因の目星はついている。恐らく、階層の最奥・・・食料庫」

「・・・」

驚愕する僕等に黒衣の人物は本題を切り出し、その中で出て来た二十四階層のモンスター大量発生事件。

これ事態は、知らなかったけど、この前の探索で二十四層を通った時に感じた違和感は、その片鱗だったんじゃないかと思った。

「実は、以前にも三十階層、ハシヤーナを向かわせた場所で、今回と酷似した現象が起こっていた」

「！」

「リヴィラの街を襲撃した人物・・・例の宝玉と関係している可能性が高い」

そう思っていると、黒衣の人物は更なる僕等に衝撃を与える情報を寄越した。

「事態は深刻だ。【剣姫】どうか君の君達の力を貸して欲しい」

「・・・」

懇願する黒衣の人物を前に僕等は悩んだ。

このまま、この依頼を受けて良いのかどうかを

「わかりました・・・四葉、良い?」

「うん、良い」

ややあつて、アイズさんはその依頼を受託。

だからつて訳じゃないけど、僕も受託した。

黒衣の人物からは、こちらを畏にはめようとするような悪意は感じないし、本気で頼んでる様子だし、何より、あの赤髪の女の人や宝玉に関する手がかりが一つでも手に入るならつて思った。

「恩に着る。できれば今すぐに向かつて欲しい。いいだろうか?」

「・・・あの、伝言をしてもらつても良いですか? 私達のファミリアに」

「ん? ああ・・・なるほど。わかつた、それくらいは頼まれよう」

了承した僕等に黒衣の人物は、お礼を言つてきて、更なる要請にアイズさんは、僕等のファミリアへの伝言をお願いして、相手も承諾してくれた。

それを受けて、アイズさんは腰のポーチから羽ペンと羊皮紙を取り出して、ロキ様宛に手紙をしたためた。

驚くことに少量の血をインク代わりに使つてだ。

そして、書き上げた手紙を黒衣の人物にアイズさんは渡した。

「まずリヴィラの街に寄つてくれ。黄金の穴蔵亭という店に協力者が待つている。店に着いたら、カウンター席、隅から二番目に座り、店主に注文は? と聞かれたら、この合言葉を言うんだ。『ジャガ丸くん抹茶クリーム味』と」

「わかりました。行こう、四葉」

「うん」

その代わりに、一連の指示を受けて、僕等は最初の目的地である十
八階層に向けて現在地を出発した。

第66話・追跡者

「また来おった・・・」

「気になる情報を仕入れたんだ。立ち話もなんだから、どこか腰を落ち着けてゆつくり話さないかい？」

その頃、僕等のホームでは、訪問者、否、訪問神がいた。

名は、デイオニユソス様という。

ロキ様はほとほと嫌そうな顔を浮かべ、デイオニユソス様とデイオニユソス様の眷属であるフィルヴィスさんというエルフの人を出迎えた。

場合はホームの門前。

己に面会を申し込んでいる神がいるの報告され出向いてみると、この二人が待っていたという。

デイオニユソス様にいたっては、白い歯をキラリと耀かせ、満面の笑みを浮かべて、凶々しく「ホームの中に入れろ」と言ってくる

「はよ帰れ」

「そう言わずにさ？土産があるんだ」

「ん？」

チラツ

「・・・」

「!?いやあないな」

「・・・」

最初は、帰るように言っていたロキ様だったが、フィルヴィスさんが覗かせた特上の葡萄酒の銘柄を見て、渋々彼等を門内に通したロキ様。

そんなロキ様を門番の人達や護衛の人から白い目で見られるお酒好きのロキ様。



「で、なんや？気になる情報っちゅうのは」

「ギルドに妙な動きがあつてね」

流石に敷居を跨がせるのは嫌い、塔の前の狭い庭園に卓と椅子を準備させ、そこで、受け取った葡萄酒を早速開けて飲み始めたロキ様にデイオニユソス様はそう前置きして、二十四階層の現況を語った。

「ふうん・・・モンスターの大量発生にギルドの妙な動きなあ・・・」

「あまり知られていないが、以前にもこのようなモンスターの大量発生があつた。三十階層でだ」

「・・・そいつはいつの話や？」

「確か・・・三週間ほど前か。下層の話だけに、上級冒険者の間でも取り沙汰されていなかったようだが、ギルドは情報を制限している」

三十階層、という言葉にロキ様は片方の眉を跳ねさせる。

殺害されたハシャーナさんが宝玉を收拾したのもその階層であると、フィンさん達から報告されているからだ。

中層より更に危険度が増した下層に進出できる者は限られているし、目撃者も僅かだったために大量発生の際は広まらなかったらしい。

「ウラノスは裏で二十四階層に私兵を送り込んでいる。そう私にはらんでいる。あの老神は事件そのものをもみ消すつもりではないか・・・とも勘繰れる」

「やつぱり、ギルドは信用できんか？」

「・・・ウラノスに探りを入れたのはロキだ。君が白だと見たなら私も文句は言わないが・・・どうにも、ね。きな臭いところがあるのは確かだよ」

「まあなあ」

きな臭いところがギルド側にあるのという意見には、ロキ様も賛同した。

「で、結局うちに何をさせたいんや、自分は？」

「ははは、何かわかったら知らせると言っただろう？他意はないさ」
胡乱げな目をするロキ様に対して、ディオニユス様は清々しい笑顔を浮かべ、ファミリアの団員さんとフィルヴィスさんが見守る中、面倒事を押し付けたい、あるいは回避したい神意のやり取りが始まった。

「うちんこの子は今出払つとるから、二十四階層の調査なんて無理やー」

「ひよつとして、例の地下水路かい？」

「そうや・・・」

勘の良いやつ、と思いつつながらロキ様は頷いた。

魔導士を除外したフィンさん率いる精鋭が下水道に出発したことを教え、他の者達も遠征の手続きや準備でいない、とロキ様は舌を出した。

「【剣姫】はいないのかい？彼女に向かってももらえれば百人力だ」

「アイズさんは・・・」

そして、ロキ様がそう言いかけた瞬間

ポトツ

「あん？」

「手紙かい？伝書鳩・・・いや、誰かの使い魔かな？」

「みたいやな」

ロキ様の頭上に小さな羊皮紙の巻物が落ちてきて、ロキ様が真上を仰ぐと、上空には一羽の梟が飛んでいて、そのまま飛び去っていった。ひとまず、ロキ様は投下された巻物を手に取ると羊皮紙に綴られた文章を読み、間もなく、嘆くように天を仰いだ。

パンっ

「アイズと四葉が二十四階層に行きおった・・・」

「ごふっ!?!」

「!?!」

ペチペチペチペチッ

「冒険者依頼を頼まれて四葉と二十四階層・・・このタイミングじやまさにやる。〃心配しないで下さい〃 ってするわ! 天然アイズたんにお転婆四葉たんっ!」

そして、手の平を額に叩きつけてロキ様が言うのと、優雅に紅茶を飲んでいたディオニュソス様が紅茶を吹き出した。

そんなディオニュソス様の背後で、フィルヴィスさんもまた驚く。

「ベート・・・あとレフィーヤ呼んで、至急や」

「は、はい」

ロキ様は側に控えていた団員さんにそう命じた。

「どうする気だい?」

「ベート達にアイズ達を追わせる。この騒動・・・街が襲撃されたのと無関係やなさそうや」

「二人だけで大丈夫なのか? もちかけておいて何だが、二十四階層の件は危うい香りがするぞ」

「しようがないやん、他の子等は出払つとるんやから。アイズ等の力になれそうなのは、ベートとレフィーヤくらいしか今はおらん」

神の勘か、ディオニュソス様が危険性を主張すると、ロキ様も不服そうに頭の裏で両手を組んだ。

「フィルヴィス。ロキ達の子とともに、二十四階層へ向かえ」
「!?」

ディオニュソス様は黙考した後、フィルヴィスさんを振り返って言った。

当然、フィルヴィスさんは驚き、ロキ様も目を丸くさせた。

「ディオニュソス様、何を!? 貴方様の護衛はどうなさるのですか!？」
「聞け、フィルヴィス。私情でロキを巻き込んだのはこの私だ。私もただ任せるだけではなく、誠意を見せなくてはならない。何より、私はロキの信用が欲しい」

真剣な表情でディオニュソス様に、フィルヴィスさんは声を荒らげた。

そんなフィルヴィスさんを諭すようにディオニュソス様は言葉を続け、そして、その本音を包み隠さずに言った。

「信用は行動で勝ち取らなくては・・・わかるだろう、フィルヴィス」
「・・・っ」

ディオニュソス様が信用を得たいと思っているロキ様の目の前で。

ロキ様はそんなディオニュソス様を呆れ顔を浮かべる。

「しかし、私は・・・」
「フィルヴィス。どうか、頼む」
「・・・わかりました」

何かを言い淀むフィルヴィスさんに、デイオニユソス様は椅子から立ち上り、切望。

それにフィルヴィスさんは渋々頷いた。

「神ロキ。よろしければ、私もパーティへの同行をお許しください」
「ん、気持ちはありがたいけどなあ……実際、付いてくれるん？」
「フィルヴィスは私のファミリア唯一のレベル三だ。二十四階層なら少なくとも足手纏いにはならない」

そして、ロキ様に向き直り、己の姿勢を正して言って、その横からデイオニユソス様がフィルヴィスさんの実力を保証する。

それにロキ様は首を傾げた。

「第二級がおったのか？初耳やぞ？」

「……大金を貢いで、当時の神会ではフィルヴィスの情報を取り上げないよう依頼していた。この子は、冒険者の間で悪目立ちをしている。些細な親心に過ぎないが、注目を避けてきた」

そんなロキ様にデイオニユソス様はそう話す。

冒険者の名声が広まる神の会合において、団員の名を伏せていたことを明かした。

公式情報にはレベル三であることが明記されていることも補足する。

「ふうん」

「……」

ロキ様は視線をフィルヴィスさんに、ずらす。

フィルヴィスさんは目を瞑り、何も語らずたたずむのみだった。

「まあええわ。確かに人手は足らんし、ベート達には話しよう」

「ありがとうございます」

そして、ロキ様が出した許可にフィルヴィスさんは礼を告げる。そこからはどたばたと騒がしい流れがホーム内で絶えず響いた。事情を説明されたレフイーヤさんが大急ぎで荷物をまとめ、既に探索の準備を終えていたベートさんの罵声が飛ぶ。僕等のもとへ向かうため、速やかに出発態勢を整えた。



「またてめえか・・・」

「よ、よろしくお願いしますっ」

「・・・」

ややあつて、ロキ様に見守られるホームの正門前には、ベートさんとレフイーヤさん、フィルヴィスさんが集結する。

フィルヴィスさんと会うのはこれで二度目になるベートさんが不服そうに顔をしかめ、筒型のバックパックと杖を装備したレフイーヤさんが自己紹介を済ませる。

臨時パーティを組むことになった彼等に、フィルヴィスさんは無言で返すのみだった。

「足を引っ張るようなら蹴り飛ばすからな。くたばる前に失せろよ」

「・・・抜かせ、狼人」

はじめから険悪な空気を纏うベートさんとフィルヴィスさん。

一匹狼と自尊心の強いエルフの相性の悪さが如実に表していた。

「う、うう・・・アイズさん、四葉ちゃん、助けて下さい・・・！
あうう・・・」

「助けに行くんは自分やで？頼んだで〜」

急造のパーティにありがちな不和の弊害に、レフイーヤさんは一人お腹を痛め、思わず、助けを求めた。

ある種の板挟み状態のレフイーヤさんにロキ様は手を振って言い、その隣でディオニユス様が苦笑いを浮かべてホームを発つ三人を見送ったのだった。

第67話・冒険者依頼の協力者

「アイズさん、あったよ！黄金の穴蔵亭！」

「うん。本当にあったね…こんなところに、酒場があったんだ…」

十階層からあつという間に十八階層に到達した僕とアイズさんは、あの黒衣の人物の指示通り、リヴィラの街に立ち寄った。

驚くことに既に十日以上経過しているとはいえ、食人花の大群に襲われたこの街は、多くの店が修繕され、抉れていた崖や粉碎された水晶の柱など、ダンジョンの地形そのものは完璧に再生されていた。

僕等は、器材を抱え、商店や通りの階段なんかを再築している人達を何人か見つつ、黒衣の人物が指定した酒場を探した。

で、その問題の酒場は、街の喧騒から離れた街の北部にある、長大な水晶の谷間が形成したクラスターストリートと呼ばれる街路付近の裏道、ごつごつとした岩壁に口を開けた洞窟にあった。

ギシギシ

「…」

僕等は洞窟の中に設けられた木製の階段を音を鳴らしながら降りた。

階段を下り切って、扉も仕切りもない空洞へ足を踏み入れると、そこには沢山の人がたむろして、お酒を飲んだり、カードゲームなんかをしたりしていた。

「んん？あれっ、【剣姫】と四葉じゃないか!?こんなところで、奇遇だな！」

「ルルネさん!？」

そんな中、カウンター席の所に前に会ったルルネさんがいて、僕とアイズさんに驚いた後、笑みを浮かべてくれた。

「前は世話になったな。おかげで死なずに済んだよ。あらためて礼を言わせてくれ」

「いえ・・・体は、大丈夫ですか？」

「あはは、この通りピンピンしてるよ。礼に一杯奢らせてくれよ」

なんだか不思議な縁だなんて思いつつ、にこやかにそう言ってくれるルルネさんの好意を辞退させて貰った。

スツ

「・・・」

「あれ？その席」

「??」

そして、あの黒衣の人物に言われた隅から二番目のカウンター席にアイスさんが座り、その隣の席に僕も座った。

「注文は？」

「ジャガ丸くん抹茶クリーム味」

ガシャーんツ!!

「!？」

そして、カウンター席の向こうにいる、店主さんが黒衣の人物が言っていた言葉を言って、僕等はその合言葉を言った。

すると、隣に座っていたルルネさんが盛大な音を立てて椅子ごと引っくり返った。

「・・・あ、ああ・・・」

「「??」」

「あ、あんた等が、援軍!？」

その顔は、信じられないといった感じで、放心状態だった。

ガタガタ

「・・・」

ガタツ

「・・・」

それに続いて、僕等の周囲でも動きがあった。

お酒を飲んでいた人やカードゲームをしていた人達が、全てのお客さんが、一斉にテーブルから立ち上がってこちらを見ていて、僕とアイズさんもその周囲の反応に身構えるように椅子から立ち上がった。

「・・・アイズさん、もしかして」

「・・・うん」

そして、僕もアイズさんも彼等の反応から、黒衣の人物が言っていた「協力者」っていうのが彼等を指すんだってわかった。

「彼女達で本当に間違いないんですか、ルルネ」

「ア、アスファイ・・・」

僕等を囲むように立ち上がった者達の中から、水色の滑らかな髪で一房だけ白く染まっている、碧色の目の銀製の眼鏡をかけた知的な感じの女の人歩み出てきた。

「・・・この人」

「??知ってるの」

「・・・うん。ヘルメス・ファミリア団長、アスファイ・アル・アンドロメダ・・・「万能者（ペルセウス）」って呼ばれてる有名人」

その人を見てアイズさんが小声で女の人の事を教えて貰った。

「ルルネさん達も依頼を受けたの？」

「・・・ほんの何日前にあの黒ローブの奴が現れてさ、〃協力してほしい〃って。最初は〃もう、ご免だ〃って突っぱねただけど・・・」

とりあえず、ルルネさんを助け起こしながら、一応、確認の為に聞いた。

「レベルを偽っていることをバラす・・・と脅されたそうです」

ギクツ

「!？」

そして、アスファイさんが怒りマークを付けた感じにルルネさんの言葉に付け足した。

「その拳句、私達に皺寄せまで・・・」

「・・・」

おかげでルルネさん達の状況を正しく理解できたのと同時に、黒衣の人物の妙な必死さを感じた。

「白を切れば良かったんじゃ」

「!？」

けど、脅されても白を切れば、ルルネさん達がこの依頼を受ける必要はなかったと思って、僕は思わずポロリとその事を言ってしまった。

「全くです」

「うっ」

「この馬鹿っ、愚か者っ。その子の言う通り、脅されようが最後まで

白を切れば良かったのですっ、それでもシーフですかッ」
「うう、許してくれよお」

そこから始まってしまったアスフィさんのルルネさんのお叱りタイム。

ルルネさんは怒るアスフィさんに耳と尻尾をしおらせて、他の人達がルルネさんに半眼を向ける。

「主神様の我儘だけでも面倒は十分だというのに、こんな厄介事まで……」

「……」

ぶつぶつとそう呟きながら怒るアスフィさんの顔には、何だかものすごく疲れが滲み出ている。

その顔を見て、僕は、きつと、日頃から苦労してるんだろうなと思って思った。

「あの……」

「ゴホンッ……すいません、見苦しいところをお見せしました」

そこでアイズさんが控えめにアスフィさんに声をかけると、咳払いを一つした。

「依頼内容の確認をしますが、目的地は二十四階層の食料庫。モニター大量発生の原因を探り、それを排除する。間違いありませんか？」

「はい」

そこから、気持ちを切り替えて、依頼内容の確認が始まった。

ちなみに、「食料庫」というのは、ダンジョンの一、二階層以外の各階層に二つ三つ存在する、巨大な石英のある大空洞の事。

石英からは、透明な液体が染み出していて、ダンジョンで産まれたモンスターはそれを栄養源にしている。

「では、こちらのメンバーを紹介します。まず、前衛、ゴルメス。武器は大包丁」

フンフン

「・・・」

「エリリー。武器は双楯」

「・・・」

「ポック。武器はメイス」

「へー、あんたが【剣姫】で、そっちのちびが今、噂になってる、たった、三週間でレベル二になったっていう、世界最速（レコードホルダー）の餓鬼か？全然、そんな風に見えねえなくガセか？。つうか、何でそんなエロいカッコしてんのさ？」

「ポット。武器はハンマー」

「ダメよ、そんな事、聞いちや。誰にでも恥ずかしい趣味の一つ二つ、あるんだから。それに、人には言えない秘密の一つ二つは有るものよ？」

「前衛リーダーのファルガー。武器は大剣」

「よろしく、あいつ等はその・・・無視してくれ」

そして、アスフィさんは依頼内容の確認が終ると、あちらのメンバーを紹介してくれた。

まずは、前衛の人達から、リーダーの獣人のファルガーさんにドワーフのエリリーさん、パルウムのポットさんとポックさん、ヒューマンのゴルメスさん。

「後衛。後衛リーダーのネリー。武器は魔剣」

「【剣姫】とご一緒できるなんて光栄です」

「メリル。武器は杖」

「ほらメリルも隠れてないでご挨拶」

「こ……こんにちは」

「ドドン。武器は角」

「……」

次に後衛の人達。

リーダーでヒューマンのネリーさん、ドドンさんとドドンさんの後ろに隠れたメリルさん。

「中衛。タバサ。武器はムチ」

「あらあ、二人ともとてもキレイなお肌……V触ってもいいかしらあ

V」

「ルルネ。武器はナイフ」

「ハハ……またよろしくな」

「キークス。武器は投石」

「こいつリヴィラの街でチビってたってマジか？なあマジか？」

「チビってないってば！」

「セイン。武器は手斧、短弓」

「気楽に行こうじゃないか」

「スィーシア。武器は双長剣」

「……」

「ホセ。武器は双曲剣」

「貴殿の詩歌、作っていい？某は詩人なんだけど」

「そして、私が中衛から全体の指揮を執ります、アスファイ・アル・ア
ンドロメダ。武器は短剣と道具を少々。団員の能力は、大半がレベル
三です」

そして、最後に中衛。

獣人のタバサさんにホセさん、ルルネさんにエルフのセインさんに
スィーシアさん、ヒューマンのキークスさんにアスファイさんと、それ
ぞれ、使う武器も含めて紹介してくれた。

「ロキ・ファミリア、アイズ・ヴァレンシユタイン。武器は片手剣」
「同じく、ロキ・ファミリアの四葉です。武器は刀とクナイ」

続けて、僕等が名前と派閥、自身の扱う武器なんかの情報をアスファイさん達に渡す。

こういった依頼内容の照らし合わせと戦力の確認、武器や道具の手持ち品、前衛や後衛の役割分担等は、迷宮探索だけじゃなく、アインクラッドでのボス戦とかで臨時でパーティを組む時には、必要な事だ。

「こうなつては仕方がありません。各員、全力で依頼に当たりなさい」

「「へーい」」

「特にルルネ、貴女は死ぬほど働くんですよ。」

「わかったよお・・・」

アスファイさんがヘルメス・ファミリアの人達に呼び掛けると、その人達は頷き、ルルネさんも消沈した声をアスファイさんに返す。

「【剣姫】である貴女がいてくれるなら心強い。短いパーティになると思いますが、どうかよろしく」

「よろしく、お願いします」

次にアスファイさんはアイズさんに向き直り、笑みを浮かべる。

そんなアスファイさんにアイズさんもほんの小さく笑い返し、握手を交わしていた。

「ところで、この子は大丈夫なのですか？レベル二ですよね？」

「大丈夫です。四葉はレベル二ですけど、深層のモンスターとも戦えます」

「・・・にわかには信じられませんが、今は、【剣姫】である貴女の言

葉を信じます。どうかよろしく」

「……よろしくお願いします」

最後に僕とも握手をしてくれた。

「ですが、くれぐれも私達のごことは口外しないように」

「あ、はい」

が、アスフィさんは僕とアイズさんに釘を刺すことは忘れなかった。

こうして、僕とアイズさんは同じ冒険者依頼を受託した者同士、他派閥による共同戦線、ヘルメス・ファミリアのパーティーに臨時加入した。

この後は、アスフィさん達とともに『黄金の穴蔵亭』を後にして、街で最後の補給、血肉（トラップアイテム）や隠蔽布（カモフラージュ）等の必要な物を買ひ揃え、二十四階層を目指した。

第68話・アイズさんの誤差調整の仕方

「オオオー!？」

「・・・」

ザアン

「!？」

二十四階層へ足を踏み入れた僕等は、雄鹿のモンスター、`ソード・スタッグ`をはじめとしたモンスターの群れを相手に戦闘を開始して、今、終らせた。

「ひゃく。やっぱり強いなあ。つうか、四葉、本当にレベル二なのか？」

「うん。一応」

アイズさんもだけど、同じようにソード・スタッグを瞬殺して見せれば、ルルネさんは感心したように言った。

「ルルネさん達も、すごいですね・・・」

「ルルネ、でいいよ。私達、結構年近いだろ？十八なんだあ。四葉もルルネでいいからな？」

ニコニコと話し掛けて来てくれるルルネさんに僕とアイズさんはコクリと頷いて応えた。

「前進します」

「!？」

そうしていると前方からアスフィさんの指示が来て、それぞれ適度な間隔を開けながらダンジョンを進み出す。

「伊達にレベルを偽ってたわけじゃないからなあ。私はともかく、アスファイや他の連中は素っ惚けた顔して結構な武闘派だよ」

「……」

そんなパーティーの中間ほどの位置で、三人で並びながら会話を続けた。

ルルネさんはそう言ってるけど、身のこなしもナイフ捌きも相当なモノで、シーフを名乗っているから、派手な戦闘は好まないみたいだけど、モンスターを攪乱しては時に四肢へ一撃をお見舞い、仲間の補助に徹している姿は、流石だって僕は思った。

そして、ヘルメス・ファミリア全体の連携も凄かった。

「ん、アスファイが気になるのか？」

「……ルルネ、アスファイさんのレベルっていくつ？」

「レベル四だよ」

アイズさんもヘルメス・ファミリア全体とその指揮を取るアスファイさんを見てルルネさんにこっそり聞いて、ルルネさんはあっさり、その答えを出してくれた。

「ファミリアの到達階層は？」

「三十七階層。モンスターがえらい強いし、流石に深入りはしてないけど」

続けてアイズさんは、ルルネさん達の到達階層について質問した。

これは、僕は知らなかったけど、ルルネさん達、ヘルメス・ファミリアの公式の到達階層は十九階層らしい。

つまりは、ルルネさん達は倍に近い階層に行っていて、三十七階層だから深層にも足を踏み入れているということだ。

「よくそんな深い階層にもぐって、他の冒険者達にバレないね……」

？」

「うん」

それでアイズさんが口にした疑問はもつともだと思った。

基本的にこの人数で行くなら、他の冒険者達に気付かれないはずがないんだ。

「うちの団長はあの『万能者(ペルセウス)』だけ？ 凄い魔道具があつてさ、誰にも見えなくなつて・・・」

「お喋りは止めなさい、ルルネ」

そのアイズさんの疑問に得意気に応えてくれようとしたルルネさんにアスファイさんがその言葉を遮るように言った。

その目には、余計な事は言わなくていい、とハッキリと書かれていた。

「ご、ごめん。アスファイ」

「全く・・・」

ルルネさんはそれに体を小さくして、アスファイさんはそんなルルネさんにため息をついて、そこからアスファイさんはアイズさんの側まで歩み寄った。

必然的に僕の側でもあるけど・・・。

「【剣姫】。貴女の率直な意見を聞きたいのですが、この依頼についてどう思いますか？」

「・・・どういう、意味ですか？」

「街襲撃の件に関してルルネから大まかに経緯は聞いています。謎の宝玉に執着する、黒ローブなる人物の依頼・・・今回の騒動も危険なものだと思いますか？」

モンスター的大量発生は、宝玉にまつわる何らかの前触れであると、黒衣の人物は確かにそういつたことを言っていた。

あわや街を壊滅寸前まで追い込んだ前回の事件に匹敵するほど、今回の冒険者依頼は危険なモノなのかと、アイズさんに意見を求めるアスファイさんに対して、アイズさんは少し間を置いて頷いた。

「四葉は、どう思う?」

「僕も同意見。樂觀視していいクエストじゃないとは思う」

「・・・」

そして、アイズさんから僕も意見を求められたから、思うまま言った。

そんな僕等の反応を見てアスファイさんは、ため息を堪えるような顔をした。

「本当に、厄介なことに巻き込まれてしまいましたね・・・」

「・・・」

それらの話を横から聞いていたルルネさんは肩身を狭そうにしているけど、アスファイさんはもうルルネさんを責めるようなことはしなかった。

ただ、このパーティーのリーダーとして一層気を引き締めたようだった。



「お、白樹の葉。アスファイちよつと採取していかないか?」

「止めなさい。取りに行つてモンスターに囲まれるのが落ちです。依頼の前に無駄な労力を費やさないでください」

「今はどこの道具屋でも品不足で高く売れるんだけどなあ・・・もつたいない」

その後も散発的に襲いかかってくるモンスター達を連携して相手取りながら、僕等は二十四階層の正式ルートを進んだ。

途中、通路からルームの奥にたたずむ白大樹を発見し、それに素早く反応するルルネさんだったが、アスフイさんに咎められ、名残惜しそうに尻尾を振った。

この十九階層から二十四階層の階層域では、採取用の原料が多いことから、よく冒険者依頼で調達依頼が出させる。

ここで取れる様々な薬草は、そのまま食べても即効性の体力回復や解毒効果があつて、僕等が日頃お世話になっている回復薬なんかこれ等で作られる。

迷宮の光のもとである苔ですら、地上に持ち帰ればそれなりの額で換金できる。

おまけに今回は滅多にお目にかかれない宝石樹。

発見した時は、さしものアスフイさんも含めたパーティ全体がざわついた。

が、それを泣く泣く素通り。

理由としては、あの樹を守るのが階層最強の木竜がいるからで、この木竜はレベル四に匹敵するポテンシャルを誇っているからだ。

今は、樹の根もとに体を寝かせている木竜をソツとしておくのがベストだ。

なんだか去り際にちらりと木竜を見たけど、目を瞑り、何かに怯えたように身じろぎをしたのを見てしまったけど、きつと気のせいだろうと、思うことにした。



「……！」

「全員、止まってください」

それから、またしばらく歩いていると、前方の方からひそむ気配を

感じて、僕等はそれに反応。

アスファイさんも片手を上げて、パーティの進行を止める。

この進路の先は巨大な十字路で、発光する苔の光度が僅かに落ちて
いる中、薄闇の中を無数の影が蠢いていた。

そして、僕等はその影の正体が何であるかすぐに悟った。

「うわぁ・・・」

「うげえ・・・」

それは、思わず呻きたくなるほど、広い通路内を埋めつくすモンスタ
ーの大群だった。

うじやうじやといえる数えきれないモンスターの群れに、他の人達が
後退するほどだ。

なんだか、現実世界でお正月のニュースとかで見ると、どこぞのお寺
や神社とかの参拝風景に似ているなど密かに思いつつ、本当に不自然
な集まり方をしているなど思った。

これだけ特定のエリアに集まるモンスターの行列なんてアインク
ラッドでも見たことはない。

しばらくその様子を見てみると、群れの一部が僕等に気付いたらしく、
列を外れてそろそろと進路を変え、他のモンスターもそれに続いて
こちらに近付いてくる。

「アスファイ、どうする？」

「どうせ駆除しなければいけません。ここで始末します。戦闘準備
！」

そんなモンスター達を前にルルネさんがアスファイさん問いかける
と、アスファイさんは団員達に呼びかけ、団員達はそれぞれの得物を構
え、前衛壁役の人が盾とともに前へ出る。

「後衛は詠唱を開始。接敵する前に数を・・・」

「待って」

「・・・」

そこで、アイズさんがアスフィさんの砲撃指示を止めた。

怪訝そうな顔でアイズさんを振り返って見るアスフィさんにアイズさんは歩み寄った。

「私に行かせて」

「は？」

「援護は？」

「・・・後の回収、お願い」

「わかった」

「うん」

そして、端的に告げて、剣を振り鳴らすアイズさんに一応、聞いた。聞いて、返ってきた答えに僕はアイズさんの戦いが終わるのを待つことにした。

バツ

「・・・」

「お、おいっ!？」

そうしているとアイズさんは一気に駆け出し、アスフィさん達が止める間もなく、単独先行する。

そんなアイズさんの背中にルルネさんの叫びが届くのは、モンスターの大群とアイズさんの戦いが始まったのは、ほぼ同時だった。

「・・・」

ザンツ

「オオオオオオooooooooooooッ!？」

開戦一番、大薙ぎされた剣に沿って、複数の断末魔が弾け飛ぶ。そこからモンスター達の掃討が始まった。

凄まじい斬撃の渦が殺到するモンスター達を切り刻み、絶命させる。

三体の敵を一度に斬撃、回避行動の中に織り交ぜられる回転斬り、空中へ身を躍らせて、モンスターがそれを仰げば顔を一閃。

押し寄せてくるモンスターの群れに対して、アイズさんは真つ向勝負で、正面からぶつかる。

アイズさんが前進する度に周囲からモンスターの姿はかき消え、埋め尽くされていた通路にはぽっかりと空間が出来上がった。

代わりに大量の屍と灰が地面に残った。

まるで剣の結界。

近づくモンスターは問答無用で八つ裂きにされていく。

興奮するモンスターの雄叫びは、瞬く間に絶叫へと変わっていった。

「……」

「……」

「……もう全部彼女一人でいいんじゃないですかね」

「!？」

「……帰っちゃう？」

「そういうわけにもいかないでしょう……だから、四葉さん、そんな涙目でふくれた顔、向けないでください。」

そのアイズさんの戦いを見守っていると、ヘルメス・ファミリアの人達が固まって、アスファイさんが思わずか、ぽつりと呟いた。

それには、流石にビツクリして、アスファイさんを見たら、続けてルネさんが尋ね、アスファイさんは頷き返そうな雰囲気は何度も出したから、僕は両頬を膨らませて、涙目で睨んだ。

そしたら、何とか頷きたいのを我慢して、ため息交じりに、その返答を返した。

「二応、伺いますが、彼女、何かあるんですか？」

「ランクアップしたんだ」

「！・・・なるほど、今は、誤差の調整を行っているというわけですか」

そして、現在もモンスター相手に暴れ回っているアイズさんの理由を端的に言った。

ランクアップした時、誰でも経験する肉体と精神のずれ。

微細な感覚の誤差を取り除き、現在の自分のステータスを把握するには、アイズさんのようにとまではいなくても、ある程度のモンスターとの戦闘が一番、手っ取り早いのだ。

第69話・四つの動き

ポロツ

ザッ

「・・・」

そして、アイズさんが半分くらいモンスターを倒した頃、僕はアイズさんが倒したモンスターから魔石を取る作業に入った。

ザアアア・・・

「・・・」

そうしているうちに、アイズさんは最後の一匹、ゴブリンの上位種であるホブゴブリンを倒してその戦闘を終了させた。

「・・・」

「・・・あれが【剣姫】ですか」

それにかかった時間はおよそ十分。

数え切れないモンスターの死骸を見回して、アスフィさんは通路の中心にいるアイズさんを眺めて言っつて、ルルネさん達は、ごくりと喉を鳴らして畏怖の眼差しをアイズさんに送った。



「・・・」

「・・・やつ、やっぱり第一級冒険者つてすごいなつ。あれだけの群れを一人で倒すなんて、他の冒険者達がビビるわけだよ！あ、回復薬は要るか？」

「ううん、平気・・・ありがとう」

その後、アイズさんが戻ってくるとルルネさん達は少々気後れしていたけど、笑顔で出迎えた。

「魔石を放置しては、緑なことになりませんが、四葉さんがすでに取り掛かっています。各員周囲に警戒しながら魔石を回収！」

「・・・」

その後は、アスファイさんの指示でヘルメス・ファミリアのサポートの人達も手分けして魔石を取る作業にあたってくれた。

「で、モンスターは片付けてもらったけど・・・アスファイ、これからどうする？あの黒ローブの話を信じるなら、食料庫に何かあるんだろ？」

「・・・」

その間にルルネさんがアスファイさんに意見を求めた。

ゴソゴソ

「二十四階層にある食料庫は三つ・・・南西に南東、後は北だ。どこ
の地帯から回る？」

「・・・」

ポーチをあさってルルネさんは一枚の羊皮紙を取り出した。
ルルネさんと共にアイズさんもソレを覗き込む。

ルルネさんが持つてる羊皮紙はこの二十四階層の地図で、ダンジョンは下層に行くに従って広大になっていて、二十四階層で既に都市の総面積の半分が届くほどらしい。

「モンスターがいる所を進みます」

「？」

「モンスターが押し寄せてくる方面へ向かえば、その近辺に恐らく

原因がある筈です。食料庫が大量発生の端を発しているというのなら、我々はモンスターが教えてくれる方角に進むだけでいい」

だから、階層の最奥にある食料庫を三つ回る羽目になるとなれば、モンスターとの遭遇率も踏まえると、かなりの骨が折れる作業になる。

そのため、リーダーであるアスフィさんの判断を待つて、その判断と説明を聞いて僕も納得だった。

モンスターの大量発生之源は食料庫にあると既に当たりを付けていたし、怪しい一帯をくまなく探す必要はない。

方角さえ割り出せば三つの地点から候補が絞られるわけだ。

「なるほどなー、つまり・・・」

「・・・」

「・・・北、か」

行列となってモンスター達が押し寄せて来たのは、十字路のある方角の先。

ルルネさんの眩き通り、全てのモンスター達は苔の光がうつすらと続く北側通路の先だ。

「【剣姫】 先ほどの戦闘は見事でした」

「！」

「貴方を先頭にするのが最も効率的ですので、どうかよろしく。あ、回復薬はいくらでも、支給しますので」

「え？あ、はい」

「いやいや、いくら何でも・・・って、いいの!?!」

「?うん・・・」

「やっば、どっかフツとんでないとなれないだなく、第一級って」

そこから北の食料庫までアスフィさんの頼みでアイズさんが前に

出ることになった。

ルルネさんは、頼むアスフイさんとその頼みを何の迷いもなく受けるアイズさんの間で、若干、呆れ顔だった。

「それにしても、食料庫か・・・あそこからモンスターが沢山生まれてるってオチかな？どう思う、【剣姫】？」

「わからない・・・けど」

「けど？」

「多分・・・そんな単純なものじゃないと思う」

その二人の会話を聞きつつ、作業を終わらせると、アイズさんと、地図を持つルルネさんの先導のもと、僕等は先へと進んだ。



「フェルズ」

「・・・」

その頃、祭壇に重々しい声が響いた。

古代神殿の最奥部を思わせる石造りの広間。

辺りに満ちている深い闇を、四本の赤い松明が切り裂いている。

ここは、ギルド本部地下に設けられた、祈祷の間だ。

その祭壇の中央の神座に腰をかけるのは、ローブとフードを被った巨身の神、ウラノス様だ。

ウラノス様は、火の粉が舞う松明の炎に囲まれながら、黒衣の人物、フェルズにその目を向けた。

「何故【剣姫】に依頼を出した」

「例の宝玉に対して、【剣姫】は反応を示したらしい」

そのウラノス様の問いにフェルズは答えた。

これは、ルルネさんに冒険者依頼を出す際に聞き出した情報らしい。

それを聞いたウラノス様は、ぴくり、と眉を動かした。

「アイズ・ヴァレンシユタインと宝玉には何か因縁があるのでは、と判断してのことだ。コブはついてしまったが、宝玉の正体を解明する糸口になるやもしれない」

「・・・」

「それに、三十階層での食料庫の一件はこちらだけで何とかなつたが、同志達にも大きな被害が出た。彼等にこれ以上負担をかけさせるわけにはいかない」

フェルズはその考えを聞く間、ウラノス様は押し黙っていた。

まるで自らも思考を働かせているように・・・。

「前は番人はいなかったが、三十階層の件で相手も神経質になっているに違いない。あらゆる事態に備え、【剣姫】を含めた十分な戦力を揃えた」

「番人・・・例の調教師が出てくるか」

「・・・恐らくは」

「ヘルメスの方は私から言い含めておこう」

「すまない、ウラノス」

三十階層、ハシヤーナさんが宝玉を収拾出来た経緯に触れるフェルズは話を続け、ウラノス様の更なる問いにも答えた。

その答えを聞いたウラノス様は、両目を瞑り、アイズさん同様に冒険者依頼に遣わされているヘルメス・ファミリアのフォローを受け持つと告げる。

「【剣姫】達には申し訳ないが、これ以上好き勝手にやらせるわけにはいかない」

「・・・」

多くの冒険者を危険な案件に巻き込むことに罪悪感を抱きつつ、フェルズは顔を上げ、覚悟を示すように、決然と言い放った。



シャリツ

「・・・」

もう一方。

広い大空洞。

地上から遠のいたダンジョンの奥深く。

湿った空気と、異臭が漂う中、奇怪な色の果物をかじる僕等が調教師の女と呼ぶ女がいた。

「おいつ、モンスターがダンジョンに溢れて冒険者の間で騒ぎになっっている、大丈夫なのか!？」

「うるさい。騒ぐな」

そんな女のもとに、駆け寄ってくる大型のローブで上半身を隠し、口もとまで覆う頭巾の上に額当てまでしている男。

男は声を荒らげ、女は、そんな男に対して冷やかな反応を返した。

「食人花を貸してやる。有象無象どもはお前達で何とかしろ」

「・・・ちっ」

そして、視線を合わさず、突き放すように告げる女の言葉に、男は舌打ちとともに踵を返し、薄闇の奥へその姿を消した。

「冒険者達に、感づかれるとは運がないな」

「・・・」

その入れ替わりに、今度は別の人影が現れた。赤い光に照らされるのは、全身を白づくめの衣装で包んだ男だ。頭部にはモンスター白骨骨を利用して作られたらしい鎧兜、その顔をはつきりと見せない出で立ちはいっそ薄気味悪かった。

「放っておいていいのか、レヴィス？」

「冒険者にいくら感づかれようが知ったことではない」

その男を一瞥した女は、すぐに視線を前に戻す。

「闇派閥の連中に押し付ける気か？」

「ああ。私はここを動かん」

薄闇の奥で動きを見せる無数の人影を関心なさそうに眺める。

「三十階層のように、彼女を狙う連中が来たらどうする？恐らく、地上では一部の者が我々の動きを察知しているぞ！」

ブシユ

ボタタツ・・・

「潰すだけだ」

そんな女を側で見下ろす男は、そこで語気を強めて言うと、女は手にした果物を握り潰しながら端的に告げた。



「・・・きよ、今日はいいい天気ですねー？」

「十八階層に天候も糞もあるか」

「・・・」

もう一方、僕等を追跡するためにホームを出たレフイーヤさん達は、既に十八階層に入っていた。

無茶苦茶、居心地が悪いパーティにレフイーヤさんは無理矢理笑いながら、無理矢理話題を振ったが、ベートさんはくだらねえとばかりに一蹴。

一歩距離を置いているフィルヴィスも沈黙を貫くのみ。

ギスギスとしたパーティの空気に、レフイーヤさんは項垂れる。

「フィ、フィルヴィスさんっ、先程はありがとうございました！ミノタウロスを受け持ってくれて・・・実は、私あのモンスターが苦手で・・・」

「・・・」

「フィルヴィスさんは前衛職なんですか？短剣の他にも杖を持っていらつしやいますけど」

「・・・」

「ひよつとして、魔法剣士だったり？だ、だったら私っ、尊敬しちやいます！」

「・・・」

「あ、あははは・・・しゅ、趣味はなんですか？」

それでもレフイーヤさんは意を決して、同胞であるフィルヴィスさんに再び声をかけた。

最後の方は、苦し紛れのようになってしまったが、前だけを見るフィルヴィスさんは黙って歩き続けるだけで、声は返って来なかった。

心が折れそうになるレフイーヤさんだったが、めげずに根気良く話し続けた。

「うるせえっての。耳障りだ」

「！」

「使えねーなら捨てるでいいだろう。仲良しこよしになる必要がどこにある」

「……」

と、ベートさんがそこでうざったそうに口を開く。

続けざま、鼻で笑い、聞こえよがしに言うベートさんをきつと睨み付けるフィルヴィスさん。

そんな険悪な雰囲気にはレフィーヤさんはさめざめと泣きたい気分になっていた。

「私も貴様と馴れ合うつもりは毛頭ない。下賤な狼人め」

「おー喋るじゃねえか、陰険エルフ。その調子でモンスター相手に魔法でも歌つてろ」

ちつとも改善しない関係には、きつと喧嘩腰のベートさんも一枚噛んでいるに違いない。

そして、売り言葉に買い言葉が水晶の森に響いていく。

モンスターの遠吠えも何処からか届いてきて、レフィーヤさんはずんずんと重なっていく中、フィルヴィスが一人歩みを速める。

時間の無駄とばかりにフィルヴィスさんは森の先、十九階層に繋がる階層中央へ足を向けた。

「おい、間抜け。アイズの居場所もわかってねえだろ、先に街へ行くぞ」

「!?私に触れるな!!」

ドツシュ

その背中にベートさんは声を飛ばし、呆れながら手を伸ばし、フィルヴィスさんの襟首を掴もうとした次の瞬間、フィルヴィスさんは体を鋭く翻し、抜剣、白刃を勢いよく振るった。

甲高い金属音が響き渡る。

立ちつくすレフィーヤさんの正面で、切り払われたフィルヴィスさんの短剣。

ベートさんは腕に装着している手甲で、危うげなくその斬撃を弾いていた。

「あア？」

「べ、ベートさんっ、待っててください!？」

ビリビリと今も震える手甲を下げ、ベートさんは殺気を纏う。

突如攻撃されたことに対し、頬に刻まれた刺青が怒りに歪んだ。

一触即発の空気に、レフィーヤさんは慌てて割って入った。

「エルフには他種族との肌の接触を許さないという風習があつてっ、だからそのっ、反射的に・・・!？」

「・・・けっ」

両手を広げてフィルヴィスさんを背で庇いながら、フィルヴィスさんの弁明を行った。

確かに、エルフ特有の文化で、習性ではあるけど、抜剣するのはやり過ぎだとは思うが、それでも必死に説明をまくし立て、フィルヴィスさんの事を擁護するレフィーヤさん。

そんなレフィーヤさんの姿にベートさんは毒気を抜かれたのか、吐き捨てる。

「それにしたって過剰だろ。どうかしてんじゃねーか」

「・・・」

通常のエルフ以上に激しい反応を示すフィルヴィスさんに悪態をつき、ベートさんはレフィーヤさん達に背を向けて、街が存在する方向へ進んで行った。

ベートさんが言い残した言葉を肯定するように、森が静寂に包まれ

る。

レフイーヤさんが気まずそうに振り返る中、フィルヴィスさんは口を閉ざし、うつむいていた。

第70話・情報収集と死妖精

「【剣姫】？ああ、見たよ」

「ほ、本当ですか!？」

「確かさ。フードを被った変な連中とつるんでたよ。結構な大所帯だったね」

そして、リヴィラの街に入ったレフイーヤさん達は、アイズさんや僕の行き先を知るため、情報収集を開始。

まず、レフイーヤさん達はアマゾネスの店主のいる買取り所で話を聞いた。

「【剣姫】と一緒にいた者達の顔はわからないか？」

「んー、ちよつとわかんねえなあ。きな臭い連中なんてこの街にはごまんといるし、探ろうとも思わなかったからな」

「証文は？ここでも何かを購入していったのだろうか？」

「全部【剣姫】の支払いさ。【ロキ・ファミリア】のエンブレムでな」

そこでわかったのは、アイズさんや僕がお金に糸目をつけずに買い物をしていたこと、僕等に謎の同伴者達がいたことをレフイーヤさん達は突き止めた。



「モンスターどもが湧く場所はわからねえのか」

「へ、へいつ。二十四階層の正規ルートに溢れ返っているのは確かなんですけど・・・何分数が多くて出どころも辿れねえ有り様で・・・」

「そうですか」

次に、大量発生の原因へ向かえば自ずと合流できるとふんで、そのモンスターの大量発生を情報を知ったために、僕等が行った酒場じやな

い酒場にレフイーヤさん達は足を運んだ。

「【剣姫】を捜してるって、あんたら、ロキ・ファミリアか？」

「……」

「なに今頃のこのこやって来てんだ？下は酷えもんだぞ、そこから中モンスターだらけで……俺の仲間もほとんど死んだ。俺の目の前で喰い殺されたんだ!!俺も……見ろ!!この体で、これからどうすりやいいんだよ!!やっとレベル三になれたっていうのに、ちくしよお……ちくしよお……」

そこで、一人の両足を失った冒険者の男が嘆いた。

「都市最強派閥だの偉そうにふんぞり返って、いざという時、クソの役にも立たねえ!!お前等それがわかってんのかよ!？」

「そ……そうだ!」

「てめーらが地上で、ちんたらしてるからこんな事になったんだ!」

「責任とれ責任!!」

「この期におよんで人捜しだ?ふざけんな!!」

「俺等ばかり苦しい想いさせやがって!!」

「弱者をいたぶって楽しいか!？」

「とつとと何とかして来いよ!!」

「いつもいつも好き勝手やりやがって!!」

それを皮切りに彼と同じ様に体の何処かしらに包帯を巻いた冒険者の人達が次々に声を上げ始めた。

「なあ……どう償ってくれるんだ……?」

グラッ

「!!」

「フィルヴィスさん!？」

そして、両足を失った男が床に這いつくばり、泣きすがるように手を伸ばす。

その姿に、フィルヴィスさんは口元を押さえて体をふらつかせた。

ガコッ

「「!?」」

「言いたいことは、それだけか？」

それでも、その冒険者達の嘆きはおさまることはなくて、ベートさんはそんな彼等を壁に拳を叩きつけて、黙らせた。

「仲間が喰われた？ 足がなくなった？ だからどうした」

「！」

そして、ベートさんは床に這いつくばる男に真っ直ぐ歩いて近づく。

「てめー等、冒険者やってんだろ。全部承知の上で、地下迷宮に来てんだろ。まさか、ここが楽園だとも思ったか？」

グイッ

「!?」

「ここは、地獄だ。てめー等の命なんざゴミ同然の魔窟なんだよ!! てめーの命一つ背負えねえなら、冒険者名乗ってんじやねえ!!」

そのまま、その人の胸倉を掴み上げて叫んだ。

その場は静まり返った。

ドサッ

「!?」

「クソ共が・・・」

ベートさんは掴んでいた男の胸倉を離して、その場に落とすと踵を返して、店の出入り口の方へ。

「そうだよ・・・俺達は、一山当てる事しか頭になかった愚かもんだよ・・・でもな！」

「・・・」

「お前等が・・・ロキ・ファミリアみたいのがいるから！夢を見ちまうんだろ!!」

そのベートさんを追ってレフィーヤさんとフィルヴィスさんも店の出入り口へ。

その背中に向かって男は叫んだ。

◆◆◆◆◆

「詳しい情報は、つかめませんでしたね・・・」

「あのデカブツの所に行くぞ」

「えっ?」

「この街で偉そうにふんぞり返ってる。あの眼帯のデカブツだ」

「ああっ」

結果的にアイズさんの行き先もモンスターの大量発生の原因の場所の情報も得られなかったレフィーヤさん達は、最終的にポールスさんのもとに向かう事にした。

◆◆◆◆◆

「おう【剣姫】とちび助なら俺様のところにも来たぞ」

「本当ですか!?!それで、アイズさん達は、他に何か言ってますでしたか? 私達、アイズさんと四葉ちゃんが向かった詳しい場所を知りたくて・・・」

というわけで、ボールスさんの営むこの街一番の買取り所に訪れたレフイーヤさん達。

ここに立ち寄ったと聞いて、レフイーヤさんは加えて僕等の行き先を聞いた。

「ん〜、【剣姫】達の行き先かあ。俺様の大好きな金の音を聞けば、何か思い出すかもしれないねえな〜？」

「・・・」

そんなレフイーヤさんにたいしてボールスさんは、ニヤニヤと、もったいぶるように笑いながら、情報料をよこせ、という物言いをした。

その事にレフイーヤさんは顔を引きつらせる。

ガッ

「!？」

「さっさと見え、クソ野郎」

「あつスイマセン言います許して」

するとベートさんがボールスさんの服を掴んで凄むと、ボールスさんはあっさりと屈した。

「【剣姫】とちび助とつるんでいた連中が、どうやら陽動用の血肉と隠蔽布をいくつか買い上げていったみてえです」

「血肉って、モンスターを引き付ける、あの・・・？それじゃあアイズさん達が向かったのは・・・」

「食料庫か」

ボールスさんは自分が知っていることを白状した。

おかげで目的地の見当を付けることができ、もうこの場所には用は

ないと、フィルヴィスさんが小屋の前から歩き出し、ベートさんもまた背を向ける。

「ちくしょうめ……。あの野郎、調子に乗りやがってっ。俺はロキ・ファミリアの中でもあの狼人が一番嫌いだ。おい千の妖精、金やるからアイツを殴ってこい」

「絶対に無理です……」

ベートさんに解放されたボールスさんは首を傾げた押さええながら唸った。

耳打ちしてくるボールスさんに、断固拒否するレフィーヤさん。殴りにいった所で、返り討ちに遭う未来しか想像できないからだ。

「ところで……。お前等、死妖精とパーティを組んでいるのか？」

「えっ？」

やがて、ボールスさんは歩み去ろうとしているベートさんの更に奥、一人離れた場所にいるフィルヴィスさんを見やって言った。

「死妖精って……。フィルヴィスさんの二つ名ですか？」

「いや……。俺等が勝手に呼んでるだけだ。あのエルフの二つ名は別にある」

「フィルヴィスさんに、何かあつたんですか……？」

冒険者達がフィルヴィスさんに勝手に名付けた、不吉な響きの渾名に心がざわついたレフィーヤさんは、恐る恐る尋ねた。

「あのエルフとパーティを組んだ連中……。全員死んでやがるんだ」

「っ!？」

「あいつだけを残して、な。自派閥だろうが他派閥の者だろうが関係ねえ」

ボールスさんはフィルヴィスさんの方角を一瞥した後、フィルヴィスさんにまつわる話を語る。

「六年前に起きた、二十七階層の悪夢は知ってるか？」

「は、話くらいなら．．．大勢の冒険者が、亡くなったって」

「おお、そうだ。あん時はまだ残っていた闇派閥の連中が、有力派閥のパーティーを二十七階層でまとめて嵌め殺した」

闇派閥。

それは、レフイーヤさんがロキ・ファミアに入団した時期には既に壊滅させられていた。

が、その悪名は今でも知られている。

曰く、秩序を嫌う者達。

曰く、混沌を望む邪神達に率いられた過激派集団。

ギルドが絶対の根絶を掲げ、多くのファミアとともに打ち倒した悪の使徒だ。

そんな闇派閥が繰り返してきた数々の悪行の中でも、二十七階層の悪夢は一際凄惨だったと言われている。

ダンジョンで不審な動きがあるという情報をわざとリークさせ、無数の冒険者パーティーを二十七階層のとあるエリアに誘き寄せた。

そして、闇派閥は総がかりで捨て身の怪物進呈を敢行した。

階層中のモンスター、果ては階層主まで巻き込んだ敵味方入り乱れたの混戦は地獄絵図と化した。

遅れて到着した冒険者達の目に飛び込んできたのは、鮮血が染み込んだ赤黒い灰の海と数え切れない死体の山、そして、それを咀嚼するモンスター達であつたと言う。

襲撃された冒険者達は逃げ惑ったのか、二十七階層の至る場所での光景が広がっていたらしい。

ギルド傘下の有力派閥等と闇派閥、双方に多くの犠牲者を出した事件は、今では、「悪夢」の名で語り継がれている。

「フィルヴィス・シヤリアは、あの事件の数少ない生き残りだ。命がらから逃げ出したらしくてな、この街に帰ってきたんだが・・・死人みてえな顔をしていてよ。連れを失ったやつ、体の一部がなくなつたやつ・・・色んな冒険者がいたが、あんな酷え顔をしたやつは初めて見た。でな、その日からまるで呪われたかのように、あいつが関わつたパーティーは遅かれ早かれ、くたばっちまうようになったんだ」

「・・・！」

「落ちる時はとことん落ちる、つてのは冒険者達も十分承知しているんだが・・・縁起でもねえからよ、噂が広まるのは早かった。あのエルフとパーティーを組むと死ぬぞ、つてな」

そして、ボールスさんは告げる。

当時を思い出しながら、事件後に何とか再起した後も、フィルヴィスさんの周りには不幸が途切れなかつたと。

ある時はパーティーが判断を誤り、ある時はイレギュラーに見舞われ、ある時は仲間割れを起こして、都度四度、フィルヴィスさんと行動をともにしたパーティーは全滅した。

ことごとく、フィルヴィスさん一人を置き去りにして。

「後はさつき言った通りだ。一部のやつ等が渾名で呼ぶようになって、厄介者扱いしている連中も多くなる。本人にはたまつたもんじゃねえ風評だろうけどな・・・まあ、気を付けろよ」

「・・・」

あたかも死神に魅入られたかのようなフィルヴィスさんを、冒険者達は忌み嫌つた。

自派閥の団員でさえも、首領を務めているフィルヴィスさんのことを持てあまし、煙たがってしまいうらしい。

それらを含めて忠告したボールスさんは、小屋の奥へ引つ込んでいった。

呆然とするレフィーヤさんは、一部始終を聞いていたベートさんとともに、こちらに背を向けているフィルヴィスさんの横顔を見た。ここに来るまでにあった、あの過剰なまでの反応の理由が「悪夢の事件”にあつたんだと、フィルヴィスさん自身が己の不幸を恐れていることではないだろうか」と。



「詳しい話は知らねえが、要はてめえは仲間を見捨てて、おめおめ生き残っちゃまったってわけだな。ざまあーねえな」

「！」

先に広場で待っていたフィルヴィスさんのもとまで歩み寄ったレフィーヤさんは、ボールスさんからフィルヴィスさんの過去について聞いて知ってしまったことから、何と声をかけていいかわからなかった。

そんな風にレフィーヤさんが戸惑っていると、不意にベートさんが身を乗り出して、口の端を吊り上げ、本人の前でせせら笑った。

「何でまだ冒険者何てやってんだよ、てめえ。そのままくたばっちゃまえば良かったじゃねえか」

「ベートさんっ!!」

フィルヴィスさんの傷口を抉るようなその言葉。

こんな時まで弱者苛めに余念がないベートさんにレフィーヤさんは憤る。

「お前の言う通りだ」

「！」

当の本人であるフィルヴィスさんは、ベートさんに何も言い返さ

ず、それまでいがみ合っていた態度を消し、静かに笑みを浮かべた。それは、自嘲と自傷の笑みだった。

「あの日、眷族の先達とともに死ねないまま、私はこうして生き恥を晒している。無様なままだにな。噂は聞いたのだろう？・どうする、ここで別れるか？私はお前達も殺すかもしれないぞ」

「ちっ。てめーみてえな達観している奴が一番ムカつく」

動きを止めたベートさんやレフィーヤさんに向かって、フィルヴィスさんはなおも続け、自虐にも聞こえる脅し文句に対して、ベートさんは舌打ちを放って、そう言う一人広場の外へ向かい出した。

あたかも見限ったかのように。

「レフィーヤ・ウィリデイス・・・間違っても私に情を移すな。近付くな」

「！」

それにより、二人きりとなったレフィーヤさんとフィルヴィスさん。

しばし二人の間では沈黙が交わされていたが、フィルヴィスさんはレフィーヤさんに視線を合わせずに口を開いた。

それはまるでレフィーヤさんに警告するように、言って聞かせるように。

「私は汚れている。同胞を穢したくないのだ」

「!？」

カシッ

「!？」

そして、何かを悟りきっているかのように、弱々しく微笑んだ。そんな発言を残してフィルヴィスさんは、間を置かずその場から離

れようとした。

冷たい背を向けて拒絶の意を言い渡してくるフィルヴィスさんに立ちつくしていたレフイーヤさんは眉を吊り上げ、咄嗟に腕を伸ばし、反撃されるのも覚悟の上で、フィルヴィスさんの手首を掴んだ。

「貴女は汚れてなんかない!!」

「!？」

次に嘘偽りのない叫んだ。

「私なんかよりずっと美しくて、優しい人です!」

「何故そんなことがわかるっ、いい加減なことを言うなっ。私とお前はまだ会って間もない筈だ」

レフイーヤさんの強い言葉がフィルヴィスさんに届く中、狼狽していたフィルヴィスさんは、きりつとレフイーヤさんを睨み付け、怒気を滲ませた声をレフイーヤさんの鼻っ面に叩きつけた。

「正論と言う名の反論に、うぐつと言葉に詰まったレフイーヤさん。

「くっ、これから一杯見つけていきます!!貴女のいいところをつ!!」

「・・・」

「・・・」

それでも負けてはならないと、勢いのまま、反射的に言い返した。フィルヴィスさんは、その言葉にきよとんとし、レフイーヤさんも言い放った体勢のまま、固まる。

「くっ」

「!」

「ふふっ。なんなんだ、それは。結局答えになってないぞ」

「あう・・・」

拍子抜けしたかのように呆けていたフィルヴィスさんは、ややあつて嘔き出した。

慌てて漏れ出た笑みを隠すように手で口を覆ったが、止まらず、笑みを噛み殺すことを諦めたフィルヴィスさんは、おかしそうに指摘した。

それに自分でもしよーもないことを言ったと自覚するレフイーヤさんは、赤面した。

そのレフイーヤさんの様子を見て、フィルヴィスさんは一層おかしそうに肩を揺らす。

「・・・お前は変わったエルフだ」

「!」

口もとを緩めたまま、フィルヴィスさんが静かに告げてくる。

ほんの少し棘がなくなったフィルヴィスさんの雰囲気はレフイーヤさんは堪らなく嬉しくなった。

「おい、馬鹿エルフどもっ、さっさと来い!」

「!?!」

その時、ベートさんの怒声が二人に投じられる。

見れば、広場の外でベートさんが二人を待っていた。

その呼びかけに対して、二人は顔を見合わせて頷き、ベートさんのもとへ急ぐ。

編成に変更はなく、レフイーヤさん達、三人のパーティーは街を後にするのだった。

第71話・食料庫の緑壁

「なっ……」

「か、壁か……」

「……植物?」

「ぐによぐによ……」

そして、地図を持つルルネさんとアイズさんと僕の三人が先導する形で道を進んでいくと、しばらくして僕等はそれを目撃した。

僕等の目の前に現れたのは、通路を塞ぐ巨大な大壁だった。

不気味な光沢とぶよぶよと膨れ上がる表面。

気色悪い緑色の肉壁は僕等の前に立ちはだかり、進路を見事に遮っている。

明らかに周囲の石質の壁面とは作りも性質も異なっていた。

生物のようであり、ともすれば誰かが呟いた通り植物のようですらある。

あるいは、ダンジョンが患った腫瘍のような……。

僕はもちろん、僕より長く冒険者を続け、僕より多く深層に来たことがあるであろうアスフィさん達やアイズさんの反応から、彼女達もこんなもの見たことは無いのだろう。

「……ルルネ、この道で確かなのですか」

「ま、間違いないよっ。私は食料庫に繋がる道を選んできたんだ、こんな障害物は存在しない……筈なんだ」

目を疑うような光景に、アスフィさんの確認に、慌てて地図を見直すルルネさん。

地図を持つルルネさんに案内される形でここまでやって来た僕等。

この地形を詳しく知らないからあれだけど、多分、正しい最短ルートを辿ってきたとは思う。

「・・・他の経路も調べます。ファルガー、セイン、他の者を引き連れて二手に別れてください。深入りは禁じます、異常があつた場合は直ちに戻ってきなさい」

コクツ

「・・・」

アスファイさんのその指示に、ファルガーさんとセインさんが頷いて、それぞれ予備の地図と五名ずつ従えて、来た道に戻っていく。

分岐点まで引き返していく彼等を見送った後、僕等はもう一度、肉壁を眺めた。

場に残ったアイズさん、僕、ルルネさん、アスファイさんとネリーさんの計五名は、声をかけ合うことなく、周辺を調べ始めた。

◆◆◆

「うえ〜」

「臭い〜」

側面に広がる石質の通常壁に別段変わったところは見られなかった。

この肉壁本体はダンジョンの変調じゃなく、異質なモノのようだった。

おまけに、恐る恐る近付いて見ると、鼻を突く異臭、腐臭も漂ってくるので、嗅覚が優れている僕とルルネさんはその臭さに呻きながら鼻をつまんだ。

スツ

「・・・」

「!?ア、アイズさん」

「止めておけよ、【劍姫】」

そんな生理的に嫌悪を催す肉壁に、アイズさんが触れようとして、僕とルルネさんは慌てて止めた。
が、アイズさんは壁の表面に触れた。

「生きている・・・」

「!？」

スッ

「あっ！四葉」

そして、アイズさんの呟いたその言葉を聞いて、僕も触れてみた。

トクンッ

トクンッ

「本当だ・・・」

確かな熱と、そして鼓動に似た微か律動が、手の平越しに伝わってくる。

「アスファイ、戻った」

「どうでしたか」

アイズさんの隣でじつと壁を見据えていると、ファルガーさん達が戻ってきて、アスファイさんに報告を始めた。

ファルガーさん達の話によれば、他の経路も同じ肉壁によって塞がれてしまっているらしい。

つまり、おそらくだけど、食料庫に続く全ての道が閉ざされてしまっているって事だ。

「どうやらのあのモンスターの大量発生・・・ダンジョンから急激に産み落とされた類いのものではなさそうですね」

「ど、どういふことだ？」

「食料庫にはお腹を空かせたモンスター達が階層中から集まってきました。もし、とある食料庫に入れない事態に直面したら・・・はるばる来たモンスターの群れは、次にどのような行動を取ると思いますか？」

「あつ・・・」

「・・・別の食料庫に、向かおうとする」

ルルネさんの疑問の声に、アスフィさんは眼鏡を押し上げて、その質問を返し、ルルネさんが答える代わりにアイズさんが答えた。

「なるほど、この北の食料庫までやって来たモンスター達は、仕方がなく残る南の食料庫に向かおうとした。ここ数日冒険者達を苦しめていたのは、モンスターの大量発生じゃなくて、モンスターの大量移動だったんだ」

「そう言うことです」

この階層中から北部に集まったモンスターの進路が、冒険者達の通り道と運悪く重なり合ってしまったのだ。

この肉壁によって食料庫に進入できず、モンスターは南西と南東の食料庫を目指した。

階層の北から南に向かう飢えたモンスターの大量移動は、途中にある全ての道を縦断し、結果的に冒険者が利用する正規ルートにもモンスターが押し寄せて溢れ返ることになったのだ。

食料を求めてさまよっていたモンスターが、一連の大量発生という事象に繋がったというのが、真相だ。

「モンスター達が動き回っていたのはわかったけどさ・・・じゃあ、この奥には何があるんだ？」

「・・・」

なら、モンスターの大量移動を引き起こした原因。

植物なのかなんなのかわからない正体不明の緑壁。

目の前の肉壁こそが異常事態。

この壁の先に何かとんでもないものが眠っているってことだけは、まず間違いない。

「……アスファイ、ここからは？」

「……行くしかないでしょ」

「だよな」

「どうやって中に入るの？一応、門みたいなのはあるけど……」

では、どうやって中に入るかだ。

一応、肉壁の中心には花の花弁が折り重なったような門、あるいは口のようなモノがある。

直径は大型級のモンスターでも優に通り抜けられるほど。

これが入り口だとしたらいずれは開くかもしれないが、今のところ、微動だにする気配もなかった。

「やはり、破壊するしかなさそうですね。植物を思われる外見から、炎が有効そうですが……」

「斬りますか？」

「大人しそうな顔してさらっと物騒なこと言うな、【剣姫】……」

その出入り口を含めて、分厚そうな構造の肉壁をアスファイさんは注視して、アイズさんが鞘から剣を引き抜くと、ルルネさんが呆れた視線をアイズさんに送った。

「いえ、情報が欲しい、魔法を試します。メリル」

「でっかい方ですか？」

「ええ、長文詠唱で」

そして、壁を観察していたアスファイさんはアイズさんに断りを入れ

た。

そんなアスフイさんに命じられて、アイズさんの腰ほどの高さの小人族のお姉さんが僕等の前に出て、詠唱を始めた。

「―――」

ドオオオオン!!

「!？」

リヴェリアさん達みたいに魔法円を展開させ、静かに魔法名を口ずさむと、炎の大火球を放った。

着弾と同時に、轟音と衝撃、そして炎上した。

「行きます。全員陣形を崩さないように」

「……」

その魔法により、出入り口に当たる門の部分が完璧に焼き落ちた。僕等は列になってぽっかりと開けた口の中へ、壁の内部へ侵入した。

ズムツ

「……」

「驚いたな。初めて見るぞこんなの」

「ダンジョンの上に何かが被っているみたいね」

中は、全面が緑壁と化していて、壁はもとろん、天井も、地面も全部ソレで、靴越しにぐによぐによした感覚が伝わってきて、ものすごく気持ち悪かった。

ズズズ……

ズンツ……

「壁が……」

「脱出できなくなったらわけではありません。帰路の際は、また風穴を開ければいいだけのことです」

最後の一人が内部に入ると、気色悪い音を立てて盛り上がって修復していく肉壁。

壁は時間をかけて完璧に塞がってしまった。

まるで僕等を閉じ込めるかのような動きだった。

思わず口を閉ざす僕とルルネさんとヘルメス・ファミリアの人達にアスフィさんはそう呼びかけた。

それでルルネさん達は平静を取り戻したようだった。

「さあ、行きますよ」

「・・・」

そして、アスフィさんに従い奥へと歩み出した僕等。

「なあ、怖い想像してもいいか？もしこのぶよぶよした気持ち悪い壁が全部モンスターだったとしたら・・・私達、化物の胃袋の中を進んでるんだよな？」

「!？」

「おいっ！」

「止めて下さい!!」

「シヤレにならないなあ」

「騒がない!!」

自然と進む足も慎重になる中、ルルネさんが恐ろしい独り言をいい始め、僕もソレを想像しなかった訳じゃない。

が、ソレをあえて想像するようなことはなかった。

だって、そんなことをしたら、怖すぎてこれ以上進めなくなりそうだから。

ただでさえ、そんな感じの内部なのに・・・。

ポンッ

「!?」

「大丈夫だよ？四葉。私が着いてるよ？守ってあげる」

「うん。僕もアイズさん、守るね」

「うん」

自然と僕の耳と尻尾が垂れていると、アイズさんが僕の頭を撫でてくれた。

おかげで、ちょっと恐怖した心が和らいだ。

ルルネさん達、ヘルメス・ファミアリアの人達もルルネさんの独り言に誰もが口を揃えて「縁起でもないこと言うな」と言うけど、緊迫した空気が若干薄れている感じがした。

「！・・・アイズさん、あの花」

「うん」

ふと、この領域内での光源。

うつすらとした光を灯した、壁や天井に咲くしおれた花を見た。

その花の色は、極彩色で、怪物祭の時やリヴィラの街での事件の時に現れた食人花のモンスターを思わせた。



「分れ道・・・」

「地図にはない・・・」

「ということとは、もう既存の地図は役に立ちそうにありませんね」

光量が頼りなく薄暗い通路を進んで数分。

正面、左右側面、そして上方にも存在する計四つの道を前にして、僕等は足を止めた。

どうやらこの緑壁の通路は構造が入り組んでいるらしい。

「ルルネ、地図を作りなさい」

「了解」

そんな事態にアスフィさんはルルネさんに目を向けた。

アスフィさんからの指示に、ルルネさんは地図とは別の羊皮紙と赤い羽根ペン、アイズさんが持っているのとお揃いの羽根ペンを引っ張り出した。

あたかもこの緑壁内に入った当初からの歩数と道を曲がった回数を数えていたかのように、正確な地図を紙の端から描き込み始める。

「すごい・・・ね。地図を作れるんだ」

「んー、そうか？【剣姫】に褒められるなんて光栄だけど・・・私は一応、盗賊だからな」

それが、地図作成だとアイズさんの言葉で知って、僕もアイズさん同様、衝撃を受けた。

二人の下の位置から照れ臭そうに苦笑いを浮かべながら、ルルネさんは手の動きを止めずに描き進めていく。

「でも、どうして方角がわかるの？」

「ん？」

「うん、ダンジョンって方位磁石が使えないはずじゃ・・・」

「こいつの特技なんだよ」

「邪魔！」

「人間コンパス。どんな場所でも方角がわかつちまうのさ」

キークスさんが僕とアイズさんが抱いたルルネさんが方角がわかる理由を教えてくれた。

ブンツ

「ホレ」

ギョルル・・・

「・・・」

「北！」

ピタッ

「・・・」

ブンツ

「南！」

ピタッ

「・・・」

ブンツ

「東！」

ピタッ

「・・・」

「「おお〜！」」

その証拠にとキークスさんはルルネさんを回して、方角を指示。そして、ルルネさんは止まると同時に言われた方角を指さした。

ゴンツゴンツ

「!？」

「遊ばない」

ソレは凄かった。

が、ルルネさんとキークスさんはアスフィさんから拳骨を頂戴していた。

「移動しながらいつも北の方角を意識して、頭の中で地図を描いていくんだ。そうすりゃ、曇り空の海原が目隠しして運ばれたりしない限り、迷うことはない。そんなに難しい話じゃないさ。訓練次第で誰

にでもできるって」

「アスフイさん達もできるの?」

「俺はできない」

「私も無理でしたね」

「いつものダンジョンなら何の意味もない、技能だけだな」

「私はよく、主神様の付き添いで都市外の怪しい遺跡とか潜ったりするんだよ!」

ルルネさんは、ルルネさんみたいなことを誰にでもできるって言けど、アスフイさん達は出来ないと言う。

「ルルネさん、どういう特許をしたらできるの?」

「四葉、興味あるのか?」

「うん」

「じゃあ、教えてやるよ。まー、私の地図は即席の簡単なやつだからな。ギルドが配ってる地図と比べたら、精度も情報量も全然だけどさ」

その後、僕はルルネさんの横に張り付いて、ルルネさんから地図作成の仕方を教わりつつ、皆と一緒に複雑な迷路を探索していく。

その時に、十八階層の水晶の欠片を利用して、もと来た道の目印の付け方も教えてもらった。



「それにしても・・・この調子じゃあ、街で買い込んだ血肉や隠蔽布は使わなさそうだなあ」

「そのようですね・・・ん?全員止まりなさい」

そうやって、緑壁の迷宮を進むにつれて僕等は、モンスターとの遭遇はもちろん、その異様な静けさに不気味なものを感じ始めていた。

そんな中、開けた通路の中心に、不自然に散乱したソレを発見した。

「ファルガー、キークス、私と来なさい。他は待機で」

「・・・」

一旦、その場で止まり、アスファイさん達がソレのもとへ歩いて行った。

「モンスターの死骸か？」

「ええ。間違いなさそうです。恐らく例の門を破ることの出来た複数のモンスターが、ここまで侵入してきたのでしょう・・・そして、何かに殺された」

ソレを見て、アスファイさんのその発言を皮切りに、パーティの空気が張り詰める。

僕もアイズも鞘から武器を抜き、周囲を警戒し始める。

きつとすぐ近くに、食料庫への道を閉ざしていた障壁を突破することのできた、モンスター達を殺した奴がいるはずだから。

複数開いている薄暗い横穴の奥、通路の前方、そして後方と周囲に視線を走らせ、ふと上を見た。

「!？」

「ー上」

「!？」

そこには、食人花のモンスターがウジャウジャしていた。

それを目の当たりにして、その気持ち悪さに言葉を失つてると、同じく頭上を見上げていたアイズさんが呟くとアスファイさん達が一斉に顔を上げる。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

「各自、迎撃しなさい！」

「魔法はダメだよ！打撃は効かない！剣で戦って!!」

遙か上方の天井をうごうごと這う食人花のモンスター達は、その極彩色の花弁からいくつもの粘液を滴り落とし、間もなく天井から落下した。

咆哮とともに迫る食人花のモンスターを前に、アスフィさんは叫び、僕は多数の降下してくる食人花のモンスターの巨体を回避しつつ、その注意を叫び、モンスターに斬りかかった。

第72話・分断

「レヴィス、侵入者だ」

「モンスターか？」

「いや、冒険者だ」

僕等が食人花のモンスターと戦い始めた頃、赤い光に照らされる不気味な大空洞で、男の警告がもたらされる。

例の赤髪の女の問いに、白づくめの男は憎々しげに答える。

二人の周囲では、ローブに身を包んだ者達がにわかには浮き足立っていた。

侵入者の存在を危ぶんでいるのか、お互いに声を張り合いながら慌ただしく駆けずり回っている。

その光景を女はくだらなそうに見た。

「相手は中規模のパーティ・・・全員手練れのようにだった」

「!？」

肉壁の一部、月の表面を思わせる蒼白い水膜には、食人花のモンスターと戦う僕等の姿が映し出されていた。

それまで興味の欠片も示していなかった女だったが、その水膜の中にアイズさんが現れた瞬間、目の色を変えて、座り込んでいたその場から、素早く立ち上がった。

「アリアだ」

「なにっ？」

女の呟きに、男も反応した。

「【剣姫】がアリア・・・？信じられん」

「確かだ」

女の目がアイズさんに食いついているとわかると、男の口唇は解せないと言うように歪む。

男の言葉に短く返す女は先程までとは打って変わって、雰囲気を変えていた。

獲物を狙う狩人のように、あるいは災いをもたらす奈落からの使者のように、冷酷な威圧感を纏う。

その細めた両目で、水膜に映るアイズさんだけを見据えた。

「私が行く。アリアを周りの奴等から引き剥がせ」

「・・・わかった」

返事を待たず背を向けて、女は大空洞から動き出す。放たれる赤い光が、女の姿を禍々しく照らし出した。



「あらかた片付けましたね・・・」

「落ち着いて戦えば、何とかなるもんだなあ」

一方で、食人花のモンスターとの激しい戦闘を繰り広げていた僕等は、どうにかこうにか全ての食人花のモンスターを倒しきることに成功した。

「聞いてはいましたが、あれが例の新種のモンスターですか・・・」

「固くて、速くて・・・しかも数が多い。やになるよな」

【剣姫】、四葉さん、貴女方はあの新種の性質を熟知しているようですが、知っていることがあれば今の内に教えてもらっていいですか？

「わかりました」

「うん」

そして、僕とアイズさんはアスフィさん達と移動を再開しつつ、食人花のモンスターについて持っている情報を提供した。

打撃が効きにくいこと、その代わりに斬撃の耐性が低いこと、そして、なにより魔力に過剰に反応し、魔法の発生源に押し寄せることを。

「・・・あと、他のモンスターを率先して狙う習性が、あるかもしれない
ません」

「・・・うん」

最後にアイズさんが伝えたソレは、正確には食人花のモンスターのモノじゃなく、前の遠征の時に遭遇した芋虫のモンスターのモノだけど、同じ極彩色の魔石という共通点があるし、ソレは、無視できないモノだ。

「共食いのモンスターってことか？珍しいな」

「ふむ」

それらを聞き終えてルルネさんは地図作成する傍ら顔をあげる。その隣で黙っていたアスフィさんが眼鏡のフレームをいじる。

「モンスターがモンスターを襲う行動には大きく分けて二つの可能性があります」

「・・・二つの可能性」

「はい。一つは突発的な戦闘。偶然、あるいは何らかの事故で被害を受け、逆上したモンスター同士が争い合う。群れ同士で戦う場合もあります。そして、二つ目。モンスターが魔石の味を覚えてしまった場合です」

そして、アスフィさんは仮説を打ち明けるように、解説を始めた。僕にも分かりやすいようにか、一本づつ指を立てて。

「別の個体の魔石を摂取すると、モンスターの能力には変動が起きます。ステイタスを更新される我々のように」

「強化種・・・」

「ええ。過剰な量の魔石を取り込んだモンスターは、本来の能力とは一線を画するようになります」

本題に迫るように、アスファイさんは言葉を続け、アイズさんが呟いた言葉をアスファイさんは肯定した。

僕もモンスターの強化種については、リヴェリアさんから一応、教わっている。

この世界のモンスターは、本能の底で他のモンスターのことを同胞であることを無意識に自覚している、最低限同士討ちを嫌って避ける傾向にある。

が、そこから逸脱する個体も時には現れる。

【経験値】を蓄積して能力を高める僕等とは異なった、文字通り弱肉強食の法則によってモンスターは己の力を引き伸ばすのだと。

魔石がもたらす力と全能感に酔ってしまったモンスターは、ひたすら同胞の核を食いあさるようになる。

そして、力をつけ過ぎた存在は、ギルドから賞金首として多大な賞金が懸けられ、討伐の対象にもなりうる。

「有名なのは『血塗れのトロール』・・・多くの同業者を手にかけて、討伐に向かった精鋭のパーティまで返り討ちにした化物」

「ああいたな・・・上級冒険者が五十人くらい殺ったんだっけ？」

「ええ。最後はフレイヤ・ファミリアが討伐したのは、記憶に新しいですね」

残念ながら、その『血塗れのトロール』とかいうモンスターのことも、ソレに纏わる事件のことも、僕はよくはわからないけど、相当、騒ぎになった事件なんだろう。

「つてことは、あの新種も魔石を目的に他のモンスターを襲って
るってことか？」

「と、私は考えますがね。共食いに走ると言うことは、何らかの理由
があつて然るべきです。それに先程の戦闘の中でも、能力差の著しい
個体が数体いましたので」

「そう言われてみれば、あの食人花つて力がばらばらだな。楽に始
末できたやつもいれば、相手こずつたやつもいる。．．．でも、群
れ全体で魔石を狙うつて、そんなのアリか？最初から魔石の味を占め
てるつて、冗談じゃないぞ」

アスファイさん達のその会話を聞きながら、僕は思う。
きっとアスファイさんの推測は当たっているだろう。

今回戦った食人花のモンスターと比べて、怪物祭やリヴィラで戦つ
た食人花のモンスターの方が強かった。

単純な個体差と断じるには難しい、それほどの力の隔たりだ。

気になるのは、食人花のモンスター同士では共食いが発生しない。
ルルネさんが懸念するように、極彩色の魔石のモンスターは、他の
モンスターとは違って後天的ではなく、先天的に魔石を求める性質が
あるのかもしれないと。

ギユツ

「．．．」

「．．．」

そこまで考えていると、アイズさんが左手を握るのを見た。
ソレを見て、僕は何となく不安になった。

「．．．」

キユツ

「！．．．四葉？」

だから、アイズさんが握った左手に僕は手を伸ばしていた。

「……」

スッ

ポンッ

「!？」

「……あの人がいる、かもしれない」

「……あの人……あの赤髪の？」

「……うん」

「……わかった」

その手は僕の手から離れ、僕の頭に乗せられた。

その時のアイズさんの顔は、覚悟を決めたような感じだった。

そういった顔をした人は、止められない。

アイズさんは、この先にいるかもしれない、あの赤髪の調教師と戦う気だ。

なら、その助けになるように、僕は、鼻をきかせよう。

「……勝ってね」

「……うん」

ただ、アイズさんが勝つことだけを願って。

「また分かれ道か……」

「!」

そして、再び分かれ道に差しかかり、僕等は足を止めた。

その時、早速と言わんばかりに、左の方からあの赤髪の調教師の臭いを嗅ぎ分けた。

「アスファイ、今度はどっちに……」
ズルズル

「!？」

「両方からかよ……」

「違う……後ろからも」

「げっ」

その時だった。

ルルネさんの声を遮るように体を引きずる音を響かせながら、左右の道と僕等が来た道の方からも食人花のモンスターの毒々しい花頭が現れる。

左右後方、三方向からの挟み撃ちだ。

天井と地面を這って出現する多くの食人花のモンスターに僕等は顔をしかめた。

完璧に退路を断たれた格好だからだ。

「……【剣姫】、四葉さん片方の通路を受け持ってくださいか？」

「わかりました」

「アイズさん、左の方」

「!……わかった」

アスファイさんの要請にアイズさんはすぐに了承し、僕は、それだけを言う。

ソレだけで僕が言わんとしていることをアイズさんは、わかってくれて、小さく頷いてくれた。

「ではっ!!」

バツ

そして、間もなくアスファイさん鋭い号令によって、僕等は飛び出した。

後方に八、右に七、そして、左に僕とアイズが。

ザアン

「・・・」

アイズさんが誰よりも早く食人花のモンスターを斬り伏せた。

ドッ

「!?!」

その次の瞬間、天井から巨大な柱が僕とアイズのもとに落下した。すぐさま反応した僕等は緊急退避する。

ドンッ

ドンッ

ドンッ

「!?!」

「分断!?!」【剣姫】

「アイズさん!?!」

地面を蹴って後転飛び。

なおも発射される巨大な緑柱を次々に回避し続けていたら、気が付くと、道が完全に塞がり、アイズさんと引き離される格好になってしまった。

ルルネさんの悲鳴が僕の耳に届き、完全に塞がる瞬間にアイズさんの驚愕する顔も見た。

ガンッ

「アイズさん! アイズさん!?!」

ガンッ

「【剣姫】、おいつ、聞こえないのか!?!」

僕とルルネさんはその出来上がってしまった壁を叩きながら、アイズさんの名を叫んだ。

「何かあったのか!？」

「ルルネ!？」

「!？」

そうしていると、誰かがルルネさんの名前を叫んで、振り返れば、一匹の食人花のモンスターが僕等に大きな口を開けて迫っていた。

プチイン

グツ

「・・・邪魔」

ドカツ

「!？」

ダントツ

ドサツ

ソレを見た瞬間、僕の中で何かが切れる音がした気がした。

足に力と魔力を込めて、食人花のモンスターの口の中目掛けて弾丸のように跳び、そのまま口の中の魔石ごと、食人花のモンスターの頭頂部を刀で貫いて、その反り血を浴びることなく、食人花のモンスターの口の外に出た僕は、倒れゆく食人花のモンスターを踏みつけるようにして、もとの立っていた所に着地した。

「た、助かった。サンキューな、四葉」

「・・・うん。けど、助かったというには、まだ早いよ」

「はい。正直良くない状況です」

倒した食人花のモンスターの先、道の奥から更に増えるモンスター

を前に、僕の頭の中は、凄く冷めきっていた。

「一刻も早く、移動しないとイケませんが・・・」

「大丈夫、アイズさんだもん。置いていっても平気だ」

「なっ!? 四葉、お前、なに言ってるんだよ! そんな薄情な奴だったのか!?! 【剣姫】を置いて行くって、お前、同じファミリアの仲間だろ!?!」

「だから、信じてる、アイズさんなら、大丈夫だって。それに、ここでこうしているより、先に進んだ方が合流できる気がするんだ」

アイズさんとの付き合いは、それほど長くはない、けど、さっき、アイズさんが左手を握りしめていた時の不安だった気持ち今は、不思議と綺麗さっぱりとなく、*「アイズさんなら、大丈夫」* っていう気持ちの方が強くなっていた。

「わかりました。貴女を信じますよ? 四葉さん。・・・全員! 道を確認でき次第、この場から移動します!!」

「アスフィさん、ここまでで集まった魔石を小分けにしたモノを用意してある。必要なら使ってください」

「準備が良いですね。助かります。各員、四葉さんから魔石を受け取ってください」

そして、アスフィさんも移動することを決断。

僕は、そんなアスフィさんに、こうなるとはわからなかったけど、壁や天井に咲いた花が食人花のモンスターに似ていると思っただ点から、チマチマこっそり作っておいた小分けにした魔石の存在を教えただ。

「ルルネ、ここから食料庫までの推定距離は?」

「前の地図通りなら、あと五百つとこ」

「モンスター、さらに後ろから五!!」

「各員、魔石をばらまきなさい!!」

そのいくつかを渡し、アスファイさんの合図で僕等は、魔石を投げた。食人花のモンスターの群れは僕等を見殺しにして、餌に食いつく動物のごとく魔石のもとへ走る。

「全員、前へ！」

ダッ

それによつて、前方の方に道ができ、僕等は、食人花のモンスターが魔石に気を取られているうちに、前進した。

ビツ

「ネリー！魔剣を！！」

「……」

ジャン

ドウツ

ボボオオオウウツ！！

そこで最後尾につくアスファイさんは、後始末というようにホルスターから三つのアスファイさんが作った爆炸薬を取り出して投擲。

それと同時にアスファイさんに命じられたネリーさんが魔剣を取り出して、振り抜くと、その魔剣から火炎の飛刃が迸る。

アスファイさんの爆炸薬とネリーさんが魔剣で放った火炎の刃が接触し、単発での時よりも大きな爆炎を発生させた。

「ルルネ！もう地図を描く余裕はありません。貴女は戦闘を避け、全力で道筋を頭に叩き込みなさい」

「わかった！」

「四葉さん、ルルネの穴を埋めていただけますか！」

「了解！」

「ここから一気に食料庫まで走り抜けます！」

「「おう！」」

「先頭はファルガー」

火だるまと化した食人花のモンスター達の絶叫を聞きながら、僕等は、この先にあるであろう食料庫に向けて疾走した。

第73話・再戦といつか追いつくために、そして・・・

「オオオオオオオオオオオオ!!」

「ッ!!」

僕等が移動を開始した頃、離れ離れになってしまったアイズさんとはいうと、襲いかかってきた残る食人花のモンスターを秒殺し、最後の一体を灰に変えると同時に、壁へ駆け寄り、破壊しようとする。

ゾワツ

「!?!?!」

だけど、放たれた獰猛な殺気が、それを許さなかった。

強烈な戦意に、アイズさんは肩を揺さぶられた。

振り返り、薄闇が続く通路の奥を見つめる。

あの暗がりの先にいる、無視できない、何より覚えのある圧倒的な存在感。

この相手に一時も背を向けていられないと判断したアイズさんは向き直り、やがて、眦を吊り上げた。

引き寄せられるように、暗がりの先へ進み始める。

壁に咲いたしおれた花が燐光を揺らし、アイズさんの顔を照らす。

銀の胸当てと肩鎧が光をはね返す中、ブーツの音を静寂な一本道に反響させていく。

時間はかからなかった。

進むアイズさんと鏡合わせをするように、ゆっくりと。

相手も、闇を切り裂いて歩み出てくる。

「……そちらから出向いてくれるとはな。願ったりだ」

「……」

現れたのは、いるのはわかっていた赤髪の調教師の女だった。

「・・・貴女は、ここで何をやっているの?」

「さあな」

「これは、このダンジョンは何? 貴女が作ったもの?」

「知る必要はない」

対峙するアイズさん達は視線を絡め合い、油断なく構えながら、アイズさんは相手の様子を窺う。

あたかも追い剥ぎをしたかのように、どこか傷んだ形跡のある戦闘衣。

防具を始め、武器は何も携行していない。

アイズさんの質問に対し、やはり相手はまともに取り合う気はなさそうだった。

以前に遭遇した時と似たように。

「お前は黙って付いてくればいい。会いたがっている奴がいる。来てもらうぞ、アリア」

「私はアリアじゃない」

その言葉に、アイズさんは視線を鋭くした。

否定するアイズさんに、女は怪訝そうな顔付きをする。

「アリアは、私のお母さん」

「世迷い言を抜かすな、アリア」に子がいる筈がない。仮に・・・お前がアリア、本人でなくとも関係のないことだ」

言葉を交わす中、アイズさんは身を乗り出す。

「貴女は、どうしてアリアを知っているの? アリアの何を知っているの?」

「名を知っているだけだ。アリアに会いたいと何度もせつつか

れてな……うざったらしい声に従って探していれば、お前に会った。それだけだ」

言葉数を増やし、感情をあらわにするアイズさんを前にしても、女は無感動に泰然としたままだった。

「無駄な話は終わりだ。お前を連れていく」

ドシユツ

ズズツ

ズバツ

「!？」

要らない言葉を吐いた、と言うように女は会話を切り上げ、地面に片手を突き刺した。

水が渦を巻くような音が足もとから発せられる。

やがて勢いよく手を引き抜くと、赤い液体を散らしながら長い棒状の塊が吐き出された。

柄が存在する、紛れもない長剣だった。

……天然武器なのか？

ブンツ

「……」

「……」

驚くアイズさんの前で女は剣を振り、付着している液体を飛ばす。

生物から切り取った血肉をそのまま鋳型に流し込んだかのような不気味な外見。

鏢を始めたとした装飾は一切なく、紅の剣身は全く切れ味がないように見える。

傷つけられれば呪われてしまうかのような、そんな禍々しい威圧感があるだけだ。

口を閉ざすアイズさんは、静かに、体から余計な力を抜いた。
臨戦態勢の強敵を前に、己の全てを愛剣への委ね、一人の剣士に成
り変わる。

「行くぞ」

ダッ

ブウン

ガキインツ

「・・・」

瞬時、女は突撃した。

赤い髪が血飛沫のような斜線を描きながら、長剣を振り下ろす。

アイズさんは真っ向から受け止め、愛剣で弾き返した。

響き渡るサーベルの金属音と鉄塊を殴り付けたような鈍い音。

「・・・」

ブンツ

「・・・」

バツ

ブウンツ!!

リヴィラの街で圧倒した狂暴な勢いで女は立て続けに斬りかかっ
た。

空気が悲鳴を上げる大雑ぎの一撃をアイズさんは屈んで難なくか
わし、すぐさま斬り上げを放つ。

一度目の戦いを巻き戻すように、純粹な剣技と拳蹴が織り交ぜられ
る戦技が交わされた。

キイン

ガキイン

キイン

ガキイン

キイイン

ガキイン

「……」

「……?」

激しく打ち合う最中、女の表情が怪訝なものに変わる。

眉を曲げていた女は、徐々に速くなっていくアイズさんの剣筋に気付いた瞬間、瞠目した。

ガキイインツツ

「なっ!?!」

ザザザザツ

間髪入れず、残像を刻む銀剣が女の驚愕ごと反応を斬り払い、一閃。体勢を崩すほど、長剣が大きく弾かれる。

動揺する暇も与えず、アイズさんは無言で追撃する。

甚だしい連撃を浴びる女はギリギリの防御を積む重ね、次の一撃で堪えられず大きく後退した。

渾身の袈裟斬りの反動を殺しきれないまま、緑色の地面を足で削る。

ようやく勢いが止まった時、女は呆然とした。

「……お前、まさか……ステイタスを昇華させたか……!?!」

「……」

おまけに胸に浅い傷を負わされ、女はどうとう気が付いたようだった。

十日前とは見違えたアイズさんの能力に。

「ああ、面倒なツ……!!」

「貴女に、負けたくなかっただけ」

吐き捨てられた言葉には、苛立ちが滲み出ていた。

十日前には圧倒されていた純粋な身体能力が、ここにきて伯仲の様相を呈する。

忌々しそうに睨みつけてくる女に対し、アイズさんは静かに言い返した。

蒼然とした闇夜の下、女によって叩きつけられた敗北感が、アイズさんを高みへと駆り立てた。

アイズさんの心の奥に秘めている、ファミリアの仲間達にも劣らない生来の「負けず嫌い」。

融通の利かない負けじ魂を發揮し、アイズさんはこの瞬間に臨んだ。

再戦である。

己の意志を表すように、アイズさんは愛剣の切っ先を向けた。

「ちっ……」

チャキツ

女は舌打ちをし、長剣を構え直すとアイズさんと睨み合う。

常に冷淡であった表情を打ち消し、アイズさんを明確な敵として鋭い視線の矛で射抜いてくる。

それまで以上に濃厚な威圧がアイズさんを襲った。

「使わないのか？」

「必要、ない」

静かに機先を窺う二人だったが、おもむろに女が口を開く。

「風」を、とそう問うてくる。

最大の武器である魔法を使おうとしないアイズさんに、疑問を投げかけた。

そして、アイズさんは、ハッキリと告げた。

“魔法”に依存していた前回の戦闘を顧みて、もう一度自分の原点に立ち返る心算。

剣士として培った剣技のみで、アイズさんは女との勝負に挑むのだ。

「・・・舐めるな」

ブオツ

「・・・」

ガキインツツ！

対する女は、烈火のごとく、怒りを帯びた。

その無表情の美貌に殺気を溢れさせ、握り締めた長剣の柄へ亀裂を走らせる。

これまでにない感情をさらけ出し、次の瞬間、地を蹴り碎いた。弾丸となって迫りくる相手に、アイズさんも剣を振り上げ疾駆する。

銀と紅の剣が、凄まじい勢いで交差した。衝突した。



「【狙撃せよ、妖精の射手。穿て、必中の矢】！【アルクス・レイ】ドオオオオオオン

その頃、僕等を追うレフィーヤさん達はというと、レフィーヤさんの魔法で進路上にいた二十を超えるモンスター達を沢山の灰粉に変えていた。

「そうか、お前はウィーシェの森の出身か。同胞の中でも“魔力”に秀でた里の者達・・・あの魔力の出力、道理で」

「い、いえつ、私はこれくらいしか取り柄がないので・・・」

場所は、二十四階層。

僕等を追いかけるべく複雑な迷宮を駆け下りてきたレフィーヤさん達は目標の階層まで辿り着いていた。

ベートさん、フィルヴィスさんと並びながら、たつたつと大樹の迷路に足音を響かせていく。

階層北の食料庫を目指して。

その理由は、モンスターの大量発生が確認されている正規ルートに向かってみると、收拾し切れなかったと思われる無数の「ドロツプアイテム」と、モンスターの死骸が北の方角に続いていたからである。

並大抵の上級冒険者では凌ぎ切れないであろうモンスターだったものに、これが僕等の仕業であるとレフィーヤさんは確信した。

続々と集結しつつあるモンスターとの戦闘、時間の浪費を嫌って、現在は大通路を迂回し、樹皮に包まれた細道を進んでいる。

細道、と言つても幅は五メドル以上はあり、少数のパーティ編成ならば何ら支障のない経路だ。

「無駄口叩くな。来るぞ」

ボツ

ドギヤツ

発光する苔に囲まれながら、仲良く会話するフィルヴィスさんとレフィーヤさんに、くだらなさそうに告げながら、並走していたベートさんが前に飛び出した。

その視界の奥から現れたモンスターを瞬殺にかかる。

曲芸のごとく複数の巨大蜂を空中でいっぺんに撃墜し、二メドルを超える「ホブゴブリン」の太った醜い巨体を上段蹴りで文字通り粉碎した。

バキツ

「!」

「下がれ、ウイリデイス!」

ダツ

ギャ

ギャギキン

パーティの進行速度に微塵も影響を与えない勢いでベートさんが道を切り開く中、レフイーヤさん達の周囲からは、飛ぶ樹皮の欠片と、壁のひび割れる音が発生し、どつとりザードマンやダーク・ファンガスの群れが出現する。

樹皮の壁面を突き破り産まれたばかりのモンスター達に包囲される中、レフイーヤさんの名前を呼んだフィルヴィスさんが疾走する。

短剣を抜剣しレフイーヤさんの側にいたモンスターを斬り倒す。

吠えるリザードマン達がフィルヴィスさんに飛びかかるが、フィルヴィスさんは突きと横斬りを多用した素早い攻撃で的確に急所を突いた。

純白の戦闘衣を揺らしながら、太い尾の反撃を往なし、すれ違いざまりザードマンの首を胴体から切り離す。

立ちつくすレフイーヤさんが介入する暇もないまま、あつという間にリザードマンの数を減らしたフィルヴィスさんは、腰から木製の短杖を引き抜く。

「一掃せよ、破邪の聖杖!」【ディオ・テウルソス!】

ビギンツ

「!」

残る二体のリザードマンとの戦闘を続けながら、呪文を奏でる。

“並行詠唱”を開始、リザードマン達を斬り伏せた次には、茸の傘を広げ、不穏な動きを見せる三体のダーク・ファンガスに、その短杖を向け魔法を発動させ毒胞子ごとダーク・ファンガスを焼きつくした。

「・・・」

「てめーもアレくらいできるようになればな」

「うう・・・」

そのフィルヴィスさんの戦い方は、レフィーヤさんの憧れる戦闘型でもあった。

短剣と短杖をもって近距離・遠距離をつつがなくなし、激しい戦闘の中でも「並行詠唱」もお手のものように、剣とともに舞い敵を退け、魔法で焼き払うその姿は、フィルヴィスさんの容姿も相まって美しかった。

そんなフィルヴィスさんの戦闘をしばらく経った後も見とれていたレフィーヤさんだったが、ふと、劣等感も覚えてしまった。

そこに近寄ってきたベートさんが追い打ちをかける。

基本、距離か前衛壁役を必要とするレフィーヤさんは、仲間の助けなしには大して戦えない。

一人でも戦闘をこなせる万能のフィルヴィスさんと比べれば雲泥の差だ。

頭を垂らして落ち込むレフィーヤさん。

「火力特化の魔導士にそこまで求めるのは酷だ。真の局面に必要とされるのは、ウィリデイスの力だろう」

「・・・」

今度は戻ってきたフィルヴィスさんが擁護してくる。

砲台であるレフィーヤさんを守るのがパーティの役割だ、とフィルヴィスさんはベートさんへ語気を強める。

確かにベートさんが要求する技術、「並行詠唱」を火力特化の純粋な魔導士で行える者は稀有だ。

というより、そんな凄腕の魔導士は、レフィーヤさんも僕もリヴェリアさんしか知らない。

「ふん、随分仲良くなつてんな、エルフども」

「ー」

上位魔導士こそがパーティの切り札と主張するフィルヴィスさんに対し、ベートさんはレフィーヤさんとフィルヴィスさんを交互に見やつて鼻を鳴らし、ほんの前までとは偉い違いだと皮肉るベートさん。

そんなベートさんに、フィルヴィスさんはぐつと口をつぐみ、レフィーヤさんは赤面してしまい、その場で右往左往する。

軽薄そうに笑っていたベートさんは、そこからレフィーヤさんに視線を飛ばした。

「お前はそれでいいのか。自分の身も自分で守れねえで」

「ー」

ベートさんの琥珀色の目をじっと見つめ、問いかけてくる。

普段のように侮蔑交じりに、しかし一方で真剣な眼差しを突き刺してくるベートさんにレフィーヤさんは肩を揺らした。

「馬鹿アマゾネスどもは甘やかしているみてえだがな、俺はそんなことしねえ。魔法だけが取り柄だの抜かしている内は、てめーは一生お荷物だ」

「っ・・・」

「お前は甘い」

そして、断言される言葉には優しさの欠片もなかった。

その琥珀色の目はレフィーヤさんのことを見下ろし、まるで崖下へ突き落とすように貶めてくる。

ベートさんの言葉は、いつもの確に、それぞれの者が抱える傷口を抉ってくる。

ベートさんが多くの者に嫌われる理由の一つだ。

無遠慮かつ乱暴に言葉の刃を放ち、無理矢理に傷口を広げ、冒険者達の怒り不興を買う。

裏を返せば、ベートさんを恨むのは自分の傷と向き合えない者ということでもある。

何も言い返せないレフィーヤさんは盛大に落ち込みつつも、確かに変わらなければいけない、と自分を見つめることができた。

怪物祭の事件でも痛感したばかりだったからだ。

アイズさん達の足手まといから脱するため、アイズさん達の隣に並ぶことを許されるため、レフィーヤさんは今の場所からもう一度高みを目指さなくては。

己の無力さに流した涙と、憧れに焦がれるあの想いを忘れてはいけない。

見下してくるベートさんへの悔しさもないと言えば嘘になる。

心配するようなフィルヴィスさんの視線を頬の辺りに感じながら、レフィーヤさんはぎゅつと杖を握る両手に力を込めた。

「……」

「……？」

うつむいていたレフィーヤさんは、そこでふと、顔を上げる。

言いたいことを散々言ったベートさんは先に移動を始めていた。

フィルヴィスさんもレフィーヤさんを気にしながら歩み出している。

二人の背中を視界に入れながら、レフィーヤさんは違和感を覚えた。

その時、レフィーヤさんは「魔力」を感じ取っていた。

その場にたたずみながら、一度顔を周囲に振る。

「あの、ベートさん……？」

「ああ？」

ベートさんに声をかけてみても、振り返ったベートさんは「何だ？
」と特に何も気づいていない様子だった。

「どうかしたのか？」

「えっと、いえ、その・・・」

フィルヴィスさんも尋ねてくる中、レフィーヤさんは言葉を濁す。
何も感じてない二人を見て、気のせい？と首を傾げる。

「何もねえんだったら行くぞ。食料庫までもう少しもねえ」

「・・・」

手間を取らずなど悪態をつきながら、再び歩み出すベートさん。
フィルヴィスさんもその後続く。

自分達がやって来た道の後方を見つめたレフィーヤさんは、やや
あつて振り返り、急いでベートさん達を追った。

コソツ

「・・・」

そして、レフィーヤさんの後ろ姿が見る見る内に小さくなっていく
中、その後ろ姿を窺う影があった。

レフィーヤさんが見つめていた通路、その横穴の曲がり角に姿を現
す。

紫の外套、そして不気味な仮面を被った影は、レフィーヤさん達の
後を音もなく追跡した。

第74話・食料庫の死兵と混戦

「アスファイ、前からめっちゃくちや来るぞ!!」

「やああああああ!!」

ザクツ

「おらあ!!」

ドカツ

前方から押し寄せる食人花のモンスターにルルネさんが叫ぶ。

僕はそのルルネさんの言葉を聞いて即座に疾走して食人花のモンスターと体と体の間をすり抜け、すれ違いざま斬りつけた。

それでモンスター達の勢いを削ったところで、各前衛の大型武器がその花の顔面を豪快に叩き割った。

「よっほど我々をこの先に行かせたくないようですね・・・!」

ザアアアン!!

鋭く前方を見据え、アスファイさんは唇を笑みの形に歪める。

モンスター達の激しさを増す迎撃に、この先に“何か”があるとアスファイさんは確信したようだった。

この部隊の最後尾から最前へ移動し、自ら立ち塞がるモンスターを撃退にかかる。



「・・・あれは」

「もしかして、石英の光? 食料庫が近いのか?」

パーティの進行速度を緩めることなく、一際巨体な食人花のモンスターの撃退し、何度目とも知らないモンスターの強襲をはね返した時、長く続いている通路の先から、しおれた花の弱々しい光とは違う、

血の色のようない赤い光が漏れ出しているのを僕等は視認した。

食料庫と呼ばれるダンジョン最奥の大空洞には特大の石英が立つ。モンスター栄養源となる液体を生むその水晶の大支柱は、神秘的な光を放ち大空洞を常に照らしている。

この二十四階層の大支柱は赤水晶のようで、通路の先の赤光を見て僕等は誰もが終着点までもう僅かであることを悟った。

「アスファイ」

「・・・このまま、突っ込みます」

アスファイさんの言葉に従って、最後の食人花のモンスターを打ち破り、緑壁を駆け抜ける。

腐臭が濃くなつていく中を突き進み、赤い光が滲む通路の出口へ飛び込んだ。



「・・・何、あれ」

「宿り木・・・？」

視界が一気に開けた直後、一瞬、僕等は言葉を失った。

僕等を待ち受けていたのは、ここまでの道のりと同じように緑の肉壁に侵食された広大な空間だった。

違いを挙げるとすれば、大きさが異なつた無数の蕾が緑壁の至る場所から垂れ下がっていることだ。

そして、そんな大空洞の中で僕等の視線と意識を奪つたのは、食料庫の大支柱に寄生する巨大なモンスターだった。

計三体、食人花モンスターと酷似したモンスターが高さ三十Mはある赤水晶の大支柱に絡みついている。

毒々しい極彩色の花頭を三輪咲かせた超大型は、全長も、体の太さも、食人花モンスターの十倍はくだらない。

その体から生えた蔦に似た触手を大主柱の表面にくまなく行き届かせている。

赤く発光する石英のせいもあって、その光景は血管のようにも見えた。

ドクンツ

「まさか・・・大主柱から出る養分を、吸っている?」

その触手が鼓動音を発する度に、何かを吸い上げるかのような奇音が続く。

巨大な花のモンスターは水晶から滲み出る液体を片っ端から吸収していた。

モンスターの触手や根は大主柱の表面だけにとどまらず、そのまま大空洞の壁や天井、地面に伸びて緑色の肉壁を作り上げていた。

二十四階層の食料庫一帯が変異した元凶は、間違いなくあの巨大花のモンスターだ。

ダンジョンから無限に溢れ出す養分を無限に吸収し、体の組成を爆発的に拡大させるモンスター達が、この異様な緑壁の迷宮を形成するに至っているのだろう。

「あつ」

「ん?どうした?四葉」

「ルルネさん、あの三体の巨大花が巻き付いた大主柱の根もと」

「えっ?・・・あつ、あれは、確かにあの時の宝玉・・・!?!」

植物の肉壁に覆われた大空洞内には、アスフィ達の他にも謎の集団がいた。

上半身を隠す大型のローブに、口もとまで覆う頭巾、額当て。

顔と素性を隠した人達は突如現れた僕等に騒然となっていたかと思うと、こちらを指差し、大声で警戒を呼びかけ合う。

剣呑かつ殺気立った雰囲気満ちる中で、僕の目だけは、その人達

を飛び越え赤色の石英に縫い付けられたままだった。

無意識に漏れた僕の声を聞き取ったルルネさんにソコを指さして言った。

僕が指さした大主柱の根本には、前のリヴィラの事件の時に見た何かの赤ちゃんを入れた緑色の球体が、取り付いていた。

「ここまで来たか」

「何をやっているっ、どうしてここまで侵入を許した!？」

「食人花だけではあの侵入者達に歯が立たん」

僕等がゾツとしている一方で、相対する者達もまた、僕等に身構えていた。

大主柱の根もとの側で待機する全身白ずくめの男は、僕等を睨む。

その男のもとへ一人が駆け寄って行く。

他の人達とは色が異なったローブを纏う彼の非難に、男は感情を押し殺した声音で返した。

「仕事をしろ、闇派閥の残党ども。彼女を守る礎となれ」

「ツ・・・言われなくとも！」

相手をちらりと見た後、白ずくめの男は大主柱を見上げる。

赤の石英表面に取り付いた宝玉。

巨大花の蔦に守られるように寄生している不気味な宝玉は、モンスタ―と同じく大主柱の養分を吸収していた。

間近で宝玉の胎動を目撃するローブの男は、目もとを歪めながら踵を返す。

白ずくめの男と、そして肥大した赤ちゃんの眼球に見守られながら、闇派閥の残党と呼ばれた集団は次々と武器を抜き放った。

「侵入者どもを生きて帰すなあ!!」

「「「おとおお!!」」」

「!?」

怒号が飛ぶ。

周囲とは色違いのローブを纏った男は、指揮を預かる者らしく、そいつの一声に、大空洞にいるローブの人達も答え、得物を掲げ、僕等のもとに押し寄せる。

「おい、なんかあいつ等やる気満々だぞ!」

「応戦します。こちらとしても彼等がここで何をしているのか、聞き出さなくてはいけませんから・・・ね」

殺意をみなぎらせる敵の姿にルルネさんは叫んだ。

大空洞の通路口前にいる僕等を見据え、謎の集団は勢いよく突っ込んでくる。

敵のどこか異様な雰囲気を感じながら、アスフィさんのその言葉を聞き、僕は周囲に視線を走らせた。

僕等が侵入してきた道以外にも、大空洞には無数の通路口があった。

そして、その出入り口付近には大型の黒い檻がいくつも置かれている。

中身は、とぐろを巻いた食人花のモンスター。

明らかにあの食人花のモンスターをどこかに運び出そうとしている風で、嫌な予感しかしなかった。

「殺せ!!」

「かかりなさい!」

「おおおお!!」

ガキイイン

ガキイイン

両陣営から号令が上がり、僕等とローブの集団は開戦した。

ぶつかり合う互いの武器から金属音が発生し、激しい争いが巻き起こる。

ローブ、そして口もとまで覆われた頭巾で正体を隠す敵集団はこちら側の倍以上の人数を誇っていた。

猛り声とともに雪崩かかってくる敵の前衛に対して、ルルネさんをはじめとする巫人の中衛が最前線に上がりしのぎを削り合う。

繰り出される剣と槍を虎人の人の大盾がまとめて防ぎ、その陰からすかさず飛び出すエルフの人がローブの男達に斬りかかる。

ピュッ

ピュピュッ

ドッ

ドドッ

「・・・っ」

ガキイン

敵の後衛の矢が放たれば、お返しとばかりに短文詠唱の魔法が炸裂した。

殺意の乗った攻撃を仕掛けてくる相手にただ、モンスターじゃないと言うだけで、どう攻めるべきか分からず、弾くしか出来ない僕と違い、ヘルメス・ファミリアの人達はお互いを補完し合う連携と、その高い潜在能力で数で勝る相手を圧倒した。

「よっ、とー！」

「ぐあぁ!?!」

ルルネさんも相手の四肢をナイフで斬りつけ、更に膝頭を腹部に打ち込んで、相手していたローブの男を再起不能にした。

「さて、お前等、どこのファミリアだ？」

「・・・ッ！」

「ま、黙っていても無駄なんだけどな」

ルルネさんはその再起不能にした男のローブの襟の部分を片手で掴み、尋問する。

男は出血する両手をだらりと下げ、額当ての下で両目を歪めていた。

その周りで交戦が続けられている中、布に覆われている口を閉ざす。

何も話そうとしない相手に対し、ルルネさんはあくどい顔で懐から小瓶を取り出した。

透明感のある真紅の液体と結晶が浮かぶそれは、こちらもリヴェイラの事件の時に見た「開錠薬（ステイタス・シーフ）」だ。

これで所属派閥と男の名前を暴くことができる。

「・・・神よ、盟約に沿って、捧げます・・・」

バサツ

「!？」

「・・・あれは」

ルルネさんの人差し指と中指に挟まれた小瓶の道具を見せつけられた男の目は震えた。

間を置かず、男の視線が何かを悟った花のように、ふっと遠のく。頭巾によつて塞がった口もことから、くぐもつた声が漏れる。

そして、次の瞬間、男が意を決したように勢いよく腰に手を回すと、その反動でローブの中身があらわになった。

男の上半身に巻き付いていたのは、炎を封じ込めたかのような、真っ赤な紅玉だった。

視界を打ったその光景に、ルルネさんの呼吸が止まる。

あの真っ赤な紅玉は、前の遠征の時、リヴェイアさんに教えてもらった事がある、「火炎石」と呼ばれるモノだ。

「火炎石」は、深層域に棲息するモンスター「フレイムロック」か

ら入手できるドロップアイテムだ。

加工されていない怪物の肉体の一部は強い発火性と爆発性を持つ。男の持つ火炎石は入手できるドロップアイテムの中でも殊更巨大なもので、それも無数にあった。

数珠のようにいくつも繋がって男の体に巻き付いている。

「ルルネさん！そいつから離れて!!」

「この命、イリスのもとに……!!」

ドオオオオオオオオオオオン!!!

「~~~~~」

それを間近に見たルルネさんは凍りつき、男は手を動かして、腰の小箱から伸びた紐を勢いよく引く。

咄嗟に叫んだ僕とルルネさんも咄嗟に掴んでいた男の胸ぐらを離し、前へ蹴りつけ、自身も後ろへ飛んで、両腕を交差する。

次の瞬間、火箱を点火させた男の体は、爆砕した。

巻き起こった大爆発にルルネさんは吹き飛ばされる。

「……じ、自爆？」

「……」

ドサツ

吹き寄せる熱風と膨大な火片の雨。

肌を焼かれ、背中を地面に強打しても何とか上体を引き剥がし、赤く燃ゆる前方を見つめるルルネさんは呆然と声をこぼした。

何とかルルネさんが無事であったことを喜ぶべきところだけど、原型をとどめた男の体は、燃え盛っていて、両膝を突き、どさりと地面に崩れ落ちる姿を見ながら、僕は顔を青ざめさせる。

だって、あの男がそうなら……。

「愚かなるこの身に祝福をお!!」

ドオオオオオオオオオオオオオ
ドオオオオオオオオオオオオオ
ドオオオオオオオオオオオオオ
!!!!!!!

戦場の後方より、異端者の鼓舞が投げられる。

色違いのローブの男が血走った双眸に黒い光を孕ませ、仲間らしい人達に大げさに言った。

その言葉に背中を押された形で、ローブの者達は恐怖を捨て凶行に及ぶ。

死相を浮かべ、彼等は誰かの名前を叫んで、その命を種火にして連鎖的に爆発を起こした。

ドドドドドウツツ!!

「・・・何で、何でこんな・・・」

自爆する異常な集団に、僕は寒気がした。

全ては彼等の忠誠の証なのかもしれないけど、こんなことが許されていいのか、って。

「壊れた連中め。神に縛られる愚者ども・・・滑稽な・・・食人花（ヴィオラス）」

ドオオオオアツ

「ー」

そして、僕等のもとから離れた、大空洞の最奥。

争いを傍観する白づくめの男は嘲笑し、片腕を伸ばした。

戦場を示し、鎧冑の奥から覗く両目を細める。

男が口を開いた瞬間、大空洞中の食人花のモンスターが一斉に首を向けた。

まるで一つの意志のもと統率されたように、沈黙を破って凄まじい勢いで行動を開始する。

閉じ込められていた黒檻を破壊し、周辺から蛇行して、僕等のもとに殺到した。

「なっ!？」

「モンスターが!？」

食人花のモンスターまで加えた総攻撃が開始させる。

狙いすましたかのように押し寄せるモンスターに僕等の苦しさを痛みの混じった悲鳴が倍増する。

数え切れない触手と巨大な牙が容赦なく襲いかかった。

「うおおおおおおおおあああああああああ!？」

「!?み、味方も!？」

「めちやくちやだ・・・!？」

が、食人花の矛先は僕等だけにとどまらず、手当たり次第に触手を振り回し、仲間のはずのローブの人達にも食らいつく。

敵味方見境なしのモンスターが蹂躞。

場は混戦を極めた。

第75話・来る援軍

「オオオオオオオツ!!」

ドオオオオオオオオオオオツ!!

「!?!」

敵ごと喰らう食人花のモンスターに、それに対して微塵の恐れもなく僕等に襲い掛かってくる死兵の集団。

モンスターに捉えられた側から爆発が巻き起こり、連携も防衛もままならないまま、ただ被害だけが増えて、混乱だけが先行した。

「・・・どうしたら、良い・・・」

「不味い・・・」

一人、また一人と、敵か味方かもわからない人達が倒れていくその状況に僕は、焦りと苛立ちを覚えた。

このままじゃ全滅も時間の問題だ。

暴れ狂うモンスターの猛威に押され、おまけにロープの死兵達に対しては自爆を恐れ思うように攻勢へ出られない。

撤退も無理。

戦いを放棄して背を向けた瞬間、壊滅させられる。

どうやったら、この状況を変えられるのかと頭の中でグルグルと考えを巡らせた。

「・・・そうか」

グツ

そこで、ふと、敵兵とモンスターの隙間から前方の方、色違いのロープの男がいる場所から更に奥、こちらを眺めている白づくめの謎の男が目に入った。

その瞬間、あいつさえ、押さえてしまえば、全部がなんとかなると

思った。

自然と足に力が籠る。

これから、一直線にこの戦場を駆け抜けるために。

「・・・」

ドオウウウンッ!

「うわああっ!?!」

「オオオオオオオオオッ!!」

「四葉!?!」

そして、僕は地面を思い切り蹴った。

その時に巻き追った突風が、食人花のモンスターも、死兵も次々と吹き飛ばされていく。

「まったく、あの子は！ファルガー、指揮を！全員をかき集めて持ちこたえなさい！」

ダッ

そんな僕に悪態をついたアスファイさんは、そう指示を出すと、僕の後を追って地面を蹴り、アスファイさんの指示を受けたファルガーさんはルルネさん達に呼びかけ、素早く陣形を組み直す。

ザッ

「ぐあっ！」

ザッ!

「がっ!!」

ザッ!!

「あぐっ！」

ザッ!!!

「ぎっ！」

ザシユッ

「があっ!?!」

その間も止まらず、死兵も、モンスターの壁も突破した僕は、色違いのローブの男の驚いた顔をして、咄嗟に装備していた片手剣を構える姿を見つつ、すれ違い様に斬り捨てた。

崩れ落ちるそいつを背後へ置き去りにして、そのまま、高速で白ずくめの男のもとへ。

刀を握り締めながら、大主柱のもとで動かない不気味なそいつへ、僕は仕掛けた。

「食人花に大人しく喰われていればいいものを……余計な手間を」

「……」

グッ

ドオウウウンッ!

口の端に皺を寄せた白ずくめの男は、自ら前に出る。

あの何かの赤ちやんが取り付く大主柱から遠ざかり、迎撃する素振りを見せた。

あっという間に埋まる間合い。

未だ無手のままたたずむ男に、僕は刃を突き立てようと更に速度を上げ、飛びかかった。

「やれ」

ドッ

「っっ!?!」

タンッ

ドドドドドドドドドドドド

後、少し、後、五歩ほどで僕の刀が男に届く距離に近づいた瞬間、地面から沢山の緑の槍が撃ち出される。

下方からくる槍達を直角の軌道で横に飛んで、無理矢理の方向転換

だったけど、なんとかその奇襲を避ける。

「ぐっつーー!!」

「いい動きをするな、冒険者」

難を逃れ振り向いて見れば、そこには地面から生えた大量の触手に守られる男の姿があった。

続けて、緑肉の地面を裂いて複数の食人花のモンスターが姿を現す。

もともとから忍ばせていたのか、伏兵のごとくモンスターの群れが僕の前に立ちはだかった。

「だが死ね」

「!」

冷気のこもった声を発し、男はモンスターを操った。

緊急回避の反動から体勢を立て直そうとする僕に、食人花の群れをけしかける。

次々と打ち寄せる食人花のモンスターの顎を、なんとか不安定な姿勢のまま必死に切り抜けるけど、そこに無数の触手の乱打まで加われば、逃げ道はあつという間に塞がれた。

触手をなんとか斬り捨てて防ぐけど、体が後ろに傾き、そこに全方位からの止めの攻撃が加えられる。

それに顔を歪めた瞬間だった。

『タラリア』

バツ

ガッ

「!」

ガキイーン

その声が聞こえてすぐに、僕の体に別の意味での衝撃が加わって、同時に、食人花のモンスターの触手と牙が僕のもとへ突き刺さる。緑肉の地面を破き、砕く音が重なって鳴り響いた。

「なにっ!?!」

「!?!」

白づくめの男は、そこで頭上を振り仰いだ。

食人花のモンスターの触手と牙が貫いた地面には、あるべき僕の死体は存在しない。

忽然と消えた僕に食人花のモンスター達が顔を巡らせて困惑するのを他所に、男は、その視線を宙の一点に縫い止められる。

天井まで遥かな高さが存在する大空洞の空中に、アスファイさんが、僕を小脇に抱えて、靴から生える白翼を広げ浮遊している。

「空中に……」

「……」

驚く白づくめの男と、今も戦闘を続ける死兵の視線も抱えられている僕の視線もアスファイさんに集まる。

ギロツ

「……」

「!?!」

アスファイさんは、僕を一睨みすると、食人花のモンスターの群れ、そして白づくめの男達を見下ろした。

クイツ

「飛翔靴まで使わせたんです、完璧に仕留めさせてもらいます」
バラバラバラバラバラッ

ドドドドドドドドドドドドツ

その言葉を落とし、アスフィさんは、マントの下に手を伸ばすと、ホルスターからその中身を空にする大量の爆炸薬を真下にばらまく。鎧兜の奥で、白づくめの男の目が見開かれる。

音を立てて、緋色の液体が詰まった爆弾が投下され、爆撃が始まった。

凄まじい爆炎の華が咲き乱れモンスターを手当たり次第に吹き飛ばし、断末魔をも呑み込んでいく。

極彩色の花弁が、牙と肉片が、触手が、その長い体が、粉々に弾け飛んでいく。

残っていた弾をもって行われた爆炸薬の雨。

顔色一つ変えないアスフィさんの眼下で、仮借のない殲滅が行われる。

ドドドドドドドドドドドツ!!

「ちっ!?!」

食人花のモンスター達を無理矢理操り防護壁を形成した白づくめの男をも炎の爪が脅かす。

周囲一帯を埋めつくす緋色の閃光が四方から迫り、盾となったモンスター達の肉体を引き裂いた。

絨毯爆撃と言つて相違ない規模に、大空洞が震える。

ゴオオツ

「!?!」

ボオフツ

「————っ!!」

膨大な煙が立ち上がる中、アスフィさんは今とばかりに降下した。煙のドームへ突っ込み、なおも加速。

まるで、上空から獲物を狙う鷹のごとくアスフイさんは、白ずくめの男に急接近する。

視界を塞ぐ白煙に乗じて、敵を強襲した。

急降下から地面すれすれを滑空し、僕を途中で下ろすと、そのまま男の背後へ急迫。

警戒された頭上を避けた虚を突く攻撃に、相手は咄嗟に反応してみせるが、アスフイさんの方が速い。

回避もままならず、丸腰のままの敵に必殺をアスフイさんは見舞う。

アスフイさんの鋭い短剣の一突が繰り出された。

「――」

「!？」

「なっ・・・!？」

だが、アスフイさんの短剣の剣身を男は、素手で掴み、止めた。目の前の光景に僕もアスフイさんも目を見開いて驚いた。

振り向きざま、白ずくめの男の左手が短剣を捉え、阻んだ。

武器を素手で掴みかかるといふ無謀な防御にもかかわらず、アスフイさんの靴の最大速度を乗せた刺突を、腕一本で完璧に押さえ込む。

異常だった。

剣身を握り込んだ男の左手は出血をしているみたいだったけど、指の皮膚以外に刃が食い込んではいない。

アスフイさんが押しても引いても、男に掴まれた短剣はびくともしなかつた。

得体の知れない悪寒が全身を走る。

ガッ

「!？」

「ぬんッ!!!」

ゴガッ

「ぐあっ!？」

男はアスフィさんの胸ぐらを掴み、そのまま叩きつける。

尋常ではない力によって地面を何度も転がるアスフィさん。

散乱する食人花のモンスター死骸にぶち当たり、肉塊を蹴散らしながら吹き飛んでいく。

何のか足を地面に埋め勢いを殺したアスフィさんは、バツと体を立ち上げた。

視界から消えた白ずくめの男の姿を見つけ出そうと、アスフィさんは視線を端から端へ振る。

ドオンッ

「!？」

そんなアスフィさんを思い切り、横へ突き飛ばす。

グシヤリ

「!？」

「よ、四葉さん!？」

「四葉ッ!？」

直後、僕のお腹からおぞましい音が鳴った。

たちまち音の鳴った所から中心に焼けるような熱が帯びる。

戦闘衣じゃない私服のセーラー服風ワンピースが真っ赤に染まっ
ていく。

前を見れば、白ずくめの男が僕のお腹に短剣を深く突き刺して立っ
ている。

そこにアスフィさんとルルネさんの悲鳴が僕の耳に届く。

「!？」

ガッ!!

「!？」

そして、目の前の白ずくめの男が鎧兜の下で口角を上げているのを見て、ものすごく、腹が立った。

僕は渾身の力を振り絞って、手にした刀の柄を目の前の男の脳天に思い切り叩きつけた。

バリイン

「・・・」

ドッ!!

グシヤリ

どういう、石頭をしているのかわからないけど、僕の刀は柄から砕け散り、それでも、一瞬でも出来たその隙に、男の体を足場に、後ろへ飛び退く。

自然と僕のお腹から引き抜かれた短剣。

「【テイクアウト】!!」

ドッ

「!？」

ドドドッ

そして、僕は、初めて【幻書の術】をそう言う使い方をした。

【幻書の術】を発射台代わりに、中に入っている槍とか大剣とかの武器を白ずくめの男に放った。

ドサッ

「!？」

「四葉さん！」

一応、着地に足は使ったけど、流石に足に力が入らなくて、飛び退いた勢いのまま、尻餅をついた僕にアスフイさんが回復薬を手慌てて駆け寄る。

「……何て無茶をするんです。貴女は」

バシヤツ

「……ありがとう……」

その中身は、僕のお腹に出来た傷口にかけられる。

「……流石に、しぶといな冒険者。今のは、驚いたぞ」

「……」

「だが、すぐに息の根を止めてやろう」

そこに、僕の攻撃と言って良いか解らない攻撃を受けても、一ミリも傷を負うことがなかった白ずくめの男が歩み寄る。

ドゴオオオオツ!!?

「!？」

その次の瞬間、一条の雷鳴が大空洞に轟き渡る。

白ずくめの男は、その音に驚いて音のした方を振り返る。

「なんだと!!？」

ボダダ……

ボダツ

ダツ……

ガツ

「ちっ、雑魚が。何匹来ようが、ムダなんだよ」

その音のしたところには、暴れ回るベートさんと杖を構えるレ

フイーヤさんと見知らぬ黒髪のエルフの女の人がいた。



「誇り高き戦士よ、森の射手隊よ。押し寄せる略奪者を前に弓を取れ。同胞の声に応え、矢を番えよ」

「つたく、どういう状況だったの!」

ベートさん達とともにこの大空洞に到着したレフイーヤさんは、フィルヴィスさんの詠唱に続き砲撃の準備を進める。

この食料庫を目指していたレフイーヤさん達は僕等がここに入った時と同じように緑壁の門を破壊して侵入して来た。

変容したダンジョンの有り様にレフイーヤさん達は胸騒ぎを覚え、足を大いに逸らせてここまで急行した。

先行していた僕等の足跡を示すように地面に落ちていた水晶の欠片、そして倒されたモンスターの死骸を辿れば、この大空洞に辿り着くのは容易だった。

そこで繰り広げられているローブの集団と食人花のモンスターに攻囲されている冒険者パーティの光景が飛び込んでくるなり、ベートさんは悪態をつきながら戦場へ走った。

ひとまず食人花のモンスターに攻められているパーティを助太刀するようだった。

ベートさんの速攻の判断に従いフィルヴィスさんは支援射撃を放ち、ほぼ同時に白銀のブーツがモンスターを豪快に蹴り飛ばす。

驚く冒険者パーティの視線を一身に浴びながら、ベートさんは敵勢を駆逐し始めた。

「帯びよ炎、森の灯火。撃ち放て、妖精の火矢。雨の如く降りそそぎ、蛮族どもを焼き払え!!」

「!?み、みんなっ、逃げてっ!?!」

襲いかかってくる者は全てベートさんの敵と認識された。

雄叫びを上げて飛びかかってくるローブの男達は妙なマネをすることも許されず、蹴りと拳によって吹き飛ばされ一撃で昏倒させられる。

一方でレフイーヤさんのもとに近付こうとする食人花のモンスターは、詠唱を奏で囷も務めるフィルヴィスさんの手によって撃退された。

詠唱が完成したその瞬間、足もとの山吹色の魔法円が強い光を放つ。

ぱつと振り返ったメリルさんは、目の色を変えて叫んだ。

レフイーヤさんが使った魔力の規模にメリルさんは震え上がる。

メリルさんの警告によってルルネさん達は退避していく。

「ヒュゼレイド・ファラーリカ」!!」

ドドドドドドドドドドドドドドドド

そんな中、同じ魔導士に恐れられるほどの砲撃魔法をレフイーヤさんは解放した。

火炎の豪雨が降りそそぐ。

放たればモンスターの大群を一掃する広域攻撃魔法が戦場を揺るがした。

射程距離を限界まで拡大した最高出力。

火矢に当たるまいとローブの集団は必死に逃げ惑い、食人花を置いて効果範囲内から間髪離脱していく。

弧を描く大量の魔法弾は大空洞の五割もの空間を覆い、長大なモンスター達をまとめて撃滅してのける。

全ての者の視界が、赤く輝いた。

第76話・「白髪鬼（ヴェンデッタ）」オリヴァス・アクト

「なっ」

ガバッ

「!？」

白づくめの男は展開された凄まじい広域魔法に驚いていた。

照準からそれた流れ弾が男の目の前に何発も着弾し、破碎する地面から衝撃波から空いている片腕で顔を庇う。

その出来た際にアスフイさんは僕を抱えてその場を離脱。

ドドドドドドドドドドドドドドドドド

「!？」

男はそんな僕等を追おうとしたが、一段と大きくなる砲撃音と閃光が炸裂し、踏み止まる。

僕やアスフイさんからその視線から外し、新たな侵入者であるレフイーヤさん達に目を向け、意識を割いた。

◆◆◆

「はあっ、はっ・・・ここは、一体・・・？」

「複数の勢力が入り乱れているのか・・・？」

そして、モンスター群れを全滅させたレフイーヤさんは、杖を下げてあらためて周囲を見回した。

緑肉に包まれた空洞に、大支柱へ寄生した三輪の巨大花。

魔法によって大きく抉れた地面は不気味な音を立てて修復されていく。

天井と壁面は数え切れない量の蕾で埋めつくされており、今もまた極彩色の花が開き、ずるりと食人花産まれ落ちた。

この蕾全てが食人花のモンスターと察するレフイーヤさんは顔色を変えつつ、この植物の迷宮に対する疑問が募る。

そして、周囲に転がる多くの人の死体に、息を呑んだ。

焼死した多くの亡骸、冒険者の一団、モンスター。

レフイーヤさんの隣で眉をひそめながらフィルヴィスさんが声をこぼす。

「お前・・・確か、レフイーヤ!？」

「えっ、ルルネさん!？」

レフイーヤさんの名を呼んだルルネさんに気付いたレフイーヤさんはルルネさんのもとに駆け寄る。

リヴィラの事件の際に面識を持った相手は、仲間とともにその全身を傷だらけにしていた。

「どうして、貴女がここに」

「おいつ、アイズはここにはいねえのか。答えろ」

そう尋ねようとするレフイーヤさんの声を遮って、横から割り込んだベートさんがルルネさんに詰め寄った。

片膝をついた姿勢のルルネさんは睨み付けられ、びくつと耳と尻尾をはねさせる。

「け、【剣姫】はさつきまで私達と一緒にいたんだけど・・・分断させられて」

「ああ？分断?？」

「まったく、忌々しい」

そこに白づくめの男の声が響く。

「このわけわかんなくなってる食料庫も、あの食人花のモンスター
のことも、きつとあいつが知ってる筈だ！きつと、あいつの仕業だ！」
「・・・とりあえず、あの野郎をぶっ飛ばせばいいんだな」

その男を睨みつつ、ルルネさんとベートさんは短くそう話す。

「次から次へと・・・まとめて始末してくれる！行け！食人花！」

「どきやがれ、化物どもお!!」

「ベートさん！」

白づくめの男が食人花のモンスター達に命令を下し、ベートさんが
飛び出したことで、変貌した食料庫で第二の攻防戦の幕が開いた。

「こっちのモンスター達は私達が何とかする！お前達も行ってやっ
てくれ！」

「僕も行く」

「よ、四葉ちゃん」

「傷は塞がってる。行く」

「・・・わ、わかりました」

レフィーヤさん達にベートさんの援護に行くように進めるルルネ
さん。

僕もアスフィさんの手を離れ、それに加わろうと思った。

まだ、ヒリヒリ傷口は痛いけど、じつとなんかしていられない。

一瞬、渋い顔をしたレフィーヤさんだったが、しっかりと頷いて
くれた。

そんなレフィーヤさんと知らない黒髪エルフの女の人と一緒に
ベートさんの後を追った。

「そこを動くんじゃねえぞ！」

「【凶狼（ヴァナルガンド）】・・・そうか、ロキ・ファミリア！【劍姫】を追ってきたか！」

白づくめの男はベートさんを見て、来たのがロキ・ファミリアからの増援だと気付く。

「っ！てめえ、アイズをどうした!？」

「私の同志が相手をしている。なに、今頃は腕でももがれ、可愛がられていることだろう」

「殺すぞ」

「違う！」

そして、その言葉を僕にもハッキリと聞こえて叫んだ。

「アイズさんが負けるはずないだろ!!可愛がられているのは、相手の方だ！」

「ふん!だとよ！」

それは、僕の勝手な願いだ。

分断される前に僕は、アイズさんに「勝ってね」って言った、アイズさんはそれに「うん」って答えた。

だから、アイズさんが勝つんだ。

「ウイリデイス、飛び出すな!援護を！」

「うおおおおおっ!!」

「ぬんっ」

近接戦闘を仕掛けるベートさんとそれに対応する白づくめの男は、恐ろしいほどの速度で攻撃と反撃を繰り返す。

まさに、互角の戦いだっただ。

「ゴアアアアアツ」

「!？」

ザアン

ザアン

その時、レファイヤさんに襲いかかろうとする二匹の食人花のモンスターをそれぞれ、黒髪エルフの女の人とクナイを手にした僕とで倒す。

「フィルヴィスさん！四葉ちゃん！」

「ウイリデイス！私とこの子でお前を援護する。魔法の詠唱を！」

「は、はい！」

「お前も行けるな？」

「うん！」

「【解き放つ一条の光、聖木の弓乾、汝、弓の名手なり】」

そこから、レファイヤさんの詠唱が終わるまで僕とその人でレファイヤさんの援護に回る。

「【狙撃せよ、妖精の射手。穿て、必中の矢】」

「・・・」

が、レファイヤさんの詠唱をする声に何か迷いのようなものを感じた。

「レファイヤさん！」

「!？」

「迷っっちゃダメだ！」

何を迷ってるのかは、わからない。

けど、今、迷ってはダメだと僕は、レファイヤさんに向かって叫ん

だ。

その言葉は、少し前の僕にも言えたことだ。迷ってたら、守りたいものも守れない。

「おい！ノロマー！」

「！」

「そのチビの言う通りだ！迷ってんじゃねえ！！来いつ、撃て！！」

「!?は、はい!!」

そこへ、ベートさんの声がレフイーヤさんに届く。

激しい攻防の中、ベートさんはレフイーヤさんに一瞥を寄こし、立ちつくすレフイーヤさんに向かって、大声で叫ぶ。

その目と視線を交わし、レフイーヤさんは決断した。

「【アルクス・レイ】!!」

「はははーそんなもの、この私に効くものか！」

レフイーヤさんは迷いを振り払い、引き絞った弓から矢を撃ち出した。た。

魔法円から光が弾け、大光閃が放たれ、一直線に伸びる光の柱に、白ずくめの男は右腕を突き出して受け止めようとする。

「!?」

「上出来だ」

が大光閃は男の目の前で曲がった。

直角に折れ曲がった矢、飛来してくる光の巨矢に、ベートさんは自分の靴を叩きつける。

ベートさんの靴は、第二等級特殊武装「フロスヴィルト」という精製金属で作られたメタルブーツで、その特殊能力は、魔法効果の吸収だ。

ずがない。

誰もがそう思った、いや、願った。

「ふははははは!!」

「なっ!?!」

が、その笑い声が僕等のその思いを打ち砕いてくれた。

「彼女に貫ったこの体が、この程度で易々と朽ち果てるはずなどない」

「なっ……」

「……お前は」

流石に無傷とはいかなかったみたいだけど、その鎧兜を外して、その下の素顔を晒した。

その顔を見て最初に反応したのは、アスフィさんだった。

黒髪のエルフの女の人もまた、アスフィさんの後を追うように反応した。

「……オリヴァス・アクト」

「!?!」

レフィーヤさんが見つめる横で、黒髪エルフの女の人は震える唇でその名前を呼んだ。

その瞬間、僕とレフィーヤさん以外の周囲の人達が目の色を変えた。

彼等の混乱がざわめきへと変わって場を支配する。

「オリヴァス・アクトって……【白髪鬼（ヴェンデッタ）】か!?!嘘だろっ!?!」

「!?!」

「だって、だって、【白髪鬼（ヴェンデッタ）】は・・・!?」

悲鳴に近い声を放ち、ルルネさんは男の顔を何度も見た。

まるで、自分の記憶を否定するように、喉から動揺した声音を絞り出す。

何もわからず取り残された僕とレフィーヤさんが拳動不審になりかけながら周囲の人達の顔を見回した。

「馬鹿な、何故死者がここにいる!?!」

「!?!」

そうしていると、アスファイさんが耐え切れれないと言うように、そう大声で言った。

張り裂けるような声が響き渡る。

言葉の意味が理解できない僕とレフィーヤさんは、鬼気迫るアスファイさんの表情に、黒髪エルフの女の人の横顔に、そしてルルネさん達の様子に、凍りつくことしかできなかった。

ただベートさんはその目を細め、白づくめの男、オリヴァスを睨み付ける。

「し、死者って・・・?!」

「オリヴァス・アクト・・・推定レベル三、【白髪鬼】の二つ名を付けられた賞金首。既に主神は天界に送還され、所属ファミリアも消滅しています」

レフィーヤさんの眩きに、アスファイさんはその動揺を振り払うように、男の情報を身構えながら声に出して連ねる。

「悪名高きあの闇派閥の使徒・・・そして、二十七階層の首謀者」

「!?!」

その言葉を聞いて、レフィーヤさんは黒髪エルフの女の人に振り返った。

レフィーヤさんの見つめる先で、女の人は顔色をなくし、立ちつくしたままだった。

「彼自身、あの事件の中でギルド傘下のファミリアに追い詰められ、最後はモンスターの餌食に……喰い千切られた無残な下半身だけが残り、死亡が確認された筈。生きていたのですか……」

「いや、死んだ。だが死の淵から、私は蘇った」

悲惨な末路を迎えたと語るアスファイさんは、目の前に存在する男の姿をまじまじと見つめて、まさに悪夢を前にしたような表情で、男に問うた。

そのアスファイさんの問いに、男は誇らしげに答えた。

体を大きく傷付けられたことが、自分を生かそうとする体の治癒力の発動が、契機だったかのように、喜びとうっとりとした表情を浮かべている。

自分の体を下から上に、手でゆっくりと撫でていった。

一変した男の雰囲気は薄ら寒いものを覚えた。

体を撫で上げる男の仕草を追って、あることに気付いてしまった。

下半身、破けた服の中。

二本の足はまるで食人花の体皮と似た黄緑色に染まっている。

そして、上半身も今も治癒が進んでいる、皮膚と血肉が抉れた胸部。極彩色に輝く結晶が、中心に埋め込まれていた。

今度こそ絶句した。

周囲のルルネさん達もそれに気付いて、顔を蒼白くさせた。

「私は二つ目の命を授かったのだ！他ならない彼女に!!」
ドクンツ

凶笑とともに目を見開くオリヴァスは、平静を失う僕等に、見せび

らかすように、胸に埋まった結晶を、極彩色に魔石を見せつけた。
背後の赤光に照らし出される男の影がとてつもなく禍々しいもの
のように思えた。

その気持ちを逆撫でするように、光の源である、石英の大支柱に寄
生するあの何かの赤ちゃんが、大きく胎動する。

第77話・前者後者の選択

「一体、何の冗談ですか……」
「……」

アスフィさんが呻くようにこぼし、僕等はうろたえた。目の前の敵は人なのか、それとも人を象ったモンスターなのかと。

「貴方は、何なんですか……?」
「人と、モンスターの力を兼ね備えた至上の存在だ!」

そして、レフィーヤさんは男に問いかけた。
「お前は、何だ」と。

男は唇に笑みをしたたらせながら、その白髪を揺らし、僕等を見下しながら高言を吐いた。

あたかもその言葉を実証するように、こうしている今も無数の傷が徐々に癒えていき、魔石が埋まっている部分も塞がっていく。

「神々の恩恵に縋るのみの貴様等が……どうしてこの私に勝てる?」
「……」

そう言っせせら笑って見せた男。
意味がまったくわからない。
人と、モンスターの力を兼ね備えた存在?
無いとは言い切れないけど、鵜呑みにしていいのかもわからない。

「……貴方は、闇派閥の残党なのですか?」
「私はあのような過去の残りかすとは違う。神に踊らされる人情ではない」

混乱する僕の耳に何とか冷静であろうとするアスフィさんの声が

届く。

アスフイさんの鋭い視線や、僕等全員の視線を浴びる男は、くだらなそうに笑い返す。

男の黄緑の目が辺りを見回した。

そこにあるのは、多くの自爆した焼死体に、爆死を許されずに微かに息が残るローブの者達。

僕等が倒した集団こそが闇派閥の残党であると、男は視線で語った。

その口振りからして、彼等とはあくまで協力関係に過ぎないということだろうか。

静まり返る空洞内。

「ここは何ですか。ここで、貴方達は何をするつもりだったのですか？」

「ここは苗花だ」

巨大花に寄生された赤い大支柱と、そして赤ちゃんの宝玉が不気味な輝きを放つ中、アスフイさんが再び口を開く。

質問を重ねるアスフイさんに、男はあっさりと返答した。

「そうだ。食料庫に巨大花を寄生させ、食人花を生産させる・・・深層のモンスターを浅い階層で増殖させ、地上へ運び出すための中継点」

「モンスターが、モンスターを産むなんて・・・聞きたいことがない」

その語る内容に、僕等は驚きを隠せなかった。

食人花のモンスターが深層出身のモンスターであること、そして何より、モンスターがモンスターを産むなんてことは、有り得ない、モンスターはダンジョンから産まれるモノだから。

ダンジョンこそがモンスターのお母さんのはずなんだ。

これは絶対だ。

神様達でさえも認めているこの世界の理だ。

「つまり、調教師である貴方がモンスターを使役し、この空間を作り出したと？」

「違う、違うぞ。私は調教師などではない」

巨大花の組成に包まれる大空洞のいずこで蕾が花開き、食人花の産声が再び聞こえてくる最中、レフィーヤさんは声を引きつらせた。語気を強める男はとうとうと語った。

「食人花も、私も、全て『彼女』という起源を同じくする同胞。『彼女』の代行者として、私の意思にモンスターどもは従う」

「目的は何？」

まるで身にあまる光栄に打ち震えるように、男は陶然たる口調で述べる。

「じゃあ、この男の目的は？」

理解できないものを前に僕は核心に迫った。

「迷宮都市を、滅ぼす」

「「「!?!」」」

男は僕のその問に目に昏い光を宿しながら、笑った。

その言葉に僕等は愕然となり、立ち竦んだ。皆が皆が息を飲んだ。

「じつ、自分が何を言ってるのか・・・わかってるのかよ?」

「理解しているとも!!」

無意識なのか、震える尻尾を片手で無理矢理握り込んだルルネさんが口を開く。

男はルルネさんの間に、歓呼した。

「私は、自らの意志でこの都市を滅ぼす!! “彼女”の願いを叶えるために!」

「「「「」」」」

それぞれの表情を浮かべる僕等に囲まれながら、声高らかに宣言する男。

戸惑う僕等に向かって、男は背後を示した。

「お前達には聞こえないか、“彼女”の声が!? “彼女”は空を見たと言っている!“彼女”が望んでいるのだ、ならば私はその願いに殉じてみせよう!!」

「「「「」」」」

広げた片腕の先にあるのは、背後の大支柱、宝玉。

男の声の高さはとどまることを知らない。

病的なまでに肌白い顔に高揚した笑みが浮かぶ。

要領を得ない言葉を連ねるその姿から、はつきりとわかることがあるとすれば、それは男の“彼女”に対する忠誠と、妄執だった。

「地中深くで眠る“彼女”が空を見るには、この都市は邪魔だ!大穴を塞ぐこの都市は滅ぼさねばならない!愚かな人類と無能な神々に代わって、“彼女”こそが、地上に君臨すべきなのだ!!娯楽だと笑い、生を尊ぶなどと抜かし何もしない神々とは違う!“彼女”は私に二つ目の命を、慈悲を与えてくださった!私は選ばれたのだ、他ならない“彼女”に!!私だけが、私達だけが“彼女”の願いを叶えられる!“彼女”の望みは必ずや私が成就させてみせる!!“彼女”こそが、私の全てだ!!」

「「「「」」」」

一気に言葉をまくし立てる男は嘲りと、敵意を孕ませながら僕等を見た。

悲願を語る男の姿を見て、僕は思った。

「狂っている」って

男の言う、二つ目の命を授けた「彼女」という存在を、彼は盲目的なまでに信仰しているんだ。

「御託はいい」

「！」

不意にベートさんが唾を吐く。

「とにかくめてめえは大人しくくたばれ。……どうせ、もう碌に動けやしねえんだろ」

「……」

ベートさんは心底くだらなそうにしながら、周囲から一步步み出た。

ベートさんに指摘され口をつぐむ男。

なるほど、今の長い口上は体力回復の時間稼ぎだったと言うことか。

自己治癒に多大な魔力と生命力を使用し、先程までの動きはできないと、ベートさんはそのように察知したんだ。

「くっ、見抜いていたとは。恐れ入る。私を生かそうとしてください

る「彼女」の加護は、未だこの身には過ぎた代物……貴様の言う通り、今の私は碌に動けん。……私はな」

「……私は?……!?!」

そのベートさんの読みを認める男。

しかし思惑を看破された事実とは裏腹に、男は不敵な笑みを作って

腕で顔を覆いながら、どうにか発生した衝撃波に飛ばされないように踏ん張る。

地面が粉微塵に弾け緑肉が飛沫となって降りそそぐ中、舞い上がった灰煙の奥でその巨体は傲然と存在していた。

階層主を優に越える大きさの巨大花のモンスターに僕等は戦慄する。

そして、僕はその巨大花のモンスターの現れ方に不思議な感覚を味わった。

有るはずが無いのに、似た光景を見たことが有る気がした。

「蹴散らせ」

「!?!」

男の命に従い、巨大花が動いた。

食人花モンスターののように首を高くもたげることでもできない超重量の体をミミズのごとく蠕動させ、周囲の人達にまとめて襲いかかる。

迫りくる濃緑の巨大な体に満身の力で回避行動を取る。

これほどまでに巨大な相手に半端な行動は許されない。

地面を蹴って、地面へ頭から飛び込み、背を殴りつける風圧によってごろごろと勢いよく転がった。

周囲でも似たような光景が広がる。

巨大な体が蛇行するだけでそれは僕等を殺しうる必殺となった。

「こっちの攻撃、効くのか、コレ!?!」

「.....」

モンスターの巨体から幾多も伸びる鳶の触手をかわしながら、ルルネさんは喚く。

それもそのはずだ、ネリーさんが逃げ惑いながら魔剣を振り抜いて炎刃を浴びせるが、モンスターは意を介さない。

弾け飛び炎上する体皮に構うことなく、仮借のない蛇行の攻撃が行される。

他の人達も武器を抜いて斬りかかるが、絶え間ない蠕動が何度も振り落とした。

魔法で攻撃しようとするも、防御不能の長大な鳶の触手が振り下ろされ、あるいは生まれ落ちている食人花モンスターの襲撃を受ける。詠唱する時間さえまならない。

混乱の一途を辿る戦況が連携を阻んだ。

「糞が!!」

ドカツ

跳躍したベートさんが上空から蹴りの一撃を見舞う。

なけなしの魔剣を使用した強烈な一撃に、巨大花の体の一部は大きく爆ぜるが、それも焼け石に水だった。

モンスターは痙攣して苦しむ素振りを見せるものの、致命打には遠い。

動きの速度や攻撃そのものは大したことはないが、質量と規模が違い過ぎる。

まともに戦うのが馬鹿馬鹿し敵に、ベートさんは舌打ちを放った。

「ふははははははははははっ!? 行け巨大花、この神聖な空間に足を踏み入れた冒険者どもを根絶やしにしろ!!」

「……」

戦場を傍観する男の高笑いが響く。

未だ二体の巨大花を手の内に残す男の余裕は微塵も崩れなかった。全身の傷も完璧に塞がりゆっくりと体力の回復を待つ中、周囲の食人花モンスターを使役して僕等に襲いかからせる。

一方的な戦闘の光景を男は愉悦の表情で眺めた。

「オリヴァス・アクト！」

「……？」

そこへ、怒りの声が投げられた。

男が振り向いた先には、レフィーヤさん達と一緒に来た長い黒髪のエルフの女の人。

「あれだけの惨劇を引き起こしていながら、今日までのうとうと生きていたのか、貴様は!?!お前のせいで、仲間はず……私は!!」

「……ああ、お前もあの計画の生き残りか」

「よくも、よくも!?!」

その人は男に射殺さんばかりの視線を向ける。

それはまるで仇を見るようなソレだった。

「私はあの計画を画策したのと同時に、被害者である。一度は死に果てたのだからな。ようやく神の悪い夢から目が醒めた……痛み分けといこうじゃないか」

「ふざけるなっ!!」

男の戯言に、その人は大喝する。

その手足は震えていた。

怒りの奔流がその体から吹きこぼれ、心さえ千々に乱れる。

理性の暴走に歯止めがかからない。

短剣を失った右手は拳を作り、左手は残った短杖をあらん限りに握り締める。

仇の男を討つことのできない今の己の力を心底呪うように。

「お前だけは……!」

「貴様をあしらってやるのも一興だが……同胞を放っておいていいのか、エルフの娘よ」

「っ」

そんな殺意溢れる眼差しを、心地良さそうに受け止めていた男は、すっと視線を彼女の背後へとずらした。

そこでは、暴れ回る巨大花モンスターに圧倒される僕等に紛れて、レフイーヤさんが、巨大花と食人花の攻撃に板挟みになっていた。それを見て、苦渋に歪む。

皮肉にもその言葉が、暴走していた彼女の理性を取り戻した。

「仲間が死んだらしいが・・・今度は、あのエルフも見殺すのか？」
「・・・」

激しい攻撃によって全身が擦り切れているレフイーヤさんの姿が目に入り込む。

前方と後方、はっきりと道が分かれた。

前へ踏み出し、増悪の炎に駆られるまま敵を討ち滅ぼすか。

後ろへ手を伸ばし、今にも断崖から落ちそうな同胞を助け出すのか。

そして、彼女が選んだのは・・・

「くそっっ!?!」

ダッ

しばし立ちつくした彼女は、次には、嘲笑う男に背を向けて、戦場へ駆け出した。

第78話・起死回生

ザッ

「くっ」

迫る巨大花の触手をクナイで薙ぎ払う。

正直、武器に心もたなさを感じる。

もう、僕の【幻書の術】の中は盾とかしか残っちゃいなかった。

ガッ

「っっっ！」

そんな僕の背後の方で、レフイーヤさんが迫る鞭を杖で受け流しているところだった。

服は僕と同じく、ボロボロだ。

それでもレフイーヤさんは何とか触手の雨を切り抜けていく。

レフイーヤさんが詠唱がままならない状況下でも自分の身を守ることができているのは、ひとえにリヴェリアさんの指導の賜物だった。

暴発が許されない魔導士はいかなる時も動じてはいけない、大木の心を持って、というリヴェリアさんの教えを反復し、沈着冷静の精神を己に強要する。

向かってくる攻撃をよく見て、叩き込まれた杖術を發揮さえすれば、レフイーヤさん単独でもモンスターの攻勢を凌ぐことが可能だった。

後は、流石に食人花モンスターの攻撃は見飽きている。

最近になって何度交戦したかわからないモンスターの鞭を先読みしながらレフイーヤさんは回避を繰り返した。

風圧を発生される巨大花の触手の薙ぎ払いに地面に倒れ込んでかわすと、獲物に夢中になっていた食人花モンスターが巻き込まれあつけなく吹き飛ばす。

「!?」

「レっ!」

痛む体と切れかかっている呼吸を堪えてレフイーヤさんは身を起こした。

「不味い」と思った。

このままだとレフイーヤさんが。

が、僕も目の前の食人花モンスターの群れで手一杯で助けに行けなかった。

ゴオオオツ

「!?」

その瞬間、黄金の雷条が通り過ぎる。

「ウイリデイス!」

「フィルヴェイスさん!」

その雷条はレフイーヤさん達と一緒に来たエルフさんの魔法だった。

魔法で食人花の群れをまとめて焼き払ったその人がレフイーヤさんに駆け寄った。

一度はぐれてしまった彼女を案じていたレフイーヤさんは、その顔を目にして安堵の息を漏らす。

「無事か!」

「はい、ありがとうございます」

立ち上がったレフイーヤさんを見て、黒髪のエルフの女の人もまた安心したように目を細めた。

「武器はあるか」

「はい」

「！」

その人に求められレフィーヤさんは僕にも声をかけてくれ、携帯していたバックパックの蓋を開ける。

その人は右手を筒型の袋に突っ込み、一振りの片手剣を抜き出し、鞘を捨てて、レフィーヤさんを守るように立ち回りを演じる。

「どうする、アスファイ〜!？」

「・・・千の妖精に魔法をブツ放してもらいたいところですが、この巨体相手では前衛壁役がいようが意味はありません」

そして、ルルネさんが手に負えない巨大花モンスターに対し悲鳴を上げていた。

アスファイさんの顔にも焦りが表れる。

アスファイさんの言う通り、大人数で盾を並べたところで、巨大花の蛇行の前では全てがひき潰される。

防ぐ防げないという次元の問題ではない。

防戦しているレフィーヤさんを見やっていたアスファイさんは前を向く。

「やはり、魔石を狙うしかないですね」

魔石を破壊すれば灰の山となる。

長期戦では泥沼化の一途を辿るだけだ、モンスターの核を直接攻撃するしかない。

問題は魔石がどこに埋まっているのかだ。

基本通り体の中央か、あるいは食人花モンスターと同じで先端の花頭部分か。

ベートさん渾身の回し蹴りが巨大花の進路を変えるのを目にしながら、モンスターの体に視線を走らせる。

もし発見できたとして、あの分厚い肉皮を貫通して魔石まで攻撃が届くのかってことになる。

が、そんな疑問が出たところで、やらなきゃならないことは変わらないわけだ。

「無駄だ」

抵抗を続ける僕等を、オリヴアスは一笑に付す。

食料庫の大支柱に寄生することでどこまでも肥大化する巨大花のモンスターはもはや他のモンスターとは規模が違う。

一朝一夕で撃破できる個体ではない。

僕等が攻略の糸口を見出だせない内に引導を渡してやろうと、オリヴアスは黄緑の目を細め、新たな巨大花の召喚を行おうとする。

そして、片腕を頭上へ上げようとした、間際だった。

ドオオオオオオオオオオオオン!

「!!?!」

大空洞の壁面一角が爆発した。

ドウウンツ

ガガガガガガッ

「ぐっっっ!!?!」

「・・・あの人・・・ってことは」

何筋もの煙を引いて飛び出してきたのは、あの赤髪の調教師だった。

吹き飛ばされたかのように凄まじい勢いで壁を破壊してきた赤髪の調教師は、背中から叩きつけられ、地面を削っていく。

矢のごとく進む赤髪の調教師の体は、巨大花が暴れる戦場から離れた地点で止まった。

呻き声を上げ、剣身が折れた紅剣を放り捨てる。

体中を傷まみれにしながら、消耗を物語るようにその場で片膝をついた。

「はっ、はあっ……!？」

「あっ！」

赤髪の調教師が粉碎した壁面から次に姿を現したのは、アイズさんだった。

アイズさんもまた軽装と全身に裂傷を負いながら、盛大に肩で息をしている。

ともあれ、その姿を見て、僕の尻尾は僕の気持ちを最大限に表すようにブンブンと音がなるほど振れた。

「レヴィス!？」

「アイズさん!？」

オリヴァスとレフイーヤさんが同時に叫んだ。

銀色のサーベルを提げ大空洞に踏み込んだアイズさんは、周囲の光景、そして、僕等の姿に驚いた顔を見せたが、すぐに自分は大丈夫だと言うように頷いて見せてくれて、その返事代わりに僕も頷き返した。

傷があるとはいえ、アイズさんの無事な姿に、心底ホツとした。

レフイーヤさんなんて、目が潤んでるし、戦い続けるアスファイさんやルルネさん達も、ベートさんも一笑を浮かべた。

「……口だけか、レヴィス。情けない」

「……」

赤髪の調教師の女とアイズさんを観察していたオリヴァスは、味方であるはずの赤髪の調教師の女に嘲笑を送り付けた。

響いた声に、赤髪の調教師の女はその目で彼の方角を一瞥する。

アイズさんもまたその視線をオリヴァスに向ける中、オリヴァスの笑みはその眉間に皺を集める。

「この小娘が『アリア』などと……認めるものではないが、いいだろう。彼女が望むというのなら」

「……」

まるで、アイズさんに嫉妬でもしているのか、言葉の端々に棘があるように思えた。

「巨大花」

バキバキバキツ

ドオオオオオオオオオオオオオ

「!？」

顔を酷く歪めたオリヴァスは、片手を真上に上げた。

すると、その背後にある大主柱である石英に取り付いていたモンスターが巨体を揺すり、体皮を引き剥がしながら倒壊する塔のごとく地面に倒れ込んだ。

周囲一帯の地面を砕きながら、ぞるつとその巨体を蠕動させる。

大主柱に巻き付き残った巨大花に見下ろされながら、その花頭を目前にいるアイズさんへ向けた。

「アイズさん!？」

「くそっ!？」

召喚された二体目のモンスターに、レフィーヤさんは叫声を上げ、僕は、悪態をついた。

救援に向かいたくても、オリヴァスの差し金か、モンスターが蔦の振り回し僕等の進路を阻んだ。

アイズさんのもとへ行くことができない。

「持ち帰るのは死骸でも構うまい」

「おい、止めろ」

「止めるなよ、レヴィス。貴様の手には負えない相手を片付けてやる」

モンスターに僕等を足止めさせ、オリヴァス自身もアイズさんのもとへ近づく。

赤髪の調教師の女同様、消耗している今なら殺すのも容易いと、悪辣な笑みを向けた。

膝をついたまま投げられる赤髪の調教師の女の呼びかけに、オリヴァスは取り合わない。

言うことを聞かず、くすんだ白髪の男は標的のアイズさんのみを睨んだ。

視線の先で、蛇のようにゆっくり這い寄ってくる濃緑の巨大花に対し、アイズさんが静かに銀の剣を構える。

巨大なモンスターと比べてあまりにも小さい一振りの武器に、オリヴァスはせせら笑った。

「死ね、【剣姫】!!」

「馬鹿が」

ぱつと片腕を突き出し、オリヴァスは吠える。

使役された巨大花は一気に加速し、地面を抉り上げながら真正面から突撃した。

その光景に、赤髪の調教師の女は舌打ちを放つ。

「行くよ。【目覚めよ（テンペスト）】」

ヴオオオオオオ

ブンツ

そして、愛剣に呼びかけるアイズさんは、唇に詠唱を乗せた。直後、呼び起こされた風の大渦が周囲の空気を押しつける。

目前に迫りくるモンスターに対し、アイズさんは最大出力の暴風を愛剣に付与した。

次には、一閃。

大薙ぎされた斬撃が、巨大花の首を両断した。

「.....」

ズズズズズズ

その光景に誰もが声を失った。

剣身が纏った風の力、放たれる斬撃の光、咆哮した神風。

真一文字に迸った風の剣によって、巨大花の首が斬り飛ばされ、上空を飛翔する。

僕等の目に映る、宙を舞う巨大な肉塊。

血を散らすモンスターの花頭は弧を描き、やがて轟音を放って地に墜落した。

「アアアアアアアアアアアアッ!!」

「!?!」

まるで、その風の力に反応するかのように、大支柱に寄生する宝玉の赤ちゃんが叫喚し、付着した石英の表面でもがき始めた。

そのお陰か、それまで引き伸ばされていた体感時間が解除された。

一撃だ。

一撃で、仕留めた。

凄い、凄すぎる。

あれほどの超大型モンスターを、剣の一振りで。

頭部を失い、活動を停止した巨大花の巨体。

横たわるモンスター死骸の前でアイズさんが剣を振り鳴らすと、風の猛り声が轟き渡る。

グラツ

「なっ、なあっ……なあああ……!!?」

ドサツ

一步、二歩と、オリヴァスはそこから後退り、尻餅までついて、肌白い顔を一層白くさせる。

絶えず有していた余裕は脆くも崩れ落ち、巨大花を一瞬で失った動揺が全身という全身を焦がしているかのようだった。

「っ！ヴイ、食人花……っ!?」

ドバツ

そして、オリヴァスは咄嗟に手を振り上げ、悲鳴を上げるように叫んだ。

その命に従い、残っている食人花が全てアイズさんのもとに進路を取る。

「レフイーヤさん」

「は、はい」

「武器、まだ有る!」

「はい、あります!」

僕等を置いて殺到してくるモンスター達に、風を味方につけるアイズさんは正面から斬りかかった。

一方的な殲滅戦が開始される中、僕は、レフイーヤさんのもとに向い、武器が有るかを聞いた。

開けられた筒型のバックパックの蓋を開け見せてくれた。

「借りる」

「はい」

中には、僕の身長と同じくらいの高さの剣が入っていた。

僕はそれを借りることにした。

そうしている間に、アイズさんに殺到していった食人花のモンス
ター達は、アイズさんの風に複数が先程の巨大花のように切断され、
頭上を舞い、瞬殺され、あるいは八つ裂きにされていった。

そんなアイズさんの戦い振りを見ていたら、体の奥にうずうずした
モノが生まれて、止まらなかった。

「ちっ・・・差が開けられた。おい、さっさと片付けるぞ!」

「おうー!」

そして、ベートさんは不機嫌そうに呟き、顔を振り上げて周囲へ声
を張る。

言われなくたってそのつもりだ。

そう思っ、僕も声を張って答えた。

それは、僕だけじゃなく、声には出さなくても、アイズさんの登場
と戦い振りにこちらの士気は大いに上がった。

逆境をはねのけ、その声に応じ、優秀な連携を繋げ始める。

僕等は、僕等の足止めをする巨大花を攻め落とすにかかった。

「皆、魔石があるのはやっぱり頭の方だ!花の部分を狙え!」

「わかった!」

「よ、四葉ちゃん!」

そこにいつの間にも移動したのか、アイズさんが斬り飛ばした巨大花
の頭部を調べ終えたルルネさんがその情報を伝えてくれる。

それに従い、巨大花の懐に向かって疾走した。

「私が行く！」

「フィルヴィスさん!？」

「狼人、あの子と穴を開けろ！」

「・・・ちっ、指図するんじゃないっての！」

黒髪のエルフの女の人はレフイーヤさんの声を振り払って疾走、僕の後を追って巨大花の懐に肉薄した。

ベートさんと視線を交わし合い加速するとあっという間に僕に追いついた二人。

二人の間には険悪な空気があったけど、僕を含めて、それぞれの狙いを察して、連携を仕掛けた。

先行する僕とベートさんが邪魔な触手を斬ったり、蹴り払い、僕等が確保した道をフィルヴィスさんが続く。

僕等はあっという間に巨大花の体皮を駆け上がり、頭上へ、ルルネさんが指示した花頭部分に到達し、僕とベートさんは跳躍した。

「絶空!!」

「おらっー！」

ドボツ!!!

空中からの僕の絶空とベートさんの踵落しがモンスターの体皮を
抉る。

広がった深い傷口に向かって、すぐさま黒髪のエルフの女の人
も飛び込んだ。

「一掃せよ、破邪の聖杖」! 「ディオ・テウルソス」!!」

ギバツ!!

詠唱を一瞬で終わらせ、眼下の傷口、体内へ続く穴に短杖を突き刺す。

そこから放たれた雷が巨大花の体内へ叩き込まれた。

不自然に何度も痙攣するモンスター^①の体皮の下がうつすらと発光し、皆が刻んだ傷から電流がこぼれ落ちる。

大量の精神力が支払われた最大威力の暴雷が、モンスター^①の巨体から“核”の在りどころを探し回った。

ブワッ

「よしっー」

巨大花の動きが停止したのは間もなくだった。

体内の魔石が電撃に焼きつくされ、断末魔を発さないまま、巨体が膨大な灰へと果てるのを見て僕は、小さくガッツポーズをとった。

文字通り崩れ落ちた巨大花のモンスター^①に、ルルネさん達からも歓呼の声^②が打ち上がった。

第79話・食人花の怪物の宴（モンスター・パーティー）

「ば、馬鹿な・・・!?」

「・・・」

「・・・ぐう・・・ありえん、負けるなど、屈するなどっ・・・ありえるものかア!?」

手札をあつという間に失ったオリヴァスは、とうとう精神の平衡が崩れ、地面を蹴りつけアイズさんに突進した。

「ーー」

「~~~~~つ!?」

死角を突いた奇襲。

魔石から与える人智を超えた怪力を全身からかき集め、アイズさんを絞め殺そうとする。

だが、それまでのベートさんとの戦闘で消耗したオリヴァスの動きは、今のアイズさんにとってあまりにも遅過ぎた。

アイズさんの金の瞳が飛びかかるオリヴァスを射抜く。

瞬く間に銀の剣が閃き、神速の斬撃が繰り出された。

オリヴァスに無数の斬閃が刻まれる。

体の各部位が繋がっているのが不思議なほど、全身から血飛沫を散らせた。

黄緑色の下半身も、そして人の上半身もズタズタにさせながら、オリヴァスは仰向けに倒れ込む。

「嘘だ・・・種を超越した私が、*彼女*に選ばれたこの私がある・・・!?」

「とんだ茶番だな」

「！」

打ち破られたオリヴァスから、呻き声が漏れる。

恐怖にわななく瞳の中に、眼前で見下ろしてくるアイズさんの姿が揺らいでいた。

再起不能に陥った男へ、アイズさんが歩み寄ろうとしたその時。

突風のような速度で赤髪の調教師の女が横からオリヴァスを助け出した。

飛び退いたアイズさんの目の前でオリヴァスの服を掴み、そのまま距離が離れた場所まで退避する。

石英の大支柱付近で止まった赤髪の調教師の女は、無遠慮にオリヴァスの体を地面へ放った。

大空洞からモンスターの姿が消え、アイズさんはもとより僕等全員の視線が残った二人の敵に集まる。

「す、すまない、レヴィス……」

「……」

ドスツ

膝をつくオリヴァスは息も切れ切れな状態だった。

流れ出る血を放置し、必死に呼吸を整えようとしている。

声を絞り出すオリヴァスに対し、赤髪の調教師の女は無言だった。

周囲では僕等が大きな半円状となり、二人は追い詰められたと言っても過言ではない。

僕等に視線を走らせる赤髪の女は、大支柱の不気味な光に照らし出され、顔の半面に暗い陰影を被っていた。

すぐに、その緑色の瞳が足もとのオリヴァスを見下ろす。

赤髪の調教師の女は無表情で手を伸ばした。

オリヴァスを立たせるかのように服の襟を掴み、片手で持ち上げる。

そして、次の瞬間。

手刀をオリヴァスの胸部に突き刺した。

「「「「!?」」」」」

「なっ・・・」

僕等は言葉を失った。

破った胸の中に埋まる手刀。

生々しい鼓動の音に合わせて溢れていく血液。

赤髪の調教師の女は顔色一つ変えず、ぐぐつ、と更に手を押し込んでいく。

オリヴァス本人は、誰よりも何が起こったかわかっていない表情を浮かべていた。

「レ、レヴィスツ、何を・・・!?」

「その目で周りをよく見ろ」

立ちつくす僕等の視線を浴びながら、赤髪の調教師の女はその血のように赤い髪を揺らす。

「より力が必要になった。それだけだ。食人花どもではいくら喰っても大した血肉にならない」

「!?」

赤髪の調教師の女は淡々と、そして、冷酷に告げた。

その言葉に何をやろうとしているのか、察したオリヴァスは凍りついた。

「まさか、よせ!?私はお前と同じ『彼女』に選ばれた人間・・・!?」

「選ばれた・・・?お前はアレが女神にでも見えているのか?」

「・・・ツ!?」

「アレが、崇高なものである筈ないだろう。お前も、そして私も、ア

レの触手に過ぎん」

赤髪の調教師の女はくだらなそうに鼻を鳴らす。

断言する赤髪の調教師の女に、オリヴァスの表情が目まぐるしく変容した。

眦を裂いた絶望の形相で、己の胸を貫いている赤髪の調教師の女の細腕を両手で握り締める。

「た、たった一人の同胞を殺す気か!? 私がいなければ、*彼女*」を守
ることは・・・!?!」

「・・・」

オリヴァスの言葉に耳を貸さず、赤髪の調教師の女は胸部に突き刺した手に力を込める。

それと反比例するようにオリヴァスの体からは力が抜けていき、赤髪の調教師の女の腕にかじり付いていた両手も、だらり、と垂れ下がった。

まるで全身の力を、核にかき集められているかのように。

オリヴァスの叫びを塞ぐように、赤髪の調教師の女は勢いよく胸部から手を引き抜いた。

その手の中に握られているのは、血に濡れた極彩色の*「魔石*」。

核を引き抜かれたオリヴァスは、モンスターのと路と同じく、あつけなく灰となって崩れ落ちた。

「勘違いするな。アレは私が守ってきた。これからも」

「・・・」

足もとに積もったオリヴァスだったものへ言葉を捨てながら、赤髪の調教師の女は振り向く。

その一連の光景を見ていたアイズさんを真っ直ぐに見据えた。
オリヴァスから摘出した*「魔石*」を口の中に含み、噛み砕く。

ぺろり、と紅い舌を舐めた。
ぐつつ、と漲る力を確かめるように右手を握り締めた。
その赤い髪もまた逆立つようにざわつと揺れる。

ドオウウンツ

「つつ!」

直後、赤髪の調教師の女は地面を粉碎し、アイズさんへ砲弾のごとく爆走した。

他の者の反応を置き去りにして、アイズさんへ剛拳を叩き込む。

真正面からの拳打にアイズさんは風が付与された剣を構え、防御。

次の瞬間には真後ろへ凄まじい勢いで弾き飛ばされた。

僕等がようやく振り向いた先で、飛びかかった赤髪の調教師の女はアイズさんと激突する。

「貴方はっ・・・!?!」

「喋る暇があるか。まだ足りんな」

驚愕に揺さぶられるアイズさんに、赤髪の調教師の女は襲いかかった。
た。

極彩色の「魔石」、灰となったオリヴァス、吸収された結晶・・・
モンスター。

オリヴァス達の正体を掴めていなかったのに、叩きつけられた断片的な情報が渦を巻いて錯綜し、やがて一つの答えへ導く。

先程まではアイズさんの攻撃に防御することが精一杯だった筈の赤髪の調教師の女は、ことごとくを見切って対応している。

「モンスターの強化種」

オリヴァスの「魔石」を喰らって明らかに強化された戦闘力に思うしかなかった。

「魔石」を摂取し力を得るモンスターの理。

「ステイタス」を宿す僕等と相反する弱肉強食の業。

つまり、赤髪の調教師の女は人の形をした怪物だっただことだ。

「くっ!!」

「な、何なんだアイツ・・・出鱈目だ」

超速の斬閃が赤髪の調教師の女の肩を切り裂く。

舞う血飛沫に構わず、腕を振りかぶり、渾身の一撃を放った。

アイズさんが間髪後退すると振り下ろされた拳が地面を砕き、円状に陥没させる。

赤髪の調教師の女は手を突き刺した地面の緑肉から、ズズズツ、と音を奏で、次には勢いよく引き抜いた。

現れる紅の大剣、地面から抜剣された天然武器。

両手に持った大剣とともに赤髪の調教師の女は突っ込み、アイズさんもまた応じるように突貫する。

衝撃と轟音を発生させ、風の銀剣と紅の大剣が真っ向からぶつかり合った。

「くっ」

「待て！ちび助!!」

第三者が立ち入る隙間もない激戦に棒立ちになっていた人達の中から飛び出すと、ベートさん、レフィーヤさん、黒髪のエルフさんが後に続いた。

「あっちもヤバイですが・・・!」

僕等が援軍に走り出していく中、アスファイさんは一人、逆方向に進路を取る。

アスファイさんが目指すのは食料庫の大支柱に発生している宝玉だ。

街の件も含め、今回の事件が視線の先の宝玉を巡って動いているのは明白だった。

オリヴァスの再三口にしていた「彼女」という存在といい、あの宝玉の赤ちゃんが事件の全てを繋ぐ鍵となる。

何としてでも確保しようと大主柱に接近したアスファイさんだった。

ドオウウン

「!?」

「「「!」」」

「なっ!?!」

が、突如、横合いから奇襲を受けた。

紫の外套、そして不気味な模様の仮面。

一体どこに潜んでいたのか、正体を隠した謎の刺客にアスファイさんは殴り飛ばされた。

凄まじい「力」、そして両手に装備された銀のメタルグローブがアスファイさん特製のマントの上から衝撃を貫通させる。

「アスファイ!」

「まだ仲間が!?!」

吹き飛んだアスファイさんにルルネさん達の足並みが乱れ、僕等もその場で止まって振り返り、仮面の襲撃者に目を見張った。

「完全ではないが、十分に育った、エニユオに持っていきけ!」

「ワカッタ」

アイズさんと戦いながら、赤髪の調教師の女はその仮面の襲撃者に向けて声を張り上げた。

襲撃者は宝玉ごと握り締め、アイズさんの風に反応し叫び続けている赤ちゃんを黙らせる。

そのまま取り付いている大主柱から強引に引き剥がした。

仮面の人物は様々な肉声が重なったような不気味な声で返事をし、

直ちにその場から離脱する。

宝玉を持って数ある大空洞の出入り口の一つに疾走した。

「逃がさないよー！」

「ルルネ、止めなさい!?!」

「くっ!?!」

絶対に逃がしちやダメだと思った。

僕は、アイズさんの援軍に行くのを止めて、逃げるそいつの方に向かった。

アスフイさんがルルネさんに大声で指示する。

歯を食い縛るルルネさんは、駆け出し、僕と共に全力で仮面の人物を追走した。

「巨大花！産み続けろ!!枯れ果てるまで、力を絞りつくせ！」

「・・・!?!」

だがそこで、赤髪の調教師の女が叫ぶ。

力任せの薙ぎ払いによってアイズさんを一度弾き飛ばし、大支柱に巻き付いている残る巨大花モンスターへ命令した。

その瞬間、大空洞が鳴動した。

赤髪の調教師の女に斬りかかろうとしたアイズさんは顔を振り上げる。

ベートさん達も、アスフイさん達も、そして僕とルルネさんも体に伝わる震動に動きを止めてしまった。

僕等、全員の視線を自分のもとへ導くように、大支柱に寄生している巨大花モンスターが震え、何かを吸い上げるおぞましい音響を発する。

光り輝く石英から養分を暴君のごとく吸収するかのよう。

ビキリッ、と結晶の大支柱にいくつもヒビ割れが走った。

伴って、けいれんを繰り返す巨大花モンスターから大空洞に広がる

触手が、太い根が、瘤のように断続的に膨れ上がり、恐ろしい勢いで脈動する。

間もなく。

天井、壁面、大空洞の全領域に存在する蕾が一斉に開花した。

「—————」

全ての極彩色の花弁が全ての食人花モンスターが、花開く。

成熟を待たず強制的に開花させられる大小様々な蕾。

ダンジョンから養分を貪り食った苗花がありつたけのモンスターの、今まさに産み落とす。

巨大花の体皮からは急速に色素が落ちて土気色に変わり、萎れるその体力がなく垂れ下がった。

枯れた花頭をがくりと折れる。

まるで世界の終わりのように色素の剥落が広がる大空洞の緑壁。

そして死んでいく食料庫の代わりに食人花モンスター達の産声が次々と響き合い、重なり合う。

耳を震わす怪物の斉唱に、頭上を見上げている僕の顔からどんどん血が引いていき、生気が消え去っていく。

これは、まさか、と僕等は心の声を一つにする。

醜悪な牙を晒す食人花モンスターが咆哮し、僕等目がけ、一斉に天井と壁面から落下した。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

「つつ!!」

地響きの連続を引き起こしながら食人花モンスターが地面から身を起こす。

呆然とする僕等の全方位から、モンスター達は怒涛のごとく僕等に襲いかかった。

その数の暴力に僕等は声にならない悲鳴を上げる。

僕等の視界一杯に占拠する毒々しい極彩色の花、花、花。

前も左右も後方も、頭上でさえも黄緑の体がない地点は存在しない。

破鐘の雄叫びが頻りに交錯し、一箇所に住座ればたちまちモンスター軍の軍勢に呑み込まれてしまう。

苗花を犠牲にして産まれ落ちた食人花モンスターの大群は広大な大空洞を埋めつくした。

こちらの戦意を折ってのけるほどの夥しいモンスターの群れ。数百に上る総数。

通常の怪物の宴やインクラッドでのモンスターを呼び寄せるアラームトラップにはまった時とは比較にもならない。

もはや桁が違う。

「くっ・・・!？」

出入り口の一つに飛び込んだ仮面の人物は、地獄の壺と化した大空洞を後にした。

僕の視線の先で通路口の奥へ姿を消し、まんまと脱出してのける。

第80話・悪夢と悪夢

「無理無理無理っ、無理だつてえ!!」

「離れるなア、潰されるぞ!?!」

突っ込んでくる大量の食人花モンスターの体と押し寄せ無数の触手にルルネさんは泣きながら逃げ惑う。

ファルガーさんが喉が張り裂けんばかりに叫び散らす、それもモンスター達の波にかき消されてしまった。

食人花モンスターは手当たり次第暴れ回った。

冒険者を索敵すればすかさず蛇行からの体当たりを敢行し、あるいは触手の雨を降らす。

モンスター同士の盛大な自爆、同士討ちもそこかしこで発生する中、まだ息のあったローブの男達は真っ先に補食された。

「あああああああああああつ!!」

「つつ!?!」

腹の底にまで響く断末魔を散らしながら闇派閥の残党は大空洞から完全に消す。

色違いのローブの頭目も、あっさりと丸呑みされた。

散らばった僕等にモンスターが殺到し、局所的な戦闘が巻き起さる。

ベートさんを始めとした前衛の実力者が奮闘し、大型武器を振り回して片っ端から殺戮してのけるが、一向に数が減る気配はない。

場は大混戦に陥った。

「食人花!」

「つつ!?!」

一方、アイズさんは赤髪の調教師の女とモンスターの挟撃に晒され

る。

使役される食人花モンスターを片手間で葬っては赤髪の調教師の女の大剣を防御し、打ち合ったかと思えばすかさず食人花モンスターの横槍が入った。

途切れることのない敵の包囲網は決してこちらを逃がそうとしない。

捨て駒を用いた赤髪の調教師の女の一撃離脱が、魔法を発動させるアイズさんを強引に抑え込む。

アイズさんも、そして僕等も、お互いに救援へ向かえず隔離された。

「ー!!」

「なっ!?!」

何十四目とも知れない食人花を、風の斬撃でまとめて断ち切った時だった。

食人花モンスターの体の陰に隠れていた赤髪の調教師の女が、モンスターの体越しに斬り上げを放つ。

食人花モンスターは両断して現れた不意の一撃にアイズさんは防御をし損ね、愛剣を手の中から弾き飛ばされてしまった。

回転しながら宙を舞い、彼方へ飛んでいく愛剣。

アイズさんの体が焦燥に焼かれる。

剣士であるアイズさんから、剣が失われた。

愛剣を手もとから吹き飛ばされたアイズさんの戦闘能力は目に見えてがた落ちする。

そして、その機を見逃さず、赤髪の調教師の女は一気に攻め立てた。

「逃がさん」

「~~~~~っ!?!」

赤髪の調教師の女を振り払って剣を回収に行こうとしても、回り込む食人花モンスターがそれを許さない。

一瞬でも足止めできれば紅の大剣がアイズさんを守る気流を削った。

不慣れな格闘戦を強いられ、瞬く間に劣勢に立たされる。

悲鳴を上げる周囲の仲間と同じように、アイズさんも窮地に追い込まれていった。



「くっ」

モンスターの攻撃は熾烈さを増していた。

何とか大空洞の中心地に集結した僕等は必死に防戦を重ねる。

無理矢理産み落とされた食人花モンスターは成体に至っていないことが唯一の救いだっただ。

それぞれ大きさにもばらつきのあるモンスターは通常の成体と比べ能力が低い。

と言っても、絶体絶命であることには変わりはない。

四方八方を囲まれ出口さえ見えない現況はまさに悪夢だった。

モンスターの激しい吠声の後に、冒険者がまた一人、地に沈んでいく。

「あ、ああっ・・・!?!」

この乱戦にあつて、レフィーヤさんを始めとした魔導士達は力を僅かも発揮できずにいた。

食人花モンスターの大量の真ん中での詠唱は自殺行為、壁となり護衛してくれる者もない。

自分の身を守ることで精一杯であるレフィーヤさんは非力な己を呪う。

誰もが死力をつくしていた。

血だらけの虎人は咆哮し、エルフの戦士は剣を歯で噛み締めて振り

回し、武器を失ったドワーフは砕けた拳をモンスターに叩きつける。アスフィさんとルルネさんと僕も敵を攪乱しては斬撃を見舞い、足を止めようとしないうべートをモンスターを何匹も屠っていく。

声、いや悲鳴を掛け合って連携をするその勇姿が、レフィーヤさんを苛む。

“どうして、私は”。

あの勇ましい彼等と肩を並べることができないのか。

ともに剣を執ってモンスターを倒し、盾で仲間を守ることができないのか。

逃げ回り、助けられ、立ちつくし。

魔法を歌えば、彼等の足さえ引っ張って。

何もできない。

胸に抱いている杖が、これほど重く感じることは今までなかった。

（私は、リヴェリア様みたいなのに、フィルヴィスさんみたいにつ…！）

美しく圧倒的な王族が心の中に浮かび、そして今戦っているエルフの少女が視界を過る。

憧れの彼女達と同様、追いつきたいと必死に願っている最強の魔導士の背中では未だ遙か遠く、あの美しい魔法剣士にも手が届かない。

自分もあのフィルヴィスさんのように戦えたら。

剣を持って魔法を奏で、モンスターを退けることができたなら。

モンスターをまた一体倒したフィルヴィスさんを視線で追うレフィーヤさんの胸に、ベートさんの言葉が蘇る。

“てめーは、一生お荷物だ”

見下されたあの言葉にもう悔しさすら抱けず、レフィーヤさんは無力感に打ちひしがれた。

「アイズ…！」

「アイズさん…！」

レフィーヤさんが苦悩していたその時、ベートさんと僕はアイズさ

んを見やる。

たった一人、赤髪の調教師の女と食人花モンスターに襲われるアイズさんの姿に、顔を歪ませた。

耐久力が落ちた未成体の食人花を蹴撃で撃砕し続けていたベートさんは、ばつと視線を戦場に巡らし、そして、レフィーヤさんを見つけて出した。

「おいっ！」

「え……？」

ベートさんはなり振り構わず、立ちつくしているレフィーヤさんのもとに駆け寄った。

「俺はアイズのところに行く、ここはてめーが何とかしろ!!」

「で、でもっ、私は」

胸ぐらを掴まれ吠えられた言葉に、レフィーヤさんの肩が揺れる。

「てめーは雑魚だ!!あの餓鬼にだって劣る。だかな、そのアホみてえな「魔力」だけは認めてやる!追いつきたいだの雑魚のきまり文句なんて抜かしてんな!俺達に吠え面をかかせてみせろ!」

「!?!」

レフィーヤさんの声をみなまで言わせずベートさんは怒声を叩きつけた。

レフィーヤさんは目を見開き、ベートさんの目に見据えられた。

「あのクソババアを、越えてみせろ!!」

そして、はつきりそう言った。

「リヴェリア・リコス・アールヴを、超えてみせろ」と。

それまで誰からも言われなかった荒唐無稽な目標を。

アイズさんやテイオナさん、テイオネさんさえも言わなかったその言葉を。

ただの発破ではない、強さを飽き足らず求め続けている、ベートさんの本心に触れる。

「お前はそれでいいのか」

彼から与えられた、もう一つの問いかけがあった。

弱者に常に苛立っているベートさんの眼差しに、声に、レフィーヤさんの全身が発熱する。

胸に迫る真つ赤な感情。

心の中で震えているのは焚き付けられた熱情か、それとも目の前のベートさんを見返してやりたいと願う悔しさか。

知れず拳が握り締められたレフィーヤさんを、ベートさんはどんつと突き飛ばした。

ベートさんはもう何も言わず、笑みを見せず、背を向けて駆け出していく。

アイズさんのもとへ行くことの出来るその強い背中を、レフィーヤさんは数瞬見据えた。

その後ろ姿を目に焼き付け、次には柳眉を逆立てて。

冒険者とモンスターの叫喚に囲まれながら、レフィーヤさんは己に覚悟を刻んだ。

「私を守ってください!!」

「!？」

戦場を貫く大声でレフィーヤさんは吠えた。

彼女に許された唯一の杖を握り締め、突き出し、魔法行使の構えを周囲に見せつける。

砲撃の決行を、僕等の目に叩きつけた。

「ま、守るって、どーすんだよ!?半端な魔法なんかじゃあ・・・!」

「私を信じて!!私は、魔導士です!私を守ってくれる貴方達を救ってみせる!!」

「わかった!」

動じるルルネさんにレフィーヤさんは高い声音をもつて言い切つてみせる。

そこに有るのは、普段、僕が見ている彼女の姿ではなかった。

その姿に、今のこの状況を変えられるとすれば、彼女しかないと思つた。

というか、仲間を信じないで何を信じると言うのか、僕は、レフィーヤさんに向かって吠え、真つ先に彼女の元へ動いた。

「全員、千の妖精のもとに!!彼女に全てを委ねます!」

「っ……!」

そして、アスフィさんもあの黒髪エルフの女の人も動いた。全員がモンスターを押しつけ終結する。

「方陣形!!五分、いえ三分持たせてください!」

「……」

そこにレフィーヤさんの声が飛ぶ。

まるで、リヴェリアさんのようだと思つた。

その指示に頷いた僕等は密集して円陣を組む。

全ての食人花モンスターがこちらへ反転する中、円形の陣の中央に立つレフィーヤさんは眦を吊し上げ、詠唱を紡ぎ出した。

命懸けの、三分間の防衛戦が始まる。

「【ウィーシエの名のもとに願う】」

「……」

展開される山吹色の魔法円、膨れ上がる魔力光。
食人花が餌に引かれるように殺到するのを前に、レフイーヤさんは詠唱に専心する。

「【森の先人よ、誇り高き同胞よ。我が声に応じ草原へと来れ】」

「来るぞ!!」

「【繋ぐ絆、楽宴の契り。円環を廻し舞い踊れ】」

「おおおお!!」

「【至れ、妖精の輪】」

「倒そうと思わないで!!近づけない事だけを、考えなさい!!」

「【どうか、力を貸し与えてほしい】」

僕等は、彼女の詠唱が終わるまで、猛り狂うモンスター達の突撃を次々と阻んでいくだけ。

ただ、行かせまいと、肩から血を噴き出そうが、何しようが、敵の体当たりを受け止め、頭上から迫る無数の触手を全て切り払った。

四方から迫る敵をことごとく迎撃する。

「【エルフ・リング】」

「!?!」

「大型!?!しかもあの数、ヤバイぞ!?!」

レフイーヤさんが魔法名を唱え、山吹色の魔法円から翡翠色に変化した時だった。

僕等は視界に飛び込んできた光景に青ざめた。

緑壁の迷宮をさまよっていた個体が魔力に引き寄せられたのか、大空洞の通路口から出現した巨大な食人花モンスターの塊が突き進んでくる。

小型の食人花モンスターを蹴散らしながら進んでくる群れを前に、ルルネさんが悲鳴を上げた。

「ウイリデイス」

「つつ！」

レフイーヤさんの呪文完成まではほど遠い。

「どくんだ！」

「お、おいつ!?」

「借りるよ！」

「【盾となれ、破邪の聖杯】！」

意を決して、盾を構えるルルネさん達を押しつけ、その背を借り、黒髪エルフの女の人と僕は、モンスターの前に踊り出た。

レフイーヤさんの詠唱の声を背で受け止めながら、唇を開き、剣を構える。

「【ディオ・グレイル】!!」

「絶空!!」

アスフイさんとルルネさん達が目を見張る中、黒髪エルフの女の人の魔法を発動する。

押し寄せてくるモンスター達へ、突き出された左手。

白い輝きを放つ、円形障壁。

巨大な聖なる盾がモンスターの群れと衝突し、突撃をまとめて阻んだ。

ほぼ同時に放たれた僕の何時もより強めの残撃の刃がその障壁の向こうで暴れ、モンスター達を切り裂いていく。

眼前で閃光を散らす障壁魔法にモンスター達の断末魔の叫びに瞳目するアスフイさん達、そして、黒髪エルフの女の人や僕の顔が照らし出される。

第81話・緑壁迷宮からの脱出

「剣技に比べれば拙いものだな」

「っ!？」

彼方で白い輝きの障壁魔法が生まれる中、アイズさんの風が押されていく。

進路を限定してくる食人花モンスターによって断たれる退路。

すかさず紅の大剣を構える赤髪の調教師の女が急迫し、強烈な一撃を見舞ってくる。

アイズさんは紙一重のところであわし、続けざま回転蹴りを見舞った。

風の力が加えられた強力なアイズさんの一撃を、剣の柄で難なく弾き、凍てついた視線とともに反撃を飛ばす。

何とか避けても、赤髪の調教師の女は執拗に追撃した。

苛烈な攻めに素手のアイズさんは回避のみしか許されない。

紅の斬影を刻む禍々しい大剣を振り回す相手に、「エアリエル」のみでは勝てなかった。

「(剣があれば・・・!）」

アイズさんの視界の遙か奥、大空洞の片隅に突き立った愛剣を捉えるが、その視線を遮るように赤髪の調教師の女が上段斬りを放った。決して剣のもとへ行かせようとしない敵の姿に、アイズさんの顔が苦悶に歪む。

長時間にわたる彼女との交戦で削られている体力、何より魔法の過負荷がアイズさんの全身を蝕みつつある。

それに対して、文字通り怪物的な相手の体力は底なしだ。

「いい加減、終われ!」

「!？」

頬から汗が散るアイズさんへ、食人花モンスターの体当たりに乗じた赤髪の調教師の女が大剣を振り下ろす。

攻撃の衝撃に殴られたアイズさんの胸に、焦熱が灯った、その時。

「間もなく、焔は放たれる」

「っー」

レフイヤさんの詠唱の声が、モンスターの咆哮を縫ってアイズさんの耳に届いた。

その力強い響きに、アイズさんは目を見開く。

「失せろ!!」

「!？」

更にそこへ、灰色の毛並みの狼が疾走してきた。

ベートさんだ。

モンスターの波を強引に突破し、激しい移動を重ねていたアイズさん達に追い付いた。

驚くアイズさんと赤髪の調教師の女の視線を浴びながら、彼は一直線に、風を纏うアイズさんのもとに突っ込む。

「よこせ、アイズ！」

「！」

アイズさんは、それだけで全てを理解した。

「風よー」

「【忍び寄せる戦火、免れえぬ破滅。開幕の角笛は高らかに鳴り響き、暴虐なる争乱が全てを包み込む】」

伸ばされたアイズさんの手から風が揺らぎ、すれ違ったベートさんのメタルブーツに吸い込まれた。

白銀の長靴に埋められた黄玉が輝き、両脚に凄まじい風の気流が宿る。

ベートさんに風を渡したアイズさんはその場から素早く離脱する。レフィーヤさんの詠唱を耳にしながらアイズさんが向かうのは、大空洞の片隅、突き立った剣のもとだ。

そして、アイズさんと入れ替わるように、ベートさんが赤髪の調教師の女に真つ向勝負を仕掛けた。

「なにっ」

「大人しくしてろ、化物女!!」

戦域から抜け出すアイズさんに赤髪の調教師の女は焦りを見せるが、ベートさんが後を追うのを許さない。

少女の「エアリエル」を喰らった長靴を振り上げ、痛烈な一撃を相手の大剣へ叩き込む。

両脚の気流を駆使し攻めかかるベートさん。

アイズさんに剣を回収させるためこの場を受け持ったベートさんは全力で相手を場に縫い止める。

大きな舌打ちを弾き鳴らした赤髪の調教師の女は、周囲の食人花モンスターを全てアイズさんの足止めへつぎ込み、自身は目の前のベートさんを殺しにかかった。

「至れ、紅蓮の炎、無慈悲の猛火。汝は業火の化身なり」

「邪魔だ!!」

「ツツ・・・!?!」

紅の大剣が連続で振り回され視界を無数の大閃が埋めつくした。

回避しては風蹴で受け流すも、もらえば一溜りもない必殺がベートさんの体を脅かす。

アイズさんの風を纏っていきようが、強化された赤髪の調教師の女の能力はベートさんを圧倒していた。

技と駆け引きをもってしても敵の力が上回る。

踵落とし、蹴り上げ、回転蹴り、独楽のように回りにながら凄まじい勢いで繰り出される二本の風脚を赤髪の調教師の女は全て捌き切る。相手が攻勢に移った途端、戦闘衣が千切れ、片方の手甲が吹き飛び、掠めた肩口から血が飛んだ。

「どけ、狼人!!」

「!?!」

感情を剥き出しにした声とともに、更なる速度を纏う大剣。防戦一方となったベートさんの体が大きく揺らいだ。

「【ことごとくを一掃し、大いなる戦乱に幕引きを】」

「.....」

追い詰められるベートさんの耳に聞こえてくるのは、レフィーヤさんの歌声だった。

円陣を敷いた僕等の光景がその視界を掠める。

血まみれになった人達が、杖でモンスターに殴りかかる人達が、雄叫びを上げて死地でお抗い続けている。

その中心にいるのは、輝かしい魔力光を放つレフィーヤさん。

歯を食い縛っていたベートさんの相貌が、無理矢理に、凶暴なまでに、口端を裂く。

「てめえがつ、くたばれ!!」

「つつ!!」

押し返す。

敵わぬと悟りながらそれでも一步も引かず、目の前の敵を打倒しに

かかる。

顔に凶笑を張り付け、ベートさんは吠えた。

「雑魚でもがあがいてんだろうがよお!? てめーごときを押さえねえで、どの面晒そうってんだあ!!」

「!？」

強者の矜持と、男の意地。

今も戦う僕等の姿に視界を白熱させながら、ベートさんは己の限界を食い千切った。

暴れ狂う風の力を従わせ、より激烈に使いこなす。

防御を強いられ瞳目する赤髪の調教師の女は、すぐに目を苛立ちに吊り上げ、紅の大剣を振りかぶった。

ベートさんもまた踏みしめた地面を粉碎させ、己の左脚を振り上げる。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

「!？」

哮り声を引き連れベートさんは一撃を繰り出した。

振り下ろされた大剣に、渾身の風脚が衝突する。

吹き飛ばされた風の渦に、貫通する紅刃。

大剣とぶつかり合った白銀のメタルブーツに、夥しい亀裂が走り抜けた。

ブーツを装着した足の皮膚が、肉が血を吐き散らし、骨が圧碎する。甚だしい衝撃と激痛に、ベートさんの目が血走った。

「【焼きつくせ、スルトの剣。我が名はアールヴ】！」

「!？」

そして、同時に、レフィーヤさんの詠唱が完了する。

光の音響が弾け、ベートさんの足もとに、大空洞中に拡大する翡翠色の魔法円。

「[レア・ラーヴァテイン]!!」

「ーはっ」

次の瞬間、その魔法は放たれた。

召喚された巨炎が魔法円より射出する。

僕等のもとから放射状に連続する火炎の極柱。

ベートさん達を避けて天井まで昇る業火は全ての食人花モンスターを呑み込み、焼きつくし、絶叫まで溶かす。

モンスターの魔石も灰も残さない広域殲滅魔法が、大空洞を紅い炎の世界へ変えた。

熱と紅の光に横顔を焼かれながら、ベートさんの口が吊り上がる。

殲滅されたモンスター、やり遂げて見せたレフィーヤさん、弱者が上げた咆哮。

ベートさんの琥珀色の目に光が宿る。

このまま大剣に押し切られようとする左脚になけなしの力をそそぎ込み、血潮を撒き散らしながら、ベートさんも負けじと咆哮した。

「るオおおおおおおおおおおおおおッ!!」

「なっ!」

白銀の蹴撃が、紅の大剣をはね返す。

逆転の一撃。

ベートさんが真後ろへ吹き飛んでいくのに対して、赤髪の調教師の女はノックバツクし、上半身が大剣ごと仰け反る。

大空洞が燃え上がりモンスターが一掃される中、その緑色の目が大きく見開かれた。

全身全霊の一撃を犠牲にしたベートさんの手によって、赤髪の調教師の女の体勢が崩される。

「【目覚めよ（テンペスト）】!!」

「ぐつつ!?!」

そして、大量の火の粉に囲まれる赤髪の調教師の女のもとへ、一つの影が疾走する。

炎の柱の間隙を一直線に突き進み、取り戻した銀の剣を装備した、アイズさんが。

赤髪の調教師の女に向かって、突貫した。

風を纏い直しアイズさんは弾丸になった。

仲間が作った隙を逃すまいと、愛剣を振りかぶって斬りかかる。

渾身の袈裟斬り。

咄嗟に構えされた敵の大剣を切断。

「つつ!!」

「あああああああつ!!」

技を斬り上げ。

魔石が埋め込まれた胸部中心をずらし、それでも血飛沫を飛ばす赤髪の調教師の女。

止めの、振り下ろし。

宙に跳び、両手で柄を握り締め、猛り狂う風渦を付与した剣身を。

眼下の赤髪の調教師の女に叩きつける。

「ツツツ!!」

「はぁ、はっ・・・」

両腕を交差して赤髪の調教師の女は風渦の剣を受け止めた。

途轍もない力の反発が発生し、剣身の気流が叫び声を上げながら暴れ回る。

次の瞬間、赤髪の調教師の女は決河の勢いで後方へ押し飛ばされ

た。

両足で地面に二本の線条を刻み付けながら、それでも勢いは止められず大空洞の最奥へと。

弱々しい赤光を漏らしている大支柱に、背中から叩きつけられた。

アイズさんが、せり勝った。

剣を片手で持ちながらアイズさんは息を切らす。

唸る風の鎧を解除し、赤髪の調教師の女のいる大支柱のもとへ歩んでいく。

レフイーヤさんの魔法によって食料庫は火の粉と熱気が満ちる異世界に様変わりしていた。

大空洞の天井や壁面を覆っていた巨大花の組成も音を立てて焼き落ち、本来の岩肌が覗きつつある。

アイズさんが背を向けた後方では、今度こそ敵勢力を掃討し力つきた僕等が地面にへたり込んでいた。

アイズさんが近づくと、片膝をついていた赤髪の調教師の女は、ゆっくりと立ち上がった。

出血している全身から蒸気、魔力の粒子を立ち上がれ、傷を治療を始める。

僅かに目を見張っていると、赤髪の調教師の女は口を開いた。

「……今のお前には、勝てないようだな」

「……」

その緑色の目に何の感情も浮かべず、淡々と発言する。

魔石を食らっても風を纏うアイズさんに未だ力が劣ると述べる赤髪の調教師の女には、味方も、モンスターも残っていないにもかかわらず、謎の冷静さと余裕があった。

アイズさんが怪訝そうな表情を浮かべ、間合いを残して正対すると、赤髪の調教師の女は背後の石英を見上げる。

「この大支柱は食料庫の中樞だ。これが壊れるとどうなるか……」

知っているか？」

「っ!？」

「まさか」と石英の表面を撫でる赤髪の調教師の女をアイズさんは止めようとした、だが、遅かった。

拳を握られ、腰をひねり、横殴りの一撃を大主柱に叩き込まれる。儂い赤光を帯びていた石英の柱にたちまち竜の爪痕のような巨大な亀裂が生じ、ヒビが天辺まで上がったかと思うと、次には甲高い破碎音を響かせた。

「磨耗していた大主柱はとうとう倒壊してしまう。」

そして、連動するかのように食料庫の天井が崩れ始めた。

「・・・!」

「逃げなければ埋まるぞ?特に、助けが必要なお前の仲間はない」

満身創痍の僕等に、魔法の行使によって倒れ込んでいるレフィーヤさん、足が砕けたベートさんを見やって告げてくる赤髪の調教師の女。

落下する岩石の音を聞きながら、アイズさんは唇を噛んだ。

恐らく赤髪の調教師の女は計算して最後の攻撃を受け止め、この大主柱のもとにあえて吹き飛ばされたのだ。

「っ!？」

「怪我人に手を!荷物は捨て置きなさい、脱出が最優先です!!」

激しい岩盤の雨が降りそそぐ中、僕は自身の体に鞭を打って走った。

そして、アスフイさん達も撤退行動のため、体に鞭を打ち動き回る。

「お、おい、やめろ!情けねえ餓鬼や犬人とは違うんだ、てめえの助けなんているか!」

「煩い！黙ってる!!足折ってる奴がごちやごちや言ってるな！」
「なっ!？」

「全くだよ、本当に面倒くさい！これだから狼人は嫌なんだっ！」
「それは違うよ、ルルネさん。ベートさんだから、面倒くさいんだ」
「てめえ」
「ヘンツだ！」

戦いで足を折ったベートさんにルルネさんと肩を貸していると、ベートさんは怒鳴った。

三人で罵詈雑言を交わしながら出口に向かった。

「ウイリデイス!？」
「・・・」

そして、精神疲弊を起こし倒れ伏しているレフイーヤさんを、黒髪のエルフの女の人は抱き上げようとした。

だが、伸ばした手が震えて、止まる。

まるで穢れた手で触れるのを躊躇するように、そこから動けずにいると。

「・・・！」
「だい、じょうぶ・・・」

レフイーヤさんが、自らその手を取った。

霞んだ目で、弱々しい微笑むレフイーヤさんに、目を見開く。

黒髪のエルフの女の人は切なそうに胸を握り締めた後、決意してレフイーヤさんの体を抱き起こした。

レフイーヤさんの細い体を自分のもとへ傾け、その場から離れ出す。

「・・・っ」

「アリア、五十九階層へ行け」

手を貸し合い出口を目指す僕等の姿に、アイズさんも撤退を決めた。

自分も傷付いた者達を助けなければと、目の前にいる赤髪の調教師の女より仲間を優先させる。

背を向けて場を離れようとした直前、赤髪の調教師の女はアイズさんに向かって、その言葉を投げた。

アイズさんは視線を向ける。

「ちょうど面白いことになっている。お前の知りたいものがわかるぞ」

「・・・どういう、意味ですか？」

「薄々感づいているだろう？お前の話が本当だとしても、体に流れる血が教えている筈だ」

「・・・」

「お前自ら行けば、手間も省ける」

今のアイズさんを強引に連れていくのは一苦勞、という言葉外の意味を含ませる赤髪の調教師の女はアイズさんを見つめ、目を細めた。

「地上の連中は私達を利用してしようとしている・・・精々こちらでも利用してやるさ」

「・・・」

最後は独白のように言っただけ、赤髪の調教師の女は口を開かず、その場にたたずむのみだった。

「アイズさん！」

「おい、【剣姫】！」

「アイズ、急げ！」

僕とルルネさん、ベートさんに呼びかけられ、緑色の目と交わしていた視線を切る。

崩落によってまだ塞がれていない出口に集う僕等のもとへアイズさんは走った。

大空洞を後にする直前、アイズさんはもう一度背後を振り返る。

空間の最奥から動かない赤髪の調教師の女。

降りしきる岩の奥に姿を消すまで、アイズさんは赤髪の調教師の女と視線を絡ませ続けた。

やがて、怪我人を担いで崩落する迷宮から退避する。

この日、二十四階層の食料庫は崩落した。

それでも僕等は、何とか脱出することに成功したのだった。

遠征準備編

第82話・精霊アリア

「・・・」

人知れず激戦をくぐり抜けた僕等は、十八階層のリヴィラの街を経由して、その日の内に地上へ帰還することが出来た。

ホームに帰った後、心配をかけた僕とアイズさんはロキ様に説教と罰としてメイド服を着て、丸一日、ロキ様への御奉仕をすることになり、リヴェリアさんからのものすごく痛い拳骨を頭の頂点に頂戴することになった。

ベートさんの碎けた足もディアンケヒト・ファミリアの治療院で綺麗にもと通りに治して貰ったし、精神疲弊を起こしたレフィーヤさんは寝込んではいるものの、回復しつつあって、一日寝ていれば治るだろうと思う。

ベートさんとレフィーヤさんと一緒に助けに来てくれたあの黒髪エルフの女の人、フィルヴィスさんと言うんだけど、彼女と別れる際は、多くを語らず、レフィーヤさんにだけ笑みを見せて、ファミリアに帰っていった。

そして、ルルネさん達、ヘルメス・ファミリアの人達とは十八階層に入った辺りで別れた。

「・・・全然、眠れない」

そんな夜、僕は、中々寝つけずにいた。

体は疲れきっているのに、寝ようとしなないんだ。

「散歩していいよ」

これではダメだと思って、少しでも寝付きを良くするために、ホー

ム内なら大丈夫だろうと、僕は、心の中でそう言うけどベットから起き上がって、部屋を出た。

まあ、行き先は決まっているけどね



「・・・色々なことが沢山あったけど・・・」

朝。

あの事件から二日目。

レフィーヤさんはようやく体が全快した。

自室のベットの上でやることもなくぼーっと過ごしていた。

エルフィさんとの相部屋は割と広く、今は一人でいるためかどこかもの寂しい雰囲気もあった。

「アリア、か・・・」

宝玉の胎児や闇派閥の残党、怪人。

衝撃的な事柄が目白押しで何から考えればいいのかわからないが、今、レフィーヤさんが最も気になっているのはその名だった。

あの大空洞で、アイズさんはオリヴァスにそう名指しされていた。街襲撃の際もそうだ。

あの赤髪の調教師の女、名前をレヴィスとかいった彼女にもアイズさんは「アリア」と呼ばれている。

同時に、レヴィス達はアイズさん、「アリア」を探していたような口振りを残していた。

アイズさんと彼等の接点が気になってしまい、レフィーヤさんは思い切って本人に尋ねてみたが、無駄だった。

あの大空洞で何があったのか、レヴィスと何を話したのか、そして、「アリア」とは何なのか、アイズさんは何も語ってくれなかった。

アイズさん自身も状況を掴みかねているようで、「ごめんね・・・」

“と申し訳なさそうに謝罪を言い渡されたのみだ。

「うーん・・・詮索は、駄目だけど・・・うーん」

ぼすん、と音を立てて仰向けに転がる。

山吹色の髪をベツトへ扇形に広げながら、気になつちやうなあ、とレフィーヤさんは天井を見上げながら呟いた。

『レフィーヤ、平気ー?』

「・・・ティオナさん?」

ドア越しにかけられた声に、レフィーヤさんは立ち上がった。

部屋の扉を開けてみると案の定、ティオナさんがおり、すぐ側にはティオネさんもいる。

「大丈夫だったー!?なんか大変だったんでしょー!?もう動いて平気なのー!」

「は、はい、もう体の方は・・・」

ずいずいと迫ってくるティオナさんに、レフィーヤさんは数歩後退する。

ベシツとティオネさんに後頭部を叩かれてようやく大人しくなつたティオナさんに思わず苦笑いしていると、どうやらティオナさん達はレフィーヤさんの身を案じてお見舞いに来てくれたらしい。

昨日は丸一日精神疲弊後の倦怠感が酷く、レフィーヤさんはほぼ部屋にこもりつきりだったのだ。

「アイズとベート、四葉からちよつとは話を聞いたんだけどさー、なんかよくわからなくて」

「あんたがトンチンカンなだけよ、馬鹿ティオナ」

「あはは・・・そういえば、ティオネさん達は下水道の方へ行かれて

たんですよね？そちらの方はどうだったんですか？」

レフィーヤさんは二人を部屋の中へ通して、質問した。

レフィーヤさん達が二十四階層に足を運んでいる時、ティオナさん達はフィンさんとともに都市の地下水路の調査に当たっていた筈である。

「あの食人花のモンスターは何匹か見つけたけど、収穫って呼べるものはなしね。無駄骨だったわ、こっちは」

ティオネさんはそう言っただけで肩を竦めた。

食量庫でモンスターが何処かに運び出されようとしていた光景を知る身としては、やはり地下水路にいる食人花のモンスターは闇派閥の仕業なのだろうか……としばらく思案していたレフィーヤさんだったが。

先程までの考え事が、ぱっと思ひ浮かんだ。

「あの、ティオナさん、ティオネさん……『アリア』、って知っていますか？」

アイズさんに内密で探るような真似は気が引けたが、このまま何も知らなかった振りをするのもレフィーヤさんにはできなかった。

ティオナさんとティオネさんは自分よりアイズさんと付き合いが長い。

もしかしたら何か知っていることがあるのではないか、ともものは試しに尋ねてみる。

「『アリア』？私は聞いたことないわね……」

ティオネさんは心当たりはないと首を傾げ、

「アリア？私、知ってるよ！」

テイオナさんはあつさりと答えた。

「えっ!?ほ、本当ですか!？」

「うん、本当だよー」

テイオナさん達に失礼な話だがそこまで期待していなかっただけに、レフイーヤさんはその答えに仰天した。

「お、教えてくれませんか!？」

「うん、いいよー!」

と身を乗り出すと、またしても軽い答えが返ってくる。そこからテイオナさんは、何故か移動を始めた。

「テイ、テイオナさん?どこに行くんですか?」

「んー、書庫!」

「はあ?何で書庫なんて行くのよ?」

「私が教えるより手っ取り早いって!」

レフイーヤさんとともにテイオネさんが訝る中、テイオナさんはそう言っつて、軽い歩調でホームの廊下を歩いていく。

「あつ、お前達」

「あつ、リヴェリア」

「リヴェリア様」

途中、リヴェリアさんに出くわしたレフイーヤさん達。

「四葉を見なかったか?」

「四葉？」

「見てないけど、また、あの子、何処かに行ってるの？」

「ああ、部屋にも、朝食時にも姿が無かったからな。まったく、あのじやじや馬はあれほど叱ったと言うのに、まだわかっていないようだな」

「「・・・」」

僕を探しているらしい、リヴェリアさんはそう言って、背中に大きな炎を燃え上がらせる。

その様子に、ただ、苦笑いを浮かべるレフィーヤさん達だった。

「もし、見つけたら、フィンンの部屋に来るように言ってくれ。もう一度、詳しく話を聞きたいとな」

「ええ、わかったわ」

「は、はい。わかりました」

「わかったー！見つけたら、伝えておくよ」

「頼んだ」

リヴェリアさんは、それだけ、レフィーヤさん達に頼むと、何処かへ行ってしまった。

「あの子も本当に懲りないわね」

「本当ですね」

「うーん。多分、なんだけどき、四葉、何かしてないと寂しくて仕方がないんじゃないかな？」

「寂しい？あんなに毎日、ニコニコ笑ってるのに？」

「多分、だけどね？さあ、私達も行くぞう」

そして、レフィーヤさん達も書庫に向けて再び歩き出した。



「ほら、前にここで四葉に読んで上げた英雄譚、覚えてる？」
「は、はい」

ティオナさんは、書庫につくと特定の本棚を見て回った。
付いていくレフィーヤさんとティオネさんに後ろから見守られながら、うろろうろと、棚の間の行き来を繰り返す。

「確か、ここに・・・あれ？あの時、ここに直した筈なんだけど・・・」

嬉しそうな声を上げ、背伸びをして高い棚から一冊の本を取ろうとしたが、以前直したそこには、目的の本は無かった。
ティオナさんは不思議そうに小首を傾げる。

「・・・何か探し物？」

「「えっ？」」

そんなティオナさんにその棚の更に上の方から声がかかる。

「よ、四葉!？」

「な、何でそんなところに」

「何してるのよ、あんたはそんなところで」

勿論、ティオナさんに声をかけたのは、僕だ。

「本、読んでた」

「本？じゃあ、迷宮神聖譚（ダンジョン・オラトリア）持ってるの四葉?」

「うん」

僕は、手元にある本を手にも棚の上から下りた。

「はい」

「ありがとう、四葉。レフィーヤ、はい」

「は、はい」

それをティオナさんに手渡すと、ティオナさんはベラベラと頁を適当に開いて、お目当てのものを見つけたのか、レフィーヤさんに手渡した。

レフィーヤさんはうろたえながら開いた本を受け取り、左右の肩からティオナさんとティオネさんに覗き込まれながら、頁に視線を落とす。

「・・・精霊、*「アリア」*」

「話の内容は微妙に違うけど、色んな物語に出てくるよ」

その頁には、一人の英雄に寄り添う、長い髪の女の人が白黒の挿絵で、天の羽衣を纏った姿で描かれている。

「そういえばあんた、小さい頃から童話とかお伽噺、よく読んでたわねえ・・・」

「えへへー」

「で、何であんたはあんなところで本なんて読んでたのよ」

「あそこでなら、邪魔されないよ?」

「だからって、危ないでしょ?本棚の上は乗るところじゃないんだから。とりあえず、リヴェリアがあんたを探してたから、さっさと団長の部屋に行つてきなさい?」

「わかった、行つてくる」

ティオネさんとティオナさん、そして、僕が話して、僕がフィンさんの部屋に向かうため、書庫を出ていく中にレフィーヤさんはじつと本の中の女の人を凝視していた。

・・・アイズさんに、似ているだろうか？

いや、こんな挿絵では詳しいことはわからない。

そもそもこの英雄譚は「古代」の話を題材にしたもの・・・約千年も前の物語だ。

「（「精霊」・・・）」

神に最も愛された子供。

神の分身。

完全なる不死ではないが、何世紀にも及ぶ寿命。

エルフと同じ魔法種族にして、エルフ以上の強力な「魔法」と「奇跡」の使い手・・・

「（アイズさんの、「風」？）」

そこまで思考が迷走したレフィーヤさんは、まさか、と一笑に付いた。

「妖精」ならば神々と同じく、相対すれば誰にでもハッキリとその種族が察せる。

アイズさんはちよつと天然というか不思議な感じはあるが、神聖と
いほどの存在感は見受けられない。

それに神の分身である「精霊」は神々と同じく、子も産めない筈だ。

レフィーヤさんはいくつも浮かんだ愚かな妄想を全て退けた。

確かにアイズさんは神にも劣らない美貌を持つているが、それはアイズさんの潜在力だ！と憧れを抱くレフィーヤさんは心の中で声高に主張する。

結局ただの勘違いか、と苦笑しながら。

レフィーヤさんはゆっくりと本を閉じ、そのまま、本棚へと戻した。

第83話・通る道

「あっ」

「!・・・」

「ひいつ!?!」

テイオネさんに言われ、フィンさんの部屋に向かっていると途中でリヴェリアさんに出くわした僕。

リヴェリアさんは僕を見て一瞬、固まった後、徐々にその顔に鬼の仮面を張り付けていって、背にリヴェリアさんの魔法のような業火を背負って、ツカツカと僕に歩み寄ってきた。

「ふぎゃつ!?!」

「・・・」

思わず、回れ右して逃げようとした僕の脳天に拳骨が叩き落とされる。

◆◆◆

「捕らえてきた」

「!?!」

「・・・は、ははは」

そのまま、リヴェリアさんに悪戯した仔犬や仔猫のように首根っこを掴まれてフィンさんの部屋に連行された僕は、部屋につくなり中へ放り込まれた。

「何処におったんじや?」

「廊下にあった。四葉、今まで、何処をほつつき歩いてた」

「・・・ずっと、書庫にいたよ」

「ずっと?」

「何時からいたんだい?」

「……」

中には、当然部屋の主であるフィンさんが居て、ガレスさんとロキ様も居た。

もしここで『昨日の夜から居ました』なんて言った日には間違いなく僕の後ろにいるリヴェリアさんからもう一発拳骨が来るのは間違いないだろうと思つて、無言で答えた。

「四葉」

「……」

なおも答えろと言うようにリヴェリアさんが僕の名前を呼ぶけど、両手で頭をガードして無言を貫いた。

「四葉? せめて、朝食の時間には食堂に来て、ちゃんと、食事はちゃんと取つて欲しい」

「それは、ごめんなさい。集中して本読んでたら、気づかなかつた」

「そうかい。何の本を読んでたんだい?」

「英雄譚。前にテイオナさんに読んで貰つたヤツ。急に読みたくなつちやつたんだ。他にも色々」

そんな僕に苦笑いを浮かべたフィンさんは、僕にその注意をした。そこは素直に謝る。

本気で、聞こえなかつたし。

「ねえ? 僕は、叱られるために探されてたの?」

「うーん、半分当たりで半分ハズレかな?」

だから、僕は、叱られるために探されたんだと思つた。

けど、フィンさんは半分当たりで半分ハズレだと言う。
じゃあ、ハズレの半分は何だと言うのか。

「四葉、【ステイタス】の更新何時したっけ？」

「えっ??えっと、最後は、ヴェルフに追加注文をしに行った日の出かける前だったから、その日以来、してないよ？」

「じゃあ、しておいで?..」

「えっ??」

「ほな、行こうか? 四葉たん」

「う、うん」

そして、何故か更新を進められ、有無を言わず、僕は、ロキ様にフィンさんの部屋の外に連れ出された。



「うくん、やっぱり、そうなるわな」

「何が??」

それから、近場の空き部屋で上半身裸になつて、ステイタスの更新を行った。

そしたら、ロキ様はあちやーって感じで、額に手を当てて言った。

「四葉たん、リヴィラの事件の時も、今回の二十四階層でも大暴れしたんやろ?..」

「.....」

してないとは、言い難い。

「そのせいやと思うんやけど、四葉たん、もうランクアップ出来るで?..」

「はあ??」

真面目に「はあ??」って思った。

一回目はわかる。

レベル一で遠征についていって、帰ってきたんだから。

けど、今回は、ただ食人花モンスターや食人花が変化したモンスター、巨大花相手に暴れはしたけど、僕一人で倒した訳じゃない。

「戸惑うんは、しゃあないとは思うわ。けど、なつてもうたのもしやあない。そこは、素直に喜んどき? いやあく、最短も最短、超最短や。こんなん、オラリオ始まって以来とちやうか? あっ! このまま、ランクアップしてまうけど、ええやろ?」

「う、うん」

「ちよーっと、待つとつてな? 今、紙に写すから」

ロキ様はそう言つて、ポケットから取り出した紙を僕の背につけて、そこに書かれたステイタスを写していく。

「ほい、こつちが、レベル二最後のな?」

「ありがとう」

まず、一枚目、僕のレベル二最後のステイタス

四葉; レベル二

【ステイタス】

力; S951

敏捷; S960

耐久; A858

魔力; S950

器用; S930

狩人I

レベル一からレベル二にランクアップしたとき、僕の発掘アビリ

・解除式「これは、かつての力、姿を取り戻す魔法。我、彼の王に仕えし者。今は、彼の者に造られし我が身。我は、望む。今一度、あなたに呼んで欲しい。我が名は、王の狩猟犬《カヴァス》」

【幻書の術】・・・収納魔法。

生物以外の認識下の物を1000個まで、収納可能。

取り出し時は、個々取り出し、全取り出し可能。

一個⇐個。一箱⇐個。

取り出し口は任意の位置。

加工可能。

・収納詠唱式【ストレージ】

・取り出し詠唱式【テイクアウト】

【スキル】

・【王の真似】・・・魔力放出。

戦闘時、瞬間的な魔力ブースト。

自身、武器に加えることで、力、敏捷、斬撃の威力が倍増する。

・【魔術師のギフト】・・・治癒能力。

怪我、状態異常の自動回復。

と新しい発掘アビリティとともに、【幻書の術】にも新たなことが書かれていた。

箱⇐個なら、大きな箱にまとめて物を入れても個なら、1000以上は入るし、加工も出来るなら、色々と助かる部分は多いだろう。

「それにしても、なんで、耐異常？僕、毒とか受けた覚えはないよ？」

「うーん、なんでやろな」

そして、今回のランクアップには不思議がもう一つ、発掘アビリティが【耐異常】があることだ。

僕は、今日まで発掘アビリティで【耐異常】が出るほどの毒を受けた覚えが無いんだ。

ロキ様も不思議そうに腕を組んで小首を傾げた。

本当に謎だ。

「そこは、ようわからんけど、一つ言えるんは」
「!？」

突然、ポンツとロキ様の手が僕の頭に寄せられる。
クシャクシャと僕の頭を撫でるロキ様。

「四葉たん、あんまん無茶ばかりしたらあかんで？何時か、とんでもないことになってまうからな？」

「・・・うん」

「ほな、フィン等のところに戻ろうか？」

ロキ様はそれだけ言うと、立ち上り、部屋を出ていこうとするのを僕は、慌てて服を着直すとその後を追いかけた。



「ロキ、どうだった？」

「ああ、バツチリや。バツチリ、ランクアップしとったで？」

「そうか。まあ、予想はしてたけどね？」

「あまり、喜ばしいことでは無いがな」

「ファミリアとしては喜ばしいんじゃないの？」

で、僕のランクアップを聞いたフィンさん達の反応は、苦笑이었다。

「・・・」

「四葉、行って良いよ？食堂で何か食べておいで？」

「・・・うん」

そして、呼び出された理由とその苦笑いの裏に僕への心配が隠れているのがヒシヒシと感じた。

だからこそ言えなかった「食べたくない」って。

そう言ってしまったら、余計に心配をかけてしまいそうだから。

僕は、一応、頷いてフィンさんの部屋を後にした。



「・・・」

それから、一応、食堂の前に来た。

「あら？四葉じゃない」

「！」

来たは良いけど、中に入れずにいると、背後から僕の名前を呼んだ人がいた。

「アキさん、リーネさん・・・ダンジョンに行くの？」

「まあね」

「・・・そっか、行ってらっしゃい」

振り返って見るとそこにはフル装備のアキさんとリーネさんがいた。

ダンジョンに行くという二人、前なら羨ましく思えたけど、今はそうじゃなかった。

「・・・」

「四葉ちゃんは、何でここに？」

一瞬、互いの顔を見合わせた二人。

リーネさんは僕の側まで来て、僕の視線の高さに腰を落として聞いた。

「フィンさんに、ご飯食べておいでって・・・けど、僕、今・・・」
「・・・」

ちらりと食堂の中の方を見て、僕は、言いかけた言葉を呑み込んだ。

「なるほど、ご飯、食べれないのね？」

「・・・うん」

が、リーネさんの後ろからついてきていたアキさんがその呑み込んだ先を言い当てた。

「もしかして、昨夜とか寝れなかったりした？」

「・・・」

そして、アキさんはその事も言い当てた。

ちよつと泣きそうだ。

なんだか僕の弱いところを見透かされた気がした。

「・・・フィンさん達には、言わないで・・・情けないとか思われたくない・・・」

「馬鹿ね？情けないとか思うわけ無いでしょ？誰しもが通る道なんだから」

「誰しも？フィンさん達も？」

「団長達はどうかかわからないけど、少なくとも、私は通ったわ」

「私も、かな？」

「リーネさんも？」

「うん」

「・・・どうしたら、治るの？」

まさかだと思った。

まさか、こんな近くに今の僕の状態になった人達がいたなんて思いもしなかった。

しかも、二人はそれを乗り越えた様子に僕には見えた。

きっとこの二人なら僕が今一番欲しい答えを持っているはずだ。

「ごめんね？四葉、私、貴女に教えて上げられる答えを持っていないの」

「・・・えっ?」

「私もです」

「・・・」

「そんなに落ち込まないで?」

「・・・うん」

そんな二人に解決策がないと、わからないと、いわれてしまい、僕は落胆の色を隠せなかった。

「良い?四葉」

「・・・何?」

「きつとね?貴女のその状態、人として当然の事だと思う。貴女はまだ七歳でしょ?そんな貴女が、リヴィラの殺人事件だの、今回の食料庫での事件だのに関わってしまったんだから、そうなって普通よ。けど、忘れないで?貴女は私達が居るんだからね?」

「・・・うん」

そんな僕にアキさんは言い聞かせるように言った。

「帰りにお土産に飴でも買ってきてあげる。それくらいなら、食べれるでしょ?」

「えっ?良いの?」

「ええ。楽しみにしてなさい?」

「うん。あの、僕、エントランスまでお見送りして良い?」

「そう?じゃあ、エントランスまで一緒に行きましょう?」

おまけに飴まで買ってきてくれるという。

こんなことで、そのお礼になるかはわからないけど、アキさん達をエントランスホールまでお見送りする事にした。



「あれ?四葉?」

「アキ、彼女も行くんですか?」

そして、エントランスホールにつくと、そこにはアキさん達を待っていた人達が居て、その人達は僕の存在に驚いていた。

「ううん、四葉は私達を見送りに来てくれたのよ?」

「見送り?」

「はい。ね?四葉ちゃん」

「うん。行ってらっしゃいって言いたくて来た」

「そっか」

ここまで来た理由を説明すると、皆は次々に僕の頭を撫でていく。

「それじゃ、行ってくるわね?」

「うん!行ってらっしゃい!」

そして、アキさん達はダンジョンへと出かけていった。

第84話・白兔と仔犬と剣の姫

「・・・いい、天気」

「お日様が眩しいね」

「うん」

二十四階層の事件から三日後の朝。

僕とアイズさんは連れ立って、ヴェルフさんの工房まで足を運んでいた。

「ヴェルフ〜」

「おっ！四葉か！・・・なっ!?!」

その工房の扉の前で中に向かって声をかけると、すぐにヴェルフさんが出てきてくれた。

最初は嬉しそうな顔だったのに、アイズさんを見た途端、ヴェルフさんは一気に顔を青ざめさせた。

「おはよう、ヴェル・・・フウ!?!」

「今度は、【剣姫】かよ!!お、お前は、俺を殺す気か!」

「痛い!痛い!」

「!?!」

そして、ヴェルフさんはものすごい勢いで僕を小脇に抱えられて、小声で僕に言いながら、拳で頭をグリグリしてきた。

「そ、そんな事しないよ。今日は、お願いがあつて来たんだよ」

「お願いだあ?」

「こ、これ、直せる?」

「えっ?」

そうされながら、僕は、ヴェルフさんに十階層で拾ったベルさんのプロテクターを見せた。

「これなら、すぐに直せるが」

「本当！じゃあ、直して？お金は」

「前に貰ったやつで十分だ。けど、コレお前のじゃないだろ？」

「うん。持ち主に返したいんだけど、その前に綺麗にしておきたくて」

「なるほどな。ちよつと、待つてくれ？」

「うん！」

「あつ、そうだ。注文の品出来てるぞ？」

「本当に!？」

「ああ。そこにおいてあるから、確かめてくれ」

「うん！」

ヴェルフさんは僕からプロテクターを受け取り、その代わりに、ヴェルフさんは置かれた沢山の武器達を指差した。

「すごい、四葉、こんなに沢山、注文したの？」

「・・・ここまでのつもりじゃなかった。あつ、刀もある」

新しい、兎刀と黒兎刀を始めとして、今、巷にある武器の種類が全部と盾が揃っていて、弓を除く、全部二対有って、兎刀と黒兎刀に合わせて、白と黒だった。

「名付けて、四葉スペシャルだ」

「四葉スペシャル」

「ああ。俺も色んな武器を作れて楽しかったよ。どうだ？注文通りか？」

「注文以上だよ！ヴェルフ！ありがとう！」

「おう！」

その多さにはビックリしたけど、コレで僕の準備は終わった。
何の準備かと言うと、八日後と決まった「次の遠征」のだ。

「ほら、こつちも出来たぞ」

「ありがとう、ヴェルフ。はい、アイズさん」

「うん。ありがとうございます」

「い、いえいえ」

そして、ヴェルフさんは綺麗に直してくれたプロテクターを渡してくれて、それを持ってきた白布で包んでアイズさんに渡した。

アイズさんがヴェルフさんに頭も下げると、ヴェルフさんは大慌てだった。



「エイナさん」

「四葉ちゃん！・・・それに、ヴァレンシユタイン氏？」

「おはよう、っございます」

その後、ヴェルフさんに作ってもらった武器達を【幻書の術】に入れると、ヴェルフさんに別れを告げて、僕等はそのままギルド本部にいるエイナさんを尋ねた。

尋ねたのは、二重の意味がある。

一つは、プロテクターの事、もう一つは、僕のランクアップの件だ。

「わかりました。私から、ベル君・・・ベル・クラネルにプロテクターをお渡しします。お話の方も伝えておきますので」

「あ・・・」

「？」

「・・・直接、返したいんです」

まずは、プロテクターの件を、これまでの事情を含めて伝えると、エイナさんは微笑みを浮かべて言った。

それにアイズさんは若干緊張しながらその意思を伝えた。

「わかりました。では、私も協力します」

「？」

「彼が逃げ出さないように、いえ逃げ出せないように、場を設けます。きちんと面と向かわせますので」

たどたどしく、そしておずおずと懇願するアイズさんにエイナさんは真剣な表情で頷いた。

まるで保護者の、いや面倒見の良いお姉さんのようにエイナさんは提案した。

同時にベルさんへ「全く失礼なっ」と怒るように語気を少々強めた。

アイズさんはそれにクスリと小さく笑い、アイズさんとエイナさんの間で予定の調整を進めた。

窓口で始まる話し合い。

迷宮探索で多くの冒険者が出払っているロビー内で、エイナさんとアイズさん、ついでに僕は、注目を集めた。

そして、遠征前にエイナさん同伴のもと、面談用ボックスに閉じ込めてアイズさんが強襲する、という計画を真摯かつ前向きに検討している。

「!？」

「?？」

と、唐突に、正面にいるエイナさんの目が、こちらの背後を見て、はっと見開かれた。

小首を傾げ、アイズさんとほぼ同時にその反応を追うように振り返

ると、そこには僕と同じ白髪に、僕とは違う紅い目の人、基、ベルさんがいた。

今日は、ダンジョンに行かないのか、装備を着けていなかった。言葉を掛け合うことを忘れた僕等は、それぞれの体勢で、動きを完全に停止させてしまっていた。

「・・・」

「あ」

「え」

まさかの異常事態にエイナさんが動揺し。

固まっているアイズさんと僕がその目と視線を合わせていると、ベルさんは、ぎこちない動きで、こちらに背を見せた。

僕とアイズさんが眩くのとほぼ同時に、ベルさんは逃走した。

しかも、全力で

「べ、ベル君!?!待ちなさい!」

「ア、アイズさん! ショック受けてる場合じゃないよ!! 追いかけるな!!」

「お、追って下さい! ヴァレンシユタイン氏!!」
「!?!」

エイナさんの言葉も耳に入っていない様子のベルさん。

その全力疾走ぶりにアイズさんはかなりのショックを受けている様子で、僕は、パタパタと腕を動かして、エイナさんもそんなアイズさんに声を飛ばした。

すると、アイズさんは、はっ、とした様子で、手をぎゅつと握り込むと、建物玄関を飛び出したベルさんを捕捉し、疾走した。

それも、かなりの本気で。

ギルド本部のロビーを瞬く間に一過し、玄関口を速攻でぐり抜け、逃走するベルさんの背後にすぐさま追い付く。

神速の風を伴いながら、そのまま、ベルさんを追い抜いた。

「……」

「……いつっ!?!」

正面に立ちはだかったアイズさんは、止まることも出来ず突っ込んでくるベルさんを、えいつ、とあっさりと受け止めるのだった。



「何やってるの、ベル君!いきなり逃げるなんて失礼でしょ!」

「すつ、すいませツ、あつ、で、でもつ、あつ、あのつ、何がどうして……!?!」

「ヴァレンシユタイン氏が、君に用があるそうなの」

その後を追いかけた僕とエイナさん。

ベルさんはエイナさんから事情を聞いても動揺が抜け切れない様子だった。

「後は二人で話をつけなさい」

「!?!」

そして、エイナさんにそう言い付けられると途端、ベルさんは飼い主に見捨てられた小動物のような顔をした。

「ごめん。僕もエイナさんに用があるから、ベルさんはアイズさんと話してて?..」

「えっ!?!」

「四葉ちゃんが私に用事かく、何かなの?」

けど、僕には僕の用があるし、先にエイナさんを尋ねたのは僕なの

で、先に譲って貰おう。

ベルさんは僕にまでそう言われて、驚いた顔をして、エイナさんは嬉しそうな顔をして、僕の視線に腰を落として僕に要件を聞いた。

「ランクアップしたから、報告に来た」

「!?!」

だから、答えた。

すると、ベルさんとエイナさんが雷にでも打たれたかのように、目を見開いて驚いていた。

「よ、四葉ちゃん? もう一回、言っただけで貰える?」

「ランクアップ!」

エイナさんはずれた眼鏡を指で押し上げて、僕にもう一度言っただけで言った。

だから、僕は、両手を振り上げて、ジャンプして言った。

「・・・ヴァレンシユタイン氏、本当ですか?」

「は、はい」

「・・・そうですか。フ、フフフ」

アイズさんにも確認をとって、本気で僕がランクアップしてることを知ると、エイナさんは顔を伏せて妖しく笑った。

「四葉ちゃん、ちょーつと、お姉さんとお話良いかな?」

「「ひっ!?!」」

そして、エイナさんが顔を上げた時、その貼り付けられた笑みを見て、僕もアイズさんもベルさんも三人まとめて縮み上がった。

「い、良いよ。僕、か、帰るから」

「遠慮しないで、良いんだよ？四葉ちゃん？」

「え、遠慮、す、するよ。じゃあ、ぼ・・・グエツ!？」

そんなエイナさんから後退きながら逃亡を計ろうとした僕は、何時かのように、そして、リヴェリアさんのように首根っこを捕まれて、御用となった。

「ヴァレンシユタイン氏？」

「は、はい」

「コレ、少しお預かりしますね？」

「ど、どうぞ」

「!?!? どうぞしないで!!アイズさん!!」

「フフフ、許可は下りたわよ？行きましようね？」

「やだよ!!アイズさん!!」

「・・・」

「なっ!?!」

そして、エイナさんはアイズさんに僕を預かる許可を取ると、アイズさんはエイナさんに怯えながら許可を出し、僕がそれを取り消して欲しくて、アイズさんの名前を叫ぶと、プイツとそっぽを向かれた。

「やだ!!僕、やだ!!アイズさん!!アイズさん!!」

「・・・ごめん、四葉。お姉ちゃんには助けられない」

「!?!」

おまけに、両手で顔まで覆って、アイズさんは言った。

「・・・」

「ご、ごめん。僕も助けてあげられない」

「なっ!?!」

そして、ベルさんも同じようにして、僕から視線を反らして、見ないようにした。

「さあ、四葉ちゃん？行きましようね？」

「い、嫌だ!!離して!!離して!!離してええええっ!?アイズさんのバカあああああ!!」

最終的にアイズさんに手を振られた。

なんだか、デジャブ感半端ないけど、僕は、アイズさんに泣き叫びながらエイナさんに連行されていった。

なんだか、さつき、飼い主に見捨てられた小動物のような顔をしたベルさんの気持ちがよく分かる。

そして、これから先、僕は、ランクアップして、エイナさんに報告しに幾度に毎度毎度同じ目に合うんじゃないかと思えてならなかった。



「・・・あの、これ」

「!」

「この前、ダンジョンでオークに襲われてたよね？」

「は、はい。どうしてそれを・・・」

「コレ、君が居なくなっただ後に落ちてたから、返そうと思って」

「それじゃ、あの時、助けてくれたのは・・・あれ?綺麗になってる」

「傷だらけだったから、四葉の知り合いの鍛冶師さんに直して貰ったの」

今だに僕の泣き叫ぶ声を聞きながら、アイズさんは意を決して声をかけ、プロテクターを差し出す。

ベルさんもプロテクターを受け取った。

「ごめんなさい」

「え・・・？」

「私が倒し損ねたミノタウロスのせいで、君に迷惑をかけて、一杯傷付けたから・・・ずっと謝りたかった。ごめんなさい」

アイズさんはベルさんの顔をじっと見つめると、緊張を始めとした色々な感情を胸に抱きながら、思い切って謝った。

申し訳なさからつい目を伏せがちにしてしまうと、息を呑む気配が伝わってくる。

「ち、違います！悪いのは迂闊に下層へもぐった僕でっ、ヴァレンシュタインさんは、貴女は全然悪くなくて!?!むしろ助けてもらった命の恩人で！前に、あの子にも謝られたけど、謝らないといけないのは、お礼を言わずに散々逃げ回っていた僕の方でっ・・・ご、ごめんなさいっっ！」

「！」

アイズさんが顔を上げると、ベルさんはそれまでの動揺を忘れたかのように、一気に声を連ねた。

堰を切ったように言葉を溢れさせる少年に、謝り返されたアイズさんは驚いてしまう。

「その、えっと、だからっ・・・」

「・・・」

一段と顔を赤くして、必死に言葉を探している姿に、何と言ったらいいかわからない、不思議な感情もまた覚えてしまう。

(こんな風に、喋るんだ・・・)

多くは聞いたことがなかったベルさんの声は、意外にも大きかった。

慌てて喋る姿はアイズさんの想像よりずっと素直で、子兔っぽくて、面白かった。

童話の中の登場人物が紙の世界から飛び出して、目の前に降り立ったような感覚。

その姿と声に色が付き、アイズさんの知らなかった表情を沢山浮かべる。

今いる場所をつい忘れ、胸をほのかに温かくする透明な感情にアイズさんがたゆたっている。

「何度も助けていただいて・・・本当に、ありがとうございました！」
「・・・」

ベルさんはややあつて、勢いよく頭を下げた。

感謝の言葉がアイズさんに届く。

しばらく腰を折っていたベルさんは、恐る恐る体を戻した。

色々な誤解が解けた音が聞こえた。

少なくともベルさんはアイズさんの事を恐れてなどいなかったし、

アイズさんと同じように伝えたい言葉を抱いていた。

「・・・なんだろう、嬉しい、と。」

目を見開いていたアイズさんは、ゆっくりと、顔を綻ばせる。

それは、誤解が解けた晴れやかな気持ちと、喜びが半々に交ざった、小さな微笑みだった。

唇からこぼれたアイズさんのその微笑みを見て、ベルさんは何故かまた、顔を真っ赤にしてしまったが。

「・・・」

「・・・」

やることを終え、伝えることも告げて、会話が途切れる。

お互いの手が触れ合える距離でアイズさんはたたずんだ。

そこに、静かな時間だけが流れていく。

「・・・ダンジョン探索、頑張ってるんだね？」

「は、はいっ!？」

ベルさんは立ちつくすのみで、思い出したように身動きをし、アイズさんの目とぼつちり合ってしまうと慌てて視線を荆らした。

もう少し話をしたい、声を聞いてみたいと思うアイズさんだったが、自分の口数の少なさには自覚があった。

残念ながら共通の話題でもない限り碌に会話はできないだろう。

自分はテイオナさん達のように喋れない。

そこで、ふとアイズさんはとある事柄を思い出した。

アイズさんに声をかけられ、ベルさんが大きな反応を返してくる。

「もう、十階層に辿り着いたみたいだったから・・・すごいね」

「い、いえっ、それは色んな人に協力して貰ったおかげでっ、ぼ、僕は、全然まだまだというか!?!も、目標にも全く手が届かなくて・・・!」

アイズさんはどうしても気になっていたことを、ここで触れた。

先日、依頼を受けて、ベルさんを僕と共にダンジョンで探し回っていた時に抱いた違和感。

そして、興味。

駆け出しの冒険者から十階層のモンスター達を相手取るまで急速に成長した目の前の少年にアイズさんの関心は傾いていた。

照れ臭さを誤魔化すように、取り乱しながら謙遜するベルさんを見つめる。

同時に、考えてしまう。

僕とは違う成長の速さ。

もし、それに秘密があるのなら、と。

(私は、今より・・・)

脳裏に過るのは、赤髪の女、レヴィスとの一戦。

そして、数日後に迎える未到達領域五十九階層への進攻。
数々の頂がこの先で自分を待ち構えている。

予断ではなく、確信だ。

恐らくファミリアの仲間も巻き込んで、アイズさんは激しさの増す戦いに身を置くことになる。

今以上の強さが求められることになる。

後悔だけは、したくない。

何かを失うことが、在ってはならない。

ここから更に、高みへ。

レベル六に至ってもなお、あの二十四階層の事件を経て、アイズさんは強くそう思ってしまった。

「戦い方だって、我流というか素人というか、変なことをしてモンス
ターにやられそうになることだってよくあつて、もつと強くならなく
ちやいけないのに、とにかく全然ダメでっ、全然なっちやいなくてっ、
えーと……!?!」

「……」

そのために知りたい。

成長の秘訣を。

高みへの可能性を。

この短期間の内に劇的な躍進を遂げた、ベルさんの力を。

顔を赤くして言葉をまくし立てているベルさんを前に、アイズさん
は黙考する。

悩みに悩みに悩んで、色々なものを天秤にかけ、自分の心の奥を見
つめ直して。

「それじゃあ……私が教えてあげようか？」

「……えっ?」

やがて、おずおずと。

アイズさんは、ベルさんへと切り出した。
戦い方を教えると。
そして、アイズさんは。
ベルさんに師事されることになった。

第85話・旅人の宿

「……」

「よ、四葉？」

「だ、大丈夫？」

エイナさんにしこたま怒られて、解放された僕は、ムスツとした顔でアイズさん達の所に戻った。

「……話、出来た？」

「えっ？」

「う、うん」

その時、二人は戸惑っていたけど、アイズさんは少し晴れやかな様子だった。

一応、確認として聞いて、僕も頬を少しだけ緩めます。

「ベルさん、飴、あげる。アイズさんにも」

「えっ？あ、ありがとう」

「ありがとう」

「うん」

僕は、そう言っつて、昨日、アキさんが買ってきてくれた飴をポケットから出して、一つづつアイズさんとベルさんの手に置いて、僕も一粒口の中に放り込んだ。

「アイズさん」

「うん。それじゃ、私達、行くね？」

「は、はい！」

「じゃあね？ベルさん」

「うん」

そこでベルさんとは、別れ、僕もアイズさんも口の中で飴玉をコロコロ転がしながら、次の場所へと向かった。

ちなみに、ベルさんは僕から貰った飴玉をちゃんと食べてくれたそうです。

甘いものが苦手なのに。



「おっ！来たで！」

「みたいだね」

そして、とある建物まで足を運ぶと、そこにはロキ様とフィンさんが待っていてくれた。

「お待ちせ」

「ううん。ちゃんと、報告は出来たかい？」

「うん、エイナさんに滅茶苦茶、怒られた。僕、ランクアップする度にエイナさんに怒られるんだと思う」

「ハハハ、それは仕方がないさ。君は無茶ばかりするからね？彼女から君への愛情だと思って受け止めるんだ。わかったね？」

「うん！後、ヴェルフの所にも行って、武器受け取ってきたよ？」

「そうかい。じゃあ、帰ったら、見せて貰えるかい？」

「うん！」

そこでフィンさんに、ランクアップ報告終了とエイナさんに怒られたことを報告した。

フィンさんは苦笑しながら僕の頭を撫でてくれて、ヴェルフさんの所から武器も受け取ってきたことを報告した。

「それじゃ、行くうか？」

「そうだね」

そして、ロキ様に先導される形で僕等は建物の中に入っていった。

「邪魔するで〜」

「「!?」「」」

「ロ、ロキ・ファミリアだ」

「えっ!?何で!?【勇者（ブレイバー）】も【剣姫】もいるぞ!?!」

その時、ロキ様が大きな声で訪問を内部に伝えると、一気にそこにいた人達に緊張が走り、ざわつきだした。

「け、【剣姫】、四葉」

「ルルネさん」

「ルルネ」

そのざわつきを聞き付けたのか、ルルネさんが奥から慌てて出てきた。

「やあ、先日はうちの子達がお世話になったね」

「えっ、いや、私達は何も」

「ところで、【万能者（ペルセウス）】はいるかい？今日は彼女に用があるんだ」

「あ、アスファイに？」

「ああ。彼女に頼みたいことがあってね？」

「じゃ、じゃあ、こ、こっちに来てくれ」

そこからは、ルルネさんの案内でアスファイさんのもとへと僕等は向かった。



「あ、アスファイ」

「ルルネ・・・何用ですか？」

向かった先の部屋では、アスファイさんは大量の書類の整理の真っ最中だった。

「ヘルメスはおらんのか？」

「はい。今は出払ってます。・・・まったく、何処でほつつき歩いているんだか」

「そうか、まあ、あいつには用ないからええんやけどな」

「実は、君に魔法具の制作を依頼したいんだ。出来れば、一週間以内に」

「い、一週間ですか？」

「ああ。一週間後、否、八日後、僕等は遠征を結構することにした。その遠征にこの子も行くんだけど、その為と今後のためにこの子にちゃんとあつた戦闘衣を用意しないとイケなくてね。その戦闘衣の制作をもしくは改造を君に依頼したいんだ」

そんなアスファイさんにアスファイさん達の主神の事を聞いたロキ様とそれに変わってフィンさんがここに来た理由を話した。

「それでしたら、そう言ったファミリアに頼むべきでは？」

「普通はそうなんだけどね？四葉、仔犬から大型犬になってくれるかい？彼女に見せた方が早い」

「わかった。【第二段階限定解除】」

そして、言われた通り、アスファイさんの前で仔犬へと僕は、姿を変えた。

「ぽあー」

「うわあ、この四葉の姿、久しぶりに見るよ」

「これは、かつての力、姿を取り戻す魔法。我、彼の王に仕えし者。今は、彼の者に造られし我が身。我が望みはただ一つ。今一度、あなたに呼んで欲しい。我が名は、王の狩猟犬《カヴァース》」

変えてすぐ服に埋もれた僕は、服の中から這い出て、次の詠唱を唱え、大型犬に姿を変えた。

「おお!?でつけー犬!」

「おすすめは仔犬だけどこっちでもふわふわで気持ちいいよ?」

「そうなのか?」

「うん、頭とか撫でてみて?」

「・・・うわっ!本当だ!」

仔犬バージョンは兎も角、大型犬バージョンは初見だったルルネさんはアイズさんの薦めで僕の頭を撫でてその毛並みを確かめた。

「四葉、良いよ?」

「うん」

そして、僕は、解いた。

「!?」

「こういう理由で、普通の戦闘衣ではダメなんや」

「大型犬にいきなりなると、服は弾けちゃうらしいしね?」

すると、アスフィさん達はぎよつとした。

なんせ、まっ裸だから。

僕は、何食わぬ顔で床に散らばった服を着て行き、その間にロキ様とフィンさんが言った。

「それで、アスファイたん仔犬でも大型犬でも着ていられる戦闘衣を作って欲しいねん。これ、四葉たんの戦闘衣、一式なんやけど」
「……」

そして、ロキ様はアスファイさんのデスクに以前渡した戦闘衣一式を置いた。

それを前に顎に手を当てて、考え込みだした。

「四葉さん、髪を数本、毛根ごといただけますか？」

「うん。何本いる？」

「多ければ、多いほど良いですが、二十本ほどいただきたい」

「に、二十本。わ、わかった」

その考えが纏まったようで、僕は、そうお願いされて、二十本ほど髪の毛を抜いた。

「ありがとうございます」

「引き受けてくれるのかい？」

「はい、お引き受けしましょう。こちらもお預かり致します」

「ああ。ほな、報酬やけど」

その抜いた髪を紙で包んだアスファイさんはロキ様とフィンさんと報酬の話に移った。

「ルルネさん、ポックさんは？」

「ああ、今、あいつ、出掛けてるんだよ。本当、残念だよな」

その間にルルネさんにポックさんの事を聞いた。

出掛けていると言うルルネさんに僕も残念だなって思った。

「【勇者（ブレイバー）】一つ、良いですか？」

「何かな?」

「不躰とは思いません。その子、四葉さんの再教育、必要だと思いません。無茶ばかりして、このままいけば、とんでもないことになってしまいますよ」

そして、アスフィさんはフィンさんに僕の事にたいしての注意をした。

それは、ロキ様に言われた言葉と同じだ。

「ありがとう、〔万能者（ペルセウス）〕。忠告、感謝するよ。もちろん、そうならないように目を光らせておくつもりだよ」

「再教育はうちのママに任せようか」

フィンさんはアスフィさんにお礼を言い、ロキ様は僕を見てニヤリと嫌な笑みを浮かべて言った。

「四葉、あんまり、皆に心配かけちゃダメだぞ?」

「うん!」

「返事は良いんだけどね? 四葉、とりあえず、戦闘衣が出来上がるまではダンジョンは禁止だからね?」

「はい!」

そのロキ様と同じ様な笑みを浮かべたルルネさんは僕の背丈に屈めて、僕の肩を抱くように引き寄せて言った。

僕は、コクリと頷いて答えたら、フィンさんが苦笑いを浮かべて言った。



「・・・」

「??四葉??」

その後、フィンさんをお願いしてポックさんへのサインをしてもらって、全ての用も済んだことから、アスファイさん達のもとを後にした僕等。

ホームまで帰る途中、僕の目にあるお店が目に入った。

「フィンさん、ロキ様」

「ん？」

「どないしたん？四葉たん」

「遠征にホームにある『アルゴノウト』、持って行って良い？」

「『えっ？』」

そのお店を見て僕は、フィンさんとロキ様にその事をお願いした。ちなみに、『アルゴノウト』とは以前、ティオナさんに読んでもらった英雄譚の一つだ。

「遠征中に読みたいってわけじゃないの。お守りにしたいんだ。頑張るためとここに帰ってくるためのお守りに」

「お守りか。なんだったら、新しいのを買うかい？ちょうど、本屋があるし」

フィンさんは、僕が見たお店を指さして言う。

「ううん、ホームにあるヤツが良い」

「そうなのかい？」

「うん！持って行って良い？」

「君の魔法の中に入れている分には荷物にならないし、良いよ？」

そのお店が目に入った時、新しいのをとも思った。

けど、何となくそれじゃダメだっと思った。

それに、あそこに買いに行くのはティオナさん達とが良いってそう

思った。

まだ、一緒に行くって約束を果たしていないから。

「四葉たん、あの童話好きなんか？」

「うん！好き！読むと元気出る」

「そうか」

そして、ロキ様に聞かれ、僕は、大きく頷いた。

その物語の内容は、英雄を夢見る青年が、人の悪意と数奇な運命に翻弄されるお伽噺。

僕は、その中に出てきた言葉を聞いて、『アルゴノウト』が大好きになった。

だから、欲しいと思ったし、読み返そうと思って昨日は、他の英雄譚と一緒に読み漁っていた訳だし、持って行きたいとも思った。



「ひいっ!？」

その後、ホーム帰ってリヴェリアさん達にも僕の武器シリーズを見せた僕は、真夜中に何処からともなく聞こえてきた『カサカサツ』という音にビククリして飛び起きた。

「……あれ？」

そして、少ししてから隣の部屋、アイズさんの部屋からパタンという扉の閉まる音がした。

毎朝、朝早くから起きて、剣の素振りをするアイズさんだけど、いくらなんでも、起きるにはまだ早すぎると思った。

「……アイズさん？」

「!？」

思っ、部屋の扉を開けてみると忍び足で廊下を移動する何時もの装備姿のアイズさんがいて、その名を呼ぶとビックリした様子で僕の方を振り返った。

「よ、四葉」

「・・・」

何だろう、その姿から何かとてもいけないことをしようとしている感じがヒシヒシと伝わってくる。

行き先は、きっとダンジョンじゃない。
なら

「もしかして、ベルさんの所？」

「!？」

そこで、ふと、そう思った。

小声でアイズさんに聞いてみるとアイズさんはビックリしたよう
で目を少し見開いた。

「四葉も来て」

「えっ？」

「こうなったら、一蓮托生だよ？」

「・・・僕、皆に話したりしないよ？」

「一蓮托生」

「・・・わかった。すぐに着替える」

つまり、それが答えだとわかった。

会ってどうするかは、わからないけど、アイズさんはそれに僕も引きずり込むことを決めたらしく、夜の暗闇の中でも分かるくらい、真

剣な眼差しで僕に言った。

拒否権もないと。

だから僕もそれに引きずり込まれることにした。

第86話・兎と妖精の鬼ごっこ

「こんなに早起きしちゃった・・・」

僕等が動き出した同時刻頃、自室から出たレフイーヤさんは眩いた。

レフイーヤさんは、二十四階層の激闘で陥った精神疲弊の影響で、約三日間自室で寝たきりだったため、その目はすっかり冴えていた。体もすっかり快調となり、もはや寝られぬとレフイーヤさんは尖ったエルフの耳をびくびくと揺らし、音を立てないように手狭な廊下を歩んでいく。

「(せっかくだし・・・今から何か訓練を!)」

胸の前でぐっと両手で拳を作るレフイーヤさんはやる気に満ちていた。

二十四階層の事件を経て改めて思い至った己の不甲斐無さ。

ファミリアの先達の足を引っ張らないためにも、そして己のためにも、もつと強くならなくてはと思いを新たにしている。

その紺碧の双眸は闘志に燃えていた。

「(それに・・・今からならアイズさんと一緒に訓練が出来るかも!)」

が、凜々しく構えられていたエルフの整った容姿がほにやつと緩む。

レフイーヤさんの憧れるアイズさんは毎日朝早く起床し、剣の素振り、朝の鍛練を欠かさない。

このままいけばアイズさんと一緒に時間を過ごせるやも、とほんの少々の、いやかなりの下心を携えるレフイーヤさんは心なし弾んだ足取りを刻んだ。

“レフイーヤこんな朝早くからすごいね”と“そんなことないで

すよ、アイズさん私はまだまだ未熟者ですから、こんな当たり前です。エヘへもつと褒めてください”、と頭の中の妄想に浸るレフイヤさんは、現実でも”えへへっ”と同じ弛緩した表情を浮かべる。ご機嫌なレフイヤさんは、いつもアイズさんが素振りをしている中庭を目指した。



「えーつと・・・やっぱり、早過ぎちゃったかな」

まずレフイヤさんが向かった尖塔間を繋ぐ空中回廊から中庭を見下ろすが、アイズさんの姿は見当たらない。

設けられている魔石灯のポールも消灯した暗い芝生の庭を見渡し、レフイヤさんは小首を傾げる。

未だ時計の短針は三の数字にも届いていない時間帯だ、流石のアイズさんも起きていない可能性は大いにある。

石造りの渡り廊下でうーんと思考に耽るレフイヤさんは、初心に立ち戻り、一人で訓練を始めようと動こうとした。

「えっ・・・アイズさん？と四葉ちゃん？」

その時、レフイヤさんの目が僕とアイズさんの姿を視認する。

中庭ではなく、塔と塔の間の奥、ホームの裏手側。

軽装を纏いしつかり帯剣もしたアイズさんと私服の僕はキョロキョロと顔を左右に振った後、音もなく跳躍し、館を囲む高い塀を飛び越えていった。

「!？」

門を通らずホームから抜け出す真似をした僕とアイズさんに、レフイヤさんはぎよつとする。

不審な素振りを始めその一部始終を目撃していたレフイーヤさんは、まさか迷宮探索に向かうつもりだろうか、なんせ、僕には前科があるしと慌てて僕等の後を追跡する。

高い位置にある渡り廊下から飛び降り、ホームの庭へ。

杖を取りに戻る時間も惜しみ、疾走からの助走をつけて、自らも堀を飛び越えた。



「(こんな朝早くから、二人はどこへ・・・?)」

闇がはびこり肌寒い冷気が漂う街路を走る。

僕等の後を追うレフイーヤさんは、その進路が都市中央、ダンジョンの大穴を塞ぐバベルではないことにすぐに気付いた。

既に見失いつつある金の長髪の後ろ姿と白の小さな頭は、どうやら北西の区画を目指しているようである。

うつすらとした白い呼気を夜闇に溶かしながら、レフイーヤさんは必死に走った。

道行くほんの僅かな亜人や路上に転がり泥酔している冒険者達から悪戦しながら情報を聞き出すレフイーヤさんは、僕等の足跡を追いつける。

だがその頑張り虚しく、とうとう完璧に見失ってしまった。

都市北西部の市壁付近で、息を切らすレフイーヤさんは足を止める。

「(こつちに来たと思うんだけど・・・)」

人家に囲まれた石畳の通り。

洒落たポール式の魔石街灯が等間隔に立っているのを見回しながら、レフイーヤさんは再び走り出した。

メインストリートを外れ、広く整然とした裏通り、更に複雑な小径

へ。

そこから数十分以上もレフィーヤさんは、闇雲に探し回り迷路のように枝分かれした道と格闘した。

自分は一体何をやっているんだろうと思いつつ、僕等探しを止められなかった。



「きゃっ!?!」

「うわっ!?!」

そして、更に時間が経過した頃。

顔を振って少女の搜索に夢中になっていたレフィーヤさんは、曲がり角から飛び出してきた影と衝突した。

ごっつーん!と見事に頭と頭をぶつけたレフィーヤさん達は、二人して尻餅をつく。

頭を押さえ、あるいは涙目になってお互い悶えること数秒。

ふ、不覚っ・・・!?!とレベル三であるにもかかわらず晒した醜態に、僕等のことしか頭になかったレフィーヤさんは己を恥じた。

「ご、ごめんなさっー」

「すっ、すいませんっ!?!」

謝ろうとするこちらの言葉を大声が遮り、目の前にいた相手は慌てて立ち上がる。

顔を上げた先にいたのは、僕と同じ白髪の少年だった。

深紅の瞳のヒューマン。

相貌はあどけなく、その純白の髪は故郷の冬の森、エルフの里を彩る白雪をレフィーヤさんに思い出させた。

ファミリアの男性団員達と比べれば中性的で、顔や体の線は細い。自分と年が近いのではないかと思うレフィーヤさんを他所に、少年

は手を差し伸ばしてくる。

「大丈夫ですかっ・・・あ」

その伸ばされていた手が、不意に動きを止める。

レフィーヤさんの顔を見てはっとする彼の目には、ぴくぴくと動く尖ったエルフの耳が映っていた。

ディオニユロス・ファミリアのフィルヴィスさんがそうであったように。誇り高いエルフは己が認めた者以外の肌の接触を嫌う。

種族全てに当てはまるわけではないが、その習性を矯正できない者達が多いのも事実だ。

少年は件の風習を知っているのか、差し伸ばした手を引つ込めるのかどうか逡巡していた。

困った表情を浮かべているその姿にレフィーヤさんは軽く息をつく。

同胞が勘違いされるのも嫌なので、自らその手を取った。

驚く少年の手を借りて立ち上がる。

ぱんぱんと服から埃を払ったレフィーヤさんは、その深紅の瞳と目を合わせた。

「ありがとうございます。それと、ごめんなさい、よそ見をしながら出てきて」

「い・・・いえっ!? (こちらこそっ、 急に出てきて・・・)」

微笑みながら謝るレフィーヤさんに、少年は言葉に詰まりながら応じる。

あまり女性に免疫がないのか、エルフであるレフィーヤさんの整った容姿に頬を染めながら若干居心地が悪そうにしている。

腰が低く、どこか純朴そうだ。

軽装を纏った身なりからして冒険者なのだろう。

そこまで察したレフィーヤさんは、そうだつ、と探し人のことを思

い出した。

身を乗り出しながら少年にアイズさんと僕の特徴を伝え、見なかったどうか尋ねる。

「金の髪に、金の瞳・・・僕と同じ白い髪の小さな女の子?」

「そうです! 【剣姫】です! 【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタイン!!
もう一人は、世界最速(レコードホルダー)の四葉ちゃんです! 貴方も冒険者なら知っていますよね!? 見かけませんでしたか!?!」

つい興奮したレフイーヤのその言葉に。

少年は静かに、一筋の汗を流した。

「あ、あの・・・貴女は、ロキ・ファミリアですか?」

「・・・? そうですけど?」

何を藪から棒に、と訝しげな顔を見ると、少年は口端を引きつらせる。

まるでバレてはいけない秘密を抱えているかのように・・・ダラダラと汗を流し始めた。

まさか、と顔色を変えるレフイーヤさんは、怪しいっ、と両の眦を吊り上げる。

この冒険者は、隠し事をしている!

「貴方っ、アイズさんのことを四葉ちゃんのことを何か知っているんですか!?!」

「!?!」

「ああっ!?!」

レフイーヤさんが吠えた、次の瞬間。

少年はぐるんつと背を向けて、逃走した。

白髪をなびかせながらまさに脱兎のごとく走り出す少年。

レベル1にしてどんなモンスター達に追い回されてきたのか問い詰めたくなるほどの逃走振りに、レフイーヤさんは手を焼かされてしまった。

だが、間合いはもう五Mを切っている。

どうあがいてもここからでは振り切れない。

もう追いつく！と確信するレフイーヤさんは、少年が曲がった突き当たりの道に飛び込んだ。

「えっ・・・い、いないっ!?!」

視界が新しい小径に切り替わった瞬間、少年は忽然と姿を消していた。

どこへ!?!と仰天し焦るレフイーヤさんは、側にある横道を発見し、両手を懸命に振って再び駆け出す。

僕等、否、アイズさんにまつわる事柄で冷静さを失っていたレフイーヤさんは、状況把握を怠ってしまった。

その場に設けられた古びた石井戸が、ひとりでに、釣瓶と滑車をガタガタと揺らした。



「ほお、良い眺め!」

「四葉、あまり身を乗り出すと落ちちやうよ?」

「はい」

そんなことになると知らない僕とアイズさんは、迷宮都市を囲う巨大な壁の上に来ていた。

視線の先では巨大市壁から見下ろせる広大なオラリオの街並みが広がっていて、星の海のように散らばっていた魔石灯の光は多くが消え失せ、静謐を帯びつつある。

未だ明かりが絶えないのは南側のメインストリート辺りと東側、そ

して北東区画くらいだ。

「・・・ね、眠い」

「眠いの？アイズさん」

「かもしれない」

「??」

そんな迷宮都市の景色を眺めているとアイズさんが小さく欠伸を
して言った。

「四葉は眠くない？」

「僕、全然平気だよ？」

そして、聞かれた問いにそう答えつつ僕は街側じゃなく、都市の外
側の方を見に走った。

「へえ、外はこんな感じなんだ」

「・・・頑張らなくちゃ」

好奇心のままに動く僕にアイズさんは少し微笑むと、冷たい夜気に
身を委ねるように目を閉じ眠気を吹き飛ばそうとしつつ、ベルさんへ
の戦闘指導に向けて気合を入れ直す。

「・・・でも、何を教えよう・・・」

「・・・」

そして、そう眩くとアイズさんはうんうん唸っていた。

「あ・・・おはよう」

「!・・・おはよう、ベルさん」

「はあ、はあ、はあ・・・!?おっ、おはようございます・・・!!」

「・・・何かあったの？」
「既にヘトヘトだけど」

そこに訓練を始める前から既にヘトヘト状態のベルさんが到着した。

「い、いえっ、ちよつと森の妖精に追いかけて回されて・・・！」
「へっ？」

「よう、せい？」

「すごく綺麗で、すごく恐ろしくて・・・!!」

「え、えつと・・・大丈夫？」

「少しっ、休ませてもらっていいでしょうか・・・!？」

「う、うん」

「ポ、ポジションいる？」

「は、はい、ありがとうございます」

と言うのが、激しい鍛練が始まる前の、市壁の上での一幕であった。



「・・・はあ、はあ、はあ」

それから、走り続けること、約三時間。

日の出も始まり空が白み始める頃、少年の行方を追っていたレフイーヤさんは、盛大に息を切らしていた。

長時間の全力疾走にレベル三の体力もとうとう底をつきかけ、ダラダラと汗を流し、フラフラと体をよろめかせる。

「一体どこに・・・!？」

全力で悔しがるレフイーヤさん。

第87話・森の妖精の下剋上と犬の遊び

「……」

「……」

その夜。

ロキ・ファミアリアの団員達が夕食を取る大食堂の一角には。

ずうーん、と目にも当てられないほど肩を落とす、レフィーヤさんの姿があった。

「……な、何があったのよ?」

「わ、わかんないよ……」

惨たらしく首を折って項垂れるレフィーヤさんの正面、テイオネさんとテイオナさんが肩を突き合わせてヒソヒソ話を交わす。

そんな二人の隣にいる僕とアイズさんもレフィーヤさんのその姿に狼狽えた。

それは、僕等だけじゃなく、他の女性団員も、更にベートさんやラウルさんを中心に周囲にいる男性の達さえも、オイオイと引いて距離を取る有り様である。

「レ、レフィーヤさん?どうしたの?」

「レフィー、ヤ?どうしたの?」

レフィーヤさんが発散する瘴気にいたたまれない空気が流れ出す中、僕とアイズさんが意を決して動いた。

おおつ、という団員達の賞賛の視線を浴びながら、レフィーヤさんの隣に赴き、おずおすと声をかける。

僕等の問いに、レフィーヤさんは顔を上げようとしなない。

「……」

「アイズさん……四葉ちゃん……今日の朝は密会していたあのヒューマンは何ですか……?」

「!?!」

そして、僕とアイズさんが本当に困り出してしまおう頃、おもむろに、レフィーヤさんは、僕とアイズさんに押し殺した低い声で、問い返した。

その瞬間、僕を見たアイズさんに僕は全力で首を横に振って答えた。

レフィーヤさんは顎を引いたまま前髪で目を覆い隠し、えも言われぬ暗黒の空気を纏い、ただただ答えを待っていた。

無言の圧力が僕とアイズさんの動揺に拍車をかける。

「アイズさん」

「うん。レフィーヤ、来て」

「!?!」

不思議そうにこちらを眺めているティオナさん達の視線にも慌て、僕とアイズさんは止むを得ずレフィーヤさんの手を取って、周囲からの注目を浴びながら、そのまま大食堂を後にした。



「レ、レフィーヤ……どうして、知ってるの……?」

「……僕もアイズさんも……言っていないよね?」

そして、ホームに存在する空き部屋の一つに飛び込んだ僕とアイズさんは、落ち着きなく尋ねる。

動揺を隠しきれない僕等に対し、レフィーヤさんは未だ顔を上げようとしなかった。

「今朝、街の北西に向かうアイズさんと四葉ちゃんを追いかけて：：誰とも知れないヒューマンの男の子と抱き合っている、綺麗な金の髪と金の目をした美しい剣士と白い髪の小さな女の子を目撃しました」
「!?!」

僕とアイズさんは己の身を襲うプレッシャーに汗を流していると、レフィーヤさんはゆっくりと唇を動かした。

「アイズさん、四葉ちゃん、教えてください．．．お二人には生き別れの妹さんかお姉さまがいらっしやるんでしょうか．．．それともあれは私の幻覚だったんでしょうか．．．一日中考えてみても、自分を納得させられる答えが見つけれないんです．．．」

「レ、レフィーヤっ．．．お、落ち着いて?」

「あれが本当にお二人だとしたら．．．私は．．．私はッ．．．!!」

僕等へのプレッシャーを倍増させながら、レフィーヤさんがじりじりと目の前まで迫る。

その目には涙を溜めながら、レフィーヤさんは泣きすがるように言う。

まるで、最愛の何かを失った子供のよう。

その姿を見ると、レフィーヤさんにはもう隠せないと思った。



「．．．市壁の上で、訓練」

「う、うん」

僕と同じくレフィーヤさんは隠せないと判断したアイズさんと共に速やかに白状した。

「．．．じゃあ、今朝抱き合っていたのは」

「僕等、抱き合っていないよ？肩を貸してただけ、ね？」

「うん・・・歩けなくしちゃったあの子に、肩は貸していたけど・・・」

レフィーヤさんの尋問めいた質問への返答も織り交ぜながら、事情を打ち明けることしばらく、レフィーヤさんから発散されていた黒い靄もとい瘴気は、徐々に薄れていった。

誤解も解けたことが幸いしたのか、レフィーヤさんの空っぽだった目によろやく光が戻る。

「つまり・・・遠征が始まるまで、あのヒューマンに戦い方を教えることになった・・・そういうことですか？四葉ちゃんは、それに付き添っていた、と？」

「うん」

そして、しつかりとした認識の声に、僕とアイズさんは、こくこくと頷いた。

よろやく冷静に、普段通りに戻ってくれたレフィーヤさんの様子にほつと息をつく僕とアイズさん。

「(よ、他所のファミリアの癖につ、アイズさんに教えを請うなんて・・・!!)」

一安心と胸を撫で下ろす僕とアイズさんと違い、レフィーヤさんはちつとも安心できていなかった。

他派閥の団員に戦闘の手ほどき、無償の協力を要請するなど常識知らずにもほどがあると。

主神と主神、派閥同士が懇意にしているならまだわかるが、今回はその限りではない。

「ヘステイア・ファミリア」など一体どこの新興勢力だと。

またお互いの立場もそうだが、その地位の開きも十分に問題である。

片や零細ファミリアの下級冒険者、片や都市最強派閥の幹部も務める第一級冒険者。

この話を聞けばきつと他の者達も『身の程を知れ』と口を揃えることだろうと。

何てことだ！信じられない！厚顔無恥である！！

今朝見た白髪の少年の顔を思い出しながら、レフィーヤさんは胸中で悪態の数々を唱えていく。

「(というか、とても羨ましいっ、もといずうずうしいっ!!)」

色々と理由をつけてはいるが、とどのつまり、早朝だけとは言えアイズさんを独り占めし、訓練をつけてもらえるベルさんにレフィーヤさんは嫉妬しているのだ。

「あの、違うの。私から教えるって、そう言っつて、だから・・・」

「これはお詫びなの、僕等が逃がしちやつたミノタウロスのせいだ。沢山、迷惑かけちやつたし、笑い者にしちやつたお詫び」

「・・・」

その怒りと嫉みで百面相するレフィーヤさんに気付き、僕とアイズさんは、慌てて告げる。

『ベルさんはなにも悪くない』と『巻き込んだのは自分達だ』と。

必死にベルさんを庇う僕等の姿に、否、アイズさんの姿に、レフィーヤさんは一層不満を募らせる。

事情はあるにても、アイズさんにこんなに気にかけているベルさんが、気に食わないいたら気に食わない。

「お願い、レフィーヤ。ロキやフィン達・・・皆には、黙ってて?」

「僕からもお願いします」

「・・・」

僕とアイズさんはレフイーヤさんに懇願した。

そんな僕等を前にレフイーヤさんは黙りこくりぷるぷると震えていた。

“そんなに少年との鍛練を続けたいのか”と“続けさせたいのか”と。

「じよ、条件があります!!聞いてくれないと、いつ、言っちゃいます!?!」

「!?!」

そして、レフイーヤさんは胸の内の嫉妬心をとうとう爆発させ、決意とともに声を張り上げた。

赤面して、まさかの交換条件を叩き付けた。

当然、そんなことを言われると思っていなかった僕とアイズさんは衝撃を受ける。

「わ、私にもあのヒューマンと同じようにつ、特訓をつけてください!?!二人きりで!!」

「.....」

一際真っ赤になったレフイーヤさんの口を衝いて出てきたのは、そんな言葉だった。

レフイーヤさんの要求に、アイズさんと二人できよとんと数度瞬きをして、互いの顔を見合った。

「私で・・・いいなら」

「いつ、いいんですか?!」

「うん・・・大丈夫だよ?」

「やーやったあ!」

アイズさんが了承するとレフイーヤさんは胸の前で両手を合わせ、

ぴよんとその場で跳ねる。

その動きに合わせて揺れる山吹色の長髪、ほんのりと薄紅色に染まる頬。

先程まで嫉妬していたベルさんのことも忘れ、レフィーヤさんは全身で喜びを表現した。

その姿に小首を傾げる僕とアイズさんを他所に、くるくると回転する。

「……僕は何をしたらいいんだろう」

「!……じゃ、じゃあ!」

それを見ながら、ボソツと呟いた。

だって、アイズさんがレフィーヤさんの交換条件を呑むというのなら、僕もレフィーヤさんをお願いしている身だし、僕も何かの条件を呑むべきだと思ったから。

そして、僕の声聞き取ったレフィーヤさんかというと。

「仔犬姿の四葉ちゃんを思う存分もふもふさせてください!」

「……」

僕にそう言う要求を出した。

当然だけどきよんとした。

「そ、そんなので良いなら、いくらでも」

「本当ですか!!」

「うん。今からする?」

「はい!あ、いえ、夕食後で!」

「わかった」

というわけで、アイズさんのベルさんへの訓練を黙ってで代わりに、アイズさんはレフィーヤさんの教導も務めることになって、僕は、

レフィーヤさんにもふもふされることになった。



「それじゃ、四葉ちゃん、お願いします」

「うん。【第二段階限定解除】」

そして、夕食後、僕はレフィーヤさんとレフィーヤさんの同室のエルフィーヤさんが見守る前で仔犬の姿へと変えた。

「よいしょ【ストレージ】」

「か、かわっ」

その時、脱げた服とかは全部【幻書の術】の中へと放り込んだ。

「ちっちゃー、四葉、お手して！お手」

「・・・お手」

「ひゃあ〜」

まず、この姿が初見なエルフィーさんは若干興奮した様子で、僕の前に手を差し出してきて、僕もその手に前足を乗せてみた。

「肉球〜」

「!?エ、エルフィーさん」

すると、肉球をふにふにされた。くすぐったくて仕方がない。

「!?」

「もお、エルフィー、四葉ちゃん、困ってるじゃないですか〜」

「ははは、ごめん、ごめん」

それに困っているとレフイーヤさんが引き剥がしてくれた。

「はあく、ふかふかです〜」

「!？」

その代わりに、僕の背中に顔を当てて頬ずりをするレフイーヤさん。

「何かないかな〜」

「エルファイ？何を探してるんですか？」

「いや、何か遊べるものはないかなって思ってた」

そして、エルファイさんは部屋の中を物色して、僕と遊べそうなモノを探し始める。

「う〜ん、タオルしかないや〜。まあ、いつか。これをこうしてと」

「……………」

エルファイさんはそのタオルでボールを作り上げていく。

「それをどうするの？」

「ん？こうするの」

そして、エルファイさんはそのタオルボールを部屋の隅の方へ投げた。

「四葉、あれ、取ってきて？」

「えっ？」

「取ってきて？」

「……………」

それを指さしているエルフィさんにレフィーヤさんは僕をそつと床に置く。

「さあ、取ってきてください？四葉ちゃん」

「・・・うん」

なんだか良くわからないけど、僕は、そのタオルボールを取りに行く。

「よしーえいっー！」

「!？」

取って来たものをエルフィさんに渡すと、間髪入れずにまた、部屋の隅の方へ投げられた。

「はい、もう一回」

「・・・」

仕方がなく、もう一度取りに行つて、今度はレフィーヤさんに渡してみた。

そうすれば、もう投げられないと思ったから。
が

「えいっー！」

「!？」

「さあ、取ってきてください？四葉ちゃん？」

それは一瞬にして、裏切られた僕。

その後も、取っていかされては、投げられ、取っていかされては、投げられてと言う遊びをリヴェリアさんが「うるさい！」と怒りに来

るまで僕等は続けた。

第88話・特訓ブーム

「!？」

「ん? どうした? 四葉」

「血の臭い。 ティオナさんとティオネさんの」

「はあ??」

その翌々日の昼前、リヴェリアさんと談話室で過ごしていると、僕の鼻に二人の血の臭いが届いた。

「!？」

「あ、リヴェリアと四葉、ここにいたの。 て言うか、四葉、何であった、その姿なのよ」

「・・・えっ、えっと、リヴェリアさんがやれって言うから・・・」

そして、談話室に入ってきた二人を見て、僕とリヴェリアさんはギョツとした。

すると、ティオネさんがリヴェリアさんの膝の上の仔犬姿の僕を見て呆れたように言う。

「ねえ、リヴェリア。 レフィーヤ、最近なにやってるの?」

「お前達こそ何をやってた・・・」

そのティオネさんも、リヴェリアさんに尋ねるティオナさんも、纏っているパレオや衣装を体ごとボロボロにさせ、顔も体も傷だらけ、血だらけだった。

リヴェリアさんは、瞑目した目を片手で押さえ嘆息する。

「ティオネと二人で組み手やってたんだよ、組み手!」

「アイズがランクアップして置いてかれちゃったし、四葉も早々にレベル三になっちゃやし、悔しいじゃない? 居ても立ってもいられな

くなってるのよ」

リヴェエリアさんの問いにティオナさんとティオネさんは、露出した肌から醒めやらない熱を漂わせながら返答した。

「限度というものがあるだろう・・・」

「・・・」

それにリヴェエリアさんは、再び二人の体を見やりながら溜め息をつく。

「お前達だけでなく、ファミリア全体も鍛練に現を抜かしているというのがな・・・全く、遠征まえだというのに」

「ハハハ」

ぶつちやけ、ティオナさん達だけでなく、ファミリア全体が僕とアイズさんの昇格に影響を受けていた。

いわゆる特訓の流行が来たのだ。

ほとんどのファミリアの団員がダンジョンや訓練で出払っていて、館内はほとんど人がいない。

大人しくしているのは、リヴェエリアさん達を除けば、僕くらいのものであった。

「やっぱり、レフィーヤも鍛錬かなー」

「アイズも最近様子がおかしいのよね」

あの夕食の時から、瘴気を発したり並みならぬ気概を發揮し出したりしているレフィーヤさんの姿にティオナさんは、レフィーヤさんも感化されたのか思案する。

その隣では、ティオネさんがアイズさんの素行にも触れた。

「リヴェリア、何か知ってる？」

「いや、私も特に心当たりはないが・・・四葉、お前はどうかだ？」

「僕も知らない。良い競争相手でも見つかったんじゃない？」

「そうだろうな」

テイオナさんの問いに答えつつ、リヴェリアさんは僕にも聞いた。当然、二人の事情を知っている僕だけど、とりあえず、そう答えておいた。

「それより・・・お前達、身だしなみくらいどうにかしろ。目にあまる」

「んー、ちよつと休んだらまたやり合おうし、このままでいーや」

「そうね、面倒だし」

すると、リヴェリアさんは改めて、テイオナさん達の格好について言及する。

潔癖でもあるエルフのリヴェリアさんからすれば、服も体も傷と血で汚れ、髪もボサボサな二人は直視し辛いのだろう。

しかし、二人は全く意に介してなくて、リヴェリアさんは再び溜め息をつく。

「ちよつと、リヴェリア？」

「フィンの前で乙女を気取るなら、髪くらいは何とかしろ」

リヴェリアさんは僕を置いて、椅子から立ち上がると、テイオナさんの手を取って強引に椅子へ座らせた。

そして、リヴェリアさんはテイオナさんの背後に回るとこの談話室にあった櫛を用いて、そのボサボサだった長い黒髪を瞬く間に整えていく。

「意外・・・上手いのね、リヴェリア？王族（ハイエルフ）だから、

髪や身だしなみなんかは他人にやらせてばかりの印象があったわ」

「あの子の・・・アイズを世話をしている頃に、な。私が見かねるほど、以前のあの子は髪型も何も無頓着だった。手を焼かされている内に、覚えてしまったんだ」

小さな苦笑とともに、数年前の記憶を思い出すリヴェリアさんは目を細める。

髪を撫でるその優しい手付きに、ティオネさんはくすぐったそうに、そして気持ち良さそうに目を瞑った。

「ずるーい!?!リヴェリア、次私にもやってよー!?!」

「ぼ、僕も」

「全く、わかったから、少し待っている。四葉、お前はティオナの後だ。良いな?」

「うん!」

それがなんだか羨ましくて、僕とティオナさんもねだった。

そんな僕とティオナさんにリヴェリアさんは眉を下げて微笑みをこぼす。

「ねえ、リヴェリア」

「なんだ?」

リヴェリアさんが、しゅ、しゅ、と櫛でティオネさんの長髪を流れる優しい音を響かせる中ティオナさんがその腕に僕を抱えて、リヴェリアさんの名前を呼んだ。

「リヴェリアは、小さい頃のアイズを・・・ファミリアに入った頃のアイズを知ってるんだよね?」

「ああ」

おもむろにテイオナさんが尋ねるとリヴェリアさんは、テイオナさんを見ずに答えた。

「『アリア』って、知ってる?」

「!?」

「リヴェリア・・・?」

そして、テイオナさんの口から、その名が出るとリヴェリアさんはぴくつ、と髪をといっていた手を止めた。

テイオナさんが怪訝そうにリヴェリアさんを振り返る。

「その名を何処で聞いた?」

「十八階層とか、二十四階層とか、そこでアイズが『アリア』って呼ばれてたって・・・レフィーヤが」

リヴェリアさんはその翡翠色の目をテイオナさんに向けた。

真正直に話すテイオナさんは、じつとリヴェリアさんから目を逸らさない。

テイオナさんと一緒にリヴェリアさんを見つめた。

「新種のモンスターとかさ、最近変なことが起きてるよね。二十四階層であったことも四葉達から聞いたし・・・よくわからないけど、何か大変なことが起こっているのは、わかるよ」

「・・・」

怪物祭から続く、食人花のモンスターの襲撃。

十八階層『リヴィラの街』ではガネーシャ・ファミリアのハシヤーナさんが収拾した『宝玉の胎児』を巡って戦闘が巻き起こり、食人花を束ねる調教師の女、怪人レヴィスと邂逅を果たした。

そして、二十四階層では、その女に加え闇派閥の残党が姿を現し、オラリオの崩壊を目論んでいることを明らかにした。

「危ない連中に『アリア』って呼ばれてるアイズが……最近の事件に何か関係してるのかなって、気になっちゃった」

「……」

「『アリア』って英雄譚の登場人物だけど、まさか関係ないだろうし……」

僕を抱えたまま、椅子の上で胡座をかいて、体を揺らすティオナさんは一連の出来事に触れ、最後は口をすぼめながら語る。

「リヴェリア、何か知っているの？」

「……」

リヴェリアさんは視線を前に戻し、黙りながら、ティオナさんの髪を一撫でしとき終えた。

ティオナさんの問いにもリヴェリアさんは黙ったままだった。リヴェリアさんは顔の向きだけを変え、窓に視線を飛ばす。

「……五十九階層」

「……」

「そこで、何かがわかる筈だ」

やがて、リヴェリアさんは口を開く。

その瞳に、窓の外に広がる蒼穹を写しながら。



「フィンの推測、当たったかなー」

「何のことだい、ロキ？」

僕等が館で会話をしている同時刻、多くの馬車や逞しい男性の傭人

が周囲で行き交う中、フィンさんとロキ様はメインストリートを並んで歩いていた。

「がレスやリヴェリアと一緒に、ここんとこの事件のおさらいしたやろ？そんな時、ほれ、自分が言いかけてたやつ。あの後こんなこと言おうとしたんやろ？」まるで、地底に住み着いた人ならざるモノのようだ」

「神である貴方も、予測の一つくらいしていたんだろう？」

「さあなあ？」

自分の口調まで真似てそっくり当ててくるロキ様に、フィンさんは肩を竦めてみせる。

指摘を返すフィンさんに対し、ロキ様は笑みを見せ、面白そうにすつとぼける。

「闇派閥の残党に、人でも怪物でもない化物、そんで『宝玉の胎児』……いよいよ大事になってきたなあ。フィン、五十九階層に何かあると思う？」

「僕程度じゃあ想像もつかないな」

怪人レヴィスは二十四階層の事件の際に、アイズさんに向かって言葉を残した。

『五十九階層へ行け、お前の知りたいたいものがわかるぞ』、と。

ロキ・ファミアの遠征先、目標地点である未到達領域、五十九階層。

件の階層に何が待っているのか、ロキ様はそう尋ねてくる。

それに対してフィンさんは、意趣返しのようにロキ様の問いをのりくらりとかわす。

自分の考えを口に出そうとしないフィンさんは、そこでペロリと、右手の親指を舐めた。

「ただ、ようやく対峙する相手の輪郭が浮かび上がってきた」
「そうやなあ」

それも単一ではなく、いくつもの線が秩序なく折り重なってでき
た、とても巨大な影だ。

複数の者の思惑が絡み合っている気配……どうにもきな臭いな、と
フィンさんは胸中でこぼす。

呟くロキ様を尻目に、フィンさんは親指が発する疼きを感じてい
た。

「なあ、フィン……不謹慎なことを言ってもええ？」

「何だい？」

唐突にロキ様がそんなことを言ってきた。

フィンさんは顔を上げると、ロキ様は歩みを止めて振り返る。

そして、仮面を脱いだかのように、たちまち雰囲気を豹変させ、口
角を吊り上げた。

「これだから、下界は止められん」

「……」

「人と怪物の『異種混成（ハイブリット）』……全知である神々の
想定外。予想外のこと起きる。神の見通せなかった、『未知』や」

極上の美酒に酔いしれるように、ロキ様はその細い目をうつすらと
開け、歓喜を垣間見せる。

悠久の時を生きてきた神が飢える『未知』の香り。

温かな太陽の光が降り注ぐこの平和な街角が、あるいは今にも引つ
くり返るような虫の知らせを感じながらも、己の興奮を満たして止ま
ない、と。

ロキ様は心底愉快そうに笑った。

黙ってロキ様を見つめていたフィンさんは、ふっ、と薄い笑みを返

す。

「勿論、フィン達が一番心配やー！胸潰れそう!?必ず生きて帰ってくるんやでー!!」

「安心していいよ、ロキ。僕も冒険者だ。未知”に挑むあの感覚は、十分に知っている」

次にはけるつと表情をふざけたものに変え、ロキ様はフィンさんの背後に回り両肩を揉んだ。

そんなロキ様に周囲の視線が集まり、フィンさんは苦笑する。

ロキ様の戯れを受け入れるフィンさんは、そのまま告げた。

己の顔を肩越しに見上げながら笑むフィンさんに、ロキ様は間を空けて、ニツと唇を上げる。

そこには、長年の付き合いを窺わせる繋がりがあった。

それから間もなく、フィンさんとロキ様は歩みを再開させる。

二人が歩いているのは北東のメインストリート。

オラリオが誇る魔石製品製造の心臓部であり、ギルドに雇われた無所属の労働者から派閥の職人までが集まる都市第二区画、工業区が隣接する通り。

二人はそのまま歩みを連れ、メインストリートから第二区画の中心へと向かった。

第89話・着々と進む遠征準備

「来たわね」

「ファイたん、おはようさん。いや、こんにちはか？」

ロキ様から振られるくだらない会話を交わす内に辿り着いたのは、とある平屋造りの建物、工房である。

掃除もされておらず煤だらけの工房の前には、鮮やかな紅神の女神がたたずんでいた。

顔の右半分を覆うほどの大きな眼帯をつけた彼女は、髪の色と同じ燃えるような紅の左目をロキ様とフィンさんに向ける。

ロキ様が手を上げて気軽に渾名で呼ぶ相手は、ヘファイストス様だ。

ヘファイストス様はロキ様に手を上げ返す。

その顔には、苦笑にも似た笑みを浮かべている。

「悪いわね、ロキ。わざわざ来てもらって」

「気にしないでええで、ファイたん。『遠征』への同行やら武器の手配やら、こつちが無茶振りしとるんやから」

僕等、ロキ・ファミリアはヘファイストス・ファミリアに『遠征』の協力を願っていた。

遠征先での武器の磨耗と消費を食い止めるため、団長であるフィンさんからロキ様を通じてヘファイストス様のもとに所属する上級鍛冶師の同行を求めたのである。

これに対してヘファイストス様は『深層』の武器素材譲渡という条件付きで了承した。

フィンさん達の要望は叶い、ここにロキ・ファミリアとヘファイストス・ファミリアの遠征同盟が成立したのだ。

「こちらの申し入れを受け入れて頂き、感謝する。神ヘファイスト

ス」

「あら、貴方に礼を告げられるなんて、私も鼻が高いわ。貴方達の迷宮踏破を手助けしてあげられるなら光栄よ」

深々と会釈するフィンさんに、ヘファイストス様は目を細める。

「取りあえず話は後にして、中へ入りましょう」

「・・・」

ヘファイストス様はロキ様とフィンさんに声をかけ、背後の工房につま先を向ける。

ヘファイストス様に率いられるまま、中から金属の打撃音が響いてくる建物へと入った。

「『遠征』の打ち合わせがあるから顔を出しなさい、って再三呼びかけたんだけど・・・今いいところだから、の一点張り。工房から出てこようとしなのよ」

「ははっ、ファイたんみたいやなー。根っからの職人氣質。やっばり子は神に似るわ」

「どうやら、彼女も変わらないようだね」

溜め息とともに嘆くヘファイストス様にロキ様は笑い声を上げ、フィンさんも唇を曲げる。

扉を経てすぐ、広い鍛冶場に繋がる工房内は強い鉄の香りに満たされていた。

碌に魔石灯を灯されていない空間は暗闇に包まれており、奥でぼうつと灯っている炉の赤い炎だけがまともな光源として存在している。

屋外でも聞こえてきた金属の打撃音が、カァン、カァンツ、と耳をろうするほどより強くなより高く鳴り響いてくる。

工房の奥に進むフィンさん達は、やがて彼女を発見した。

目を疑うほどの大型工具に囲まれながら、鉄床の上のインゴットを鋸でひたすら叩く後ろ姿。

側にある炉と弾ける無数の火花の光に焼かれる褐色の横顔は、無数の汗にまみれながらなお凛々しかった。

整った容貌は今ばかりは女の美とかけ離れ、燃え盛る炎のような猛々しさと美しき、職人としての顔を纏っている。

ヘファイストス様達の存在にも気付かない彼女は、ただ真摯に目の前の鉄と向き合い、己の鋸を振り下ろし続けていた。

間合いを残して足を止めたフィンさんとロキ様は、
“もう少し待ってやってくれ”、というヘファイストス様の無言の身振りに頷き、一人の鍛冶師の姿を見守る。

結われている黒髪を揺らす彼女は、カアンと最後の鋸の振り下ろしを経て、手の動きを止める。

そこから一呼吸も置かず鉄床の上にできた剣身を缺で持った。

「じゅううつ、と立ち昇る湯気。」

研がれ、磨かれる刃。

素人が傍から見ても理解が及ばない作業を長い時間をかけて行われた後、即席の柄と鐔を組み合わせ、一振りの剣が完成する。

片手に持つその紅の剣をまじまじと眺めていた彼女は、そこでようやく息をついた。

「椿」

「おお？」

黒髪を晒す後ろ姿に、ヘファイストス様は呼びかける。

椿さんは呼ばれて振り返り、今になって気付いたように、ヘファイストス様の顔を見るなり右目を丸くした。

そして、すぐに破顔の表情を見せる。

「何週間振りだ、主神様よ。手前に何か用か？ いや待て、この『魔剣』を見る、中々の自信作だ」

「二日前に訪ねたばかりよ」

成熟した女性の顔立ちでありながら、椿さんは子供のようには笑みを浮かべ、片手に持つ紅剣を見せつけてきた。

「ずらずらと言いたいことを述べてくる椿さんにへファイスト様は溜め息をつく。」

「ロキ達と『遠征』の話し合いをするって言ったでしょ？」

「おお！そうであったそうであった」

へファイスト様の呆れ声に合点がいったように声を上げる椿さんは、笑いながら歩み寄った。

「久しぶりだね、椿」

「おや、フィン！相変わらず小さいの！ところで、工房にこもりつきりで人肌の温もりが恋しいのだ、抱きしめさせてくれ！」

「遠慮させてもらうよ。バレたらティオネに殺されるからね」

両手を広げ近付いてくる椿さんにフィンさんは苦笑を返す。

その言葉に椿さんは声を上げて笑った。

「二通り見とったけど、まーたんでもない武器を作ったんか、キュクロプス」は？」

「ロキよ、二つ名で呼ばないでくれ。怪物のようでその名は好かん。手前は大きいに不服なのだ」

完成したばかりの紅剣を見てニヤニヤと笑うロキ様に、椿さんは口を尖らせる。

椿さんに神々が付けた二つ名は「単眼の巨師（キュクロプス）」。

鍛冶師でありながらレベル五という第一級冒険者級の戦闘力を誇る奇人であり、鬼人である。

鍛冶派閥として地位を確立している以外にも、椿さんを始めとした少々特殊過ぎる職人達の飛び抜けた戦闘能力がヘファイストス・ファミリアが他派閥に攻め込まれない数ある内の一因でもあった。

「しかし・・・グヘヘ、相変わらずイイおっぱいしてるな。サラシの上からでもわかるエロい胸もと!!」

「おお、欲しければくれてやるぞ？脂肪の塊だ、鍛冶場には邪魔でしょうがない。とても要らん」

「グハア!?!」

わいせつを働いた筈が痛烈な反撃を頂戴し、ロキ様は吐血する。

けらけらと笑う椿さんの動きに合わせ、サラシに封じ込まれた双丘が窮屈そうに揺れ動いた。

「そろそろ本題に移ろうか」

「そうね、時間がもったいないし」

「あいわかった」

倒れ伏せたロキ様を無視して、フィンさんとヘファイストス様は話を進め始めた。

連日飲まず食わずで鍛練作業に没頭していた椿は、何時から放置されているのか机の上にあった煤まみれの干し肉を食い千切り、腹拵えをしながら頷く。

よろよろと復活したロキ様を交え、両派閥の主神と団長同士、暗い工房の中で“遠征”の会合を始めた。

「単刀直入に聞くけど、ファイたん、上級鍛冶師の子を何人貸してもらえる?」

「そうね。職人としては勿論、冒険者として腕利きなのは・・・椿も入れてぎつと二十名くらいかしら。全員レベル三以上だから、実力は保証するわ」

ロキ様の問いにヘファイストス様が答える。
何が起るかわからないのがダンジョンだ。

武器整備が主な依頼内容とはいえ、〝深層〟においても最低限身を守る者が〝遠征〟の同行者としては好ましい。

「それを聞いて安心したけど・・・椿、君も来るのかい？」

「ああ。手前もまだ見ぬ〝深層〟の景色を拝んでみたいのだ。そして、あわよくば、自らの手で武具の素材を調達したい」

主神達の隣でフィンさんと椿さんが声を交わす。

自派閥のみでは辿り着けない深層域の更に深部に興味津々の椿さんは、屈託ない笑みを浮かべながらいい機会だと告げてくる。

「〝不壊属性〟の武器の方は？」

「抜かりない。注文通り六振り、それぞれの得物を手前が用意させてもらった」

「おお、サンキューな、椿」

「それよりもフィン、ロキ・・・ベート・ローガを叱っておけ。あやつの難解な要求を聞き入れ、ひいひい言いながら作った手前の銀靴（フロスヴィルト）を粉々にしておってっ。作り直すのにも苦労したわ、あの狼人の小僧め」

前の遠征時に確認された芋虫型のモンスター、武器破壊を招く腐食液を撒き散らす非常に厄介な敵を警戒し、フィンさん達は不壊属性の特殊武装もヘファイストス様達に手配していた。

もともと不壊剣を持つアイズさんと魔導士のリヴェリアさんを除いた、第一級冒険者の人数分＋１の武器である。

既に全ての不壊属性の武具を作ったと言う椿さんは、先日の二十四階層の事件、怪人レヴィスとの一戦で特殊武装〝フロスヴィルト〟を破壊されたベートさんにお冠のようだった。

聞けば事件の直後、すぐにベートさんは「遠征までに作り直せ」と直接、椿さんのもとに押しかけてきたと言う。

パーティ主力分の全装備を不眠不休で準備してのけた椿さんに、フィンさんもロキ様も改めて感謝の言葉を送った。

「でも、本当に私達の方で魔剣を用意しなくてよかったの？」

「んん、ファイたんそこにはいくつも特殊武装を発注しとったし……それに、あれや、ファイたんこの品、高いし……」

「あら、別にロキ達だったらいくらでも借金を組んでもいいのよ？」

「か、堪忍してや〜」

芋虫型に有効な手段として、即時に遠距離攻撃が行える「魔剣」も候補に挙げられている。

高価な「魔剣」、しかもヘファイストス・ファミリアの一級品に尻込みするロキ様は、左目を細めて笑うヘファイストス様に汗とともに空笑いをした。

「しかし、「魔剣」か。これ以上のない適任者……作り手がおるのだがなあ」

「何だい、ファミリアに秘蔵つ子でもいるのかい？」

「うむ。手前なんぞより凄まじい魔剣鍛冶師がおつての。こと魔剣に関しては、あやつの方が全くもって上だ」

その椿さんの発言に、フィンさんもロキ様も目を見張った。

椿さんはオラリオの中で随一の腕を持つ鍛冶師だ。

言うなれば「最上級鍛冶師」であり、そんな彼女をして己より上と言わせる職人がいるなど驚きだった。

「君がそこまで言う鍛冶師なんて、一体誰なんだい？」

「なんだ？ 四葉から聞いておらんか？」

「四葉たん？」

「ふっふっ。そうだ、聞いて驚け、四葉の直接契約した、あやつは彼の鍛冶貴族の……」

「椿、止めなさい。あの子が血筋を吹聴されるの嫌がってること、知ってるでしょ」

フィンさんが尋ねると、椿さんは不思議そうにした後、その質問を待っていましたとばかりにうきうきとして口を開く。

がヘファイストス様が椿さんの言葉を遮った。

「なんじゃー。減るものではないし、よいではないかー」

「まったく……貴方が不用意に自慢して回るものだから、聞きつけた人間が“魔剣”を求めに押しかけてくるって、あの子、かんかんに怒ってたわよ？あの子が四葉を気に入ってるのは、それを知っている、魔剣じゃなくあの子の作る武器を欲してくれているから、なんだから」

お互いに眼帯をつける神と子は、片方は語気を強めて、片方は拗ねたように不平を漏らす。

前に言っていた、身内のいざこざというのが、この事だとフィンさんもロキ様も理解する。

「素晴らしい才能を持っているというのに、それを忌避することは、もったいない。手前にはあやつの考えていることが理解できん」

「……」

ヘファイストス様に嗜められる椿さんは、懲りた様子を見せずにはあと息を吐いた。

言いつつ、椿さんは持つ紅剣、鍛えたばかりの“魔剣”の刃を見下ろす。

そして、その瞬間。

椿さんの纏う空気が、眼差しが峻烈なものへと変わった。

「血であろうが何であろうが、あるものを全てつぎ込まねば子は神の領域に届きすらしない。至高の武器など、夢のまた夢だ」

「……」

低い声音で断じる椿さんの右目には、炉炎と見紛う獰猛な光が宿っていた。

その眼光はロキ様達が知るアイズさん達、高みを目指す冒険者達と同種のものであった。

職人の誇りと矜持、渴望、そして飽くなき執念。

鍛冶師として最高位に辿り付いた者のみ望める景色、椿さんにだけしかわからない世界を前に、椿さんは全てを賭さねば「神の作品」を超えることも、至ることすらできないとそう悟っていた。

己の作品から視線を引き剥がす椿さんは、隣に立つヘファイストス様に流し目を送り、不敵に笑う。

闘争心を剥き出しにする子の眼差しに、ヘファイストス様は吐息交じりに肩を竦めた。

「職人の性、つちゆうやつか。ファイたんも苦労してそうやなあ」

「シー……まあ、ひとまず話を戻そうか」

脱線しつつある打ち合わせの軌道修正を図り、フィンさん達は今後の予定について語った。

「では、遠征当日にバベルの前で合流し、そのまま突入ということだな？」

「ああ。ダンジョンの中では僕達が極力護衛を兼ねる。緊急時にはその限りとはいかないけど、戦闘は基本こちらに任せてくれ」

「物資の方は私達も半分持つてあげるわ。ここまできたら一蓮托生だしね」

「すまんなあ、ファイたん。よろしく頼む」

椿さん、フィンさん、ヘファイストス様、ロキ様がそれぞれ最終確認を行い、話し合いは終わった。

ヘファイストス様達に見送られながら、フィンさんとロキ様は椿さんの工房を後にする。

ロキ・ファミア遠征に向けて、準備は着々と進められていた。

第90話・お昼寝と特訓の条件

「おりやああ!!」

「っ!?!」

遠征三日前、僕はホームの庭でティオネさんの手により宙に投げ飛ばされた。

「うりやああ!!」

「ちっ!?!」

そこにティオナさんがティオネさんに殴りかかり、それをティオネさんは後ろに飛び退くことで交わす。

「はああああ!!」

「うわああっ!?!」

それで、ティオナさんがティオネさんの位置に立ったことで僕は投げ飛ばされた体が地面に落ちていくところに更に更に回転をプラスすることで勢いと威力を加えた踵落としをティオナさんの脳天に叩き込もうとした。

「・・・穴、空けちゃった」

「後で治せば済むわ、よっ!」

「!?!」

まあ、地面に穴を作っただけで終わってしまったが。

出来てしまった穴を見ると、その隙にティオネさんが僕は背後から襲いかかる。

「はああ!!」

「ちっ!？」

それをなんとか交わし、ティオネさんに拳を連打でお見舞いする。それらは、徐々に激しさを増していき、それに伴って僕等の体は昨日の二人の様に血塗れのボロボロになっていた。いった。

ちなみに、僕等が何をしているかというのと、組手だ。

「はああ!!」

「おりや!!」

「うりや!!」

「お前達」

「!?!」

今日、何度目か三人で同時に開いた距離を拳を握りしめて摘めて、殴りかかろうとした時、誰かが僕等と呼んで僕等は寸前の所で止め、呼んだ人物の方を見た。

「リヴェリアさん」

「はあく、まったく」

その人物はリヴェリアさんで、リヴェリアさんは僕等の姿を見て額に手を当ててため息を吐いた。

「・・・とりあえず、中断して、食事をとれ。そろそろ昼だ」

「あ、もう、そんな時間なの?」

「通りで、お腹が空くわけだ」

「どうやら、リヴェリアさんは僕等に昼食の時間を教えに来てくれたらしい。」

「【テイクアウト】ティオナさん、ティオネさん、回復薬いる?」

「あつ！ありがとうございます」

「貰うわ」

とりあえず、その昼食を取りに行く前に、服以外のボロボロになった体を治癒するために僕のを含めた三本の回復薬を【幻書の術】の中から出して、二本をティオナさんとティオネさんに渡した。

それを飲んだり、傷口にかけたりして治癒をした後は穴を作ってしまった地面を治してから、僕等は食堂へと向かった。

「四葉、悪いんだけど、午後から私達、ダンジョンに行つて来ようと思ってるの」

「うん、わかった」

その道中でティオネさんから二人の午後の予定を聞いた。

「四葉は、午後はどうするの?」

「弓の練習とかする」

「そっかく、なら良かった」

というわけで、僕もそういう予定を立てつつ、心の中でアイズさん達の所に行つてみようと思つた。



「……こういう時、何て言うんだろう」

で、昼食後、こっそりアイズさん達の所に来てみれば、アイズさんとベルさんが一緒に寝ていた。

その光景に、前にキリトさんとアスナさんが二人で寝ていた時の事を思い出した。

「・・・」

あの時は、リユーと二人を発見して二人を護衛した。何せ、あの時は『睡眠PK』何てモノが流行ってて、二人が寝ている場所が圏内でも油断は出来なかったから。

けど、あの時、本当は僕も二人と一緒に寝たかった。

アスナさんとの関係が微妙だったけど、六層のダークエルフの城、ガレ城で川の字になって寝た時みたいに。

「・・・二人なら、良かったのに・・・」

「・・・」

「!？」

そう思うと、アイズさんとベルさんには悪いけど、ここで寝ているのが、二人だったら、アスナさんとキリトさんだったら良かったのにつて思った。

そう思っていると、アイズさんがゆっくりと目を開けた。

「・・・あれ？四葉？」

「う、うん。ご、ごめんなさい、起こした？」

「ううん」

横になった寝た姿勢のまま、目もとをそっと拭いたアイズさんは、僕を見て不思議そうにした。

それは、そうだろうけど。

そして、その視線を側で仰向けに寝ているベルさんへ向けた。

「くかー」

「・・・」

暖かな日の光を浴びて眠りこけるベルさんにアイズさんは、ぱちぱ

ちと瞬きをして、唇を綻ばせた。

と思ったら、アイズさんは体を起こして、ベルさん近付くとそつと手を伸ばしてまるで宝物に触れるようにその頬に触れた。

「……」

「!?よ、四葉?」

それを見ていたら、何となくアイズさんを抱き締めたくなくて、僕は背後からアイズさんを抱きしめた。

「ん〜……お祖父ちゃん、もう、許して……」

「……」

そうしていると、何の夢を見ているのかわからないけど、ベルさんはうなされて、そう言った。

それを聞いた僕とアイズさんは、自然と笑った。

「……」

「ベルさん、どんな夢を見てるんだろうね」

アイズさんはベルさんの白い髪を目を細め、優しく撫で続け、僕はそんなアイズさんを抱きしめたまま見ていた。



「ご、ごめんね、お水とかしか持ってなくて」

「いや、四葉ちゃんが悪い訳じゃないよ。あの、ア、アイズさん、やっぱりいいですよ。あ、あれは事故みたいなもので……」

「大丈夫、私もお腹が空いたから」

あの後、ベルさんが起きると二人の訓練は再開された。

当然、ベルさんは僕がいたことにはかなりビックリしていた。そして、今は、その訓練を一時中断して市壁の上から出た。

その理由というのが、厳しい指導にベルさんの動きに目に見えて陰り出した頃、まるでそれに連動するかのようには、ベルさんのお腹が鳴った。

顔を真っ赤にさせたベルさんに残念ながら、食べ物を持っていなかった僕はシユンと落ち込み、きよんとしたアイズさんは、軽食を取ろうかと、僕の頭を撫でながら、ベルさんに提案して今に至る。

「あの、今はどこに向かっているんですか？」

「北のメインストリート。ジャガ丸くんのお店があるって、テイオナに教えてもらったから」

「テイオナさんに？」

「うん」

小径を何度も折り曲がると広く整然とした裏通りを抜け、メインストリートに出た僕等。

アイズさんはベルさんの問いにそう答えた。



「!？」

「いらっしやいまあ・・・せ、え？」

そして、アイズさんは北のメインストリートを少し通りを折れた脇道にあったその露店に足を向け、その前に立った。

その瞬間、ベルさんと店員さんが同時に時を止めた。

「・・・」

「・・・」

「ジャガ丸くんの小豆クリーム味、三つください」

その店員さんを見て、*「あつ」*って思った。前に一度、会ったことがある、ツインテールの女の子、基、ベルさんの神様だった。

ベルさんはその人を前に恐ろしい速度で顔を青くしていく。アイズさんは固まる二人の横で、淡々と注文する。

「二二〇ヴァリスです」

「どつも」

別の店員さんが衣をつけて揚げたジャガ丸くんを、その人は半分放心状態のまま、のろのろと包装して、そう言って差し出した。

アイズさんはアイズさんでそう言ってそれを受け取り、お金を渡した。

「何をやっているんだ君はあああああああああつ!?!」

「(ぎんぎんぎんぎんぎん)ごめんなさいいつつ!?!」

やがて、その人は能面のような顔になり、とてとてと露店の裏を回って僕等の目の前に現れると大噴火した。

その人を前にベルさんは泣き叫ぶようにして謝罪する。

「よりもよって【剣姫】と一緒にいるなんて、一体どういうことだベル君!?!」

「そ、それがっ、これには深いわけがあつて・・・っ!?!」

「ご託はいい、早く説明するんだ!・・・っ、ええい、離れる、離れるんだ!」

何故か、アイズさんを目の敵にするその人は、声を上げながらベルさんとアイズさんの間に割って入り、困った顔をするアイズさんに敵意のこもった目で一睨みして牽制した。

「それで、どうして【剣姫】と一緒にいるってえ・・・!?」

「え、えっと、たっ、たまたま、すぐそこで出会って・・・!?」

「・・・神の前では嘘はつけーんっ!!うがあーっ!」

「ひいいいっ!?ご、ごめんなさいっっ!?」

そして、両手を振り上げて叫び、ベルさんは半泣きになって、その人のツインテールにべしっべしっ叩かれ、謝罪した。

「あ・・・私が、戦い方を教えています」

「・・・うん」

と、その二人の様子を見守っていたアイズさんがおもむろに口を挟んだ。

そして、僕もコクコクと頷いた。

「ベル君、まさか【ステイタス】を見せたんじゃないだろうな!?」

「見、見せませんよ、見せる筈ないじゃないですかっ?」

「ということは、まさか、例の成長速度に目をつけられた・・・!?」

それに目に角を立てていたその人は、その言葉と頷く僕を見た瞬間、はっと肩を揺り動かして言う。

ただ、最後の言葉は小声過ぎて聞き取ることは出来なかった。

「ちよおっ!?!」

「僕のベル君に唾をつけておこうとしたって、そうはいかないぞ!

何て言ったって僕の方が先だからな!」

「神様っつ、何をやっているんですか!?!」

「えっ・・・うわあああああああ!?!べ、ベル君っ、何て大胆な真

似を!?!」

そして、その人はキツと親の敵を見るかのようにアイズさんへ睨みを利かせた。

更にベルさんの胴に両手を回し、ぎゅうと横から抱き着いたと思ったら、そう叫んだ。

「ハスティアちゃん、お店の邪魔だから、痴話喧嘩なら他所でやっておくれよー」

「す、すまない、おばちゃん！君達、こっちへ来るんだ！」

露店に残っていた店員さんに言われ、その人はくいつと手首を返す。

何だか消耗しているベルさんはぐいぐいと手を引つ張られ、僕とアイズさんは大人しくその後ろを付いていった。

もとの脇道から更に曲がった人気のない細道で、僕等は軽い輪になった。

「……ふう。まずは、詳しい話を聞こうか」

「……はい」

どうにかこうにか冷静さを取り戻してくれたその人にほつとしてから、まずは、ベルさんが黙っていたことへの謝罪から入り、これまでの経緯を説明した。

話が進む都度、アイズさんや僕への確認も忘れなかった。



「……うん、話はわかった。それじゃあ、三人とも、もう縁を切るんだ」

「えっ」

「はいっ!?!」

「駄目、ですか……?」

「ああ。ヴァレン何某君、四葉君、僕のベル君にもう関わらないでくれ、君達にだって立場があるだろう。お互いの「ファミリア」のためにもこれが一番むぐぐぐぐぐぐぐぐぐうううっ!？」

腕を組んで目を閉じていたヘステイア様は、話を聞き終わるとやがて頷いて僕等に言った。

が、最後まで言う前にベルさんがその口を塞いだ。

「な、何をするんだっ、ベル君!？」

「お願いです神様っ、あともう少しだけ、もう少しだけアイズさんとの鍛錬を許してください!！」

「……?！」

そして、小首を傾げるアイズさんと僕にヘステイア様と一緒に背を向けて、ベルさんは囁き声で懇願した。

「少しだけなんてそんなこと言って、どうせ……!！」

「あと二日でいいんです!あと二日で約束の期日は過ぎますから!！」

僕等が参加する遠征が三日後に控えている。

それまで、最後のその時までアイズさんの教えを学びたいと、心の内の気持ちを包み隠さず伝え、何度もヘステイア様へベルさんは頭を下げた。

「絶対にこの時間は無駄にしませんから!ダンジョンでもつとお金を稼げるよう力をつけてきます!だからっ……!！」

「むう……!！」

ベルさんが必死にお願いし続けることしばらく、ヘステイア様は唸っていた。

ジロリとベルさんを見つめ続け、やがて。

「はあく、とことん甘いよなあ、僕も」

「神様・・・」

「・・・本当に、あと二日間だけだけぞ？」

ため息を付いて、ベルさんに言った。

ヘステイア様はその後、僕とアイズさんとベルさんの関係が絶対にファミリアにバレないことを条件に、残り二日間の訓練を認めると口約してくれた。

「言っておくけど、ベル君に変な真似をしたらその時点でこの話はなかったことにする、いいね？」

「はい」

「誘惑なんでもつての他だからなあ・・・！」

「はい・・・？」

「わあああ!!」

最後によくわからない釘をアイズさんに刺すヘステイア様をベルさんは慌てて止めに入った。

「それじゃあ、今日は僕も君達の訓練を見物させてもらおうかな！」

「えっ!？」

「何だいベル君、その顔は。大切な眷族に何をされているのか確かめるのも、神の義務つてもものだろうか？」

「え、えーつと、バイトはどうするんですか・・・？」

「今日はもう上がる」

ヘステイア様は、〃待っているんだぞ〃とビシリと指をベルさんに向けて露店へ駆けていく。

「大丈夫ですか？」

「うん。優しい、神様だね」

「うん」

「・・・はい」

ベルさんは汗とともにその背中を見送って、やがて頬をかいて、アイズさんと目を合わせて尋ねた。

それにアイズさんはほのかに笑って頷くと言った。

僕もそれには同意だ。

本当に、ヘスティア様は優しい神様だなんて思う。

最初に会った時も、今も、本当にベルさんの事が大事で心配なんだなって伝わって来るから。